

ゾフィーに転生をしましたがウルトラ戦士たちが女性でした

桐野 ユウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様によって好きなウルトラマン、ゾフィーになった青年、だが彼以外のつまりウルトラ兄弟はなんと女性になっていた。なんやかんやでゾフィーになった人物は宇宙警備隊長となりウルトラ兄妹を結成するのだが……果たしてゾフィーになった青年の運命はいかに

目次

私の名前はゾフィー	1
ゾフィーと真紅のファイター	5
ゾフィーとジャック	9
ゾフィーとエース	12
ゾフィーとタロウ	15
ゾフィーとレオ	18
ゾフィーとエイティ	21
ゾフィーとメビウス	25
ゾフィーとヒカリ	29
ゾフィーの直属の部下	33
ゾフィーとゼロ	38
ゾフィーとネオスと21	44
ゾフィーのお墓参り	49
ゾフィーとベリアル	54
ゾフィーとトライスクワッド	62
ゾフィーが子どもになった。(プロローグ&ジャック編)	69
ゾフィーが子どもになった。(レオ編)	75
ゾフィーが子どもになった。(ウーマン編)	80
ゾフィーが子どもになった。(エイティ編)	83
ゾフィーが子どもになった。(セブン編)	86
ゾフィーが子どもになった。(メビウス編)	91
ゾフィーが子どもになった。(ベリアル編)	94
ゾフィーが子どもになった。(エース、タロウ編)	101
秘書の紹介	105

ゾフィー暗殺計画	108
ゾフィーとニュージエネレーション	112
ゾフィーと彼女達	116
ウーマン達の会議	119
ゾフィーの技紹介	123
ゾフィーとカプセル怪獣	126
ダークロプスゼロの学び	132
罠にかかったゾフィー	136
ゾフィー入院	142
ゾフィーとコスモス	148
ゾフィーのウルトラ姉妹紹介	154
ゾフィーの報告。	161
決着！ゾフィー対ベリアル！	165
黒いベリアルがいる理由。	171
ベリアルの力の制御、ゾフィーの特訓	176
臨時講師ゾフィー	181
惑星アープ	185
ゾフィーとオーブ	189
ゾフィーとアースラ女王	193
ゾフィーとアナタシア	196
ヤンデレ	202
現れた宇宙人	204
SOS	208
バルタン星人の襲撃。	212
T D G	217

勇者現る。	221
アブソリュートタルタロス。	224
ゾフィーののんびり	229
ゾフィーのお見合い!?	232
闇の使者	236
ゾフィーとマリ	239
ウーマン達戸惑う!?パワーアップをした彼女達。	242
ゾフィー対ジャミラ	245
ゾフィー、惑星アースラへ行く。	247
ゾフィー冷汗をかく。	250
ゾフィーの帰還	253
ゾフィーが狙われる	257
ウルトラマンダークルシフェルについて	262
因縁の相手	267
ゾフィーを殺せ!?レオの奮闘!!	270
ゾフィー再び	273
ゾフィー子ども化再び (メビウス編)	276
ゾフィー子ども化再び (フレア編)	279
ゾフィー子ども化再び (アキレス編)	282
ゾフィー子ども化再び (グレート編)	286
ゾフィー子ども化再び (ウーマン編)	289
ゾフィー子ども化再び (ジャック編)	292
ゾフィー子ども化 (サージ編)	296
ゾフィー子ども化再び (ドリュウ編)	299
ゾフィー子ども化再び (セブン編)	302

ゾフィー子ども化再び（パワー編）	305
ゾフィー子ども化再び（ヒカリ編）	309
ゾフィー子ども化（ジード&ベル）	314
ゾフィー子ども化再び（エース&タロウ編）	318
ゾフィー子ども化再び（ゴライアン編）	322
ゾフィー子ども化再び（エイティ編）	325
ゾフィー子ども化再び（ネオス&21）	329
ゾフィー子ども化再び（カラレス編とマックス編）	334
ゾフィー子ども化再び（レオ編）	340
大鉄塊の襲撃！ピンチの二人の戦士	344
最悪な再会	347
惑星アースラに眠る超兵器	351
超兵器	355
襲い掛かる戦闘員	360
ゾフィーメモリアル	365
ウルトラ兄妹	368
襲い来る怪獣	371
ファイブキングとの戦い。	374
マックス対スラン星人	377
ダークフィールドの罠	380
ゾフィーの話	385
襲い掛かるロボット	389
ゾフィー対ババルウ星人	393
ゾフィーの治療	397
ウルトラウーマンギンガとの出会い	400

ウルトラウーマンビクトリーとの出会い	404
ゾフィーとアナタシアとアレーナ	411
惑星ベルリズの調査	415
ダークファルシオン	418
銀河をジャンプ！宇宙を走り！次元を割いて！	421
惑星マカロニアでの戦い	424
ジャンヌ対ゾフィー	427
ゾフィーの容態	431
新たな力	434
頭の中に流れる映像	438
謎の祭壇と闇の戦士	441
修羅場	447
溜まっていた仕事	450
トリガー	454
アムールの苦戦、ピンチの時に駆けつける。	458
武器製造	462
新しくなった隊長室	464
ゾフィー対ダークファルシオン	467
・・・・・・・・	471
動きだした戦い	473
それぞれの戦いの報告	477
ゾフィーとリブット	480
ウルトラ戦士対アブソーティアン	482
ゾフィーの眠り	489
3日の休み	493

襲撃されたゾフィー

496

水着大パニック!!

499

惑星アトランタを襲う怪獣

503

様子がおかしい

507

ゾフィー搾り取られた後

510

地球へ

513

治療へ

516

光の国

519

襲撃を受けるジャック

524

惑星オリエルスへ

528

隊長室にて

532

ウルトラ緊急会議

536

かつての強敵

538

レオ対アストラの模擬戦。

543

報告

546

じーつと見るヒカリ

549

大いなる事件!?

552

襲い掛かる円盤群

555

連れ去られるゾフィー

558

現れたチブロイド

561

ビクトリアン

564

またか!!

566

修羅場

568

オーブに連れられて

570

元に戻る

572

ため息をつく

新種の怪獣

父と共に

ロボット集団の襲撃！

仮眠室へ

ため息をつく

ゾフィー少し思い出の場所で

エックスとの出会い

惑星アースラ再び

当たっているのだが？当てているのですよ♡

不知火ロボット現る。

再び現る不知火ロボット

目を覚ましたら裸の二人がいた。

ゾフィーの仕事

宇宙船を狙う敵の正体

調べ物

宇宙船と思いきやまさかの戦闘に巻き込まれた。

怪獣墓場へ

目を覚ました。

バンデル星人の罠！姉妹達を救出せよ！

地球の危機

ゾフィー別次元へ

探索をするゾフィー

帰還

ゴモたん降臨！

575

577

580

584

587

590

596

599

604

607

611

614

619

621

624

627

630

632

635

638

644

648

651

654

657

ピエルの村を救え	660
強大な闇	664
ウルトラブレスレット改良へ	667
作業をしているゾフィー	670
のんびりのんびり	675
新型のウルトラブレスレットの力を見せる時！	678
研究室の方へ	681
ゾフィーの現在の情報	684
襲撃のデスフェンサー部隊！	688
調査	691
ウルトラダークキラーとの戦い	694
襲撃をしてきたダークネス達！	697
報告	699
振り返ったら	702

私の名前はゾフィー

やあ地球の皆、私の名前はゾフィー……宇宙警備隊の隊長を務めている。私はゾフィーと名乗ったが元は普通の人間だったと思う。なぜか事故で死んだ後に転生をしてゾフィーとして生まれたのはいいのだが……。なにせウルトラ兄弟が私以外女性なのだ、いや、本当に。さて目の前では、白い髪をした女性と頭部に宇宙ブーメランを装着をしている赤い髪の女性が目の前で報告をしてくれている。

「というわけだが……ゾフィー、聞いているのか？」

「ああ聞いているよ、ウーマン」

では私の妹たちを紹介しよう。今、目の前にいるのが宇宙警備隊銀河系星雲支部長にして、宇宙大学教授でもあるウルトラウーマン。皆が知っているウルトラマンが女性になった姿だ。

ちなみに、現在私の姿は原作のゾフィーと同じ姿をしているが、女性のウルトラマンは少し違う。

普通の女性の顔に、ウルトラマンのカラータイマーやプロテクターを装着しているような姿である。腰部分はスカートで生肌が出ているが、これでも一応防御力が高いというのだから不思議なものだ。

お隣にいるのはウルトラウーマンセブン、そうウルトラセブンである。彼女も頭部にビームランプと宇宙ブーメランもといアイスラッガーが、胸部にはプロテクター（エネルギー吸収板）が装備され、まあ女性版のセブンと言った方がいいだろう。

さて話を戻そう。現在はウーマンとセブンの報告を受け取って確認をしているところだ。怪獣や宇宙人たちの悪だくみを阻止するのが宇宙警備隊の使命でもある。

「ありがとう二人とも……ふう……」

「ゾフィー、疲れているのか？」

「いや、そういうわけじゃないんだ、大丈夫だ」

「そうかならないが……」

本当心配をしてくれる妹分達だ。ほかにもジャックやエース、タロ

ウにレオ、アストラにエイテイ、メビウスにヒカリと頼れるウルトラ姉妹達で本当に助かるよ……。ただ胸を当ててくるのはやめてほしい——二人が去った後、私はコーヒーを飲みながら、書類を見ることにした……。昔のことも思い出しながら。

ゾフィースide終了

ウルトラウーマンは自分の仕事部屋へと戻ると、ふふと笑いだした。彼女はあの時のことを思いだす。

(ゾフィーがいなかったら、私はここにいなかった……)

ウーマンは凶悪な宇宙怪獣ベムラーを追って地球へとやってきた。その時、科学特別捜査隊(SSSP)のハヤタ・レイカと衝突し、彼女の命を奪ってしまう。ウーマンは彼女と一体化をすることでウルトラウーマンとして様々な怪獣や宇宙人と戦ってきたが、変身怪人ゼットン星人の最期の切り札宇宙恐竜ゼットンとの戦いで彼女は苦戦を強いられた。

キャッチリングを破られて八つ裂き光輪もバリアーでふさがれて彼女のカラータイマーが赤く点滅をする。

(このままではやられてしまう!! 奴を投げ飛ばした後にスペシウム光線で決着をつける!!)

彼女はゼットンを投げ飛ばして立ちあがり、必殺技のスペシウム光線を放つ。ところがゼットンはそれを吸収したのだ。

「な!!」

ゼットンはそれを彼女に対して放とうとした時、光の弾が当たりゼットンを吹き飛ばした。

彼女が動揺する中、突如として現れた赤い玉は光りだして、自分が好きな人が現れた。

「ぞ、ゾフィー?」

「無事みたいだなウーマン、立てるか?」

「もちろんよ!!」

「いくぞ!!」

「ええ!!」

ゼットンはゾフィーが現れたのに驚いているが、彼は走りゼットン

にゾファイークックをお見舞いさせる。ウーマンも同じように蹴りをいれてゼットンにダメージを与えていく。

「よし!!」

「……………」

立ちあがったゼットンは光弾メテオ火球を放つが、ゾファイーはZ光線を放ち相殺をすると、そのまま走ってゼットンの後ろへと周りこんで羽交い締めにした。

「ぞ、ゾファイー!?!」

「彼らに任せるんだ!!」

ゾファイーの言葉をウーマンは最初理解できなかった。しかし科特隊の方を見やると、岩本博士が開発した無重力弾（ペンシル爆弾）をアラシ・ダイスケ隊員がゼットンに向かって放っていた。ゾファイーは離れると、ゼットンは空中で大爆発を起こした。

「……………」

「わかっただろう、ウルトラウーマン、彼らは私たちがいなくてもやっていけることを……………さあ光の国へ戻ろう」

「待ってゾファイー!もし一体化を解除したらレイカが死んでしまう!!だから私の命を使って彼女を!!」

「ウーマン、それほど地球人のことが好きになったんだね。大丈夫、私は命を二つ持ってきている。それを彼女に与えよう」

「ありがとう……………ゾファイー」

「礼ならヒカリに言ってくれ。では彼女と分離させるよ」

ゾファイーが持ってきたベータカプセルが光って、ウーマンとレイカは分離する。そして、二人の戦士たちは光の国へと去っていく。

「ねえ、ゾファイー?」

「なんだい?」

「ごめんなさい……………連絡しなくて……………」

「君もあの青い星…地球が気にいったみたいだね。君が無事でよかったよ」

それからもウーマンはゾファイーを支えていき今に至る。ゾファイーがいなかったら命を失っていたかもしれない……………胸のカラータイ

マーを押さえながらこれからもゾフィーの力となろう、とそしている
かは告白をしようと考えていた。

は意識を無くしてしまおう。

次に目を覚ました時には光の国にいた。マリーさんがいたので私はことの些細を訊いた。

「ボロボロのあなたを見つけたのはゾフィーですよ。地球付近で浮かんでいたあなたを急いで救出をしてメデイカルルームへ…」

ゾフィーが私を……そのあと張本人がやってきた。

「やあセブン、大丈夫そうだね……」

「ゾフィー……ありがとう、マリーさんから話を聞いた」

「ああパトロールをしていたら、浮かんでいる君がいたからね。かなりボロボロでもう少し遅かったら危なかったとマリーさんも君の上司も言っていた。随分とあの星で無茶をしたんだな……」

「……………」

そうだ、私はあの星が好きだ。ウーマンと同じく地球人のことが好きだ。そのことを伝えると、ゾフィーは何かを考えたのか私に手を出してきた。

「一緒にあの星を守っていこう。改めて君を宇宙警備隊隊員としてスカウトしたい。宇宙警備隊隊長としてね？」

私は地球を守りたい思いから、彼を手を握る。それから私はジャックやエースが地球に守りに行ったあとも気になってしまい、彼らのところへ行ったりしていた。

ゾフィーにはジャックにプレゼントを持っていくように言われて、彼女にウルトラブレスレットを渡したりしたな。

それからタロウがウルトラの力を捨てて地球人として旅に出た後、私は再び地球を守る任務に就いた。だがサーベル暴君と言われたマダム星人一派との戦いで足を折られて、しばらく戦えなくなってしまう。

それからは、レオを鍛えて地球を守ってきたがあの日……MACステーションが円盤生物シルバールームに襲われて、私はオオトリ・ユナを脱出させたが、他の仲間と私は爆発に巻きこまれてしまい、宇宙に放り出されてしまった。少し前、直してもらおう為にジャックに託したから、ウルトラアイはない。私もこれで終わりなのかと……。

ゾフィーは立ちあがり、ブラザーマントを羽織っていくので、彼女も同じように羽織った。

「ただいまー」

「おかえりゼロ」

「お帰りゼロ」

「隊長にお袋戻ったぜ!!あ……」

「はっはっはっはっはっは君は変わらないねゼロ。だがそれが君のいいところでもある」

「お、おう……」

ゼロが顔を赤くしながらゾフィーを見ていたので、セブンは彼の背中にひじ打ちをかますと、彼は腰の方を押さえる。

「どうしたんだ隊長？」

「な、何でもない……」

やれやれと思いながら、彼は転生をしたことに感謝をし、頑張るところにした。

ゾフィーとジャック

ウルトラコロセウムで二人のウルトラ戦士が模擬戦をしていた。一人は宇宙警備隊長のゾフィーで、もう一人はウルトラ兄妹四番目ウルトラウーマンジャックである。

「はあああああああああ!!」

ジャックはウルトラブレスレットを変形させたウルトラランスを使ってゾフィーを攻めているが、彼も量産型ウルトラブレスレットを変形させたウルトラランスを使って彼女が放つ攻撃を弾いている。

(流石ゾフィーお兄ちゃん、私が放つ攻撃を次々にはじいていく。やっぱり強い………)

「さあジャックどうした? まだまだいけるだろ?」

「もちろんです!! でああああああああ!!」

ジャックは再び接近をしてランスを連続して放ってきた。素早く放ってきた攻撃をゾフィーは弾いていくが、一瞬の追撃がゾフィーの持っているウルトラランスを弾き飛ばす。地面にゾフィーのウルトラランスが突き刺さり、彼はふっと笑う。

「見事だなジャック。私から武器で一本とったとは………成長したな」

「ありがとうございます。ゾフィーお兄ちゃん」

ジャックはウルトラランスをブレスレット形状へともどすと、ゾフィーは立ちあがったので、彼の後ろをついていく。

ジャック side

ゾフィーお兄ちゃんゾフィーお兄ちゃんゾフィーお兄ちゃん、私はゾフィーお兄ちゃんのが好き、ゾフィーお兄ちゃんとの出会いは宇宙警備隊のウルトラ学校に通っている時のことだった。私は成績を見てため息をついていた。

「はあ………」

「どうしたんだい?」

「え?」

私に声をかけてきたのはゾフィーお兄ちゃんだった。私は成績を

見られていたので顔を赤くしていたが彼は冷静に私の通知表を見てから返してくれた。

「なるほど……君、名前は？」

「ジャックといます」

「そうかジャックか、いい名前だな、私の名前はゾフィー…そうだジャック、私が暇なときは鍛えてもいいかな？」

「え!？」

私は驚いてしまう。ゾフィーお兄ちゃんが教えてくれるってことに喜んでしまい、承諾をして、そこからゾフィーお兄ちゃんと特訓をした。そういえばこのときから武器を使うことが多かったのも一つだったけど……私は左手に装着されているウルトラブレスレットを見ている。

あれは宇宙大怪獣ベムスターに敗れた時のことだった。私はエネルギー補給の為に、太陽へと飛んでいた。けれど太陽の引力に引っ張られてしまい、もう少しで太陽に突っ込んでしまうところにセブン姉さんが来た。

「セブン姉さん!？」

「あなたにプレゼントを持ってきたわ」

「これは？」

「ゾフィーからのプレゼントよ」

「ゾフィーお兄ちゃんから?」

ゾフィーお兄ちゃんは、私がもし宇宙警備隊に入ったらプレゼントを贈るといつていたが、まさかブレスレットをくれるとは思わなかった。だけどブレスレットがなかったら私は強力な宇宙人や怪獣たちと戦うことができなかつただろう。

そして郷 彩夏と一体化して戦ってこれなかつたかもしれない。このブレスレットは私の大事な宝物でもある。

だけど異次元人やプールの策略によって囚われて、ブレスレットを奪われた時、私は悲しかった。私は左手を見ながらため息をついているとゾフィー兄さんが現れた。

「やあ、ジャック。はいこれ」

「え？」

ゾフィーお兄ちゃんが持ってきたのは私のウルトラブレスレットだった！お兄ちゃん曰くゴルゴダ星があった付近を飛んでいたら、異次元超人エースキラの残骸と共に浮いていたので、回収してくれたのだそうだ。私は嬉しかった・・・お兄ちゃんに抱き付いてしまったけど、やはり私はお兄ちゃんのが大好きなんだってわかった。ゾフィーお兄ちゃんこれからもアタックするからよろしくね！！

ジャック side 終了

「・・・ふふ」

「どうしたのゾフィーお兄ちゃん？」

「なーにかわいい妹分が成長をしたのが嬉しくてね」

「妹・・・分？」

「どうしたんだ？」

「ううん何でもないよ・・・イモウトブンカ」

ジャックの最後の呟きはゾフィーに聞こえなかった。因みに、彼女の容姿は銀色のロングの髪をした女性で、胸はEカップある。ウーマンやセブンと同じであることを付け加えておく。

はあとため息を吐いているジャックを見ながら、ゾフィー何やら思案し、そして何かを思いついたのか彼女に声をかける。

「今日はお前が一本取ったからな。私が手料理を披露しよう」

「え!?ゾフィーお兄ちゃんの手料理を!!」

「ああどうかな？」

「ぜひ!!」

「お前もそうだが・・・皆、私の手料理を食べたいんだな。それほどいいものかな？」

ゾフィーはまあいいかと、ジャックを自宅に招待して手料理を作って振る舞うことにした。それを食べたジャックは、ゾフィーお兄ちゃんに負けたとシヨックを受けるのであった。

なおゾフィーの手料理は美味いだけかいておく。

ゾフィーとエース

ジャックに手料理を振るまってから数週間が経ち、ゾフィーは宇宙を飛んでいた。その時、銀河連邦に属する一人のウルトラ戦士が苦戦しているとの情報を得て救援に向かった。

「危ない！ウルトラスラッシュ!!」

ウルトラスラッシュを投げて、襲い掛かろうとした敵を斬り、彼は隣に立つ。彼女は来たのがゾフィーだと気づいて驚いている。

「ぞ、ゾフィー兄さん!?!」

「大丈夫か、エース?」

「ええ」

二人が構えていると、宇宙忍者バルタン星人が現れて両手の鋏から光線を放ってきた。ゾフィーは彼女の前に立ちウルトラスピンドで光線を防ぐと、エースは金縛り光線を放ち、バルタン星人の動きを封じる。そして、二人は構える。

「M87光線!」

「メタリウム光線!!」

二人が放った光線がバルタン星人に当たり爆散する。辺りを見てからゾフィーはエースの体が傷ついているのを見て彼女にウルトラの父直伝のリライブ光線を当てて体の傷を治す。

「ありがとうゾフィー兄さん」

「気にするなエース。さあ帰ろう」

ゾフィーと共に光の国の方へと飛んで行く。

エース side

またゾフィー兄さんに迷惑をかけてしまったな、ゾフィー兄さんは私が父さんや母さんに養子として引き取られてから出会った人で小さい時はタロウと一緒にお世話になっていた。

宇宙警備隊に入ったのもゾフィー兄さんを助ける為だった。けど、ヤプールの地底エーゼントギロン人と大蟻超獣アリブントの罠によって地底に閉じ込められてしまった時だ。

「このままじゃTACCと東京が!!」

私はウルトラサインを送り、誰かが救出してくれるのを待った。音が聞こえてきて、誰かがやってきたと思ったら、なんとゾフィー兄さんが来てくれた。

「ゾフィー兄さん!？」

「エース大丈夫か!!今助ける!!ふん!!」

ウルトラコンバーターを持った兄さんに、私は助けてもらったけどエネルギーが……

「タックビルは私が助ける。お前はウルトラコンバーターを付けて地上に急げ!!」

ウルトラコンバーターを装着をして私は地上へと急いだ。アリブンタとギロン人と戦うが二対一で苦戦してしまい、ゾフィー兄さんがTACの仲間を助けてから私に加勢してくれた。

「トア!!」

「私も頑張らないと!!えい!!」

「おのれゾフィー!!」

「ギロン人!!お前の企みもそこまでだ!!エース!!」

「はい!!」

私とゾフィー兄さんのタッグ攻撃で二体の敵を倒してからもゾフィー兄さんは助けてくれた。北斗 恵子と南 夕子が離れて変身ができないときにも、夕子連れてゾフィー兄さんはヤプールの次元の中へ助けにきてくれたので、私は巨大ヤプールを倒すことができた。

ゾフィー兄さんは本当に頼れる長男だ……。姉さんたちと究極Uキラーザウルスを封印をして変身ができなくなつたときに、ゾフィー兄さんたちが頑張っている中、何かできないかなって考えたことがあつたけど、恵子の影響で料理が得意な私に、料理人になるよう助言してくれたのはゾフィー兄さんだった。結局ゾフィー兄さんには助けてもらってばかりだなと私はため息をついてしまう。

「どうしたんだエース?」

「ううん、私は兄さんに助けってもらってばかりだなって」

「そうか?だがエース、私が支援をしなくてもお前は立派なウルトラ

戦士だよ。見事にヤプールを倒したのだからな」

「ゾフィー兄さん……」

やっぱり私はあなたのことが好きです！絶対にぜったーいにあなたのお嫁さんになりますからね!! 覚悟をしてくださいよゾフィー兄さん!!

エースside終了

(うーんなんだが最近悪寒を感じるな……)

ゾフィーはエースと飛びながら、地獄星人ヒッポリト星人やゴルゴダ星のことを思いだす。エースに激励をした後、ほかの三姉妹と共に捕まってしまい自分の妹そっくりなエースロボットを自分の技で壊されるのを見た時はヤプールをどれだけ恨んだことか。ヒッポリト星人の時は他の三姉妹が捕まっている姿を見て隙をつかれて自身もブロンズ像にされてしまう。最近でもヤプールが復活して、ウーマン、セブン、ジャック、エースは地球でヤプール諸共Uキラーザウルスを封印をしたのはいいが変身するだけのエネルギーを失ってしまう。連絡を受けて、地球にいたタロウと乙女座を拠点に同族を探す旅をしていたレオを光の国に呼び戻し、ほかの姉妹達が担当をしていた地域なども自分が引き受け、そこでサコミズ隊長と出会ったなど懐かしく感じた。

タロウと共に地球へ行きUキラーザウルスを倒してほかの姉妹達も戻ってきたのでホッとしていた。

「……本当、色んなウルトラ人生だったよ」

「何言ってるの、ゾフィー兄さん？」

「あーすまないすまない、さて帰ったらマリー隊長に手当をしてもらうんだぞ? 私の傷はまだ軽めだったからな」

「わかってるって、子ども扱いしないでよもう!!」

エースは頬を膨らませて先を飛んで行くので、彼も一緒についていく。やれやれ、可愛い妹だなと思いがながら。

ゾフィーとタロウ

ゾフィースide

「聞いていますか、ゾフィー兄さん!」

「……ああ、聞いている」

私の前にいるのは、ケンさんとマリーさんの本当の娘でウルトラ兄妹のウルトラウーマンタロウだ。ウーマンやセブン、ジャックよりも大きいFカップの胸をプルンプルンと揺らしながら話しかけている。彼女はセブンに代わって筆頭教官を務めているが、こうして私によく愚痴を聞かせに来るので、苦笑いをしながら彼女の話を聞いている。

「はあ……もう疲れちゃったよ」

「だがタロウ、お前やレオ、エイティ、メビウスがいるからこそ新しい警備隊員が成長できるんだぞ?」

「わかっているけど……」

「はは、全く妹たちができてもお前は甘えん坊だな」

「ゾフィー兄さんだけでもーん、こうするのは」

「はははははは」

まあこういう妹もありかなと思いつつ、揺れているタロウの胸を見ないように話を聞く。しかし、最近妹たちはやけに色っぽく攻めてくるのはなんでだろうか?ううむ、謎だ。

ゾフィースide終了

タロウside

いつもの通りにゾフィー兄さんの部屋へとやってきて、私は自慢の胸をプルンと揺らしながらゾフィー兄さんに向けている。やっぱりゾフィー兄さんは大きな胸の人が好きなんだねー。

でも私はいつもゾフィー兄さんを見てみると、あの時のことを思いだしてしまう。あれは私が地球を守っていた時、火山怪鳥バードンとの戦いで、肩をやられ、毒のダメージを受けてしまう。

「ストリウム光線!!」

私が放ったストリウム光線が躲かれてもう駄目だと思ったとき、バードンの前にゾフィー兄さんが現れた。

ゾフィーとレオ

ゾフィースide

さて現在私は何をしているのかというところのウルトラ戦士と話をしている。彼女は緊張しているのか落ち着かない様子だった。獅子のような頭部に茶色の髪をツインテールにしている人物、そうウルトラウーマンレオだ。

「えつとあの……私、何かしましたか？」

「そういうわけじゃない。ただ普段こうして話をしたりしないからね？」

「まあそうですけど……私……この出身じゃないんですけどね」「それもあるが今じゃ君だつて立派なウルトラ兄妹の一員だからね。兄としてもつと妹たちと関わっていきたいと思っっているのだよ」

「……正直言つて、私なんかに構つて大丈夫でしょうか？ほかの姉さん達もゾフィー兄さんと話をしたいと思っっているのに」

「レオは遠慮をしているね、大丈夫だつて」

改めてレオの体を見る。胸の大きさはウーマンやセブンと変わらない大きさのものが二つあり正直言つてお兄さんは……?! いかんいかん……しっかりとしろゾフィー、お前は宇宙警備隊長なのだからしっかりとしないと!! 負けてはいけないゾフィー!!

ゾフィースide終了

レオside

先ほどからゾフィー兄さんが頭を押さえながら振っているけど、一体どうしたのでしょうか？ 現在でも緊張してしまふ。ゾフィー兄さんは宇宙警備隊長として、私達の兄さんとして奮闘している。私はゾフィー兄さんと出会った時を思い出す。「暗黒宇宙の支配者」と名高いバルウ星人がアストラを捕らえて、変身し、ウルトラキーを盗んで、光の国と地球をぶつけようとしていた時だ。

アストラが盗んだとは思えなかった。セブン姉さんが犯人がアストラと言ったときは驚いしまう。妹がそんなことをするはずがないと……そこにアストラを追つてウルトラ兄妹たちが現れた。ア

ストラを守るために私はレオに変身をし、ウルトラ兄妹たちの前に立ち戦った。だけどゾフィー兄さんだけは何かを考えているのか攻撃をしてこなかった。

「ゾフィー!!なぜ攻撃をしないの!!」

「そうだよゾフィーお兄ちゃん!!」

「そうじゃない、考えていたんだ。アストラ……なぜお前はウルトラキーが隠されている場所を知っていた?お前は光の国へ来たことがないはずだ」

「!!?!」

その言葉を聞いて、私は、アストラの方を向くと、彼女はウルトラキーを放とうとしていた。こんなところで放てば地球が大変なことになる!!

「やめなさいアストラ!!」

アストラは私の言葉を聞かずにウルトラキーのスイッチを押そうとしていると、雷鳴が放たれてウルトラキーに命中した。そこに現れたのはウルトラウーマンキングだった。

「キング!!」

ゾフィー兄さんが握手をしている間、私達はアストラの方を見ていた。

「ゾフィーは見破っているみたいだが、お前達にはあの女がアストラに見えるのか!?!」

その告げると、キングは洗礼光線をアストラに放った。すると、変身が解け、ババルウ星人の姿に戻った。

「お、おのれ!!」

「待ちなさい!!」

「待て、お前達ウルトラ兄妹は光の国へと戻れ。レオよアストラはババルウ星人が氷結して閉じこめている。急いで助けに行くんだ!!」

「はい!!」

私は急いでアストラを救うために飛んで行くと、ウルトラ兄妹たちが一緒に飛んで行く。

「ごめんなさいレオ」

「すまないレオ、ババルウ星人が暗躍をしていたとは……君には迷惑をかけてしまった」

「いいえ私も騙されてしまいましたから、急いでアストラを助けてウルトラキーを修復をします。」

私はアストラを助けてウルトラキーを修復をすると、アストラにウルトラキーを持っていくように指示をして、あの暗黒星人ババルウ星人と交戦して撃破した。そしてアストラがウルトラキーを光の国に届けると、元の軌道に戻った。そのあとウルトラマンキングの推薦でウルトラ兄妹の一員となったのだ。

ブラック指令達ブラックスターを滅ぼした後は、地球を旅していたけど、コメットさんとの再会と事件から、光の国へと向かい、ゾフィー兄さんの手伝いをしていた。最初は慣れないことばかりだったけど、ゾフィー兄さんは一つ一つ丁寧に教えてくれて……私はあなたに恋をしたんだなって……あなたがこういつてくれたんですね？

「何かあったらいつでも頼ってくれいいんだぞ？お前達は大事なんだからな」

うふふふうふふふうふ大事か、なら私もアナタノオヨメサンニシテモラツテモイイデスヨネ？

レオside終了

「ジュワ!？」

「どうしましたゾフィー兄さん？」

「あーいや何でもないんだよ（うーん最近疲れてきているのかな？まあ連続で徹夜をしていることが多いからな……）」

ゾフィーはそんなことを思いながら、気にしないことにしたのであった。

ゾフィーとエイティ

レオと話をしてからゾフィーは、あるウルトラ戦士がいる部屋へと移動をしていた。彼は中にいるのかを確認をしてノックをすると、一人の女性の声が聞こえてきたので中へとはいる。

「こんにちはゾフィー兄さん」

「やあエイティ」

ウルトラウーマンエイティ……容姿は、ウルトラバツクルにカラータイマーを装備している姿で髪の色は黒くてロングである。普段は授業をする関係で伊達メガネを装備をしているが、今はしていない。彼女はゾフィーに紅茶を入れて、椅子に座り飲む。

「ふうー、エイティの紅茶は落ち着いていて飲みやすいよ」

「いえそんな……私がこうしているのもゾフィー兄さんが推薦をしてくれたからですよ」

「誰よりもマイナスエネルギーについて調べているからね。大隊長に推薦をしたんだよ」

そうゾフィーがマイナスエネルギーに詳しい彼女を、大きなマイナスエネルギーが発生していた地球へと派遣するように推薦したのだ。「マイナスエネルギーが人や生物の負の感情だと君のおかげでわかったからね、ありがとう」

「そんなゾフィー兄さん、頭をあげてください!!」

エイティside

ゾフィー兄さんが褒めてくれるのは嬉しいですけど、頭を下げるので困ってしまいます。でも地球に派遣をするって言われたときは驚いてしまいました。しかもそれがウルトラ兄妹候補生だったことも初めて知りましたが、推薦をしてくれたのがゾフィー兄さんだったので嬉しかったですね。

ゾフィー兄さんは冷静で皆の頼れる人でした。昔、やんちゃをしていた私を正義の道に戻してくれたのも兄さんでした……その人に推薦されたなんて思ってもいなくて地球でいろんな怪獣や宇宙人と戦って、幼馴染のユリアンと一緒に地球から帰ってきて最初に迎えて

くれたのらゾフィー兄さんでした。

「おかえりエイテイ、我が妹よ!!」

「え!？」

「ウルトラ兄妹九番目の妹として改めてウルトラ兄妹任命おめでとう、エイテイ!!」

「はい!!」

それから私はウルトラ兄妹としてゾフィー兄さんの負担をかけないようにはしていたけど、ある日疲れがたまっていた時に寝てしまい、起きた時にはメビウスがいました。

「あれ?」

「おきましたエイテイ姉さん」

「メビウス?あれ?私の書類とかは!？」

「それならゾフィー兄さんが持っていききましたよ?『書類は私の方で終わらせておくから寝かせておいてあげて』と言っていましたので、起こしませんでした」

なんてことだ、逆にゾフィー兄さんの負担にさせてしまうなんて……私は部屋から飛びだしていき、三角座りしてうずくまる。

「ここにいたのかい、エイテイ」

「え?」

振り返るとゾフィー兄さんがいました。私は恥ずかしくなり逃げようとしたが手を握られてしまう。

「エイテイ、負担がかかっていると思ってる?違うさ君達がいるからこそ私は頑張ることが出来るんだよ。」

「ゾフィー兄さん……」

「さあ戻ろう、メビウスも心配をしていたからね」

「はい」

ゾフィー兄さんの手は温かくて、私は兄さんと共に部屋の方へと戻ると、メビウスが涙を流しながら抱き付いてきました。

「ねえざああああああん!!無事でよがっだですうううううう!!」

「ごめん、メビウス、心配をかけさせて」

私はメビウスの頭を撫でながらゾフィー兄さんの方を見るとすでにいかなかった。その為、後でお礼を言おうと思い私は隊長室へと行く。

「失礼します」

「あらエイティ」

「ウーマン姉さん、ゾフィー兄さんは？」

「ゾフィーなら帰ったわ。全く徹夜はするなってあれほど言ったのね」

まさか私の仕事も徹夜をして!?

「あーそれに関してはゾフィーから預かっているわよ。全く妹たちのことよりも自分を心配をしなさいよ全くあいつは……」

ゾフィー兄さんは皆に好かれている。ウーマン姉さんを始め、セブン姉さんたちにも絶対に負けたりしない。ゾフィー兄さんのお嫁さんになるのは絶対に私なんだから!!

エイティside終了

ゾフィーがエイティと話していると、扉が開いて桃色の髪をロングにした女性、ウルトラウーマンメビウスが入ってきた。

「失礼します。ぞ、ゾフィー兄さん!」

「やあメビウス」

「はわわわわわわわ」

彼女は顔を真っ赤にしながらゾフィーがいるのでテンパっている。彼女の胸の大きさはDカップでありエイティとエースと同じくらいである。

「やあ、メビウス、こんにちは」

「こここここんには、ゾフィー兄さん、どうしてこちらへ!」

「なー今日は仕事も終わったからエイティの紅茶を御馳走になろうとね。メビウスも後輩を育てることになるなんて成長をしたねー」

「ぞ、そうですか?」

「ああもちろんだよ」

「イイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイゾフィーニイ

サンニアタマヲナデテモラツテ」

エイティはハイライトをOFFにした目でメビウスたちの方を見ていたので、ゾフィーは一瞬悪寒を感じてキョロキョロと見ていたが、気のせいだろうと思いきやメビウスの頭を撫でていた。彼女は嬉しそうにえへへといながらゾフィーに撫でてもらっていた。

「はー疲れたーってメビウス!?ゾフィー兄さんずるいよメビウスだけ!!私にも撫でてよ!!」

そこにウルトラ兄妹ナンバー六のウルトラウーマンタロウが登場をして自分の頭をだしてきたのでゾフィーは彼女の頭も撫でる。

(あーゾフィー兄さんのなでなでってすごく落ち着くんだよね……
コノママワタシノダンナサンニナツテクレナイカナ?)

タロウの目からハイライトが消えたが、ゾフィーは気がついていない。妹たちと団欒ができたのでゾフィーは満足をして部屋を後にする。

((絶対にはげない!!))

ゾフィーとメビウス

ゾフィースイデ

現在私は太陽系付近のパトロールをしているが、冥王星を見て、一人の地球人と出会った時のことを思い出した。

そうサコミズ・シンゴとの出会いだ。当時科学特捜隊ひいた彼に対して円盤軍団が襲い掛かろうとしていたのを助けたのが私にとっての地球人との会合でもあった。もうあの地球にサコミズはいない……メビウスが守ってからかなりの年数が経ってしまったからだ。

「サコミズ、君が共に戦ったメビウスは立派なウルトラ戦士として成長をしている。君達が贈ってくれたものも含めて本当にすごいよ君は……地球外生物起源的超絶科学技術（メテオール）を利用したとは言え、遠くの地球から贈られてきたときは驚いてしまった。しかし君ならしそうだとも思ったよ。さて……メビウス、いるのはわかっていて出る来なさい」

私が声をかけると桃色の髪をロングにした女性、ウルトラウーマンメビウスがおどおどしながら現れた。どうやら私がサコミズのことを言っていたので出てこれなかったみたいだね。

「えつとその……ゾフィー兄さんはサコミズ隊長とは……」
「この冥王星で襲われていたところを助けたんだ。彼は勇敢にも仲間たちを逃がすために戦っていたところを私は助けたんだ。メビウス……サコミズ達は優しかっただろ？」

「はい……」

彼女の悲しい声を聞いて私は口を閉ざしてしまう。彼女にとっての地球での仲間たちは彼女がウルトラウーマンメビウスと知っても共に戦い、なんとあの暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人を倒したのだからね。あの時は私もサコミズと一体化をしてメビウスたちと一緒に戦った……。

「あの時ゾフィー兄さんが来てくれなかったらスペシウム・リダブライザーが壊されていたかもしれないです。ありがとうございます、ゾ

ゾフィー兄さんが出したのは何かの箱だった。ゾフィー兄さんに勧められるまま開けるとそこにあつたのは、トライガーショット、そして共に戦った仲間たちのメッセージだった。

「こ、これって……」

「メテオールだよ。彼らは君に届けるためにメテオールを使いはるか彼方のこの星に転送をしたんだよ。流石サコミズだ……ふふ」
「リュウさん、ジョージさん、マリナさん、テツペイさん、コノミさん……サコミズ隊長、トリヤマ補佐官、マルさん、ミサキさん……うううううう」

「メビウス、忘れてはいけない。君達が戦ってきた地球での思い出を……そして彼らの分も生きること」

「はい……私は守っていきます、ウルトラウーマンとしてリュウさん達はいつまでも私の心の中で生きている。絆は途切れたりしません!!」

「その意気だメビウス!」

私はこれからもウルトラウーマンとして頑張っていきます。ついでに花嫁修業もしたほうがいいかな?ゾフィー兄さんのためにね♪

メビウス side 終了

二人のウルトラ戦士が地球付近へと到着をする。メビウスが止まると、ゾフィーも一緒に止まった。

「……」

「そうだ少し寄り道をしようじゃないか、メビウス」

「いいんですか!?!」

「ああ」

こうして二人は地球の方へと降りたちゾフィーはイケメンなお兄さん(※『STORYO』の容姿)に、メビウスはビビノ・ミライに変身をして地上に降りたつ。二人は歩きながらほかのウルトラウーマンたちへのお土産を買ったりしているが、ミライはゾフィーの手に抱き付く。彼は驚きながらもスキンシップと思い、彼女のDカップの胸がむにゅんと当たりながら歩いている。

「み、ミライ!?!」

「どうしたのですか？ゾフィー兄さん♪」

ミライは笑顔で言うので、ゾフィーは何も言えなくなる。そして、ふと親友の一人である青いウルトラウーマンのことを思う。

「帰ったらあいつのところに行くとするか、ヒカリの奴……大丈夫だろうか？」

「ゾフィー兄さんはヒカリとは普通に話をしていますね。そういえばメロス隊長とも」

「ああメロスやヒカリとは学校の同級生なんだよ。あの子がハンターナイトツルギになったときは正直言つて驚いたよ。惑星アーブがボガールに滅ぼされたと聞いたとき、彼女がいなかったからね。嫌な予感がしていたが……君や仲間たちがヒカリの心を開いたんだよ。」

ゾフィーとメビウスはそういいながら歩いていく。数時間ほど地球を堪能してから再びウルトラマンへと戻り、光の国へと帰還するのであった。

ゾフィーとヒカリ

ゾフィースide

やあ、地球のみんな、ゾフィーです。メビウスと一緒に太陽系をパトロールをした後、地球へと寄ってほかのウルトラマン達のお土産を買って渡したら「なんで自分たちも連れていってくれなかったのか」と怒られたゾフィーです。

いやウーマン、セブン、そんなに睨んでいたらかわいい顔が台無しだよ!? ジャック!? エース!? 涙目にならないで!!?

タロウはウルトラダイナマイトを使いそうな雰囲気を出さなくてくれ!! レオとエイティは暗いオーラを出さないでくれ!! マイナスエネルギー危険だろ!!

「ずるいよメビウス!! ゾフィー兄さんとパトロールなんて!!」

「そうだな……ゾフィーもゾフィーだ。一人で行くなんて危ないじゃないか」

「ウーマン、私は子どもじゃないんだから、平気だつて」

「そういつて、この間わざと宇宙人軍団につかまってその組織を壊滅させたのはどこのどいつだっけ?」

「……」

そういえばそんなことをしたな——あの時、わざと宇宙犯罪組織につかまった後、奴らの本拠地で本領発揮をしてスペシウム光線やウルトラギロチン、ウルトラショットにストリウム光線、そして最後は自慢のM87光線を使って組織を壊滅させたのだ。

「全くお前がさらわれたと聞いて探したら、組織を壊滅させて帰ってくるなんて思ってもいなかったわよ」

「そうだよゾフィーお兄ちゃん!! 心配したんだからね!!」

「すまなかつたなジャック、お前達も心配をかけさせてしまつて……まあそのお詫びということで勘弁をしてくれないかな?」

私はそれぞれにプレゼントを渡していく。彼女達が笑顔になってくれたので、件の彼女のところに行くとしようかな?

隊長室を出てブラザーマントを羽織ると、ほかのウーマンたちが挨拶

撈をしてきた。私は挨拶を返してから、彼女がいる宇宙科学技術局の研究室へ向かう。

「おそろくだけどいるな……ヒカリーー私だ入るぞー」
研究室の扉が開いて、中へ入るとロングの青い髪をポニーテールにしている女性を見つめる。私はため息をつきながら、左手につけている量産型ブレスレットを起動させて彼女の頭に思いつきりばしーんとウルトラハリセンで叩く。

「くううううううう何をするのよゾフィー!？」

「また徹夜をしたな？全く綺麗な顔を大事にしないか」

「あんたにだけには言われたくないわよゾフィー」

さて改めて自己紹介をしておこう。彼女こそ私の親友でありウルトラウーマンメロスと同じく剣の達人とも言われているウルトラウーマンヒカリ。容姿は原作のヒカリの姿にロングの青髪をポニーテールにして、右手にウルトラマンキングから授けられたナイトブレスを装着をしている。胸の大きさはFカップと大きめだ。

「ほら土産を持ってきた。しかしまた随分と部屋が賑やかになったな……」

「……悪かったわね片付けられない女で」

「……全く帰ってきてからも変わらないな」

私は彼女の部屋を片付けることにした。やれやれ……

ゾフィースide終了

ヒカリスide

全くこの男は変わっていないな、こうして人の世話をしようとしているところが。私が光の国に帰って来たのを喜んでいたのも彼だった。かつて高次元捕食体ボガールによって滅ぼされた惑星アープの仇を討つために復讐の鎧を纏い、ボガールを殺すために生きてきた私だった。だがメビウスやリユウ達と出会い本当の意味で光を取り戻した。

だが私は元々ブルー族で戦闘をする立場じゃないため、体の蓄積したダメージが発生をしてそこにゾフィーがテレパシーで帰還するよるに言ったな。その後だった……ベムスターに襲われた私を助けてくれたのがゾフィーだった。

「自分一人で戦っていると思うな、人は皆支え合って生きているんだ。お前が死んだら彼女も死んでしまうんだぞ」

そうだ、私は地球で活動をするためにセリザワ・レイの体に乗っ取ったんだったわ。まさかゾフィーに気づかされるなんてね。そのあともゾフィーはウルトラの父とウルトラの母を説得して、私が再び惑星アープへと行くことを許可させてくれた。そこでババルウ星人の罠にとらわれてしまったところを惑星アープが助けて、授けてくれたのが勇者の鎧だったのよね。

「……………ありがとうゾフィー」

「ん？」

「何でもないわよ……………キツキナサイヨバカ」

あーもうどうしてこんな男を好きになっちゃったのかしら!! 狙っているの知らないで全く……………この大きな胸だつて役に立ちそうだしな。ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ。

ヒカリside終了

「……………」

ゾフィーは、一瞬誰かに狙われている感じを覚えながらも、ヒカリの部屋を片付けていく。

「ありがとうゾフィー、もう大丈夫よ」

「大丈夫ならいいが……………あまり無理をするなよ?」

「その言葉をそっくり返すわよ、ゾフィー、お前も最近寝ていないだろう」

「そう見えるかい?」

「ほかの奴らは騙せても私は騙せんぞ」

彼女は睨んでおりゾフィーは困ってしまうがふふとい笑いだす。

「何がおかしい」

「いや、ウーマンやセブンも知らないのに流石ヒカリだなど思ってね。流石親友だね」

「ふん、ところでゾフィー」

「なんだいヒカリ?」

「私の胸揉ま「ない!!」むー残念だ」

彼女は残念そうにしていたが実際には揉ませてやろうと思っていたほど彼女はゾフィーのことが好きなのである。初めての親友であり異性として見ていたからだ。はあとため息をつきながら彼女はゾフィーの左手に装備をしているブレスレットを見ていた。

「あらブレスレット？」

「あーこれかい？ ジャックが使用をしているブレスレットと同じだろ？ 自分が作ったものだから自分用にね？」

「ソナナコトイエバツクツタノニ」

彼女はボソリと言うがゾフィーには聞こえていないのであった。

ゾファイアの直属の部下

ゾファイア side

やあゾファイだよ。今回は私の直属の部下を紹介をしようと思う。え？ウーマンたち？彼女達は私の大事な妹たちだからね、まあ立場上命令することもあるが……隊長室で書類をチェックしているとやってきたみたいだね。

「はい」

『失礼します!!』

そう入ってきた彼女こそ自称私の「妹分」を名乗っているウルトラウーマンアムールである。

ライトノベル『ウルトラマン妹』に登場をしたウルトラ戦士であり、私の直属の部下になっているが格好などはウーマンたちと同じように普通の人の顔に彼女のボディとなっている。なぜ私だけ普通のゾファイのままなんだろうか？

「やあアムールご苦労さま、傷の方は治ったかな？」

「はい……その隊長……ありがとうございます。」

「あー、イーハトン星人の時だね？気にすることはないさ。君達二人でも苦戦をする高次元生命体だからね、私自ら戦線に立つこともあるさ。それに部下を守るのも隊長の使命でもあるからね」

「た、隊長……」

うわーそんな目を光らせなくてくれアムール、尊敬をしている眼差しで見なくてくれーまぶしいからー

ゾファイア side 終了

アムール

あー隊長隊長隊長隊長、なんてかっこいい体をしていらっしやるのですか……訓練生だった頃、あなたが臨時講師として来た時には全員が驚きました。そしてあなたが放ったM87光線の美しきを見て私は必死になって訓練を続けました。あなたの下で戦う為にやがて訓練校の卒業をして宇宙警備隊員になるための相手があなたでした。

「君は確かアムールだったね。私の講習でいつも聞いていたのを覚えているよ。だけど今回は宇宙警備隊員としての模擬戦でもある。遠慮はいらないよ？君が訓練校で教わってきたことをすべて私にぶつけて来なさい!!」

「わかりました。行きます!!」

私はゾフィー隊長に攻撃をする。放った拳をあの人は弾いて、その手につかまれて投げられてしまうが、私はすぐに態勢を立て直して手を十字にして構える。

「アムールシュート!!」

「光線か、なら!!M87光線(B)」

あれはM87光線!?私はすぐにアムールシュートを解除をして回避をする。流石宇宙警備隊隊長を務めてウルトラ兄妹の一番上に立つ人で私のあこがれの人……強い。

「どうした?もう終わりなのかい?」

「まだいけます!!」

私は走る!あの人の隣で絶対に戦ってみせるんだ!!はああああああああああああああああああああああああああああああ!!

それから私は意識がなくなり、目を覚ますとゾフィー隊長がいた。

「大丈夫かいアムール?」

「ぞ、ゾフィー隊長!?あ……そうか私……気絶したんだ……」

気絶をしてゾフィー隊長に迷惑をかけてしまって、宇宙警備隊員になれないんだな……と思っていた。

「さて結果だが……合格!」

「ッ!!」

「君が気絶をする前に放った拳が私のお腹に当たってね。最後は気絶してしまっただけど君の覚悟はわかったからね。だから合格にしたんだ。おめでどうアムール!」

「はい!!」

こうして私は宇宙警備隊員となりあの人の指示の下、色んな宇宙人と戦ったり星を守ってきたりした。

地球に派遣されると、教え子のジャンヌが勝手に地球に来ていたのには驚いた。だけど、イーハトン星人が元凶と分かり私は立ち向かったが奴の攻撃で重傷を負ってしまいジャンヌも吹き飛ばされてしまったのを見てしまう。

そこに稲妻状の光線が飛んできて奴に当たった。

「だ、誰だ!!」

赤い球体が私たちの前に着地をしてそれが光りだすとそこに立っていた人物に私は目を見開いてしまう。

「ぞ、ゾフィー隊長?」

「大丈夫かアムール、よく頑張った。貴様がイーハトン星人」

「お前はゾフィー……宇宙警備隊隊長自ら来るとはな、情けない部下だ」

奴の言う通りだ。私はなんて情けない部下なんだ!!

「彼女は情けない部下ではない!頼れる部下を死なせるわけにはいかないからね。いくぞ!!シユワ!!」

「これでもくろえ!!」

「隊長!!」

「シユワ!!」

隊長は飛びあがりウルトラキックをお見舞いさせる。そこから隊長の連続した蹴りがイーハトン星人にダメージを与えていく。私でさえ手も足も出なかったのに強い……嗚呼、隊長……

「乙光線!!」

「ぐ!!」

「今だジャンヌ君!!」

「スパークリングアロー!!」

ジャンヌが放ったスパークリングアローがイーハトン星人に当たろうとしたが、隊長自身も「やっぱりか」といっていたのでどう言うことかと聞いた。

「あの技は使い手の能力に比例するからね。アムール、トドメは任せる!!」

隊長は私を回復させた後、そのまま走り奴が背中を見せたのを見て

私は必殺技アムールシュートを放ち背中当たる。

「がああああああああ!!」

「これで終わりだ!!イーハトン星人!!M87光線!!」

「私があああああああああああああああああああ!!」

やはり隊長はすごい……私が苦戦をしたイーハトン星人相手に苦戦もせずに倒したのだから……私は……。

「よくやったね二人とも、だがジャンヌ……流石に私も今回の命令違反は見過ごせないよ」

「えっと、すみませんでした……」

「とりあえず一度アムールと共に光の国へと帰還をするようにいいね?」

「はい……」

ジャンヌからスパークリングアローが渡されるとそれが光りだしてゾフィー隊長の左手の方へと戻りブレスレットになる。

「シュワ!!」

ゾフィー隊長は先に戻っていき私も続いて飛びたつた。あの人の背中を追いかけて必死になって訓練をしてあなたの元で戦える幸せ……あー隊長隊長隊長隊長隊長隊長隊長隊長隊長。

アムールside終了

現実に戻りアムールから書類をもらったゾフィーはそれを見てから返す。

「報告ありがとう、アムール」

「いいえ、それとジャンヌが地球へ行ったのはゾフィー隊長、あなたが関係していますね?」

「ふふ、わかってしまったかい?そうだね彼女のあかりちゃんに会いたい気持ちを察してね。まあ彼女が必死になって倒したのを覚えてるよ」

「いったい彼女に何をさせたのですか?」

「強化バキシムをぶつけたんだよ」

「強化バキシム!?!かつてメビウス先輩が苦戦をしたあの!?!無茶です!!訓練もそこまでしていない彼女にあれば!!」

「だが彼女もウルトラウーマンだ。見ていたさ何度も何度も挑んでは敗れていく彼女をね。でも最後は彼女は勝ったよ。連続した攻撃で相手を翻弄して苦手だった光線技でね。それほどあの子も地球人のことを好きになったってことだよアムール」

「.....」

「とりあえず報告ありがとう、アムール」

「失礼します」

アムールが出ていったあと、ジャックが入ってくる。

「ゾフィーお兄ちゃん、もしかしてジャンヌって子のことを考えていましたか？」

「そうだね、苦手だった光線技を使ってあの強化バキシムを倒すとはね。君やほかの戦士たちと同じようにあの子が気にいったんだよ」

ゾフィーは立ちあがり光の国を見ていた。ジャックも彼の隣に立ち、街を見ていた。

「隊長室ってこんな風に見えるんですね。私やウーマン姉さんたちが使っている部屋からは見えないですよ？」

「ああその通りだ。この光の国以外の戦士とも関わっているからね、今では」

「ですね、ふふ」

ジャックが笑っていたのでゾフィーもつられて笑っている。

ゾフィーとゼロ

宇宙空間

「シユワ!!」

我らの主人公ゾフィーは現在ペダン星の宇宙ロボットキングジョーブラックに襲われていた。今日も宇宙の平和を守るためにパトロールをしていたが、突如として四つの戦闘機が現れて合体をしてキングジョーブラックへとなり交戦をしかけてきた。

「流石セブンを苦戦をさせたロボットだけあるな……だが!!これならどうだ!!」

ゾフィーは右手に光エネルギーをためて前につきだした光線、M87光線が放たれてキングジョーブラックに命中をして爆散をする。彼は倒したと思い構えを解除をすると後ろの振り返るとキングジョーブラックがもう一体いた。

「もう一体!?!がは!!」

油断をしていたゾフィーはキングジョーブラックの拳を受けてデブリの岩に叩きつけられてしまう。彼が前を向くとキングジョーランチャーを構えていたので彼はどうするかと考えていた。

(さてどうする?ん?この感じは?)

「てめえええええええ!!隊長に何しているんじやアアアアアアアアアアア!!」

銀色の髪の一部をツインテールにして銀の鎧を装着し、右手に鋭い剣のような装備を纏っていた女性の炎の蹴りがキングジョーブラックに当たる。ゾフィーは誰が来たのかわかったので礼を言う。

「助かったぞゼロ」

「大丈夫か隊長?」

「これくらいどうってことない。さあ行くぞゼロ!!」

「おう!!」

そう現れた人物こそウルトラマンゼロである。頭部にゼロスラッガーとビームランプ、胸部にプロテクターとカラータイマー、胸の大きさはDカップのウルトラ戦士である。キングジョーブラック

はランチャーを放ったがゾフィーがウルトラクロスガードをして攻撃を防ぐと、ゼロがダツシユをしてキングジョーブラックのボディにゼロナツクルを叩きこむ。キングジョーブラックは反撃をしようとしたが、そこにゾフィーが左手のウルトラブレスレットを変形させたウルトラソードを使いキングジョーブラックのランチャーを斬り裂いた。

「今だゼロ!!」

「ああ!!ワイドゼロショット!!」

ゼロが放ったワイドゼロショットが命中をしてキングジョーブラックは爆発四散する。ゾフィーはウルトラソードをブレスレットに戻してゼロに声をかける。

「助かったゼロ、だがどうしてここが?」

「時空を超えてきたらキングジョーブラックが向かっているのを見つけてな。追いかけていたら隊長が一体を倒したところだったかな?」

「なるほど……ペダン星人の狙いは私か……」

「だけど無事でよかったぜ……」

「ふふお前に心配をかけられるとはね。だがありがとうゼロ」

「……ほらさっさとウルトラの国へ行こうぜ?お袋達が待ってるからよ」

「そうだな」

二人は光の国の方へと飛んで行く。

zero side

ゾフィー隊長、私は隊長を異性としてみている。私の本当の正体はウルトラウーマンセブンのデータをベースに作られた生命体だ。タイガも私と同じだ。だがそこを助けてくれたのがゾフィー隊長をはじめとした宇宙警備隊だった。

彼は優しい言葉で励ましてくれた。

「よく頑張ったな……今はゆっくりと休んでくれ……」

そして私はセブンの娘として鍛えられることになり、彼女の弟子のレオやアストラにK76星で厳しい訓練を施された。そして、光の国がベリアルにいう黒いウルトラウーマンによって壊滅をしたことを

知らされて私は行くとしたがレオに止められる。

「駄目よ。あなたの修行はまだ終えていない」

「でも!!お袋やゾフィー隊長が!!」

「あの人たちはそう簡単にやられないわ!!」

私はレオの拳を見た。彼女は手を強く握りしめていた。彼女も本当は行きたいが私の訓練を引き受けている……悔しいのは彼女も一緒だっということがわかり、私は訓練を続けていた。

訓練を再開をしていると、何かが降ってきた。それは勢いよく地面に突き刺さり、私は目を見開いた。

「こ、これってお袋のアイスラッガー!?!」

そこにキングのばあちゃんがやってきて私が持ったアイスラッガーからの思いを伝える。

「セブン達四人のウルトラ戦士たちは氷結を免れてタロウが残したわずかな光をつかって怪獣墓場で戦っている。しかしゾフィーとセブンは地球人をかばい、セブンは最後の力を振り絞り、これを投げつけてお前に助けを求めている」

「お袋、ゾフィー隊長……」

「行きなさいウルトラウーマンゼロ!!怪獣墓場へと行きベリアルをやっつけるのだ!!」

私は足元のピグモンに膝をついてから、頭を撫でて空を飛んで行く。そして見たのは倒れているお袋を守るために奮闘をしているゾフィー隊長だった。私はエメリウムスラッシュを放ちゾフィー隊長たちを襲おうとした怪獣たちを撃破するとゾフィー隊長が振り返る。

「終わったのだな……」

「……」

そのままお袋を安全な場所へ置くと、お袋は私に手を伸ばそうとしていた。

「り、立派になった……わ……ね……」

そのまま倒れたお袋にアイスラッガーを握りしめさせて私は立ちあがる。

「誰だ!?!」

「ゼロ!!ウルトラウーマンゼロ!!セブンの娘だ!!」

これが私のウルトラ戦士としての戦いの始まりだった。再生怪獣たちを倒した後、ベリアルと一騎打ちで彼女を火山の中にゼロツインシュートを放ち、叩き込んだけど、彼女は怪獣たちの怨念を全て吸収をして、百体怪獣ベリウドラへと変貌をして苦戦をした。

「ゼロ!!プラスマスパークコアに!!」

私は後ろを振り返り、ベリアルが盗んだプラスマスパークコアに手をかざすと私のゼロスラッガーがプラスマスパークのエネルギーでゼロツインソードに変形をして構える。

「皆、いくぞ!!」

「ええ!!」

「はい!!」

全員が光線を放ち、私は接近してベリアルにプラスマスパークスラッシュをお見舞いして撃破した。これが私がベリアルとの因縁の始まりでもあった。

それからアナザースペースでウルティメイトイージス、別の地球で共に戦ったダイナとコスモスの力、さらにベリアルの娘として作られたジードなど色んなウルトラ戦士たちと共闘をしてきたわ。

今の私がいるのもゾフィー隊長達のお陰だ。最近は私に弟子入りしようとしているウルトラウーマンゼットって奴もいるけど……ゾフィー隊長は面白がって「弟子にしたらどうだ?」とか言ってるからかってくるのがわかるのよね……まあ頼れるお兄さんだけど私にとってはかつこよくて愛している人だぜ。いつかは告白をしたいけど……どうやって告白したらいいんだろうか?くそ……色んな敵と戦ってきたがこういうのははじめてだからどうしたらいいのか……

ゼロ side 終了

光の国に到着をしたゾフィーと別れて、ゼロはセブンがいる部屋へと到着をして扉をあける。

「お袋、帰ったぜ?」

「お帰りゼロ……随分と無理をしたのねまた」

「まあな、今回はゾフィー隊長が襲われていたからな助けたんだぜ？」
「ゾフィーが襲われた？ゼロ、詳しく聞かせなさい」

そこにはウーマンとジャックもいたのでゾフィーが黒いキング
ジョーに襲われていたことを話した。三人はゼロの話を聞いて両手
を組み始めた。

「どうしたんだ、急に」

「ゼロ、ゾフィーが狙われているのはこれが初めてじゃないんだ」

「え!？」

「ゾフィーお兄ちゃんは色々な宇宙人やロボットに狙われているのは
知っているわね？ゾフィーお兄ちゃんを倒せば宇宙警備隊は崩壊を
すると考えているのよ。だから私達もゾフィーお兄ちゃんを一人に
しないようにしているんだけど……気づいたらいなくなつて
いるから探す方も大変なんだよね。今はエースとタロウが隊長室の
方へ行っているけど……」

一方で隊長室

「もうゾフィー兄さん勝手にいなくなつちやだめじゃないか!!」

「いやパトロールをしてきただけなのにな?」

「だけど狙われたのは事実だよな?ゾフィー兄さん?この間はバルタ
ン星人、今回はペダン星人と……ゾフィー兄さんがどれだけ
脅威かつてのがわかるんだよ?」

「……それはわかっているさ。だがそれでも私は戦い続けるさ
ウルトラ戦士として隊長としてな」

「……」

「すまないなエースにタロウ、お前たちに心配をかけさせてしまつて」
「なら私の頭を撫でてくれたら許します」

「それなら」

ゾフィーはエースの頭を撫でているとタロウは頬を膨らませる。

「エース姉さんだけズルイよ!!私も私も!!」

(やれやれ大きくなって二人の甘えん坊は私限定だが治らないな。
甘えてくれるのは嬉しいのだが……子どもの時と違って二人
とも成長をしているからな……当たるんだよなその大きなも

のが・・・）

二人の頭を撫でながらゾフィーは成長をした二人の大きなものを見ながらため息をつくのであった。

ゾファイーとネオスと21

ゾファイーside

次の日、私は二人のウルトラウーマンと模擬戦をしていた。一人は、ウーマンのような銀色の髪を持ち、額にブラウスポットというクリスタルを装着した勇士司令部のウルトラウーマンネオス、もう一人は頭部のウェルザードとビームランプにセブンのようなプロテクターを装着した宇宙保安庁のウルトラウーマンセブン21である。一応言っておくがセブンは親戚関係はない。ちなみに二人ともDカップである。

「さあ遠慮はいらないよ」

「あのーゾファイー隊長」

「本当に二人で来てもいいのですか？」

「ああ構わない。どーんと来なさい、いいね？手加減なんかしたら承知はしない……」

「はい!!」

いい返事だな、二人の連携は強いからな……油断はできない。

ゾファイーside終了

二人のウルトラウーマンとゾファイーの模擬戦が始まり、まず動いたのは21だ。彼女は頭部のウェルザードをゾファイーに向かって投げつける。彼はそれを右手で弾いたので、ウェルザードを戻すと、ネオスが接近して蹴りを入れてきた。ゾファイーは彼女が放つ蹴りをはじかせると21も同じように接近をして蹴りを入れてくる。

ゾファイーは一度後ろの方へと退がりエースの技を使う。

「ウルトラギロチン」

放たれた連続のウルトララスラッシュが二人に飛んできたがネオスが前に立ち、右手にウルトラ・ライト・ソードを生成して、ゾファイーが放ったウルトラギロチンを切り裂いた。そのままセブン21がアドリウム光線を放ったがゾファイーはそれをスペシウム光線で相殺する。

(流石ゾフィー隊長だ。)

(ウルトラ兄妹の長男であり私達があこがれる人だ、その人から模擬戦に付き合ってくれないかといわれて断れるはずがない!!)

二人のウルトラウーマンもゾフィーのことを異性としてみている。ネオスが別の地球で発生をしたダークマターの調査に向かった時、2人も親友のネオスのことが気になり地球の方で活動をしていた。ゾフィー自身もダークマターの原因が究極進化帝王メンシユハイトが原因だと判明した後、急いで別の地球へと向かったのだ。

二人のウルトラウーマン達は脳魂宇宙人ザム星人を守るためにメンシユハイトに挑むが圧倒的な力の前に二人は地面に倒れてしまう。

ザム星人のエスラーは自らの生命エネルギーを使って彼女達にエネルギーを渡そうとしたが、一人の男性が現れてそれを止める。

「大丈夫だ。ここは私に任せてくれ」

「待ってくれ、あなたは!!」

「私も彼らと同じウルトラマンだ」

男性は光りだしてメンシユハイトの前に現れる。ネオスと2人は現れた人物を見て目を見開いている。

「た、隊長!!」

「待たせたな二人とも今エネルギーを分け与える……ふん!!」

ゾフィーから受け取った光エネルギーで二人のカラータイマーやビームランプが赤から青へと変わり、二人のウルトラウーマンは再び立ちあがり構える。

「いくぞ二人とも!!」

「はい!!」

二人は連続した光弾を放ちゾフィーもウルトラショットを放ちメンシユハイトに当てる。ネオスと2人はウルトラマルチビームとアドニウム光線を放ち、メンシユハイトにダメージを与えると、ゾフィーはウルトラショットからストリウム光線へと変えて、メンシユハイトの角に当てると、翼が消えて地面に不時着させる。

「であ!!」

「たあああああ!!」

「シユワ!!」

ネオスと21は先に走りメンシユハイトの両手をつかむとゾフィーがウルトラキックを放ちメンシユハイトにダメージを与える。二人のウーマンたちもダブルキックをお見舞いする。

三人はそれぞれの必殺技の構えをするとメンシユハイトは両手から破壊光線を放ってきた。

「ネオマグニウム光線!!」

「レジアショット!!」

「M87光線!!」

三人が放った光線は、メンシユハイトが放った破壊光線を粉碎し、メンシユハイトの体に当たり爆散する。

「やった!!」

「ネオス、21、ご苦労だったな……君達のおかげでダークマターの影響はなくなっていくだろう。これで亡くなったザム星人たちの無念もは晴れる……」

「いいえ!隊長が来ていなかったら私達はあのまま負けてしまっていました。」

「そうです、隊長ありがとうございます」

二人のウルトラウーマンたちはお礼を言うと、ゾフィーは先に飛んで行き二人のウルトラウーマンたちもこの地球での役目を終えたのでネオスは一体化をしていた女性、カグラ・ナオと分離をして飛びたつ。

現在に戻ろう。ゾフィーのゼット光線を二人のウーマンは回避した後、このままではきりがないと判断をして必殺技の構えをする。

「くるか?」

ゾフィーはL字に構えて、ネオマグニウム光線とレジアショットの光線をM87光線(B)で相殺する。ウーマンたちは発生した衝撃波で動きを止めてしまうが、ゾフィーはその間にウルトラブレスレットを変形させたウルトラランスを構えて二人につきつける。

「!!」

「どうやら模擬戦は終了だね?」

二人は両手をあげたので、彼はウルトラランスを回転させてから左手のブレスレットに戻し、二人にシャワー浴びるように言つて、立ち去る。二人は言われたとおりにシャワールームへと入つていった。

「ねえ、ネオス」

「何？」

「勝てなかったね」

「……………ああゾフィー隊長の強さは知つていたつもりだけど……………あれは本気を出してはいないわね」

「……………そうか」

二人はシャワールームを出てから再びウルトラウーマンへと変身をして自分たちがいる部屋の方へと戻る。

ゾフィースide

現在私はウルトラの母ことマリーさんが務めているウルトラクリニックへとやってきていた。

「無理をしていますねゾフィー、ネオスと21との模擬戦以前の問題です」

「す、すみません……………」

マリーさんに説教を受けているところだ。どうやら気づいていないだけで、私の体はかなりポロポロの状態だったそうだ。セブンのような状態になりかかっていたのか……………そして説教を受けた後、カプセルに入りマリーさんのマザー光線で体を治してもらっているところだ。

「ありがとうございます、マリーさん」

「全く、妹たちが心配をしていましたよ？あなたがいつの間にか消えているって」

「……………わかっています。ですが妹たちを信頼をしていないわけじゃないんです。」

「なら「だからこそなんです。あの子達を危険な目に遭わせたくありませんから」ゾフィー……………」

「失礼します」

私は立ちあがりマリーさんに挨拶をしてから部屋を退出をする。

マリ―side

「ゾフィー……」

私は彼を回復をさせた後に色々と考えていることがある。あの子の疲れは尋常じゃないのにあまり見せていないのもある。

仕事も徹夜をすることが多いほどに……それをタロウから聞かされたときは一度休ませたほうがいいと判断をして、ケンにも報告して、休ませたけど彼はそのほとんどを訓練に使っていたそうです……ほかの姉妹達も心配をするのは当然ね。ゾフィーは皆のお兄さんとして弱い姿を見せたくないでしょう。

そのために妹たちは強くなってゾフィーのために戦おうとしています。他のゾフィーを好んでいる子だってそうよ。

「全く鈍感なのだから……ふふふふ」

いったいゾフィーは誰を選ぶのかしら？それとも全員を選んだ方が私やケンはいいけどね、うふふ。

ゾフィーのお墓参り

宇宙警備隊本部——ウルトラウーマンメビウスは書類を持って隊長室の方へと向かっていた。報告書を隊長室にいるゾフィーに確認をもらうためである。

彼女が隊長室へと入ると、いたのはゾフィーではなかった。

「やあメビウス」

「だ、大隊長!？」

ウルトラホーンを持つ宇宙警備隊大隊長を務めているウルトラの父ことウルトラマンケンがいたのでメビウスは驚いている。彼ははっはっはっはと笑いながらメビウスが持ってきた書類をもらい確認をしている。

「うむ確認させてもらったよメビウス、これは私が預かろう」

「あ、あの大隊長、ゾフィー兄さんは？」

「……今日はゾフィーはお休みだ。だから私が代わりにここで指揮をしているのだよ」

「ゾフィー兄さんがお休みですか、珍しいですね」

「……まあな」

ケンはゾフィーがなぜ今日休んでいるのかは知っている、ヒカリ、そして、タロウまでのウルトラ姉妹達もゾフィーが休んでいる理由を知っている。

さてそのゾフィーはというと、ウルトラの国のある場所へと花をもつてやってきていた。ここはウルトラの国の墓地である。

彼は目的の場所へとやってきてお水をかけてからお花などを入れ替えていた。ここにはゾフィーの父と母が眠っている場所でもある。

父はケンやベリアルの親友だったが、エンペラ星人が攻めてきたときに戦死、母の方は自分を産んでから亡くなっている。

「父さん、母さん、遅くなつてすみません。宇宙警備隊隊長として着任をしてからあまり来れなくなつたことをお詫びします。」

彼は、地球の作法に則り、線香に火をつけ、両手を合わせて黙とうをする。それから彼は立ちあがり墓地を後にする。

それからゾフィーは光の国を出て、かつて自身にM87光線の本当の意味を授けてくれた師匠にして養父ウォリアンの墓、さらに地球の方へと行きサコミズ・シンゴが眠っている墓にもお墓参りをした。(地球ではかなりの年数が経っているからな、メビウスが守ってきた地球も怪獣や宇宙人の出現率は減っているが、ひそかに動いている奴らがいる……)

彼はそう思いながら、サコミズの墓を後にして、歩こうとした時に火球が飛んできたので回避する。前を向くと現れた宇宙人は舌打ちをする。

「流石宇宙警備隊長だけなことはあるな」

「貴様はメタル宇宙人ガルト星人……！私の命が狙いか」

「そのとおりだゾフィー!!さあいだよ!!ガイモス!!」

ガルト星人が指を鳴らすと妖邪剛獣ガイモスが現れた。ゾフィーは右手に装着している変身用のブレスレットを掲げてゾフィーへと変身をする。

ガイモスは現れたゾフィーに向かって進んでいく。

「シユワ!!」

ファイティングポーズをとり、ゾフィーはガイモスに突撃をしてタツクルをお見舞いさせるが、ガイモスは強靱な体でゾフィーのタツクルを受け止めるとそのまま彼をつかんで投げ飛ばした。

「シユワ……(なんて怪力をしている。確かあれは『平成ウルトラセブン』の怪獣でセブンを一度はダウンさせているほどの強敵だ)」

ゾフィーは前世の記憶でガイモスのことを思いだして再び立ちあがるとウルトラスラッシュを投げつける。

ガイモスはウルトラスラッシュを受け止めてそれを地面に叩きつける。

「無駄だゾフィー!そいつには貴様の技をインプットさせている。つまり貴様の技は効かないってことだ!!ふん!!」

ガルト星人も巨大化をして二対一の戦いになりゾフィーは構え直す。しかし彼は笑いだしたのでガルト星人に疑問符が浮かぶ。

「何が可笑しい!?!」

「どうやら私は一人ではないってことだよ」

「なんだと!?!」

上空から光線が放たれて二人のウルトラウーマンが着地をする。青い体にFカッパ、右手にはナイトブレスを装着をしているウルトラウーマンヒカリ、もう一人は鎧を装着をして胸はヒカリと同じFカッパの人物、ウルトラウーマンメロスである。

「まったくお前は何処に行っても人気者だな!?!」

「全くよ!」

「すまないメロスにヒカリ、お前達が来てくれなかったらやられていたかもしれないな」

「なーに水臭いことを言ってるんだよ!?!ほらさっさとやるわよ!?!」

三人は構え直すと、ガルト星人は怒っていた。もう少しのところぞファイを倒せたので怒り心頭である。

「おのれおのれおのれ!!」

「悪いがこいつを倒させるわけにはいかない!!」

ヒカリはアーブギアを纏うとゾファイも右手に何かを装着をしている。

「ゾファイ、それは一体?」

「まあ見ておけコスモテクター!!」

彼は右手につけたスイッチを押すと彼自身に鎧が装着されていき、最後はヘルメットをかぶる。その姿は皆が知っているあの人である。

「アンドロメロス!!」

「それってコスモテクターじゃない!!なんでお前が!!」

「ああこれか?二代目メロスの父が装着してたのをもらってね。アンドロ警備隊を作った時に彼女からもらったものだ。どうか父の分まで共に戦ってほしいとね。だから遠慮なくもらったよ」

三人が構え直すと、ガルト星人とガイモスも同じように構えている。

「こうなりや最後の決戦だ!!ドハデにいくぜいくぜいくぜ!!」

ガイモスをメロスとヒカリが引きうけてくれるので、ゾファイはガ

ゾフィーとベリアル

ゾフィースide

地球でガルト星人とガイモスの二人に襲われかけたが、私を見張っていたヒカリとメロスが助けてくれたので無事撃退することができた。光の国へと帰った後、私は自分の家へと戻り休暇を満喫した次の日に、私は大隊長のところへと向かう。昨日の休みの時に自分の代わりに仕事をしてくれたのでお礼を言う為。

「失礼します大隊長……とベリアルさん」

ケンさんの隣にもう一人のウルトラウーマンがいた。ケンさんのようなマントを装着をして胸はGカップで白い体に黒い髪……そう私が知っているアーリースタイルのような姿をしているウルトラウーマンだ。

「ゾフィー、今の私はベリアルではない。ウルトラウーマンベルだ」

「す、すみません」

なぜ彼女が生きているのか？私も戦った時に初めて知ったのだが……普段のベリアルさんは誰にも優しくマリーさんのような人だが、戦いになると原作のようなベリアルさんになるみたいだ。そしてあの事件が起きる。

ベリアルさんの優しさを知っている者たちは、彼女がなぜプラズマスパークコアに振れたのか、不思議に思った。その現場に、私もおりベリアルさんのあの豹変した姿に驚いてしまったな。彼女を止めようと必死になったが、私は蹴りを受けて吹き飛ばされてしまう。そこから黒くなったベリアルさんが現れてウルトラウーマンキングが現れ、彼女を宇宙牢獄に封印をした。私は何度も宇宙牢獄の方を見ていたが、ある日その牢獄からベリアルさんが脱走したという連絡を受けて、私達は全員が警戒態勢を取っているとベリアルさんが現れる。

「ふふふふふふふふ」

「ベリアル……」

ほかの戦士たちがベリアルさんに吹き飛ばされていき、私はウーマンとセブンと共に彼女を迎撃をするために戦った。ほかの二人がべ

リアルさんに吹き飛ばされても私は一人でベリアルさんと戦った。

「てあ!!とう!!」

「ふふふふ強くなつたみたいだなゾフィー」

「ベリアルさん、元のあなたに戻ってください!!」

「何を言っているのかしら?これが私の姿なのよ!!であ!!」

「ぐ!!M87光線!!」

私はM87光線を放つが彼女はギガバトルナイザーでガードをして、私は彼女の攻撃を受けて叩き落とされてしまう。目を覚ますと光の国が凍結をしようとしていたので私はウルトラバリアーを張りガードをする。鍛えておいてよかったと改めて確信した。どうやらベリアルさんにプラズマスパークコアが盗まれて光の国が凍結をしてしまったみたいだ。

「ゾフィー!!」

無事だったウーマンとセブンと合流をした後、メビウスに怪獣使いを連れてくるようにいい、私達はその間はエネルギーの保存のため人間態となり潜んでいた。この当時、ゼロをレオとアストラの姉妹に預けて修行させていた。

そしてメビウスが怪獣使いのレイ(こちらも女性)を連れてきて、私達はタロウが残したプラズマスパークコアのエネルギーを使って変身をしてベリアルさんがいる怪獣墓場へと向かった。彼女が百体モンスロードで繰り出した怪獣や宇宙人と交戦をする。明らかに百体以上いたし、なんか変なのが一体いたな、プレッシャーと叫びながら来たのだが……とりあえず私はそいつを投げ飛ばした後M87光線(B)を薙ぎ払うように放って撃破した。

だが怪獣の多さに私達は苦戦をしてしまい、さらにレイがレイモンレイオニツクバーストへと変わり彼女のゴモラも暴走をして、私達に襲い掛かり、セブンがその攻撃を受けて重傷を負ってしまう。

「セブン!!」

「ふふふならこれならどうかしら!!」

「いかん!!」

レイモンの暴走を彼女の仲間ZAP SPACYが解いたが、それ

を狙ってベリアルさんが放ってきたので私は自らの体を使い彼らを
守る。

「ぐは………」

「ゾフイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

セブンがアイスラッガーを使いK76星にいるゼロ達にSOSを
飛ばすと、彼女が倒れてしまい私は彼女の傍に行き守るために奮闘を
する。

その後はゼロがベリアルさんを倒したが、アナザースペースにてベ
リアルさんはベリアル銀河帝国を築き上げた。ゼロが調査に向かっ
た後、現れたゼロそっくりのダークロプス軍団が攻めてきた。

私達はそれを迎撃をするために光の国を飛びだして倒していく。
次々に送られてくる敵に私達は奮闘をした。故郷を守るため
に……そしてキングも参戦をして撃破した私はゼロがベリア
ルさんを倒してくれたのだなと判断をする。

「……………」

平和になった……私はプラズマスパークコアへとやってき
た。ベリアルさんは何を求めてこれに手を振れたのか……私
には理解が……!?

「誰だ!!」

「ふふ変わらないわねゾフィー」

「え?」

私は目を見開いた白い体のウルトラウーマンがそこにいたのだか
ら。だがその目は見間違えようがない!

「ベリ……アルさん?」

そうウルトラウーマンベリアルさんがそこにはいた。なぜそこに
彼女がいるのか私には理解ができなかった。

「奇跡って奴かしら?このプラズマスパークコアが私に力を貸してく
れていたの……」

「貸してくれていた?」

「アナザースペースでゼロに倒されたはずの私だったけど目を覚まし
た時はレイブラット星人の呪縛やもう一人の私から解放されていた

の……気づいたらこのプラスマスパークコアの近くにいるってことがわかった。あの時触った際に入った光が私を守っていてくれたみたいなのよ……」

「そうだったのですか……」

そして私達はケンさんのところへと連れていくと、彼も目を見開いていた。

「ベリ……アルなのか？」

「ええそうよ……戦闘狂の方じゃない私だけだね……」

「……ベリアル……帰ってきてくれてよかった……ゾフィー」

「わかっていきます、ウルトラ姉妹たちを集結させます。」

私は急いでウルトラ姉妹達を呼んだ。ヒカリも呼んだので彼女達は白いウルトラマンがいるのに驚いている。

「あのゾフィー兄さん、彼女は？」

「ベリアルさんだ」

「「ベリアル!?!」」

「待て!!」

「ゾフィー兄さんなんで止めるの!!こいつは!!」

「わかってる。彼女は違うんだ!!」

「やめなさい、皆」

「ウーマン姉さん!?!」

「ゾフィーがここまで言うってことは何か理由があるのでしょ?ベリアル」

「ありがとうウーマン、そうね話をするわ。なぜ私がここにいることやなぜプラスマスパークコアに触れたこともすべてね」

彼女は嘘の一言も言わないで話をする。メビウスなどは涙を流しながら聞いていた。

「そんなことがあったなんて……」

「ええ信じられません。エンペラ星人やレイブラッド星人によって植え付けられたもう一つの人格悪の心と言った方がいいですね……」
「つらかったわ……私はそこで見ていることしかできない感覚

だったから……ケンやマリィ、ほかの人たちを傷つける自分を見るのを……」

「ベリアルさん……大隊長、お願いがあります。ベリアルさんの復帰を許してもらえないでしょうか？私のわがままかもしれません。彼女は私が両親を失ってからの義母のような方です。だから……」

「わかっているゾフィー、だがベリアルという名前をそのまま使うわけにはいかないだろう……新しい名前にするしかあるまい」

「ならベルってのはどうかしら？ウルトラウーマンベル、ベスと名前が気になっちゃうけどあまり名前をとりたくないでしょ？」

「……そうねありがとう、マリィ。それと皆ごめんなさい……謝っても許されることじゃないけど……」

そこからベリアルさん改めてベルさんは大隊長補佐という形で収まったが、どうやら悪のベリアルさんの方はゼロが仲間たちを蘇らせるときに復活を試みたいだ。そしてクライシスインパクトの時にベルさんとベリアルさんが激突をした。

「まさか貴様が生きていたとはな……なあ？」

「ええそうね。今は違う!!私はウルトラウーマンベル!!宇宙警備隊大隊長補佐だ!!」

「だがお前でも止めることはできまい!!この宇宙全体をも壊す爆弾だ!!」

それからキングが自らの体を使って修復されたが、ベリアル自身は生きているとベルさんが言ったが、彼女はジードというベリアルさんの遺伝子を使った人物が倒したとケンさんとベルさんがいった。

ジードか……彼女もまたゼロやタイガと同じように生み出された戦士なのだ……ゼロもその時に戦っていたので彼女からも詳しく聞いたからね。今度ゼロに連れてきてもらおうかな？

ゾフィーside終了

ベリアル改めてベルside

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたベリアル？」

「何でもないわよケン」

またこうしてケンと仕事をするなんて思わなかった。マリーとも普通に話したりほかのウルトラウーマンたちとも話をしたりしているけど、悪の人格に閉じ込められてアナザースペースでエネルギーを失ったゼロに激励をして彼女に撃たれて終わったのだなと思ったけど……ずっと気になることがあったのはゾフィーだ。

彼は私の親友だった子の息子だ。だからこそ私は最後まで見ることができなかつたことを後悔をしている。もう一度だけでいい、ケンやマリーやゾフィーたちと一緒に宇宙の平和を守りたいとどれだけ願ったか……それが叶ったのか私は目を覚ましたらプラズマスパークコアの近くで倒れていた。しかも姿は前のレイブラッド星人に乗っ取られる前の……..。だけどレイオニクスとしての力は体の中に残っているのを感じた。

そしてベリアル……まあ私のもう一つの人格の方がアトロシアスという姿に変貌をしたというのを感じて私とケンはジードがいる地球へと降りたつた。

「ぬ!!ケンにお前は!!」

「え？」

「大丈夫、娘よ」

「お母さんが……..二人？」

「ジード、あなたは体の回復をしなさい。その間の時間稼ぎは私とケンでするからいいわね!!」

「お母さん!!」

ケンと共にフィールドを張り彼女を抑えていたけどその力は私やケンが思っていた以上の力だったのでジードが変身するのに耐えることができるのだろうか? いいえ耐えろ私!! あの子は私の遺伝子を持っている娘……..頑張れ私!!

「耐えるわよケン!!」

「わかっているさべる!!」

「ふん!!お前達二人で私を抑えられると思っっているのかああああああああああああああああああ!!」

そしてなんとかジードが変身が可能な時間まで抑え込んだけどフィールドが破られてしまう。

【ウルトラウーマンジード!プリミティブ!】

そこに立っていたのは銀色の髪の毛のジードが立っていた。彼女は私の方を向いてからあいつに向かって立ち向かっていく。だけどその力は絶大で押されていた娘だけど奇跡が起きて赤い髪にツインテールの娘、髪が銀色の一部がツインテールになった娘、そして最初の娘に髪が金色のロングの娘、最後は青い髪をポニーテールにした娘が現れて私は一言。

「最高だ、ガク」

「ベリアルううううううううううううううううううううううう!!」

いやー五人の娘が見ただけで最高ですわ。そのあとジードはベリアルを倒して帰還し私は娘を抱きしめる。

「え!?か、母さん!?!」

「お帰りなさい私の娘……よくぞ無事で」

「お、お母さん……おかあさあああああああああんうわああああああああああああん!!」

娘は私の胸の中で泣いた。なんか知らないけど揉まれている気がするのは気のせいかしら?」

そのあと娘はギガファイナライザーというのを手に入れて、オーブって子とゼロが協力をして惑星クシアの巨人工頭脳ギルバリス率いるギャラクトロン軍団を倒したという連絡を受けてホッとした。

それとジードはゾフィーに恋をしているようだ。ある日私のところへと来た娘はこう聞いてきた。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの?」

「ゾフィーさんの好きなものって何?」

「ゾフィーが好きなもの?料理とかってこと?」

「こくこくと首を縦に振る娘、私は苦笑いをしながら彼の好きなもの

を言うところからか出したのかメモ帳でメモをする娘を見てしまう。
やれやれ私の娘まで好きになつてしまうなんてゾフィー……………
どれだけ鈍感な男……………まあそれを見て楽しむのも義母の役目
かしら♪

ゾファイーとトライスクワッド

M78星雲近くにある惑星エイント。三人のウルトラウーマンを一人のウルトラマンが見ている。

一人は主人公、宇宙警備隊隊長ゾファイー、一人はタロウのようなピンの長い髪をツインテールにしている女性でウルトラウーマンタイガ、一人は黒髪ショートで胸が大きく筋肉質なウルトラウーマンタイタス、もう一人は青髪ショートで胸はタイガとどっこいどっこいなDカップのウルトラウーマンフーマである。

彼女達三人はトライスクワッドというチームで活動をしているウルトラウーマンたちで、M78星雲、U40星、惑星O-50とそれぞれが出身地が違うが、進む場所は一つと誓い合った仲間たちである。

「まさかゾファイー隊長自ら俺達を鍛えてくれるなんて思ってもいませんでした!!」

「ああ宇宙警備隊長のゾファイー殿の力を見れるとは……」

「そうだな、あたしもワクワクしてきたぜ」

「君達とは一度だけ模擬戦を試みたからね。さあ見せてくれ……君達トライスクワッドの力を!!」

ゾファイーが構えたのを見て、まず動いたのはフーマだ。彼女は素早く動いてゾファイーに攻撃をしようとしたが、彼は後ろの方へと下がりを、フーマの攻撃を躲した。彼女は舌打ちをすると、タイタスが接近をしてゾファイーに剛腕をふるってきた。彼は両手を前にしてクロスガードをして、タイタスの攻撃をふさぐが彼女の剛腕を受けて後ろの方へと吹き飛ばされかけてしまう。しかし、すぐにウルトラ念力を使って着地して両手をふるった。

「スワローバレット!!」

「スラッシュ光線!!」

そこにタイガがスワローバレットを放ってゾファイーに攻撃をする。スラッシュ光線で相殺されてしまう。彼は冷静に左手のブレスレットに手をかざすとウルトラランスを作り、フーマの光波剣・大蛇

を受け止めてから弾かせると、タイタスの星の一閃アストロビームを上空へと飛び回避をする。ゾフィーは三人の連携を見ていいチームだなと感心しつつゼット光線を放つ。

三人は回避をするとタイガが声を出す。

「こうなったらタイタス！フーマー！あれをやるわよ!!」

「ああ!!」

「おうよ!!」

「二はああああああああああああ!!」

三人のウルトラウーマンたちが光りだしてタイタスとフーマーがタイガと一体化し、赤い髪のツインテールの状態となり右手にトライブレードが装備された姿、その名は……

「タイガトライストリウム!!」

「それが仲間たちと共に得た新たな力なのだなタイガ!!」

「はい!!」

ゾフィーは着地をしてウルトラブレスレットをウルトラソードへと変えて構える。タイガトライストリウムもトライブレードを構えて突撃をする。

「であー!はああああああああ!!」

「ふー!は!!」

トライストリウムがふるったトライブレードをゾフィーは冷静にウルトラソードではじかせた後に蹴りを入れてタイガトライストリウムは後ろの方へと退がる。

「だったら!!」

トライブレードのトリガーを二回押して発動させる。

『タイタスバーニングハンマー!!』

黄色い火球が現れてそれを振り回してゾフィーに放つ。彼はウルトラソードを使い放たれた火球を切り裂いて前を向いた。すでにタイガは上空に飛びトリガーを三回押していた。

『くらえ!!風真烈火斬!!』

青い八つ裂き光輪が放たれるがゾフィーは後ろの方へと後退をしてウルトラソードを戻す。

「見事だなタイガ、お前達の成長をした姿を見れて私は満足しているがまだまだやり足りないのだろうか？なら受けてみるがいい!!私のM87光線を!!」

『来るぜタイガ!!』

『ああゾフィー隊長の技』

「ええM87光線ね。なら見せてあげましょう!!私達の力をぶつけます!!」

タイガは三回振り下ろしてからエネルギーチャージを開始し、ゾフィーの方も右手にエネルギーを溜めて向ける。

『『トライストリウムバースト!!』』

「M87光線!!」

二つの光線が激突をしてタイガトライストリウムの方は押されていた。けどタイガ達は諦めていない!!すると彼女はトライブレードを持ったままダッシュ回転をしてM87光線の中を突破してきたのだ。

「な!!」

流星のゾフィーもまさかM87光線をそう破ってくるとは思ってもしなかったので驚いている。

(ふ、威力を抑えているとは言え、そんな突破方法があったのか……だがM87光線が破られたのは事実だな)

彼はそう言いながら突破をしてきたトライストリウムのトライブレードを真剣白刃取りで掴んだ。

『『え!?』』

「シェア!!」

「うわ!!」

そのまま地面に叩きつけられてタイガは立ちあがろうとしたがウルトラランスが突きつけられておりゾフィーはふと笑いだす。

「勝負ありだな……」

「私達の負けです……」

そのまま光りだして三人のウルトラウーマン達になるとフォームがぶーと頬を膨らませていた。

「野郎!!隊長を殺す気が!!」

タイガ side

殺す?ゾファイ隊長を殺す?.....ふざけるな.....ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「た、タイガ?」

「ふざけるなああああああああああああああああ!!」

私は走りだしてフォトンアースへと変わり、ギャラクトロンのシャフトに攻撃をする。ゾファイ隊長は外れたのを確認をしてゼツト光線を浴びさせてギャラクトロンを退かせる。

あー良かった!ゾファイ隊長、無事だったよ良かったよ良かったよ良かった!あーゾファイ隊長、私はあなたのが好き。殺す奴がいるなら私は母さんと一緒にその敵を壊滅するまで叩きのめす。

さーて今は前にいるあれを倒さないとね?

「タイタス・フーマー!やるわよ!!」

「ああ!!」

「おうよ!!」

私はトライストリウムになるとヒロコがいなくても放たれる私達の最大技を構える。

「くらいなさい!!レインボーストリウムバースト!!」

放たれた連続した斬撃をギャラクトロンへと放ち、隊長が攻撃ができるようにする。

「今です隊長!!」

「ああ!!M87光線!!」

隊長が放ったM87光線がギャラクトロンに命中をして爆散をしたのを確認をして分離をする。すると隊長が膝をついたので私は急いで隊長のところへと行く。

「隊長!!しっかりしてください!!」

「す、すまない.....少しエネルギーを使い過ぎたみたいだ.....」

「なら私が隊長を運びます!!」

「.....すまないが少しだけ頼む」

「はい!!」

私は隊長を乗せる。てか異性を乗せたのは隊長が初めて……………はわわわわわわわわわわわわわわわわ

「しゅ、シュワツチ!!」

「シュワー!」

「デア!!」

私達は光の国へと向かって飛んで行く。あーゾフィー隊長、いい匂いだな……………は!!いけないいけない集中をしていかないかね。

タイガside終了

次にゾフィーが目を覚ましたのはウルトラクリニックであった。

「目を覚ましましたね、ゾフィー」

「マリィさん……………そうか私はギャラクトロンに襲われてトライスクワッドの面々と共に戦って倒したのはいいが……………」

「タイガが涙を流しながら駆け込んできたので驚きましたよ。彼女達には疲れが出ているとだけ伝えておきました」

「すみませんマリィさん、ご迷惑をおかけしまして」

「気にする必要はありませんが……………ゾフィー一人で抱えないでくださいね?」

「……………はい」

一日安静にするようにと言われたゾフィーは残りの仕事をどうしようかと思っていると、あるウルトラ戦士がやってきたので声をかける。

「ウーマンかい?」

扉が開いてウルトラウーマンが入ってきた。

「よくわかったわね」

「まあね、それで報告かい?」

「違うわよ」

「?」

ゾフィーが首をかしげていると、突如として彼女は扉をロックにしてから彼のところへと近づき、抱き付いた。

「!?!」

ゾフィーが子どもになった。(プロローグ&ジャック編)

ウーマン side

うーっ恥ずかしい、つい感情が爆発をしてゾフィーに抱き付くなんて……誰もいなかったからよかったようなもの。……一度落ち着いてから私はゾフィーがいるクリニックへ来たけど……

「なんでウルトラ姉妹全員で行くのよ」

私の後ろにはヒカリ以外のメンバーが集まって、ゾフィーの見舞いへとやってきたのだ。というか、タロウとか暇じゃないのに大丈夫かしら？まあゾフィーのことになると姉妹達……まあ私も含めて何をするのかわからないからね。

「どああああああああああああああ!!」

「ゾフィー!?!」

ゾフィーの声が聞こえて、私たちは走ってゾフィーの病室の扉を開ける。そこにいたのは小さい姿の彼だった。

ウーマン side 終了

「ぞ、ゾフィーなの?」

ウーマン達が彼の姿を見て驚いている中、その本人がもつと驚いているのだ。するとタロウが走っていき、彼を抱きしめる。

「ゾフィー兄さんかわいいいいいいいいいい!!」

「うーっおおおおおおおおお!!」

彼女のウルトラダイナマイトな胸が小さい彼の頭を包んだので、ゾフィーはチョップをするが、タロウは痒いぐらいなのでさらに強く抱きしめている。すると、すーっとジャックが近づいてウルトラブレスレットを変形させたウルトラハリセーンで彼女の頭を叩くと、ゾフィーは解放されてレオが支える。

「大丈夫ですかゾフィー兄さん?」

「ああ助かったよジャック、レオ」

「しかしどうして体が小さくなったんだ？記憶の方は大丈夫なのか？」

「んーあ問題ない。自分がなんで倒れたのかも知っているぐらいにね。まあ原因はそこに倒れている青い博士の作業だ」

ゾフィーが指差した場所には、黒焦げになって倒れているウルトラウーマンヒカリがいた。

「小さくなったせいで威力が落ちてしまったM87光線を受けているからな。黒焦げになっても当然だよ全く」

「ゾフィーお兄ちゃんが小さいですね」

ジャックはゾフィーの頭を撫でていたが、彼は恥ずかしくなっていた。いずれにしても退院をしてもおそらく今の状態では困ってしまうのである。

「ふーむ困ったな・・・家具や執務机等は、今の私の大きさにそろえているから困ることばかりだ」

ゾフィーは両手を組みながら考える。隊長としての仕事なども支障が出てしまうからだ。そして、考えていると、ウーマンが立ちあがる。

「なら私の家で過ごせばいいわ」

「いや待てウーマン、ここは私に任せてくれ」

「いいえお二人とも忙しいのでここは明日から休暇になります私が!!」

「いいえ姉さんたち、ここは私とタロウがやるわよ!!」

「そうそう、父さんや母さんもOK出すよ」

「いいえ、ここは私とアストラの二人で隊長の世話を」

「ここは先生でもある私が」

我も我もと喧嘩をしている中、メビウスがゾフィーに近づいてきた。ゾフィーが声をかけようとしたが突然彼女はぎゅつと抱きしめてきてDカップの胸が当ててきた。

「はー隊長を抱きしめるのは幸せを感じますー」

「そ、そうか？」

ゾフィー自身は驚きながらも顔を赤くしており、メビウスは楽しそ

うに彼を抱きしめていたが、じーっと見つめるほかの姉妹達の目からハイライトが消えていた。

「ワタシタチガケンカヲシテイルナカ、ナーニヲシテイルノカシラネ？」

「アアソノトオリダナ」

「ふふふふふふふふふふふふふふ」

「メビウス、ザンゲキノアメヲウケタイカシラ？」

「ウルトラダイナマイトシヨウカシラ？」

「マダタリナカツタノカシラ？」

「サーテテキストヲドウシヨウカナ？」

「ひい!？」

メビウスは光のない目をした姉たちに恐怖を感じてヒカ리를起こすことにした。

「ヒカリ、起きて!!ヒカリ!!」

「うーん、ゾフィー……?」

「起きたかヒカリ。私の薬の効果はいつまでだ!?今すぐに答えてくれ!!」

「効果?10日よ」

「なん……だと……!?10日もこの体で過ごさないといけないのか!？」

ゾフィーはショックを受けて膝をついた。とりあえず報告をしないと行けないなと思いウーマンが手をつないでゾフィーを連れていく。

「いやウーマン、手をつながなくても大丈夫だぞ？」

「駄目よ、体が小さくなっているのだから迷子になるわよ」

「ま、迷子って……」

そしてウーマンと共に大隊長室へと到着して、扉を開くと、父とベルが話をしていた。しかし、ゾフィーの姿を見てベルが近づく。

「ぞ、ゾフィーなのか!？」

「はいベルさん」

「いったいゾフィーはなぜ小さくなっているのだ。ウーマンよ」

「実は……」

——ウーマン説明中——

ウーマンの説明を聞いて、二人は苦笑いをした後、ゾフィーがこの状態では仕事をするのができないと判断をして有休をとらせることにした。

「それでケン、どうするのかしら？ゾフィーの家とかもあるけど……」

「なら私たちが世話を見るしかあるまい。ウーマン達も彼を見たいようだしな」

こうして小さくなったゾフィーの面倒を見るためにくじ引きがされることになった。そして順番は？

- 1 ジャック
- 2 レオ
- 3 ウーマン
- 4 エイティ
- 5 セブン
- 6 メビウス
- 7 ベリアル

8 タロウ・エースとなる、なおヒカリは犯人のため却下された。

一番に引いたジャックは大喜びで、早速彼を連れて家の方へと連れて帰るのであった。

「さあゾフィーお兄ちゃん、ここが私の家です!!」

「そういえば一人暮らししてるんだっけな」

「はい、そうですよ、とりあえずどうぞー!」

ジャックの家にお邪魔をして、彼が辺りを見ていると写真があった。そこに写っていたのは郷 彩夏としてMAT（怪獣攻撃隊）の仲間たちと団欒していた頃の光景などがあり、ゾフィーはふむふむと見ている。

「あーゾフィー兄さんほら座ってくださいーい」

「はいはい」

ゾフィーは座り、ジャックが作ってくれた手料理と一緒に食べてい

た。

「ふむジャックの手料理は美味いからな」

「あははは、でもお兄ちゃんには負けますけどね?」

二人は談笑していた時、さてとばかりにジャックは彼を連れてどこかへと移動をする。ゾフィーは悪寒が過つたが遅かった。

そうジャックはお風呂場へと連れてきたのだ。

「までジャック!!」

「はい?」

彼女は郷 彩夏の姿になっていた。

「待ってくれ!私は一人でも入れるから!!」

「駄目です!!ほらゾフィー兄さんも人間態になっていつしよに入りますよ!!」

ゾフィーは強制的に人間態にされたが、やはり小さくなっていた。彼女も服を脱いで裸となり、ゾフィーは彼女の全裸の姿を見ないように目を閉じていたが、すぐに彼女が開けさせて彼女の裸をインプットしてしまう。

(ふああああああああああああああああああ!!)

「はいゾフィーお兄ちゃん体を洗いますよー!」

「待ってくれ体は自分で洗えるからお願いだからお兄ちゃんの話聞いてくれええええええええええ!!」

「うわー小さいですぬー!」

「つてはなしをきいてくれてない!!待って、ジャックそんなじーつと見ないでくれ!!」

「これが大きくなつて、えへへへへへへへ」

「ジャック!」

そしてお風呂から上がった後、なんと共に寝ることとなり、ジャックのベットの中でゾフィーは抱き付かれる。

「お休みなさい、ゾフィーお兄ちゃん」

「……………(こ、これが後8日も続くのか……………それにしても綺麗な裸だったな……………じゃないよ……………もう)」

そしてジャックの家に泊まった後、ゾフィーはいつもの癖で4時頃

に目を開ける。

「あ、そうだった……ヒカリのせいで体が小さいままだったな……」

ちらつと横を見るとジャックが抱きしめていたので体を動かすことができなかった。彼女の頭を撫でながらゾフィーは「次はレオだったな……」と思いながら、次の夕方までジャックの家に居ることになる。そこからレオが迎えに来て彼女の家に行くことになるのだ。

朝ごはんを食べた後ゾフィーはジャックと一緒に散歩をすることにした。彼女は嬉しそうに彼の手を引っ張っていたのでゾフィー自身はいつもと逆だなーと思いながら引っ張られていた。

(そうか普段は私が引っ張っているが、小さくなったので彼女達が引っ張ってくれているのだな)

そして彼女とお昼ご飯を食べて、家の方へと帰り、夕方まで家でのんびりしているとインターホンがなった。

「はい、レオいらつしゃーい」

「こんにちはジャック姉さん、ゾフィー兄さんを引き取りに来ました」

「わかってるよ。ゾフィーにいさーん」

「はいはい」

ゾフィーは起き上がりレオがお辞儀をする。

「ではゾフィー兄さんをお預かりします」

レオに預けられたゾフィーは、彼女の手を握り一緒に歩いていくのであった。

ゾフィーが子どもになった。(レオ編)

ジャックの家で世話になったゾフィーは現在レオと手をつないで一緒にレオの家の方へと歩いていった。彼自身はレオの家のことばかり知らないの初めてかもしれないなと思いつながら話しかけた。

「そういえばレオの家はアストラも一緒に暮らしているのか?」

「はい、今日は家に帰ってると思いますから一緒に世話をお願いしますよ」

レオは嬉しそうに言うので、ゾフィーは納得して黙ることにした。

(今度はレオの体を見ることになるんだよな……ってアストラも同じように……はあ……ため息が出てしまいそうだが妹たちが楽しそうにしているのを見るのもお兄ちゃんとしての務めなのだろうか……って今は私が弟のようになっていたか)

ゾフィーがそう思っていると、レオの家の前に到着した。明かりがついているのでアストラがいると彼は判断をして一緒に中へと入る。

「お帰りなさいレオ……姉さん……見そこないましたレオ姉さん!!」

「え?」

「ゾフィー隊長のそっくりさんをさらってくるなんていくら姉さんでも許されるはずがありません!!」

「待ってアストラ!!落ち着いてくれ!!私はゾフィーだ!!」

「さあ僕!!お姉ちゃんと一緒にいようね!!こんな人さらいのそばにいたらいけません!!」

「アアアスウウトオオオラアアアアアアア!!地下ルームへ来なさい、叩きのめしてあげる!!」

「ええ、いいですよ!!」

「って……」

姉妹はそのまま地下室の方へと行ってしまったので、ゾフィーが後を追いかけると、二人は激突していた。

「うおおおおおおおおおおお!!」

彼女達双子の姉妹の激突は続いており、アストラの蹴りをレオは弾

くと彼女は手を掴み投げ飛ばした。

レオはエネルギー光球を放つと、アストラは回避してアストラキックを放つが、レオはクロスガードをして防ぐなどすごい戦闘になっていた。

ゾフィーは、やむを得ず、獅子の姉妹に向けてM87光線を放った。

「えっ？」

「この技は!!」

「きゃああああああああああ!!」

二人は放ったであろうゾフィーを見ると、レオの顔は真っ青になっていく。

「ぞ、ゾフィー兄さん申し訳ございませんでした!!」

レオが謝ったのを見て、アストラは子どもを落ち着いて確認する。よく見ると子どもには不似合いな勲章「スターマーク」があることに気づき、彼女もレオと同じように頭を下げる。

「ご、ごめんなさい!!」

「レオ、アストラ、君達は本当の姉妹だ。だから喧嘩をすることもあるかもしれないが、今回は見ていられないぞ?」

「すみませんでしたああああ!!」

「まあいいさ。さてアストラ、私は真正銘のゾフィー本人さ」

「で、ですがどうして子どもの姿に?」

——ゾフィー説明中——

「なるほどレオ姉さん疑ってすみませんでした」

「いいのよ元々説明をしていなかった私が悪かったし」

「そういえば隊長、報告書なのですが……」

「確認させてくれ」

ゾフィーは小さい体ながらもアストラからもらった書類を見ようと机の方へ移動をしたが……

「……………」

「ふんすーふんす!!」

ぴよんぴよんと飛んでいるが小さいのでレオとアストラが使っている机に座れないのだ。レオはゾフィーを抱えて椅子に座らせる。

「す、すまないレオ……」

「いいえ、今は甘えてください!!」

「あ、はい」

レオの気迫にゾフィーは押されてしまい彼女の報告書をじっくり確認してから返す。

「ありがとうアストラ、やはりあそこは黒だったか……えつとどこにしまったっけ？」

ゾフィーは懐から円谷ツターを出すと、モニターが現れ、セブンと連絡をする。

『どうしたゾフィー？今日はレオのところだろ？』

「ああそうだがセブン、やはり君の思っていた通りだよ。アストラの報告書を見てもジラフ星人は黒だった。明日、タロウとメビウスを連れて逮捕に向かってくれ」

『わかったわ。そういえばお前が来る日はゼロが帰ってくるからな？』

「そうかゼロも帰ってくるのか楽しみだよ。セブンの手料理を期待させてもらう」

『ふふーん、では!!』

そういつて通信を切りレオとアストラの手造り料理を食べてそしていつものお風呂コーナーです。

「やっぱり入らないとダメなのか？」

「はい!!」

「その恥ずかしいですけど頑張ります!!」

「何を頑張る気だ、アストラちゃん!？」

そしてレオとアストラは人間態になったのでゾフィーも人間態へとなりお風呂場に入るが……

「だーかーらー体は洗えるから、なんでジャックもそうだけど君達姉妹も洗わせてくれないのだ!？」

「駄目ですよゾフィー兄さん!!」

「そうです姉さんと一緒に洗いますから!!」

(だからといって密着して君達の全部を見てしまったし大きなものが

当たっているんだあ!!)

ゾフィーは心の中で叫んで双子の姉妹のダブルサンドを受けながら体を洗ったりお風呂に入ったたりして集中するしかなかったのであった。

夜も同じで二人に抱きしめられながら眠る。そしていつも通りの朝4時、ゾフィーは目を覚まして双子が離してくれていたので起き上がり地下室の方へと行き、構えている。

「…………やはり小さくなっているから色々と下がっているな…………」

「朝から元気ですね、ゾフィー兄さん」

「レオ、起きていたのか？」

「ええあなたがいないのでもしかしてと思ひまして、自分が小さくなったから情けないって思っていますか？」

「そう見えるか？」

「ええ大丈夫ですよゾフィー兄さん、あなたは小さくなくても私たちのお兄さんなのは変わりませんから。私達はあなたにまだ恩を返していませんし」

「レオ……………」

「それでは相手をしましょうか？」

「小さくても遠慮はするなよ？」

「もちろんですよ!!」

レオは構えて突撃をしてきた。ゾフィーは小さい体が彼女の蹴りを受け止めようとしたが吹き飛ばされてしまう。

「あ……………」

「やはり小さいから通常のレオの蹴りでさえも吹き飛ばされてしまうか……………」

「す、すみません……………」

「いややれと言ったのは私だからな。やっぱりやめておこう」
「ですね」

二人はそういつてやめてから、朝ごはんを食べて、ゾフィーはゆっくりと休んだ。それから、夕方となりウーマンがやってきた。

「ゾフィーを引き取りに来たわよ？」

「ゾフィー兄さん、ウーマン姉さんが来ましたよ」

「ふああああ、やあウーマン」

「寝ていたの？」

「まあな今日はセブンから報告を受けてアストラが前に調べてくれたところの宇宙人たちを逮捕をすることができた連絡を受けたからね。それで気づいたら寝ていたわけだ」

「そう。さあ行きましょう？」

「じゃあレオ、アストラありがとうな」

「また来てくださいいね！」

「楽しみにしています!!」

こうしてレオとアストラが住んでいる家を後にしてウルトラウーマンの家へと向かうゾフィーだった。

ゾフィーが子どもになった。(ウーマン編)

ゾフィースイデ

レオとアストラの家から今度はウーマンが住んでいる家へとやってきた。彼女の部屋を見ているが、ぬいぐるみなどが置いており彼女らしいなと思いつながら見ているとウーマンがやってきた。

「どうしたのよ？」

「いや君の家には、初めてきたなと思ってな。」

「そうね……でもこうして見ていると小さい時に一緒に遊んだ時のことを思いだすわね」

「遊んだ時のことか？ そうだな……だがまだ君がここまで大きくなかったのにな……」

「本当あつという間ね……」

二人は懐かしそうにしていたが、そろそろご飯を食べる時間なので、ゾフィーは作ろうとしたがウーマンが止めて自分が作るといい座って待つことにした。その間ゾフィーはウーマンが飾っている写真を見ていた。

「あーそれ？ 前にレイカと再会をした時の写真……もうあの子はいないけどね……」

彼女の顔が暗くなったのを見て、ゾフィーは立ちあがり彼女の頭を撫でようとしたが身長差があり撫でることができない。

「やはり小さいと妹の頭を撫でることができないな……」

「ありがとうゾフィー、でも大丈夫よメビウスが言っていたようにあの子は私の中でいつまでも生きてるって」

「だから君はあの子の姿をとっているんだな、ウーマン」

「ええ……そうよ」

二人は昔話に花を咲かせた。ゾフィーは彼女が光の国から地球で戦っているのを聞いたときは「原作のようになったな」と思いつつ無事を祈りながら光の国でいた。それはセブン、ジャック、エース、タロウが地球に着任をした時も、彼は心配をしながらも仕事をしていった。

時にはサポートをしたりして、彼女達の手助けになればと思い、動いたがバードンとの戦いで一度死亡状態になって、蘇生した時は、全員が涙目になっていたので彼は反省をした。

これほどに自分のことを心配をしてくれる人たちがいるのだなど、改めて自分は妹たちに慕われているなど思った(中の人的には愛する人が死んでしまったら嫌だという状態じゃないかな?)

二人でご飯を食べた後は恒例のお風呂タイムである。

「本当に入るのか?」

「あらジャックやレオとアストラとは入ったのに私とは入らないのかしら?」

「.....」

ゾフィーは諦めて一緒に入ることにしたが、彼女の綺麗な裸を見て顔を赤くしており、ウーマンはクスツと笑いながら彼の体を洗うことにした。

「やっぱり小さいわね.....これが大きくなったらどうなるのかしら?」

「コメントは控えさせてもらう」

「.....今のうちに襲ったらいいのかしら?」

「おいこらやめなさい」

ゾフィーは真剣な目で断ると、ウーマンは冗談よといいながら一緒にお風呂に入る。彼女のEカップの胸が生で当たっているのです、彼は更に顔を赤くしながらお風呂から上がったたら、布団の中へ入るとウーマンも一緒に入り一緒に眠ることにした。

ウーマン side

私は眠りから覚めると驚いた。ゾフィーがいなくなっていたので私は急いで家の中を探した。私の前からいなくなってしまうなんていやよ!!もうあんな思いをするのは嫌!!いやいやいやいや!!タロウとウルトラの母と一緒にゾフィーを担いできたのを見て私たちは顔が真っ青になった。母は急いでゾフィーを緊急治療室の方へと運んで行き、私たちはタロウに事情を聞こうとしたけどずっと謝っているだけだった。

それから緊急手術を終えた母にゾフィーに何があったのかを聞いた。

「ゾフィーはバードンと戦いカラータイマーを壊されました。なんとか一命をとりとめましたか……」

「……」

「だからもうあんな思いをしたくない!!」

「ゾフィー!!」

「……おやウーマンどうしたんだい？」

「馬鹿馬鹿馬鹿!!勝手に消えないでよ!!」

「すまない、いつも朝は起きてこうやって自主練をしているんだよ。小さくなくても鍛えるのを忘れてはいけないからね」

「……」

やっぱり変わらないわねゾフィー、あなたは小さい時もそうだったわ。私とセブンと一緒に迷子になったときも先頭に立って私たちを導いてくれたように、今も隊長として長男として導く立場になっても変わらないわ。まあそんなあなたに惹かれて好きになったのよね。

「んーやっぱり体が小さいと慣れないことばかりだな……早く元に戻らないと皆に迷惑をかけてしまうなー」

って撤回をするわ。この仕事馬鹿には休ませることを覚えさせたほうがいいわね。うん……

ウーマン side 終了

それから二人は昔遊んでいたところを周り次のウルトラウーマンが迎えに来た。

「ウーマン姉さん、ゾフィー兄さんを」

「はいはいエイティね、次はほらゾフィー」

「わかっているよ、エイティよろしく頼むよ」

「はい!!」

エイティに連れられてゾフィーは共に歩くのであった。ウーマンはその様子を見ながらやれやれと思うもゾフィーと二人きりはいいわねと思うのであった。

ゾファイーが子どもになった。(エイティ編)

ゾファイーは、エイティの家へとやってきた。彼女の家にはウルトラ中学校、そして、P78星雲ウルトラPの星の怪獣スクールで使用するテキストや問題集などが置いてあり、感心しつつ眺めていると、エイティは恥ずかしくなったのかゾファイーに声をかける。

「あ、あまり見ないでください……恥ずかしいですよ……」
「いやーすまん、流石ウルトラウーマン先生とだけ呼ばれているだけあると思っとな……なあエイティ」

「なんですか?」

「後悔はしていないかい?かつて君は地球で中学校の先生を務めていたのは私も知っていた。だが次々に現れる怪獣たちを倒す為にあの子たちの前から姿を消したことに……」

ゾファイーはエイティがかつてUGM(対怪獣・怪奇現象対応部隊)の隊員と桜ヶ丘中学校の先生を両立をしていたが、次々に現れる怪獣や侵略者と戦う為に矢的 霊は学校の先生を辞めてUGMの隊員として、そして、ウルトラウーマンとして戦う選択をしたことに対してゾファイーはずっと思っていたのだ。

「……確かに途中であの子達をほっておいてしまったのは後悔をしています。ですがあの子達は私が教えてくれたことを覚えていたのが嬉しかったです。」

「確かメビウスが地球を守っていた頃、君がロベルガー二世を追って行った時だね」

「あの子達に逆に教えられましたよ。ふふ、矢的 霊としてあの子達と触れ合った日々を今も忘れたりしていませんよ」

エイティが紅茶を淹れてくれたので、ゾファイーは受け取って飲む。
「うむ美味しいなこれ」

「ありがとうございますゾファイー兄さん」

「……もう慣れたみたいだな、「ゾファイー兄さん」呼びの方は。昔は「ゾファイー隊長」と呼ぶのが癖になっていたからね——」

エイティも少し考えていた。確かに前まではゾファイー隊長と呼ん

でいたけど今は普通にゾフィー兄さんと呼んでいるので自分でも不思議に思っていた。しかし、この人のためなら戦えると思っていたのだなと……ゾフィーは首をかしげているのでエイティはふふと笑いだす。

「どうしたエイティ?」

「いいえウーマン姉さんやセブン姉さんはゾフィー兄さんの小さい時のことを知っていますが、私は初めてゾフィー兄さんの小さい時の姿を見たなと思ひましてね」

「なるほどな……」

ゾフィーはふと思いだす。小さい時のことを知っているのはケンやマリー、ウォーリアンとベルにウーマンやセブンぐらいだろうなと。後はヒカリとメロスだなと思っていたら、やがてエイティの手造りのご飯ができたので一緒に食べながら宇宙警備隊候補たちの指導の話をしている。

「私の授業を受けたい子が増えているって?」

「はい、皆ゾフィー兄さんが一度来た時に受けた時にね?」

「ふむ、なら体が戻った時の日程などを考えてこの日ならいいんじゃないか?」

「なら調整をしておきますね?」

「すまん」

二人はそれからお風呂場へと行くこととなった。ゾフィー自身は考えることを放棄をしていた。どうせ全員と入ることになるからという諦念もある。エイティ自身も一緒に入ることとなり矢的 霊へと変わりゾフィーも人間態となり一緒にお風呂に入る。

「いい湯だなー」

二人は歌いながらお風呂を満喫をしていた。体を洗うときもエイティはぎゅつと抱きしめながらやったのでゾフィー自身は顔を赤くした。

(セブン、メビウス、ベルさん、エースとタロウとも入るんだよな……私は生きていられるのだろうか……)

ゾフィーはそう思いながら、乗り越えることにした。お風呂から上

がった後、エイティは訓練生たちの採点をしていたのを見てゾフィーは手伝うことにした。

「手伝うよエイティ」

「いえいえゾフィー兄さんこれは私の仕事でもありませんから。」

「だが多くないか？」

「そうですね？」

「あまり無理をするなよ？」

「ふふふゾフィー兄さんにそれを言われましてもねー」

「すまん」

お互いに笑いながらエイティは手伝ってもらいゾフィー自身もエイティからももらった答えを見て生徒たちの採点をしていた。

それからエイティと一緒に寝ようとしたが彼女がお願いをしたのは頭をなでなでをしてもらうことらしい、普段エイティはそんなことをお願いはしない。タロウとかは撫でてほしいのか頭を出しているがエイティ自身も本当は頭を撫でてほしかったのである。

現在エイティの頭を撫でながら、ゾフィーは一緒の布団の中へ入り眠ったのを確認し、彼自身も安心して眠りについた。

さてゾフィーが小さくなってから4日が経ったが彼自身に変化はなし。彼自身は本当に戻れるのだろうかと思いつつも次のウルトラウーマンを待っていた。

「待たせたなゾフィー」

「セブン姉さん！ではゾフィー兄さんをお託しいたします」

「ああ任された」

彼女はゾフィーを託されると歩きだした。

「ゼロが帰っているが、お前のことはまだ何にも伝えていないぞ？」

「え？それは問題じゃないか？」

ゾフィーはそう思いながらもセブンと一緒に歩いて彼女が住んでいる家へと向かうのであった。

「ん？じゃあ今誰が宇宙警備隊の指揮をしてるんだ？」

「今は大隊長やベル大隊長補佐に私の代わりをしてもらっているよ。元々隊長だったケンさんだったからね。」

「なるほどな、ベル姐さん達ならやっていけそうだな」

「まあ元に戻ったら私も仕事に復帰をするけどね」

そういう話をしながら、セブンが作ったご飯を食べる。いろんな話で盛り上がり、ご飯を食べ終わった後に、セブンがゾフィーを連れてお風呂の方へと連れて行くのでゼロは声をかける。

「お袋、隊長を連れてどこに…っってお風呂!？」

「ああそうだが？」

「待て待て待て流石にまずいだろ!？」

(おーゼロがとめてくれてる!?!いいぞ!!もつと行ってくれ!!)

「なーにを言っているゼロ、こいつはジャックやウーマン、レオとアストラやエイティと一緒にお風呂に入っているんだぞ?なのに私たちだけ一緒に入らないのは駄目じゃないか？」

「な!?!…お袋、あたしが悪かった。というわけであたしも一緒に入る!!」

「なん…。。。。だと…。。。。!？」

ゼロがあつという間にセブンの味方になったので三人でお風呂場へ移動をする。セブンのお風呂は二人も入れるような広さのためレオと同じぐらいだなと思いつつやっぱり裸を見てしまう。セブンのEカップの胸とゼロのDカップの胸がプルンと揺れている。

「……………はあ……………」

「どうしたゾフィーため息をついて」

「私はいつになったら元に戻れるかなって思ってたね」

「まあいいじゃないかほら入ろうぜゾフィー隊長(笑)」

「待てゼロ引つ張るな!!」

ゼロはゾフィーを連れてお風呂の中に入った。セブンもやれやれといいながら湯船に向かう。

その間もゼロとセブンの親子サンドに挟まれながら体を洗われる。彼女のたちの胸が自身の体に当たっており、自分の分身が大きくなり

そうになっていたのをセブンはじーつと見ている。

「おやゾフィー、何かが私に当たっているが気のせいかな？」

「き、きききききのせいだろな!! うん!!」

「？」

「ふふーん」

セブンはふふと笑いながら彼のあそこを洗っているのでゾフィーは黙っていることにした。やがて体などを洗い三人はお風呂の中へと入る。

「そういえば昔もウーマンやセブンと一緒にこうやって入ったことがあったな」

「そうなのかな？」

「ああそうだ。セブンは今のような感じじゃなくて恥ずかしがり屋だったのを思いだすよ」

「や、やめてくれゾフィー、娘に聞かせることじゃない。」

「聞いてみたいぜ、ゾフィー隊長」

「そうだな」

その間もゾフィーは、「若い頃のセブンは無頼者で『レッドマン』と名乗っていた頃もある」等昔話をして、ゼロはお袋にもそんなことがあったんだなと納得をしている中、セブンは顔を赤くしながら話を聞いている。お風呂から上がりゾフィーは子どもの姿をしている自分を見ていた。色んなポーズをとっておりセブンは聞いていた。

「何をしているんだ？」

「いや今のうちに色んな光線のポーズを、とな」

「そういえばお前はどれだけ技が使えるんだ？」

「えつとスペシウム光線、ウルトラショット、メタリウム光線、ストリウム光線…君達姉妹の技は一通り使えるな。エメリウム光線とかは流石に無理だけどね」

ゾフィーはそういいながら光線のポーズをとっておりゼロはそういえばと考えていた。

「そういえばあたしって隊長と模擬戦をしたことがないんだよな……」

「そういえば私もないね。体が大きくなったらぜひゼロと戦ってみた
いものだな」

「お!!見せてもらいたいぜ宇宙警備隊長の力を!!」

「ここら二人とも今日は遅いからそろそろ寝ようとしよう」

「そうだな」

「ああ」

三人は寝る部屋の方へと移動をしてセブンはゾフィーを抱きしめながら寝るのでゼロもずるいといい親子サンドを再び味わうゾフィーであった。

数時間後、ゾフィーはトイレに行きたくなりテレポーターションで二人の間を抜けることに成功をして、セブンの家の中を探りながらトイレへと到着をして中へと入り、数分後に出てきてスツキリをした。そういえばと左手に装備されているウルトラブレスレットを見ていた。ブレスレットも彼の大きさに合わされて小さくなっていたのに気づいた。

「そういえばこのブレスレットを付け始めたのもウーマン達が地球でヤプールを封印してから付けたんだよな……あいつらがいない分の戦闘力を補う為にお前には随分と世話になったな」

「そうだったんだ」

「セブン、起きていたのか?」

「目を覚ましたらいなくてね。あの時の戦いであんたがブレスレットをつけていたから気になっていただけ……私達が地球でヤプールの封印をしてしまったからなのね」

「ああタロウやレオ、エイティがいるとしてもやはり君達が抜けた穴は大きかったからね。その為に作ったのがこのウルトラブレスレットさ」

「すまないゾフィー」

「気にするなってお前達がヤプールの封印をしてくれていたからなんとかなっていたからな……」

「ふふ変わらないわ……ねえゾフィー?」

「ん?」

「その……いや何でもない」

「変なセブン」

ゾフィーはそう言いながら朝となりゼロが起きてきた。

「あれ？お袋と隊長、何やってるんだ？」

「おはようゼロ、少しだけ昔の話をね」

「えー私も聞きたかった」

「ふふ、いつかは話してやるよ」

そういつて三人は朝ごはんを食べた後、セブンはその日は仕事があるのでゼロに任せて仕事場へと向かう。

「さて夕方にはメビウスが迎えに来るはずだ」

「そうかメビウスの日か、そういえばジードも来ているぜ」

「ジードも来ていたのか知らなかったな、つてことはベルさんの家にいるんだな。それでゼロ、どれほどしたら帰る？」

「えっと3日ぐらい滞在をする予定だぜ？」

「つてことはベルさんの家に行く日にはジードはいるつてことだな？」

ゾフィーはそう考えてからゼロと話をしていると夕方となりメビウスがセブンの家にやってきた。

「ゾフィー兄さんお迎えに来ましたよー」

「それじゃあな、ゼロ」

「おう隊長、またな」

ゼロは見送りをしてからメビウスと一緒に彼女が住んでいる家の方へと向かうのであった。

ゾフィーが子どもになった。(メビウス編)

メビウスに連れられてゾフィーは一緒に歩いていた。彼女は嬉しそうに彼の手を引つ張り鼻歌を歌っている。

「随分と嬉しそうだねメビウス」

「はい!! 小さい時のゾフィー兄さんといれるなんて夢を見ているじゃないかって思いました・・・あ、すみません」

「いや気にしないでいいよメビウス、君はウルトラ兄妹に入っただいぶ経っているけどまだ慣れないかい?」

「あははわかりますか? そうですね・・・ウルトラ兄妹に入れたことは嬉しかったです、逆にプレッシャーにもなっています。私のような戦士がゾフィー兄さんと同じウルトラ兄妹になってもいいのかって考えてしまっただけ・・・」

「だがなメビウス、お前はあのエンペラ星人を倒したのは事実だ。それは私も大隊長も認めているからこそウルトラ兄妹に入れたんだ」

「ゾフィー兄さん・・・」

「共に戦った私だからこそ分かる。メビウス、お前は本当に強くなった」

「ありがとうございます!!」

メビウスの家に到着をして彼女の家の中を見ていた。壁には地球で撮ったであろう写真があり、模型になるがガンフェニックスストライカーやフェニックスネストがあるのでゾフィー自身はそれをじーつと見ていた。

「ふむ精密にできているじゃないかこれ」

「そうですか?」

「ああメビウスが初めてじゃないかな? 地球を守っている時にばれたのは・・・」

「そうですね・・・」

「だがそれがあったからこそ君達の絆は強くなったと私は思う。」

「はい!!」

それからメビウスが作ったカレーライスを食べた後、恒例のお風呂

タイムとなり、ゾファイはメビウスの全裸を見てしまうのである。

「ふふふふふふふふふふふふふふ」

「いやメビウス、私の裸を見ながら笑わないでくれ」

「いいじゃないですか、こういうのはないんですから」

「当たり前だ」

そしてメビウスに体を洗ってもらっている時も彼女は顔を赤くしながら洗っていたのでゾファイは大丈夫なのだろうかと思いつながらウルトラ姉妹達のことを考えながらお風呂に入る。

「いやーお風呂ってどうしてこんなにも体の疲れがとれるのでしょうか？」

「さあ？だがメビウスが言っていることは本当だよ。うーうーん」

ゾファイは小さい体を伸ばして疲れを取っているとメビウスも同じようにしたが彼女の胸がプルンと動いたのでゾファイは顔を赤くして横を向いた。

「どうしましたゾファイ兄さん♪」

「……別に」

メビウスがわざとやったのかわからないが笑っているのを見て、少しムキになってしまいが、彼女の真意は不明なのであまり怒ったりすることができない。やれやれと思いつながらゾファイは彼女と共にお風呂から上がり、彼女から地球での話などを聞いた。彼女は本当に地球が好きなこと、カレーライスを気に入ったこと等話を聞きながらゾファイはコーヒーを飲んでいた。

「にがいな」

「子どもの姿になったのですから、舌も子どもになっているのでは？」
「おそらくな」

ゾファイは仕方がないとミルクなどを入れて甘くするしかなかったのであった。そのあとベットの中へと入りゾファイは目を閉じた。メビウスは眠っているゾファイを見ており何かを決意をする。

「ゾファイ兄さん、ずっと異性としてみていました大好きです」

そのまま彼の頬にキスをしてから自分も眠りについたがゾファイは実は寝ていたなかったのだ。

ゾフィーが子どもになった。(ベリアル編)

ベルside

「さて準備は色々整ったわね」

私はジードにゾフィーを迎えに行かせて夕ご飯の準備をしていた。今でも思いだすのはゾフィーの親代わりになったときのことだ。あの子は昔から大人のようにしていたのを思いだす。

自分の父が亡くなったのに泣いていたのはそれぐらいで後は普通に過ごしていたのを覚えている。本当は私が最後まで育てないといけないのに……私は悪の自分に負けて……悪のウルトラマンとして戦った。封印された後、ザラブ星人(NRB)がギガバトルナイザーを使い、復活させて私は……ゾフィーをこの手で……!!

「私じゃない……私じゃない!!」

「ただいまってお母さん!?!」

「!!」

私はジードの声が聞こえて正気に戻りゾフィーが来たので迎え入れる。あーあの時のままだ……

「……」

「あのお母さん?」

「ジード悪いけど、先に中に入ってお風呂の準備をしておいてくれな
いかしら?」

「あ、うんわかった」

ジードにお風呂をお願いをして私は小さくなったゾフィーに近づいていく。

「ベルさん……」

「……」

私は無言でゾフィーを抱きしめた。

ベルside終了

「ベルさん……」

「ごめんね……ごめんねゾフィー……」

ベルは涙を流しながら彼に謝っていた。彼自身もなぜ彼女が謝っているのかわかっているので声をかける。

「ベルさんのせいじゃありませんよ」

「いいえ私よ。あの時もう一人の私に負けていなかったらあなたやほかの姉妹達、ケンやマリ―を傷つけることはなかった!!私なんていなかったらよかったのに……」

「そんなこと言わないでください!!私はあるあなたがこうしてウルトラウーマンとして帰ってきただけでもうれしかったんですよ!!」

「ぞ、ゾフィー……」

「ゼロがあなたをアナザースペースで滅したと報告を受けた時、私はあなたがいなくなってしまうと思いました。ですがあなたはプラズマスパークコアのエネルギーで復活をして、こうして一緒に戦ってくれています。私は嬉しかったんです。あなたがこうして戻ってきてくれたのが……」

「ううううううううゾフィーありがとう……ありがとう……」
ベルは彼をさらに抱きしめていた。その様子を娘のウルトラウーマンジードは涙を流しながら見ていた。

「お母さん良かったよおおおおおおおおお!!」

ゾフィーもジードもベルが戻ってきてくれたので本当に良かったと思っている。さてその後、ゾフィーはジード達と一緒にベルの手造りの料理を食べていた。

「変わりませんねベルさん、私が小さい時に食べたのと変わらないです」

「ありがとう、ゾフィー」

「お母さん、お代わり!!」

「はいはい」

ベルはジードの茶碗にご飯を入れて渡すと、彼女は元気よく食べるのを見て笑顔になっている。そして、ゾフィーはふふと笑っている。

「ベルさんも娘ができて幸せですね」

「本当ね、あなたやジード、それにケンたちとまたこうして仕事ができるだけ嬉しいわよ……そういえばゾフィー、あの子は何をし

てる？」

「トレギアのことですか？今は私の秘書として動いています」

ウルトラウーマントレギア：タロウの親友であり合体戦士ウルトラウーマンレイガによって倒されていたはずだったが、ベリアル同様プラスマスパークコアの力により復活し、現在はゾフィーが秘書として登用している。彼女の天才的な頭脳はゾフィーを支えているのだ。彼はふと連絡をすると、トレギアが出てくる。

『これは隊長、随分とかわいい姿になっておられますね？』

「すまないトレギア、タロウとはまだ？」

『そ、それは……』

「まだ君のことは公表をしていないからね。いつかはタロウと……」

『はい……』

「さて何か変わったことなどはあったかい？」

『いいえ今のところは何も異常などはありませんが……』

「どうしたんだ？」

『いいえまだ確定をしていないことなので報告をしていなかったのですが……』

「わかった。元に戻ったらその話を聞くとしよう」

『すみません、役に立てなくて』

「トレギア、君が努力をしてきたのは私も知っている。闇にとらわれた君がこうしてまた光を取り戻しただけでも良かったさ」

『ゾフィー隊長……』

「ヒカリも君が帰ってきてくれたこと喜んでいたのでからね」

『ヒカリ長官は知っていたのですか……私が隊長の秘書をしているのを』

「ああすぐにわかったよ。『なぜ私にトレギアが戻ってきたことを言ってくれなかった』と怒られてしまったよ。彼女もかなり心配をしていたからね。今度会わせよう」

『はい。では』

そういつてトレギアと通信を切りふうーと一息をついた。ベルはそんな様子を見て呆れていた。

「お前さー、せつかく休みをもらっているのに、なーに仕事の話をしているのさ」

「す、すみません」

「ほら罰として一緒にお風呂に入るぞ」

「え!?!」

ゾフィーを連れてベリアルとジードも人間態へとなり全裸へとなった。

「なーに赤くしてるんだ。昔は一緒に入っただろうに」

「今は違います!!」

ジードも朝倉 リカの姿に変わり、Cカップの胸をさらけ出し、ゾフィー自身は顔を真っ赤にした。

「二あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「まさか光の国でお風呂に入れるなんて思わなかったよ」

「これもウーマン達のおかげだよ。彼女達がお風呂の素晴らしいことを教えてくれたからこうやってお風呂に入れるんだよね」

「体の疲れもとれるしいい湯だー！ー！ー！ー！」

三人はお風呂を満喫してから元の戦士の姿へと戻る。ゾフィーはいつになつたら元に戻るのかと心配をしているがベルはふふと笑う。

「いいじゃないかゾフィー、お前さんの小さい姿を見れるのもあいつらにとつてもいい気分じゃないか?」

「そうですね?」

「ああそだよ。ウーマンとセブン、それに私やケンたちぐらいしか小さい時のお前を知らない。ジャック達にとつてもいい経験だと思っよう?」

「まあそうですね」

それからベリアルとジードの模擬戦をゾフィーは見ることにした。家の地下室で二人は構えている。

「遠慮はいらないわよジード」

「行きます母さん!!はああああああああああ!!」

ジードが接近をして彼女にパンチを放つがベリアルは冷静に彼女

が放つ拳を受け流していく。ジードは姿を変えてセブンとレオの力が入った姿へと変わる。

【ウルトラマンジード！ソリッドバーニング！】

髪の色が赤くなりツインテールへと変わったソリッドバーニング形態となり、頭部のジードスラッガーを投げつける。

「おっとやるじゃない！だったら、ギガバトルナイザー!!」

「え!？」

その手にギガバトルナイザーが現れたのでジードとゾフィーは驚いている。ベルはジードスラッガーをはじめさせるとベリアルショットを放つ。彼女は後ろの方へと退がり、青い髪をポニーテールにしたアクロスマツシヤーへと変わる。

【スマツシユビームブレード!!】

ベリアルショットを斬り、接近して斬りかかるがギガバトルナイザーで受け止める。

「やるじゃないジード!!」

「お母さんもそのギガバトルナイザーはいつたい!？」

「レイブラット星人の力は残っているからその力で再構成を試みたのよ。まあ怪獣はゼロだけど」

ガキンとはじかせて姿が変わる。

【ウルトラマンジードマグニフィセント!】

銀色の髪の一部がツインテールへと変わりウルトラホーンのようなものが装着されたマグニフィセントへと変わる。

彼女はギガバトルナイザーで攻撃をしたがそれを左手で受け止めて右手でパンチを繰り出してベルは後ろの方へと退がる。

「さーて今日はここまでね、ゾフィーがすぐく退屈そうにしているから」

「あーいえそういうわけじゃ!!」

そういつて二人は戦闘態勢を解除をしてシャワーを浴びる為に、二人は去っていく。ゾフィーはジードの戦闘力やベルの力を見ていた。(元々ベルさん自体は戦うのはあまり好きじゃなかったからな。悪の方の影響もあり戦っていたけど、今回の戦い、あれはかつての悪のベ

リアルのようにしていたな：そうか元々二つの魂は一つだったから戦いの記憶が残っているんだ。そしてジードはウルトラカプセルを使って様々な姿に変わることが出来るからね。タイプチェンジといえばティガ達にもあるが………光の国でタイプチェンジをすると言ったらメビウスかゼロぐらいだからな)

ゾフィーは二人がシャワーを浴びて帰ってきてから一緒に布団に寝ることになった。ゾフィー自身もベルと寝るのは彼女が追放されて以来だ。

そして次の日ベルは仕事のため宇宙警備隊へと出向をしてケンがいる部屋へとやってくる。

「おはようベル」

「ええおはようケン」

「嬉しそうだねベル、やはりゾフィーと久々に一緒にいられたのが嬉しかったみたいだね」

「当たり前よ。もう二度とできないと思ったぐらいだから………」

「ああそうだな」

「そういえば今日はあんたのところだったわね」

「ああエースとタロウが迎えに行くはずだからな」

そして、あつという間に、夕方となりベルの家にエースとタロウがやってきた。

「ゾフィーにいさああああん!!」

「ぐおおおおおおお!!」

「こらタロウ!!」

エースはすぐにタロウをゾフィーから離させて自分の方へと抱きしめる。彼女のDカップの胸に当たっていた。

現在エースはポニーテールを下ろしている。そして、ジードもやってきた。

「エースさんにタロウさん、もしかしてゾフィーさんを迎えに?」

「そそやっとなら私たちの出番だからだよおおおおお!!」

「タロウがくじ引きで最後を引くからでしょうが」

エースは呆れながら三人で手をつないで四人で過ごしている家の

方へと向かう。

「なんか懐かしいなーゾーゾーファイー兄さんと手をつないで歩くのって」

「ええ懐かしいわね。今は逆なんだけどね？」

「そうだな」

三人は懐かしそうに歩いて向かうのであった。

ゾフィーが子どもになった。(エース、タロウ編)

ゾフィースide

エースとタロウに連れられて私は彼女達が住んでいる家の方へと歩いている。ケンさんとマリーさんと一緒に過ごすのは、幼少期以来だと思いつつ家に到着をして中へ入るとマリーさんが出迎えてくれた。

「あらゾフィー、本当に懐かしいわね」

「どうもですマリーさん、ヒカリのせいでこんなことになるとは……」

「私にとつてはあなたが中々休んでくれないことに怒りを感じていますけどね?」

「す、すみません」

こればかりは、マリーさんに謝るしかない。そして、エースとタロウがマリーさんの手伝いをしている中、私は昔のことを思いだしていた。あれは宇宙警備隊隊員になる前のことだ。

当時タロウとエースがまだ小さい時に私は何度か御守りをするこ
とがあつたんだ。彼女達は私を本当の兄のように接していたのを思
いだすよ。

「ゾフィーにいさーん!!」

「タロウは甘えん坊だなー」

「ゾフィー兄さんだからするんだよー」

「こらタロウ!!お風呂に入るわよ!!お母さんが先に入ってしまったって
さ」

「ならゾフィー兄さんも一緒だね!!」

「え?」

タロウの言葉を聞いて私はそのまま連れ去られてしまいお風呂場
へと到着した。二人は人間態となりそのまま脱いだのでGカップの
胸とDカップの胸が露わになり、これでウルトラ姉妹達の全裸を見て
しまったことになる。おうふ……。

「それじゃあゾフィー兄さん、体を洗いますね?」

「あ、はい」

もうウルトラ姉妹全員に現れたのももう気にする必要なんてない!! と思った私がいるよ。タロウ、その大きな胸が私の背中にダイレクトに当たっているし、エースもなんで何も隠そうとしないの? 見えてくるよ。と思つたら、チエンジをしてタロウのウルトラダイナマイトな胸がブルンと揺れていて……だから思つたよ。なんで誰も隠そうとしないのかと……お兄ちゃん悲しいよ!?

それから三人でお風呂につかっているが……二人はじーつと私の方を見ていたがどうしたんだろう?

「ゾフィー兄さん、その……」
「ん?」

「あのねゾフィー兄さん、私はずーつとあの時のゾフィー兄さんの選択が間違っているのか悩んでいたの」

「バードンとの戦いの時か」

「そう、あの時ゾフィー兄さんは撃てと言つた。私は戸惑つたよ?」

「……カラータイマーを破壊されていたからな、それにあいつの素早さなどを考えたらあれしか方法がなかったんだ。お前には辛い思いをさせてしまったなタロウ」

「……ううん、元を言えば私が負傷をしなかったらゾフィー兄さんが……ごめんなさい」

「いや終わったことだから気にするなってエースはどうしたんだ?」

「え、いや私もゾフィー兄さんには迷惑をかけてばかりだなって、ゴルゴダ星でヤプールの罠にかかったときに、兄さん、ビンタをしてくれたよね?」

「そんなこともあったな。(『お前が守らなければどうする!! TACや地球人を守るのはお前だけだ』)」

「うん。あの言葉を聞いて私は立ちあがれたんだよね、兄さんたちのエネルギーをもらつて」

「ああ……奴らがエースキラート名乗つたあれを作つたせい……すまないエース」

「ううんヤプールが悪いんだから」

こうして三人でお風呂から上がった後、一緒のベットのの中へと入り私は二人が眠ったのを確認をしてから起き上がり頭を撫でると、マリーさんとケンさんがリビングにいた。

「マリーさん、例のものはできていますか？」

「ええできていますよ。解毒剤です。ヒカリに協力をしてもらい完成をしました。」

彼女からもらった私は、飲もうとしたがケンさんが止める。

「それを飲むのは待つてくれないかゾフィー？明日は全員で写真を撮ろうと思つてね」

「写真ですか？」

「ああ、せっかくだからな」

「ケンさんが言うのでしたら明日までこの姿でいます」

こうして私は明日までこの姿でいることとなった。次の、日宇宙警備隊本部へと連れられて、ウルトラ兄妹にゼロ、ジード、いなかったトライスクワッドのメンバーがいた。

「た、隊長が小さくなつてる!?!じいちゃん、ばあちゃんどういふこと!?!」

「すまないタイガ、お前達は修行をしていたからな」

「ヒカリの薬で体が小さくされたんだよ。色々と大変だったけどな……それで今日私は元の姿になる前に皆で写真を撮ろうといふことになつたんだ」

「我々もいいのですか？」

「構わないよ」

そして全員で写真が撮られて私は開発された薬を飲んで元の宇宙警備隊長ゾフィーに戻る。

「……あー残念!!」

「ええええええええええええええええええええええええ!!」

なぜだ!?!元の姿に戻つたのにひどすぎる!!なんで全員残念そうにしているのかね!?!

「だつてさーお風呂に一緒に入れないのがなーって」

「そこなのか!?!」

「だってあの時のゾフィーお兄ちゃん可愛かったですし」

「もつと見ていたかったというのは本音ですね」

「ジャックとレオ!? ころ、ヒカリ! なーにまた出そうとしているのだ!! もう嫌だからな!!」

「はあ．．．．．せつかく元に戻ったのに!!」

「冗談だゾフィー、やはりお前は私たちの一番上のお兄さんだよ」

「セブン．．．．．」

「ですね、やはりあの可愛いゾフィー兄さんもいいですが私は今の兄さんがいいです」

「エース．．．．．」

「いやーやっぱり元の姿のほうがいいみたいなのでこうして私の子どもになる事件は幕を閉めた。とりあえずタロウ達には紹介をしておかないとな。」

秘書の紹介

ゾフィースィド

マリーさんの薬のおかげで元の体に戻ることができた。私はせつかくウルトラ姉妹達がそろっているので秘書を紹介しようと思っ
て彼女には待機をしてもらっている。

「さて今日は私の優秀な秘書を紹介をするよ」

「あらゾフィー、いつのまに秘書を雇ったのよ」

「私だってできないことがあるから頼んだだけだよ。さあ入っ
ておいで」

扉が開いて青いウルトラウーマンが入ってきたのを見て全員が驚
いている。ベルさんや大隊長やマリー隊長は知っているので黙っ
ていらっている。

特にタロウやタイガ達は目を見開いているね。なにせ彼女は。

「と、とれ．．．ぎあ．．．」

「．．．．．」

タロウの親友であり、ジードやゼロも戦ったことがあるウルトラ
ウーマントレギアがそこには立っている。ほかの姉妹達も私の方を
見ていたので説明をすることにした。

「正真正銘彼女はトレギアで間違いないよ。かつて邪神魔獣グリムド
となりウルトラウーマンレイガのレイガ・アルティメットブラスター
で消滅をした、ね。」

「私見たもん。あの時の戦いを．．．」

「トレギア．．．」

「．．．．．気づいたら私はプラズマスパークコアの近くで倒れてい
たわ。そしてゾフィー隊長や大隊長、マリー隊長にベルさんが色々
話をしてくれてあなたたちにばれないように隊長の秘書として務め
ていたの。ヒカリ長官にも黙っておいてほしいと言ったのは私なん
です」

「．．．．．私のせいなんだな」

「えっ？」

「あの時、惑星アープが滅ぼされたときにお前は来ていたな。そして復讐の鎧を纏った私がお前に斬りかかったからな。お前が光の国を出ていくのは当たり前だ。すまなかった……」

「ヒカリ長官……」

あの時もそうだったな、トレギアが生きていることを知ったのは偶然だった。彼女は入ってきた後、私の胸ぐらをいきなりつかんできたのを思いだす。

「なぜ……なぜトレギアが生きているのを話してくれなかった!!私にどれだけ心配をしたと思っっているのをお前は知っていただろうが!!」

「ま、待ってくれヒカリ、私の話を聞いてくれ……」

「す、すまん」

「ゲホゲホ実はトレギアから頼まれていたんだ。」

「彼女が?」

「そうだ。今の自分に長官には会う資格などないってね。」

「あいつ……」

ヒカリに話をして彼女と再会を先にさせてから今に至る。今現在、私は姉妹達から総攻撃を受けていた。いや、口撃だけど……。「全くあんたって人は、こういうのは私達にも言う必要があるでしょうが!!」

「全くだ。まさか私たちにさえも黙っているなんて思わなかったさ」

「すまん、ウーマンとセブン」

「ゾフィーお兄ちゃん、私たちってそんなに頼りにないの?」

「私、悲しいよ」

「違うんだジャック、エース!これはタロウにサプライズって奴でやったことだから、お前達に黙っているのはお兄ちゃんも心苦しかったんだぞ!!」

「ゾフィー兄さん、覚悟はいい?」

「待てタロウ、黙っていたのは悪かった。だからウルトラダイナマイトは止めなさい!!」

やっぱり黙っていたのはまずかったな、ほかの姉妹達の視線が鋭く

ゾフィー暗殺計画

宇宙警備隊隊長にしてウルトラ兄妹の長男ゾフィーは、現在ナッツ星 α 、ナッツ星 β 付近を飛んでいた。かつてアンドロメロスが指揮をするアンドロ警備隊がグア軍団の軍団長ジュダが率いるファイティングベムのダクミラン及びマグマ星人三人衆と激闘を繰り広げた場所である。

ゾフィーは引き続いて他の宙域へパトロールを続けるため移動をしようとしたが、後ろから光線を受けてナッツ星 α に墜落してしまう。

「がは!!」

「ふん！宇宙警備隊隊長も大したことないな!!」

「何者だ!？」

着地をした宇宙人を見てゾフィーは驚いた。

「お前はテンペラー星人、貴様の目的は私か……」

「如何にも!!貴様の命はこのわしがいたたく!!くらえ!!」

テンペラー星人の手からロケット弾が放たれる。ゾフィーは回避して構え直す。ゾフィーは接近して、テンペラー星人のボディにゾフィーパンチをお見舞いする。

「へア！ダア！」

「ふん、甘いわ!!」

腕を振りまわしてゾフィーを殴り飛ばすと、両手を合わせてウルトラ兄妹必殺光線を放つ。それに気づいたゾフィーは、横に躲して、ウルトラスラッシュをテンペラー星人に二連続放つも、電撃の鞭エレクトロシヨックでウルトラスラッシュを破壊する。そして、ゾフィーは立ちあがり構え直した。

「ストリウム光線!!」

タロウの必殺技ストリウム光線は、テンペラー星人に命中するがまるで効いている様子はなかった。

「ふんそんな光線、痛くも痒くもないわ!!」

（なんて奴だ、今までのテンペラー星人とは違う。だが私は負けるわ

けにはいかない!!私は宇宙警備隊長ゾフィー!!宇宙の平和を守るウルトラ戦士だ!!」

不滅の闘魂で立ちあがったゾフィーは、テンペラー星人の火炎放射をものともせず逆に気合で吹き飛ばして、Z光線を放ちテンペラー星人を痺れさせる。

「ぐううううう!!」

テンペラー星人の右手を掴んで、左手のブレスレットにエネルギーを溜めたチョップで右手を斬り裂いた。

「ぐあああああああ!!」

そして、左手もつかんでブレスレットチョップで斬り裂いた。

「お、おのれええええええええええ!!」

「これで終わらせようテンペラー星人!!M87光線!!」

右手にエネルギーをためて前方に向けたM87光線(A)を放つと、テンペラー星人に命中をして爆散した。なんとかテンペラー星人を倒したゾフィーだったが、胸のカラータイマーは赤く点滅をしており、かなりのエネルギーを消耗したとわかる。

「あのテンペラー星人、かなりの強敵だったな……奴の両手を使用不能にしないと勝てないほどに……」

「ふっふっふっふっはっはっはっはっはっは!!」

「だ、誰だ!?!」

ゾフィーは構えたが、突如として体に何かが巻かれていき、地面に倒れてしまう。彼は力を込めようとしたが体に巻き付かれたものはビクともせず彼の体に巻き付いている。

「無駄だゾフィー!!エネルギーを消耗した貴様にこれを壊すことなど不可能だ!!」

「テンペラーめ、大口を叩いていたが……まあゾフィーのエネルギーを消耗させてくれただけのこととはあったな」

「ナツクル星人!ガッツ星人!ザラブ星人!そうか貴様達もテンペラー星人の仲間ということか!!」

「その通りですよ。さてまずはあなたにやられた恨みをここで晴らすとしましょう!!」

宇宙人たちは動けないゾフィーに光線などで攻撃をしてダメージを与えていく。彼自身は鍛えているため彼らの攻撃などは耐えているが、ウルトラサインを出せない状態のため援軍は期待はできない。「くそ!!こいつ、さつきから余裕で俺達の攻撃を受けているぞ!!」「これでも体は鍛えている。あのテンペラー星人を捨て駒にしたのは失敗だったな」

「おのれ!!こうなったらこいつのエネルギーを全て吸い取ってやる!!」

(あ、それはさすがにまずい……………)

エネルギーを吸い取られたら、死んでしまう。なんとか逃れようとしたが、ナツクル星人達はエネルギー吸収装置をセットして彼のエネルギーを奪おうとしていた。ガッツ星人がスイッチを押そうとしたときに装置が爆発をして三人の宇宙人は吹き飛ばされる。

「ガッツン!!手抜きにもほどがありますよ!!」

「私がそんなことをすると思っているのか!!」

「なら一体誰が!!「オイ」なんだ…って…………?」

ザラブ星人が震えているのを見て、不審に思ったガッツ星人とナツクル星人は声をかけようとしたが二人も同じように震え上がった。前を向くと目に光がないウルトラ姉妹達が腕をゴキゴキと言わせながら三人の宇宙人たちを見ていたからである。

「サーテ、オマエたち……………ゾフィーヲネラツタツテコトハシヌカクゴハデキテイルツテコトダナ?」

セブンはアイストラッガーを抜いて構えている。ジャックはウルトラランスを構える。

「フフフフフフフフ、ウルトラランスノチマツリニナルノハアナタカナ?カナ?トクニ、ナツクルセイジン、オマエたちノイチゾクハ、ワタシノタイセツナヒトヲイチドナラズニドマデモ…………!」

「ドウヤラセツダンワザデ、ソノカラダヲキリキザンデホシイヨウダナ?」

「エースオネエチャン、ワタシノエモノヲコロサナイデヨ?」

「ウチユウケンポウヲウケテモラオウカシラ?」

ゾフィーとニュージエネレーション

ここは宇宙警備隊本部、ゾフィーはブラザーズマントを纏い、到着する戦士たちを待っていると二人の戦士が着陸した。

頭部と腕部、胸部などにクリスタルがあるウルトラウーマンギンガ、そして、頭部とカラータイマーがVの形で黒いボディのウルトラウーマンビクトリーが到着をした。なお二人の胸の大きさはEカップと大きめである。

「待っていたよギンガ、ビクトリー、どうやら君達が一番のようだな」
「久しぶりですゾフィー。あなたとタロウの力が入ったギンガストリウムのおかげで私達はダークルギエルに勝つことができた」

「感謝をする」

「気にする必要はないよ。タロウが君達と共に戦いたいと言ったからね。兄妹たちの力の一部を渡したのだ。それが君達の力となってくれたなら安心だよ」

ゾフィーが笑顔で答えると、二人は顔を赤くしてぽーっとしていく。そんな矢先、二人のウルトラウーマンが到着をした。

胸部がX状に輝き、側頭部がヘッドホンのようになっていくウルトラウーマンエックス、そして、胸部にOを象ったカラータイマーがついており右手にオーブカリバーを持った戦士ウルトラウーマンオーブが到着をした。

なおギンガの髪は水色のセミロング、ビクトリーは黒のセミロング、エックスは銀色のポニーテールである。オーブは白い髪のセミロングの状態で、スペシウムゼペリオンでは銀色、バーンマイトでは赤のショート、ハリケーンスラッシュは青い髪にツインテール、エメリウムスラッガーはそれが銀色のツインテールになり、サンダーブレスターは赤い髪のセミロング、ライトニングアタッカーでは水色のポニーテールになる。

「やあエックス、オーブ」

「お久しぶりですゾフィーさん」

「お招きいただきありがとうございます」

「君達ニュージェネレーションが動いているおかげで、デビルスプリンターの調査の方も進んでいるからね。後は……」

すると赤い猫耳のような赤い髪をツインテールにしたウルトラウーマンロツソと水色のセミロングのウルトラウーマンブルが地面を引きずりながら、ゾフィーと激突して彼は吹き飛ばされる。

「がは!!」

「いててて……もう!!カツねえ、当たらないでよ!!」

「それはこっちの台詞よイサ!!あんたがぶつかったせいで!!」

「おーい二人とも、前!前!」

「え?」

オーブが指をさした方角を見ると、ゾフィーが吹き飛ばされていたので、二人は顔が真っ青になりすぐにゾフィーの前行き土下座をする。

「すみませんでしたああああああああああ!!」

「あーいや若いっていいね……いたたたた……まあ君達も本当の姉妹だから喧嘩するのは当たり前だけど仲良くね?」

「はい」

「さてニュージェネレーションの皆の報告を聞かせてもらってもいいかな?」

「私とビクトリーはデビルスプリンターで暴れていたガンダーとベムスターと交戦をして撃破しました。」

「やはりデビルスプリンターの影響が出ているせいか……」

「私とオーブの方も同じですね。ザナディウム光線を受けてもスパークドールズにはならないで襲い掛かってきました」

「ふむそうか……」

「私たちもそうだよ、カツねえ」

「ええ合体して、ループで倒したんですよ」

「そうか、やはりデビルスプリンターの影響で怪獣たちは次々に暴走状態になっているということか、皆、ご苦労さまだね。ジードも現在光の国に来ているよ」

「本当ですか!?!」

「ああ、私も体が小さくなってしまっていて、しばらくは指揮をとって
いなかったんだよ」

「ゾフィーさん、体が小さくなっていたのですか？」

「ああオーブ、いずれにしても君達も疲れているからね。今日は私が
手料理を奮うことにしよう」

ゾフィーの言葉にニュージエネレーション達は目を光らせて食堂
で待機した。ちなみに彼女達が人間態の時の名前は礼堂 ヒカリ、
シヨウコ、大空 ダイヤ、クレナイ・カヤ、湊 カツユ、湊 イサナ
になっている。

現在彼女達はウルトラウーマンの姿のままゾフィーの手造り料理
を待っているとタロウとメビウスが入ってきた。

「あれ？ギンガじゃない」

「タロウ!!久しぶり!!」

「ええ、皆も何を待っているの?」

「ゾフィーさんが手料理を振る舞ってくれるってことで待っているん
です。」

「え!?!ゾフィー兄さんの手造り料理だって!?!ずるいよ!!」

「ん?タロウにメビウスか?」

「ゾフィー兄さん!!ギンガたちだけずるいよおおおおお!!」

「わかったわかった。すぐにお前達の分も作るから待ってくれ」

「すみません、私まで」

「気にしない気にしない」

ゾフィーは台所へと戻り、タロウとメビウスの分の手料理を作って
彼女達の元へと運んでいき、手を合わせて皆が食べていく。

「」「」「美味い!!」「」「」

「喜んでくれて、作ったかいがあったよ。」

彼は皆が喜んでくれてるのでホッとしているが、デビルスプリン
ターの影響は怪獣だけじゃなく、宇宙人にもその効力が及んでいるこ
とに不安を感じていた。

(今のところはニュージエネレーションの皆でも対処することが可能
だ。だがデビルスプリンターの影響がこれ以上大きくなるのは阻止

をしたいところだ。今はグレートやパワーたちにも出動をしてもらっているが、いずれにしてもデビルプリンターの数を一つずつ減らしていくしかない)

ゾフィーはデビルスプリンターのことを考えているとメビウスが近づいた。彼女は彼が先ほどから何かを考えて動かないので心配となり顔を覗いた。

「メビウスか……」

「何かお考えですか？」

「まあね。」

彼はそのまま隊長室の方へと戻ってから彼女達を呼ぶことにした。

ゾフィーと彼女達

ゾフィースィド

隊長室で、私はあるウルトラウーマン達を待っていると、彼女達がやってきてくれた。

「やあすまないね、君達を呼んでしまっただけ」

「気にするなっただけゾフィー」

「ああこうしてまたお前の下で戦えるからね」

私の前に現れた戦士たちを紹介しよう。一人はレッド族のように見えるがプロテクターなどはなくカラータイマーがついている女性、ウルトラウーマンドリユー。

レッド族でセブンやタロウのようにプロテクターがついており冷気を得意とする光の戦士、ウルトラウーマンザージ。

巨大で剛力の戦士ウルトラウーマンゴライアン、彼女の親友で異次元の戦いを得意とするウルトラウーマンフレア。

タロウの師でウルトラホーンが備わっているウルトラウーマンカラレス。そう『ウルトラマンSTORY0』に登場をしたウルトラ戦士たちである。

ウルトラウーマンが地球へ行く前に起こった戦いで彼女達は戦死をしてしまったが、ウルトラウーマンキングの力で甦り、今もこうして宇宙警備隊員として戦ってもらっている。

「まあ俺は戦えれば問題ねえけどよ」

「あのなゴライアン、そういうことじゃないでしょうか？最近起こっているっていうデビルスプリンターでしょ？」

「そうだフレア、今はニュージエネレーションの皆が各地に飛んでおり調べているが、かつてベリアルから発生をしたデビルスプリンターは怪獣や宇宙人たちを暴走させる力を持っている。」

「確かに……私もこの間出会ったツルク星人がいきなり襲い掛かって撃破をしたけど……そういえばいつもと違って目が赤くなっていたわ」

「ドリユーもか？実は私もグロテス星人が暴れていたのを倒したん

だ。」

カラレスとドリユーの言葉を聞いて、デビルスプリンターの影響はかなり出ていると判断をした。いずれにしても事態がこれ以上大きくなればなるほど被害が大きくなっていくのは明らかだ。

「そういえばゾフィー」

「なんだいザージ？」

「セブンから聞いたのだが、お前、小さくなっていたのは本当か？」

「何!?!」

ザージの言葉を聞いてゴライアンが私の肩をつかんできた。彼女は私よりも身長が大きいので肩がみしみしって音がしているのですが……ゴライアンさんお願い離して……

「お前!!なんで教えてくれなかつたんだ!?!」

「だ、だって君達、その時は別の星と会談していたからさ……写真はそのらへんに飾っているから」

「なんだよ、そんな面白いことをエース達はしていたのかよ!!どうりでエースが嬉しそうにしていたのはそういうことか!!」

フレアが舌打ちをして、ドリユーの方も「レオ様とアストラ様もそんな羨ましいことをしていたなんて……」と落ち込んでいます。ですが……君達どれだけ私の小さい時の姿を見たいんだよ。あれ私にとつては屈辱的な感じなんだぞ!?!そりゃあ、姉妹達の裸を見れるのはいいけどさって何を考えているんだ私は……いかにいかに冷静になれゾフィー、お前は長男だろ!!

「?」

五人は首をかしげているが、私は冷静になったフリをしながら彼女達に指示を出すと、ゴライアンはよっしゃと叫びながら隊長室を出ていく。フレアには苦労をかけるが、彼女をコントロールができるのはフレアしかいないと思っている。

彼女達が出ていった後、椅子から立ちあがり光の国の街を見ている。ベリアルによって破壊されたビルなどは修復されており今もこうして綺麗に立っている。ブラザーズマントをちらっと私は見た。

ケンさんからもらった私やウーマン達、ウルトラ六兄妹だけが纏う

ことが許されているマントだ。

「……………少しだけ寝るとしよう」

隊長室にあるソファアーへと行き、一眠りをすることにした。

ゾファイーside終了

フレアside

いっけねー私としたことがいつも使っているコインをゾファイーの部屋で落とすなんてやっちゃったよ。とりあえず中へと入って……………ん？

「ゾファイー？寝ているのか……………全く……………」

私たちはババルウ星人によってほとんどが殺されてしまった。私はゴライアンに封印をしていたのを解除をした後、魂となってみていたけどウルトラウーマンキングの力によって蘇り戦士として復帰をしたゴライアンと共にウルトラの父ことケンさんが作った宇宙警備隊に入ったんだよね。ゾファイーはその上の隊長として昇格をしてからも普通に接しているし何よりも私達が死んだ時は一人で泣いているのを魂の状態で知っている。

ウーマンを始め皆が狙っているんだけど私たちもゾファイーを狙っているんだよね。辺りに誰もいないことを確認をして私はゾファイーに近づいて頬にキスをする。

「恥ずかしいけど、初めの一步かな？さてコインも見つかつたしあいつらに追いつかないと」

私は隊長室を出た後にゴライアン達のところへと向かいパトロールをする。さーて今日も悪い宇宙人たちをブラックホールにぽいとするかな？

フレアside終了

だがこのときフレアは口紅をしていたため彼の頬にはその後がくつきりと残っていたので、起こしに来たウーマン達に嫉妬で攻撃を受けるのであった。

「な、なぜ私がこんな目に……………」

ウーマン達の会議

「さて始めましょう」

宇宙警備隊にある一室、ウルトラウーマンを始め姉妹達以外にニューージェネレーションたちもいた。

参加者は、

ウルトラウーマン、セブン、ジャック、エース、タロウ、レオ、アストラ、エイテイ、メビウス、ヒカリ、ギンガ、ビクトリー、エックス、オーブ、ジード、ロツソ、ブル、ゼロ、ネオス、21、グレート、パワード、マックス、スコット、チャック、フレア、ゴライアン、ドリユー、カラレス、ザージである。

ほかにはティガやダイナ、ガイアなどもいるが光の国に今来ているメンバーで行っている。

「さてまず、フレア………あんたやってくれたわね」

ウーマンは、ギロツとウルトラウーマンフレアの方を見ていたが、彼女は口笛を吹いてごまかしている。そうゾフィーの頬にキスをした跡があり、その犯人がフレアだということが判明をしたからである。

「ずるいよフレア………私だってゾフィーお兄ちゃんにキスをしていないのに………」

「早いもん勝ちだよそんなの、私だってゾフィーのこと好きだからね」
「って待てフレア、それって確かコインを落として隊長室へ戻ったときにやったのか?」

「ああそうだよ。ゾフィーったら疲れていたのか寝ていたんだよ。いやー可愛い顔をして寝ていたからついな」

「ついなっじゃねーよ!! 抜け駆けじゃねーか!!」

ゴライアンが怒り、フレアの肩をつかもうとしたが、彼女はゴライアンの攻撃を躲して、へへーんと言っているのでゴライアンはむきー!! と怒りだした。話が先に進まないの、ウーマンは話を続けることにした。

「さて話を戻そう。まずはこれを見てもらおう」

全員が画面の方を見ると、映し出された写真に興奮をいだいた。そこに映し出されていたのは小さくなったゾフィーの姿だった。実はこれは密かにウルトラウーマン21に頼んでこっそり撮ってもらったものである。

「こ、これは!?」

「た、隊長なのですか!？」

ウルトラウーマングレートとウルトラウーマンパワーは小さくなったゾフィーの姿を見てごくりと生唾を飲んだ。それはほかのゾフィーが小さくなった姿を知らない戦士たちも生唾を飲むほどにゾフィーの小さい姿に興奮をしていた。

写真の中には顔を赤くしている姿や小さい体で隊長としての仕事をしようとしている姿などが映っており全員が叫ぶほどである。

なおこの部屋は防音完備されており外に声が漏れることないのである。一方でゾフィーはほかの姉妹達の姿が見えないのでアムールに聞いた。

「アムール、ウーマン達はいったいどうしたんだ？」

「私もわかりません。」

「そうか、いったいどうしたのだろう?心配だな・・・」

ほかの姉妹達の姿が見えないので彼は仕事をすることにしたが、アムールは彼女達が現在何をしているのかわかっているので心の中でゾフィーに謝罪をして、オークションの写真にお金を入札勝負をしていた。

さて会場では色んな写真が出されており戦士たちがオークションをしていた。

「さて次に出されるのはこちら!!こけて涙目になっているゾフィーの写真!!500ウラーから!!」

「600ウラー!!」

「1000ウラー!!」

「3000ウラー!!」

「はい落札ーーーー」

「やったああああああああああああああああ!!」

タロウは喜んで涙目になって、写真ゲットをした。ほかの姉妹達はくそおおおおおと叫んでいる。何枚かゲットしている战士们はゾフィーの様々な写真を見て目をハートにしていた。

さて我らのゾフィーは仕事が一息がついたので休憩をしていた。自分でいれた紅茶を飲み、ほかの姉妹達の行方を案じていた。しかし「彼女達がいなくてのも久しぶりだな」と思い、飲み終えたカップを置いているとウルトラマンベルが入ってきた。

「あらゾフィー、休憩かしら？」

「ベルさん、ええ仕事がひと段落ついたので休憩です」

「宇宙警備隊長としてご苦労様ね。」

「ベルさんこそ、ケンさんの補佐は大変じゃないのですか？」

「ああケンの奴は元々優秀だからねー私に私が逆に暇を持て余すくらいよ？だから私は暇なときはコロセウムの方に顔を出してあいつらをびしばしと鍛えているわよ」

「お、お手柔らかに……」

ベルことベリアルに鍛えてもらったことがあるゾフィーは……あまりの厳しさを思い出して、苦笑いをした後、彼女に指導された候補生達のことを考えて手を合わせる。

「何やってるのよ」

「いや、なんとなくですよ」

「そういうば、ジードは見たかしら？」

「ジードをですか？実はほかの姉妹達も姿が見えないんですよ」

「変ね……」

二人は战士们の姿が見えないので何かあったのだろうかと考えた。

「どっかのバカが、わざわざ光の国に入りこんでまであの娘達を攫うことってあるのかしら？」

「ないでしょう。あの子達は私の大事な自慢の妹たちですよ？そんな卑怯な連中よりも強いに決まってるじゃないですか。」

「まあそうね」

二人は姉妹達が悪党に捕まることがないと判断をして仕事を続け

ることにした。結局姉妹達は写真などをオークションでやって満足して戻ってきたのであった。

ゾフィーは何をしていたのかを聞こうとしたが、姉妹達のあまりのまぶしさに、何かうれしいことでもあったのだろうかなどと判断をして聞かないことにした。

ゾフィーの技紹介

ゾフィースィド

やあ皆、私は宇宙警備隊隊長を務めているゾフィーだ。今日は私が使っている数々の技や武器を紹介しよう。

まずはこの光線からだ。

「M87光線」 私が使用をする技だね。右手を八つ裂き光輪を飛ばすように腕をつきだすAタイプ、L字に構えるBタイプとある。

Bタイプはすぐに放てるため威力などは落ちてしまうが素早く放つときに使用をすることが多いね。Aタイプは逆にエネルギーを充電をしてから放つためBタイプに比べたらすぐに出せたりできないが威力などはこちらの方が上だ。だが威力が高いため地上で使う際にはセーブをしないと破壊をしてしまう威力だ。これは気を付けないといけない。これを伝授してくれたのは我が養父「ウォーリアン」が自分の命をかけて教えてくれた技だ。

「スペシウム光線」ウルトラウーマンやジャックが使用する技の一つだ。これは基本的な技なので、私も最初はスペシウム光線を会得してから、ウォーリアンにM87光線を学んだ。今でもこの技を使用することはある。威力などはウーマンが使うよりは下がってしまうがそれでも怪獣を倒せるほどはある。

「Z光線」相手を痺れさせる光線で、相手の動きを止めたりする時に使用する。もちろんこの技でも威力はあるので倒したりすることはできる。私が主に地上で使うのはこちらだね。

「ウルトラカッター」構えはゼット光線と同じでそこから十字の手裏剣上のエネルギーを放ち相手を切断させる技だ。

「ウルトラフロスト」両手から氷のガスを放ち相手を凍らせる技だ。「ウルトラスラッシュ」ウーマンやジャック、エースが使用する技と同じで相手を切断する技だ。ウルトラカッターと被ることもありウーマン同様こちらには誘導する効力を発揮させている。

「ウルトラショット」ジャックが使用する技と同じだね。

「ウルトラギロチン」エースが使用する技と同じだ。相手に対して複

数の八つ裂き光輪を放ち相手を切り裂く技だ。

「ストリウム光線」タロウの技と同じで虹色に輝かせてからチャージをして相手に放つ光線。M87光線の次に威力が高い光線だ。

「レインボー光線」私自身が高速で動いて7人に分身をしてM87光線を放つ技、我が師「レッドファイター」が教えてくれたものだ。

「ウルトラフリーザー」タロウが使用をする技と同じでこれを使いフリーザーボールを作ったこともあるぞ。

「キャッチリング」回転して相手を拘束するリングを作る技だ。

「トルネードビーム」両手にエネルギーをためて竜巻を発生させて相手を吹き飛ばす技。『平成ウルトラセブン』にてセブンが使用したものと同じだ。

「パーフェクトフリーザー」こちらも『平成ウルトラセブン』にてセブンが使用した技と同じだ。「できるかな」と思い、やってみたらできたので、相手を凍らせる際はこちらを多用することが多い。

次は私が使用をしている武器やアイテムの紹介だ。

「ウルトラブレスレット」ウーマンからエースがUキラーザウルスを封印をしてウルトラウーマンになれなくなった際に作ったもので、基本的なのはジャックのものと同じだ。元々ウルトラブレスレット自体は私が作ったものだからね。

戦力増加のために左手に装着をしている。

「ウルトラランス」ウルトラブレスレットを変形させた槍で主に使う形態その一である。

「ウルトラソード」ウルトラブレスレットを変形させた剣で主に使う形態その二でありそこからM87光線の構えで放つ「M87光剣」という技を使用することができる。

「ウルトラウィップ」ウルトラブレスレットを変形させた鞭だ。宇宙人の武器を奪ったり絡ませたりして動きを止める。

「ウルトラディフェンダー」ウルトラブレスレットを変形させた盾だ。

「ウルトラスパーク」ブレスレットを光の刃にして放つ技だよ。

……このように、ブレスレット関連は様々な効力を発揮するのできりがない。次に行こう。

ちなみに言うと、エースに切断技を教えたのは私だ。彼女は私に指導をしてほしいとお願いをされたので、彼女が一番得意な切断系テクニックを教えたらあんな風になってしまった。お兄ちゃん悲しいな……。

さて次は何を紹介をしようかな？ウルトラコンバーターやウルトラマジックレイなどは科学技術局が作ったものだから、私がそれを借りてエースを救うために使ったんだよね。あれ？何か違う話になってしまったかな？

私はこの宇宙の平和を守るために戦っている。ウーマンやセブン達以外にも様々なウルトラウーマン達が戦っている。ギャラクシィレスキューフォースにいるウルトラウーマンリブットやアンドロウーマンメロス、そしてニュージエネレーションの彼女達に十勇士と呼ばれるウーマン達も戦い続けている。

「私は生きている限り戦おう。いつの日か訪れるであろう……この宇宙が平和になる日まで宇宙警備隊隊長として戦う!!」

私は拳を握りこの宇宙と平和を守るために誓う。

ゾフィーとカプセル怪獣

ゾフィースィド

カプセル怪獣：ウルトラウーマンセブンが戦えない時に、代わりに戦ってくれる頼もしい仲間たちのことである。実はカプセル怪獣は私も持っているのだが、理由があつて処分されようとしていたのを保護した感じである。

現在、私はカプセルから怪獣たちを出したが……

「ご主人様……ご主人様……ご主人様……？」

「ご主人様……？」

「……ご主人。」

「……どうしてこうなった。」

そう現在私に抱き付いている三体が私のカプセル怪獣だ。火山怪鳥バードン、暴君怪獣タイラント、そして宇宙恐竜ゼットンのも三体でいずれも擬人化をした女性「怪獣娘」になっている。

タイラントの両手は、普段は人間と変わらない手をしており、戦闘時には着脱可能な武器を装備できるようになっている。そして、口からは高熱火炎を、腹部のベムスター部分からは冷気を出したりする。頭部についている耳は人間のような耳とイカルス星人の耳の両方がついており、普段は人間のような耳で聞いているそうで頭のは飾りだとか。

まずはバードンと会いたい。彼女とは、ある組織が造った基地で出会った。当時の彼女は今のような姿ではなく子どものような姿をしていた。

そこに私が駆けつけて彼らの計画を阻止をして保護をしたのが彼女だった。彼女は私を見てからずっと抱き付いており預けようとしても首を横に振り拒絶をしたので私が引き取るようになった。

それから彼女が大きくなり、安全な星に移住させようとしたが、彼女自身が私のカプセル怪獣として戦いたいとお願いをされたので断ることができなくなり、彼女をカプセル怪獣として引き取ることにした。

次にタイラント……かつて我らウルトラ兄妹が戦ったタイラントが、怪獣墓場の力なのかなぜか女性の姿で復活をした個体だ。当時、宇宙をパトロールしていた私は、その異様な気配を感じて、タイラントと交戦した。

彼女は以前よりもパワーアップをしていたが、私もあの時よりもパワーアップしているため互角に戦っていた。そこに割り込む形で現れた宇宙鳥人アイロス星人と交戦となり、私は彼女を守りながら攻めてきたアイロス星人を撃破すると、なぜか私に気がいったらしく、自分もカプセル怪獣になるといつてタイラントは仲間になったのだ。

最後にゼットンだが、かつてウーマンと一緒に地球で戦い、科学特捜隊が作ったペンシルロケット弾によって倒されたゼットンだ。私の前に現れて自分を仲間にしてくれといってきたので仲間にしたのである。勿論、何故かは分からない。

話を今に戻そう。私がいるのは自宅である。仕事を終えて、カプセルの中にもいた彼女たちを出して今に至る。

「ご主人様ご主人様!!」

「おいバードン、ご主人から離れやがれ!!」

「ああ!? あんたこそご主人様から離れなさいよ!!」

バードンとタイラントはお互いを睨んで火花が出ている感じなのは気のせいだろうか? 突然として私の体は座っていた場所から移動をされていたので何があったかと思っていると犯人はゼットンだ。二人が喧嘩をしているうちに彼女は私を自分の場所にテレポーターションさせて抱きしめていた。大きい胸が当たっているのです。が………気づいているのかなゼットンさんや。

「あーゼットンさん何をしているのですか!!」

「そうだ!! 離れろ!!」

「………嫌だ。」

三人がこうして喧嘩をしていると、私は悲しくなってしまうな。

「やめなさい三人とも」

「二でも!!」

「私は三人が仲良くしてる方が嬉しいのだけどね? 駄目かい?」

バードンside終了

次の日となり、ゾフィーは定期パトロールをしていた。カプセル怪獣である彼女たちと共に辺りを見回りながら飛んでいると、彼は何かが浮いているのを見つけた。

「ゼロ!?……いや、こいつは、ダーククロプスか?」

残骸のようになっていたが、間違いなくダーククロプスシリーズだった。ゼロと違い、髪は茶色のツインテールになっており、目の部分はゴーグルが割れて瞳が露わになっていた。機能停止状態だった為、彼女を連れて、科学技術局にいるヒカリのところへと持っていき、ベルを呼んだ。

ベルはヒカリの部屋へ到着して中へ入る。そこに横たわっているダーククロプスを見た後、ゾフィーにこう告げた。

「ゾフィー、この娘はダーククロプスゼロよ」

「あのダーククロプスのプロトタイプってことですか?」

「ええその通り。だけど、ゼロによって倒されて、惑星チエイニーごと自爆したはず……それがなぜこの状態で?」

「わかりません。宇宙で漂っているところを回収をしてここに持って帰ったのですから……ヒカリ、修理は?」

「可能だが……本当にするの?」

「ああ、何かあったら私が責任をとる。頼む」

「……わかった。なら修理するさ。」

「すまないヒカリ」

「お前が頼んできたのだから断る必要がない。とりあえずこいつの修理に関してはこちらで引き受ける」

「頼む」

ゾフィーはヒカりにダーククロプスゼロの修理を任せて、ベルと共に部屋を後にした。

「ゾフィー、あの娘を直すのはいいけど、その後はどうする気なの?メモリーが残ってれば、おそらくゼロや貴方達に襲い掛かるわよ?」

「ベルさん、いやベリアルさんなら可能じゃないですか?かつてはあなたが主だったのですから。」

「どうかしら？今の私はアーリースタイルよ。あの時は、レイオニクスモードだったから……何とも言えないわね。記憶がなかったらその時にマスター登録されることになるけど……」

「マスター登録？」

「そう。ダークロプスシリーズは、初期の段階でマスター登録が必要になってるの。試作品だったあの娘も同じくね。まあそれは記憶回路などが破損していなかったらの場合よ」

「なるほど……」

ベルの話聞いた後、ゾフィーは歩いて隊長室へと戻る。

ダークロプスゼロを回収して、修理に入れてから、二週間が経った。

ゾフィーはいつもの隊長の仕事やパトロール、部下への指示を出しているとヒカリから連絡が来たのでモニターに出す。

「やあヒカリ」

『ゾフィー、ダークロプスゼロの修理が完了した。起動実験を行いたいからお前も来てほしい』

「わかった」

通信を切り、トレギアに後を任せて、彼は科学技術局のヒカリがいる部屋へ到着する。

そこではベルも彼の到着を待っていた。

「待っていたわ、ゾフィー」

「お待たせしました。ヒカリ早速頼む」

「わかった。だが何が起こるのか私にもわからない。ゴーグル部分は直すことが不可能だからこの状態だが……」

ヒカリが言った場所を見ると、確かに単眼（モノアイ）のゴーグルは破壊されたままで、ゼロのように両目があった。今は起動をしていないので目は閉じている。ヒカリがスイッチを押すと、彼女にエネルギーが注入されて行き、ダークロプスゼロの目が開いた。目の色は赤くハイライトがない状態のまま辺りを見ている。

「目を覚ましたみたいだが……何かを確認をしているかのようだな。」

ダークロプスゼロは辺りを見てからゾフィーの方をじーつと見て

いた。そのまま歩きだして彼の方へ近づき、膝をついた。

「え？」

「マスター登録をお願いします。」

「……………」

「ゾフィー、あなたが登録しなさい。おそらくダークロプスゼロには記憶がないみたいだからね」

「わ、わかりました。マスター登録…ゾフィーだ。」

「登録を確認しました。マスターゾフィー。以降はあなたの命令で動きます。」

「あ、はい」

NEWフェイスカプセル怪獣

バードン

タイラント

ゼットン

ダークロプスゼロ (NEW)

ダークロプスゼロの学び

ゾフィースィド

さて起動をさせてマスター登録を終えた私はこの子連れて隊長室へと戻ってきた。そこにはトレギアがいたので彼女を紹介をする。「トレギア、この子はダークロプスゼロだ。今日から君の後輩になる。色々教えてやってほしい。」

「はあ……いいですが大丈夫ですか？」

「多分、大丈夫だと思うが……」

とりあえず、トレギアにダークロプスゼロに色々と学ばせて覚えさせることにしよう。これは姉妹達にも報告はした方がいいかな？

ゾフィースィド終了

トレギアはゾフィーからダークロプスゼロを任されたが、姿がウルトラウーマンゼロをベースに造られているため彼女自身はやり辛いのである。

(あの時、戦ったからすごくやり辛いわ……)

「あの一……」

「え？」

「私は何をすればよろしいのですか？」

「えつとそうね……まずは簡単なことから覚えていきましょうか」

「かしこまりました」

トレギアはまずはお茶の淹れ方などを教えていった。ダークロプスゼロはトレギアがしたことを覚える為にインプットしていく。トレギアは「流石ベリアルさんが造っただけあるわね」と関心しながら、ダークロプスゼロと共に資料を確認したりしていると、ダークロプスゼロは何かの資料で動きが止まった。

「あーそれはウルトラウーマンゼロの戦闘データね」

「ウルトラウーマンゼロ……」

トレギアはゼロの戦闘データの映像を再生させる。最初に映し出されたのはウルトラウーマンベリアルが百体以上の怪獣を復活させ

た怪獣墓場のシーンだ。ゼロは頭部のビームランプからエメリウムスラッシュを放ち、バードン達を撃破していった。そして、頭部のゼロスラッガーを投げつけて次々に怪獣軍団を全滅させていく。さらにベリアルと交戦して撃破したところから三時間ほど見続けていた。そこには自分と同じ姿をした存在がゼロと戦ったり、ストロングコロナヤルナミラクルの姿になったり、ウルティメイトイージスを装着をした姿だったり、トレギアと戦ったりと様々なゼロの戦い方を覚えていく。

「……………私もあの子と同じ力を持っている……………なら使えるでしょうか」

「多分ね。それに関してはゾフィー隊長に聞かないとダメね」

「マスターに？」

「そうよ。あなたは戦うのでしょ？」

「戦う……………マスターを傷つける奴と戦う!!」

　ダークロプスゼロの目がキラキラと光りだしたので、彼女は一度ダークロプスゼロを連れて隊長室へと戻ってきた。

「おやもう仕事を「マスター!!私に戦い方を教えてください!!」え?」

「私もマスターのために戦いたいです!!」

「……………わかった。君がそこまで言うなら私も君を鍛えるところ。」

「ありがとうございます、マスター!!」

　ゾフィーはトレギアに後を任せてウルトラコロセウムへとやってきた。そして、空いている場所を見つけてそこに立つ。彼は一つのカプセルから怪獣を出した。タイラントである。

「おうご主人!!あたしを出したってことは何かするってことか?」

「そうだ。彼女を鍛えてやってほしい。」

「あいつ?」

　タイラントが振り返ると、ダークロプスゼロが立っていたので、彼女は納得し、両手に鉄球と鎌を装備して構えている。

「さーてお嬢ちゃん、悪いがあたしはあんたをまだ認めていないからな!死ぬ気がかかってこい!!おら!!」

タイラントは左手の鞭を飛ばしてきた。彼女はゼロの戦い方を見ているのでタイラントが放った鞭を右手ではじかせると頭部のビームランプから「ダークロプスゼロスラッシュ」をタイラントに放つ。「甘いんだよ!!」

それを彼女は腹部のベムスターの腹で吸収した。ダークロプスゼロは頭部のダークロプススラッガーを構えて突撃する。タイラントは右手の鎌を使い、ダークロプスゼロに攻撃をするが、彼女はそれを受け止めると、蹴りを入れてタイラントを吹っ飛ばす。

「……へえー! 旦那、こいつは確か初めてじゃなかったか? まるで戦いを覚えているかのように見えるよ」

「ああ私もそれには驚いている。(なるほどトレギアの奴、ゼロの戦闘データを彼女にインプットさせたな? あの戦い方はまるでゼロそのものだよ)」

「えっと彼女の場合はこうして……デア!!」

ダークロプスゼロは両手のゼロスラッガーを投げつける。タイラントは、右手の鎌で彼女が放ったスラッガーをはじかせる。ダークロプスゼロショットも腹で吸収した。

ダークロプスゼロは接近して、頭部のダークロプスゼロスラッシュを放つが、それを先ほど投げたダークロプスゼロスラッガーに当てて反射をさせてタイラントのボディにダメージを与えた。

「へえー面白い戦い方するじゃん、ならあたしも本気で!!」そこまで。「ご、ご主人……なんだよもつと戦わせてくれよ!!」

「これ以上は戦わせることはできない。いくらウルトラコロセウムでも君が本気を出せば破壊してしまうからね。それに彼女が戦えることがわかったただけでもいいじゃないか」

「まあな……」

「ありがとうタイラント。」

ゾフィーは手をかざすと、彼女は光りだしてカプセルの中へと戻る。ダークロプスゼロも同じようにゾフィーが手をかざすとカプセルの中に収納された。彼はカプセル箱に入れると、四つのカプセルが並んだ。

赤、灰色、黒、茶色のカプセルがあり彼は「これからよろしく頼むよ」と声をかけて、メビウスにも一声かけてから隊長室へと戻るのであつた。

一方でベルは大隊長室で両手を組んで考え事をしていた。ケンが彼女が気になつて声をかける。

「どうしたんだベリアル」

「ああ、ダークロプスゼロのことよ。どこで製造をしたのかと思つてね。

一度は惑星チエイニーと共に爆発したはずなのに、それが破損をしていたとはいえほぼ五体満足で残っているのはまずありえないわ。あの子の中にもあれが完全な形で残ってたしね」

「デイメンジョンコアだったか？確か次元の壁さえも壊してしまう威力があるという……」

「ええ、本当にいったい誰が……」

一方である場所にてダークロプスゼロは次々に生産されていた。そこには黒い服を着た一人の男がジードが使用するライザーを持ちながらほくそ笑んでいた。

「これでエンドマークだ」

罨にかかったゾファイ

宇宙警備隊本部がSOSを受信をした。場所は惑星アルカノーという星で、突如として謎のロボット軍団の襲撃を受けたという。ゾファイはジャックとエースと共に惑星アルカノーへと向かう。

「惑星アルカノーといえばエネルギーが豊富な星だ。ロボットの狙いはエネルギーなのかもしれない」

「急ぎましょう、ゾファイお兄ちゃん」

「ああ!!」

三人は惑星アルカノーへと急行して暴れているロボットに光線を放ち撃破して着地をする。ゾファイ達はロボットを見て驚いた。

「あれってレギオノイド!?!」

「そんな!!あの時、完全に破壊したはずなのに!!」

暴れていたのは、ウルトララウーマンベリアルがかつてカイザーベリアルだった頃に、アナザースペースで作りあげた量産型メカ「帝国機兵レギオノイド」であった。両手にドリルを装備した陸戦型の α 、両手をキャノンアタッチメントにした宇宙戦型の β ……その双方が機動していたのだ。レギオノイド β は、ゾファイ達に気づいて、両手のガンポッドからレギオノイドガンビームを三人に向けて放った。

「「シュワ!!」」

回避をした後、ジャックはウルトラブレスレットをウルトラランスに変えてレギオノイドに投げつけた。次々に貫通をするウルトラランスがジャックの手元に戻ると、彼女は接近して、レギオノイドに攻撃する。

エースは着地して構える。

「バーチカルギロチン!!」

バーチカルギロチンがレギオノイドを真っ二つにして爆発させる。次々に襲い掛かるレギオノイドにエースは次の切断技を構える。

「ウルトラギロチン!!」

変身超獣ブロッケンに対して使用したウルトラギロチンが放たれて次々にレギオノイド達を斬り裂いていき爆発させる。エースは

エースブレードを生成して、襲い掛かるレギオノイドを斬っていく。

一方でゾフィーは、姉妹達とは離れた場所でレギオノイドと交戦していた。レギオノイドαが放つドリルを後ろへバク転して躲してから、ゼット光線の構えでゾフィーカッターを放ち、レギオノイドαの右手を斬り裂いた。そのままゾフィーキックをお見舞いさせて頭部を吹き飛ばして撃破する。β型がキャノン砲をゾフィーに放つが、彼は素手でキャノン砲の弾をはじかせてブレスレットを投げつけた。

レギオノイドβを斬り裂いて飛んで行ったウルTRASパークがブレスレットとしてゾフィーの手に戻った後、ゾフィーはジャックとエースが苦戦をしているのを見てレギオノイドの数が想定以上だと把握する。

「ゼットン、バードン、頼む!!」

ゾフィーがカプセルを投げると怪獣娘の姿をしたゼットンとバードンが現れて着地する。

「……………倒す。」

「ご主人様!!バードンにお任せを!!」

「頼んだぞ、二人とも!!」

ゾフィーは、妹達の援護を二人に任せて、襲い掛かってきたレギオノイドに対処をするために構えようとしたが、突然周りの景色が変わったのに驚いていた。

「な!？」

それは外で戦っているジャック達も気づいた。

「ご主人様!!」

「……………ご主人!」

「ゾフィーお兄ちゃん!!」

「これはいったい……………結界?」

四人は結界が張られたので中の様子を見る事ができない。一方でゾフィーは結界を壊そうとしたがあまりの堅さに手を痛めていた。

「なんて硬さだ……………なら!!」

M87光線の構えをしようとした時に後ろから攻撃を受けて吹き飛ばされる。

「ぐあ!!」一体何が・・・あれは!?ベリアル融合獣!?

ゾフィーに攻撃をしたのはゴモラ、レッドキングのカプセルを使って変身をしたベリアル融合獣「スカルゴモラ」であった。スカルゴモラは地面を叩くと炎のボール「シヨツキングヘルボール」を発生させてゾフィーに放つ。

「まずい!!」

すぐにウルトラバリアーを張り、スカルゴモラが放ったシヨツキングヘルボールをガードして、彼はすぐに反撃するために接近してスカルゴモラに蹴りを入れる。蹴りを入れられたスカルゴモラは後ろへと退がり、ゾフィーは止めを刺すためにM87光線を放とうとしたがカラータイマーが赤く点滅を始めた。

(どういうことだ!?いくらなんでも早すぎる・・・まさか!!)

『ようやく気づいたな、ゾフィー』

スカルゴモラが喋ったので、ゾフィーは構えようとしたが、エネルギーをいつも以上に消耗しているので構えることができない。

『無駄ですよ。このフィールドはマイナスエネルギーで作られている結界ですからね』

「お前はストルム星人、だがお前は・・・ストルム器官をとられて消滅をしたはずだ」

『ああそのとおりだ!!だが私はこうして生き返った!!すべてはあの方の為に!!だからこそ宇宙警備隊長ゾフィー!!貴様の命をベリアル様のために死ねえええええええええええええええええ!!』

スカルゴモラは接近し、ゾフィーを攻撃しようとする。外では結界を壊そうと四人が必死になって攻撃していたが、思っていた以上に壊せないでジャックとエースは舌打ちをする。

「く!!なんて堅き・・・エース!!」

「わかってます、ジャック姉さん!!でもこれ、思っていた以上に堅くて!!」

ゼットンとバードンも結界を壊そうと奮闘しているが、あまりの堅さにバードンは尻餅をついた。

「堅すぎる。ゼットンはっ」

彼女は一兆度火球を放っていたが、バードンの問いかけでそれを止めて、近くにレポートして首を横に振る。

「駄目、堅すぎて私の火球でも壊せない」

「やっぱり？ 私も高熱火炎を吐いたけど無理……」

四人が困っている、光が発生した。振り返るとウルトラウーマンベルが立っていた。だが彼女はオーラを纏っており、エースとジャックはお互いに抱き合った。

「べ、ベルさん？」

「ジャック、エース……ゾフィーはこの中ね？」

「は、はい……」

「そうかそうか」

彼女はそのまま歩いていき結界をじーつと見てから右手にエネルギーを込めて殴った。一方、中でもその衝撃が発生しており、ゾフィーとスカルゴモラは驚いていた。

『な、なんだ!?!』

マイナスエネルギーの結界に罅が入っていき、ゾフィーも一体誰かと思、後ろを振り返るとそこにはオーラを纏ったウルトラウーマンベルが立っていたので彼は震えていた。

（べ、ベリアルさんがオーラを纏っている。あかんこれは完全にブチ切れてますやん!!）

「ゾフィー？」

「は、はい!!」

「お前をボコボコにしたのはあいつか？」

「えつと……はい」

『べ、ベリアルさま!?!』

「ストルム星人……今度は娘だけではなく義息子まで手をかけるか……その行い、万死に値する」

ベルのオーラはさらに強まっていく。彼女は両手にエネルギーをためていき、それを十字にして放つデスシウム光線がスカルゴモラに命中して爆散した。全員が改めてベリアルことベルが味方でよかったですと思っていると、ストルム星人は、伏井出 ケイの姿となり地

信を得ていない。正確に命令を出すことができないが、警戒をしておいた方がいいね)

ゾフィーは、バードンとゼットンのカプセルに戻すと、仲間たちと共に惑星アルカノーを後にして光の国へと帰還した。

ゾフィー入院

ゾフィースィド

ストルム星人……伏井出 ケイが変身をしたスカルゴモラをウルトラウーマンベルさんが倒した。危機を乗り越えた私は傷ついた体を癒す為、ウルトラクリニックへと運ばれて治療を受けていた。やがて数日が経ち、私が病室でのんびりしているとウーマンがやってきた。

「調子はどう、ゾフィー？」

「少しだるいね。」

「まさかベリアル融合獣が現れるとはね。ウルトラウーマンゼットがいた地球でもベリアル融合獣が現れたというのにな。」

「確かに。だがあれはメダルを使ってゼットライザーでセレブロが変身をしたものだが……今回は、蘇った伏井出 ケイが怪獣カプセルを使い変身したんだ」

ウーマンにその話をしながら彼女自身も両手を組んで考えていた。なぜ伏井出 ケイが蘇り、私を狙ったのか……そのせいで私自身が入院をすることになったので彼女は私を見ながらも拳を握りしめていた。どうやらかなり心配をかけてしまったようだ。

(なぜゾフィーが狙われなければならないの？宇宙警備隊隊長だから狙われているの？それとも何かをゾフィーは持っているの？それもわからないから何も言えないわ)

「それで退院はできそうなの？」

「ああ今日退院できるそうだな。」

それから退院手続きをした次の日、私は宇宙警備隊本部の隊長室へ入るとほかの姉妹達がいた。そして、タロウが走って私に抱き付いてきた。

「ゾフィー兄さん!!良かった……良かったよお」

「心配かけさせたな、タロウ。それに皆も……私はもう大丈夫だ」

「だがゾフィー、なぜ伏井出 ケイが復活をしてお前の命を狙ったのか。何かわかるか？」

「いやセブン、残念ながら私にもわからない。だがあいつは私の命を使い、あの悪の帝王ベリアルを蘇らせようとしていたのは間違いない」

「ゾファイー兄さんの命を使って……？ジードが倒したっていうのか……？？」

「いずれにしてもあの悪魔を蘇らせるのだけはまずい、奴の復讐心や忠誠心を考えると、ロボット兵器もかなりの量と見た。各宇宙警備隊に通達、パトロールを厳重にするようにと」

「はっ!!」

私は、各宇宙警備隊員に通達をして厳重にするよう指示を出した後、ジャックとエースがやってきた。

「ゾファイーお兄ちゃん」

「ゾファイー兄さん……その……」

「どうしたんだジャックとエース。」

「私達、近くにいたのに……」

「何もできなかつたんです。それが悔しくて……そのせいでゾファイー兄さんが。」

エースとジャックは私が結界に閉じ込められた後も壊そうと奮闘してくれた。結界はベルさんが壊したから良かったが、そうでなかったら私が殺されていたのではないか……と思ってしまうのだろう。私は二人の頭を撫でる。

「お前たちのせいじゃないさ。それに私はこうして生きている」

「で、でも!!」

「ジャック、エース、お前達は私の大事な妹たちだ。それはウーマンやセブン達にも言えることだ。」

「……」

「いずれにしても今日は乙女座のトライアングル星雲へと行かないといけないからね。レオとタロウ、君達二人と一緒に来てもらう。」

「私達がですか?」

「そうだ。乙女座の王女様から招待を受けていてね。君達二人についてきてもらおうとね。」

「わかったよ！」

「わかりました」

ゾファイーside終了

「乙女座……か。」

私はゾファイー兄さんと共に乙女座の方へと飛んでいた。乙女座といえば、二代目コメットさんと再会したことを思いだす。彼女は乙女座出身の人物で私とは幼馴染だ。だが獅子座L77星がマグマ星人に滅ぼされた。私は地球へと行き、オオトリ・ユナという名前でスポーツセンターで働いていた。

やがてブラック指令を倒した後、地球を旅していたわ。ある日、日本へ戻った後、トオルからレオリングを返してもらい、寺へ上がると一人の少年がぶつかってきた。その子は赤い模様を浮かべていた。そして私は前を向くと黒い髪をした女性がいたが彼女だつてことがわかった。

「あのー、あなたは？」

「コメットさん、覚えているかい？ 私はオオトリ・ユナよ」

「ええ。」

私は、「順平くんと呼ばれた子を治すにはコメットさんが皆の前で宇宙人とばらすことだ」と教えた。もう一つ方法があるが、どちらにせよ辛い選択だろう……私にとつてもこの星は第二の故郷でもある。そして、私は決意を固める。丁度その時にセブン姉さんが生きていたことを知った。彼女はヒキラーザウルスを封印した際に、エネルギーを大半消耗させてしまい変身ができなくなってしまった。自分の代わりに光の国へ行ってほしいと頼まれたのだ。

「コメットさん」

「レオ……」

「アカゴンになった順平君を救う方法はもう一つある。順平君を地球の外へと連れ出してβ線とγ線を浴びさせるんだ」

「それって!!」

そう、順平君を救うもう一つの方法……それは私がレオに変身をして彼を外へ連れ出すしかない。彼の家族が来る前に私は彼を連れさ

らい公園へと行く。

「レオ!!」

「レオ……レオおおおおおお!!」

私はウルトラウーマンレオに変身をして順平君が苦しまないようにフィールドを張り宇宙へ飛びだす。彼の体にγ線とβ線を浴びさせていき、彼の体の模様がなくなったのを見て地球へと帰還をして私は彼を降ろす。

「レオ……」

「さようならコメントさん、また乙女座で会おうね。シユワ!!」

私は光の国へ帰還をした後、コメントさんも乙女座のほうへと戻ってきたことを聞いていたので、乙女座の仕事をした後、彼女と話をしてから光の国へ戻っていくのが日常になっていた。そこにタロウ姉さんがいたり、セブン姉さんもコメントさんとは親友だったことを知ったりと驚きもあった。

「さて、そろそろつくよ?」

私はレオマントを装備をして乙女座に着地をする。

レオside終了

「……まさかコメントさんがいるとはな……確か『大場久美子のコメントさん』ではセブンは親友でタロウは恋人、レオは幼馴染だった。しかし、この世界ではタロウとセブンは親友でレオは幼馴染ってことか。」

ゾフィーはブラザーズマントを羽織って案内されてから女王がいる間に通される。三人のウルトラ戦士たちは女王の間に入り彼女が来るのを待つことにした。

「女王様のおなーりー」

乙女座の女王が入ってきたので三人は片膝をついて頭を下げる。女王は席に座ると声をかける。

「もういいですよ宇宙警備隊の皆さま。」

三人が顔を上げた時、レオとタロウは驚いていた。

「え!?!」

「嘘……」

「お久しぶりですねタロウさんにレオ、それに初めまして、ゾフィーさん」

「コメットさん!?!」

そこにいたのはタロウとレオが知っているコメットさん……スピカだった。彼女はふふと笑いながら驚いている二人を見て笑っていた。

「改めて乙女座の女王のコメット16世です」

「宇宙警備隊長を務めておりますゾフィーと申します。今日はお招きありがとうございます女王様」

「本当、タロウさんやレオの言った通りですね」

「い!!」

「二人は私のことをあなたに何と伝えているのですか?」

「そうですね。一番頼れて、ピンチにいつも駆けつけてくれる妹さん思いなお兄さんって」

「これはこれは……」

タロウとレオはコメットさんにゾフィーのことを言っていたのを暴露されたので顔を赤くしており、ゾフィー自身も妹たちがコメットさんにそんなことを言っていたのかと彼自身も顔を赤くする。

それからパーティーの時間となりコメットさんはレオとタロウに近づいていく。ゾフィー自身もお酒を飲みながら、お話をする。

「あの時、レオがいなかったら順平君は……」

「そのことに関しては気にしないでほしいわ。だけどあなたが地球を去っていたなんてね。だからあの時、あなたが住んでいた場所に行つたときにあなたの姿が見えなかったのはそういうことだったの」

レオは地球へ戻ったときに、コメットさんが住んでいた鎌倉の方へ行き、彼女がお世話になっていた沢野家を見ていたが、コメットさんの姿が見えなかったのが彼女が乙女座の方へと帰ってしまったのかと察した。あの子達も大きくなっており、彼女が去ろうとした時、二人の男の子が近づいてくる。

「あなたはウルトラウーマンですよね?」

「……そうと言ったら?」

「あの・・・コメットさんにあつたら僕たちは元気にいるよと伝えてくれませんか？僕たちコメットさんにお礼が言えなかつたので」

「わかつたわ」

「・・・公平君、順平君・・・」

コメットさんは涙を流しながら、ゾフィーは「あの子達も今はいないからね」と思い、サコミズのことを思いだす。

(・・・サコミズ、君は立派な人物だよ。最後に君の前に現れた時も君はこういつてくれたね？「地球を宇宙を守ってくれてありがとう」つと、それが君の最後の言葉でもあつた。だからこそ私は君達をいつまでも守りたいと思っている・・・ありがとうサコミズ。)

ゾフィーは心の中でサコミズにお礼を言い、彼が残してきた思いを忘れないようにこれからも戦っていく決意を固める。

ゾフィーとコスモス

M78星雲光の国にある一つの居酒屋、そこに二人のウルトラ戦士がいた。一人は我らのゾフィー隊長、そして彼と一緒に飲もうとしているのは青い髪に青いチャイナ服を着込んだような人物、慈愛の勇者「ウルトラウーマンコスモス」である。

彼女はかつて、フューチャーアースで、ウルトラウーマンゼロ、ウルトラウーマンダイナ、ウルトラ兄妹、そしてフューチャーアースの生き残りであるチームUと力を合わせて、バット星人率いる怪獣兵器軍団と戦い、平和を取り戻した人物である。彼女もコスモスペースから時々M78ワールドにある光の国へ来ることがある。

コスモスがゾフィーを誘った理由……それは、他のウルトラ姉妹達に頼まれたからである、ゾフィーとお酒を飲んで彼の好きな人を聞くために。コスモスもゾフィーの好きな人が気になっていたので承諾したのだ。

「すまないね、コスモス」

「お気になさらないください。私からお願ひしたことなので」
「そうだったね」

二人はビールをお願いして乾杯する。実はコスモスには音を拾うマイクがセットされており、ほかのウルトラウーマン達が聞けるようになっていいる。そして、すでに盗聴用の別室にはウーマンを始めウルトラ姉妹達が集まっており、彼女達はゾフィーの本音を聞けるのだ。

「まさかコスモスに頼むとはな……」
「だけど皆も気になっていましたよ？ゾフィーの本音を。」

ウーマンの言葉に全員が首を縦に振っている間、コスモスが話しかける。

「ところでゾフィーさん、ぶつちやけ聞きますが……もし姉妹と結婚をするとしたら誰なんですか？」

「姉妹とかい？」

「はい」

「ふーむ……」

コスモスの質問に、ゾフィーはウーマン達を頭に浮かべてから一人のウルトラウーマンの名前を出す。

「もし結婚をするとしたらエースかな？」

「エースさんですか？」

一方で聞いていた部屋ではエースが立ちあがり顔を赤くしながらはわわわわとなっていた。

「エースは料理もほかの姉妹達よりも上手に作ってくれるし、部屋などを片付けてくれていそうと思つてね。なら結婚をするとしたらエースかなつて」

「なるほど……エースさん以外でしたら誰ですか？」

「エース以外か……エイティ、ウーマンかな？」

「!!」

今度はウーマンとエイティが喜び、立ちあがる。その理由を聞いた。

「ウーマンはあれでも恥ずかしがり屋でな、だけど彼女の本当の意味ですごいのは冷静な判断で、買い物をしたりすることだ。エイティに関して子どもができた時は先生として鍛えてくれそうだなと思つてね。何より彼女の紅茶は美味しいからな。」

「そうか……ゾフィーは私のことをそう思っていたのか……うふふふふふ」

「紅茶が美味しい……毎日淹れてもいいのですよ!!」

「私が一番、私が一番……!」

選ばれた三人は笑顔を浮かべる中、コスモスとゾフィーは話を続けていた。

「ならウーマンさん達のいいところとありませんか？私、ゼロやダイナ以外のウルトラ戦士と共闘をしたことがあまりなくて……」

「ふむ……ならまずはウーマンだな、あの子は長女という立ち位置もあるからほかのみんなから頼られているのは私も知っている。だけど彼女も辛い時だってある。ほかの姉妹達につらいところを見せないために必死に努力をしているのを私は知っている。」

「……ゾフィー。」

「セブンは心配をかける妹だと思っている。あの子は地球のことを誰よりも愛している。自分の体がボロボロになろうともあの子は守ろうと戦ってきた。ゴース星団との戦いの後、宇宙でさまよっていた彼女をウルトラクリニックに運んだ際にはマリーさんも驚いていたさ」

「………気を付けます」

「ジャックは自分が何が得意なのかってのがわからなかったな。地球でも様々な怪獣と戦い、負けてきたが、それでも彼女は努力をして新たな技を取得して怪獣や宇宙人を打ち負かしてきた。あの子の本当の強さを私は知っている」

「ゾフィーお兄ちゃん………」

「エースは怪獣よりも強い超獣と死闘を繰り広げた。彼女も地球を守るためにボロボロになりながらもヤプールと戦い勝利した。最後に子どもたちに残していたあの言葉………今の子どもたちもそれを守っていると私は信じている」

「………」

「タロウは甘えん坊だ。私によく抱き付いてくる。だが彼女も今じや立派なウルトラ戦士に成長してくれた。筆頭教官として宇宙警備隊員を育てていくのも難しいことだ………」

「えへへへへへ」

「レオは故郷を失って地球で過ごしていた。彼女は宇宙から迫りくる宇宙人と戦い負けたこともある。だがそれでもセブンの訓練で彼女は戦士として立派になっていくのを私は見ることにできなかった。地球だけじゃなくほかの場所でもバルウ星人の一味が暗躍していたからね。MACステーションが襲われたときも私は急いで向かったが助けることができなかった………」

「ゾフィー兄さん………」

「エイティはマイナスエネルギーで活性化した怪獣や邪悪な宇宙人と戦う為に中学校の教師としての立場を捨てなければいけなかった。一番辛かったのは彼女かもしれないな………許してくれとは言わない。」

「……ゾフィー兄さん」

「メビウスは…彼女が一番プレッシャーが高いかもしれないな。最初はルーキー戦士だった彼女も今ではウルトラ兄妹として、時には先輩として後輩の指導をするなど戦士として大きく成長した。そしてあのエンペラ星人を仲間たちと共に彼女は倒した。地球人との絆を大切にした戦士は彼女かもしれない。サコミズとの出会いは私にとっても大事なことだ。君もそうだろう、コスモス？」

「はい！」

「ゾフィー兄さん……」

「最後はヒカリだな。あの子とは小さい時から同じ学校に通っていたからね。当時命の固定化を成功をさせてくれたから、ウーマンやファイタス、そして私もこうして助かっている。だが彼女は、惑星アープがボガールによって滅ぼされてから、復讐の鎧を纏い戦ってきた。私も隊長として辛かったよ。友達として彼女の悲しみを助けることができなかった。だから彼女が無事に光の国に戻ったときは嬉しかったさ」

「……すまないゾフィー、復讐の鎧を纏っていた私は……お前の前に現れることができなかった」

「ヒカリ……」

「あいつがそんな思いをしていたなんて私は知らなかった。惑星アープを滅ぼされてボガールを倒す為に私はかつての自分を捨てた。なのにあいつは私のことを親友と呼んでくれた。私は……私は……!!」

ヒカリは涙を流しながらゾフィーに「ごめんなさい」と呟いていた。メビウスは彼女の背中をさすった。さて場所を居酒屋に戻すと、酒が進んでいた。

「……ふう……」

「ゾフィーさん飲んでいますか？」

「ああ、コスモス、飲んでいるよ。色々長かったなと思ってね。」

「？」

「ウルトラウーマンベリアル、あの人は私にとって色々とお世話になった人なんだ。私の父が死んだ時、彼女の家でお世話になってい

んだよ」

「そんなことが……」

「ああ、だから彼女に恩を返す為に宇宙警備隊に入り共に戦えるのを楽しみにしていたんだ。だが……彼女がプラズマスパークコアを触り光の国から追放された。そして次に現れた時はレイブラッド星人に乗っ取られた姿で光の国を破壊をしようとしていた。私は彼女を止めようと奮闘したがあしらわれてしまった。忘れもしないさ……ゼロがアナザースペースで彼女を倒したことを知ったときはもう二度とあの人と共に戦えないんだと……悲しかった。何もお礼もできないままあの人は旅立ってしまったからな」

「……」

ベリアルことベルのことを話すゾフィーの声はいつもと違い寂しい声だった。ゾフィーにとって彼女は義母のような存在だ。だからこそゾフィーは悲しい思いが募っていた。

「だけどある日プラズマスパークコアを見ていると一つの影がそこにいた。私は敵対宇宙人が侵入したのかと思い、構えていた。そこにいたのはレイブラッド星人に乗っ取られる前のベリアルさんだった。私は嬉しかった。こうしてまた彼女と共に戦えることに……あの人がベルさんと名乗っても私にとってはウルトラウーマンベリアルさんだから」

「……ゾフィーさん。」

「ふふふ、すまないね。見つともないところをさらしてしまった……私も本当は愚痴りたいと思っているさ。だけど一番上の長男として立っている以上、あの子達に弱いところを見せるわけにはいかないからね。まあ今はお酒を飲んでいる影響かもしれないが」
そのままビールのお代わりを頼んで彼は飲んでいた。一方で話を聞いていたウルトラ姉妹達は先ほどのゾフィーの言葉について、思うところがあつたようだ。

「……私達、ゾフィーに頼ってばかりだったわね。」

「だな。ゾフィーの弱っている姿は見たことがないな。一番上に立つ長男として……見せられない、か……」

「ゾフィーお兄ちゃんらしいけど……頼ってほしかつたな……」
「ええ私もそう思いますジャック姉さん。ゾフィー兄さんは一人で抱えることが多いです。私達も何か力になることはないのでしょうか？」

全員で考えている中、ゾフィーは酒がさらに進んでいた。コスモスは心配になり、声をかけた。

「ゾフィーさん、その、大丈夫なんですか？そんなにお酒を飲んで」

「大丈夫だよ。明日は仕事が休みだからね……君こそ大丈夫なのかい？」

「これでもお酒は強い方ですから。」

「そうか……そういえば泊まる場所はあるのかい？」

「あ……」

「なら私の家で二次会でもしようか？」

「ぜひ……」

こうしてゾフィーに連れられたコスモスは彼の家に泊まることになった。それを聞いていた姉妹達は黒いオーラを纏う。明日になるのを楽しみにしていたが、ゾフィーが休みだと忘れていたのだ。彼女達はうっぴんを晴らす為に宇宙で暴れているエイリアンや怪獣達に八つ当たりをするのであった。

ゾフィーのウルトラ姉妹紹介

ゾフィースide

やあゾフィーだよ。今日は私の自宅から君達にウルトラ姉妹達のことを詳しく紹介をしようと思っている。

さてまずは、ウルトラウーマンから紹介をしよう。

ウルトラウーマン 身長40m 体重………は書かないでお願い。

ウルトラ兄妹の長女だ。地球に初めて現れた戦士だね。怪獣墓場へ護送中に脱出した宇宙怪獣ベムラーを追跡して地球を訪れた際にハヤタ・レイカの乗るジェットビートルと激突して、彼女の命を奪ってしまった。

それから、彼女は自分の命をレイカに与えて一心同体となり地球の平和を守るために戦ったんだ。

スペシウム光線と八つ裂き光輪が主な必殺技だね。

次は、ウルトラウーマンセブン。身長はマイクロから40mになることができるウルトラウーマンで元は宇宙警備隊員ではなく宇宙警備隊恒点観測員340号と呼ばれていたことがある。太陽系付近の宇宙軌道図を作成するために地球へ訪れた際に一人の女性を救った。それが彼女が姿と魂をモデルにした人物薩摩 佳代子との出会いでもある。

彼女はモロボシ・ユウと名乗り地球に迫りくる侵略者たちと戦ったが、元は恒点観測員である彼女の体は徐々にボロボロになってしまった。しかし彼女は、最後の戦いでもエネルギーが空の状態で、ゴース星人達と戦ったんだ。そして、ウルトラ警備隊の援護で双頭怪獣改造パンドンを倒して、地球から去った。

主な必殺技はワイドショット、アイスラッガー、エメリウム光線だ。ウルトラウーマンジャック………帰ってきたウルトラウーマン、ウルトラウーマン二世、新ウルトラウーマンとも呼ばれている。身長40mの彼女は、ウーマンやセブンが守った地球へやってきた。この時期の地球は、再び怪獣たちが目覚めた「怪獣総進撃」時代だったんだ。

彼女は地球へとやってきて、オイル怪獣タツコングを退かせたが、子どもを救った郷 彩夏と一体化をして、MAT（怪獣攻撃隊）に入隊して地球を守るために戦い続けた。最後は、光の国とバット星人の戦争を終わらせる為、郷と一体化したまま地球から帰ってきた。

こんなことは初めてだった。現在はどちらの意識も一体化をしているため、車等の機械整備やおはぎ作りなどはおそらく郷の方がメインとなっている。

主な必殺技はスペシウム光線、そして、万能武器ウルトラブレスレットである。

ウルトラウーマンエース：身長40mで「光線技のエース」とも「ギロチン王女」とも呼ばれているウルトラウーマンだ。彼女はジャックが去った地球で異次元人ヤプールが作りだした怪獣よりも強い超獣と戦った。

その時、二人の女性：北斗 恵子と南 夕子に自分の命を託した。やがて南 夕子は月星人たちがいる冥王星へと旅立った後、北斗が一人で変身をするようになった。

特に切断技に関しては彼女がピカ一で、教えた身としては複雑な気持ちでもあるが、彼女が喜んでくれていたのでまあいいか。

彼女のウルトラホールは太陽エネルギーを吸収したり私達ウルトラ兄妹のエネルギーを集めることが可能だ。のちにウルトラウーマンゼットにもウルトラホールがあったので唯一のホール持ちではなくなっただけだ。

主な必殺技はメタリウム光線に、ウルトラギロチンを始めとする切断技である。

ウルトラウーマンタロウ：身長53メートル、ウルトラの父ことケンさん、ウルトラの母ことマリーさんの実の子だ。頭部にウルトラホーンを持つ彼女は、エースが戦った超獣よりも強い大怪獣と戦った戦士でもある。彼女は、東 飛鳥と一体化して地球で戦い続けた。

現在は筆頭教官として、ウルトラコロセウムでエイティたちと一緒に後輩たちを指導をしている。私からエースの5人が彼女のウルトラホーンとカラータイマーにエネルギーを送り合体をすることで

スーパーウルトラウーマンタロウになることができる。

主な必殺技はストリウム光線、ウルトラダイナマイトだ。

ウルトラウーマンレオ：彼女はL77星の出身の戦士で、宇宙拳法の達人である。セブンが戦えなくなったり、彼女を助けて、鍛えられて今のウルトラウーマンになった。

オオトリ・ユナとして過ごしていた彼女は戦士としては当初は未熟でセブンが鍛えて今の實力になったんだ。だが彼女は宇宙パトロール隊M A Cの仲間や大事な友達を失った時……私達もブラック指令が送りだす円盤生物と宇宙で交戦をしていたため地球に行くことができなかった。

彼女の主な得意技はレオキック、妹のアストラと放つウルトラダブルフラッシュャーだ。

ウルトラウーマンエイティ：「ウルトラウーマン先生」とも呼ばれているウルトラ戦士だ。アクロバティックな動きで怪獣や宇宙人と戦った。地球上での姿は矢的 霊で桜ヶ丘中学校の先生として赴任した同時にU G M隊員に就任したという二足の草鞋状態だった。

だが次々に現れる怪獣や宇宙人と戦う為に彼女は教師の立場を捨てなければならなかった。

彼女の生徒たちとは、メビウスが地球を守っていた時に再会した。彼女はいつてたよ、『ありがとう、ウルトラウーマン先生』といわれましたよ。まさか正体が塚本にばれていたとはね」

彼女の主な必殺技はサクシウム光線、バックルビームだ。

ウルトラウーマンメビウス：エイティが地球を去ってから25年が経った時、突如として怪獣が目覚め、一つの光が……って私はなぜナレーションみたいなことをしているのだろうか？

それがメビウスだ。メビウスは改造バキシムを倒した功績から私が派遣を命じたルーキーウルトラ戦士だ。彼女が地球で出来た仲間たちとの共闘、正体がばれても失われない絆、それが彼女を強くしていき、怪獣軍団……もといエンペラ大軍団の暗黒四天王のうちの三人を倒し、あの暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人も仲間たちと共に倒した。

彼女はゼロ以外では唯一のタイプチェンジが可能で、ヒカリのナイ

トブレスを借りて変身をするメビウスブレイブ、仲間との絆で授かったバーニングブレイブ、その仲間とヒカリが融合をした姿フェニックスブレイブ、そして私達ウルトラ兄妹と一体化をするメビウスインフィニティーとパワーアップをする。

得意技はメビウムシュートだ。

ウルトラウーマンヒカリ：私とウルトラ小学校時代からの付き合いだ。惑星アーブが滅ぼされたと聞いた時に、ヒカリがいなくなったことも報告を受けていた。そして後に、宇宙各地で現れた鎧を纏ったウーマン「ハンターナイトツルギ」の報告を受けた。映像を見て私はすぐに鎧を纏った戦士がヒカリだとわかった。

彼女が鎧を解除された後は、宇宙技術局でナイトインバーやゼツトライザー等を作成したんだ。

「……………」

改めて簡潔に紹介したが、みんな優秀な自慢の姉妹達だと思うよ。ほかにもグレートやパワード、そしてゴライアン達もいるからね。

「……………ガージェイアン達も新たな武装を手にして戦うことが可能となったからね。ヒカリやトレギアが戻ってきてくれたおかげでガージェイアン達の戦闘力等も上げることができた。」

私はヒカリの紹介データを閉じて宇宙へ飛び立つ。今日は休みだからね。えっ、コスモス？帰ったよ。朝ごはんを食べた後、彼女もパトロールをするために自分のコスモスペースへと帰っていった。

私がやってきた場所は宇宙墓場だ。ウルトラウーマンベリアルがプラズマスパークコアを奪いギガバトルナイザーの力を使い怪獣たちを蘇らせたり、惑星ヨミの亡霊魔導士レイバトスが怪獣たちを復活させようとしたのもこの場所だったな。

「……………何もかも静かだな……………シューワ!!」

熱線が飛んできたので回避して、目の前に現れた怪獣に構える。あれは宇宙怪獣ベムラーか……………ウーマンが地球で最初に戦った怪獣。だがなぜ？考えている暇はないか。

「いくぞ!!シューワ!!」

ゾファイ side 終了

ベムラーは咆哮をしてから口から熱線を放つが、ゾファイはジャンプで躲してから頭部にキックをお見舞いさせる。ベムラーが後ろに倒れて起き上がる前に決着をつける為に、スペシウム光線を構えようとした。しかし、突然両手を挟まれたので、後ろを見ると岩石怪獣サドラがゾファイの両手を自慢のハサミで挟んでいた。

「ぐ!!」

さらに地面から地底怪獣のグドンやテレスドンも現れて、倒れていたベムラーも立ちあがり三体はつかまれて動けないゾファイに接近して鞭で叩いたり、尻尾で攻撃をする。そして、テレスドンの頭突きがゾファイの腹部に命中する。

「ぐあ!!」

怪獣たちの猛攻を受けながらもゾファイは全身にエネルギーを集めて一気に放出して四体の怪獣を吹き飛ばした。

「今だ!!」

彼は右手にエネルギーを集めて前につきだす。

「M87光線!!」

放たれたM87光線が怪獣たちに命中して爆散した。カラータイマーが点滅する中、彼はなぜ怪獣が現れたのかと考えていると笑い声が聞こえてきた。

「ガッツ星人……そうか貴様が怪獣墓場の怪獣を!!」

「そのとおりだ。そして……」

ガッツ星人は分身をして両手を前につきだして網状の光線を放ちゾファイの体を巻き付かせていく。彼のカラータイマーの点滅が速くなっていきゾファイはこのままではとウルトラサインを飛ばす。

カラータイマーの点滅が消えて彼の両目から光が消える。ガッツ星人はそのまま光線を放ち彼を十字架に閉じ込める。

「ふっふっふっふっ……ついにやったぞ!!このガッツ星人がゾファイを倒したんだ!!ふっはっはっはっは!!」

「ダツタラオマエモコデオワリダナ」

「え?」

突然として頭をつかまれて無理やり振り向かされると二本のスラッガーを頭部に赤と青のボディースーツを纏った若きウルトラウーマンゼロが立っていた。彼女の目からハイライトが消えた状態だ。

「ひ、ひいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「ドウシタ？ サツキノイセイハドコニツタノカナ？ ゴファイタイチヨウヲオシタツテイツタノハドコノクチバシダ？」

ゼロはそのまま光りだしてストロングコロナゼロ、ルナミラクルゼロの二人に分身した。ストロングコロナゼロがガッツ星人を上空に投げるとルナミラクルゼロが飛びあがり構える。

「ミラクルゼロスラッガー」

分身をしたゼロスラッガーがガッツ星人を斬り裂いていくとそのままルナミラクルゼロはかかと落としをして地上に落下させた。そしてらストロングコロナゼロは左手のウルティメイトブレスを叩く。

「ガルネイドバスター!!」

放たれたガルネイドバスターがガッツ星人に命中して爆散する。ルナミラクルゼロは十字架につかまったゴファイアの十字架を壊してエネルギーを託すとゴファイアのカラータイマーが赤く点滅をしてゼロは元の一人に戻る。

「大丈夫か隊長？」

「ああゼロ、お前が駆けつけてくれたのだな？」

「ああウルトラサインが上がったからな。丁度戻ってきたときに見つけて。駆けつけたらガッツ星人が笑っていて十字架に隊長が……」

「休暇の身なのに情けないな……」

「え？ 隊長休暇だったのか？」

「ああ、怪獣墓場を訪れたらグドン、テレスドン、ベムラー、サドラに襲われてね」

「まるで私がここに二度目に訪れた時みたいだな」

「ああ……前はバット星人グラシエが暗躍していたな。いずれにしてもおつとつとつと」

「隊長!!」

「大丈夫だ」

ゼロはゾフィーを支えて光の国へ帰還をした。彼がウルトラクリニックに運ばれたのを聞いてメビウスが入ってきた。

「ゾフィー兄さん大丈夫ですか!？」

「ああ大丈夫だ。ゼロが駆けつけてくれたからね……（しかしガッツ星人は以前倒したはずだが？別個体と見ていいだろうな……それに怪獣墓場……か。何事もなければいいのだが……）」

ベツトの上でゾフィーは怪獣墓場に現れた怪獣、ガッツ星人のことを考えたが休むことにした。

怪獣墓場。

「全くガッツ星人も役に立たないですね。まあいいでしょう。陛下……もう少しお待ちください。あなたを必ず蘇らせますよ。我らダークネスファイブが！」

ゾファイの報告。

ウルトラクリニックにマントを羽織った二人の戦士がやってきた。大隊長を務めるウルトラの父とその補佐をするウルトラウーマンベルである。二人はゾファイが入院している部屋の前でノックをしてから中に入る。

「入るわよ、ゾファイ」

「おい、ベリアル！まだゾファイは良いと言っていない気が……」
ベリアルことベルがゾファイからの返答を待たずに中に入ったので、ケンもゾファイも苦笑いをした。

「えつと大隊長に大隊長補佐」

「今は警備隊本部じゃない。普段通りで呼んでくれ」

「わかりました」

「何があった？ゼロからだいたいこのことは聞いたが……」

ゾファイは怪獣墓場であったことを全て報告をした。突然のベムラー達の襲撃、ガッツ星人にとらわれたことなどもすべて話した。二人はゾファイの話聞いて考えていた。

「奴はお前を捕らえて何をしようとしたのか……」

「……」

ベルは何かを考えたのか部屋を出ようとした。ケンは立ちあがり彼女に声をかける。

「ベリアル？」

「少しだけやることできたわ。悪いけどケン、ゾファイを頼んだわよ」

ベルはウルトラクリニックを後にして、飛び立とうとしたがそこに二人のウルトラウーマンが現れる。

「どこに行く気だ、ベルの姐御」

「ゼロ、それにジード……」

ベルの前に現れたのはウルトラウーマンゼロとウルトラウーマンジードであった。

「ひどいよお母さん、一人で片付けようとするなんて」

「まったくあいつらだろ？おそろくもう一人のベリアルを蘇らせようと
してるんだろ？」

「その通りよ。そんなことになったらまたあの事件が起きてしまう。
だからその前に止める!!」

「なら早く行った方がいいね」

「だな、ゾフィー隊長を痛めつけた礼をしないとな」

「全く……」

ベルは呆れるがすぐに真面目な顔になる。そして、三人は怪獣墓場
の方へと飛びたつた。一方で怪獣墓場には五人の宇宙人と一匹の怪
獣がいた。メフィラス星人「魔導のスライ」、ヒツポリト星人「地獄
のジャタール」、テンペラー星人「極悪のヴィラニアス」と相棒の暴
君怪獣タイラント、グローザ星人「氷結のグロッケン」、デスレ星
雲人「炎上のデスローグ」である。

ダークネスファイブプラス一匹は、ウルトラウーマンベリアルの忠
実なる部下である。ベリアルが減んだ後、彼らは彼女を復活させるた
めに暗躍をしていた。

「さて、いよいよですよ」

「おお、ついに陛下が復活される時が来た!!」

「うむ、その為に、マイナスエネルギーやこのデビルスプリンターを回
収したのだからな!!」

「これでいよいよ俺達のボスが蘇るってもんだ!!」

「ぐおおおおお!!」

「さて最後の「そんなことさせると思っているのかしら!!」!!」

三つの光線が放たれて五人と一匹が回避すると、ウルトラウーマン
ベルとゼロ、ジードが着地をして彼らの前に現れる。

「やはり現れましたね。もう一人の陛下……」

「ええ、あんたたちのことだからもう一人の私を蘇らせると思ってたね。
ゾフィーを痛めつけたのもあいつの絶望するエネルギーを吸い取る
ためね？けどそれは失敗に終わったでしょ、スライ？」

「流石です。だから我々はほかの方法で復活させることにしたのです
よ。それはあなたがかってウルトラウーマンタロウと戦った際に生

「まれたものです」

「まさかデビルスプリンターのことか!!」

「その通り!俺達はこれを宇宙中から回収して陛下を復活させるためのエネルギーにしていたんだよ!!」

「そして今ここに陛下が復活する!!」

「みるがいい!!陛下が復活するのを!!」

全員が上の方を見るとアーマードダークネスが立っていた。ゼロはかつての戦いでベリアルに体に乗っ取られたことを思いだしたので舌打ちをする。

だがアーマードダークネスに光線が命中をする。全員がいったい誰かと見ているとM87光線の構えをしたゾフィーが現れた。

「ゾフィー隊長!?!」

「ゾフィー……」

「三人ともひどいな、黙って出ていくとは思っていませんでしたよ。あの悪魔を蘇らせないために動いたのはいいですが……これ以上宇宙の乱れをほっとくわけにはいかない!!」

「ゾフィー、ガッツ星人ネクロマが復活させた怪獣たちとの戦いでロボロになっていたはずですが……」

「あんなもの傷のうちにも入らない!さあ覚悟をするがいい!!」

ゾフィーは指をさすとダークネスファイブが笑いだす。

「二「ふふふふふはははははははははは!!」」

「何が可笑しい!!」

「遅かったのですよゾフィー、陛下は蘇りましたよ!!」

「何!?!」

アーマードダークネスの頭部が取れて現れたのはレイブラッド星人に乗っ取られたベルの姿である。

「ふっふっふっふ、ようやく蘇ることができたわ……」

「ツチ、成仏したと思ったらまた出て来やがって!」

「……ベルさん、ジード、ゼロ……あの悪魔は私が戦う。ほかをたのみたい」

「隊長……」

「ゾフィー……………」

「あなたたちが決着をつけたいように、私も決着（ケリ）をつけないといけませんので……………」

「わかったわ……………」その代わり、死ぬな。絶対に私達のところに帰ってきなさい。死んだら私が絶対に許さないわよ」

「はい！」

ゾフィーは飛び、アーマードダークネスを纏っているウルトラウーマンベリアルの前に立つ。

「ほう貴様が私と戦うのか。」

「……………」ああゼロ、ジード、そしてベルさんとの因縁を私が断つ!! 覚悟をしろベリアル!!」

「来るがいい!! 若造!!」

ゾフィーはウルトラブレスレットを変形させたウルトラランスを、ベリアルもダークネストライデントを構えた。

決着！ゾフィー対ベリアル！

「シエア!!」

ゾフィーは接近して、ウルトラランスを突き出す。ベリアルはダークトライデントでウルトラランスを受け止める。そして、お互いに接近してぶつかり合った。

「はっはっはっはっはっは!!楽しいなゾフィー!!」

「.....」

「だんまりか？まあいい、くらえ!!」

はじめさせた後、ダークトライデントに闇のエネルギーを集中させてレゾリウム光線をゾフィーに放った。

彼は回避した後、再び接近して蹴りを入れる。アーマードダークネスの堅い鎧にゾフィーの蹴りは効いておらず着地して振り返る。

「どうしたゾフィー？私を倒すんじゃないやなかったのか？」

「.....」

一方でダークネスファイブと戦うベル、ゼロ、ジードの三人……ジャタール、スライと交戦するベルは、スライが放ったメフィラスブレードを回避してベリアルリッパを放ち攻撃する。

「ぎよほほほほほほ!!」

「おら!!」

「ほげええええええええ!!」

ベルの蹴りがジャタールの腹部に命中して吹き飛ばした。スライは接近してブレードを振り下ろすが、彼女はギガバトルナイザーを発生させて受け止めた。スライは驚きながらも褒める。

「流石陛下ですね。ウルトラウーマンに戻られてもその強さは相変わらずですな」

「ありがとう。だが教えられたからな、私も……ウルトラウーマンとして!!」

スライの攻撃をはじめかせてギガバトルナイザーで叩きつける。一方でゼロはヴィラニアス&タイラントの極暴タッグと交戦していた。「どうしたウルトラウーマンゼロ!!行け相棒!!」

「ぎやおおおおおおおお!!」

タイラントはイカルスイアーからアロー光線を放つ。ゼロは回避してワイドゼロショットをヴィラニアスに放つがタイラントが前に立ち、光線を吸収する。

「ちい、タイラントの吸収能力は厄介だ……だつたら!!」

ゼロは走りながら光だした。ヴィラニアスは両手からウルトラ兄妹必殺光線を放つも、ゼロはルナミラクルゼロへと姿を変えて、素早い攻撃で二体を翻弄する。

「ぎやお!」

「ぐうううう、素早くなつたのか!」

「まだまだいくぜえええええええええ!!」

一方、ジードはグロツケンとデスローグのコンビに対して、マグニフィセントに変わり、デスローグをつかんで投げ飛ばした。

「この野郎!!」

グロツケンは口から冷凍ガスを放つもジードはマグニフィセントから姿をソリッドバーニングへと変えて構える。

「ストライクブースト!!」

熱光線のストライクブーストがグロツケンの冷凍ガスを粉碎した。

「やべ!!」

デスローグは火球を放つが、ジードはアクロスマツシャーへと姿を変えてジードクローのトリガーを二回押しして構える。

「コークスクリュージャミング!!」

火球をはじめさせて、構え直してから、接近して、ジードクローで斬りつける。

「ウルトラギロチン!!」

複数のウルトラスラッシュがベリアルに放たれるが彼女はダークトライデントを回転させてウルトラギロチンをガードをする。

「……ならば一気に蹴りをつける!!」

ウルトラランスをウルトラソードへと変えたゾフィーは光エネルギーを剣に集中させると、ウルトラソードの刀身が光に包まれていく。そして、彼はベリアルに接近して斬りかかる。ベリアルはダーク

トライデントで攻撃を受け止めようとしたが、ウルトラソードの威力が高くトライデントは弾かれた。

ゼロは戦いを見ながら、嫌な予感がしていた。

(待てよ、あたしもウルティメイトゼロになったときに奴にとどめを刺した。まさか奴は!!)

ゼロは向かおうとしたが、極暴タッグに邪魔をされて行くことができない。ゾフィーはウルトラソードにエネルギーを込めてベリアルが装着しているアーマードダークネスの鎧を貫いた。

「ぐは!!」

鎧が爆散して、ゾフィーはウルトラソードについていた鎧を払った。だがそれが突然煙となりゾフィーの体に入りこんできた。

「ぐあ!!があああああああああああああ!!」

「まさか!!」

「その通りですよ、もう一人の陛下。あの方はゾフィーの体を狙っていたのです!!」

「く!!ゾフィー!!」

「が!!ああああああああああああああああああああああああああ!!」

ゾフィーの中にベリアルの闇のエネルギーが入りこんでいく。

ゾフィースide

「ふふふふふふふふふふ」

「ベリアル……それが貴様の狙いか!!」

「その通りだ」

やられた。なぜ思い出せなかったのだ……ウルトラマンゼロがカイザーダークネスと戦った後、そのエネルギーをゼロの体に入りこんでゼロダークネスとして乗っ取ったな。まさか自分を乗っ取るとはな……つて!?

「待て!!」

「どうしたいきなり?」

「なぜ貴様、裸なんだああああああああああああああああああああああああ!!」

の体が光りだしたと思ったら、ゼロが現れてゾフィーを支える。

「……………」

「ゼロ？顔が真っ赤だけどどうしたの？」

「……………何でも、ねえよ。」

「？」

ベルもなぜ彼女が顔を真っ赤にしているのか首をかしげたが、ゾフィーが気まずそうに飛び立つのでゼロ達と共に追いかけた。

黒いベリアルがいる理由。

ゾフィースィド

私たちは気まずい状態で飛んでいた。まあゼロは私の……あれを見てしまったのだからな……ってあれ？一緒に風呂に入ったときに見たと思ったが、よく考えたらあの時は子どもの姿になっていたからな。慌てて当然だ。

光の国に到着後、私は大隊長室へと戻りケンさんに報告をした。

「そうか、やはりオメガ・アーマゲドンで姿を消したダークネスファイブは生き残っていたのか……それに、ベリアルがゾフィーの体を……」

「はい大隊長。ゼロのおかげで乗っ取られることはなかったのですが……」

「だけど隊長が抵抗していたおかげでも、あるんだぜ？」

「どうしたのゼロ？ゾフィーさんの体から出てきてから顔が赤いけど？」

「なんでもねえよ（言えねえよ!!隊長の立派なあれをみちまったなんてよ!!）」

ゼロはシャイニングゼロになって、ゾフィーの体の中に入った際に、ベリアルが彼を襲おうとしていたのを助けたので、彼の立派なものを見てしまったからゾフィーを直視できないのである。

「ベリアルの復活を阻止出来たからよかったものの……いずれにせよ、四人とも勝手な行動は慎んでほしい」

「……すみませんでした」

「何事もなかったからいいが、何かあったらどうする気だったの？特にゾフィー……君は姉妹達を悲しませたいのか？」

「……言葉ありません、大隊長。以後気を付けます」

私は謝った後、隊長室へと戻った。トレギアの姿が見えないのでヒカカろうとした。しかし、眠気が突然発生をしまい私は意識を失ってしまう。

ゾファイーside終了

ゾファイーは目を覚ますと何も無い場所にいた。辺りを見ながら歩いていると、突如として攻撃が放たれてきたので、回避する。なんとギガバトルナイザーを構えたあのベリアルがいた。

「ベリアル……なぜ貴様が!？」

「ふん、いわゆる保険つてやつだ。あの時、奴の力でお前の体から出る瞬間にベリアル細胞を貴様の中に撃ちこんでいたのさ」

「……………」

「そして、私はお前の体の中で肉体を再構成していたというわけだ」

ゾファイーは構えようとしたが、体から力が抜けていく感じがして膝をついてしまう。

「か、体が動かすことができない……………」

「ふん、私の力が入っているからな。貴様が光なら私は闇……………」

それがどういう意味かわかるだろう?」

「……………ダークフィールド。」

「そう呼べばいいさ。さて今回は誰にも邪魔されずに貴様をいたぶることが出来るな」

「シエア!!」

ゾファイーはM87光線を放った。彼女はギガバトルナイザーを回転させてM87光線をガードをする。そのままギガバトルナイザーを彼の腹に叩きつける。

「が!!」

吹き飛ばされてしまうが、バク転して態勢を立て直して構える。ベリアルはほーうと言いながらギガバトルナイザーを構えなおす。

一方で外では、ベルが嫌な予感がするという理由で、ウルトラ姉妹達を招集していた。ウルトラウーマンマリーことウルトラの母は寝ているゾファイーの頭に手を乗せていた。そして彼女は頭から手を離す。

「ベリアルがゾファイーの体の中で復活したようです!今、ゾファイーは奮闘をしています!」

「何てしぶとい!!」

「マリーさん、私達もゾフィーの体の中に!!」

「駄目です。彼の中に入れてはいわ」

「どうしてですか!？」

「奴が何か細工をしたのね、前にゼロに入られたから今度は誰にも邪魔されないように。」

「その通りです、ベル」

「そんな、私達は見ていられるだけしかできないの?」

エースは拳を握りしめながらゾフィーを見ている。一方で中では、ベリアルショットの攻撃をウルトラバリアーでガードしているゾフィーの姿があった。ウルトラバリアーに罅が入っていき彼は横に回避をする。

「しつこいわね、ゾフィー!」

「お前にだけは言われたくないな。それに、なぜ私の体にこだわるかわかった!」

「何?」

「お前の中にも残っていたのだな……良心が」

「なんだと?」

ゾフィーは戦っている間、なぜベリアルが自分に拘るのかを考えていたのだ。そして、気づいたのだ、闇に堕ちても光はまだあると。

「ふぎけるな!!私に良心などない!!」

「いやあなたがベリアルさんなら残っていても当然だ!!ならなぜ光の国に攻めてきた時、私をほっておいて中へ行った!!」

「それは貴様が虫の息だったからだ!だから放っておいた!」

「……ならなぜ怪獣墓場で私を撃った後、とどめを刺そうとしなかった?お前には余裕があったはずだ!」

「……!」

「ベリアルさん、あなたにだって光が「黙れ!!」!!」

「知ったようなことを言うな!!お前にはわかるまい!!マリーに負けて悔しくて……それなのに知ったようなようかことを言うなあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

彼女はデスシウム光線をゾフィーに向けて放った。だが彼はバリアーをせずに自分の体で受け止めた。

「何?!」

デスシウム光線をやめて彼女は走り、彼を支える。ベリアル自身もなぜ自分がこんなことをしているのかわからなかった。

「な、なぜだ……なぜ私が……どうして涙が止まらない!?!」

「そ、それは……あなたが優しいからですよ。普段は出ないようにしてましたよね?ですが、私という子どもを得てからあなたも関わりたいとずっと思っていたのではありませんか?」

「し、知っていたのか……私のことを……」

「私を鍛えてくれたのはあなたでしょう。戦い方もあなたを参考にしてきましたから……」

「……」

「ありがとうございます。もう一人の私の義母さん。」

「あ……あああ……ああああああああああああああああああああああああああ!!」

彼女はゾフィーに抱き付いたまま涙を流していた。ゾフィー自身も彼女を抱きしめる。そして現実に戻りゾフィーは目を覚ました。彼の手を握っていたジャックとタロウは彼が目を覚めたのを見た。

「ゾフィー（お兄ちゃん!!） 兄さん!!」

「迷惑をかけたね二人とも、もう大丈夫だ。」

「ゾフィー!!」

「ゾフィー、お帰りなさい。」

「ただいま戻りましたマリーさん、お義母さん。」

「ゾフィー……」

「私はもう一人のお義母さんを助けることができました。彼女は……、いえ、何でもありません（私の中で過ごすことになったのは隠しておこう）」

ゾフィーは、ベリアルが自分の中で住むことになったことやベリアルル力を使えるようになったことを隠しておくことにした。おそら

くいつかはばれるであろう。しかし、もう一人の義母を二度と喪わな
いために、彼は隠すことにした。

ベリアルルの力の制御、ゾフィーの特訓

重力惑星「ガンズ」、ここで修行をする一人のウルトラ戦士がいた。そう、我らのゾフィーである。

諸事情により、彼の体内にはウルトラウーマンベリアルが住んでいる。彼女の力を制御するためにこの星で特訓をしていたのだ。しかし、彼女が生きていることを知られるわけにはいかないため、この辺境の星で特訓をしていたのである。

「はああああああああ!!」

彼の両手からベリアルリツパー改めてゾフィーリツパーが放たれて、岩に命中させると、両手に闇と光のエネルギーを集めてそれを十字に構える。

「ゼットシウム光線!!」

ウルトラウーマンオーブサンダーブレスターの得意技であるゼットシウム光線をゾフィー本人が放った。彼は休憩するために地面に座ると、光の粒子のベリアルが現れる。

「流石ゾフィー、私の闇の力の制御できているではないか」

「ありがとうございます、ベリアルさん………なんだか不思議な気分ですよ。ベルさんもそうですが………こうしてもう一人のお義母さんと話せるのは」

「……まあな、私自身もこうなるとは思ってもいなかった………感謝するぞゾフィー」

ベリアルが頭を下げたので、ゾフィーは驚きながらも立ちあがり、修行の続きをしようとした瞬間、攻撃が飛んできたので回避する。彼が身構えていると、現れたのはメビウスだった。

「メビウス? いや、違う! お前は何者だ!？」

「シエア!!」

メビウスがゾフィーに襲い掛かってきた。彼女が放つパンチを受け止めると、彼女の腕や足、腹部にプロテクターが装着されているのを見てゾフィーは偽物と判断して蹴りを入れる。

相手はメビウムシールドを放ってきた。ゾフィーはスペシウム

光線で相殺をすると、そのまま接近してウルトラブレスレットをウルトラソードに変形させて真つ二つに斬り裂いた。

「これはロボットか……ぬお!？」

光線が飛んできたので、振り返るとそこにはウーマン、セブン、ジャック、エースの四人が立っていた。だが彼女達も先ほどのメビウス同様にプロテクターが装着されており、ゾフィーは連中の正体を察した。

「そうか、お前たちはSR（サロメロボット）シリーズだな！」

「へア！」

「デュワ！」

「ジェア！」

「ふうふうふう!!」

四体はゾフィーに襲い掛かってきた。ニセセブンはエメリウム光線をゾフィーに放つが、彼は回避してゼット光線を放ちダメージを与える。すると、ニセウーマンとニセジャックはウルトララッシュをゾフィーに放つが、彼は上空へと飛び回避する。

「ポワ!!」

ニセエースがバーチカルギロチンをゾフィーに放ってきた。彼はウルトラブレスレットをウルトラライフエンダーに変えてガードする。

地面に着地をすると、ニセウーマンとニセセブンはゾフィーの横に立ち、ウルトラキックを彼のボディに放つ。

「ぐ!!」

彼はクロスガードで防ぐと、ニセジャックが流星キックを放ち彼を吹き飛ばす。

「サロメ星人め、性懲りも無くニセウルトラ兄妹を作ったのか……絶対に許すわけにはいかない!! シュワ!!」

ゾフィーはニセエースをつかむと投げ飛ばした。ニセジャックはウルトラランスを投げつけるが、彼はそれをキャッチをしてなげ返して彼女の胴体を貫いた。ニセジャックはそのまま爆発したので、今度はニセエースにM87光線Bを放ち撃破する。

ニセウーマンとニセセブンはゾフィーに攻撃をするために接近をする。二人は同時に蹴りを入れてくるが彼は二人の攻撃を受け流すと衝撃波を放ち二人を吹き飛ばした。

ゾフィーは右手にエネルギーを集中させてから振り返り構える。

「M87光線!!」

「へア!!」

「デユワ!!」

ニセウーマン達もスペシウム光線、ワイドショットを構えてゾフィーのM87光線に対抗をしようとした。彼は本気で撃つてはいないが、二人の光線を粉碎をした。そして、二体はM87光線を受けて爆発する。

彼自身は拳を握りしめて姉妹達をベースに作りだした侵略宇宙人サロメ星人に怒りを燃やしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『流石宇宙警備隊長ゾフィー!!』

「サロメ星人!!まだ宇宙征服を企んでいるのなら私が阻止をする!!」

『貴様のできるかな?サロメ星の技術で生み出したウルトラ姉妹相手に!!いいよ!!』

宇宙船からさらにウルトラウーマンタロウ、レオ、エイティのロボットが現れると、ゾフィーは怒りが頂点に達した。彼が構えようとしたときに上空から光線が放たれる。一体何かと見ているとゾフィーの前に着地をする戦士たちが現れた。

「カラレス!ドリユー!ザージ!?!どうしてここが?」

「大丈夫かゾフィー?」

「フレアの占いでお前がピンチだとわかってな。私達が駆けつけたのさ。なるほど・・・・・・・・私の弟子、タロウの姿をしたロボットか」

「ゾフィー、ここは私達に任せてくれ・・・・・・・・君は今のうちにサロメ星人の宇宙船を!!」

「すまない!」

ゾフィーはサロメ星人の宇宙船を倒す為に宇宙へと飛び立つ。カラレス、ドリユー、ザージはタロウ、レオ、エイティのサロメロボッ

トを見ていた。

「確かに似ているわね」

「ああレオさまの姿を似せているが所詮ロボットだ。」

「そういうこと。お前たちは弟子を相手にしたらどう？私はウルトラウーマン先生と呼ばれている彼女と戦わせてもらう」

「わかった」

「任せなさい」

カラレスはニセタロウと交戦をする。彼女が放つ拳をカラレスは簡単にはじかせている。

「甘いよ。今のタロウに比べたら全然!!おりやああああああああ!!」

ニセタロウをつかんで投げ飛ばす。ニセタロウは投げ飛ばされた後に立ちあがり構える。

「ならこちらもストリウム光線!!」

ニセタロウが放ったストリウム光線にカラレス自身もストリウム光線を放ちぶつかり合う。だがカラレスのストリウム光線が押しよせいきニセタロウに命中して爆散する。

一方でニセレオと戦うドリュウは、かつて自身が仕えていたレオの成長をした姿を見て涙を流した。

「成長したレオさまの姿を見て私は……だからこそ模造された貴様を許すわけにはいかない!!であ!!とう!!」

ドリュウの連続した蹴りがニセレオの体に命中する。ニセレオはこれで決めるかのように構える。

「来るか……なら!!」

ドリュウも飛び、回転を始める。彼女の必殺技ドリュートルネードでニセレオのレオキックと激突をする。

「であああああああああああああああああああああああああ!!」

彼女の蹴りがニセレオのボディに命中して貫通し、爆発する。一方でザージュはニセエイティと交戦をしていた。

ニセエイティが放ったサクシウム光線を躲して彼女は右手に冷氣

の刃を作り斬りかかる。

「流石エイティのロボットだけあるわね。」

「シヨワ!!」

ニセエイティはウルトラレイランスを放ったが、ザージは躲していいく。ニセエイティは突撃して蹴りを入れようとしたが、突然として自身の体が動き辛くなったことに気づいた。

「今更遅いわよ。あなたの関節は凍らせたからね。終わりよ!」

彼女が放った斬撃がニセエイティを斬り裂いて倒した。一方で宇宙船にいたサロメ星人はニセ姉妹達が次々と倒されたので動揺していた。

「馬鹿な、敗れたというのか!? 本物と同様の能力を持っているはずなのにな!!」

「そのとおりだサロメ星人!!」

「!!」

サロメ星人が画面を見ると、ゾフィーがM87光線の構えをしていた。

「お前たちが作ったとしても彼女達には勝てない。ただ能力をコピーをしただけのロボットが心を持った本物に勝てるわけがない!! くらえ!! M87光線!!」

放たれたM87光線がサロメ星人の宇宙船に命中して爆散した。

彼は構えを解くと、ほかの三人が宇宙へと上がってきた。

「やったなゾフィー!!」

「ああカラレス、ザージ、ドリユー、ありがとう!」

「気にするなんて、ゾフィー」

「そのとおりだ。私達は仲間だろ?」

「そうだな!」

ゾフィー達はサロメ星人一派を倒して光の国の方へと飛んで行く。ベリアルを制御できたのも良い収穫であった。

臨時講師ゾフィー

宇宙警備隊学校……通称ウルトラ学校、ここでは宇宙警備隊の士官候補生達が警備隊員になるための勉強や訓練に励んでいる場所だ。その場所に一人のウルトラ戦士が教壇に立つことになった。

生徒たちは授業の時間まではしゃべったり復習をしたりして待機している。そして、ベルが鳴り、全員が椅子に座り、先生を待っている。と入ってきた先生に驚くことになった。

「え!?!」

「嘘?!」

「やあ皆、今日一日だけ講師をすることになったゾフィーだ。よろしく頼む」

入ってきたのは、自分たちが入ろうとしている宇宙警備隊の隊長を務めるゾフィーだったからだ。彼が教壇の方へと移動すると、一人の生徒が手を挙げた。

「はい!!」

「はい、どうぞ」

「ゾフィー隊長は今日はどうしてこちらに?」

「質問に答えよう。実は前にエイティ教官から頼まれていてね……やっつと予定が決まったのが今日なんだ。では号令を頼む」

「あ、起立!!礼!」

「……よろしくお願ひします!!」

「着席!!」

(ふむ、エイティの指導が上手くいっているようだな……。流石ウルトラウーマン先生だよ。)「さて今日は私と一緒に怪獣や宇宙人たちの勉強をしていこうと思う。これから君達も宇宙警備隊に入った様々な星に行くことがある。もちろん宇宙人や怪獣とも戦うことがあるだろう。ここで皆しっかりと学んで訓練に励んでほしい。」

「……はい!!」

教室の外ではタロウとエイティがゾフィーの様子を見ていた。メビウスとレオ姉妹は今日は指導の日なので行けずにシヨボンと落ち

込んでいた。

「流石ゾフィー兄さんだね。生徒たちも必死になって勉強してる」

「当たり前ですよ。私たちもそうですが……ゾフィー兄さんには色々教えてもらっていましたからね」

「そういえばまだメビウスが訓練生の時もゾフィー兄さんが講師として来てくれたことはあつたね。」

「ええ。あの時、ウーマン姉さんたちはヤプールの復活を予見して月で待機してましたからね。そして……」

「だったね。私達も必死で彼女たちを鍛えていたけど……ゾフィー兄さんはそれ以上に動いていたのを覚えてるよ」

タロウ達は昔のことを思い出した。ウルトラウーマン、セブン、ジャック、エースの四人は、ヤプールが生み出した究極超獣Uキラザウルスをファイナルクロスシールドを使い、ヤプールの怨念ごと神戸港に封印したが、エネルギーの大半を消耗してしまい、地球に滞在をすることになったのだ。

ゾフィーはその間も宇宙をパトロールをしたり姉妹達の仕事を自分で引き受けていた。

（やはりウーマン達がいなのはつらいな、だが一番つらいのは彼女達だ。ヤプールの怨念を完全に封印をするためにはファイナルクロスシールドを使うしかなかった。しかし……）

ゾフィーは山のような書類を見て「今日も徹夜か……」とため息をつきながら書類に手を付けていく。今みたいにトレギアやダークロプスゼロがないので彼は一人で書類のチェックや判子を押していた。

ある日のことゾフィーが倒れた。原因は過労ということだった。ウルトラの父もこれには困ってしまい、タロウ達もゾフィーを手伝うように命じた。

三日後、ゾフィーは仕事に復帰して、エイティヤレオ、タロウに礼を言う。

「助かったよ三人とも、大変だっただろ？」

「いいえ、ですがゾフィー兄さん一人のため過ぎですよ」

「そうだよ!! 私達にもまわしてほしいぐらいだよ!!」

「す、すまない。お前達も忙しいと思つてな」

「ですがそれで倒れたら元も子もありません!! これからは私達にも仕事をまわしてください!!」

「はい……」

それからゾフィーはほかの姉妹達にも手伝ってもらい仕事をこなしていた。やがてウーマン達も光の国に帰還した時、タロウ達から話を聞いてウーマン達は申し訳ないと謝るが、「気にしないでくれ」と受け入れた。

さて話を現代に戻り、ゾフィーは古代怪獣キングザウルス三世の説明をしていた。

「古代アトランティス人に品種改良されたキングザウルスの末裔だ。皆も知っている通り、こいつはバリアーを張ることで光線技を防いでしまう。」

「ではどうやって倒せばいいのですか?」

「ふむ、キングザウルス三世のバリアーはこの長い角から発生している。だがこのバリアーは真上に張ることが不可能だ。角を折るにもバリアーを越えて蹴らないと行けないので体術などが得意な戦士なら角を折って倒すことが可能だ。光線技も上空から放てればバリアーが張っていない部分に攻撃するのも手だ。この戦法は、あの宇宙恐竜ゼットン最終進化前：甲殻体までにも効くから色々自分なりの攻略法を考えてみると良い」

ゾフィーはキングザウルス三世のほかに暗殺宇宙人ナツクル星人、雪男星人バルダック星人など様々な宇宙人の説明をしていくとベルが鳴る。

「おっと、さて今日はここまで!!」

「」「」「ありがとうございます!!」「」

Zooside

ふう、久々に講師として立ったが、生徒たちも真面目にノートをとっていたな。今年の宇宙警備隊隊員は楽しみにしておくでしょう。

私はウルトラ学校を後にして自分の家へと帰ってきた。カプセル

怪獣たちを外に出して、くつろがせた。

「しかしよご主人、あたしたちにも隠し事なんて水臭いぜ？怪獣は怪獣使いの気配に敏感なんだよ」

「……うん、ご主人からレイブラッドの力を感じる。それもベリアルの方……」

「ご主人様、もしかして中にベリアルが？」

流石に彼女達には見破られてしまうか。

「そのとおりだよ。だけど安心をしてくれ、私は私だから。」

「だな、ご主人から嫌な臭いはしないからよ」

「……うん、私達のご主人様だ」

「私はたとえご主人がどう変わってもずーっとお傍にいますからね
!!」

「私も……」

「ありがとう」

彼女達にお礼を言い、私は自分の布団に入るとベリアルさんが話しかけてきた。

『全くお前は昔から変わらないな。まあお前に救われた私も人のこと
言えないが……お前は本当は優しすぎる。お前の記憶を見せて
もらったが……あのブルーって奴のことも……』
「忘れていません。彼の命をかけた行動のおかげで彼らが生き延びた
ことも……」

私は永遠に忘れることはない。盟友ブルーが眠るあの地球……
私に命の尊さを教えてくれたのが彼だからだ。私はこうして今も宇
宙の平和を守るために戦っているよ。

惑星アープ

ゾフィースィド

ヒカリと私は、現在ある惑星に来ている。ここはかつてヒカリが守ろうとした惑星アープだ。

ヒカリは膝をついて地面を触っていた。彼女にとって、ここは私たちで言う地球と同じだった。

「かつて、光の国を出ていき旅をしていた私は偶然この星にたどり着いた。この星の美しさに私は見惚れたよ。アープの民が言っていた。『宇宙の平和を脅かす影によって滅ぼされる』…と。私はそうはさせまいとウルトラウーマンキングの元で修行をしてこのナイトブレスを授かり急いでアープへと戻った」

「……. そしてあの悲劇か」

「そうだ、奴に復讐をするために彼女の体に乗っ取った。」

「当時のCREW GUY S隊長だったセリザワ・レイヤだったな、今も君の中で生きている」

「…….」

「ヒカリ、私はずっと心配をしていたんだ。君が、自分のせいで光の国がほかの宇宙人たちから狙われると感じて出ていったときから…….でも、君が作ってくれた技術のおかげでウーマンや私達は立っているんだよ?」

「え?」

「君が残してくれた技術をほかの皆で検討してね。バードンとの戦いで重傷を負っていた私や一騎討ちで倒れたファイタス達を救ってくれたのは君の技術だったんだ。お礼を言いたくても君は光の国を出ていってしまったからね」

そう、タロウに自分ごとバードンを撃てと命令をした私はストリウム光線でバードンごと倒れた。光の国へ急いで運ばれた後、ヒカリの技術で開発されていた命を使い私は復活をしたんだ。

彼女にお礼を言おうとしたが、すでにいなくなっていることを思いだし、いつかはお礼を言おうと考えていた時に、隊長室に隊員が入っ

てきた。

「た、隊長!!」

「どうした?」

「アンドロメダ星雲地域にて謎の青い鎧を纏ったウルトラウーマンが我々の邪魔を……」

「青いウルトラウーマンか……」

部下から渡された写真のデータを見て私は目を見開いたよ。そこに写っていたのは、鎧を纏い右手のブレードを展開をして斬りかかっていた私の親友だったからだ。相手は高次元捕食体ボガール……待てよ。確か以前惑星アープが滅ぼされたことを聞いていた。そしてそのあとに青いウルトラウーマンが現れた。

「……わかった。ただし彼女に手を出すな、いいね?」

「ですが!」

「わかっている。警戒態勢だけは敷いておこう」

「わかりました!!」

部下が出ていったあと、私は改めて青い鎧を纏ったウーマンを見ていた。顔は隠されているが忘れるわけがない……彼女だ。

やがてボガールはヒカリとメビウスによつて倒された。ヒカリも力を使い果たしてウルトラの母ことマリーさんが回復させてくれた。私はこの星に来てやる事が決まった。

ゾファイ side 終了

「ヒカリ……」

「なんだ……何の真似だゾファイ。」

ヒカリが振り返ると、ウルトラランスを構えているゾファイがいたので、彼女は睨み返した。そして、彼は問答無用で突きを放ってきた。彼女はナイトビームブレードを使いウルトラランスをはじめさせる。だがゾファイは連続した突きを放ってきた。ヒカリ自身、なぜゾファイが自分に攻撃をしてきたのかわからなかった。

彼女は後ろへと退がるとナイトビームブレードから光の刃を放ちゾファイに放つ。彼女が放つ攻撃を躲すとブレスレットを戻して接

近してつかんだ。そのまま二人は転がっていった。

「何をするんだ、ゾファイー!？」

「何をするだと?・・・ふざけるな!!」

「!？」

「私がどれだけ心配をしたと思っっているんだ!?!君が光の国からいなくなりお札を言えないままいた私の気持ちを・・・そして復讐をするために君が戦っていたのを知っていたのに何もできなかった自分に腹を立てている!!」

「・・・そ、それは・・・!」

「君がアープのことが好きでボガールに対して復讐をする時にも私は動くことができなかつた。なのに君は・・・!」

彼女はゾファイーの顔を見た。彼ら目から光の涙を流していた。自分がどれだけ彼に心配をかけてしまっていたのかを・・・やがて彼から力がなくなったのを感じて起き上がる。

「ゾファイー・・・」

「君がボロボロになりながらもボガールを倒したと聞いたときは喜んだ。君が帰ってくる・・・だが君はそのボロボロの体のまま戦おうとしていた。親友である君が傷つくのを見ているしかできない私はどうしたらいいんだ?」

「・・・ごめんなさい・・・」

ヒカリ side

私はその一言しか言えなかつた。親友である彼の涙を流させてしまふなんて私はなんて奴だ。ボガールを倒した後も私はボロボロの体のまま戦い続けた。

本来戦士ではない私の体は蓄積したダメージで限界を迎えていた。ゾファイーがテレパシーで伝えたのはそういうことだ。

彼は本来は優しい性格の持ち主だ。誰かが傷つくのを見たくないほど優しい男だ。この男がこうして素で出すのはケン大隊長、マリー隊長、そして親友である私達ぐらいだ。

「ヒカリ・・・」

「・・・ゾファイー・・・」

ゾフィーとオーブ

ウルトラの国のウルトラコロセウム：ゾフィーはウルトラブレスレットを變形させたウルトラソードを構えて目の前の相手と対峙する。相手の髪は白色のセミロングで、両手剣を構えていた。

彼女の名前はウルトラウーマンオーブ：ウルトラフュージョンカードを使つて様々な姿に変わることが出来るウルトラ戦士なのである。

彼女とゾフィーとの出会いは、惑星ヨミで発生した亡霊魔導士レイバトスとの戦いの時だ。その時以外にもオーブとは共に戦うことが多かった。

「ゾフィーさん、行きます!!」

「ああ全力でかかってくるといい、オーブ」

彼女はオーブカリバーを構えて走りだし、ゾフィーにふるう。ウルトラソードでオーブカリバーを受け止めてから連撃をオーブに繰り出した。

「く!! (流石ゾフィーさん、強い……. だったら!!)」

彼女は光りだして、スペシウムゼペリオン形態に変身した。そして、紫のラインを光らせて高速で移動する。

「む!!? (ティガの力で動きを一時的に早くしたか)」

「であ!!」

「む!!」

オーブが放つ拳をゾフィーは受け止めて投げ飛ばす。

「スペリオン光輪!!」

「ウルトラカッター!!」

お互いに放つ切断技がぶつかり相殺をする。オーブはさらに光りだして姿が変わり構える。

「ウルトラウーマンオーブ!ハリケーンスラッシュユ!」

ハリケーンスラッシュユへと変わったのを見て、ゾフィーは「色んな姿を持っているな」と感心した。そんな中、オーブはオーブスラッシュガールランスを構えてレバーを三回引いた。

ぎゅつと抱きしめた。

「そういえばお前のサンダーブレスタ―ってゾフィー隊長とベルの姉御なんだよな」

「え!?!ベルさんってベリアルさんだったのですか!?!」

「あー、そうかお前は知らないもんな。どうやらアナザースペースの戦いの後、ゾフィー隊長がプラズマスパークコアに来た時、いたんだってよ。俺もそこまで詳しいことは聞かなかったけどな」

なるほど。しかしゾフィーさんは色んな人に慕われているな――

――流石宇宙警備隊隊長を務めている人です!!

オーブside終了

一方で隊長室へと戻ったゾフィーが椅子に座るとトレギアはモンスタ―星人についての資料を渡した。

「やはり黒だったのか。」

「はい、いかがしますか?」

「直ちにエースとメビウスに向かうように指示を頼む」

「わかりました」

トレギアはそう言って、エースとメビウスに連絡をしていると、ゾフィーは左手の人差し指と中指をじーつと見ていた。その為、連絡を終えたトレギアは声をかけた。

「どうしましたゾフィー隊長……?」

「ああオーブと先ほど模擬戦をしていてね。彼女もまた強くなったな、と」

「オーブの得物を二本の指で受け止めたと、模擬戦を見ていた人たちから聞きましたか?」

「ははははは、流石だね。既に把握済みか」

ゾフィーは笑いながら、「さらに強くなったなオーブ」と心の中で呟き、窓から街を眺めていると扉が開いた。

「ゾフィーお兄ちゃん!」

「やあジャック、報告かい?」

「うん、惑星『アースラ』との会談が成功したことを報告に来ました。」「ああ向こうも私達と友好を結びたいといっていたからね。成功して

良かったよ。ジャックも大隊長の護衛、ご苦労さま。」

「ううん、ウーマン姉さんやセブン姉さんが一緒だったから大丈夫でしたよ」

「そうか。それはそうと、確かアースラ人はヒューマノイドタイプだったね」

「はい。私も地球のみんなを思い出しちゃいました」

「そうか、いずれにしてもアースラの代表とは会わないといけないな。」

「え？」

「え？」

「ゾフィーお兄ちゃん、代表と……会うの？」

「ん？大隊長が行かれたのだから私も行かないといけないだろう？」

「それは……そうだけど……」

ジャックがあまりにも嫌そうな雰囲気を出していたので、彼は詳しく訊かないことにした。

ジャックは急いでウーマンとセブンがいる執務室へと戻り、彼女たちに先ほどのことを話した。

「まずいわね」

「ああ彼女はゾフィーのファンだからな、本人に会いたいといっているぐらいに……」

三人はあの代表がウルトラの国へ来るのじゃないかと思っていると、レオが入ってきた。

「た、大変です!!アースラの代表一団がこちらにむかっているそうです!!」

「「ええええええええええええええええええええええ!!」」

「すでにネオスや21さん、パワードさんやグレートさんも護衛で向かってこちらに来るそうです!!」

「「はやいいいいいいいいいい!!」」

一方で隊長室で部下からアースラの代表がこちらに来ると聞いてゾフィーは思った。「え?はやくないかい?」っと

ゾフィーとアースラ女王

光の国の港ウルトラスペースポート——大隊長を務めるケンを始め、ベル、ウルトラ兄妹たちもブラザーズマントを纏い見守る中、グレート達が護衛するアースラ女王の船が着陸する。そこから船の扉が開いてアースラ女王が降りたった。

「ようこそアースラ女王陛下」

「大隊長、5日ぶりですね」

「はい、ですがアースラ女王自ら光の国へ来られるとは……」

「友好を結んだ時はあなた方がこちらへ来てくださいました。なら女王として私が行かなければ意味がありません」

「そうですね……とりあえずこのまま出ますとあなた方にはこの光が強力ですから、この入国バッジをお渡し致します」

「ありがとうございます、大隊長」

二人が話をしている中、ゾフィーは緊張していた。なにせ相手は女王だ。今まで彼が相手をした親善大使の中でも女王クラスとなれば、コメント16世ぐらいなので、新しい友好関係を結んだ星の代表に失礼がないようにと力んでいるのである。

すると女王がゾフィーの方へと走ってきて彼に抱き付いた。

「!!」

「ゾフィー叔父さまああああああああ!!」

「!!!」

「……え?」

「お忘れですか!?私です!!」

「……君は、アナタシアなのかい?」

「はい!!」

ゾフィーが女王の顔をよく見ると、彼の記憶にあつたとある幼い少女と今の女王の顔が一致した。アースラという星のことを考えなおすと、「星の名前をアースラに変えた」という話をケンから聞いていたことを思い出した。だがそんな彼女を抱きしめているゾフィーを見て黙っていられない者たちがいた。

「ねえゾフィー、女王様とどういう関係なのか」

「」「教えてもらおうか?」「」

「み、みんな、落ち着くんだ!かつて、私も大隊長とともに星を訪れたことがあってな。その時に出会ったのがアナタシアなんだ。まさかあの子が女王様になるとは思ってもいなかったよ」

ゾフィー達は、アナタシア達を光の国へ案内してから、彼女達が泊まる場所に到着した。ゾフィーは護衛のためにレオ姉妹、エイティと共に残っている。

「それにしてもゾフィー叔父さまが宇宙警備隊隊長を務めているなんて…」

「ああ、君と会った時はまだ一般隊員だったからね」

ゾフィーがアナタシアと仲良く話をしているのをレオ姉妹、エイティはじーつと見ていた。

「なんか仲良しじゃないですか、ゾフィー兄さん」

「ええ、アナタシア女王様は小さい時にゾフィー兄さんと遊んだことがあったそうですよ」

「そうだったんだ。でも、これやばくない?女王様の顔見てよ」

アストラの指摘で、二人はアナタシアの顔を見ると確かに「乙女の顔」をしているので、「「これってまずい気がする!!」「」と戦乙女たちは感じたそうなの。

そして、ゾフィーは相変わらずの鈍感なため気づいていないのであった。

(ゾフィー叔父さま。あの時よりもさらにかっこよくなっておりますわ!!私のハートがまたしても射貫かれてしまいましたわ!!)

「そういえばお父上はお元気かい?」

「……………父は亡くなりました。」

「なんと、すまない……………ご冥福をお祈りするよ」

「ありがとうございます。ゾフィー叔父さま……………」

「それにしても、立派になったなアナタシア、小さい時の君は泣き虫だったのをよく覚えてるよ」

「は、恥ずかしいですわ。でもこれもゾフィー叔父さまが鍛えてくだ

さったおかげでもありますわよ?」

「そうかい?」

「ええ!!」

彼は「鍛えてたっけ?」と考え込む。地球の遊び…鬼ごっこやかくれんぼ、だるまさんが転んだくらいしかしてない気がする。しかし、彼女の目が光っていたのでゾフィーは苦笑いをして、流すことにした。

それから夜となり、ゾフィーは光の国の夜空を見上げていた。プラズマ太陽が夜の状態になると、地球で戦ってきたウルトラ戦士達は懐かしい地球を思いだすのだ。

「まさか光の国も夜を迎えるなんて……」

「ああ、プラズマスパークのコアの出力を下げた夜に見えるようにしているんだ」

「これもまた素敵ですわ」

「そう言ってくれれば、嬉しいよ……」

ゾフィーは彼女が泊まる部屋の前におり、眠るまで話し相手をした。彼女が眠る時、彼は彼女が眠ったのを確認し、「おやすみ」と一声かけて、交代する。

「お疲れ様です、ゾフィー兄さん」

「ありがとうエイテイ、今は彼女は寝ているからね。悪いけど、少しだけ仮眠をとるよ。」

そういつて、ゾフィーは仮眠室の方へと移動して寝ることにした。

ゾフィーとアナタシア

ゾフィースィド

アナタシアのことを話すとしよう。彼女との出会いは私がまだ一般隊員の頃だ。隊長であつたケンさんに連れられて私はある星へとやってきた。

その星が後の惑星アースラだ。ケンさんが国王と謁見すること、私は自由時間を与えられた。そこで、歩いていると一人の女の子が私を見ていたのだ。

「こ、こんにちは……」

「こんにちは」

「あ、あなたは？」

「私はゾフィーと申します」

「私はアナタシアといいます」

それが彼女との出会いだ。それからしばらく彼女と話をした後、この星で泊まることとなり、私は外で自分の技の練習をしていた。

「M87光線!!」

被害がないように上空には放ったM87光線を見ている時、背後の気配を察知した。振り返ると、そこにはアナタシアがいた。

「ご、ごめんなさい……」

「いいえ、起こしてしまいましたか？」

彼女は首を横に振り、私の横に座る。そして、私が放ったM87光線を綺麗だと言ってくれた。私達の光線は普段は悪い奴らを倒す為に使っている。それを綺麗と言ってくれたのは彼女が初めてだった。

「……ありがとうございます、アナタシア様」

「やめてください、私はそんなに偉い人じゃありませんから」

「わかりました。ではどう呼びをすれば？」

「普通にアナタシアとお呼びください、ゾフィー様」

それから私はアナタシアと地球の遊びをしたりして、楽しく過ごしたんだ。やがて私が宇宙警備隊長を務めるようになってからは彼女の星に行くことがなくなりました。それが今は……

「ゾファイー叔父さま、ゾファイー叔父さま……ゾファイー叔父さま……」

「どうしてこうなった？」

そして、話を現在に戻そう。仮眠室で寝ていた私に彼女が抱き付いていた。もう一度言おう、仮眠室で寝ていた私に抱き付いて彼女はすりすりしている。おかしいな……確か仮眠室にはカギがついていたはずなのだが？よく見ると外されていた……アナタシア、恐ろしい子！

「アナタシア、おはよう。」

「おはようございます、ゾファイー叔父さま？」

しかもこの子、目の中にハートが見えているのは、ゾファイー叔父さんの気のせいなのだろうか？……うん気のせいだおじさんは疲れているんだきつと。

ゾファイー side 終了

とりあえずゾファイーは起き上がり彼女と一緒に仮眠室を出た。彼女はウルトラの父からもらったバッジをつけているので、デイファレーター光線の影響を受けない。そのため、ゾファイーの手に乗りながら光の国を観光できるのだ。

「美しいですね、光の国は……アースラに勝るとも劣らない光の街です」

「ありがとうございます。」「あーまた敬語をつけていますよ、ゾファイー叔父さま!!」ですが今のあなたは女王様です。隊長の私がしっかりしないと。」

「駄目です!!私に対して敬語は禁止です!!これは女王命令です!!」

「はい、わかりまし」むううううううううううう!!「わっ、わかった」

彼女が頬を膨らませていたのでゾファイーは困りながらも普段話している口調でウルトラの国を案内をする。

「ここがウルトラコロセウム。ここはウルトラ戦士たちが鍛える場所でもあるんだ」

「ゾファイー叔父さま、見学をしてもよろしいですか？」

ええええ!!」「」「ウルトラクリニック78である。

「ゾフィー叔父さま、ここは何をするところですか?」

「ここは怪我をしたウルトラ戦士たちの治療をする場所……アナシア達アースラ人で言えば『病院』と言った方がいいね」

「病院ですか」

「あらゾフィー。それにアナシア様、ようこそウルトラクリニックへ」

「女王陛下、こちらは、銀十字軍隊長を務めるウルトラの母ことマリ―隊長です」

「初めまして、アースラ女王のアナシアです」

「ご紹介にあずかりました、マリ―と申します。どうぞゆっくりと見学なさってください」

ウルトラの母がウルトラクリニックの中を案内をしている間、ゾフィーは外の方へ出て、声をかける。

「セブン21」

「はい、こちらに」

「見つけたか?」

「申し訳ございません。まだ見つかっていません。現在ネオス、スコット、ベス、チャックたちにも協力してもらって探しておりますが……」

「そうか、彼女を狙って光の国に入りこんでいる可能性がある……気を付けてくれ」

「御意」

21が再び消えたので、ゾフィーは中へ入り、アナシアは彼の手に戻る。実はアナシアを殺すために何者かが暗殺宇宙人を送りこんだと連絡を受けていたゾフィーは21に頼んで暗殺者を探してもらっているのだ。

彼らが歩いていると、突然光波手裏剣が飛んできた。察したゾフィーは後ろの方へと退がる。

「ぞ、ゾフィー叔父さま……!」

「出て来いアサシン星人!! 貴様の狙いが彼女だっことはわかってい

る!!」

現れたのは、「地獄の使者」と名高い忍者暗殺星人アサシン星人だ。ゾフィーは彼女を降ろして、バリアーを張り、アサシン星人に構える。「ゾフィー、俺の任務はそいつを殺すことだ。邪魔をするなら貴様も殺す!!」

アサシン星人は再び光波手裏剣を投げてきた。ゾフィーはスラッシュ光線を放ちアサシン星人が投げた手裏剣を相殺する。

アナタシアは戦うゾフィーを見ていた。後ろからナツクル星人が銃を構えて彼女を殺そうとしていたが……

「ぐああああああああ!!」

「え?」

「ご無事ですか、女王様」

現れたセブン21は、投げたヴェルザードを戻し、ナツクル星人に蹴りを入れて気絶させる。一方でアサシン星人は刀でゾフィーを殺そうとしたが、ウルトラブレスレットを変形させたウルトラソードで、振るった刀をはじかせるとそのままキャッチしてアサシン星人の胴体に突き刺した。

「ぐああああああああああ!!」

彼が振り返ると、アナタシアはセブン21の手に乗っており、彼女は涙を流しながらゾフィーの手に乗る。

「ゾフィー叔父さまああああああああ、ご無事でよかったですうううううううう!!」

「大丈夫だよアナタシア、だが誰が君に暗殺依頼を……」

「首謀者は大臣でした」

「!!」

「大臣は、アサシン星人を当時の国王陛下へけしかけて、自分が王様になろうとしましたが……」

「私が父の後を継いだのがそれほど気に食わなかったのですね……ゾフィー叔父さま、ご迷惑をおかけしました。」

「気にすることはない。本当に強く成長したね、アナタシア」

「はい!!」

ヤンデレ

ゾフィースィド

皆さまは、家で突然女性に押し倒されたことはあるだろうか？現在、私はその状態になっています。

「サーテゾフィー？モウイイワヨネ？」

目の前にいる彼女は、ハイライトが消えたような目で私にまたがっていた。彼女の名前はウルトラウーマン、なぜこうなった？私は家に遊びに来た彼女を招き入れた瞬間に押し倒された。まずい、この目は絶対的捕食者の目だ。

「許せ、ウーマン!!」

私はまたがついていたウーマンを投げ飛ばしてから家を飛びだした。いったい何があったのだ!?これは非常事態だつてどあ!!

「今の技はサーキュラーギロチン……まさか!!」

上の方を見るとウルトラウーマンエースがいた。彼女はそのままエースブレードを構えて私に斬りかかってきた。

「え、エース!？」

「ニガサナイニガサナイニガサナイニガサナイニガサナイ、ゾフィー兄サンハワタシノダカラ!!」

エースが振り下ろすブレードを躲しながらZ光線を放とうとしたが、別方向から攻撃が飛んできた。そのため、それらをウルトラスピンドで、はじかせて放ったであろう人物たちを見る。

「セブン、ジャック！お前たちもか!？」

「ウフフフフフ」

「ゾフィーオニイチャンハワタシノデスヨ？」

増えたよ!!なんでさ!!お兄ちゃんは普通に接してきたはずなのに!?っと考えていたら、光線が飛んできた。躲してみると、タロウのストリウム光線とメビウスのメビウムシールドだった。

「仕方がない。テレポーターション!!」

彼女たちの前から転移して、宇宙警備隊本部に入る。危なかった……とりあえずどこか安全な場所がないかと探していると、

蹴りが飛んできたのでクロスガードを発動!!

「レオか……」

「サア、ゾフィー兄サン、ワタシトヒトツニ!!」

「なりません!!」

「さしてどうする? 仕方がないここは……」

「逃げるんだよオー!」

「アッ!」

私は全速力で逃走した。ほかにもエイティ、グレート、パワーなど私が知っているメンバーも病みに囚われていた。これはいつたいたいと言うことだろうと私はある人物の部屋に殴りこみをする。

「来たか、ゾフィー……」

「やはりお前か!! ヒカリ!!」

彼女の部屋、ウルトラウーマンヒカリの研究室に私は入りこんだ。彼女は正気だったので問いただすと、彼女はヤンデレ薬とやらを作っている最中、それを間違えて散布してしまい、まずメビウスが感染をしてそこから伝染していったということを知る。

「……………」

あまりのことに私は頭を抱えてしまう。とりあえずどうするか簡単だ。私は空中に飛びあがり、ヒカリが開発したワクチンを放つために、ウルトラスピンを発動した。ワクチンが散布されて行き、彼女が起こしたヤンデレ事件はこうして終わったのだ……。だが、なぜ彼女達はヤンデレになってしまったのだろうか? うーんわからん……。

ゾフィーside終了

「失敗か。やはりあいつの攻略はそう簡単には行かないか……」
ヒカリは、ヤンデレ化したウーマン達とゾフィーの戦いをパソコンで眺めた。彼はあまり攻撃をせずにとらしていたので、彼女はふふふふふふと笑いながら大きな胸を寄せている。

「ハヤクアイツヲ私ノ物ニシタイワネ」

彼女はハイライトを消した目でパソコンの画面にいるゾフィーを見ながら笑っていた……………。

現れた宇宙人

ヤンデレ事件から数週間が経ったある日、ゾフィーは休暇をとり、ある惑星を訪れた。彼は辺りを見回した後、座って休んでいたが、突然左手のウルトラブレスレットを変形させてウルトラランスを構える。すると鎧武者のような人物が腰から刀を抜いて構えていた。

「宇宙警備隊長ゾフィー殿、いざ尋常に勝負!!」

彼は立ちあがり、ウルトラランスを構え直す。武者の様な宇宙人は走りだしてゾフィーに斬りかかる。ゾフィーはウルトラランスで振り下ろした刀を受け止めてから蹴りを入れようとしたが、武者の宇宙人は後ろへと躲し、再び走りだす。そして、再度ゾフィーへと斬りかかるもウルトラランスで放つ斬撃で動きを止められた。戦士たちはお互いに力を入れてから一度離れる。

するとゾフィーの方がランスをブレスレットに戻したので、武者の宇宙人も刀を鞘へと納める。

「また強くなったな、『ガーラ』」

「いえいえ! 師匠に比べましたら拙者などまだまだ未熟でございます!」

ゾフィーが『ガーラ』と呼ぶ者と和やかに話している間に、説明せねばなるまい。彼の名前は武者星人ガーラ、光の国と友好関係を結んでいる星の出身である。ガーラは武者修行の身であり、ゾフィーに弟子入りしている。彼のことを「師匠」と呼んでいるのもその為だ。この星は彼と修行をするための星であり、休暇をとったのも彼を鍛えるためなのだ。

挨拶と稽古が終わった後、彼らは座り、休憩をしている。その間もガーラは鎧を脱がずにいるので、「そういえば彼らの脱いだ姿を見たことはなかったな」とゾフィーは思ったが、あまり気にしないようにしていた。

一方で宇宙空間、ウルトラウーマンゼロは宇宙船を追っていた。

「待ちやがれ!!」

「くそ!! まさかウルトラウーマンゼロと遭遇するとは!! 逃げる逃げる

!!

「逃がすかよ!!エメリウムスラッシュ!!」

「二どああああああああああああああああああ!!」

彼女が追いかけていたのは、かつてウルトラウーマンダイナが交戦した宇宙人：知略宇宙人ミジー星人達である。偶然にも、彼らが乗る宇宙船を墜落させた場所はゾフィー達がいる星だった。ゼロはそのままミジー星人を追いかけて星に向かう。

墜落する宇宙船がこの星に不時着したので、ゾフィーとガーラが何事かと見ていると、追いかけているゼロの姿が目映った。そのため、宇宙船の乗組員が宇宙犯罪者であると判断した二人も急いで現場へと向かう。

「どうするどうする!？」

「ガラオンマークIIだ!!」

「よし!!」

ミジー星人トリオは三面ロボ頭獣ガラオンの新型に搭乗して起動させる。着地したゼロが様子を窺っていると、宇宙船が爆発して中からガラオンマークIIが現れた。その姿は、初代と違い、完全体のロボットの姿である。しかし初代ガラオンが本来は身長400mの巨大ロボットを予定していたのに対し、ガラオンマークIIは量産しやすいように、身長を50mに抑えている。

「なんだこいつ・・・!？」

ゼロは初めて見るガラオンマークIIに構えると、頭部の顔が泣き顔に変わり、青い光線が放たれ、彼女のボディに当たる。

「どあ!!」

「よしいいぞ!!いけえええええええ!!」

ガラオンマークIIは歩きだしてゼロに向かって歩きだした。ゼロは態勢を正してエメリウムスラッシュを放った。

「光線吸収装置作動!!」

ガラオンマークIIの胸部が開いてエメリウムスラッシュが吸収された。

「な!？」

「それっ！返してやれ!!」

「御意!!」

胸部から先ほど吸収されたエメリウムスラッシュが返ってきたのでゼロは横にかわす。

「それロケットパンチ!!」

ロケットパンチがゼロに向かって飛んでいく。ゼロは回避してゼロツインソードを作り一気にガラオンマークIIに接近しようとした。

「であああああああああ!!」

「分離だ!!」

ガラオンマークIIはパーツが三つに分かれた。ちなみに、頭部はガラオンα、胴体部分はガラオンβ、脚部はガラオンγと呼称される。

「分離だ?!?!が!!」

戻ってきたロケットパンチがゼロに当たり彼女は吹き飛ばされてしまう。ガラオンマークIIは再び合体した後、ゼロにとどめを刺そうと歩きたしたが、脚部に攻撃が当たり膝をついた。

「なんだなんだ!?!」

「大丈夫か、ゼロ!!」

「ゾフィー隊長!?!なんでここに!!」

「休暇でこの星に来ていたのだが……あのロボットは、ミジー星人か……!」

彼は、ガラオンマークIIを見て相手がミジー星人とわかり、ガーラと共に構える。

「ゼロ!!ルナミラクルゼロになり分身するんだ!!」

「わかった!!ルナミラクルゼロ!!ウルトラゼロマジック!!」

三人に分身をしたゼロにミジー星人たちは驚いている。ガラオンマークIIは光線を放つも素早く動くルナミラクルゼロに攻撃が当たらない。そこにガーラが接近して自慢の刀でガラオンマークIIの首部分に突き刺した。

そして、動きが止まった。ガラオンマークIIは故障したようだ。

「今だ隊長!!」

「ストリウム光線!!」

ゾフィーが放ったストリウム光線がガラオンマークIIに命中をした。爆発する中、ガラオン α だけが分離した。

「逃がさないぜ!!ストロングコロナゼロ!!」

ゼロはストロングコロナゼロへと変わって、上空に飛び上がり、ガラオン α を地面に叩きつけた。

「「あばばばばばばばばばばばばばば」」

叩きつけられた彼らは地上にいたゾフィーとガーラに睨まれ、降参する。ミジー星人達の企みはゼロと休暇をしていたゾフィー達によつて解決したのであった。

SOS

ゾファイーside

宇宙警備隊の隊長として部下たちに指示を出した後、パトロールをしているとウルトラサインを見つけた。

『惑星「マラガス」にて襲われている、応援求む』か。惑星マラガスはこの辺だったな。よし!」

私は惑星マラガスへと降り立つ。しかし、辺りを見回しても、警備隊員の姿が見えない。何か嫌な予感がするな……。念のためにウルトラサインを出して、応援を呼んでおこう。

ウルトラサインを飛ばして惑星マラガスを探索する。森や草花など自然に満ち溢れた綺麗な星だ……。だが生命の気配を感じないのはなぜだ？まるでこの星自体が生きている要塞なのか？そう考えていると、攻撃が飛んできたので私は回避する。

「……………」

「ぎやおおおおおおおお!!」

前から現れたのは……バキシム？私はカプセルからバードンを出す。彼女は前から現れたバキシムらしき怪獣を見た後、私に説明してくれた。

「一角紅蓮超獣バキシム!?ご主人様、バキシムの強化型です!!」

「なんだって!?!ここは、ヤプールが支配する星なのか!?!」

『そのとおりだ、ゾファイー!!』

「!!」

私達が振り返ると立っていたのは異次元人ヤプールだった。戦闘形態である巨大ヤプールとして実体化したので、私達は構えた。

「ヤプール、あのウルトラサインは貴様の仕業か!!」

『そのとおりだ、ゾファイー!貴様を倒す為に改良したバキシムが以前の相手だ。行け!!バキシム!!』

「ぎやおおおおおお!!」

「これはやばいな……。ゼットン!タイラント!ダークロプスゼロ!」

私はさらに三体を出して彼女達もバードンと同じように並ぶ。

「なるほどな、バキシムの強化態か！これは私の両手がうづくぜ!!」

「負けません!!」

「うん、勝つよ」

「その通りです!!」

「いくぞ!!」

ゾファイーside終了

五人はバキシمامに対して構える。ゼットンとバードン、タイラントは口から高熱火炎と火炎弾をバキシمامに放つ。

バキシمامは両手から紅蓮火炎弾を放ち、三人が放った火炎攻撃を相殺をする。ダークロプスゼロは接近して両手に持ったダークロプススラッガーを振り下ろす。

だがバキシمامは右手で受け止めると、左手でダークロプスゼロを殴り飛ばす。ゾファイーは乙光線をバキシمامに放つも異次元の穴を使い回避する。

「何!?!」

「ご主人、後ろだ!!」

「どあ!!」

タイラントの叫びで、後ろを振り返るが、時すでに遅し。バキシمامの頭突きを受けてゾファイーは吹き飛ばされてしまう。

「がは!!」

「こいつ、ただの改良型じゃない!!」

「.....まさかマスターの戦闘パターンを?」

『さつき言っただろう、ゾファイーを倒すために調整した、と！しかもゾファイーだけではない！ほかのウルトラウーマン達のデータも組み込んだ!! 貴様らカプセル怪獣もな！このバキシمامは、レイオニクスはおろか光の戦士すら滅ぼす最強兵器なのだ!! さあとどめを刺せ、バキシمام!!』

『.....』

突然、バキシمامは動きを止めた。ゾファイー達はなぜバキシمامが動きを止めたのかわからなかった。

『何をしているバキシマム!! さあこいつらに!!』

『……死ぬのはお前だ!! ヤプール!!』

バキシマムは頭部の角「一角紅蓮ミサイル」を発射すると、それはヤプールに刺さり爆発する。

『ば、馬鹿な!?!』

「これはいったいどういうことだ?」

タイラントたちはバキシマムがヤプールに攻撃をしたので驚いた。そして、ゾフィーはと言うと、バキシマムの右手に傷がついているのを見て驚いた。

「お、お前は……バキシマルなのか?」

「「「え?」」」

『気づいてくれたみたいだな、我が主(あるじ)よ!!』

するとバキシマムは光りだしてタイラントたちのような少女の姿になり、そのまま彼に抱き付いた。

「えっと、ご主人? どういうことか説明してくれないか?」

「ああ、そうだね。あれはヤプールが100体のバキシムを地球に出現させた時のことだ……バキシム軍団と戦った私たちは、何体かのバキシムを捕獲することに成功したんだ。その一体を私が引き取り、バキシマルと名付けて育てていた。だがある日、バキシマルは姿を消していたんだ。必死に探しても見つからなかったわけだ……ヤプール、貴様がバキシマルを奪ったのか!!」

『だ、黙れ!! 元々私が作ったモノを貴様らが奪ったのではないか!? 返してもらっただけだ!!』

「だまるのはそつちだ!! お前によって殺された仲間たちがどれだけいるか!! 私は主と過ごしていたのにお前は無理やり……だから待っていた!! お前が油断をする隙を……主ならわかっていたかと思っていたけど……」

「すまない、バキシマル……」

「もういいさ。さあ主よ!!」

「ああ、M87光線!!」

ゾフィーはM87光線を放ち、ヤプールはそれを受けて爆散する。

ヤプールを撃破後、ゾフィーはバキシマムことバキシマルを見ていた。

「バキシマル、君はこれからどうするんだ？」

「……………我が主よ、もう一度私をあなたの傍にいさせてほしい。」

「それは私のカプセル怪獣として戦いたいということではないかな？」

「それで構わない。私はもう一度あなたの傍で戦いたい。さっきのよう」

「わかった!!共にいこうバキシマル!!戻れ!!」

ゾフィーが彼女に手をかざすと、彼女はカプセルに収納された。彼はそのカプセルを箱の中に入れる。そして、そのままマラガスを確認した後、宇宙へと飛び立った。

バルタン星人の襲撃。

ニセのウルトラサインを使って、ゾフィーを惑星マラガスへおびき出したのは、異次元人ヤプールだった。

そして、ゾフィーらウルトラ戦士たちを倒す為に様々な戦闘データを組み込んだバキシマムをさし向けてきた。ゾフィーはカプセル怪獣たちを出して共に応戦するが、圧倒的なその強さに苦戦する。

その時、ゾフィーはバキシマムの右手に傷があったのを見て、かつて自分が育てていた「バキシマル」の名を出す。するとバキシマムは動きを止めて、味方となり、共にヤプールを撃破した。

では話を戻そう。ゾフィーは新たに加わったバキシマルが入っているカプセルを見ながら、引き続きパトロールをしていた。

（誰かが自分をつけている感じがするな。よしあそこの岩場で隠れて様子を見よう）

彼は岩場へと隠れて相手の様子をうかがうことにした。相手はゾフィーを見失ったのか辺りを見回していた。

「おい本当にゾフィーがいたのだな？」

「間違いない。あれは宇宙警備隊長のゾフィーだった」

（あれは宇宙忍者バルタン星人、しかも三体か……なるほど私を追いかけていたのは倒す為か）

彼はウルトラカッターを放ちバルタン星人の一体の首を切断させた。二人のバルタン星人はゾフィーが現れたのを見て構えている。

「バルタン星人、お前達が私を倒そうとしているのはわかってる!! 大人しく去るなら私は危害を加えるつもりはない!!」

「お、おのれ!!」「仲間を不意打ちで殺しといて、何が『危害を加えるつもりはない』だ!?!」

バルタン星人二体はゾフィーに襲い掛かろうとしたが、突然体が動けなくなったようだった。何事かと驚き、上の方を見ると、回転しているウルトラ戦士がいた。

「助かったよ、ウーマン」

バルタン星人たちの動きを止めたのはウルトラウーマンが放った

キヤッチリングだ。彼女は回転を止めるとゾフィーの傍に行き、ため息をつく。

「全く、あんたは無茶をするんじゃないわよ。ほら、じっとして……」
ウーマンの手からリライブ光線が放たれて、ゾフィーの傷ついていた体が治っていく。

「すまない、ウーマン」

「気にしないで。あなたのウルトラサインを受けて駆けつけたのだけど、バルタン星人にヤプール……何か大きなものが動こうとしているのかしら？あんたたち、何か知っているわね？」

「し、知らねーよ!!」

「そうだそうだ!!」

「どうする?」

「こいつらを宇宙警備隊本部へと連れていき聞かせた方がいいと思う」

「よね。さああんたたち一緒に来てもらおうわよ?」

ウーマンが近づこうとしたが、ゾフィーは何かに気づいて彼女の手を引っ張り引き寄せると、バルタン星人二体が爆発をした。

「ちい、ウーマンだけでも倒せるかと思ったのに!!」

「あんたは……」

「お前はマグマ星人!彼らに爆弾を仕込んでいたのか!」

「その通りだ!!失敗したが、まあいい!この俺様、自ら戦ってやる!!」

マグマ星人は、右手にマグマサーベル、左手にマグマフックを装備して二人に襲い掛かってきた。距離を取ったウーマンはスラッシュ光線を放つがサーベルではじかれる。

「Z光線!!」

ゾフィーもZ光線を放つが、回避されてしまう。そして、ゾフィーとウーマンは再び身構える。

「ダブルウルトラスラッシュ!!」

二人はウルトラスラッシュを投げつけるも、マグマ星人はサーベル等ではじかせてしのいでいったが、そこに光線が二つ放たれてマグマ星人に命中する。

「だ、誰だ!？」

「ジャック!セブン!」

「大丈夫か!ゾフィー!!」

「うふふふふふふふふふふ」

ジャックは笑いながら左手のブレスレットに手をかざしてウルトラランスを構える。マグマ星人はウルトラ戦士が集まるとは思ってもいなかったなので構え直す。

「さあ覚悟はいいかしら?」

セブンは頭部のアイスラッガーを取り構えていた。後ろに逃げようとしたがゾフィーとウーマンが立っておりマグマ星人は囲まれていた。

「さあ大人しくしなさい。」

「大丈夫ですよ?痛くはしませんから(笑)」

「いやいやいや、そんな物騒な武器を持ちながら『降伏しろ』って言われてもよお!!つかあんだ隊長なんだろう!?!どうなってんだよ!?!」

「……………宇宙は広いな——」

(現実逃避!?)

ゾフィーが現実逃避をしたので、マグマ星人は次の手を考えていた。そして、自分の宇宙船に双子怪獣がいたのを思いだしたので口笛を吹いた。

ぴゅいひいひいひいひいひいひいひいひい!!

「……………あれ?」

マグマ星人は、お供の怪獣達が来ないので混乱していると、さらに三人の戦士が現れる。

「お前が言っていた怪獣は私達が倒したわよ!!」

「え?」

上を見るとエース、タロウ、レオが両手を組んでいた。その先には破壊したと思われる宇宙船がありマグマ星人は顔を真っ青にしていると首筋にランスとアイスラッガーが突きつけられる。

「今すぐに降伏するか死ぬか選んでください」

「……………降伏します」

マグマ星人は勝てないと判断して降伏を選んだ。ゾフィーは改めて姉妹達を味方ながらに恐ろしいと思いつつ、マグマ星人になぜ自分を狙っているのか理由を訊いた。

「マグマ星人、なぜ私の命を？」

「ヤプールの旦那が俺やバルタントリオに話を持ちかけたんだよ。『ゾフィーを倒せば望むものをくれてやる』ってな。俺はマグマ星人の中じゃ若い方だね。言っちゃえば、初陣でもあったんだよ。まあ、それも終わったからな……」

「それなら、悪いことを辞めて、これからいいことをすればいいじゃないか？」

「いいこと？俺がか!？」

「ウルトラウーマンタイガの話では、君の同胞が彼女のいる組織に入って地球人と共に仕事をしていると聞いている。ちなみにギャラクシールスキューフォースってところから君を迎えてくれると思うよ？」

「お願いします!!」

「早速ウルトラサインで迎えを呼ぶとしよう。」

ゾフィーはウルトラサインを出してから数十分後、一つの光がこちらにやってきた。

「ギャラクシールスキューフォース！ウルトラウーマンリブット！ただいま到着しました!!」

「リブット、久しぶりだね」

「ゾフィー隊長。それでマグマ星人をギャラクシールスキューフォースに迎えてほしい、でしたね？」

「ああ彼はまだ悪事に手を出していないからね。君たちのところで立派な隊員にしてほしい（バルタン星人を吹き飛ばしたのは言わないでおこう……）」

「わかりました!!ではマグマ星人さんいきますよ!!」

「ぞ、ゾフィーさんありがとうございます!!気をつけてください。俺以外にもアトランタ星人達もあなたの命を狙っていますから!」

「わかった、情報を感謝をする。」

リブットに連れられてマグマ星人はギャラクシーレスキュー
フォース本部へと向かった。

「……………優しいわねゾフィー。」

「……………私は優しくないよ、ウーマン。今回は成功をただけだ
よ」

「だがお前によって救われたきた宇宙人はたくさんいるじゃないか」

「セブン……………」

「そうですよゾフィーお兄ちゃん!!だからお兄ちゃん頑張ろう?」

「ジャック……………そうだな。しかし久しぶりに兄妹がほぼ集結した
なあ。いずれにしても私の命を狙う連合軍か……………」

「ヤプールの奴、今度はゾフィー兄さんの命を狙うなんて許せない!!」

「エースは兄さん思いだね、ありがとう」

エースの頭を撫でると彼女は頬を赤くしてもつとしてほしいなど
思っていたらゾフィーの手の感触がなくなった。ふと見ると、タロウ
が頭を撫でられていたのでエースは蹴りを入れてタロウを吹き飛ば
す。

「痛った!!何をするんだよ、エース姉さん!!」

「それはこっちの台詞よ!!なんであんたがゾフィー兄さんに撫でられ
ているのよ!!」

「いいじゃん!!」

エースとタロウは姉妹喧嘩をしまい、ジャックとレオが慌てて
止めている姿を見てゾフィーが笑った。そして、セブンとウーマンは
彼が笑ってるのを見て釣られて笑っていた。

「ちよ!?!なんで三人で笑っているの!?!」

「いやーすまない、お前たちが小さい時に喧嘩をしていたのを思いだ
してな。確か私のとなりに座りたい…だったかな?まあ、今は宇宙の
平和を守るために頑張ろうじゃないか!!」

「……………お……………」

ウーマンたちを連れてゾフィーは光の国へと戻る。

T D G

ゾファイー side

みんなー、ゾファイーお兄さんだよー！…って何やってるんだ私は、どこかの『お〇〇さんといっしょ』じゃないからね。

光の国に戻った私は、大隊長と大隊長補佐に報告をした後、ウルトラマン商店街を散策していた。すると、三人のウルトラマンが歩いているのに気づく。

プロテクターを装着し、赤と紫のボディをした黒い長髪の戦士 “ウルトラウーマンティガ”、

金髪にセミロングでティガよりも派手な色の “ウルトラウーマンダイナ”、

黒髪をポニーテールにし、黒いプロテクターを装着した赤の戦士 “ウルトラウーマンガイア” だ。

「やあティガ、ダイナ、ガイア」

「おーゾファイー!!」

「こらダイナ、ゾファイーさんだろ？」

「いいじゃねーか、ガイア」

三人は本当に仲がいい。あの究極生命体レイブラッド星人が起こしたギャラクシークライシスの際も彼女達は三人で活動していたところを私がスカウトをしたんだ。普段は光の国ではなく自分たちが守っていた地球にいることが多い。だから、こうして光の国へ来てくれるのは私も嬉しい。

さて気になった人のために説明しておこう。ダイナは『ウルトラマンファイティングエボリューション3』のように自由にタイプチェンジができるみたいだ。主にミラクルタイプに変身することが多いね。「君達が提供してくれたエネルギーのお陰で、ウルトラメダルがゼツトの力となってくれたみたいだ。宇宙警備隊隊長としてお礼を言わせてくれ」

「ゾファイー隊長、頭を上げてください!!」

「そうだぜ!! あたしたちはメダルのエネルギーを提供しただけだから

よ!!」

「そうです。それに私は気になるのはゾフィーさんですよ」

「え? 私?」

「あなたの戦闘力もそうですが、M87光線の威力なども気になります。」

私のM87光線か・・・少しだけ彼女達に話をしてもいいかな?」

「私のM87光線は、元は私の師匠ウオーリアンが教えてくれた技なんだ。私に本当の意味でM87光線のことを教えてくれたのもあの人だ。私はこの技を鍛え上げてあそこまでの威力まで達したんだ」

「・・・」

「もうウオーリアンはこの世にはいない。だけど彼が教えてくれた技は今も私の中で生きている。私はこれからも宇宙警備隊長としてこの宇宙の平和のために戦うさ」

しまった・・・ついいつもの癖で話をしてしまったなんてあれ?」

「うおおおお!!ゾフィー!!あんたにいつまでもついていくぜ!!」

「お、おう」

ダイナが涙を流しながら私の両手を勢いよくつかんできた・・・ティガとガイアも涙を流している。あれ?そこまで悲しい話したっけ?」

「うううう私、ゾフィーさんのことを知らないでM87光線のことを聞こうとして・・・」

「あ、いやそこまで悲しむ必要はないよ?」

「だって!!」

「二」うわああああああああああああああああん!!」

ま、待ってくれ!?これじゃあ私が泣かしているみたいじゃあないか!?!とりあえず泣いている三人を落ち着かせてから、私はウルトラカフエメロディ」へと彼女たちを連れていき。奢ることにした。

「すみません。私たちのせいで・・・」

「いや、今回は私が悪かったからね。これはお詫びだよ」

コーヒーや紅茶などを奢ることにして私はため息をつく。やはりこの話は若い子達には早かったようだね。

ティガたちと別れてから、私はウォーリアンが眠っているお墓へやってきて膝をついた。

「ウォーリアン、あなたがこうして教えてくれたM87光線でこの宇宙の平和を守っています。」

「そうかそうか、それは安心できるわい!!」
「え?」

私は即座に後ろを振り返ると、なんとウォーリアンがいた!!私は唾然としてしまったよ。

「えっと……ウォーリアン?」

「ゾフィー……久しぶりだな。」

「あなたは、あの時、確かに……」

「うむ、だがある方がわしを蘇らせてくれた。その間はその御方のところまで鍛え直していたんじゃないよ」

「うお、ウォーリアン!!」

私は駆けだして彼に抱き付いた。

「ゾフィー、よくここまで成長をした。わしは嬉しいぞ……」
「ありがとうございます……!これもあなたが教えてくれたからですよ」

「ふふふ、これからは共に戦うことができる!またお前を鍛えてやるぞ!!」

「お願いします!!」

私はまたウォーリアンが生きていたことが、鍛えてもらえることが嬉しかった。そして、今、私はウォーリアンと互いに拳をつきつけた。

「うむ、見事な拳だ!宇宙警備隊長としての活躍をウルトラウーマンキングから聞いているぞ」

「やはりあの方が……」

「ああわしを蘇らせてくれたのもあの方だ。さて、いくぞ!!ウォーリアンショット!!」

あれは両手から放つ光弾「ウォーリアンショット」!

「スペシウム光線!!」

スペシウム光線でウォーリアンショットを相殺した後、私は接近して連続蹴りをウォーリアンに放つ。

「うむキック力もよし!!見事だぞゾフィー!!」

「ありがとうございます!!あなたも亡くなってからも鍛え続けていましたから!!」

そしてお互いに離れてから、ウォーリアンがある構えをしたので私も同じように構える。……そう、これはあなたが教えてくれた技ですからね。

「M」

「87」

「光線!!」

お互いに放ったM87光線が激突した!私も押されそうになるが絶対に負けない!!この光線は宇宙の平和を守るために使っているのだから!!

「うおおおおおおおおお!!」

「どあ!!」

すぐにM87光線を解除してウォーリアンは笑いながら歩いてきた。

「はっはっはっは!!見事だ!!M87光線を完全に使いこなしているな、ゾフィー!!」

「ありがとうございます、ウォーリアン!!」

私は彼に握手をして共に光の国へと戻った。今日はなんて嬉しい日なんだろう、と。

勇者現る。

「シユワ!!」

惑星4546B……通称「惑星シーカンス」……辺り一面海に囲まれており、地上は一部分ぐらいしかない海洋惑星だ。ゾフィーは、この地で、ティガ、ダイナ、ガイアが戦った最強合体獣「キングオブモンス」、さらに分身の「骨翼超獣バジリス」、巨大顎海獣スキューラ」と交戦していた。

(まさか『超時空の大決戦』に出てきた怪獣達が、『ウルトラフロンティア』のように野生で出てくるとは思ってもいなかった……!)

「ぎやおおおおおおおお!!」

「ぐあ!!」

スキューラの「シークレットジョー」がゾフィーの体に噛みつく。バジリスはバルバリボールを放ちゾフィーにダメージを与える。

解放されたゾフィーを、上空からキングオブモンスが蹴り飛ばしてきた。

「が!!」

キングオブモンスの蹴りでダメージを受けたゾフィーの胸のカラータイマーが点滅を開始する。キングオブモンス達がゾフィーにとどめを刺す為に、それぞれの必殺技を放とうとしたその時、光線が三体に当たった。ゾフィーが呆気にとられていると、一人のウルトラウーマンが降り立った。

「シエア!!」

ウルトラウーマンコスモスである。彼女の髪の色は銀色で、コロナモードかと思えば少し違っていた。そう、宇宙を高速で飛ぶことができるスペースコロナモードの姿で現れたのだ。

「大丈夫ですか、ゾフィーさん!!」

「コスモス、どうしてここが?」

「最近、この辺りで、邪悪な気を感じて、見回っていました。そして、この星からもっとも大きな邪気を感じて、調査に来たら、貴方が……!!」

「気を付けてくれ、奴らは三体で一体だ。私も連携力で不覚をとった」
「わかりました!!はああああああ!!シユワ!!」

コスモスが両手を上げると、エネルギーが発生して、彼女の形態が変わった。髪の色も銀から金へと変わり、金と赤と青の勇気の形態「エクリプス」モードになったのだ。

彼女はそのままダツシユして三体を殴った。しかし、ゾフィーが立ちあがったのを、バジリスとスキューラが見逃すはずはない。二体はキングオブモンスがゾフィーに攻撃をしているのを見て加勢しようと歩を進める。

「この!!」

コスモスはエクリプスパークを放とうとしたが、その前にキングオブモンスが体当たりをしてコスモスを吹き飛ばした。

バジリスは右手の鎌をゾフィーに振り下ろす。ゾフィーはウルトラランスを出してバジリスの鎌を受け止める。しかし、カラータイマーの点滅が早くなってきた……彼のエネルギーがなくなりかかっているのだ。

(まずい、このままではエネルギーが……!!しかし、やむを得ん!!)

彼は蹴りを入れてから必殺技で決着(ケリ)をつけようと、ウルトラブレスレットに戻してから構える。

「M87光線!!」

ゾフィーが放ったM87光線がバジリスとスキューラに当たり爆散する。二体がやられるとキングオブモンスの体が爆発を始めたので、その隙にコスモスは蹴りを入れてゾフィーの近くへと戻る。

「ゾフィーさん!!」

「はあ……はあ……はあ……!!」

「エネルギーを渡します!!」

コスモスの手から光エネルギーが発生した。そして、ゾフィーのカラータイマーが青くなり再び立ちあがる。キングオブモンスはクレッセントビームを二人に放つが、二人は後ろへバク転をしてかわして構え直す。

「ストロウム光線!!」

「コズミューム光線!!」

二人が放った光線がキングオブモンスに命中して爆発する。ゾフィーはコスモスと握手をする。

「ありがとう、コスモス。君がいなかったら私はやられてしまっていたよ」

「いえ、ご無事で何よりです。」

「だがなぜキングオブモンス達が復活を……?」

「確か赤い玉によってあの怪獣たちはブレインワールドから出てきたのでしたよね?」

「ああ、赤い球体の力で欲望が解放された少年達によって、生み出されたのがキングオブモンス達だ。だがそれもティガ、ダイナ、ガイアの三人によつて倒された。赤い球体も一人の少年の願いによつて消滅した……その20年後にもスペアが現れたという報告が入っているけどね」

そして、ゾフィーはある存在のこと懸念していた。

(いったい何者があの三体を復活させたのか……レイバトス、まさかレイブラッド星人の仕業なのか……だが奴らはすでに……いや待てよ、奴なら可能性がある。アブソリユートタルタロス、今は姿を見せていないが……関わっている可能性があるな。)

彼はアブソリユートティアンの戦士がかかわったときのことを思いだす。

アブソリユートタルタロス。

コスモスに助けてもらった後、ゾフィーは光の国へと戻り、隊長室にウルトラウーマンベル、トレギア、ウーマン達ウルトラ姉妹全員を呼んだ。

「ゾフィー、いったいどうしたの？まあ、このメンバーを見て察したけど」

「ええベルさん、皆も覚えているね？アブソリユートタルタロスのこととを。」

「覚えています。ユリアン王女がさらわれたままですしね」

「ユリアン……」

「エイティ……大丈夫よ、ユリアンはおそらく無事よ」

「わかっています。奴の居場所がわかれば……」

ゾフィーは目を閉じて、突如現れたジユダとモルドとウルトラ六兄妹が対峙した時のことを思い出していた。

「貴様達など我らが軍団侵略軍団長の相手にはならない!!」

「ジユダ・スペクターにモルド・スペクター!?お前たちはギンガ達が倒したはず!!」

「誰だそいつらは!?!」

ジユダとモルドはそれぞれバットキャリバーとバットアックスを武器にして、六兄妹に迫る。

「いくぞ!!」

「!!」「おう!!」「!!」

ゾフィー達はブラザーズマントを脱いでジユダとモルドに挑む。

「ウルトラスピンキック!!」

ジャックがスピンキックをモルドに放った後、ウルトラスパークを放ちダメージを与える。

更にウーマンが連続したチョップをモルドにくらわせるそのままウルトラアタック光線を放つがバットアックスでガードをしてはじかせた。

「く!!」

そのままバットアックスを受け止めて、はじかせた後、再びアタック光線を放ちダメージを与える。そして、ジャックがチョップをした後二人で蹴りを入れた。

「ダブルウルトラスラッシュ!!」

ウルトラスラッシュが放たれてダメージを与えると、ゾフィーに対してアックス状のエネルギーを放つが、ゾフィーは躲してモルドに蹴りを入れてダメージを与える。

「アンドロ警備隊を連れて来い！決着をつけてやる!!」

「アンドロ警備隊だと………いったいいつの話をしている!?!」

攻撃を躲した後、トリプルスペシウム光線を放ちモルドにダメージを与える。

「たああああああああ!!」

タロウは連続したパンチをジユダのボディに放ちダメージを与える。ジユダがバットキャリバーを振り下ろしを回避してストリウム光線を放ちダメージを与える。

「はああああああああ!!」

エースが右手にウルトラスラッシュを発生させてジユダに切りかかる。ジユダはバットキャリバーでウルトラスラッシュを壊すと、エースはつかんでジユダの顔面にパンチを入れる。

バットキャリバーを振るってタロウとエースを退かせるが、セブンがアイスラッガーでバットキャリバーを受け止めていく。

「まさか………時間を超えてきたのか!!」

ジユダの猛攻を交わしてアロー光線、エメリウム光線、パンチレーザーを同時に放ちジユダにダメージを与える。

「しっこいわね」

「こうなったら！コスモミラクル光線を使いましょう!」

「それしかないな。よし！皆のエネルギーをタロウに!!」

「こええ!!」

五人はタロウにエネルギーを託すと、タロウはスーパーウルトラウーマンとなり構え直す。

「コスモミラクル光線!!」

タロウが放ったコスモミラクル光線がジユダとモルドを撃破した。タロウはスーパーウルトラウーマンを解除したが、ゾフィー達のカラータイマーが点滅するほどエネルギーを消耗させていた。

「よくやった、タロウ。……なんだ？」

六人が前を向くと、穴が開いて、二人のウルトラマンが現れた。アーリースタイルのウルトラマンベリアルとウルトラマントレギアである。

「あれは……」

「スターマークをつけてえらくなつたなゾフィー」
「……」

ゾフィーは無言を貫いた。なにせ現れたのは男性のベリアルとトレギアなのだ。ウーマン達も混乱をしている。

「何よあんたたちは!!」

「穴から現れたみたいだが……」

「なるほどこちらの世界のタロウは女性なのだな？」

「その姿……トレギアみたいだけど……」

「おそらく先ほどのグア兄弟と同じで別世界の時間軸を超えてきたんだ! 私達が知るものじゃない!!」

「さあ、遊ぼうぜ!!」

二人は力を解放させて、ジユダとモルドの戦いで疲労をしている六人を圧倒した。

「!!!」
「うわああああああああ!!」
「!!!」

「終わりだ、光の使者達」

二人が止めを刺そうとしたとき、三人のウルトラウーマンが蹴りを入れて二人を吹き飛ばす。

「なんだ？」

「へえー、別世界の私って男なんだ」

「これが並行世界の私ですか……」

「へ!!これ以上はさせねーぜ!!」

助けに来たのは、ウルトラウーマンベル、ウルトラウーマントレギア、ウルトラウーマンゼロの三人だ。

「トレギア……」

「無事かい、タロウ？」

「ベルさん!!」

「待たせたわねゾフィー、さーて私の可愛い義息子をいじめてくれた礼をしてあげるわ!!行くわよ、二人とも!!」

「おう!!」

「はい!!」

ベルとトレギア、ゼロは走り、ゼロはゼロスラッガーを放つ。敵の二人が弾くと、ベルは膝蹴りをベリアル腹に当ててから、顔面を殴る。

並行世界のトレギアの蹴りをトレギアははじかせる。

「お前は私のようなだ……しかしなぜ光の国に？私ならわかっているはずだ！」

「確かに、私はお前と同じように考えていたわ。でもタイガ達に倒されて復活をした後、私は改めたのよ!!今の私は光の使者！ウルトラウーマントレギア!!この宇宙を守る戦士よ!!」

「そういうこと、私も倒されてから色々と考えていたのさ。ウルトラウーマンベルとして戦い続けるだけよ!!」

「二はああああああああああ!!」

「ぐううううー！」

「おのれ!!」

「何をしている。」

三人は突然放たれた光弾に吹き飛ばされる。

「トレギア!!」

「ベルさん!!」

「ゼロ!!」

話は現代に戻る。集まった戦士たちはアブソリユートタルタロスが光の国を狙っていることがわかったので警戒態勢を敷いているが、今のところ現れる気配は無い。

「いずれにせよ、ゼロもシャイニングウルティメイトになっても倒せなかった」

「ええ、奴の戦闘力は想像以上の強さを持っています。U40のウルトラウーマンジョーニアスも押されたと聞いています」

「奴がなぜ現れないのか不思議ですが、警戒はしておかないと」
「だな。各自何かあったらすぐに連絡をするように、いいね？」

ウルトラ姉妹達は隊長室を後にして残ったのは、ベルとトレギア、ゾフィーの三人だけである。

「並行世界の私達は男なんだな」

「おそらく私以外にも男だと思いますが……色々とありますからね並行世界は」

「……」

トレギアは両手を組んで目を閉じ、考え事をしているようだった。

「ごーらー！」

「痛ツ!!何をするのですか!?!」

「いや、あんた、ずっと無言だから変な方向に考えていないかと思ってね?」

「普通に考えていただけなんです……ゾフィー隊長、アブソリユートタルタロスが光の戦士が邪魔といていましたね」

「ああそう言っていたね。まさかこの星を本拠地としているのか……なるほど辻褄があうね。よし、全戦士に通達だ。アブソリユートタルタロスがいつ現れてもいいように態勢をとるようにと。」

「了解!」

ゾフィーののんびり

宇宙警備隊隊長室：ゾフィーは椅子に座りながら今日の仕事を確認をしていた。そして、仕事をしながら、宇宙警備隊隊長に就任をしてからかなりの年数が経ったことを思い返す。

「……本当に色々であったな。(宇宙警備隊隊長として就任してからジャック達を地球に派遣したっけ。最後に私達の次元、M78ワールドの地球に派遣したのはアムールだったな。イーハント星人が一人の男の子欲望を利用をしようとしていたからね。それを阻止をすることができてよかったよ。)……コイビトホシイナ」

ボソリと呟いてからため息をついた。仕事に集中しているが、段々とやる気が起きなくなり、ついには机に伏せてしまう。

「しつれいしま……ゾフィー兄さん!？」

隊長室の扉が開けて入ってきたのは、書類を提出するために来たウルトラウーマンエースだった。彼女は机に伏せているゾフィーの姿を見て急いで駆け寄る。

「やあ、エースか」

「だ、大丈夫ですか、ゾフィー兄さん?」

「ああ……仕事が多くてね」

「トレギアはどうしたのですか?」

「今日は休みだよ。だから私一人で処理をしていたんだ」

「それでしたら誰か姉妹を呼んだらいいじゃないですか。もう私も手伝いますから。」

「ありがとう、エース」

エースに手伝ってもらい、仕事は順調に進んだ。数時間後、彼らは仕事を終えた。

「うーうーん、助かったよ、エース」

「いえいえ、いつもゾフィー兄さんには助けてもらってばかりですからー!」

「そうかな?」

「はい、銀河連邦から地球に派遣された時、どれだけ助けてもらったこ

とか……ゾフィー兄さんがいなかったら私はやられていましたよ」

エースは目を閉じて、地球で超獣と激闘を繰り広げていた時のことを想起する。ギロン人の罠にかかり閉じ込められてしまった時にゾフィーがウルトラコンバーターを持って助けに来てくれたことが彼女は嬉しかったのだ。

「気にすることはないさ、エース。お前達がピンチになったときは駆けつける……お前たちは大事な妹たちだからね。」

「……………」

「エース？」

「ねえ、ゾフィー兄さん？あなたの隣に立つのは私じゃダメなんですか？私があなたの隣にいてもいいのではないですか？」

「え、エース？」

彼女はだんだんとゾフィーの方へと近づいていこうとしたときに扉が一斉に開いた。

「「ちよつと待ったああああああああああああああああああああ！！！！」

「み、皆？」

現れたのはほかのウルトラウーマン達だった。彼自身は「仕事はどうしたのかな」と思う中、ジャックが素早くエースに近づく。

「エース？何をしようとしていたのかな？」

「そうね、抜け駆けは禁止とっておいたはずよ？」

「いや……あの……その……………」

エースはウーマンとジャックの二人から問いただされており、ゾフィー自身はほかの姉妹達から問いただされていた。しかし、彼には何のことかさっぱりとわからないので首をかしげた。

（えつと確かエースから告白されようとした時にほかの姉妹達が入ってきたんだよね？それで現在エースはウーマンとジャックに責められて、私はセブン達に責められている……なぜ、こんなことになってしまったんだ）

「聞いているのかしら、ゾフィー！！」

「聞いているよ、セブン」

「ゾフィー兄さん!!」

「はい!なんでしょう、タロウ?」

「ゾフィー兄さんは誰と結婚するの!？」

「え?」

「え?」

ゾフィーはタロウから「結婚」というワードを聞いて固まってしま
う。恋人がいないので結婚する必要がないのである。だからこそタ
ロウの質問が気になってしまいが、そこにウルトラの母ことマリイが
入ってきた。

「あら?皆いたのね?」

「マリイさん、いったいどうしたのですか?」

「ゾフィー、あなたに見合いの話を持ってきたのよ」

「え?」

「!!」

ゾフィーの見合いを聞いて姉妹達は目を見開いている。彼自身も
そんな話を持つてくるとは思ってもいなかったので驚いていた。

ゾファイーのお見合い!?

ゾファイー side

「……………」

き、気まずいところからこんにちは、宇宙警備隊隊長ゾファイーだ。マリーさんが用意したお見合いに出ると、相手はまさかのアキュラだった。

アキュラは光の国ガーディアンチームの隊長を務めているウルトラ戦士で、かつてババルウ星人によって倒されたが、ウルトラマンキングの力により、他の仲間たちと共に復活を果たしている。

今もガーディアンチームの隊長として活躍を収め、特殊な光波シールドを駆使して戦う女傑だ。そんな彼女がFカップの胸を手で押さえて、顔を赤くしている。

まあ、お見合い相手が私だからね。お互いに気まずい空気の中、何を話せばいいのやら……………流石に仕事の話をするなど私も馬鹿じゃないが……………彼女とあまりいることが少なかったので何を話していいのやら……………。

ゾファイー side 終了

宇宙警備隊の別室では、ウルトラ戦士たちがゾファイーのお見合いを監視していた。彼女達もまさか相手がアキュラだとは思ってもいなかったのだから驚いている。

「そういえば……………最近アキュラがソワソワしていたけど……………まさか相手がゾファイーと知っていたからなのかよ!!」

カラレスが叫んだ。ほかの姉妹達はゾファイーがアキュラと結婚をするのかとヒヤヒヤしながら、そのモニターを見守っていた。

場所が変わり、お見合いの部屋……………アキュラとゾファイーはお互いを見つめたまま話が進んでいなかった。アキュラの方はゾファイーだと知らされていたのとても緊張している。なにせ相手は自分の想い人であり憧れでもある。だからこそお互いに緊張をして、何を話しているのかわからないのである。

(ど、どうしよう!!普段ゾファイー隊長と話すことがないからネタがな

いよーーーーー)」

「えつと、アキュラ……」

「は、はい!!」

「緊張しているのは私も同じだよ」

「まさかゾファイー隊長とお見合いをすることになるなんて思ってもいませんでした」

「私もだ。普段はお互いに仕事や光の国の未来のことくらいしか話したりしなかったからね」

「ですね(笑)」

アキュラは少しお化粧を直してきますねといい、退室して、ゾファイーは座りこんだ……違和感を持ったその君?ウルトラ族だって化粧はするんだよ。

(や、やはりお見合いってのは難しいな…….どのように女性と話をしているのかわからない)

一方でアキュラは戻ろうとしたとき、誰かにハンカチを口に当てられて昏睡してしまう。相手は彼女の姿に変身して、ふふふと不敵に笑いながらゾファイーがいる部屋に入っていく。

「お待たせしました」

「…….いいえ」

ゾファイーが何も気づかず受け入れたのを見て、好機と思ったニセアキュラは持っていたナイフを持ち、ゾファイーを突き刺そうとした。しかし、ゾファイーは躲して彼女の胴体に蹴りを入れた。

「…….貴様がアキュラじゃないのは部屋に入った時にわかっていました。私を殺すためにアキュラの姿を借りたのだろう…….いい加減正体を明かしてもらおう!! “サクラシス星人”!!」

「くそッ、ばれたか!!」

暗殺宇宙人サクラシス星人はアキュラの姿を解いた。彼は持つている刀をゾファイーに向けていたが、彼は冷静に立ちあがりサクラシス星人を外に投げ飛ばした。

ほかのウルトラ姉妹達も異変を見て、ゾファイー達の元へ向かった。一方でサクラシス星人はクナイを投げつけたが、ゾファイーはウルトラ

ランスを構えてはじかせると、カプセル怪獣のカプセルを全て投げた。

「な!？」

「さーてご主人様に手を出したのですからお覚悟はできておりますよね?。」

「殺す」

「あたしの右手の鎌でぶった切ってやるよ」

「私のこの一角紅蓮ミサイルで灰にしてやろうか?」

「私のダークロプススラッガーで切り裂いた方がいいですよ(笑)」

どう殺そうか思案されるのは、暗殺宇宙人としては屈辱であった。彼は何とかゾフィーを殺すために接近しようとしたが、タイラントが左手の鞭を使いサクラシス星人を捕まえて引っ張る。

「待てよ。まずはあたしたちが相手してやるよ。」

「な!？」

「「「さあ覚悟はできていますよね?」」」

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい!!」

サクラシス星人はカプセル怪獣たちにフルボッコされた。そして、グロッキー状態になったサクラシス星人へ、ヒカリが新たに開発した「相手の能力を封印をするロープ」を放ち巻きつけた。

サクラシス星人から最低限の情報を聞き出したゾフィーは、この場をカプセル怪獣たちに任せて、アキュラが捕らわれている場所に急ぐ。そして、彼女が捕らわれているのを見てゾフィーはすぐに拘束具を壊して起こす。

「アキュラ!!」

「あれ?私……………そうだ……………サクラシス星人に……………うううううわああああああああああん!!怖かったですうううううううううううううううううううううう!!」

「よしよし」

アキュラは涙を流しながらゾフィーに抱き付いた。いくらガーディアンチームの隊長を務めているとはいえ彼女も女性だ。いきなりの不意打ちで気絶させられ、何もできなかったので、涙を流した。

それをゾフィーは優しく受け止めた。

(やっぱり私はこの人のことが……好きなんだ!!)

次の日、隊長室にいるゾフィーに、ウーマンが資料を持ってきた。

「それでお見合いの方はどうなったの?」

「ああ中止だよ。サクラシス星人が侵入したってことで私も急遽仕事になったからね」

「そう……」

ウーマンはお見合いが中止になったことに内心喜んでいて、このままアキュラにゾフィーを取られるなんてごめんだと思いながら。すると、隊長室の扉が開いたので誰が入ってきたのかなと思いついて、アキュラがやってきた。

「おや、アキュラどうしたんだい?」

「これをどうぞ。私の手造りです!!」

「ありがとうアキュラ、美味しくいただきますよ」

「では!!」

そして彼女はウーマンの傍に行くのと耳元で呟いた。

「負けませんよ、今まではあなたたちに遠慮をしていましたが……これからビシビシと行きますので」

「!!」

ウーマンはアキュラの方を見るが彼女はすでに退室していた。ライバルが増えたとウーマンは確信する。こうしてゾフィーのお見合いはサクラシス星人によって失敗に終わったが、彼に恋をする乙女たちにとっては半分の安堵と半分の危機感を覚える事件となった。

闇の使者

ゾフィーとアキュラとのお見合いは、サクラシス星人によって失敗に終わり、ウーマン達はホツとしていた。

そして時が進み、現在、ゾフィーは管轄内をパトロールしていた。「惑星ガリア付近異常なし。次は……ぐあ!!」

ゾフィーは次の空域に向かおうとしたときに光弾を受けてしまう。振り返ると黒い巨人が立っていた。彼は前世の記憶を頼りに思いだす。

「ダークファウスト……なぜここに……」

「ふん!!」

ファウストが両手をあげると、辺りの景色が変わっていく。ファウストは自らが発生させたダークフィールドにゾフィーを誘い込んだのだ。

（しまった!!ダークフィールドを張られたか!?確かこの中では我々光の戦士は力を半減させられ、逆に向こうは能力強化ができる代物だったな!!）

ファウストは接近して、ゾフィーに蹴りを放ってきた。ゾフィーは躲したが、ファウストはそのまま左足で胴体に蹴りを入れてきた。

「ぐあ!!」

ゾフィーは、攻撃を受けながら左手のウルトラブレレットに手を添えてウルトラスパークカッターを放つが、ファウストはダークシールドを張り、ゾフィーが放ったウルトラスパークカッターを弾かせる。

（やはり向こうの力が上がっているな。いや違う!私の力が下がっているんだ。いったいどうすれば……）

「だが負けるわけにはいかない!!シユワ!!」

ゾフィーはスペシウム光線をファウストに放つが、相手も必殺技のダークレイ・ジャビロームを放ってきた。敵の必殺光線はスペシウム光線を粉砕をしてゾフィーを吹き飛ばした。

「ぐあ!!」

ゾフィーのカラータイマーが点滅を始める。ファウストは笑いながら彼に接近しようとした。彼自身はダークフィールドの影響か立ちあがることができなほほどに消耗をしていた。

「こゝのままでは……」

ファウストが止めを刺そうとしたときに、ダークフィールドが付き破られてファウストを吹き飛ばす光が現れた。そして光は、体を生成させる。銀色のボディに銀色の髪をした女戦士：胸部にY字状のエンジーコアを持つウルトラウーマンネクサスが現れた。

「ネクサス……」

彼女は、辺りを見てから姿を赤いジュネッスへと変えると、右手のアームドネクサスにエネルギーを込めて上空へと放つ。張られていたダークフィールドを上書きをしてメタフィールドが生成された。

ファウストは、自身が張ったダークフィールドがネクサスによつて上書きをされたことに怒り、攻撃をしようとしたが、突然飛んできた光線が当たり吹き飛ばされた。

「今の光線は……」

「大丈夫ゾフィーお兄ちゃん!!」

「ジャックにゼロ、どうしてここに……」

「次元を超えた後に、ネクサスが現れて隊長が危ないと言つてくれてよ。ジャックも近くをパトロールしてたから一緒に来たのさ!!」

「無事でよかったよ、ゾフィーお兄ちゃん!!」

「来るぞ……」

ネクサスは構えるとファウストはダーククラストを上空に放つが四人は弾丸の雨を躲す。そして、ジャックはウルトラショット、ゼロはエメリウムスラッシュを放つ。

ファウストが躲すと、ネクサスは接近しながらさらに光りだして青いジュネッスブルーへと姿を変えた。そして、右手のアームドネクサスにエネルギーを集中させてシュトロームソードを生成し、ファウストのボディを斬りつける。

「今だゾフィー!!」

「受けるがいい!!闇の使者よ!!M87光線!!」

ゾフィーが放ったM87光線がダークファウストに命中して爆散した。メタフィールドが消失した後、ゾフィーはネクサスと握手をする。

「ありがとうネクサス。君がいなかったらやられていたよ」

「気にすることはない。元の原因は私が取り逃がしてしまつたから……」

「なあネクサス、あのダークファウストは一体……」

「……奴はある暗黒エネルギーによって生み出された存在——自我はないが光の戦士を憎んでいる様子だつた。私は奴と遭遇して交戦したが、途中で奴は逃げだしたんだ」

「そして私を見つけて殺そうとしたということか……」

「大丈夫、ゾフィーお兄ちゃん？怪我とかしたよね。」

「大丈夫だよ、ジャック！いたたた……！」

ゾフィーは強がったが、ファウストから受けたダメージは大きかつたようだ。ジャックは涙目になり彼に抱き付いた。

（おうふ、彼女のEカップの胸が私に当たつて……いかに頑張れゾフィー!!お前は宇宙警備隊長なんだぞ!!ウルトラ兄妹長男だろう!!長男だから我慢をするんだ!!ぬおおおおお!!頑張れ私!!）

ゾフィーは心の中で奮闘をしていた。ジャック以外にもほかのウーマン達の全裸の姿が思いだしてしまい彼は全力で頭を振つていた。

三人はなんでゾフィーが頭を振っているのかわからない状態になつていた。

（だ、駄目だ。どれだけ色々と考えてもウーマン達の裸しか思いつかないなんて……ちよつとこれはまずいかも……）

ゾフィーは心の中でまずいと思いつつもジャック達と共に光の国へと戻る。

ゾフィーとマリ

光の国に戻ったゾフィーは隊長室で仕事をしていた。だが困ったことが発生していた。それは……ウーマン達が裸に見えてしまう現象である。

「隊長、今日の資料……なぜこちらを向いてくれないのですか？」

「あ、いや……(言えない、トレギアの裸が見えているなんて……彼女のたわわな胸やら何やらが全て見えてしまっているなんて言えるわけがない!!)」

前を向いたらトレギアの全裸を見てしまうので、業務中は極力見ないようにしていた。彼はこれではいけないと思い、他の部屋へ向かい、姉妹達に会いに行くことにした。

「あ、ゾフィー兄さん！」

「エースか……つてぶろうう!!)」

エースの声がしたので振り返り、彼女を見たがやはり全裸に見えてしまうので彼は顔を赤くした。トレギアもそうだが、エースは別に裸体ではない。しかし、ゾフィーには裸に見えてしまっているのだ。

「どうしたのですか？」

「あ、いや……悪いが近づかないでくれないか？」

「え……ゾフィー……兄さん？」

「すまん、エース!!)」

彼は走っていく。ウーマンやメビウス達が声をかけても、そのまま走り去っていったので、ウーマンは両手を組んで訝しんだ。そして、姉妹達を集めることにした。

エースは落ち込んでいた。ゾフィーに近づかないでくれと言われたのが堪えたようだ。現在、ジャックは彼女を慰めている。

「妙ね……」

「わ、私、ショックです。嫌われてしまったのでしょうか？」

「トレギア、今日のゾフィー兄さんの変わったところってなかった？」

「……そういえば私の方をあまり見ようとしませんでした。顔

今度はエースが顔を真っ赤にした。ゾフィー自身もため息をつきながらチラチラと見ているが、エースは相変わらず裸の姿なので余計に顔を合わせ辛い。

するとエースは何かを考えたのかゾフィーに提案をする。

「でしたら……私達を抱くつてのはどうでしょうか？」

「なっ!? なななななっ!？」

エースの発言にゾフィーだけでなくウルトラの母も驚いてしまう。まさかエースからその言葉を聞くとは思ってもいなかったからだ。だが彼女の目は真剣だったのでゾフィー達は何も言えなかった。

するとドアが開いてウーマン達が入ってきた。彼女達が一斉に入ってきたので全員的全裸の姿を見てしまう。

「み、皆……」

「全くそういうことだったのね、ゾフィー。今、どういう感じかしら？」

ウーマンは近づいて彼に谷間を見せるようにしているが、ゾフィー自身は裸のウーマンが胸などを全てさらけ出しているので全身が真っ赤になっていく。

((レッド族になってる!?!))

「皆、落ち着きなさい。でもエースの案はいいかもしれませんね」

「マリーさん!？」

エースの案を勝手に了承したマリーにゾフィーは怒るが、このままでは仕事にも支障が出てしまう。彼自身も納得をするしかなかったが……

「だ、だがそのことになったのはいいが……多すぎないか? 何人があるんだ?」

現在、ウルトラ兄妹が全員集結をしている。秘書でもあるトレギアもおり現在11人のウーマンがいることになる。

(11人とやれというのか……私が)

こうしてゾフィーは彼女達といたすことになったのであった。

ウーマン達戸惑う!? パワーアップをした彼女達。

ゾフィースide

や、やあ・・・あれからの話をしよう。私は彼女達の気持ちに応えてその・・・”R18”をしたんだ。いやー私、どれだけ好かれていたんだってね。ウーマンを始めウルトラ姉妹にニュージェネレーションを含めたメンバーとやることになったのだが・・・生きてるのが不思議だよ。

しかも、それがキツカケとなつて、彼女達は更に積極的になつてしまつて困つてしまうよ。私のことが好きだったトレギア、そして、なぜかベルさんともヤツてしまった。

「・・・静かだな」

今現在、皆パトロールなどここにはいないが、何ともないよね？大丈夫だよな？お兄ちゃん心配だよ・・・。

ゾフィースide終了

宇宙をパトロールしているのはウーマンとジャックの二人だ。

「異常ありませんね」

「そうね・・・ねえ、ジャック」

「なんですか？」

「ゾフィーとはどういうことしたのよ？」

「えつと・・・そ、その話は後でしましよ、姉さん」

「そうね・・・出て来なさい!!隠れているのはわかってるのよ!!」

「けっけっけ、ばれてしまったか!」

現れたのは、タロウが地球を守った頃に現れた宇宙戦闘員：泥棒怪獣ドロボンだった。ドロボンは持っていた棍棒を振り回して二人に襲い掛かってくる。

ジャックがスペシウム光線を放つと、ドロボンは棍棒でガードをしたが爆発で吹っ飛ばされた。

「「え?」」

撃つたジャック本人も驚いてしまう。ウーマンは、すぐに意識を戻

して接近し、ドロボンの腹部を思いっきり殴った。

「ふーん！」

「………はあ!？」

殴ったウーマンも自分の力が上がっていることに驚いている。それはほかのウーマン戦士達も同じだった。パトロールなどを終えたウーマン戦士達は集まって、全員が自分の力や光線の威力が上がっていることを報告しあっていた。

「………もしかしてなんだが………ゾフィーとヤツただろ？そこからなんだよな。自分の力や技の威力が上がったのは」

「私もそうです。切断技がいつも以上にキレがありました」

「うん、私もすごく調子がいいんだよ!!」

「まさかゾフィー兄さんと……するとそういう効力があるなんて………思ってもいませんでした」

「でもレオ姉さん、ゾフィー兄さんと致すと気持ちがいいじゃないですか」

「そうですね！私も気持ち良かったです!!」

「わ、私も!!」

全員がゾフィーとヤツたことに満足を覚える中、トレギアはベルと模擬戦をしていた。

「でああああああああああ!!」

トレギアが放つ蹴りをベルははじかせていく。以前よりも力が上がっている気がしており、彼女は離れると両手にエネルギーをためて光弾を連続で発射した。ベルはベリアルリッパーを放ち彼女が放つ光弾を相殺をした。

「………満足かしら、トレギア」

「ええ、私の力が以前よりも上がっているんです。ゾフィー隊長とながってからかもしれませんが………」

「奇遇ね、私も同じことを考えていたわよ。おそらく他の娘達も私達と同じじゃないかしら。全くどれだけ好かれているのかしらね、あいつは………」

ベルは苦笑いをしながらため息をついた。彼女も仕事があるから

とトレギアと別れて大隊長室へと戻るとウルトラの父も苦笑いで出迎えた。

「どうしたのよ、ケン」

「わかっているだろう？ マリーから連絡がきて驚いているところだよ。彼女達の光エネルギーの数値が今まで以上とな」

「ふふっ、やはりね」

「君もそうなのかい？」

「ええ」

「ふむ……これはゾフィーが今まで以上に狙われる可能性が高いかもしれない」

「ここからが正念場、ね……」

二人はゾフィーが狙われていると不安を感じながらも宇宙警備隊の仕事を始めるのであった。

ゾファイー対ジャミラ

「シユワ!!」

宇宙警備隊隊長を務めるゾファイーは惑星ガラシウスの星で戦っていた。火炎放射を躲すと、相手はゾファイーに対して連続で火炎放射を放つ。

「ぐおおおおおおおお!!」

「……まさか目の前で悲劇の怪獣と戦うことになるとはな……
彗星怪獣ジャミラ……」

ジャミラ——宇宙開発競争時代、不幸にもロケットの事故にあつてしまい水が全くないただ炎が吹き荒れる灼熱の惑星に墜落をした地球の宇宙飛行士ジャミラが過酷な環境に適応して変貌を遂げた姿である。

ウーマンが涙を流しながらウルトラ水流で彼の暴走を止めたはずなのに、目の前にいるジャミラはまるで何者かに蘇らされて復讐をするかのように惑星ガラシウスで暴れていたのをゾファイーが見つけて止めているところだ。

「ジャミラ……は地球ではない!!暴れるのはやめろ!!」

「ぐおおおおおおおお!!」

ジャミラはゾファイーの言葉を聞かずに剛腕をふるってきた。ゾファイーは剛腕を受け止めると背負い投げをしてジャミラにダメージを与える。ジャミラは立ちあがりゾファイーに火炎放射を放った。

ゾファイーはウルトラクロスガードでジャミラが放つ火炎放射をふさぐとスペシウム光線を放ち頭部にダメージを与える。威力は落としていたのでジャミラは攻撃を受けたがそれでも立ちあがり襲い掛かる。

(妙だ、威力を落としたとはいえスペシウム光線をまるで効いていないかのように私に迫ってくる。まさか改造をされているのか?)

ゾファイーは考えているとジャミラは火炎放射を弾にして放ってきた。彼はゾファイースラッシュで十字型の手裏剣を発射させて相殺をするとカプセル怪獣を出す。

「タイラント頼む！」

「あいよ!!」

カプセルからタイラントが現れて左手の鉄球から鎖を発射させてジャミラの動きを止めようとする。ゾフィーはその間にジャミラを止めるためにキャッチリングを放ち動きを止めようとする。

「ぐおおおおおおおお!!」

「うわ!!」

ジャミラは、力を込めてキャッチリングを破壊し、火炎放射でゾフィーに攻撃をする。ゾフィーはどうしたらいいのかと悩んでいるとジャミラが涙を流していた。

「.....」

ゾフィーは無言で立ちあがりM87光線の構えをしていた。ジャミラ自身もせめて眠らせてほしいと涙を流しながらゾフィーに懇願をしていた。

だからこそゾフィーは終わらせるために必殺技M87光線を放った。

『あり.....が.....とう.....』

「.....」

ジャミラの声が聞こえて彼自身は両手を合わせて安らかに眠れるように、これからも宇宙の平和を守っていく決意を固めた。そこにウーマンが到着した。

「ゾフィー.....何かあったのね？」

「ああ、かつて、君が戦ったジャミラと交戦したよ。」

「!!」

ウーマンはゾフィーの言葉に目を見開いた。彼は両手を合わせてせめて安らかに眠れるようにとお祈りをして、ウーマンと共に光の国へと戻るのであった。

ゾフィー、惑星アースラへ行く。

惑星アースラ——元は別の名前だったが、現王たるアナタシアの父君が改名した惑星である。

そんな星に宇宙警備隊長を務めるゾフィーが到着した。彼がなぜ惑星アースラへやってきたのかというとアナタシア女王に来てほしいと頼まれたからだ。

ちなみに、ゾフィーは今回護衛は誰もつけず、やって来た。

「これはこれはゾフィーさま！」

「女王陛下が私に用があるとのこととで参上致しました。陛下は？」

「は！女王様はお部屋におられます」

「ありがとうございます」

ゾフィーはお辞儀をして、彼女がいる部屋のところまで向かう。彼はこの惑星で滞在していた頃を懐かしそうに思い出しながら歩を進める。

「これはこれはゾフィーさま、お久しぶりでございます。」

「メイド長さん、女王様は？」

「中におられますよ。すみません……女王様の我がままに付き合わせてしまいました」

「気にしておりませんよ。友好を掲げた星へ参上するのも隊長の務めでもありますから……」

侍従長が扉をノックすると、中から声がした。そして、ゾフィーが来たことを聞くと、扉が勢いよく開いた。

「お待ちをしておりました！ゾフィー様!!」

アナタシアは目を輝かせながら現れたので、二人は苦笑いをした。そして、侍従長に「ごゆつくり」と促されて、中に入る。彼女の部屋に久々に入ったゾフィーだが、色々と私物が増えていたので驚いた。「頑張ってるようだね、アナタシア」

「はい！女王としての使命もありますから様々な本を読んでいますわ」

「そうか……すごく成長したね、アナタシア。私も嬉しいよ」

ゾフィーがアナスタシアの頭を撫でてみると、彼女が頬を赤くしたので、彼は「風邪でも引いたのかな?」と思った。彼女と思い出話に花を咲かせていると、気がつけば日が暮れていた。そのため、彼はそろそろお暇することに決めた。

「女王陛下、私はそろそろ戻ります」

「……………」

「陛下?」

「まだ……………駄目なんですか?」

「え?」

「私を女として見てくれないのですか?」

「……………アナタシア……………」

「私はずっとあなたを異性として見てきました。最初に出会った時から……………あなたさまの放つM87光線の美しさに見惚れた時から……………そこからずっとずっとあなたのことを想っております」

「……………」

「私、アナタシアは……………ゾフィー様、あなたをお慕い申し上げます」

アナタシアの告白にゾフィーは驚くも、すぐに首を横に振る。

「駄目だ、アナタシア……………」

「どうしてですか!?!」

「あなたは女王、私は宇宙警備隊長……………とてもじゃないが、立場的に私は貴女と釣り合わない。それに宇宙は広い……………私以上の素敵な人がいつかは現れる。あなたは私にとらわれてはいけません。」

「……………ですッ!」

「……………」

「嫌です。いやいやいやいやいやいやだッ!!」

彼女は彼に抱き付いてきた。涙を流しながら抱き付いてきたので彼は困惑してしまう。

「アナタシア……………」

「私には……………私にはあなたしか考えられません。だから……………」

だから………」

(彼女が私に依存をしているのはやはり父上が亡くなられたからかもしれない。彼女は若い……家族を喪い、それでも女王として立ち上がらなければならないという使命感が……本来の彼女の心を閉じ込めていたかもしれないな)

ゾフィーは、アナタシアの方へ顔を向けると、彼女は唇を合わせてきた。彼はウルトラマンの姿だったので舌を出したりすることはできない。

この時、ふと思い出す、侍従長が言っていたことを。

『ごゆつくり——♪』

「謀ったなあああああああああああん!!」

「うふふふふ、実は皆から承諾してもらっているのですよ?」

「えっと、アナタシア、一応聞くが、何を?」

「え?何をつてゾフィーさまならわかることでしょうか。S〇〇ですよ(笑)」

「やめないか!?!」

「さあやりましょう、ゾフィーさま?」

こうしてゾフィーはアナタシアに食べられましたとき。

ゾフィー―冷汗をかく。

ゾフィースィデ

目を覚ました直後、私は辺りを見回しながら、昨日のことを思いだしていた。確か、アナタシアに押し倒されて、彼女の………思いだしたよ。

隣の方を見やると、裸で寝ているアナタシアがいたのを見て、私は冷汗をかいてしまう。

うわー、ヤツてしまったよ。まさか女王さまとヤツてしまうなんて………！彼女はももぞと動いたと思ったら、私の方をじーつと見ていた。

「おはようございます、ゾフィーさま？」

「ア、ハイ、オハヨウゴザイマス」

「ふふふ、昨日は激しかったですわ」

「ヤツパリヤツタンデスネ。ホントーニスマナイ」

それから私は元の姿に戻る。アナタシアも服を纏うと、メイド長さんがニヤニヤしながら入ってきたので、私はイラつとしてしまう。

「うふふふふ、ゆうべはお楽しみでしたね（笑）」

「嵌めましたね、私を………」

「ハメたのは貴方様の方でしょう♪それに、私はメイド長としてアナタシアさまのお望みを叶えただけですよ――では私は用事がありますので失礼いたします。なお宇宙警備隊の方々には、ゾフィーさまが女王様の勅命で此方にいらっしやることをいっておりますので………は♪」

メイド長さんがそのまま立ち去った後、私もそろそろ退散することにした。警備隊としての仕事もあるからだ。アナタシアは寂しそうな顔をしていたので、私は彼女の頭を撫でてから飛び立った。

ゾフィースィデ終了

惑星アースラを後にしたゾフィーが宇宙空間を飛んでいると、円盤が全速力で移動しているのを発見する。そして、その円盤をエースが追いかけている姿を見て、彼女の助太刀をすることにした。

一方、エースは円盤に対してパンチレーザーを放ち、とある惑星に墜落させた。

彼女も惑星に着地し、不時着した円盤に向かって話しかけた。

「いい加減に降参しなさい、ゼラン星人！」

「おのれ！こちらの狙いはウルトラウーマンジャックだったが、まあいい！貴様を倒せばジャックも来るだろう!!いでよ！プルーマ!!」

宇宙怪人ゼラン星人の円盤から現れた凶怪獣プルーマは、エースに体当たりをして吹き飛ばす。

「く!!プルーマか!!」

立ちあがったエースは接近してチョップを叩きつける。プルーマは負けじと彼女の体をつかんで投げ飛ばした。

「く!!メタリウム光線!!」

エースが放ったメタリウム光線がプルーマの体に当たるが、怪獣も負けじと口から熱線を放ってきたので、彼女はウルトラネオバリアーを張りガードする。一方でゼラン星人はプルーマを囮に円盤の修理を終わらせて飛び立とうとしていた。

エースはそれに気づいたが、プルーマが邪魔をする。このままでは逃がしてしまう……その時一筋の光線がゼラン星人の円盤に命中して爆発をした。

彼女は光線が放たれた方向を見ると、ゾフィーがいた。？87光線で円盤を撃墜させたのだ。

「ゾフィー兄さん!!」

「エース、大丈夫か!? 私も加勢しよう!!」

「いいえ、見ていてください!はああああああああ!!」

エースはプルーマを投げ飛ばした。プルーマは熱線を放とうとした瞬間、口部にパンチレーザーを放ち、怯ませる。そして、そのままホリゾンタルギロチンを放ち、プルーマの頭部を切り裂いた後、バーチカルギロチンを放ち、肉体を真っ二つにした。

プルーマが爆発する中、ゾフィーは彼女の近くに着地して円盤について話をする。

「ではあの円盤にはゼラン星人が乗っていたのか。しかも目的は

ジャックを倒すこと……」

「かつてゼラン星人はジャック姉さんのウルトラブレスレットを操り、敗北寸前まで追い詰めたんですよ?」

「ああ。まあ今、ジャックが着けているブレスレットは私が改良した特注品だからな……妨害電波が発生をしても問題ないはずだったろうが……エース、お前のおかげでゼラン星人の野望を食い止めることができた」

エースの頭を撫でると、彼女は顔を赤くしながら照れた。

「でもゾフィー兄さん、黙ってほかの女のところに行つたのは許せませんよ?」

「え?」

ゾフィーがエースを見ると、ハイライトが消えた目でじりじりと近づいてくるのが分かった。

「サキホドカラ、ゾフィー兄サンノ体カラ別ノ女ノ匂イガスルノハナ
ンデデシヨウカ?ソウイエバ昨日ハアースラニイツテオリマシタネ。
モシヤ……女王様ト交ワツタリシテオリマセンヨネ?」

「……」

ゾフィーは思った。なぜ妹たちはこういう別の女性の匂いに敏感なのだろうか、と……エースは更にブツブツと何かを言いながらゾフィーに近づいていき、キスをする。

ゾフィーはいきなりだったので驚いてしまうが、エースは何かを考えたのか突然として北斗 恵子の姿となり服を脱ぎだしたのだ。

「ならその匂いを私が洗い落とさせてもらいます。さあゾフィー兄さん……しよ?」

(また私はこうして流れてしまうのね……とほほほほほ)

心の中でそう思いながらゾフィーはエースとやるのであった。

ゾフィーの帰還

とある惑星でゼラン星人の野望を打ち砕いたエースとゾフィー……その惑星でヤツた後に光の国へと帰還した。

隊長室へと行くと笑顔で座っている人物がいた——そう、我らのウルトラウーマンである。

「お・か・え・り・なさいませ、お兄様……」

黒い笑顔で迎えてくれた彼女に対して謝った後、仕事の引き継ぎをしてから自分の椅子に座り、今日の業務に取りかかる。

休日の間、アナタシアに襲われる形で致した後、エースともコトに及ぶことになったなんて……彼は頭を抱えたが、自分も承諾をしてみたので仕方がないなとため息をついた。

（あの日を境に、彼女達から「遠慮」という言葉が消えた……もしかしてなくても、私が原因……なんだろうな）

『やつとわかつてきたじゃないか』

「……ベリアルさん、いきなり出てこないでくださいよ」

『いいじゃねーか、全員、狙っていたんだからよ、お前のことをずっと、な』

「自分でも驚いています。まさかニュージエネレーションや十勇士の戦士たちも私のことが好きだなんて……正直に言えば、思ってもいませんでした」

ゾフィーはふと物思いに耽る。まずゼロと共にエタルガーを追っていたときにギンガやビクトリー達と出会ったことを。そして、似たような理由でエックス達と出会ったことも……そこで、ゾフィーは、ゼロと異世界の旅をしていた時の接点に気づく。それから仕事の続きをしようとした時、扉が勢いよく開かれた。何かとその方向を見やると、闖入者はウルトラウーマンタロウであった。

「……タロウ、入ってくる時「ゾフィー兄さん!!」アツ、ハイ」

「エース姉さんを抱いたって本当!？」

「……エースから聞いたのかい？」

「うん、顔を赤くしながらすごい笑顔でね!!」

タロウの言葉にゾフィーは苦笑いを浮かべた。

(エースの奴、まさか自慢したのか……はあ……)

彼は心の中でそう呟いた後、先ほどから興奮状態のタロウの相手を始めた。これでは仕事が進まない……そう考えていると、彼女が突然宙にブラーンと浮かんだ。後ろでトレギアがタロウの首根っこを引っ掴んだからである。

「全く！お前がゾフィー隊長の仕事を邪魔してどうするんだ、タロウ!?」

「と、トレギア……だつて……!」

「だつても取手もない！ほらさつきと自分の部屋に戻りなさい！あの書類、まだ出来てないんだろう!？」

「すつ、すぐにやってきまーす!!」

タロウは急いで部屋から出ていくが、慌て過ぎたのか、扉をそのまま破壊していった。扉に空いた穴を眺め、トレギアはため息を吐いてから、ゾフィーの方へ向き、頭を下げる。

「申し訳ありません、ゾフィー隊長。扉の修理代はタロウの給料から引いておきますので」

「あ……いいさ、トレギア。そろそろ扉を変えようと思っていたから丁度いい、かな?」

「全く、甘すぎですよあなたは……宇宙警備隊長としてそういうところはしっかりして頂かないと」

「わかってはいるさ。でも君達が支えてくれるからこそ、私は安心して戦うことができるんだからね」

「……」

ゾフィーの優しい顔を見たトレギアは顔面が真っ赤になってしまった。そして、「用事がありますので」と言い残して、部屋を後にした。すると、彼女と入れ替わる形で、ヒカリが入ってきた。

「どうしたんだこの扉?なかなか前衛的になったな」

「あはははは……タロウが先ほど、ね」

「ああ、そういうことか。それはそれとして、聞いたぞ、*“絶倫隊長”*?」

「……………黙秘権を「そんなものがあるとでも?」すみませんでした」

「ただだけモテるんだよ、お前は!!」

「知らないよ!私にそんなことを言われても!!」

「……………まあいいさ、そういえばお前のブレスレット、汚れてないか?」

「……………そういえば最近調整する時間もなかったな。面目ない」

「はあ……………それなら私が調整をしておこう」

「いいのかい?」

「今、宇宙科学技術局(ウチ)は開店休業中なんでね」

ゾフィーが左手に嵌めていたウルトラブレスレットを渡すと、彼女は自分のラボに戻っていった。彼は左手を見ながら、「自分もジャツクのことを言えないな」と苦笑し、仕事に取りかかることにした。

一方、TOOR惑星でのこと、交戦中のウルトラウーマンティガが苦戦していた。

「あぐ!!」

「ふっふっふっふ」

「ま、まさかお前が復活するなんて……………エタルガー!!」

ティガの前に現れたのは、かつて人とウルトラ戦士の絆を恐れ、ティガ達十勇士のうち七人を魔鏡の中に閉じ込めるもウルトラウーマンギンガビクトリーに倒された超時空魔神エタルガーだった。

「ふっはっはっはっは!!無駄な抵抗は止めろ、ウルトラウーマンティガ!他の連中は既に封印した!!」

どうやらダイナ、ガイア、コスモス、ネクサス、マックス、メビウス、ギンガ、ビクトリー、エックス、オーブ、ジード、ロツソ、ブル、タイガ、タイタス、フーマ、ゼットは捕まったようだ。

「皆を離せ!!ゼペリオン光線!!」

ティガが放ったゼペリオン光線がエタルガーに当たるも、エタルガーは腕で弾き、全身から放った赤い光弾で彼女の意識を刈り取る。「……………あ……………!!」

「ウルトラウーマンティガ!封印!!」

鏡が放たれてティガが封印されてしまう。そこに次元を超えてウ

ルティメイトゼロが駆けつけた。

「く!!」

「遅かったな!ウルトラウーマンゼロ!」

「てめえ……エタルガー、蘇ったのか!!」

「ふっはっはっは!!君達ウルトラ戦士への復讐の為にね。だが私の目的(メインディッシュ)はもう君じゃない。宇宙警備隊長ゾフィーの命……それが私の狙いだからね」

「ゾフィー隊長だと!」

「さらばだ!!」

光弾をウルティメイトゼロにぶつけながら、彼は撤退した。ゼロはまた逃げられてしまったため膝をついていとセブンとレオが駆け寄る。

「ゼロ!!」

「お袋……師匠……!」

「ボロボロじゃない、何があったの?」

「復活したエタルガーの野郎にみんな封印されちゃった……!」

「まさかメビウスとマックスが行方不明なのも……!」

「奴はこうも言ってた、狙いはゾフィー隊長の命だって……!」

「何だと!」

セブンとレオは傷ついたゼロをウルトラクリニックへ運ぶために一度光の国へと戻ることにした。

ゾファイーが狙われる

「エタルガーだど!?!」

ここは宇宙警備隊長室——ゾファイーを中心にウルトラ兄妹が集結していた。メビウスがいない件については、ゼロが説明をしている最中である。

「あいつは、まず自分を倒したギンガとビクトリーを鏡の中に封印したんだ。あたしは奴を追い詰めようと攻撃をしたけど、すぐにほかの世界へと飛び立っていったんだ。あの野郎、前よりもパワーアップしてやがった!」

「そしてティガを封印した後、今度はゾファイーの命を狙っているわけか……」

「いずれにしても、奴の目的が私だというなら……」

「駄目よ、ゾファイー」

「しかし……!」

ウーマンはすぐにゾファイーを止めた。彼が自ら囿となってエタルガーと戦おうとしていることを察したのだ。

「まさかエタルガーがそこまで力をつけてるなんて……」

「如何いたしましたでしょうか?」

「……警戒態勢を上げてくれ。それからパトロールをする時には必ず二人以上ですること、いいね?」

「了解!」

全員が退出した後、ゾファイーが鏡の方を見ると、エタルガーが映ったので身構える。

『宇宙警備隊長ゾファイー……ほかのウルトラウーマン達を返してほしければ貴様一人で惑星アルタリウスへと来るがいい』

エタルガーはそう言い放つと、姿を消した。ゾファイーは急ぎアルタリウスへと向かう為に光の国を後にした。

光の速さで飛んだゾファイーは、あつという間に惑星アルタリウスへと到着した。彼は辺りを警戒しながら、エタルガーを探していると光弾が飛んできたので回避する。

ゾファイーが、光弾が放たれた方角を見ると、エタルガーが立っていた。

「エタルガー!!」

「来たかゾファイー!!見ろ!!」

彼が後ろの方を見ると、魔鏡の中に閉じ込められているウーマン達が目映った。ゾファイーはウルトラブレスレットを使おうとしたが……

(しまった!ウルトラブレスレットをヒカリに預けたままだった!!)

「さてゾファイー、お前の命をもらおうとしようかあッ!」

「悪いが私もそう簡単に命を盗られるわけにはいかない!!」

エタルガーはゾファイーに光弾を放つが、ウルトラバリアーを張って凄いした後、飛びあがり上空からウルトラギロチンを放つ。しかし、エタルガーは全てガードをしてウルトラギロチンを壊してしまった。

「どうした、ゾファイー?宇宙警備隊長の力はそんなものじゃないだろう?それとも仲間を傷つけるのが怖いか?」

(さてどうしたものか……彼女たちを巻き添えにはできない。かといって、奴は普通の戦いでは勝てない。こうなったら……ベリアルさん、力をお借りします!!)

『しょうがないねえ、奴を倒すにはこれしかないからな』

ゾファイーは両手にエネルギーを溜めると、それを刃のように飛ばした。エタルガーがエネルギーの刃を両手でガードをすると、ゾファイーは光と闇のエネルギーを両手に集めて十字に手を組んだ。

「ゼットシウム光線!!」

放たれたゼットシウム光線がエタルガーに当たり、驚愕した。ゾファイーの中から闇の力を感じることに……ゾファイーは気にせず飛びあがりウルトラキックを放ちエタルガーを吹き飛ばす。

「く!ゾファイー……その力は一体何なのだ!?しかし、これは、どこかで……」

「お前が知る必要はない!返してもらおうぞ、彼女達をな!!M87光線!!」

ゾファイーの必殺M87光線がエタルガーに放たれる。エタルガー

はマントを使いM87光線を防ごうとした。

「ぐうううううううううううう!!」

「はああああああああああ!!」

彼はエタルガーを倒す為に光線の出力を上げた。エタルガーは、胸のカラータイマーの点滅が始まったのを好機と見て、エネルギーが完全に消耗するのを待っていた。しかし――!

「うおおおおおおおおおおお!!」

「ぐうううううう、何故だ!?なぜ威力が衰えないッ!?貴様はすでに限界なはずッッ!!」

「私は、宇宙警備隊長ウルトラマンゾフィーだ!負けるわけにはいかない!!彼女達を取り戻す為に!!この宇宙の平和を守るために!!はああああああああああああああああ!!」

ゾフィーの限界を超えたM87光線は、“エタルガー”の名に違わぬ「永遠」に近い肉体と装備の許容限界すらも超えた。エタルガーは上空の方へと浮かび上がり叫ぶ。

「ば、馬鹿なああああああ!!この私があああああああああ!!」

エタルガーは爆発四散した後、ゾフィーは膝をついた。すると魔鏡が割れて、中にいたギンガたちが解放された。

彼女達は急いでゾフィーのところへと駆け寄ると、彼自身は膝をついたまま親指を上げる。

「ゾフィー兄さん!!」

「隊長!!」

「み、みんな、無事、みたいだね。良かった……」

「エネルギーを今渡します!」

メビウスのカラータイマーから光が放たれると、ゾフィーのカラータイマーの点滅が収まる。そして、青に変わると、立ちあがった。

「すまないゾフィー、私達が油断をしたばかりに!」

「気にすることはないさ。だが気になることが一つあるね……」

「エタルガーがなぜ復活をしたのかってことですね?」

「ウルトラダークキラーみたいに怨念で蘇ったのか、それとも誰かに

……」

彼女達が考えていると、ゾフィーは突然M87光線を放った。全員がその方向を見上げると、黒い異形のウルトラ戦士がいた。その姿を見て、ネクサスは声も出ない様子である。

「流石宇宙警備隊長ゾフィー、俺のことに気づいていたとは……」

「お前から感じる闇のエネルギーは強大だからな！薄々感じてはいたが、エタルガーを蘇らせたのはお前だな？」

「フフツ、御明察……まあお前を倒すことはできなかつたようだがな。覚えておくがいい!!俺の名前はウルトラマンダークルシフェル！貴様を闇へと葬る者だ！ダークスプレイド!!」

ダークルシフェルの周りから黒い剣状のエネルギーが発生し、ゾフィー達にその刃を向けるが、二条の光線が放たれて相殺された。

「いああああああああああああああ!!」

「ぐ!!」

上空からウルトラウーマンレオがレオキックを放ち、ダークルシフェルに当てるが、両手を交差をして防いでから着地した。

さらにセブンとジャックが着地したので、ゾフィーは声をかけた。

「セブン！ジャック！レオ！」

「無事か、ゾフィー？」

「何者!!」

「増援か……！ツチ、エタルガーの野郎にエネルギーを渡し過ぎたのは、失敗だったな……まあいい、改めて名乗ろう、覚えておくがいい!!俺の名前はウルトラマンダークルシフェル！貴様達光の戦士共を倒す者だ!!」

ダークルシフェルは光弾を放ち、消えてしまった。

「ダークルシフェル……闇の戦士……いずれにしても我々の脅威になる可能性が……あ……る……」

ダークルシフェルの撤退直後に、ゾフィーが倒れてしまったので、セブンは急いで光の国へと運ぶ指示をした。ティガたちも同じようにクリニツクへ向かう必要があつた為、全員で光の国へと向かう。

ゾフィー side

「……ここは？ウルトラクリニックか？」

目を覚ました私は、辺りを見回した。すると、扉が開いてマリーさんが入ってきた。

「目を覚ましたみたいですね、ゾフィー。」

「マリーさん、自分は……」

「ダークルシフェルが退いた後に倒れたのですよ。また無茶をしたみたいね？話はあの娘達から全て聞いてます」

「すみません。しかし後悔はしておりません」

「ダークルシフェル……ウルトラウーマンネクサス、いえ、ウルトラウーマンノアの対となる闇の存在」

「はい、奴は我々光の戦士たちを倒すといっていました。」

ダークルシフェル：前世の記憶でも聞いたことがないウルトラマシナ。うーん私もだいたい前世の記憶が失われている気がするな……。まあゾフィーとして転生してかなりの年数が経っているからね、しようがないか……。だがいずれにしても奴の強力な闇のエネルギーを封じるにはいったいどうしたらいいのか……。ファイナルクロスシールドでもおそらく封じることができない可能性がある。困ったものだな……。

ウルトラマンダークルシフェルについて

宇宙警備隊長室——ここにウルトラ兄妹が集結した。ヒカリから渡されたウルトラブレスレットを左手に装備したゾフィーがまず口を開く。

「皆に集まってもらったのはほかでもない。エタルガーを復活させたあのウルトラマンダークルシフェルについて話しあおうと思う」

「ダークルシフェル……強大な闇の力を持った相手ね」

「復活させたエタルガーは、ニュージェネレーションを始めメビウスたちを捕まえるまでに強化されていた。ゼロでさえも押されていたからな……それをゾフィー、お前が倒さなければどうなっていたか」

「いずれにせよ、奴は厄介な相手ということだけは間違いない。各自警戒を取りながらパトロールを続けてくれ」

「了解!!」

姉妹達は立ちあがり、パトロールへと向かう為に部屋を後にする。そんな中、ただ一人残ったヒカリがゾフィーへ声をかける。

「ヒカリ、どうした？」

「……ごまかすな。お前から感じる闇の力はということだ?」
「……あつちで話をしよう」

ゾフィーは、隊長室の隣にある私室の方へとヒカリを招く。そして、彼女と共に中に入り、施錠した。それからゾフィーは、彼女が椅子に腰掛けたタイミングでお茶を用意する。

「さて、どこから話をしたらいいかな？」

「なぜお前から闇のエネルギーを感じるんだ。しかもこのエネルギー……あのベリアルそのものだ。まさか……!」

「察しの通りだ。私の精神世界にベリアルさんがいる。みんなには隠していたが……消滅しないで私の中にとどまっているんだ」
「なぜだ、ゾフィー!? そいつがこの国で何をしたのかわかっているのだろうか!？」

「わかってるさ。だがそれでも私は彼女を滅ぼすことはできない

い……私にとって彼女は、武術や生き方を教えてくれたもう一人のベリアル……ベルさんでもあるからだ。そのお陰で、エタルガーとも互角以上に戦うことができたしね」

「……なるほどな。普段は闇の力を抑えて私達にも感じさせないようになっているわけか」

「そういうことだ。悪いがヒカリ……」

「わかっている。このことは誰にも言わないさ」

「すまない」

ヒカリが部屋を後にすると、ベリアルの幻影が現れる。

『バレてしまったな』

「いつかは気づかれると覚悟してました。それに、ヒカリなら安心してすよ」

『それならいいが……気を付けろよ?』

「わかっていますよ、ベリアルさん。」

ベリアルの幻影が中に消えたのを確認をしてゾフィーは立ちあがり、隊長室を後にする。彼はブラザーズマントをもらったときのことを思いだした。あれは暗黒宇宙大皇帝エンペラ星人との最後の戦い「第二次ウルトラ大戦争」の後のことだ。自分からタロウまでの6人が、大隊長室に呼ばれ、中に入るとウルトラの父が待っていた。

「やあお疲れ様だね、皆」

「ウルトラの父、私達をお呼びしたのは?」

「お前達六人にマントを渡そうと思ってね。マリー……」

「はいこれが『ブラザーズマント』というものです。」

全員がそれを手にして、羽織った姿を見せる。ゾフィー自身、このマントを賜るとは思ってもいなかったので感謝しつつお礼を言った。

あの時のことをふと思い出していたゾフィーは、前からやってくるウーマンを見て、ため息をつきながら掴んだ。

「こらー!」

「うわー……ゾフィー隊長! 離してえええええええええええええええええ!」

「はあ……はあ……ぞ、ゾフィー兄さん……ぜえ……ぜえ……」

「お、お疲れ様、タロウ」

「全くいたずらにもほどがあるわよ!!」

「ご、ごめんなさいいー!」

彼女は宇宙警備隊の隊員候補だがいたずら好きでタロウも困っているのは聞いていた。その娘の様子を間近で見たので、ふふと笑いながら見送ると、ウルトラコロシウムへ向かう。そこで、ゼロがゼットと模擬戦をしているのを見かけた。

「甘いぜゼット!」

「まだまだ行くっス!!」

ゾファイはブラザーズマントを外してゼロとゼットのところへと行く。

「ぞ、ゾファイ隊長!」

「ゾファイ隊長!」

「やあ二人とも頑張っているね。ゼロ……前の約束を覚えているかい?」

「もしかして!」

「ああ手合わせ願おうじゃないか。ゼット……君達は危ないから離れていてくれ。メビウス教官!」

「は、はい!みんな退避するんだ!!」

メビウスの指示を受けてコロシアムの戦士たちが下に降りた後、ゾファイとゼロは構える。

「いくぜ!!」

ゼロはダッシュをしてゾファイに殴りかかる。彼女が放つ拳をゾファイは腕でガードをする。

「であーは!!」

「ふーシエア!」

ゼロが放つ連続攻撃をゾファイは受け止めると投げ飛ばす。彼女は反転をしてウルトラゼロキックを放った。

ゾファイは両手を前でクロスさせてウルトラゼロキックをガードをする。

「流石ゾファイ隊長だ」

「お前もなゼロ、ならば……」

ゾフィーのウルトラブレスレットが光りだしてウルトラランスを出したのを見て、ゼロもウルティメイトブレスからウルトラゼロランスを出して身構え、お互いに突撃する。

連続した槍の突きをゾフィーは繰り返すが、ゼロは弾いて、ウルトラ念力を使いゾフィーを吹き飛ばす。ゾフィーはウルトラランスの姿を変えてブレスレットブーメランを構えて投げつける。

ゼロは頭部のゼロスラッガーを放つがブレスレットブーメランにはじかれる。

「な!!」

ゾフィーはそのまま走り、弾いたゼロスラッガーを掴んでゼロに蹴りを入れてスラッガーをつきつける。

「……………」

「さあどうする?」

「降参だ…」

「そうか」

ゼロスラッガーをゼロに渡してから、ゾフィーは彼女を立ちあがらせると見ていた全員が声をあげた。ゾフィーとゼロの激突を見ていた戦士候補生達は早く訓練しようとはばかりに模擬戦を開始した。

「流石ゾフィー兄さんですね!」

「メビウス、私は何もしていないよ?」

「いいえ、候補生達には良い刺激だったですよ?ほらこんなに張り切っているのですからね。ふふふふ」

「師匠!!私達もやりましょう!!」

「いいぜ!あたしも負けっぱなしじゃいらねえからな!!」

「鬱憤晴らすですか!?!ひどいっす!!」

ゼロに引きずられるゼットはゾフィー達の方を見て「助けて」と目で訴えるが、ゾフィーとメビウスが両手を合わせて合掌したのを見て諦める。ゾフィーは、そこからウルトラコロシアムを後にして食堂の方へと向かうと、丁度エースが料理を作っていたので声をかける。

「エース、頑張っているね」

「これはゾフィー兄さん、まあ北斗の影響もありますけど……………」

当私変わりましたよ。」

「そうだな。昔なら『料理なんて鍛錬の邪魔になる』って言っていた子が……今じゃ料理長だからね。」

「まさかここまで地球の料理が浸透するとは思っていませんでしたが……姉さんたちが地球の料理を思いだして食べたいと言ったときはどうしようと思いましたが……今じゃ普通に皆食べていますからね」

「そうだね」

ゾフィー自身も前世で食べていたものを光の国で食べられるとは思ってもしなかったので嬉しかった。勿論、現在もこの食堂には通っており食べている。

昼食後、彼は隊長室に戻りトレギアが持ってきた書類を確認していた。

「……ふーむ惑星アルトリアとベルグルス付近で謎の現象、か……」

「はい、隊員達の報告からして、デビルスプリンターが原因じゃないかと思われます」

「わかった。調査のためにウルトラ戦士を派遣させよう。誰がいいだろうか……」

「そういうのはエースさんやフレアさんが適役ではないでしょうか？ それからゴライアンさんも最近気合が入っておりますから……」

「そうだね。三人にこの調査を任せるとしよう」

ゾフィーはエース、フレア、ゴライアンに惑星アルトリアとベルグルス付近の調査を任せて他の書類を確認し始めた。

因縁の相手

エース、フレア、ゴライアンの三人はゾファイアの指示で惑星アルトリア及びベルグルス付近の調査を開始していた。

「この辺にデビルスプリンターってやつが？」

「何もなさげに見えますけど……」

「いや感じるよ？ 強力な怨念と共にデビルスプリンターの気配がな」

フレアの言葉を聞いて、エースはまさかと思い、フレアとゴライアンの見ている方角へ向くと怨念が一つに合体をしていた。

「やっぱりお前か……ヤプール!!」

「おいおい、また〃復活したのか!?」

「なるほど、私達に対する怨念がデビルスプリンターを呼びだして奴を実体化させた感じだね」

「そのとおりだ！ ヤプール死すとも超獣死なず！ 超獣死すともヤプール死なず!! いでよ超獣ども!!」

ヤプールの合図で、ミサイル超獣ベロクロン、一角超獣バキシム、巨大蛾超獣ドラゴリー、月超獣ルナチクス、殺し屋超獣バラバが空間を割って現れた。エースが応戦しようとしたその前にフレアとゴライアンが前に立ち構える。

「エース、超獣どもは私達に任せな！」

「お前はあいつを倒せ」

「二人とも……!」

「やれ!!」

ヤプールの指示でベロクロン達が攻めてきた。フレアとゴライアンは超獣軍団の相手をするために特攻する。

「ヤプール!!」

エースはパンチレーザーを放ちヤプールに先制攻撃をするが、両手でガードされる。そして、ヤプールは鎌状の右手から三日月型のデイモンシヨンビームを放つ。

「は!!」

躲した後、エースキックを放ち、ヤプールにダメージを与え、追撃するためにバーチカルギロチンを放つ。

「甘いわ!」

放たれたバーチカルギロチンをヤプールは右手で粉碎してしまった。

「貴様達にやられた怨念の力をなめるな!! デビルプリンターの力を取り込んだ我が力!! 今こそ貴様らウルトラ戦士たちに復讐する時! まずは貴様だ、ウルトラウーマンエース!!」

「.....」

ヤプールは右手からストレートショットを放つもエースは躲していく。一方で超獣と交戦していたゴライアンとフレアは……

「オラオラオラアツ!!」

ドラゴリーとルナチクスは、ゴライアンが放ったダブルリアットを受けて吹き飛ばされる。

ベロクロンとバキシムは攻撃をしようとしたが、突然体に痛みが走った。何かと見やると脚撃と拳が自分たちに放たれていた。

「へっへ! お前達も知らない私の次元の戦いさ! ゴライアン!」

「おう!! お前らもぶっ飛べ!!」

ゴライアンが再びリアットをかますと、ベロクロンとバキシムも吹き飛んでいく。そこで、バラバは右手の鞭を放ったが、ゴライアンはそれを受け止めてぶん投げる。リアットで吹き飛ばされた超獣たちは、再びゴライアン達に迫ろうとしたがバラバが命中をして五体は激突をする。

「ええい何やっている!!」

「ポワアツ!!」

「ぐあ!! なぜだ…… デビルスプリンターの力を吸収をしてパワーアップを果たした私がなぜ貴様に勝てない!?!」

「ヤプール、お前がどれだけ復活しても私達は必ずお前の野望を潰す!!」

「エース!」

「私たちのエネルギーを受け取りなアツ!!」

二人のカラータイマーから放たれたエネルギーがエースのウルトラホールに集まる。

エースはそれを両手に集めて光球を作る。

「スペースQ!!」

エース最大の技スペースQが放たれた。

「ぐああああああああああ!!ヤプール死すとも……必ずやまた復活をぐおおおおおおおおおおおおおおおおおとおお!!」

スペースQを受けてヤプールと超獣たちは爆散した。エースはウルトラサインでヤプールの撃退をしたことを報告した。光の国でゾフィーはウルトラサインの内容を確認し、返信用のウルトラサインを送って、椅子に座る。

「デビルスプリンターの力を吸収をしたヤプールが原因だったか……奴らの怨念は本当に恐ろしい」

「その通りね。かつてUキラーザウルスごとウルトラファイナルクロスシールドで封印したけど……宇宙人連合が復活させた時はさらに大きな形態に進化していたし」

「ゾフィー、デビルスプリンターの影響でヤプールが復活をしたってことは……」

「おそらくダークルシフェルが関与している可能性もあるな」

ゾフィーが立ちあがると、その隣のウーマンとセブンも立って光の国を眺めた。ユリアン王女がさらわれてしまった現在、ウルトラの父を始め何とかしている状態だ。ゾフィー達もアブソリュート・タルタロスの居場所がわかればすぐに向かいたいところではあるが……戦闘力はゼロさえも圧倒する相手だ。

自分が戦い勝てる保証がない。

（いずれにしてもユリアンが無事なのはわかっているが……奴らの目的が光の国の壊滅以外に何かがあるのか？ダークルシフェルもあれ以降姿を見せていない。やれやれ……ゾフィーとして転生をしたが……大変なことばかりだな）

「……」

ゾフィーを殺せ!? レオの奮闘!!

宇宙警備隊隊長ゾフィーはレオと共に宇宙のパトロールをしていた。彼らは辺りを確認をした後、一度止まり次のパトロールをする場所を決めていた。

「今のところ、この地域に異常は見えないな、レオ、少しだけパトロール範囲を広げようか?」

「はい!」

二人が移動をしようとしたその時、攻撃が放たれたので回避をする。と宇宙人軍団が現れた。

「貴様は光波宇宙人リフレクト星人!!」

「ゾフィーにレオ、まあいいでしょう……さあお前達! ゾフィーを殺しなさい!!」

「狙いは隊長か!!」

レオは前に立ち、現れた怪獣たちと戦う為に構える。ゾフィーの方も同じように構えて突撃をしていく。

「であーイヤア!!」

レオが放つ拳が怪獣たちに当たる。そして、瞬時に後ろを振り返りエネルギー光球を放ちザラブ星人を撃破した。

一方でゾフィーは、マグマ星人とババルウ星人の得物をウルトラランスで弾く。それから、後ろへ退がりZ光線の構えからゾフィースラッシュを放ち、二体を斬り裂いて爆破する。

二人のウルトラ戦士は次々に怪獣や宇宙人を撃破した後、リフレクト星人に構える。

「さあ後はお前だけだ!!」

「くっ! こうなったら……いでよ、ゴルバー!!」

リフレクト星人が呼び出すとゴルバーと呼ばれた怪獣が現れて二人は驚愕した。

「ゴルザとメルバの合体怪獣!」

『ぎゃおおおおおおおおおおお!!』

ゴルバーは頭部と口から火炎弾や光線を放ち二人のウルトラ戦士

一方でレオはハンドスライサーでチェーンを切った後に勢いよくレオキックを放ちリフレクト星人に突貫した。

「ぐああああああああああああああああ!!」

一方で謎のウルトラウーマンは剣で超古代の闇獣を斬った後、両手を前で合わせてから横に広げてL字に構えたのを見てゾフィーは驚く。

「ゼペリオン光線!」

放たれたゼペリオン光線は、ゴルバーに命中し、爆散した。レオとゾフィーは新たに現れた戦士を見ていると彼女が振り返り話しかけてきた。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ君は?」

「私の名前はトリガーといいます。すみません、私は行かないといけないので。シユワ!!」

彼女は再び光となりその場を去っていく。

「今、新たな歴史が始まったのだな……」

「ゾフィー兄さん?」

「新たなウルトラウーマン、ウルトラウーマントリガー……彼女女の戦いは今始まったんだ。さあ行こうレオ……パトロールの途中だ」

「は、はい!!」

ゾフィーとレオはその場を去り、新たな戦士ウルトラウーマントリガーのことを思いながら飛び立った。

ゾファイー再び

レオと共に光の国へと戻ったゾファイーは、ウルトラクリニックで治療を受けた後、隊長室へと戻る。すると、そこにヒカリがいたので何かあったのかと彼女に声をかける。

「どうした、ヒカリ?」

「レオからお前が宇宙人たちに襲われたと聞いてな。大丈夫だったか?」

「ああ突然現れた謎の怪獣に翻弄されてしまったが、新たなウルトラウーマンに助けてもらったよ」

「あらたなウルトラウーマン?」

ゾファイーは、新たな戦士ウルトラウーマントリガーのことを考えながら、ヒカリが用意してくれたお茶を飲んだ。ヒカリは見られないようにニヤリと笑う。するとゾファイーは苦しみだした。

「ひ、ヒカリ……何を入れたんだ?」

「前回のお前の子ども化が人気だったので再び入れさせてもらったよ。」

「ま、まさか……」

「そう、子ども化薬をな」

「なん……ごふ!!」

それから数十分後

「……またか」

ゾファイーは目を覚ますと、子どもの姿に戻っていた。そして元凶であるヒカリを睨む。

「ヒカリ……!」

「いいじゃないか。お前の子ども化を望む声が多かったからな。ではウルトラ戦士かもーん!!」

ヒカリが指を鳴らすと扉が開いてウルトラウーマン達が現れた。

「ゾファイーお兄ちゃんが再び子どもに」

「こ、これが隊長!?!」

グレートはゾファイーを軽々と持ちあげてみている。

「ち、ちなみに私が子どもの姿の期間は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・数週間だ」

「え？」

「だから数週間の設定をしたんだ。以前よりもながーくな」

「ヒカリいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「つてことは我々もゾフィー隊長のお世話を!？」

パワードの言葉を聞いてネオスや21達も目を光らせていた。さらにゴライアンやフレアらもその話を聞いて目を光らせていた。

「・・・・・・・・最悪だ。はあ・・・・・・・・」

ゾフィーは以前よりも長い期間子どもとして過ごさないといけないのでウルトラの父とウルトラウーマンベルがいる場所へと向かう。父とベルが苦笑いをしながらゾフィーの姿を見ていた。

「あの頃を思い出すじゃないか、ゾフィー（笑）」

「笑い事じゃありません、大隊長。」

「まあまあ……いいじゃないか、お前は最近たった1日しか休んでいなかったしな」

「い、痛いところを・・・・・・・・!」

「さて今度は誰からになるのか楽しみだよ。」

さて今回の順番は長いので三日ずつとなり全員が闘志を燃やしていた。タロウは自信満々にやろうとしたがエースが前に立つ。

「あんたがやるとまた最後になりそうだから私がやるわ!!」

置いてけ堀なゾフィー本人は、今回誰が参加をするのか見ていた。

(ウーマン、セブン、ジャック、エース&タロウ、レオ姉妹、エイティ、メビウス、犯人のヒカリ、ベルさんとジード親子、ゴライアン、フレア、サージ、カラレス、ドリュウ、アキレス、グレート、パワード、ネオス、21、マックス……スコット達は現在は別の惑星の調査に向かっているからいないけど多すぎるよ。まあニュージエネレーション達がいなくてもいいか)

ゾフィーはため息をつきながら順番が次々に決まっていくなのを見ていったいどうなるのかと思いついて近づいてきたウーマンがいた。

「ふっふっふっふっふ、今日は私が一番です!!」

- 1 メビウス
- 2 フレア
- 3 アキレス
- 4 グレート
- 5 ウーマン
- 6 ジャック
- 7 サージ
- 8 ドリユール
- 9 セブン
- 10 パワード
- 11 ヒカリ
- 12 ベル&ジード
- 13 エース&タロウ
- 14 ゴライアン
- 15 エイティ
- 16 ネオス
- 17 21
- 18 カラレス
- 19 マックス

そして最後はレオ姉妹になった。

「そ、そんな……私達が最後ですか……」

レオは自分達が最後になったので落ち込んでいたので、ゾフィーは小さい体のままレオの頭を撫でた。さて、薬が切れるまでは他のウーマンの家にお世話になることになった。いわばゾフィーお世話期間第二弾である。

ゾフィー子ども化再び（メビウス編）

「はい！というわけでやってきました！私の家です！」

「久しぶりだなあ、ここも」

宇宙警備隊長ゾフィー……現在はウルトラウーマンヒカリによって再び子どもの姿にされてしまい、彼女達の家にお邪魔をする事になった。しかも今度は薬の効き目が長い為、3日ずつ預けられる形だ。彼自身「三日もかー」と思いながらメビウスが用意をした椅子に座り、ウルトラパットを出して調べ物を始めた。

「あー、仕事ですか!？」

「仕事じゃないよ……実は報告書が今来てね。ジャンヌのことだよ。」

「ジャンヌって確かアムールの教え子の？」

「そう、君と同じくあの改造バキシムを倒した子だよ」

「あの超獣ですか!?!私も苦戦して、アドバイスをもらってやっと勝った超獣……」

「そうだ。最初はやられてやられて傷だらけになっていたよ。途中で逃げだしそうにもなった。だけど彼女はあの地球で出会った少女のことが好きになったからね。必死にバキシムに突進をして最後は光線で倒したよ」

ゾフィーは見ていた、何度もボロボロになりながらも改造バキシムに挑む彼女の姿を……。メビウス以上に半人前な訓練生見習いが戦って戦って戦い続けて見事に倒したのだ。

彼女に改造バキシムを倒すことを課したのはゾフィーだ。アムール達は猛反対すると思い、黙っていた。

「……ゾフィー兄さん、それはアムールも怒りますよ。私だってそうです！あの子は！」

「わかっているさ。訓練生見習いに無茶な課題だったってことぐらい……だがそれでも正解だったと私は思う。あの時に亡くなった彼女のお兄さんのことを考えるとね……」

「兄さん……」

空気が暗くなってしまうことを反省したゾフィーは、ウルトラパットを収納し、ゆつくりと寝転がった。

ぐでーとした姿を見てメビウスはふふと笑いだす。

「いつもはシャキンとしているゾフィー兄さんがだらけていますね(笑)」

「仕方ないさ。この頃マイナスエネルギーやデビルスプリンターの影響が大きいからなかなか休むことができなかったからね。それにアブソリュート・タルタロスが動かないのも不穏だったしな」

「確かにそうですね」

ゾフィーはメビウスの家から空の方を見上げてみているが今は子どもの姿になってしまっているのでもうどうすることもできない。そこで、メビウスに連れられて彼が行く場所……それは！お・ふろ・場だ!!

「やっぱり入るのかい!?!」

「当たり前じゃないですか!もうお互いに裸を見た仲じゃないですか!」

そういつてメビウスに浴室へ連行されると、裸(人間態)とされ、一緒に風呂に入る。ゾフィーは、はあとため息をついた。

「ため息をつく必要ありますか?」

「はあ………ってなるよ。いくら何でも裸を見たとはいえね」

人間態となったゾフィーは、両手などを動かして弱体化を嘆きつつ、「三日も何をすればいいのだろうか」と思い彼女の方を見た。

「うーうーん」

ぷるんとDカップの胸が揺れる。メビウスは、自分をチラチラ見ているゾフィーのムスコが大きくなっているのを見てふふと笑った。

「えっと、メビウス?なんで迫ってくるのかな?」

「いや子どもの姿でも大きいなと思っまして………さーて上がったらやりましょ?」

「嘘………!」

お風呂を上がりゾフィーはメビウスの布団の上で………

次の日、ゾフィーはメビウスと共に光の国を歩いていた。昨日の一

件もあり、じーつと睨む。

「す、すみません……」

「全く……まさか子どもになってまで君に襲われるとは思わなかったよ。」

ブツブツぼやきながら歩くゾフィーを見て、メビウスも苦笑いを禁じ得なかった。

そして二人はウルトラマンカフェに入った。どうやらメビウスの奢りのようだ。

「……」

ゾフィーは調べ物をしながら、コーヒーを飲んでいたが、前よりは苦くなかった。味覚まで子どもに戻っていないことにホツとしたが……昨日のように成す術もなく襲われてしまう不安を感じながら、次の相手のことを考えていた。

「まだ先の話ですよ？」

「わかっているさ……って、心を読んだね」

一日目以降は、このように出かけたり、カレーライスを食べたり、思いついた話をしたりしながら普通に過ごした。そして、三日後、フレアがメビウスの家にやって来た。

「よう、ゾフィーを迎えに来たぜ」

「あ、はい。」

メビウスはゾフィーをフレアに託す。彼女自身もふふと笑いながら連れて帰ったのであった。

ゾフィー子ども化再び（フレア編）

「……………」

「なんだよゾフィー、あたしなんて見たって面白くないだろう？」

「いや、こうして小さい姿でフレアを見上げるのは初めてかもしれないと思っただけ」

「当たり前だろう？お前はあたしたちよりもデカイからな……ほらあたしの家だ」

フレアの家に着いた後、彼女はふうーと一息吐きながら椅子に座る。ゾフィーも体を動かしながら座っていたので彼女に笑みが溢れた。

「ふふふ」

「なんだい？」

「いやお前が以前小さくなった時、あたしたちは任務を受けていたからウーマン達がズルイと思ったんだぞ？」

「あれはヒカりに騙されて……………待てよ、今回もヒカりに騙されて……………!!」

ゾフィーは今すぐにもヒカ리를殴り飛ばしたい気持ちになったが、フレアに止められた。彼は怒りを鎮めて、フレアと昔の話をする。「それにしても……………お前が隊長になったときは驚いたさ。その時はまだ魂の状態で見えていたからよ」

「そうだったね。私もまさかケンさんの後を継ぐことになるとは思ってもしなかったよ。様々な戦いを経て……………君達が復活をして宇宙の平和のために戦ってくれている」

「ああ、ベリアル姉御が攻めてきたときは勝てる気がしなかったぜ」「あの人は強いからね」

2人は様々な話を続ける。そんな中、ゾフィーはウルトラパットを見始めた。気になったフレアは覗くと、そこにはウルトラ兄妹たちと写っている写真があった。見るからに、地球での景色であろう。

「ああ、これはタロウが地球を守っていた時の写真だよ。バーベキューの時だったかな、懐かしい……………」

「お前は仕事しすぎ」

「そうかな？」

「そうだ。全く少しはあたしたちにも頼れよ。それで疲労とかで倒れたの誰だ！」

「はい、私ですね……」

ゾフィーは資料をとられてしまったので、残念そうに座り、退屈そうにしていた。体が小さいのでやはり力などが下がっているのだため息をついた。

「はあ……これがあと数週間もか……長いなー」

ゾフィーは呟く。長い休暇だと思えばいいが……いつ宇宙で何が起こるのかわからないため油断ができない。こんな時、自分はどうしてほかの姉妹達の世話になるしかできないのでため息が出る。

それからフレアの家で過ごし、夜はフレアと《びー》をした。ゾフィーは「なぜ子ども姿なのに皆襲ってくるの？」と思いつながらあつという間に3日が経つ。

次のアキレスがやってきた。

「ゾフィー隊長、お迎えに上がりましたよ？」

「ほらゾフィー来たぞ？」

「あ、はい」

守備隊長アキレスへと変わり、彼女と共にいっしょに家の方へと戻るのであった。

ゾフィー子ども化再び（アキレス編）

宇宙警備隊守備隊長アキレスと共にフレアの家から彼女の家へと向かう我らのゾフィー……彼女の家へと到着した後、彼は家の中へと入る。

「わお……」

「あ、あまり見ないでください、恥ずかしいですから……」

彼女の家の壁には守備隊で使用していた光波シールドが飾ってあった。「こんなに光波シールドがあるのだな」と思いながら、ゾフィーは眺める。

「す、すみません……つい光波シールドを見ているのが落ち着きまして……」

「……アキレス、すまなかった」

「え？」

「私達がババルウ星人よりも早く光の国に戻っていれば……君は……」

「もういいのです。あなたがババルウ星人を倒したのを見ておりました。こうして再び体を得て守備隊長としてまた光の国のために戦えますしね」

アキレスは笑顔でそう答えてくれた。その後、アキレスが用意をした手料理を食べることにした。味わいながら、「彼女は地球には行っていないはずだけどな？」とふと思ったので、尋ねてみることにした。

「そういえばアキレスは料理をどうやって学んだんだい？ほかのメンバーもそうだったけど」

「実はエースが料理教室を開く時がありまして……そこから色々学びまして……」

「あー、エースのお料理教室か……」

納得したゾフィーは、アキレスの手料理を堪能する。そして、一緒にお風呂に入ることとなった。

「……やっぱり駄目？」

「駄目でーす？」

「ですよねー」

アキレスは笑顔で言うので、ゾフィーは諦めて一緒にお風呂に入ることにした。彼女は人間態へと変わりゾフィーと一緒にいる。

「ふう……」

2人はお風呂で体の疲れを癒していた。

「アキレス、守備隊長として何か言うことはないかい？」

「そうですね、最近光の国に迫る敵が来ませんからね」

「念のためにセキュリティを改良をしたからね。光波シールドの方も改良をされているんだっけ？」

「はい、ウルトラウーマンリブットが使用するリブットブロッカーをベースにビームガン、ビームソード、ビームアンカーなどが放たれるタイプです」

「ヒカリの仕事かい？」

「はい、そして、ソラも……どうしました？」

「……」

最近守備隊長の武装が変わったと思っていたが、その偉業を果たしたのが、子ども化の元凶であることは内心複雑であった。ちなみに、関係ないが、アキレスの胸の大きさはEカップである。

お風呂から上がり、ゾフィーはアキレスが使用していた光波シールドを持ってみたが……。

「重いな……」

「仕方ありませんよ」

アキレスは、ゾフィーから光波シールドを回収して壁にセットし直した。そして、ソファの方へと座ると、ゾフィーは報告書を読んでいた。

アキレスがちらつと見ているので、ゾフィーは声をかける。

「どうしたんだい？」

「いいえ、ゾフィー隊長が読んでいる書類はどう言うものなのかなと思ひまして……」

「ああ、マルチバースの影響か様々な怪獣や宇宙人が現れるようになったからね。アンドロ警備隊やギャラクシールスキューフオー

にも協力を要請してるんだ。それで、その報告を読んでいたのさ」

ゾフィーは書類を置くと、彼女のベットで一緒に寝ることとなり、抵抗せずに床に就いた。次の日、アキレスの守備隊についてきたゾフィーが、彼女の指導を見ていると、声をかけてくる者がいた。

「ゾフィーお兄ちゃん？」

「やあジャック」

「なんで守備隊に？」

「ああ、アキレスが仕事だからね。私一人でいるわけにはいかないってことで守備隊の方にお邪魔してるのさ」

ジャックとゾフィーが話しているのを見てアキレスはむーと機嫌が悪くなる。相手をしている部下たちはこれはまずいと思いながら、見ているとアキレスが笑顔で叫ぶ。

「全員今すぐに走りこみしてきなさい!!」

「!!はいいいいいいいい!!」

「!!」

2人はアキレスが部下に走りこみをするように言ったのを見て首をかしげていた。それから彼女は隊長室にゾフィーを連れていってくれた。そして、ゾフィーは守備隊の仕事を確認しながら通信を始める。

「ああわかった。アストラ・・・レオは？そうか落ち込んでいるのだな・・・ああ・・・とりあえず任務は頑張ってくれと伝えてほしい、では。」

通信を切り、ゾフィーはこっそりと抜け出し、守備隊が使用している訓練室に向かう。そこで、ターゲットマークを出すと両手にエネルギーを込めてからチャージしてそれを一気に放つが、エネルギーは拡散してしまう。

「・・・やはりだめか。明日は本人のところに行くし教えてもらうとうしよう。」

「ゾフィー隊長!?!何やっているのですか!?!」

「何ってちよつと技をね?」

「はあ・・・」

そして、3日目となり、アキレスの家にグレートがやってきた。

「アキレス守備隊長、ゾフィー隊長を迎えに来ました」

「はいゾフィー隊長、グレートが来ましたよ？」

「やあ、グレート」

「では、連れていきますね」

ゾファイー子ども化再び（グレート編）

アキレスのところからグレートの家へと到着した。ゾファイーは、家の写真等を眺めて、「彼女はオーストラリアで活動をしていたな」と思い起こす。そこに、グレートが近づいて来た。

「ゾファイー隊長、お茶が入りましたよ?」

「ああ、ありがとう、グレート」

ゾファイーはソファアに座り、グレートが淹れてくれたお茶を飲んだ後、本来の目的を思い出してグレートに話しかける。

「グレート、頼みがある」

「頼み……ですか?」

「君の技、バーニングプラズマを教えてほしいんだ」

「バーニングプラズマですか?……うーん」

「駄目……かい?」

ゾファイーは子どもの姿でなら使える上目づかいをして、ウルウルと瞳を潤ませながら人間態となりじーっと見つめる。グレートは根負けしたのか顔を押しさえた後に鼻血を出しながらゾファイーの両手をつかんだ。

「わかりました、お教えしましょう!!」

「お、おう（鼻血が出ているのだが大丈夫なのだろうか?）」

不安を覚えたが、グレートからバーニングプラズマを習得するため彼女からの指導を受けることとなった。

グレートはゾファイーの姿勢を見ながらもダメなところはキチンと指摘してもらい、バーニングプラズマを使うのに体に負担がかかることも教える。

「だから最初の時は二発で倒していたのだな?」

「はい、再び鍛え上げることで相手を一撃で倒せるまでになりましたけどね」

「なるほどな。であ!!」

「あー、光エネルギーが集中していないと、このように爆散してしまいます」

「そうか・・・なかなか難しいものだな」

「ですが隊長なら大丈夫ですよ」

バーニングプラズマの指導で日が暮れた後、お風呂ショータイムに入る。

「やっぱり入らないとダメ？」

「駄目でーす」

「ですよねー」

お風呂場で、グレートは人間態となり服を脱いでいく。ちなみに、彼女の胸の大きさはFカップと大きい。

(うーん、やはり海外のウルトラマンだから胸が大きいのだろうか？ウルトラの星には海なんてないけどさ)

ゾフィーは、グレートの大きな胸を見ながら心の中でそう呟き、一緒にお風呂に入り体を洗ってもらう。しかし、グレートが自身の大きな胸を使いゾフィーの体を洗ってくるので、彼自身は困惑の為に顔を赤くしていく。

「どうですか？」

「あ、ああ気持ちがいいよ、グレート……！」

こうしてグレートの大きな胸を堪能をして一緒に布団に入り眠るゾフィーとグレートであった。次の日にグレートの家にパワーードが遊びに来てゾフィーと過ごしているグレートを見て羨ましがる。

「いいなーグレート、隊長と一緒に過ごさせて羨ましいわよ」

「パワーードはセブン先輩の後だもんね。」

「ええウーマン先輩、ジャック先輩、サージ先輩、ドリュウ先輩、セブン先輩の後だからだいたい先だよ」

「まあくじだからしょうがないわよ」

二人の仲がいいのを見て、ゾフィーは「海外ウルトラマン同士は仲がいいのかな」と思いつつ、「そういえばリブットを鍛えた時も二人でしごいていたな」と心の中で呟く我らのゾフィーであった。

パワーードが帰った後、グレートとゾフィーはびーをしたのであった。3日目となりゾフィーはグレートのバーニングプラズマを習得した。まあ使うのは大人に戻ってからという条件付きではあるが。

「やはり隊長は技の飲み込みが早いですね」

「いや、君の指導のおかげだよ、ありがとう、グレート」

「私こそうふふふふふふふふふ」

彼女の笑い方にゾフィーが苦笑いをしていると、ウーマンがグレートの家に着する。

「グレート、ゾフィーを頂戴しに来たわよ？」

「いや言葉」

「はい！では、ゾフィー隊長をお渡ししますね？」

「受け取ったわ」

ゾフィーはまるで荷物のように渡されたので頬を膨らませる。だが彼女はそんなの関係なしに家へと連れて帰るのであった。

ゾフィー子ども化再び（ウーマン編）

「……まあいつも通りにこうなるのよね？」

「急に何を言っているの、あなたは」

グレートの家からウーマンの家へと向かっている途中で、ゾフィーが突然眩き出したので、ウーマンは苦笑しながらツツコミをするしかなかった。

ウーマンの家に到着をした彼は、写真が増えていることに気づき、見てみようとしたが、彼女が前に立ちはだかった。

「ウーマン？」

「あんたね、いきなり人の家の写真を見ようとするんじゃないわよ！（全く小さいゾフィーの写真を片付けるのをすっかり忘れていたわ）」

そう言って、ウーマンは写真を片づけ出した。やる事がなくなつたゾフィーはソファアーに座りボーっとしていた。いつも以上に退屈な日々を送っているため、ウーマンは声をかける。

「どうしたのよ。」

「いや、こんなに休みを取って大丈夫だろうかと思つてね。」

「はあ……」

ウーマンはため息をつき、じーつと睨んできた。

「ほかのみんなが休んでいる中、その休んでいる分の仕事も引きうけて、自分から困になり宇宙犯罪組織を壊滅して解決に導いたのはどこの宇宙警備隊の隊長さんかしら？」

「すみませんでした。」

ウーマンの皮肉を聞いてゾフィーは謝る。彼女は「仕方がないわね」といいながら許すことにした。そして、そのまま一緒にお風呂に入ることとなった。ウーマンは最近胸が大きくなり、Fカップになったと言うので、ゾフィーは顔を赤くしている。

「うふふふ、どこかの隊長さんにもまれたから大きくなったかもね（笑）」

ウーマンは笑いながら、ゾフィーをからかう。事実なので何も言えないまま、彼はお風呂の中で顔を赤くしながらウーマンに最近起こつ

ているのを聞くことにした。

「そういえばウーマン、最近なにか謎の宇宙人とか怪獣とかが現れたりしているのかい?」

「いいえ、デビルスプリンターの影響で怪獣や宇宙人が暴れているぐらいね。新しい怪獣や宇宙人は確認できていないわ。」

「謎のウルトラウーマンとは会えたかい?」

「トリガーって子かしら?いいえ私達はまだ見ていないわね」

「ふむ。いずれにしても謎のウルトラウーマントリガーの出現……我々が知らない怪獣や宇宙人が現れる可能性が高い。隊員たちには警戒するように言ってくれ」

「わかっているわよ」

ゾフィーの言葉を聞いて、ウーマンはそう答え、二人は仲よくお風呂から上がる。一緒の布団の中、ゾフィーを抱きしめたまま寝てしまうので彼はウーマンの豊満な胸に包まれながら眠ることとなる。

次の日、ウーマンと共に宇宙警備隊へと行き、彼女がいる部屋へと入り、座っているとセブンとジャックが入ってきた。

「ゾフィー?」

「ゾフィーお兄ちゃんだ。確か今はウーマン姉さんのところですよね?」

「ああそうだ。ウーマンが仕事だから一緒に宇宙警備隊へと来たんだ……まさかパンダのように見られるとは思わなかったけどね。」

「あー……」

ほかの隊員達がゾフィーの小さい姿を見て目を光らせるのも無理はない。そんな中、ウーマンが帰ってきた。

「あらセブンにジャック、おはよう。」

「おはようございます」

「おはようウーマン、ゾフィーが不貞腐れているが?」

「仕方がないわよ。宇宙警備隊長の小さい姿を見るなんてレアだからね」

「確かに」

ジャックは次は自分なので「楽しみだなー」とウキウキしている。セブンはまだ先だなと思いつながらため息をつく。仕事をしている間、ゾフィーは何をしているかというところ?

隊長室の方へ行くとウルトラウーマンベルが座っていた。

「あらゾフィー、どうしたのかしら?」

「ベルさんが今隊長代理をしてくれているのですね?」

「ええ、しかしまあ・・・お前ひとりで色々やり過ぎだ」

「うぐッ」

ベルにも言われてしまうとぐうの音も出ない。やがてウーマンが仕事を終えていつしよに家の方へと帰宅した。

夜はウーマンと・・・ヤッテ、3日目は普通に家で過ごして夕方ごろジャックがやってきた。

「ウーマンねえさーん、ゾフィーお兄ちゃんをもらいに来ましたよー」

「もらいにつて・・・まあいいわ、はい、ジャック。」

「では受け取りましたーでは行きましようゾフィーお兄ちゃん」

「はいいよ」

ゾフィー子ども化再び（ジャック編）

ウーマンの家からジャックの家へと移動したゾフィーは……「いつまで子どもの姿のままなんだろう」と落ち込んでいた。

そして、ジャックは落ち込んでいるゾフィーを慰めているところである。

「まあまあゾフィーお兄ちゃん、小さいお兄ちゃんも可愛いですよ？」
「…………それは男としてはあまりうれしくないのだが…………」
「あらららら」

逆に落ち込んでしまったのを見てジャックは慌てたがすぐ冷静になり、ウルトラブレスレットを變形させたウルトラハリセンでゾフィーの頭をどつく。

「あうち！なんで!？」
「いやなんとなく叩いたほうがいいかと思ひまして…………つい（笑）」
「いやついじゃないよ。全く……………」

ジャックは平謝りで許してもらった。そして、食事の後、ゾフィーはジャックが左手に装備をしているウルトラブレスレットのことが気になり、眺めていた。

彼女はゾフィーの視線に気づいて首をかしげる。

「どうしたのですか、ゾフィーお兄ちゃん？」

「ジャック、ウルトラブレスレットを貸してくれないか？」

「えっ？あゝ、はいどうぞ」

ジャックはウルトラブレスレットを外してゾフィーに渡すと彼はどこからとりだした工具箱でジャックのウルトラブレスレットをチェックをしている。

「ほええ……………」

それから数分後、ゾフィーはウルトラブレスレットをジャックに返した。

「ゾフィーお兄ちゃん、ウルトラブレスレットに何かしたの？」

「いや何もしていないよ？ただ最近メンテナンスをしていなかったら今のうちにおこうと思っただけね」

「あの工具箱はどこから?」

「企業秘密だ」

「え?」

「企業秘密だ」

「だから「企業秘密だ」アツ、ハイ」

これ以上聞いても無駄と思い彼女は何も聞かないことにした。再びウルトラブレスレットを装着したジャックは、思い詰めたような顔をしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、ジャック?」

「あ、いやゾフィーお兄ちゃんがウルトラブレスレットをくれるまでは何も装備をしていなかったけど・・・・・・・・今じゃブレスレットを外した時に違和感を感じるようになったちやっつて・・・・・・・・」

「まあ長時間装着しているからね。違和感が出るのは私も一緒だよ」

ゾフィーの左手にもウルトラブレスレットが装備されている。ウーマン達がヒキラーザウルスをファイナルクロスシールドで封印をしたことで、エネルギーの大半を失ってしまい、地球に滞在することとなった時、地球から帰還したタロウやレオ、アストラ、エイティに協力してもらっただけでなく、戦力増加のためにウルトラブレスレットを装備し始めたのだ。そして、ウーマン達が戻ってくるまでの間様々な仕事をしてきた。

「だからゾフィーお兄ちゃんの左手にウルトラブレスレットが装備されていったんだね」

「ああ、戦力の補強を考えたらウルトラブレスレットが思いついてね。元々ジャックのウルトラブレスレットは私が作ったからそれと同じように製造したんだ。今はヒカリやトレギアが戻ってきてくれたからウルトラブレスレットの量産やガーディアン達のウエポンシステムなどが生まれただけど・・・・・・・・まさかあんな改造品などを思いつくなんてね・・・・・・・・ヒカリとトレギアはベストマッチな組み合わせだよ。」

そう語るゾフィーを見てジャックは「苦勞してるんだなー」と心の

中で思う。そう語り合ううちに、お風呂タイムになる。

「やつぱりっ。」

「ですよう。」

ジャックに連れられてお風呂場へと向かう。ジャックのEカップの胸が揺れているのを見てゾフィーは「姉妹達の胸は大きいな」と思いつながらあまり見ないようにしていたがジャックはそれに気づいてふふふと笑う。

「もう今更じゃないですか、あんなに激しくしたのに……。」

「おうふ」

お風呂の中で沈んだゾフィーをジャックは慌てて救出した。その夜は激しかったとだけ書いておく。

次の日ジャックに連れられて宇宙警備隊……ではなく宇宙警備隊候補生達が訓練をするウルトラコロセウムへとやってきた。

今日はジャック自らウルトラランスを指導することによって彼は見学をする。そこにメビウスがやってきて彼女と共にジャックの指導を見ることになった。

「流石ジャック姉さんですね」

「ああ武器に関してはウルトラ兄妹の中では随一だからね」

二人が話をして見ているのを見てジャックは教えながらも不機嫌の状態になっていく。生徒たちは違和感を覚えるも授業を続けていたが、だんだんとジャックの機嫌が悪くなっていくのを感じた。生徒全員が原因を考えていると、ゾフィーとメビウスが話をしているのを見て察した。

((子どもになったゾフィー隊長か……))

有名なゾフィー隊長……今は子どもになってしまっ隊長としての仕事ができないのでこうして休みながらも来ているのだがジャックの機嫌が悪くなっていくのを見て全員が祈る。

((この間のタロウ教官のようにはならないことを祈ります!!))

前回アナタシアがウルトラの国に来訪した時、彼女はすごく不機嫌となり模擬戦ではなく八つ当たり気味に生徒たちはやられた。ジャックがふふふと笑いだしたので生徒たちは「まずい!」と思っ

ていると、彼女はウルトラクロスを生成をして投げつける。

ゾフィーはそれに気づいて左手のウルトラブレスレットを變形させて子どもサイズのウルトラランスを持ちジャックが放ったウルトラクロスをはじかせる。

「「おおおおおおおおおおおっ!!!」」

生徒たちが拍手する中、ゾフィー自身はウルトラランスを振りまわしてブレスレットに戻す。

「ゾフィーオニイチャン? ナンデメビウスト仲良く話ヲシテイルノデスカ? コツチハ生徒達ヲ教エテイルノニ。」

目から光が消えた状態で話をするジャックを見て、ゾフィーは自分が原因かと思いついて彼女の頭を撫でる。

「すまなかつたね、ジャック。君が頑張っているのに……」

「うううううっ! ゾフィーお兄ちゃんなでなでしてください!」

「はいはい。あつ、生徒諸君、悪いがここからはメビウス教官に教えてもらうように」

「「はーはーはーはー」」

(ジャックはこの状態になったらしばらくは続くからな………仕方がないさ、今回は自分が原因だからね。)

そういつてジャックと共に彼女の家へと帰り、二日目も一発やって三日目となると夕方ごろザージが迎えてに來た。

「失礼する」

「いらっしやいザージさん。ゾフィーおにいちゃん」

「はいはい」

「ふふっ、ではもらっていくぞっ。」

「はーい!」

ゾフィー子ども化（サージ編）

ゾフィー side

なんか久しぶりに彼女と話をするような気がするな……私は、ザージに連れられて、ジャックの家から彼女の家へと移った。

「やむむ」

いきなり寒かったので驚いてしまう。そういえば彼女は寒さに強いウルトラウーマンだったな。

「すまない。ほかの人たちをあまりいれないようにしていたのよ」

「いや、気にしないでくれ」

ザージは私が寒がるのを見て、温度を少し上げてくれた。まあ先ほどよりは寒くないので楽である。

彼女が用意してくれたアイスコーヒーを飲みながら、デビルスプリンターが起こした事件などを確認する。ザージたちの活動のお陰で私も楽になったものだ。

「本当助かっているよ、君たちには……」

「どうしたんだ、急に？」

「ウーマン達だけでは今のように対処をすることができなかったからね。君達が黄泉の世界から帰ってきてくれて助かっているよ」

「それは私達も一緒だ。またこうしてお前と共に戦えるのだからな。今度は油断をしないように戦うさ」

ザージが立ちあがると、彼女のEカップの胸が揺れているのを私のゾフィーアイが見逃してくれない。おっといけないいけない……彼女達を抱いてから何かと遠慮をすることがなくなってしまうてるから気を付けないとな……

さて時間が経ち、恒例のお風呂タイム……彼女と私は裸となり、お風呂に入ったが……ぬるくないか？

「すまない、私はこの温度が丁度いいんだ。だがお前に風邪をひかせるわけにはいかないな。ふーむ……少しだけ温度を上げるとしよう」

ザージがお風呂の温度を上げると、私にとっていい湯加減になった

ので体を洗った後に一緒にお風呂に入る。やっぱりお風呂は最高だね。

お風呂から上がったから、ザージはお風呂上りのワインを飲もうとしていた。私が見つめていると、彼女はグラスをもう一つ持ってきてくれた。

「やはりワインは美味しい」

「そうだな」

ワインを飲んだ後に同じベットに入った後に……やっぱりやるのですね知っておりました。

次の日、私は宇宙警備隊へザージと共に行こうとした途端、意識がなくなってしまう。

ゾフィースide終了

「ゾフィー!?!」

ザージはゾフィーの姿が見えなくなったのを見て、慌てて辺りを探している。一方でさらわれたゾフィーは目を開けると、光の国とは違う場所にいることを察した。

「なあこいつがゾフィーなのか?」

「ああ間違いないだろう。宇宙警備隊長のゾフィーだ」

「だが、子どもだぞ?」

「うーん、俺の気のせいかな?」

ゾフィーは目の前にいる宇宙人……暗闇宇宙人カーリー星人と奇怪宇宙人ツルク星人のやり取りから、狙いが自分の命だと判断した後、カプセルを構えて投げる。

中からダークロプスゼロが現れたのを見て二人の宇宙人は驚いた。

「な!?!」

「マスターの命令です、お覚悟を!!」

さらにゾフィーはバキシマルとタイラント、バードンとゼットンも投げて召喚する。圧をかけるカプセル怪獣達が宇宙人達を囲むと、彼らはその恐怖に当てられ気絶した。

そのあまりにも気の毒すぎる光景を見たゾフィーが、現実逃避をしていると扉が破壊されてザージが入ってきた。

「ゾファイ！無事だったのか!!」

「やあ、ザージ早かったね、はははっ……」

「笑い事じゃない!!でも、無事で……. 本当に良かったわ。」

彼女は涙を流しながら彼に抱き付いてきたのでザージの頭を撫でるゾファイであった。彼女と共に光の国へと帰るとほかのウーマン達も心配をしていたので彼は声をかけてからザージの家へと戻りカプセル怪獣を出して彼女のカプセル怪獣…フリーザスと遊ばせている。

「すまなかつたゾファイ……. わたしがついていながら。」

「いやまさか光の国に侵入者がいるとはね。現在はヒカリたちが調べているけど……. いずれにしても警戒はしておいた方がいいかな」

「だな」

次の日の夕方ドリユーがやってきた。

「失礼するぞ、ザージ」

「ああ来たのか、ドリユー」

「ゾファイは？」

「ん……」

ザージが指した先には、(⊗ ω ⊗)スヤアと眠るゾファイがいた。ドリユーは、今すぐ襲いたい気持ちにかられるもその気持ちを抑えて、彼を背負い自分の家へと運ぶのであった。

ゾフィー子ども化再び（ドリユー編）

光の国の中を歩くドリユーとゾフィー、彼女の家が見えてきたので、ゾフィーは辺りを見ながら中へと入りソファアに座る。

「はい、ゾフィー、どうぞ」

「ありがとう。そういえば、ドリユーはレオとアストラの故郷しし座L77星にいたんだよね？」

「……ええ。ですが、元を言えば、私が来なかつたら……」
「だがそれでレオ達が生まれたんだ。それに彼女達も君に会った時にすごく涙を流していたじゃないか……」

ゾフィーは、ドリユー達が復活をした際に、レオとアストラを連れてドリユーの部屋に行き再会というサプライズプレゼントをしたことを思い出す。

回想

ウルトラウーマン達がUキラーザウルスを地球で封印をしたことでエネルギー不足になってしまい、地球にいたレオやタロウに頼んで手伝ってもらった際のことだ。ドリユー達もその頃に復活をしたのでゾフィーはレオとアストラを隊長室へ呼び出した。

「あ、あのゾフィー兄さん、私とアストラを呼んでどうしたのですか？」

「いやすまないね。実は君達二人に会ってもらいたいウーマンがいてね。」

「私とお姉ちゃんにですか？」

「ああそうだ。さて行くでしょうか」

ゾフィーが立ちあがり、二人もゾフィーの後をついていく。宇宙警備隊本部の中を移動をするので、二人は「いったいどんなウーマンに会わせてくれるのだろうか」と思っている、とある部屋の前に到着する。ゾフィーがノックをすると、中から声が聞こえてきた。

どこかで聞いたことがある声、そして何よりゾフィーと共に中へと入り目を見開く。

「え……」

「ど、ドリュウ?!」

「レオ様、アストラ様!」

「ドリュウ!!」

二人はドリュウに抱き付いて、再会を喜ぶ。ゾフィーはふふふと笑い「サプライズ大成功!」とプレートを出していた。

回想終わり

ドリュウと共にお風呂に入ることとなった。彼女も人間態となりゾフィーと共にお風呂に入る。彼女のEカップの胸が揺れており、鍛えていることもあり細マッチョだなとゾフィーは感心していた。お風呂に入った後、一緒に布団の中へと入り抱きしめられながら眠る。

次の日、ゾフィーとドリュウは宇宙警備隊へと向かう。ゾフィーは小さい体ながらも宇宙警備隊長としての仕事を始めていた。

だが体が小さいのでパトロールなどは行けないため隊長室で書類を纏めているとドリュウが入ってきた。

「ゾフィー、今回の仕事はこちらに」

「あれ?秘書官(トレギア)は?」

「あなたが小さい間は私達全員で秘書担当をすることになっているんです」

「え?!初めて知ったよ……」

そして、仕事を終えたゾフィーはドリュウと共に彼女の家へと帰る準備を進めているとヒカリがやってきた。

「やあ、ヒカリく~~~~ん……」

「あまり見詰められると照れるな、なんてね。私だけがお前の幼い姿を望んでいるわけじゃないからな?」

「まさか?」

ドリュウの方を見ると彼女は横に向いたので確信をした。第二の幼児化事件……ほかの姉妹達も今回の事件に関与していると判断をしたが今更責めても仕方がないし、元に戻るわけでもないのだ、ため息をつく。

ドリュウの家へと帰ってきたゾフィーは子どもの姿とはいえ鍛錬を続けていた。いつ体が戻ってもいいように鍛えているのだ。

ドリュウもゾフィーの攻撃をガードをしながら、彼が傷つかないよう
うにセーブしている。

「ゾフィー、若い頃に戻った気分になりますね」

「ああ、それは自分でも感じているよ。しかし、光線の威力までも
も……ねえ」

ゾフィーはため息をつきながらも後どれくらいだっけと考えていた。
ドリュウの家で過ごした次の日の夕方、セブンがやってきた。

「やあドリュウ、ゾフィーを受け取りに来たぞ。」

「セブンか、ゾフィー……セブンが来ましたよ」

「やあ、セブン」

「ふふ、じゃあ行くのでしょうか、ゾフィー」

セブンに連れられてゾフィーは行く。

ゾフィー子ども化再び（セブン編）

子どもになったゾフィーを連れて自分の家に連れて行くセブン……ゾフィーは久々に彼女の家へと入る。

「今回ゼロは帰ってきていないからな」

「仕方がないよ、彼女は色んな世界に飛びまわって活躍しているからね」

セブンが入れてくれた紅茶を飲みながら談笑する。そういえば、この頃ゼロは様々なウルトラ戦士とも共闘している話を聞いている。

「そういえばゼロが前にデーモン軍団というやつらと戦ったと聞いたことがあるな」

「デビル星人か……奴らも色々と侵略活動をしていると報告されていたが、確かその時は……」

「ああトリプルファイター……銀河連邦M星人の子孫である早瀬三兄妹を中心にしたSAT(Space Attack Team)が地球から撤退させたんだよ」

「今は、惑星オーラを狙っていると聞いているが……」

「そうだね。彼らが奮闘しているところをゼロが追ってきた宇宙人も参戦してしまつて大変だつたつて聞いたよ」

「そうかが……無事に収拾できるといいな」

「それにしてもトリプルファイターか……私達がタロウやメビウスと合体をする感じと一緒かな？」

「ああスパーウルトラウーマンタロウにメビウスインフィニティーか、それと同じと思えばいいだろう」

二人はトリプルファイターのことを話しをしているとゾフィーはデータを出す。

「グリーンファイター、レッドファイター、オレンジファイター……早瀬三兄妹が変身した姿だ。彼らが合体をすることでトリプルファイターになり戦うことができる。」

「ふむ、最後に敵を倒す為にこの姿にならないといけないのだな？」

「おそらくそうだろう」

お互いにトリプルファイターの話をした後、お風呂の方へと移動をしたのでゾフィーはため息をつく。

「やっぱり入らないとダメ？」

「駄目だ。一緒に入るぞ。そもそもお互いに裸でやりあった仲ではないか」

「それを言われると、ねえ……」

再び一緒にお風呂へと入るゾフィーとセブン……お風呂に入った後、二人は一緒のベットに眠るように目を閉じた。ちなみに人間態である。

次の日、ゾフィーは一応隊長として指示を出しているが、子どもの姿な為、現場の方には出ていない。秘書は、同居しているウーマン戦士が日替わりで担当している。

「……というわけだ、ゾフィー。大丈夫か？」

「ああ。しっかし、子どもの姿で執務するのはやっぱり慣れないね」「だろぅな……」

セブンは、ゾフィーが大変そうにしているのを見て、「普段から隊長として頑張っているのに子どもになっても変わらないな、こいつは」と思い、苦笑いをしながら支えることにした。

「そういえばゼットから報告があつたのは聞いているか？」

「ああゼットライザーが破損したとウルトラウーマントリガーと遭遇したってことだね」

「ああそのとおりだ。」

「……そうか彼女も今は地球を守るために戦っているのだな」ゾフィーは首を縦に振り、仕事を続ける。

次の日、ゾフィーは、セブンに対して提案をする。

「前からセブンとウルトラコンビネーションを考えようと思ってたんだよね」

「いきなりだな(苦笑)。だが一度だけやったよな？私とゼロが小さくなりお前がM87光線を放つ技を」

「そうそう、グア軍団のベムズンに使ったステップショット戦法みたいに！」

「ふむ……まあそれはお前が大きくなってからだな。」

「そうかい？うーん、ゾフィー斯拉ツシユとアイスラツガーの組み合わせたスラツシユアタック？とか考えてたんだけどな。」

「明日は早いんだ、備えておけ」

「明日はパワードが来るんだっけ」

「ああ、パワード、ヒカリ、ベルさんとジードだ。先は長いぞ」

「君も犯人の一味だからね、セブン君？」

「悪かった。だがお前の子どもの姿をもう一度見たくてね」

「あのねえ……まあ、もういいや」

「よしよし、良い子だ」

次の日の夕方、パワードが迎えに来る。

「セブン、ゾフィー隊長を受け取りに来ました」

「私は荷物じゃない！！」

「冗談（ジョーク）ですよ（笑）」

「冗談だ（笑）」

ゾフィー子ども化再び（パワー編）

セブンの家からパワーの家へと直行したゾフィー。彼女の家に入るの初めてである。アメリカにいた影響もあるのか彼女は帰ってきてからソファアーの方へと座っていた。

「隊長もどうぞ?..」

「すまない。」

パワーの隣に座った彼は、前に起こったアブソリユートタルタロス事件のことを思い出した。パワーとグレートの特訓でリブットは自分自身の中にある力を解放させることに成功したのを思い出す。

「どうしました、隊長?..」

「ああ、マガオロチやスラン星人の一件で、君とグレートがリブットの潜在能力を引き出したことを聞いてね。あの三日で出させるとはなと思っていただんだ」

「ええ、それぐらいやらないと彼女の潜在能力を出すことはできないと思ひまして……何せ相手がゴードス細胞にマガオロチですからね。マックスが捕らわれているのもありますからね」

「だがそのおかげでリブットは今もギャラクシーレスキューフォーの一人として活躍しているからね。君とパワーには感謝をしているよ」

「隊長はリブットの潜在能力に気づいていたのですか?..」

「ああ、タロウからもリブットのことは聞いていたんだ。しかし、何かのきっかけがないと潜在能力は発揮することができないと思ひつた。君達二人のあの特訓が彼女の潜在能力を開花させたんだ」

ゾフィーはパワーにお礼を言い、話をアブソリユートタルタロスへと戻す。

「それにしてもアブソリユートタルタロスが確認できないってのが不気味ですね。」

「ああそれは私も同じことを考えていたよ。ユリアン王女を捕らえて以降、奴らが表に出てくることはないが……今の私達ではあ

のアブソリユートタルタロスに勝つことができない。それに並行世界のベリアルさんにトレギアなど奴は並行世界の戦士たちを召還することができるのも厄介だ」

「アブソリユートタルタロス……恐ろしい敵です」

「……今は宇宙正義デラシオン、ギャラクシーレスキューフォーエスなども協力をしてくれているからね」

「でしたね。そういうえば、アンドロ警備隊も協力してくれるんですね？」

「ああアンドロウーマンメロスが協力要請をしてくれてね。いずれにしてもこれは宇宙最大の脅威じゃないかと私は思っている」

「わかっています。我々宇宙警備隊も全力でアブソリユートタルタロスの調査を進めます」

「ああ、頼む」

そしてお風呂に入る時間となった……ゾフィーは一応聞いておく。

「パスワード？」

「拒否権はありませんよ？」

「……やっぱりか。(うんたぶんウルトラウーマンの中で一番にでかいじゃないかあれ?)」

ゾフィーはじーつと見ているのはパスワードのでかい胸である。おそらくHカップはあるんじゃないかと思われる胸、ベリアルさえも超えている。

やがて一緒のお風呂に入った後にベッドにも一緒に眠るがパスワードはゾフィーを抱きしめながら眠ったがそれがまずかった……。彼女の巨大な胸に包まれてゾフィーは窒息してしまう事件が発生してしまう。しかも彼女はそれに気づかず寝てしまっている。ゾフィーはこのままではまずいとパスワードの胸をチョップをしているが、彼女はかゆかったのかさらに強く抱きしめる。

(ま、まずい!!パスワードの強力な胸が私を窒息させようとしている!!
いかん!目眩が……。ゾフィーチョップ!チョップ!チョップ!
!駄目だ……。完全に寝てしまっている。そうだ!!あの技を使うしかない!!必殺!息を長くとめる術!!名付けて「ゾフィーブレス

“だ!!まさか息ができない状況に備えて訓練してきたのがこんなところで役に立つとは……とりあえず眠るとしよう)”

ゾフィーは、息を止めて、眠る。次の日、パワードは目を覚ましてゾフィーが動いていないことに真っ青になりすぐに自分の胸から離させる。

「NO!!」

「ふう……やっとな解放されたよ。」

「ごめんなさい隊長……つい嬉しくて抱きしめちゃったわ」

「あー、気にしなくていいさ。(いい感触を味わえたからね(笑))」

ゾフィーは心の中でそう呟いて子どもの姿のままってのも悪く無いなーと思いつつもやはり戦闘力が落ちてしまうのもやはりよく戻りたいなーとも思った。そういえば、次の相手はあのヒカリである。「彼女の家、汚くないか?」と若干不安を感じていた。

パワードと共に宇宙警備隊隊長室へ行き、今日の仕事に取りかかる子ども隊長——頭脳や記憶はそのままなので、的確な指示を出している。しかし、SOSのウルトラサインが出たのを確認をして自分が飛びだそうとするので、パワードが必死に止めた。

「隊長!!流石にその姿ではまずいですって!!」

「だが誰かがいかなければ!!」

「すでに21が向かいましたので!!」

「そうか」

ゾフィーは「21が向かったのなら問題ないな」と再び椅子に座り仕事を続ける。やはり体が小さいから出撃をすることができないのでパトロールの方もほかのウルトラ姉妹達が担当をしてくれている。その為、こうして隊長室で事務作業をすることができるのである。

まあ、ウーマン戦士全員が「ゾフィーの子どもの姿が見たい」と思ったのがそもそもの原因ではあるが……。

それから次の日の夕方、青いウルトラウーマンが来た。

「……………」

「なんだゾフィー、私の顔を見て」

「いや、とても、不安でしかないのだけど……………」

迎えに来たヒカリの顔を見てゾフィーは不安が一杯であった。

ゾフィー子ども化再び（ヒカリ編）

ゾフィー side

ヒカリの家か……正直に言えば不安を感じるのは彼女の研究室の部屋を見ているカラかもしれない。なにせ彼女は研究に集中すると部屋を片付けるのを忘れてしまうほどである。

私の心配をよそに彼女はちらちらと見ているが、じーっと見つめると顔を背けてしまう。やがて歩いていくと、ヒカリが住んでいる家へと到着した。彼女はカードキーをスラッシュさせて中へと入る。

部屋の中が普通に綺麗だったので驚いていると、彼女は私のことを読んでいたのか椅子に座る。

「お前、汚い部屋だと思っていただろ？最近は何研究室の方で過ごすことが多くてな。この家であまり生活してないんだ。だから久々に家に帰ったことになるかな」

ヒカリはそう言い切った。用意された椅子に私が座ると、彼女は何やら悩んでいた。そういうえば、彼女が料理を作っている姿を見たことがないな。

「ヒカリ、私が作ろうか？」

「いや料理は作れるが……すつかり材料を買うのを失念していた。なにせ久々に家に帰ったものだからな……」

「なんかすまない」

「いや元はと言えば、忘れていた私が悪いからな。お前が気にすることはない。仕方がない、デリバリーを頼むか」

「ってかデリバリーするところなんてあったっけ？そう思ってから数分後、やって来たのはエースだった。」

「まいどーエースデリバリーです!!」

「エース!?!何をやっているんだ君は!!」

「あ、ゾフィー兄さん。実はほかの姉妹達からの要望で、暇なときはデリバリーサービスをしているんですよ（笑）」

まあエースは北斗 恵子の影響が出ているから料理を作るのが得意になっているんだよね。まあ彼女の料理は美味いからいいだけ

ど。

さてエースのデリバリーサービスでお腹がいっぱいになり、私はウーマンの報告を聞いていた。

「では、惑星アルテリアで発生した怪獣騒動はレイオニクスの仕業だったのか」

『ええ今はギャラクシーレスキューフォースに入隊をすることになったと聞いているわよ。』

「レイブラッド星人の因子、レイオニクス、か……レイのような若者もいればレイオニクスの力を悪用をする者も現れるのは必然か。ウーマン、また連絡を頼む」

『了解したわ』

通信を切るとヒカリが頬を膨らませていたので私は苦笑いをしてしまう。君もそのような顔をするのだな——と

「さてゾフィー、共にお風呂へと行こうじゃないか」

「断るのは？ 『却下だ』 ですよねー」

私は観念して彼女と共にお風呂の方へと向かう。彼女のFカップの胸が揺れているのを見て私は顔を赤くしてしまう。抱いたとはいえやはり慣れないものだな。

「どうした？ ……ふっ、なんだなんだ、顔を真っ赤にして？ あれだけ激しくしておいてか？」

「……綺麗だなど思っただけさ」

私はさっさと風呂場の方へと向かい、体を洗っていると、ヒカリが洗いだした。彼女の大きな胸が!? つか当てるよね!?

そんなこんなあつて、お風呂から上がり、彼女と共にベットに入りこむと、彼女は抱きしめてきた。

「……お前はいつもそうだなゾフィー。」

「？」

「誰よりも傷ついているな。お前は隊長でありながら姉妹達がピンチの時はすぐに駆けつける。あの時のエンペラ星人との最終決戦の時もそうだった。地球へと駆けつけたお前はサコミズの体を借りてともに戦った。だが、その前にエンペラ星人の怪獣と戦ってきたのだろ

う?」

「あははは、ばれていたか、そうだね……姉妹たちに黒点を破壊してもらっている時にエンペラ星人が地球に現れたのを知ってね。奴に対抗するにはサコミズの体を借りて共に戦うしかなかったんだ」

そうあの日、エンペラ星人が自ら地球へ侵略を知った私はウーマン達に黒点を破壊するように指示をして急いで地球へと向かった。

だがエンペラ星人はレゾリウム光線と呼ばれるウルトラ戦士を消し去る力を持っている。そのため私はサコミズと一時的に一体化をすることで地上に降臨してM87光線を放ちながらメビウスの隣に立ち共に倒したのだったな。

それからヒカリと共に先に光の国へと帰ったのを覚えているよ。

「……だがお前が来なかったらおそらく私達はエンペラ星人に負けていた。感謝をするよ、ゾフィー」

「ふふふふふ」

「なんだ?」

「いや君からお礼を言われる日が来るとはね(笑)」

「私だってお礼を言うときはあるさ」

「まあ私は今回の子ども化に関してはまだ怒っているけどね?」

「言っておくけどこれは私だけの仕業ではないからな?」

「はあ……」

私はため息をついて眠ることにした。

ゾフィーside終了

次の日 ヒカリは科学技術局の研究室に行くこととなったので、ゾフィーもついていった。彼女の研究室へ到着した後、彼女は調べているものを確認をしていた。

「これが例の怪獣の細胞だな。」

「ああ、ネオスが倒した怪獣の一部を持って帰ってきてもらったが……おそらく例のデビルスプリンターだ。」

「またデビルスプリンターか」

「ああコスモスがフルムーンレクトをつかっても効果がないと言っていた」

「それだけデビルスプリンターの力が強大ってことか」

ゾフィーはヒカリの言葉を聞いて「一刻も早くデビルスプリンターを解析しなければならぬ」と実感した。調査を進めているが、未だに全てが解析されているわけではない。今もニュージエネレーションやほかのウルトラ戦士たちもデビルスプリンターの調査を進めているが……やはり悪影響が出ているのは変わらないようだ。

「デビルスプリンターの影響だけじゃない。アブソリユートタルタロスのこともある。」

「……そうだな……奴は、今も並行世界の闇勢力を連れてきては自分の兵力としているだろう」

「ああ、厄介な相手だ」

二人はアブソリユートタルタロスの危険性の話をしながらこの間のエタルガーを蘇らせた闇のウルトラマンも忘れてはいけない。

「ダークルシフェル……あいつも厄介な相手だった」

「ああ強化再生をさせる能力を奴は持っていた。さらに光の戦士を上回る闇の力、いずれにしても警戒はしておかないといけない」

「だが奴自身の姿を見たわけじゃない。引き続いて警戒を続けるとしよう」

そういつてヒカリと共に話をしながら彼は仕事をしないでボーッとしていた。今までの疲れが出ていたのかヒカリの部屋にあるソファアで眠ることにした。

「つてことでゾフィー……ゾフィー?」

ヒカリはゾフィーの声が聞こえなくなったので、ソファアを見やると、眠る彼の寝顔が目に映り、微笑む。

「全くお前も人のこと言えないだろうが、いつも人以上に働いて休まないからな。その疲れが出たんだ」

ヒカリはソファアの上に眠るゾフィーに毛布をかけた。彼女は少し疲れてきたのかソファアの後ろ部分を倒してベツト形態へと変え

た。実はこれはソファアベットだったのだ。

普段研究所で寝食するヒカリが購入したものである。彼女はゾフィーの隣に眠ることにした。

そして、3日目となりジードが迎えに来た。

「どうもヒカリさん！ゾフィーさんとジードライザーを受け取りに来ました（笑）」

「お前な……まあほらジードライザーの調整は済んだぞ？」

「ありがとうございます！」

「じゃあヒカリ」

「ああ」

ゾフィー子ども化（ジード&ベル）

ヒカリの家を後にして、ゾフィーはジードと共に光の国の中を歩いていく。彼が光の国の街を見渡しているのでジードは声をかけた。

「ゾフィーさん、どうしたんですか？」

「・・・ああ少しな」

彼が「気にしないでくれ」と答えた後、ジードと共に家に到着すると、ベルが迎えてくれた。彼女はゾフィーの様子が少しおかしいと感じて首をかしげている。だが、ゾフィーから感じる力を自分は知っていた。

「ジード、悪いけどお風呂を沸かしてほしいわ」

「わかったよ」

ジードは家の中へと入った後、お風呂の準備をするために移動する。ゾフィーと二人きりになったベルは彼に話しかける。

「ゾフィーの中にいる・・・。。。。私ね」

「流石私と言った方がいいか？」

ゾフィーの口調が変わったのでベルは構える。なにせ彼の中にいるのもう一人の自分だからだ。

「貴女がなぜゾフィーの中にいるのか知らないけど・・・。。。。出ていってもらわよ!!」

「悪いがそれは無理だ。すでにゾフィーからは許可を得ているからな。」

「な!?!」

「本当です、ベルさん」

「ゾフィー・・・。。。。」

彼は説明をした。闇の力を制御出来たこと、そして、彼女を本当の意味で救ったことを全て話した。彼女自身頭を押さえながらもゾフィーが制御をしていると聞いたのでため息をつく。

「それでちなみにこのことを知っているのは？」

「ヒカリだけですわね」

「あの子か・・・。。。。まあ勘が鋭いからね」

「ベルさん、この話は……」

「わかってるわ。この件は私の中で留めておくことにします。これはほかの姉妹達には話せない内容だしね」

「ご迷惑をおかけします」

「気にしないで頂戴。あなたは少し働き過ぎよ？最近休んでいなかったのを私達が知らないでも思っているのかしら？」

「……それに関しては「問答無用」はい……」

ベルの勢いに負けた我らのゾフィーであった。やがてジードがお風呂を沸かした後に、ベルが立ちあがり、ご飯を作ることにした。ジードはゾフィーの隣に座り彼の活躍などを聞いていた。

「そういえばゾフィーさんはお母さんと戦ったこともあるんですよ？」

「ベルさんと？あああるよ。だけど私があの人から一本とったことはないんだ。」

「そうなんですか？」

「ああ、あの人はケンさんと同じぐらいに強いからね。私なんて攻撃を当てるのに精一杯だったよ」

「何言っているのよ？宇宙警備隊隊長になった人物が言う台詞じゃないわね」

「と言いますが、実際にベルさんに当てたことは一度もありませんよ？実力なども上げたつもりでしたが……」

「まだまだ若い者には負けないってことよ」

そういつてベルは台所へと戻っていき、ジードはジードライザーを出していた。後はウルトラカプセルも出している。

「そういえばウルトラカプセルはヒカリが開発をしたんだっけ？だが私のリトルスターがグビラが持っているとは……不思議なものだな（笑）」

「そうですね。でもあの時あなたのリトルスターの効力がなかったら……グビラは殺されていたし私もやられていました」

「そうか、なら感謝をしないと行けないな」

ゾフィーは自分が持っているカプセル怪獣を見ているとジードは

覗いている。

「そういえば、ゾフィーさんのカプセル怪獣って……」

「ああ、そうだね。それ!」

ゾフィーはカプセルを投げるとバードン、ゼットン、タイラント、ダークロプスゼロ、バキシمامが現れる。

「お呼びですか主様!!」

「おう旦那!!」

「我が主よどうしたのです?」

「?」

「マスター、ご命令を」

「あー悪い悪い、ジードがお前達を紹介をしてくれと言われて出したんだよ。」

「それにしてもご主人様!また子どもになつてるのですね!!」

「ふうむ大人の主もいいが子どもの主つても悪くありませんね」

「だな!」

ゼットンは首を縦に振る。そこにベルがやってきてゾフィーは怪獣たちを元のカプセルの中にいれる。

「このカプセルは特殊だな。彼女達が住んでいる環境をベースにしているからご飯なども出るようになっていいるからね」

「不思議なものですねカプセルって」

「本当にな」

ゾフィー自身もカプセルに関しては自分が関わっていないので誰が作ったのだろうと思ひながら料理を食べる。お風呂も定番になってきており、ベルとジードと共にお風呂に入る。

Fカップの胸とDカップの胸が揺れており、彼が顔を真っ赤にする。ベルがニヤニヤし始めた。

「おうおうどうしたんだい?」

「別になんでもありませんよーだ」

（あ、いじけている（笑））

二人が笑う中、ベルが思ひだしたかのように話をする。

「そういえばゾフィー、リブットから話を聞いているかしら?」

「もしかしてアブソリュートタルタロス以外の戦士が現れたことですか?」

「なんだ聞いていたの」

「ええメロスから聞きました、まさかトリガーの世界に現れるとは思っていませんでしたよ」

「ウルトラウーマントリガー、確か貴方がレオと共にピンチになったときに現れた戦士ね?」

「ええティガと同じようにゼペリオン光線を使っていました」

「ふうん、ティガと同じか関係性はあるのかしら……?」

「今度ティガが来た時に聞いておきますよ」

ゾフィー達はお風呂から上がった後に寝ることにした。それから三日間は特に何もなかったのでゾフィーは大隊長室へとベルと共に行くと、ウルトラの父が待っていた。

「やあゾフィー」

「大隊長お呼びでしょうか?」

「いや明日はうちだから私が連れて行こうと思ってね」

「そう言うことでしたか、わかりました」

「ではベル、ゾフィーを預かるよ」

「ええ、お願いをするわ」

ゾフィー子ども化再び（エース&タロウ編）

ゾフィー side

大隊長ことケンさんに連れられて再びこの家へとやってきた。この家に来るのは本当に一度目の子どもになった時以来になる。

「マリー、エース、タロウ、帰ったぞー」

「お帰りなさい、あなた。それといらっしやい、ゾフィー」

「お世話になります、マリーさん。」

マリーさんにお辞儀をした後、家の中へと入るとエースとタロウがすでに帰っていた。そして、タロウは私の姿を見るや否や走りだして抱き付いてきた。

「ゾフィー兄さん!!」

「ぐおおおおおおお!!」

タロウの大きな胸が当たって苦しんでいると、エースが彼女の後ろに近づいてハリセンを出して頭を叩いてくれたので、何とか脱出できた。

「何やっているのよ、あんたは!!」

「だって小さい兄さん抱きしめることできるの今しかないんだよ!」

「だからと言って、いきなりこんなことしないの!!」

二人が喧嘩を始めてしまった。マリーさんの方を見ると笑っているし、ケンさんの方も嬉しそうにしている……なぜだろうか?そして、私は仕方なく構える。

右手を高く上げて左手を合わせた後、ゆっくりと降ろしていき、光エネルギーをチャージ。

「ん?」

「え?」

「ストリウム光線!!」

「きゃあああああああああ!!」

私が放ったストリウム光線が二人に当たった。当然威力は抑えている。全く私の目の前で喧嘩をするんじゃないやありません!!

「(っ)めんなさい」

「すみませんでした……」

二人が謝ったので、私は許すことにした。そして、私は隊長としての仕事をしようとした時、ケンさんに資料をとられてしまう。

「け、ケンさん……」

「私の家に来てまで仕事をするのか、ゾフィーよ?」

「ですが……」

「どれどれ、これは私がしておくからお前はゆっくりとするんだ」

「すみません」

「お風呂に入ってきたさい。エースとタロウ、仲良くゾフィーと入るのよ?」

「はーい」

まじですか!? エースとタロウと入れというのはですか!? 二回目ですよね!? 二人はお構いなしに私をお風呂場の方へと連れていく。大きな二人に小さい私……これじゃあ、地球人に捕まった火星人だよ。

「さーて、ゾフィー兄さんの……ぐふふふふふふつ!!」

まってタロウ、なんで野獣の眼になってるの? ってか待ってエースもなんでさ!?

「すみません……ゾフィー兄さんのこと好きな人が多すぎてなかなか呼ばれないものでして……それでたまっているのですよ(笑)」

「笑いながら来ないでくれ!!」

こうしてお風呂場で襲われてしまう私、しくしくしく(ノノ)……。さてそんなことがあった次の日、隊長室でエースとタロウが秘書の代わりをしているが、トレギアが心配だからとついてきてくれた。

「トレギア、いくらなんでも心配しすぎだよ!!」

「いや……あなた、不器用にもほどがあるでしょ? ゾフィー隊長を絶対に困らせると思っているから」

「観念をしないタロウ、トレギアの方が一枚上手ね」

エースの言う通りかもしれないな。

「さてトレギア、何か報告をすることがあるかい？」

「はい実はゴライアンさんが……」

「ゴライアンがどうしたのだい？」

「えっとその……」

何か言いづらいことでもしたのかあいつは？

「大暴れをして敵宇宙人の基地を一つ壊滅させたことです」

「「え？」」

「フレアさんからの情報なので間違いないと思います。これが報告書です」

私は受け取った資料の中身にはこう書いてあった。この間からある場所にて敵性宇宙人……凶悪宇宙人ドルズ星人がいると思われる場所を搜索をするようにゴライアンとフレアに頼んだのだが……まさか「壊滅させる」という報告を受けるとは思ってもいなかった。ので頭を抱えてしまう。

「……ありがとうトレギア、まさかゴライアンが敵基地を壊滅させるなんてね……以前よりもパワーアップをしていないか？」

「私もそう思います、ゾフィー兄さん」

「うんうん」

エースとタロウも首を縦に振っている中、私はため息をつきながら仕事に取りかかる。次はゴライアンなのでさらにため息が出てしまうが仕方がない。そして、タロウに話をする。

「そういえばタロウ、タイガは？」

「タイガはトライスクワッドのメンバーと共に宇宙を飛びまわっていますよ。ゾフィー兄さんがいる時はいないのは確定ですね。」

「あんだね……」

「仕方がないよ、姉さん、一応聞いたもん」

そういつて2人が話をしている中ゾフィーはある資料を見て目を通していた。

（惑星「アルテミス」にて敵性宇宙人が侵攻している。至急援軍を求め、か……ウルトラサインで近くにいるウルトラウーマンを

派遣させよう)

ゾフィーはウルトラサインを飛ばして惑星アルテミスに飛ぶように指示を出した。一応警戒のためウルトラウーマン、グレート、ジャックに対して飛ばしたのである。

彼女達が惑星アルテミス付近をパトロールをしているのを知っていたからである。仕事を終えたゾフィー達、家へと戻りエースの手料理を食べた後、一緒に眠る……3日目は何事もなかった。

「ようゾフィー!」

「ゴライアン、君だったねそういえば」

「おうよ!じゃあ連れて行くぜ?」

「って待てええええええええええ!!私は荷物でなあああああああああああい!!」

ゾフィーを肩にかけてそのまま去っていくゴライアンをエースとタロウは苦笑いをしながら見送るのであった。

ゾフィー子ども化再び（ゴライアン編）

ゾフィースide

私はゴライアンの家へと連れてこられた。ってか私は荷物ではないよ、ゴライアンさんよ——

「すまん、つい嬉しくてな。」

「全く……君が元気それで何よりだけでも、本当に良かったのか？」

「何がだ？」

「シルバー族の色で……」

そうゴライアンは元々レッド族だが、フレアによって力が封印されて、シルバー族同様の姿になっている。それはウルトラウーマンキングに復活させられた後でも変わらない様子だが、彼女は気にしていない様子だった。

「別に気にすることはねーよ。それにこの色だって気になっているからな」

「そうか、だが聞いたぞ？ 敵宇宙人の基地を一つ壊滅させたって」

「フレアの野郎か!! 隠しておいてくれと言ったのに!!」

「あのね……君にはフレアと共にドルズ星人の基地を偵察する任務を与えていたはずだ。なのに、壊滅させてどうするのさ……」
「いやー、だってよー! あいつらすごくく悪いこと企んでたからよ。ならやっちゃまえば同じかなーって思ってたさー!」

「……」
その言葉を聞いて、私は頭を抱えてしまう。ゴライアンは今も昔も変わらない脳筋だったことにだ!

「てめえ……いまあたしのことを『脳筋だ』と思っただろ?」

「……」

「なぜ顔を背けるかな? ゾフィーさんよー」

「ご、ゴライアン……何をする気なんだい?」

「いやーよフレアのヤツが激しくアンタとヤツたって聞いてさ。あたしもやりたいと思ってる……」

「なんで君達はこんな幼い子どもを襲おうとしているのかね!」

「いやゾフィーだし」

「理不尽だああああああああああ!!」

こうして私はゴライアンに食べられましたΩ／＼。(チーン、次の日・・・秘書をゴライアンがするのかと考えていたが、フレアも来てくれたので内心ホツとしている。

「なんでフレアまでいるんだよ。」

「あのな・・・お前だけでやれると思うか?だから私もここにいるんだよ」

ため息をつきながらもフレアは手伝ってくれている。さてそういえば・・・惑星アースラからアナタシアがまたやってくると言っていたね。いつ頃だったっけ?

私は資料を確認し、硬直してしまう・・・アナタシアが来る日はエイティのところでお世話になる日だったからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、ゾフィー・・・・・・・・つてあちやー!なんてタイミングだ!?!」

「ど、どうしよう・・・・・・・・まだ子どもの姿のままだよ」

「あきらめろ、ゾフィー・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ですよね」

仕方がない。開き直ってこのまま会うことにしよう。まあどうなるか見えてしまうけどね?さて、話を変えよう。仕事を終えてゴライアンと共に家の方へと帰宅する時のことだ。やっぱり子どもの姿だと目線が小さくなっているからやりづらいな・・・子どもの姿だとこんなに小さいのだな、と・・・私がウォリアンやケンさん、ベルさんを見上げていた頃を思いだす。

昔の私はこうやってみてきたのだな、と。

「どうしたんだゾフィー?」

「少しだけ・・・この大ききになったときに思いだしたことがあってね。小さい視線でケンさん達を見つめていたのを思いだしたんだよ」

「そうかい……」

「そういえば、ゴライアンは、復帰をするまでの間、フレア達を守っていたのだろうか？」

「といっても、戦えないから、墓を行ったり来たりしてただけだけだな」

フレアが蘇ったときに涙を流しながら抱きしめていたのを私は見ている。いや私だけじゃないな……ドリュウ、サージ、カレス、アキレス……かつて死んだ仲間たちは、こうして蘇り、私達と共に戦っている。

それがどれだけ嬉しいことか……ふふふふふ

「何笑ってんだよ？」

「少し、ね……」

そして、あつという間に、3日が過ぎて、エイティが迎えに来てくれた。

「ゴライアンさん、ゾフィー兄さんを迎えに上がりました。」

「おうよ！ゾフィー！」

「わかっているよ」

こうしてエイティの家へと移動する私であった。

ゾフィー子ども化再び（エイティ編）

「……………」

ここは、光の国の港ウルトラスペースポート。エイティは、ほかの姉妹達と共に立っている子どもの姿のゾフィーへ、心配そうに声をかける。

「えっと…ゾフィー兄さん、本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「（……………本当かしら？）」

「まさかこの日だったとは…我々もすっかり忘れていたよ」

セブンがそう言うと、全員が首を縦に振る、護衛としてウルトラウーマンパワー達がついておりアナタシアが搭乗をしている宇宙船が降りたつ。ゾフィーが「アースラの技術もすごいものだな」と感心していると、扉が開いて、アナタシアが降りたつ。

「アナタシア女王、よくぞいらっしやいました」

「大隊長さま、お久しぶりでございます……………ゾフィー叔父さま？」

「……………やあアナタシア「ゾフィー叔父さま!!」うごおおおおおおおとおおとおおとおおとおおとおお!!」

ゾフィーの姿を見たアナタシアは目を光らせて彼に抱き付いた。彼女はゾフィーが子どもの姿になっているのでいったいどう言うことかと説明を求める。

「ゾフィー叔父さま!久しぶりに会いましたらどうして子どもの姿になっておりますのですか!?!いえ、可愛いのですけど!?!」

「あ、アナタシア……………お願いだから落ち着いてくれ……………」
抱きしめられているので、アナタシアの胸が彼を包みこんでしまい、それに気づいたメイド長が止めてくれる。

「アナタシアさま!!ゾフィーさまが!!」

「あああああ、ゾフィー叔父さまあああああああああああ!!」

アナタシアの胸で息ができなくなってしまう。ゾフィーは、顔が真っ青になってぐったりとしてしまう。エイティがすぐに運んでい

き、彼抜きの話し合いになったのであった。

ゾフィースide

あー、死ぬかと思った。

「あーあ、せっかくゾフィー兄さんに地球にできた新しい光の国の学校の資料を見せようと思ってたのに!!」

「まあまあ」

エイティに落ち着くように説く。アナタシアが来日している間は、彼女が私の秘書を務めることになる……閑話休題、我々は何の宇宙人よりも大きいため、アナタシアを手に乗せるのだが……いつもよりも小さいため、視線が低くなっている。

「えっと、ゾフィー叔父さま……?」

「気にしないもん!」

そう私は子どもの姿になっても心は大人のままだもん!!けーっとして小さくなったからって悲しくなったとかないもん!!

「アナタシア女王様、今日は私の手にお乗りくださいませ」

「あなたは、確か……」

「ウルトラウーマンエイティと申します。ゾフィー隊長は体調が悪いみたいなので」

「わ、わかりました」

「すまないエイティ、後で何でもしてあげるからね?」

(今何でもしてあげるといいましたね?いいましたね!!)

あれー?なんで私の心が読まれているの?ってか、あなた、教師なのに何発情した目で私を見ているのかな?

「……」

うん、もうね……最近あの子たち、私とヤツテから「遠慮」という言葉が消えたよ……小さくなる前、いきなりヒカリに捕まって出すまで出させないぞとかさベルさんとかジードとか一緒に親子井とかどうだ?とか言いだしてヤツテしまっし……もうなんか彼女達、遠慮なくやるからさ……お兄ちゃん、規則的に大丈夫かなと心配になってくるんだよね?

「はあ……」

エイティがアナタシアの相手をしてきているからいいけどさ。そういえば、アナタシアも私に依存をしているのをすっかり忘れていたよ。女王様としての責務もあるのに私という男に囚われている。

「……………はあ……………」

椅子に座りながらエイティたちが戻ってくるのを待っている間、私は書類を確認をしていた。自分でもチェックをしないといけないものがあるので確認をしていると扉が開いてエイティとアナタシアが戻ってきた。

「やあ、アナタシアいかがだったかな？」

「はい、流石光の国です。アースラでも見習いといけないことが多いです。」

「そうか、アナタシア……………何か悩んでいることでもあるのかい？」

「え？」

「ゾフィー兄さん？」

「いや、顔に書いてるよ」

「……………流石ゾフィー叔父さまですわ。……………実は最近なのですが……………アースラの周りを謎の円盤が飛んでいることが多いのですわ。ですが、飛んでいるだけでアースラに降りたりすることはないのでどう対処したらよいかわからなくて……………」

「わかりました。それに関してはこちらの方で調査をしておきますね？」

「……………ゾフィー叔父さま、いつの間にか敬語に戻っておられるのですけど？」

いや、ジト目で見られましても……………今は宇宙警備隊長として対応させてもらわねば、皆に示しがつきません。しかしアースラを周りに飛ぶ宇宙船か……………確かに気味が悪いね。

「エイティ、早速悪いけど」

「わかっております。惑星アースラ周辺の調査ですね？レオ姉さんが空いていたはずです。それから、こういう任務に向いているのは、宇宙保安庁と文明監視員……………セブン21さんとマックスにも対

応を任せます」

「ああ、よろしく頼むよ」

エイティにお願いをした後、アナタシアも頭を下げるので気にしないように言っておいた。そういえば、次はネオスのはずだっけか？確か21と一緒に住んでいると聞いていたけどさ……。調査行かせるのまずいかな？だがこれも任務のためだよ？21、ホントーニスマナイ……………

ゾフィースide終了

アナタシアが滞在している間に3日が経ち、彼女は惑星アースラへと帰っていった。そして、ゾフィーは、次のネオスに受け渡される。

「では隊長は責任を持ってお預かりますね？」

「お願いするよ」

「お願いされました！では、ゾフィー隊長!!」

「うむ」

ゾファイー子ども化再び（ネオス&21）

エイティイの家からネオスと21が一緒に住んでいる家へとやってきた……苦笑いをしながら

「えつとその……21は」

「わかっているさ、私が指示を出したからね……」

「あはははは……」

一方で惑星アースラの周りを飛んでいると思われる宇宙船を探す任務についている21、レオ、マックス——セブン21が黒いオーラを纏っているのを見たマックスはレオに話しかける。

（レオ教官、21はどうしたんだ？）

（ほら、今日からゾファイー兄さんはネオス達の家で泊まる予定だっただろう？その日に限って……ね？）

（あー、なるほど）

「フタリトモ、何、無駄話ヲシテイルノデスカ？ハヤク敵ノ宇宙船ヲ探シマスヨ？」

「リよ、了解」

21の黒いオーラを見て二人は宇宙船を探すことにした。21自身も、はやく任務を終えて光の国に帰る為、任務遂行に当たる。

場所は光の国へと戻る。ゾファイーはネオス達の家でのんびりしていた。ネオスがお茶を入れる準備をしている間、彼はソファアで腕を伸ばしていた。

「うーうーうーん」

「そういえばゾファイー隊長、かなり疲れていますね？」

「まあね、宇宙警備隊隊長としての任務以外にもやることが多いからな。ネオスだって勇士司令部の仕事は大変だろ？」

「まあそうですね。この間のアブソリユートタルタロスのこともありますから余計に気合を入れないといけません」

「まさかルーゴサイトの並行同位体をこの世界に呼び出すとはね」

「ええそれだけじゃありません。エイティイ先生にギマイラをぶつけたり、マガオロチにゴードス細胞……ゾファイー隊長達が戦った

モルドとジユダの並行体……」

「そしてユリアン王女の誘拐に、別次元の地球にあると言われているエタニティコアを狙ったと聞いているよ」

2人はウルトラウーマンリブットから別世界の地球でウルトラウーマントリガーと共闘をしたことと新たなアブソリュート戦士「アブソリュートディアブロ」と名乗った人物と交戦をしたことなどの報告を受けている。

「まさかタルタロス以外にも『アブソリュートの戦士』がいたのですね」

「ああ、まさかとは思っていたがね」

「より強い警戒は必要ですね」

「そうだな」

二人がそんな話をしている中、21たちは宇宙船を探している。レオとマックスも探しているがなかなか見つけることができない。

「ぐううううううううう!!」

「21、我慢我慢」

「もう!今日は私達の日なのに!!」

「だがゾフィー隊長からの命令だから仕方がないだろう?しかも直々の命令ってことは私たちを信頼しているってことじゃないの?」

「わかりました!頑張ります!!」

(チョロイ)

21はゾフィーの名前を使えばチョロイのだ。

一方、光の国ではネオスとゾフィーが一緒にお風呂へ入っていた。

「はあ……いい湯だな。」

「なんでお風呂ってこんなに気持ちがいいのでしょうか?」

「ああ……知ってるかな?」

「何がですか?」

「光の国に温泉施設ができているってことを」

「本当ですか!?!」

「ああ、『再現』という形になっているが……男湯と女湯で分けられている。ちなみに発案者はウーマン達なんだよね」

「あーーーーー」

発案者の名前を聞いてネオスは納得をしてお風呂から上がる。その時、ゾフィーは右手にエネルギーを込めて光の剣を生成した。

「ウルトラ・ライト・ソード!?!」

「いやー、見様見真似でやってみただけど、できるものだね」

ゾフィーは、ウルトラ・ライト・ソードを一通り振りながらチエツクした後、解除した。

一方で、惑星アースラ周辺を探索していた21達は、怪しい宇宙船を発見した。その宇宙船は、21達に気づいて攻撃をしかけてくる。

「なんて砲撃だ!?!」

「このッ!」

マックスは、マクシウムソードを投げて砲弾を相殺をするが、数の多さに苦戦している。21は一か八かでミクロ化を決行をして宇宙船の中に突入することにした。それに気づいたレオとマックスは、囧となる為、エネルギー光球とマクシウムカノンを放つ。

「侵入成功!」

ミクロ化解除をした21は、辺りを警戒をしながら、歩いていく。彼女が扉を開けると、そこにいたのは、催眠宇宙人ペガ星人であった。星間戦争激化時に、別個体が、太陽系征服を企み、地球の人口太陽計画を妨害しようとして、ウルトラウーマンセブンに倒された経緯がある。

「貴様は!?!ウルトラウーマンセブ………ン?」

「ちがーう! 私はウルトラウーマンセブン21だ!! ペガ星人!! 無許可の星間飛行は禁止されているはずだ!!」

「おのれ………」

「無駄な抵抗はやめなさい!!」

「うるさい!!」

ペガ星人は襲い掛かるが、21は逆に蹴りを入れる。苦し紛れに、自衛機械を操り攻撃をするが、すぐに21はアドニウム光線を放った。ペガ星人はたまらずそのまま倒れこんでしまう。

「威力は落としているから安心しなさい。それでは、連行させてもら

うわよ？デユワ！」

そのままラインビームを放ち、ペガ星人の体を拘束する。レオとマックスも合流した時、拘束されたペガ星人を見て21はどや顔をしていた。

「さあ帰りましょ!!」

「アツ、ハイ」

三人はペガ星人を連れて帰還した後、セブン21はレオとマックスに後を任せて帰路につく。

「ただいま!!」

しーりん

「あれ？」

21は声がしないのでキョロキョロしながら家の中を探索する。おかしいなと思いつつ家の中を歩くと何かの音が聞こえてくるので耳を澄ませる。

「……ま・き・か!!」

21は走りだして蹴りを入れるとネオスがゾフィーの上に乗っていたのを見て黒いオーラを纏っていく。

「……オイ、ネオス、才前……」

「あ、21おか……えり……」

「……」

「私が必死ニ仕事ヲシテイル中、何ヲシテイル」

「何って……ご奉公？」

首をかしげながら言うが、21は目からハイライトをOFFにした状態で近づいていき、ゾフィーはそのまま二人を抱くのであった。

次の日、ネオスは勇士司令部の方へと向かう。21はオフなのでゾフィーと共に家でのんびりすることにした。

ついでに惑星アースラの周りを飛んでいた宇宙船の正体を報告をしていた。

「ペガ星人だったのか……」

「はい、今は奴らの宇宙船で話をしているところですね」

「そうか……」

ペガ星人達は、地球の気圧ですら暮らすことができない体質なので、彼らの宇宙船で取り調べを行っているところである。

「いずれにしても奴らがなぜ惑星アースラの周りで飛んでいたのかも気になるところだ。」

「はい」

ゾフィーは21からの報告を聞いて両手を組んでいる。

（いったい何者がペガ星人を使い惑星アースラの周りを、何かがあつた星にあるのかなのか？ いずれは調査に向かわないといけないが……それはそれとして、あとカラレスとマックスとレオの三人で終わりのだな。長かった気がするよ）

彼は遠い目になりながら、「元の大人の姿で宇宙警備隊長としての仕事をしたいな」と願う。

勇士司令部の仕事を終えたネオスが帰宅した頃、セブン21がご飯を作って待っていた。

「ごめんね、21！」

「別に……まあその後混ぜてもらえたからいいけどさ」

2人は昨日のことを話しながら、ゾフィーの方を見やる。彼は苦笑いをして、二人に絞られるのであった。

それから二人という時間が過ぎていき、カラレスが迎えに来る。

「やあ、ゾフィー」

「カラレス、次は君のところだったね？」

「ああ二人ともゾフィーはもらっていくよ？」

「はいどうぞカラレス先輩！」

「おうよ！」

そういつて彼女に抱えられてゾフィーと共に移動をする。

「だから！ 私は荷物じゃないのおおおおおおおおお！！」

ゾフィー子ども化再び（カラレス編とマックス編）

ネオス達の家からカラレスの家へと移動したゾフィーは、「カラレスとは久々に話をするな」と思いつつ、彼女と共に家へと入っていった。

「どうぞ、ゾフィー」

「ありがとう、カラレス……」

「?……どうしたのよ?」

「……いや君達の最後を見届けた者としてはな?」

「……あの時ね」

ゾフィーの言葉——それは、かつて星間連合との戦いで重傷を負ったカラレスとザージ、そしてフリーザスが、星間連合指揮官のババルウ星人を倒す為に自らの命と引き換えに超必殺技を使った時のことを指している。

最後は奇跡のM87光線で、生き延びたババルウ星人は倒された。そして彼女達の死を忘れないためにゾフィー達はこれからも宇宙の平和のために戦う決意を固めた。

「そしてキングの力で君達は復活してくれた」

「そうね、私達も正直に言えば今も驚いているわよ」

それはウーマン達が、Uキラーザウルス及びヤプールの怨念の封印の為に、地球に滞在しなければならぬほどエネルギーを使ってしまった時に遡る。

ゾフィーは地球に残っていたタロウやレオを呼び戻すほどの一大事だったが……彼女たちの魂を回収したキングが、肉体を再生させることで復活させたのである。

「そして、ゴライアンの体も回復させて……本当に『キング、ありがとうごさいます』だよ。君達がいなかったら本当に大変だったからね」

「気にしないで、ゾフィー……それにしても、あなたがケンさんの後を引き継いで宇宙警備隊長になっているなんて、そっちの方が驚いたわよ」

「……………そうだね。私もそれに関しては驚いているさ。なにせケンさんの後継ぎがこんな若造だったからね」

お茶を飲みながら、彼は古株たちに散々なことを言われながらも隊長としての任務について活動をしてきたことを思い返す。

偉い人との会談もそうだが、パトロールに加えて部下たちの指示など色々と大変なことがかりであった。しかし、ほかの戦士たちに支えられながら彼は隊長として頑張ってきて今に至るのだ。

「それに、あの甘えっ子だったタロウが筆頭教官だなんて今でも信じられないわよ」

「あはははは……………」

彼女と話をして一緒のお風呂に入ることになる。断ろうとしたが、もちろん却下された。

「なーに赤くしているのさ。今更すぎるわよ?」
「……………」

彼はぷいっと顔を横に向けて彼女を見ないようにしているのには理由がある。彼女はタロウと同等のGカップの胸を持つからだ。

以前にも説明をしているが、抱いたとは言え、今でも顔を赤くするほどである。一緒にお風呂から上がり、布団に一緒に眠るが、彼女が力強く抱きしめるので、ゾフィーは以前パワーの時と同じく、息を止めて眠る。

次の日、カラレスはタロウと久々に模擬戦をすることにしたので、ウルトラコロセウムへとやってきていた。

「ゾフィー兄さんにカラレス!?!いったいどうしてここに!?!」

「それはもちろん、タロウ……………あなたの実力を久々に見たくなくなつたからよ!!」

「ええええええええええええええええ!?!」

いきなりのことでタロウは混乱している中、ゾフィーがほかの生徒達に避難するように指示を出す。今、ウルトラコロセウムにはタロウとカラレス、ゾフィー、そして、念のためにエイティとメビウスがいた。

「えっと、カラレス、本当にやるの?」

「ええ、見せてもらおうわよ、ウルトラ兄妹として活躍するあなたがどれだけ成長したかをね!!」

「ぞ、ゾフィー兄さん。カラレスさんはタロウ姉さんの?」

「ああメビウス、お前が思っている通りだ。さて始まるみたいだぞ?」

ゾフィーが言うので向こうを見やると、タロウが接近をしてカラレスに殴りかかった。カラレスは冷静に彼女が放つ拳を受け止める。

「ぐ!!」

「はあああああ!!」

そのまま投げ飛ばすが、タロウは着地をして振り向きざまにアロー光線を放つ。カラレスは躲すと腕をクロスをしたのを見てタロウ自身も構える。

「ストリウム光線!!」

二つのストリウム光線がぶつかる中、メビウスはメビウスディフェンスサークルを発動させてゾフィーを守るために前に立つ。エイティモリバウンドミラーで衝撃に備えていたがこれほどとは思わなかった。そして、戦いは続く。

「流石ねタロウ!成長しているじゃない!!」

「私だってゾフィー兄さんの力になるために戦うって決めたんだ!!それにカラレスが守ってきたこの宇宙の平和を守るためにも強くなるって決めたから!!」

「それは、嬉しいわね!!」

放つ蹴りをはじめられた後に、タロウはあの技を見せるために構える。それはカラレスのように手をクロスをした状態だ。

「!?」

「ネオ・ストリウム光線!!」

「ストリウム光線!!」

タロウが放つネオストリウム光線に対して、カラレスはストリウム光線を放つが彼女の気迫に押されていく。

「M87光線!!」

そこにゾフィーが放ったM87光線が二人の光線を相殺する。彼は着地をして二人の顔を見て言い放つ。

「そこまでだ。これ以上はコロセウムが耐えられない」

「あちやー、やり過ぎたか・・・」

「カラレス・・・どうだった？」

「・・・ええ、強かったわよ、タロウ、まさか私のストリウム光線をね」

「えへへ・・・！」

お互いに握手を交わす二人を満足げに見届けた。それから3日が経ち、マックスが彼を引き取りに来た。

「カラレスさん、ゾフィー隊長を引き取りに来ました！」

「いらつしやい、マックス、ゾフィーー」

「わかつているよ」

「さあ行きましょう!!」

マックスに連れられて彼女の家に入ると、写真があった。見てみると、彼女が守っていた対怪獣防衛チーム「DASH」、そして一体化をしていた青山 法子の写真であった。

「・・・」

ゾフィーは写真をじーつと見ているのでマックス自身は赤くなつていく。

「あ、あのあまり見ないでくださいよ。」

「いやーすまないね。思いましたよ・・・確か彼女の孫が君と出会ったんだよね？」

「はい、法子の孫が来てくれた時は驚きましたけど・・・そうか法子は夢をつかんだなって思いました。約束を守ってくれたんだと・・・」

マックスは思いだしたのか涙を流していた。それを見てゾフィーもサコミズとの出会いのことを思いだして今はいない彼のことを偲ぶ。

「それにしても本当に小さいですね。一回目の時は、任務でいなかったのて羨ましかったです」

「起きたら体が小さくなっているし、色々とパニック状態だったよ・・・」

一回目の時のことを思いだしたのか、彼はため息を出してしまう。マックスは「その時に関わったウルトラ姉妹が羨ましいな」という目で見ていたので、ゾフィーは「勘弁してくれ」と目で返す。しかし、彼女は気にしないで抱きしめる。

次の日、マックスと共に近くの星へとゾフィーはやつてきた。綺麗な湖のある星で、ゾフィーは綺麗な自然のまま残っていることに驚いているとマックスは頭部のマキシマムソードを構えて投げる。

「!!」

ゾフィーもマキシマムソードが飛んで行った方角を見ていると一人の宇宙人が現れて驚愕していた。

「お前はスラン星人!!」

「まさかマックスだけじゃなくゾフィーもいるとはな!!だがまあいい同胞の仇をとらせてもらおうぞ!!」

スラン星人は二人に攻撃をしてきた。マックスはゾフィーを守るために戦う!だがスラン星人は高速移動をしてマックスが放つ攻撃を躲す!

「速い.....」

一方でゾフィーはグレートとの約束を破り光エネルギーを集中させてマックスに攻撃をしているスラン星人に当てるために集中をしていた。

(もし外したらマックスに当たってしまう。しっかりしろゾフィー!お前は宇宙警備隊長!!狙いは完璧に、やる!!)

そして光エネルギーがたまったのを感じて彼は構える。

「バーニングプラズマ!!」

マックスの後ろから襲おうとしたスラン星人は、ゾフィーが放ったバーニングプラズマを受けてしまう。マックスは後ろに気づいてチャージをしていたエネルギーを放つ。

「マクシウムカノン!!」

「ぐああああああああああああ!!」

スラン星人は爆発をしてマックスはすぐにゾフィーの元へと走る。

「隊長!すみません!」

「気にすることはないよ、マックス、だがスラン星人がこの星で何をしようとしていたのか……念のためにフレア達に調べるよう指示を出しておこう」

ゾフィーはこの星で何をするつもりだったのか調べるために戦士を派遣をすることにした。

そしてマックスと過ごしていると、彼はバーニングプラズマを使った影響なのか眠ってしまい、マックスは彼を背負い家の方へと飛んで行く。報告などはゾフィーがすでにしているので、彼女はそのままゾフィーと共に家の方へと帰るのであった。

三日が経ち、レオが迎えに来た。

「やっと……やっとですよ!!」

「あはははは……」

「少し落ち着こうか？ M87光線!!」

「きやああああああああああ?!」

M87光線（Bタイプ）を放ちレオ姉妹達を落ち着かせた。やがて二人は正気に戻ったのか土下座をしてきた。

「大変申し訳ありませんでした!!」

「まあ、いいさ。だいぶ待たせてしまったようだね。」

「だいたいレオ姉さんが最後なんか引くからですよ!!どれだけ待ったことか!!」

「.....」

アストラの言葉をレオは無言で聞いていた。まあ引いたのはレオだからね。いやー子ども化も最後かと思うと.....作者が別の書いているせいかもしれないけどね。

「ゾフィー兄さん、メタはイタイですよ」

「地の文を読まないでほしいな」

時々、姉妹達は私の心を読むから油断ができないよ。子どもになったとはいえ新しくバーニングプラズマにウルトラ・ライト・ソードを取得したのは大きいな。一度アグルのアグルセイバーを見せてもらった時から、自分もやってみたいと思っていたからね。

いやー見様見真似でしてみたけれどできるものだな。

「ゾフィー兄さんも子ども化は人気者ですね?」

「勘弁してくれ、宇宙警備隊長としての仕事だって大変だし、パトロールができないのも辛いんだよ」

いや真面目な話でパトロールも小さいからできないのがつらたん!!はやく大きくなりたーい!!

「まあまあ」

「まあまあ」

「なんで姉妹で同じことを言うのさ!!」

次の日、K76星.....私はレオとアストラに連れられてやってきた。ここは磁気嵐がいつも吹き荒れており修行には持つてこいの場所である。

「さあ、やろうぜ師匠!!」

「ええ」

私は、ゼロとレオの師弟コンビの修行の様子をアストラと共に見守ってた。お互いに構えているのを見ていると、ゼロが走りだしてレオに攻撃をする。

「デアー！」

「イヤー！」

「すごいですね。レオ姉さんもそうですけどゼロも成長していますね」

「ああ、やはりこの場所は修行には持ってこいの場所だな。ここでグレートとパウードがリブットの力を引き出したというし……」
私もはやく大きくなって手合わせしたい……そんなことを思っていると、二人の模擬戦が終わった。どうやらレオが勝ったようだ。流石ゼロに宇宙拳法を教えた師匠だけあるね。

「私も……いつかは弟子ができてあんな風に教えたりするのかな？」

「きつとゾフィー兄さんならいい師匠になりますよ」

「ありがとう、アストラ」

その後、私達は光の国へと戻った。そして、三日後、ヒカリが開発した薬を飲む……

「いやー、やつと元に戻ったよ」

「なんか残念ね。」

「うんうん」

「確かにいい思いも沢山したけど……やはり元のこの姿がいいよ」

こうして私の子ども化事件は幕を閉じたのであった。

ゾフィー side 終了

並行世界の地球——そこにウルトラマンダークルシフェルは降りたって、辺りを見てから両手を合わせて何かを呟く。

「……復活せよ、鉄鋼ロボット “大鉄塊” よ」

魔法陣から、大鉄塊が再構築された。この大鉄塊は、帰化宇宙人キュルウ星人の宇宙船設計図をベースに宇宙昆虫ガロ星人が製造し

た侵略兵器である。その実力はウルトラセブンを苦しめる程強大であつたが、最後はキュルウ星人がコントロールを奪つたことで、セブンにより破壊された。

「さあ………征け！」

大鉄塊はダークルシフェルの命令で飛んで行く。

「さて、次は誰を復活させようか………クククッ」

そう囁いながら、次元を開いたダークルシフェルは消えていった。

大鉄塊の襲撃！ピンチの二人の戦士

「惑星セメントリア付近異常なしとと……いやー、やっぱりパトロールをするのはいいものだなあ」

惑星セメントリア付近を飛んでいるのは、我らが宇宙警備隊長ゾフィーである。

彼は先日まで子どもの姿になっていたので、パトロールはできなかったのだ。そして最後のレオ姉妹との生活が終わり、無事に元の姿に戻ったことで、パトロールの許可が下りた為、現在はもう一人のウルトラウーマンと共に巡回しているところである。

「どうだセブン？……!?!」

「今のところ、異常なしだ、な……!?!」

警戒しながらパトロールを続けていると、突然何かが接近してきたのを感じた。二人が身構えていると、巨大なロボットが現れた。

「何だ、あのロボットは!?!」

（あれは、『平成ウルトラセブン』に現れた“大鉄塊”!?なぜこの宇宙に……いずれにせよ奴はエネルギーを吸収変換させる力、そしてロボット怪獣ならではの怪力や多彩な技を持っている難敵だー）
「セブンー!」

「わかっている!」

二人は現れた大鉄塊に対して構える。

「であああああああああ!!」

セブンは接近をして大鉄塊に攻撃をするが、逆に大鉄塊は剛腕でセブンの攻撃をガードをする。

「か、硬い!!が?!」

大鉄塊の剛腕を受けてセブンは吹き飛ばされる。ゾフィーはウルTRASピンキックを放つが大鉄塊のボディには効いていない。

「なんて硬さだ……」

大鉄塊の胸部が光り出したかと思うと、ビームを放ってきた。

「ぐ!!」

「デュワ!!」

セブンはエメリウム光線を放つが、当たる前にエネルギーに変換されて大鉄塊の胸部に吸収された。

「な!?エメリウム光線を吸収したのか!？」

「やはりか．．．．．」
「ウルトラブレスレット!!」

ゾフィーは、左手のウルトラブレスレットを掲げて投げつけるが、大鉄塊のボディにウルトラスパークカッターは弾かれてしまう。

ブレスレットを戻したゾフィーは大鉄塊に攻撃をしようとしたが、大鉄塊の両手が光りだしてゾフィーの体を引き寄せようとしてきた。

「ぐ!!」

「ゾフィー!!ワイドショット!!」

セブンがワイドショットを放つが、大鉄塊はビームで相殺してしまう。そして、ゾフィーをつかむと胸部が光りだしてゾフィーのカラータイマーから光エネルギーを吸収し始める。

「ぐああああああああ!!この!ゾフィーチョップ!!」

頭部にチョップをすると、大鉄塊はエネルギー吸収をやめて、ゾフィーは解放されるが、カラータイマーが赤く点滅してしまう。

「せめて奴の弱点さえわかれば．．．．．」

『．．．セブン．．．．．ウルトラセブン．．．．．』

「誰?誰の声?」

セブンは脳内に響く声の行方を探ろうとする。

『私の名前は、キュルウ星人．．．．．』

「キュルウ星人?あなたはいったいどこに?」

『君達が戦っている大鉄塊の中にいる．．．．．私は君に倒されたはずだった．．．．．だが謎の黒い存在が大鉄塊を復活させた。私は二度も君を苦しめたくない!だからこそ!頼む!私を安らかに眠らせてくれ!!』

すると大鉄塊が自身の胸部にあるコアを覆う蓋を突然取り外したのを見て二人は驚く。

「大鉄塊を倒せばあなたはどうなるの!？」

『私は一度死んでいる．．．．．かつて一人の娘が思いださせてくれたように．．．．．』

「ゾフィー……………私にやらせてくれ……………」

「セブン……………」

セブンは拳を握りしめると大鉄塊に接近して胸部のコアにウルトラパンチを繰り出す。

「であああああああああああああああああああ!!」

バキッ!!セブンが放った拳は、大鉄塊の量子エネルギー変換装置に命中した。そして、セブンはそのまま引きちぎった。

「……………」

装置を失った大鉄塊は、火花を放ちながら、そのまま爆発する。セブンは右手に持った変換装置を見る。

『ありがとう……………セブン……………』

装置が光の粒子と化する中、ゾフィーはセブンに近づくと彼女はそのまま抱きしめる。

「……………うう……………うううううううううう」

「……………(キュルウ星人……………あなたのことは永遠に忘れない。ありがとう並行世界の小さき勇者よ、安らかに眠ってくれ!)」

泣くセブンの頭を撫でながらキュルウ星人が安らかに眠ることを祈りつつゾフィーは彼を無理やり蘇らせたウルトラマンダークルシフェルを必ず倒す決意を固めるのであった。

一方、ここは怪獣墓場——ダークルシフェルは何かを呟いて呪文を唱えると魔法陣が現れる。そして、暗黒機軸メカザムが蘇った……自我がなくなる前に、倒してほしいと願い、メビウスにより引導を渡されたあのメカザムが。

だがその目は赤い。皇帝復活プログラム「ゴーストリバー」が起動している証だ。

『ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおお!!』

「ふはははははは、闇のエネルギーを注入したから、以前よりもパワーアップしたな。大鉄塊の時は余計なものがいたが……………こいつにはそれがないはずだ。さあ征け!メカザム!!」

『ぐううう……………ぐおおおおおおおおお!!』

最悪な再会

ゾフィーとセブンが大鉄塊と交戦をしている頃、光の国に「怪獣墓場から強烈な闇エネルギーが発生している」と連絡があった。大隊長ウルトラの父はメビウス、ヒカリ、エース、タロウ、ゼロ、ゼット、タイガ、タイタス、フーマに怪獣墓場へ向かうように指示を出す。

「怪獣墓場……あそこでいったい何が起こっているの?」

「わからないわ。いずれにしても警戒はしておかないとね」

エースとタロウを筆頭選ばれた戦士たちは怪獣墓場の方へと向かい、辺りを警戒をする。

「何もありませんね師匠!」

「うるさいぞ、ゼット!だがなんだこの異様な気配は……」

ゼロが辺りを警戒をしていると、何か近づいているのに気づく。全員が音をした方へ振り返る中、メビウスは目を見開く。

「嘘………なんで………どうして………!!」

「あれは……」

「まさかあれが蘇ったって言うの!」

「あれってメビウス達が言っていた………皇帝復活装置ゴーストリバース!」

『ぐおおおおおおおお!!』

ゴーストリバースは、咆哮しながら、右手に装備しているソードザンバーを構えて突撃してきた。

【ウルトラウーマンゼット!デルタライズクロー!】

デルタライズクローとなったゼットはベリアロクを構え、ゼロはウルトラゼロランスでゴーストリバースが放った攻撃を防ぐが、その猛攻に二人の戦士は押され始める。

「二人ともいくわよ!!」

「はい!」

「ああ!!」

エースはタロウ、ヒカリと共に合体光線を放つが、回避したゴーストリバースはソードザンバーにエネルギーを込めて斬撃刃ザンバー

スラツシユを放ってきた。

「「うわ!!」」

「フーマー! タイタス!」

「ああ!!」

「行くわよ!!」

トライスクワッドの三人もゴーストリバースを止めようと動く。タイタスはワイズマンズフィストを放つが、ゴーストリバースは回避する。そこにタイガとフーマーがスワローバレットと光波手裏剣を放つ。

『ぐおおおおおおお!!』

「なんだよこいつ!!」

「攻撃を受けても進んでくるのか!？」

「そいつには闇の力が込められているからな。」

「「!!」」

全員が声をした方を向くと、ダークルシフェルがそこにいた。彼は笑いながら説明をする。

「言っておくが、そいつに説得なんて無駄だよ。元々エンペラ星人を復活させる装置だからね。さーてやれ! ゴーストリバース!!」

『グおおおおおおお!!』

ゴーストリバースが再び彼女達に襲い掛かろうとしたとき、上空から光線が放たれる。ルシフェルが上空を見やると、ゾフィーとセブンは舞い降りた。

「彼は、メカザム……貴様の仕業か、ルシフェル!」

「来たかいゾフィー、まあいいさ……やれ!!」

ダークルシフェルはゴーストリバースにゾフィーを殺すように指示を出すと、目を赤く光らせながらソードザンバーを構えて、突撃してきた。

「!!」

ウルトラブレスレットをウルトラソードに変えたゾフィーは、ゴーストリバースが振り下ろすソードザンバーを受け止める。

セブンは援護するためにアイスラッガーを投げる。ゴーストリ

バースは難なくアイスラッガーを躲すが、ほかのウルトラウーマン達が立ち上がる時間を稼ぐには十分だった。

しかし、メビウスだけは膝をついたままだった。かつて……彼の思いを聞いてメビュームダイナマイトで彼を倒した彼女だけは。彼が再び利用されていることに彼女は傷ついている。

「また……またなの？」

『甘いぞメビウス!!』

「!!」

声が聞こえたメビウスが前を向くと、ゴーストリバース：いや、メカザムの幻影が、暴れている彼の上に現出していた。

「メカ……ザム……」

『久しぶりだなメビウス……だが話をしている場合ではないな』
「私は……あなたを眠らせていたのに……なのに奴は!!」

『ならお前がすることはわかっているはずだ……』

「だけど!!」

『今の拙者は、ただの暴れ回る機械に過ぎない！ならお前がすることは一つ！拙者をまた安らかに寝かせてくれ!!』

「……メカザム……私は……」

「どあ!!」

「!!」

メビウスは立ちあがり見ると、ゾフィー達が吹き飛ばされていた。ゴーストリバースはソードザンバーを構えてゾフィーを倒そうとしている。メビウスはメビュームブレードを展開して走りだし、ゴーストリバースに一閃する。

『ぐおおお……おおお……』

ゴーストリバースの目は消灯し、膝について機能停止する。

「ダークブラスト!!」

「ぐううううううう!!」

ダークルシフェルが放ったダークブラストがメビウスに当たり彼女は吹き飛ばされてしまう。

「ぐあー！」

「おのれ……ウルトラウーマンメビウス……グッ!?」

ルシフェルが邪魔をしたメビウスを倒そうとした時に、何者かが彼のボディを斬りつけた。

「え?」

「あ、あれは!!」

「ぎ、貴様!」

「……相変わらずだなメビウス。」

「メカ……ザム……」

立っていたのは、青い目のメカザムであった。そして、ほかのウルトラ戦士も立ちあがる。

「おのれ!!どあ!!」

光線を受けてダークルシフェルは睨んでいる。ゾフィー達が放った合体光線が命中してダークルシフェルを吹き飛ばしたのだ。

「おのれ……ウルトラ戦士ども!覚えておけ!!」

ルシフェルはそのまま消えると、メカザムは振り返る。

「メカザム……」

「こうして再び生を得るとはな……なら拙者がすることは一つ……この宇宙を旅する。拙者自身……皇帝復活装置としてはなく一介の戦士メカザムとしてな。宇宙警備隊長ゾフィー、ルシフェルは強力な闇を持っている。気を付けろ」
そういつてメカザムは飛びあがっていく。

「……」

「しっかしルシフェルの野郎……色んなところで滅茶苦茶なことをやってるみたいだな。……どうしたんだお袋?」

「何でもない。」

「そうか?」

「ああ……」

「いずれにしても警戒をする必要があるな」

ゾフィーは宇宙全体にダークルシフェルに気を付けるように指示を出す。

惑星アースラに眠る超兵器

ゾフィースィド

ルシフェルが復活させたメカザム、彼は再び一人の戦士として旅に出た。奴の力が予想以上であったこともあり、警戒をするよう指示を出した私は惑星アースラへとやってきていた。

着地をした私を迎えてくれたのはメイド長である。彼女の案内で城の中に入り、アナタシアがいる部屋の前に到着する。

「お待ちしております、ゾフィースィさま。メイド長、ご苦労様でした」
「はい、では失礼いたします」

メイド長が出た後、私はアナタシアが座るソファアを勧められた。彼女は真剣な顔をしている。いったい何を話すのだろうか？

「ゾフィー叔父さま、忙しい中、アースラまでお越しいただきましてありがとうございます」

「気にしないでください。ですが、私をお呼びした理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「……」

すると、アナタシアはいつもしているペンダントを外した。「これに何かの秘密があるのか」と思っていると、彼女の口が開く。

「この惑星アースラにはあるものが隠されております」

「あるもの？」

「かつて先代、いえお父様が教えてくださったことですが……超兵器と呼ばれるものが隠されているのです」

「超兵器……」

超兵器……そんなものがこの惑星アースラに隠されていたのか。それを狙っている者も少なく無いだろう……もしかして捕まえた大臣のことか。

「もしかして、その超兵器を使えるのは王家の者だけってことなのかい？」

「はい、過去にお父様は一度使ったことがあったそうです。ですが……超兵器の強大な力を見て封印を決意したそうです。で

すが、おじさま…父の弟君は反対をしたそうです。アースラの強大な力を見せるのには丁度いいと……お父様は力で支配をすることをよしとしませんでしたが」

「なるほど、それで陛下は……。だが超兵器を起動させるには王家の血以外にもあるんだね?」

「はい、このペンダントです。お父様は亡くなる数週間前にこれに託しました。おそらくおじもこのことを知らないと思います」
「なるほど……」

だがその超兵器が起動をした時、私達は止めることができるのだろうか?まずどのような兵器なのか……まだ知らないってなんだ?

「大変です!アナタシアさま!!」

「いかがしました?」

「怪獣です!!突然街の外に怪獣が現れて……」

「アナタシア女王、私が行きましょう」

「ですが……」

「街を守るのも宇宙警備隊の使命でもありません」

私は念のためにバキシマルを召還して、次元の中のように指示をしてから光と化した。

ゾフィースide終了

光の玉となったゾフィーは、怪獣に体当たりをして吹き飛ばし、実体化する。現れた怪獣は、ウルトラウーマンタロウがかつて戦った大羽蟻怪獣アリンドウだった。

アリンドウは口から火炎放射を放ったが、ゾフィーは飛びあがり、空中からゾフィーキックをお見舞いさせる。そして、接近してアリンドウにゾフィーパンチを浴びせる。

アリンドウも負けじと両手のカッターで攻撃をするが、ゾフィーは回避をして腹部に蹴りを入れる。

「ストリウム光線!!」

ストリウム光線がアリンドウに当たるが効かなかった。ゾフィーが首をかしげると、口から糸を吐いて彼の体に巻き付かせてきた。

一方アナタシアの部屋——アナタシアは誰かが近づいているのに気づき、振り返ると、右手に剣を持った仮面の侵入者が襲いかかってきた。

「……………」

「アナタシアああああああああ!!」

相手は剣を振るうが、アナタシアの前にバキシマルが現れて、剣を受け止める。

「おっと！主様の命令で貴女をお守りするよう言われている！それっ!!」

バキシマルは尻尾で相手を吹き飛ばすと、侵入者の仮面が壊れる。アナタシアは目を見開いた。

「…………おじ…………様……………」

「おのれ…………宇宙警備隊め……………」

「さーてどうする？あんたを消し炭にしてもいいが、それを主さまは望まないからな。しばらく大人しくしている!!」

バキシマルは元大臣を殴って気絶させる。一方、アリンドウと戦うゾフィーは、ボディースパークでアリンドウの糸を焼き尽くすと、Z光線を放ちダメージを与える。そして、アリンドウに接近して上空へと投げる。

「くらえ！M87光線!!」

上空に投げたアリンドウに必殺のM87光線が命中し、爆散する。ゾフィーはすぐに人間大になりアナタシアの部屋に戻ると、バキシマルが元大臣を縛り上げている途中だった。どうやら彼の嫌な予感当たっていたようだ。

「ゾフィー叔父さま……………」

「何者かが彼を脱獄させていたのだな。さあ言ってもらおうか？誰に脱獄させてもらったのかを!!」

「そ、それは黒いウルトラマンみたいな奴に……………」

「ルシフェル……………奴の仕業ということか。」

「そのとおりだよ」

「!!」

窓の方を見ると、ダークルシフェルが立っていた。彼は念力でアナタシアのペンダントを奪う。

「あ!？」

「僕の目的はこのペンダントだけ、超兵器を使って世界を壊す！」

「そんなことさせると思っただけ!!」

ゾフィーはルシフェルに攻撃をするがレポートが使われて躲かされてしまう。ルシフェルは用が済んだのか兵器が眠っているであろう場所へと向かっていくのを見て、ゾフィーは追いかける。

「アナタシアは今のうちにアースラの住民たちに避難するように指示を出してくれ」

「ゾフィー叔父さま!!」

「シュワ!!」

ゾフィーはルシフェルを追いかけるために飛びたつ。そして、ウルトラサインを送りながら、スピードを上げていった。

超兵器

「ルシフェル・シュートー！」

後ろから追いかけるゾフィーに向かって、ルシフェルは黒い光弾を放つ。回避したゾフィーは返す刀でスペシウム光線を放つも、躲されてしまう。そして、二体の超人は、ペンダントが放つ光に、導かれていく。

「もう少しだ……もう少しで着くぞ!!」

(アースラに眠る “超兵器” ……一体どのようなものなのか……)

気にはなるが、まずルシフェルが悪用することだけは阻止しなければならぬ。

一方、ゾフィーのウルトラサインを確認したウルトラの父は、ウーマンを筆頭としたウルトラウーマン達に惑星アースラへ出撃命令を下していた。

「アースラの超兵器か……」

「ヒカリは何かを知っているの？」

「全てを知っているわけじゃありません。ただ、その威力は銀河を一つ滅亡させるほどのものだったと聞いています。その力を恐れた先代の王が封印を施すくらいに……!」

「皆、急ぐわよ!!」

「!!はい!!」

話は惑星アースラに戻る。目的の場所に到着したらしく下降を始めたルシフェルに対して、ゾフィーはウルトラランスを構える。

「ルシフェル! 大人しくペンダントを返してもらおうぞ!!」

「うるさい! 超兵器を使い、お前を倒してくれ!!」

「無駄だ! 超兵器は王家の血がなければ使うことなどできない! お前にとってはその飾りになる!」

「それはどうかな?」

ルシフェルは闇のエネルギーを放出した。

「!!」

ペンダントを経由した闇のエネルギーが崖に当たると崩れていき中から巨大なロボットが現れた。

「あれが……超兵器……!」

「あははは、これが超兵器なんだね。素晴らしいよ! さあ今こそ僕がその力を!!」

ルシフェルが超兵器に近づこうとしたとき、超兵器の目が緑に点灯し、ルシフェルへ剛腕を振るう。

「が!？」

「自己防衛システム……そんなものが搭載されているのか!？」
そして、超兵器は、ゾフィーに向かって目からビームを放ってきた。回避したゾフィーは先代の王が封印した理由をはっきりと理解した。

「自己防衛システムは、『王家以外の全てを脅威と見做し、王家以外の全てを滅する』まで止まらないようだな……なるほど先代陛下のお考えは正しかったわけだ」

「おのれ……闇のエネルギーで奴を制御してくれる!!」

ルシフェルは、諦めずに、残っている闇のエネルギーを全開にして超兵器に向かって放つ。闇のエネルギーを受けた超兵器は、目の色が緑色から赤色へと変わっていき、咆哮しながら、ゾフィーに襲いかかる。

「ぐ!!」

『ぐおおおおおおおお!!』

剛腕を躲したゾフィーは、Z光線の構えからゾフィースラッシュを放つが、超兵器のボディの前に碎けてしまう。

「いいぞ! いいぞ! もつと暴れろ! 超兵器!!」

しかし、超兵器は振り返ると、ルシフェルの方へ近づいていく。

「な!?! やめろ!!」

そのままルシフェルを掴んで力を込めていく。

「ぎゃああああああ!! やめろ!! 離せえええええええええええええええ!!」

今のルシフェルに抵抗をするだけの力は残っていなかった。起動時や制御時に闇のエネルギーをほとんど力を使ってしまったからだ。

そんな小さき者に対し、超兵器は情け容赦なく拳に力を加えてゆく。「ぎやああああああああああああああああああ!!」

骨が砕け散る音が聞こえ、やがてルシフェルの声は聞こえなくなる。そのまま超兵器は崖に叩きつけた先には、無惨な姿となったルシフェルが「あつた」。

「ルシフェルだったもの」に一瞥もくれず、超兵器は街の方へと向かおうとしていたので、ゾフィーは巨大化する。進行を阻止するために突進するが超兵器のボディの頑強さに逆にゾフィーが吹き飛ばされてしまう。

「どあ!? まだだ!!」

ジャンプをしたゾフィーがゾフィーキックを放つも、超兵器はボディに届く前に彼の足をつかんで投げ飛ばす。

「がは!!」

このままではアースラの街が破壊されてしまう……!!

その時! 超兵器の足元に光線が放たれて、超兵器はバランスを崩した。

「今のは……!!」

「無事かしら、ゾフィー!!」

「ウーマン! それに皆も来てくれたのだな?」

「あれが超兵器……」

「あれはルシフェル!」

「ズタボロ……」

「ああ、支配しようとして逆にやられてしまった! みんな気を付けろ!!」

超兵器は起き上がり、ウーマン達にビームを放ってきた。回避したウーマンとジャックはダブルスペシウム光線を放つが超兵器は両腕でガードをする。

「行くわよ、アストラ!」

「はい、レオ姉さん!!」

「ああああああああああ!!」

レオとアストラはダブルキックを放つが逆に吹き飛ばされてしま

う。

「きやああああああ!!」

「レオ!アストラ!!」

「いったいどうしたら・・・」

超兵器の堅固さ、そして多彩な技に、ウルトラ戦士達は苦戦を強いられる。

「大鉄塊以上、か・・・」

セブンもアイスラッガーを弾かれてしまう。すると突然、超兵器の動きが鈍くなったので、何かと見やると、王家のペンダントを取り戻したアナタシアが立っていた。

「私はアースラ女王アナタシア!!王家の命令です!動きを止めなさい!」

超兵器は、アナタシア:王家の命令とルシフェルに刻まれた全てを滅ぼさんとする命令が激突し、煙を噴き出した。

「ゾフィー叔父さま!!今のうちに超兵器を破壊してください!!」

「だがそれでは・・・」

「構いません!!このような兵器は存在してはいけなかったのです・・・だから!!」

「・・・」

ゾフィーは改めて超兵器を見やる。自身のM87光線ではおそろく破壊をすることができない。

「ゾフィー、私達のエネルギーをあなたに!」

「あれを使うのだな?」

「ええ!!皆、スクラムを組むわよ!」

「!!おう!!」

ウーマン達はゾフィーの周りに立ち、彼にエネルギーを託す。超兵器の動きが止まっているうちにゾフィーは構える。

「グレートM87光線!!」

ウーマン達のエネルギーを託されたグレートM87光線が超兵器の装甲にぶち当たる。しかし、超兵器は光線を受けながらも歩を進めようとしていた。

襲い掛かる戦闘員

ゾファイ側

「惑星オーラーにて救援を求む……か」

惑星アースラの事件から数週間が経った。私は、惑星オーラーから救援信号が出されたので、現場に急行している。

しかし、惑星オーラーと言えば、現在は銀河連邦の早瀬兄妹がデビル星人の魔の手から守っているはずだ……いずれにしても向かわないことにはわからない。

「見えてきた、あれが惑星オーラーか。地球に似ているな……」
警戒しながら巡回していると、ふと気配を感じた。振り返ると黒いマスクをかぶったような異星人がいる。こいつらは、前世の記憶で見たことがある。

「デビルか……」

「『デビル!!』」

デビル達は一斉に私へ襲い掛かってきたが、こいつらの戦い方は知っている。奴らの攻撃を躲した後、徒手空拳で撃退した。

こいつらがいることはデーモン怪人がいるはずだ。

「ふはははははははははは!!流石宇宙警備隊長!!デビルでは相手にならないか!!」

「その声は……貴様がデーモン軍団の首領デーモンか!!」

「いかにも!だがこいつらにはお前でも勝てまい!!」

「こいつら?」

足音が聞こえてきたので振り返ると三人の戦士が歩いてきていた。

「まっ……まさか!!」

「そのとおりだ!今度の貴様の相手はこいつらだ!行け!トリプルファイター!!」

なんだと……彼らがデビル星人に負けたというのか?!いずれにしても彼らを相手に戦わないといけないのか……厄介だな。

ゾファイ側終了

グリーンファイター, レッドファイター, オレンジファイターの三

人が、デーモンの命を受けて、ゾフィーに襲い掛かってきた。

「やめるんだ！」

ゾフィーの声は、彼らに届いておらず、次々に攻撃を仕掛けてくる！

「ファイターキック！」

「ぐ!!」

グリーンファイターのファイターキックをクロスガードで防御する。その隙を狙って、レッドファイターとオレンジファイターがダブルキックを放ってきてゾフィーを吹き飛ばす。

「ぐうううううう!!」

三人に攻撃をするわけにはいかないため、ゾフィーに危機が訪れる。

「はっはっはっはっは！宇宙警備隊長も流石にトリプルファイター相手には戦えまい！さあトリプルファイター！ゾフィーにとどめを刺せ!!」

「二………二………」

三人がゾフィーにとどめを刺すために近づいてくると、上空から光線が放たれた。デーモンが驚く中、三人のウルトラマンが降りたつ。

「ゾフィー兄さん、無事ですか!?!」

「レオ！アストラ！コスモス！」

彼女達は三人のファイターを見て驚いている。

「なぜ彼らが!?!」

「気を付けろ！彼らはデーモンに操られている!!」

「アストラはオレンジファイターを、私はレッドファイターを止めます！ゾフィー兄さんはグリーンファイターをコスモスは私達が抑えている時にフルムーンレクトを」

「わかりました!!」

「行くぞ!!」

ゾフィー達の足止めが始まった。

レッドファイターの攻撃をレオは宇宙拳法で弾いていく。

「ファイターチョップ！」

「えいやあああああ!!」

「スクリューパンチ！」

「おっと！」

オレンジファイターのスクリューパンチを躲したアストラは連続蹴りを放つ。

グリーンファイターと交戦をするゾフィーは、彼の蹴りを弾いた後、背後から羽交締めにした。

レオ姉妹も同様に抑えることに成功したようだ。

「フルムーンレクト」

放たれたフルムーンレクトにより、三人のファイター達は頭を押さえ始めた。

「ぐあああああああああああ!!」

「おのれ……い……いでよ！デーモン怪人サンダークラッシュ！」

「はっはっはっは！俺様はデーモン怪人サンダークラッシュ様だ！くらえ！サンダーボルト!!」

サンダークラッシュが放つサンダーボルトが四人に向かって放たれる。回避したコスモスは右手を高く上げて、光を発した。すると、チャイナドレスの色が青から赤へと変わり、髪の色も黒くなる。

ウルトラウーマンコスモスコロナモードである。

「たあ!!」

「フン、舐めてもらっては困る!!トリプルファイターを敗ったのもこのサンダークラッシュなのだから!!」

「なるほど、トリプルファイターがお前に操られたのはそういうことか……いくぞ!!」

アストラに倒れているファイター達を守るように指示を出した後、ゾフィーはレオやコスモスと共にサンダークラッシュに攻撃する。

「えいや！」

「シエア！」

レオとコスモスがダブルキックをサンダークラッシュに放つが、両手でガードされる。しかし、ゾフィーがその隙について空中からゾ

ファイキックをお見舞いする。

「俺達は………」

「目を覚ましたかしら？」

「宇宙警備隊？ そうだ俺達は………」

「迷惑をかけました……レッドファイター！ オレンジファイター！」

「おう！」

「ええ！」

「トリプルファイター!!」

三人のファイターが合体することで誕生するのがトリプルファイターだ！ サンダークラッシュシュが放つサンダーボルトをゾフィー達が防ぐ中、トリプルファイターとアストラが駆けつける。

「もう大丈夫なのかい？」

「ご迷惑をおかけしました。」

「よし行くぞ!!」

ここに五人の戦士が揃った！ サンダークラッシュシュは再びサンダーボルトを放つが、五人はあつさり回避する。そして、接近したコスモスは両手を突き出してサンダークラッシュシュのボディに叩きつけていく。

「どあ?!」

「アストラ！」

「はい！」

「ダブルシューティングビーム!!」

姉妹が放ったダブルシューティングビームがサンダークラッシュシュを吹き飛ばす。

「おのれ!!」

「トリプルキック!!」

トリプルファイターが放ったトリプルキックは、サンダークラッシュシュをグロッキー状態に追い込んだ。そこで、ゾフィーは構える。

「コスモス！ 同時攻撃だ！」

「はい!!」

「M87光線！」

「ネイバスター光線!!」

二人が放った同時光線がサンダークラッシュに命中する。

「デーーーモーーーン!!」

サンダークラッシュは爆発四散した。

「おのれ! 宇宙警備隊にトリプルファイター! 私はまだ諦めたわけじゃないぞ!! 覚えておけ!!」

デーモンの声が聞こえなくなった後、トリプルファイターは分離して三人に戻る。そして、ゾフィーとグリーンファイターは握手をする。

「ありがとうございます! あなたたちが来なかったら私達は……!」

「気にすることはない。SOSサインが上がったから駆けつけたんだ」

「それ、私が上げたやつだ……」

「オレンジファイター……そうか、君のおかげでもあるね。我々は共に平和を守る同志でもある。また共に戦おう!」

「はい!!」

「[[シユワ!!]]」

四人のウルトラ戦士は惑星オーラーを後にした。宇宙空間でコスモスと別れ、レオとアストラと共に光の国へと帰還をする中、ゾフィーは話をする。

「そういえば、二人とも、よく来てくれたね」

「実はあのSOSサイン、私達も見たんです。」

「同じくそのサインを見たコスモスも途中で合流したんです」

「なるほどな。だが君達が来なかったら危なかったよ。本当にありがとう」

「いえいえ」

ゾフィーはお礼を述べ、三人で光の国へと帰還するのであった。

ゾファイーメモリアル

ゾファイー side

「…………ふう…………」

惑星オーラーでの戦いの後、レオ姉妹と共に光の国へと戻った私は、隊長室で、転生した日のことを思い出していた…………。

勇敢な父と優しい母の元で生まれて、初めてゾファイーとして転生した日のことを。しかし、母は私を産んだ後に亡くなり、ケンさんの親友でもあった父はとある宇宙戦争で殉職してしまい…………私は本当の意味で独りになってしまった。

ケンさんやベリアルさん達に引き取られてからも私は一人でいることが多かった。ある日、公園でのんびりしていると、二人の少女が声をかけてきてくれた。

それがウーマンとセブンだった。彼女たちを見た時、自分が知っているウルトラマンの世界じゃないと確信したよ。だけど、ゾファイーとして生まれ変わったのは自分が望んだことだから後悔はない。

大きくなり、私は宇宙警備隊に入隊して、ウルトラ大戦争(ウルティメイトウォーズ)やベリアルの乱、さらに『ウルトラマンSTORY 0』の物語も体験した…………最後は星間連合を倒すことができただけど、犠牲も大きかったな。

だが今、こうして散ったはずの仲間たちは生き返り、私たちと共に宇宙の平和のために戦ってくれている。

「…………本当に様々な戦いを経験したな…………十字架にとらわれたり、ブロンズ像にされたり、命を落としたこともあったな。いやー、どれもこれも今となっては懐かしい…………」

「何をやっているんだ?」

「ん?」

私が思い出に耽っていると、ヒカリが現れた。報告書を持っているけど、何か頼んでたっけ?

「全く、せっかく報告に来たのに、貴様は!」

「あつ!?…………すまんすまん」

ヒカリに謝りながら、思い出した。ウルトラブレスレットの便利さから、量産体制を整えるようにヒカリやトレギアに頼んでいたんだ。た。

現在、ウルトラブレスレットを装備しているのは、私やジャック、ゼロ以外には宇宙牢獄を守る兵士くらいで、あまり多くない。そのためブレスレットの量産を進めているんだけど、なかなか難しいからね。ジャック達や私のように様々な形に変形できればいいが。なかなか難しい。今はウルトラランスが便利なのでそれに対応できるように改良を進めている。

「……やはりウルトラブレスレットは使いこなせるものが少ないね。……」

「だろうな。お前のだつて改良型だろ？」

「まあね……」

ヒカリは話の後に、技術局へと戻っていき、隊長室に静けさが戻った。

「そういえば、ダークスパークウォーズだったか……。ダークルギエルの策で身体が人形（スパークドールズ）になってしまった時は焦ったな……。なぜかタロウと共に意識があつたんだよね。あれは驚いた」

「だよねだよね！懐かしいなあ〜！」

「……タロウ、いつのまに……」

「さつきだよ？お兄ちゃん、ノックしても返事がないから」

「ああ、すまないな」

「気にしないで！それより本当に驚いたよね！姉さんたちも闇の姿で現れたぐらいだからね（笑）」

「笑い事じゃないけどね。まあ確かに悪いことだけじゃなかった。ギンガやビクトリーののような戦士や、エックスやオーブ達と出会えた……」

「本当、色んな後輩たちが現れて……。色んな敵も現れた。そして……」

「私も彼女達と何度も戦った」

「トレギア、か」

「はい、惑星アースラでの報告書の確認が終わりました。まさかダークルシフェルが……」

トレギアは長い白髪が特徴的だが、今日はその髪をポニーテールにしているなかなか似合っていたので驚いてしまう。

「これで、直近の問題なのはデーモン軍団……そして、アブソリュートの戦士達のことですね？」

「ああそうだ。ユリアン王女をさらい……さらには光の国を開け渡せと言ってきたぐらいだからね。いずれにしても警戒する必要があるな。タロウ、ギャラクシーレスキューフォースと連絡ひて異常がないかを確認、トレギアはアンドロ警備隊に連絡を」

「了解!!」

二人が部屋を出た後、疲れてしまい、ソファで眠ることにした。とりあえず一言……おやすみなさい、今年もよろしくZZZZ

ZZZZZZZZ

ウルトラ兄妹

「忘れてたーゾフィーお兄ちゃんに出さないといけないのに!!」

本日提出予定の書類を纏め終わったジャックは隊長室に向かって走っていた。

隊長室へ到着し、扉をノックするも返事がない。中に入ると、ゾフィーがソファアーの上で寝ているのが見えた。「疲れているのかな」と思ったジャックは静かに布団をかけた。とりあえず提出用の書類を机の上に置いた後、どうしたものかと考えているとウーマン、セブン、エースの三人が入ってきた。

「ゾ「しー」ー」寝ているの?」

「はい、私が入ってきたときから……」

「そうか、この間のデビル星人のこともあるからな……そういえば、このメンバーが揃ったのは久々じゃないか?」

「あー、確かに。最近はタロウ達がいまいましたからね」

「そうね、でも思い出すわ……ウルトラ兄妹結成日の頃を、ね……」

ウーマン side

ウルトラ兄妹の結成——あれは触覚宇宙人バット星人が光の国へ攻めこんできた時の頃になるわね。地球でバット星人とゼットン(二代目)を倒したジャックが光の国へ向かった頃、私達やエースが奮戦していた頃ね。

ジャックが到着した後……ゾフィーがM87光線をバット星人の母艦に撃って、撤退させた後……ゾフィーが言い出したのよね、「ウルトラ兄妹を結成する」と。

「「ウルトラ兄妹?」」

「そうだ、私達の絆をもっと深めるためにね」

「まあ、それは悪く無いじゃないか?」

「うん、私も賛成だよ?」

「私ものです!!」

こうしてウルトラ兄妹が結成されたわ。ゾフィーが一番上で、二番

目が私…と順番になったわね。その後にはタロウ、レオ、アストラ、エイティが加わって、それからエンペラ星人を倒したメビウスやヒカリも入って今の11兄妹になったのよね……最初はどうなるのかと思っただけで上手くやれてると思うわ、ライバルが増えちゃったけどね。

本当、性交渉をするまで気づかないなんて鈍感にも程があるわね。だけど、「あのアナタシア女王も抱かれた」とエースが言っていたから油断ができない。さて、どうしたらいいものか……宇宙警備隊長として外宇宙（そと）に出ることが多いけど、ゾフィーを一人にさせると何をするのかわかったものじゃない。

最近も、わざと捕まってセブんと調査をしていたサロメ星人の基地を破壊したし……宇宙警備隊長として全宇宙の悪から命を狙われているというのに……私達がどれだけ心配をしているのか全くわかっていない。

「いつもボロボロなのはどっちなのよ……」
「そうだな。私達を心配してくれるのはいいが……自分の体を大事にしてほしい」

セブンや私がそう言うと、ジャックとエースも首を縦に振る。本当に、どれだけ心配をかけさせているのやら……するとゾフィーが起き上がった。

「ウーマン？それにセブんにジャック、エース？」

「おはよう、兄さん」

「どうやら寝てしまったようだね。色々と思い出を振り返っていたから……つい寝てしまった。」

「思い出？」

「……ああ、小さい時のこととかね」

ゾフィーはそう言うが、どうも何かを隠している気がするわね。長い間、共に過ごしているからわかるのよ……。

ウーマン side 終了

「それにしても邪悪な闇エネルギーが別世界から放たれているのは気のせいではないよな」

「……実はお兄ちゃん、そのことなんだけど……」

「ジャック、何かわかったのかい？」

「はい、前にお兄ちゃんが言っていたウーマントリガーがいる宇宙……その地球で大いなる闇エネルギーが検出されました。もしかして……」

「何かが起こっていると言いたいんだね？わかった……各支部に通達！闇エネルギーを警戒しておいてくれ！」

「わかりました！」

直ちに宇宙警備隊各支部に通達をして警戒をするように伝えたゾフィー……隊長室から見える光の国の街並みを見ながら彼は考えるのであった。

襲い来る怪獣

『ぐおおおおおおお!!』

「シユワ！」

惑星グルグの地上で冷凍怪獣ペギラと戦っているのはゾフィー、彼は暴れるペギラを落ち着かせるためにペギラの攻撃を受け流している。

(地球のペギラがなぜこの星で暴れているのかわからない。いずれにしても落ち着かせることが先決だな)

彼はペギラにウルトラスピンキックを放ち気絶させようとしたとき、自身の体に何か巻き付いてきたので後ろを振り返ると、ロボット怪獣がいた。サロメ星人が造りだしたロボット怪獣メカゴモラだ。

「何?！」

『ぐおおおおお!!』

メカゴモラはゾフィーを力で引っ張り、彼は地面に倒れてしまう。

「どあ?!なんて力だ!!」

そのままメカゴモラは全身からメガボディミサイルを射つてきたが、ゾフィーはウルトラブレスレットを変形させたブレスレットムチを使いミサイルを叩き落としていく。

すると気絶していたペギラが起きだして、口から冷凍ガスを放ち、ゾフィーの右足を凍らせる。

「う、動けない!!」

メカゴモラはチャンスと右胸のランプから強力なビーム「クラッシュャーメガ」を放ちゾフィーにダメージを与える。万事休すと思われたゾフィーだが、彼の足元に光線が放たれ、凍っていた足が動けるようになる。そして、近づいてきたメカゴモラにゾフィーキックをお見舞いさせる。

「シエアー！」

ナックルチェーンを壊して彼は上の方を見ると撃つたであろう人物がいた。ウルトラウーマンである。

着地した彼女は、メカゴモラを彼に任せて、ペギラに相対する。彼

女はすぐさま回転して、キャッチリングを生成してペギラの動きを止める。

ナツクルチェーンを破壊されて両手がなくなったメカゴモラに、ゾフィーは乙光線の構えからゾフィースラッシュを放ち、メカゴモラの角を破壊した。更に接近して顔面にウルトラキックを放つ。

『ギャオオオオオ……!』

「止めだ! M87光線!」

L字に構えたBタイプを放ち、命中したメカゴモラは後ろの方へと倒れて爆発をする。

メカゴモラを倒したゾフィーにウーマンは近づいていく。

「大丈夫だったかしら、ゾフィー?」

「ああ、助かったよ、ウーマン」

「だけどペギラはどうして暴れていたのかしら?それにメカゴモラが突然現れたような気がするけど?」

「それに関しては私もわからない。惑星グルグでペギラが暴れていると聞いて飛んできたが、まさかメカゴモラまで現れるとは思ってもしなかったさ。サロメ星人の仕業かな?」

「以前、拠点を壊滅させた報復かしら?」

「そうだね……君たちの偽者(サロメロボット)を造り出すほどの科学力と執念深さを持っている奴のことだ、可能性はあるね。だけど、ウーマン……正直に言って助かったよ。足を凍らせられた時は焦ったからね。」

「どうしましたまして」

そして、ウーマンもゾフィーも各々のパトロールへと戻る、その映像を見ていた宇宙人軍団がいたことにも気づかずに。

頭脳星人チブル星人、高速宇宙人スラン星人、反重力宇宙人ゴドラ星人、凶悪宇宙人ザラブ星人に暗黒星人ババルウ星人である。

「エクセル!お前のチブルロボットが倒されたぞ!」

「おかしいですねえ、私の計算では、ウルトラウーマンの加勢は無かったはずなのに……」

「まあ、いいだろう……まだゲームは始まったばかりだ。次はザラセ

ルだな、何かあるか？」

「はい、ババルウさま！これを……」

「ザラセル」と呼ばれたザラブ星人はあるものを取り出した。それは……。

「それは確かライザーと怪獣カプセルか……なるほど怪獣召還をするってことか？」

「そのとおりです。それをゾフィーにぶつけようと思っております」

「ちなみに何をぶつける気だ？」

「はい、このカプセルでございます。」

ザラブ星人が見せたカプセルを見て、ババルウ星人は笑いながら許可を出す。

「いいだろう、楽しみにしているぞ!」

「はい！では早速!」

カプセルをセットしてライザーを起動させる。

「ファイブキング!」

「いでよ!ファイブキング!!ゾフィーを倒せ!!」

現れたファイブキングはゾフィーを倒す為にメルバの翼を広げて飛び立っていく。

ファイブキングとの戦い。

ゾフイーside

いやー、ウーマンがいなかったらやられていたな。パトロールを再開した私は、惑星ナッツα、β付近を廻り、異常がないことを確かめて戻ろうとしたとき、突然咆哮が聞こえてきた。振り返ると、まさかのファイブキング!? 右手のレイキュバスの巨大なハサミで私を挟みこんできた。

「ぐ!! なぜファイブキングが!」

ファイブキングの力は圧倒的で、ふりほどこうとしても振り解けない。私はナッツαの方へと不時着して、ファイブキングと共に地上へと降りたつ。

「カプセル怪獣! バードン! タイラント! ゼットン! ダーククロプスゼロ! バキシマル! 頼む!」

彼女達が飛びだしてファイブキングに攻撃をしてくれるが、ファイブキングの力が弱まっていない!!

「くそ! この! 主人を離せ!!」
「であ!!」

ダーククロプスゼロが放ったダーククロプスショットがハサミ部分に当たった瞬間、私は蹴りを入れて後ろの方へと退がり、構え直す。

「ご主人様、大丈夫ですか!」

「ああ、バードン、大丈夫だ。しかし、ファイブキングがなぜこの地域に.....誰かがファイブキングを作り出したというのか?」

ファイブキングが光弾を放ってきたので、思考を中断した私は回避して、ウルトラスラッシュを連続で投げ飛ばしたが、ファイブキングの右手の鋏ではじかれてしまう。

流石「平成のタイラント」.....一体どうしたらいいのだろうか?
?

ゾフイーside 終了

ファイブキングは咆哮の後、六人に襲い掛かる。バキシマルは両手から火炎放射を放ったが、左腕のガンQ部分で吸収し、倍にして返し

てきた。しかし、タイラントがバキシマルの前に立ち、腹部で吸収をする。

「ありがとう。」

「気にするなつてー……うぷっー！」

「ゼットンさんー！」

「うん……！」

ダークロプスゼロがダークロプスショットを放ち、ゼットンが吸収してファイナルゼットンビームを放つが、またもファイブキングは左手で吸収しようとする。すかさずゾフィーがM87光線を放ち、ガンQアイを破壊する。

すると今度は、右手のハサミで、バードンを挟みこもうとしたので、タイラントが左手の鞭を飛ばしてファイブキングの右手のハサミを絡ませると、バキシマルは頭部の角を発射させてレイキュバスのハサミを破壊する。

ファイブキングは、下半身の超コツヴの部分から光弾を放とうとしたが、ダークロプスゼロがダークロプススラッシュを放ち超コツヴ部分を使用不能にする。

「ウルトラショット!!」

ゾフィーが放ったウルトラショットが、ファイブキングのファイヤールゴルザとメルバの顔部分に当たり、そこも戦闘不能状態になる。

形勢不利と判断したファイブキングは、背中の翼を開いて、空に飛び立とうとしたが、ゾフィーとダークロプスゼロが構える。

「メタリウム光線ー！」

「ダークロプスショット!!」

二人が放った光線が、翼に当たり、ファイブキングは不時着する。そこへバードンとゼットン、タイラント、バキシマルが火炎攻撃でダメージを与えていき、ゾフィーは止めを刺すために右手に光エネルギーをためる。

「これで終わりだー！M87光線!!」

放たれたM87光線がファイブキングに命中して爆散する。

「やりましたねご主人様!!」

「……………」

「ご主人？」

「あ、いや何でもない。少しだけ考え事をしていただけさ」

「もしかしてファイブキングを召喚した相手ですか？」

「ああ、ファイブキングを出すってことはかなり大きな組織が動いていることになる」

「超古代怪獣ファイヤーゴルザ、超古代竜メルバ、宇宙海獣レイキュバス、奇獣ガンQ、宇宙戦闘獣超コツヴの五体が合体したのが超合体怪獣ファイブキング……………ご主人様を狙ったとなりますと……………」

「いずれにしても敵の狙いが私だということか……………」

「一方で宇宙人連合——」

「申し訳ございません!!」

「流石宇宙警備隊長ゾフィー、かつて私の兄を敗っただけのことはある。ふふふふふ、そこなくてはな。次に誰が行くのか？」

「では、この私、ターボスが、ゾフィーを倒して、スラン星の同胞の無念をも払ってみせましょう！」

「いいだろう、頼んだぞ？」

「御意！」

「無事かい、マックス」

「ゾフィー隊長!!」

「スラン星人、マックスをやらせるわけにはいかないぞ!!」

ゾフィーはマックスの傍に着地をして構えると、スラン星人は待っていたかのようには笑う。

「何という僥倖!!私の目的はマックスではなく、貴公の命なのだよ!!」

「なんだと!!」

「きえ!!」

スラン星人は高速移動で分身をしているかのように見せて、両手から光線を放ち二人にダメージを与える。

「ぐうううううううう!!」

「ひゃひゃひゃひゃひゃ!苦しめウルトラウーマンマックス!そしてゾフィー!」

「であ!!」

マックスが放ったマクシウムソードが分身を斬り裂いた。スラン星人はそれも承知で二人に光線を放ったが、ゾフィーがウルトラブレスレットを変形させたウルトラディフェンダーで光線をガードする。

「何!？」

その間にマックスは光エネルギーをマックススパークに集めており逆L字に構える。

「マクシウムカノン!!」

放たれたマクシウムカノンがスラン星人に当たる。

「ぎゃあああああああ!!仇をとれずにすまない!!我が同胞たちよおおおお!!」

爆散したスラン星人を見ながら、ゾフィーは黒幕について思案し始めた。「アブソリュートタルタロスが自分を殺すために派遣をしたのか?」など様々な考えを出してみたが……情報が少なすぎた。「助かりました、隊長」

「気にしないでくれ、しかしスラン星人がなぜ私の命を?」

「スラン星人の今までのことを考えますと私を狙うと思っておりましたが……スラン星人の裏から操る者が……いるかも

「しれませんね。」

「ああ警戒しておくよ」

お互いに惑星オーロラを後にして戦士達は飛び立った。一方でスラン星人ターボスが倒されたのを見てババルウ星人は二人の宇宙人を見ている。

「さて次はどちらがいく?」

「なら次は私が行かせてもらいます!!」

「ゴドラ星人ゴルか、お前は どうするつもりだ?」

「はい、これを見てください。」

モニターには何かの機械が作られておりババルウ星人は興味がいってきた。

「一応聞こう」

「はいこちらはあのダークザギたちウルティノイドが使用していたダークフィールドを疑似的に再現したものでございます」

「なるほどダークフィールドを使い、ゾフィーの力を半減し、こちらの力を倍増させるということだな?」

「そのとおりでございます!!今度こそゾフィーを倒してご覧に入れましょう!!」

「いいだろう、やってみろ」

ダークフィールドの罠

ゾフィースィド

スラン星人の襲撃から数日が経ち、またこういうことが起きるのではないかと心配した姉妹達により、一人で外に出させてくれなくなりました(泣)。そして、現在、私はレオとアストラと共にパトロールをしている。

今回の目的地は、惑星ゴママルだ。

「惑星ゴママル付近異常がありませんね。」

「ああそうだな。だけどウーマン達もひどいよ。一人で出たらダメって……子どもじゃないんだからさ」

「……子どもじゃないなら無茶をしないでください」

二人にそう反論され、私は顔を背けてしまう。とりあえず別の場所に行こうとしたとき、攻撃が放たれたので回避すると、ゴドラ星人が立っていた。

「外したか!」

「お前はゴドラ星人!!」

「今の攻撃はゾフィー兄さんが狙いか!!」

「いかにも!ゴドラ星人ゴル様だ!!」

「貴様はあのスラン星人の仲間か!」

「ああそのとおりだ!そして私は貴様たちを倒す為にある装置を開発した!それ、ポチツとな。」

奴がスイツチを押すと、突然周りの風景が変わり、殺風景な場所に変わる。これは以前も感じたことがあるが……ベリアルさん、まさかここは……

『ああ間違いないダークフィールドだな。まさか奴らがダークフィールドを発生させるとは』

「はっはっはっは!驚いたか!さらにいでよ!キングシルバゴン!キングゴルドラス!」

現れたのは、このM78ワールドとは別の宇宙:ネオフロンティアスペースに棲む剛力怪獣シルバゴンと超力怪獣ゴルドラスを、地獄星

人スーパーヒットポルト星人が強化改造したキングシルバゴンとキングゴルドラスであった。

私たちは構えるが、ダークフィールドの影響か力が入ってこない。

「ゾファイー兄さんはゴドラ星人を！行くぞ、アストラ！」

「はい、レオ姉さん！」

走り出した二人に怪獣を任せ、私はゴドラ星人と戦う。ダークフィールドの中だから時間をかけるわけにはいかない!!

ゾファイーside終了

ダークフィールドで交戦するゾファイー達——レオはキングシルバゴンに攻撃をしているが、彼女が放った蹴りをキングシルバゴンは腕で防いでから逆に頭突きをお見舞いさせて吹き飛ばす。

「ぐ!!」

アストラはキングゴルドラスの頭部をつかんで投げ飛ばそうとしたが逆に投げ飛ばされてしまう。

「あう!!まさか逆に投げ飛ばされるなんて……いたたた……」

「このフィールドの中では私達は不利な状況のようだ」

一方でゴドラ星人と戦うゾファイー——ゴドラ星人はゴドラガンをゾファイーに放ってきた。彼は躲して、ゼット光線の構えからゾファイースラッシュを放つが、ゴドラ星人は躲して蹴りを入れてきた。

ゾファイーは蹴りを受けて後ろの方へと退がると、スペシウム光線を放つがゴドラ星人はそれを両手でガードをする。

「無駄だ無駄だ!!このダークフィールドの中では私達は無敵なのだ!!」

ゴドラ星人は両手からビームを放ちゾファイーを吹き飛ばす。

(なんて力だ……:ダークフィールドの影響かもしれないが……:彼らの戦闘力が上がっている。このままではやられてしまう。だが……:この戦況を突破するには闇の力を使うしかない。だが……:)

ゾファイーは前の方を見ている。それはキングシルバゴン、キングゴルドラスと交戦しているレオ姉妹だ。

ヒカリやトレギア、ウルトラの父とウルトラの母以外には、ベリア

ルが中で生きていることを伝えていないのだ。

だからこそ闇の力を使わないようにしていたが……このままではやられてしまう。

(ベリアルさん、力をお借りします！)

(かまわないが、それは私が生きていっていると云っているようなもの难道？)

(ですが、この状況を突破できる方法はそれしかありません!!)

(……わかった！)

「きやああああああ!!」

キングシルバゴンとキングゴルドラスの攻撃を受けて、レオ姉妹は吹き飛ばされ、カラータイマーが点滅を始める。

「はっはっはっは！まずは貴様達だ!!」

ゴドラ星人は止めを刺そうとしたときに三日月型の攻撃が命中する。

「どあ!？」

キングシルバゴンもキングゴルドラスも動揺する中、接近したゾフィーが闇エネルギーを纏った蹴りで、改造怪獣達を吹っ飛ばす。

「ぞ、ゾフィー……兄さん？」

「その力は!？」

「レオ、アストラ、お前達はそこで休んでいるんだ、いいね？」

「……」

二人はゾフィーから放たれる力を見て目を見開いている。彼が放たれる闇のエネルギー……その力を彼女たちは知っている。

「ベリアル……」

「ば、馬鹿な!!ゾフィーが闇の力を使えるなどデータになかったぞ!？」

「……とう!？」

ゾフィーは飛び上がり、ウルトラキックをキングゴルドラスに命中させると、キングシルバゴンはゾフィーに攻撃をしようとしたが、先にゾフィーが胴体に蹴りを入れてダメージを与える。そして、そのまま光エネルギーと闇エネルギーを両手に集めて十字に組む。

「ゼットシウム光線!!」

放たれたゼットシウム光線がキングシルバゴンとキングゴルドラスに命中して爆散する。ゴドラ星人ゴルはゾファイの力に恐怖を感じて逃げだそうとしたが、すぐゾファイに阻まれた。

「さて話してもらおうぞ。私の命を狙う者……その構成員について色々とな」

「は、話します！だから命だけは!!」

「命はとらない。話してくれば悪いようにはしない」

ゴドラ星人は全部話した。ババルウ星人を筆頭に集められてチブル星人、ザラブ星人、自分、スラン星人の五人で誰がゾファイを倒せるのかを競い合っていたことを……

「そうか、ならこのフィールドを解除してもらおうか？」

「は、はい!!」

ゴルがスイツチを切ると、ダークフィールドが消滅する。ゾファイは彼を解放したが突然光線が放たれてゴルに命中をする。

「ぎゃああああああああ!!」

「!!」

彼は振り返るとババルウ星人が立っていた。

「お前が……」

「はじめまして……と言っておこう宇宙警備隊長ゾファイ、私はかつて貴様に倒された星間連合リーダーの弟さ。」

「弟だ?!」

「今日は裏切り者を静粛しに来ただけだ。次は必ずお前の命をもらおうぞ」

そういつてババルウ星人は消える。しかし、レオとアストラはそれ以上に聞きたいことがあった。

「……」

「兄さん、どうしてあなたからベリアルの方が……」

「そうです！ベリアルは消滅したはずじゃないんですか!!」

「……それも含めて全てを話そう。レオ、帰ったらウルトラ姉妹、ドリュウたちを呼んでくれ……」

「わかっています。兄さん……あなたが優しいゾファイ兄さんな

のはわかっていきます。ですが……」

「大丈夫さ」

こうして三人は光の国へと帰還するのであった。

ゾファイーの話

ここは、光の国にある宇宙警備隊隊長室——隊長であるゾファイーは椅子に座っており、部屋には大隊長であるケン、マリー、ベル、トレギアを始め、ウルトラ兄妹にゴライアン、フレア、ドリユウ、カラレス、サージ、さらに光の国へ帰ってきていたゼロ、ジード、タイガ、タイタス、フーマ、それからアキレス、ネオス、21、グレート、パウード、スコット、チャック、ベスなど有名なウルトラ戦士達が集結している。勿論、ニュージエネレーションやウルトラ10勇士のメンバーもだ。ゾファイーもまさかここまで集まるとは思ってもいなかったのに驚いてしまう。

「ケンさん、ベルさん、マリーさん……私は正直言ってここまで集まるとは思ってもおりませんでした。隊長室が狭く感じます」
「仕方があるまい。お前に関する大事なことだからな。ネクサスに頼んで、ウルトラウーマン達を呼んでもらったのだ」

「さて、ゾファイー、正直に話せ……今、お前から闇のエネルギーを感じる。しかもこの力は……」

「ベリアル之力、ですよ？でも、どうしてゾファイーお兄ちゃんからベリアル之力が？」

「……それはベリアルさんが私の体の中にいるからだ」

「!!」

「ど、どういうことですか!?ゾファイー兄さん!!」

「そうだよ！ベリアルはあの時ゾファイー兄さんが倒したつて!!」
「……」

全員が驚いている。かつて光の国を壊滅に追い込んだあのベリアルが、ゾファイーの精神内で生存しているなんて驚くのも無理はない、知っていたヒカリ達以外は。

「ヒカリ、なんで冷静にいられるの?」

「メビウス、私は知っていたんだ、ゾファイーの中にベリアルがいることは……」

「え!?!」

「ヒカリ達を責めないでくれ、私が口止めを頼んだんだ」

「わかっているの!? あいつが何をしたのか!!」

「もちろんわかっている・・・お前たちが言いたいことも、な」
「だったら「だとしてもだ!」!!」

「私は・・・ベリアルさんを二度も喪いたくなかったんだ」

ゾフィーは立ちあがり、光の国を見渡す。

「私の戦い方を、そして生き方を教えてくれたのは、もう一人のベリアルさんでもあるんだ。それに彼女は私の中で過ごしている以上何もすることはできない。私自身も闇のエネルギーを普段から抑えているからね」

「・・・ゾフィー隊長・・・」

「皆に隠してしまったことも含めて、本当にすまない・・・」
「だけど君達は絶対に許せないと思ったからね。それで隠してしまっただよ・・・」

するとウーマンは前に歩いていき、そのまま彼の胸ぐらをつかむ。

「ふざけるんじゃないわよ!! そんなんで私達があんたを軽蔑をすると思っていたの!! そんなことするわけじゃないじゃない!!」

「う、ウーマン・・・!!」

「ここにいる皆はね! あんたに助けてもらったメンバーばかりよ!! あんたに助けてもらって・・・誰よりも優しいあんたを・・・軽蔑できる奴なんてここにはいないわよ!! 例え闇の力を持っていてもね。あんたはあたしたちの一番上に立つ長男! 宇宙警備隊長ゾフィー!! それがあんたでしょうが!!」

「・・・」

「あたしが一番怒っているのはね! 私達が頼られていないじゃないかと思うぐらいにね!!」

「そのとおりだ! ゾフィー!」

「私達はゾフィーお兄ちゃんに助けてもらってばかりです!!」

「そうですよ! ゾフィーお兄さんがいなかったら私は地球を守れなかった!!」

「そうだよゾフィーお兄さん!!」

「兄さん!!」

「隊長!!」

「ゾフィー! あんたがいたからこそあたしたちはいるんだ!」

「そうだ!」

「み、皆……!」

ゾフィーは彼女たちの思いを聞いて、後ろを向く、涙を見せないように……。

(ありがとう、皆……。まさかここまで慕われているとは思って
もいなかった。本当にありがとう……。)

「さて……。終わったようだな。ゾフィー、これまで通り、宇宙
警備隊隊長として頑張ってほしい」

「はい、大隊長!」

「では解散!!」

こうして解散となったが、ウーマンからエイティまでの初期ウルトラ
兄妹は残った。

「おや、どうしたんだい?」

「……。いや、お前は変わらないなと思ったただけだ。レオから話
を聞いたときは驚いたが……」

「うん、ホントに水臭いよね」

「ジャック、それに関してはすまない」

『全く、あんたは甘いわね……』

ゾフィーの中からベリアルが現れ、彼の頭の上に乗つかると、ゾ
フィーは苦笑いをする。

「うわ、本当にいた!」

「これお祓いしたらどうなりますかね?」「コラ! 私はアクマニヤ星
人じゃないんだぞ?」

レオの言葉に全員がベリアルを見ていたが、彼女は飽きたのかすぐ
にゾフィーの中に戻っていく。

「つてことはこれまで以上にゾフィーが狙われることは確実ね」

「そうですね……!」

「暗黒宇宙の支配者がその事実を黙っておくはずがないですからね。」

ゾフィー兄さんの闇エネルギーを悪用しようとする者達がすぐに……」

「これまで以上油断ができないぞ、ゾフィーよ」

「わかっているさ……」

襲い掛かるロボット

ザラブ星人ザラセルは両手を組んで考えていた。ゴドラ星人ゴルヤスラン星人ターボスが倒されて、残りは自分とチブル星人エクセルの二人だけになってしまったからだ。

だがこのままでは、今度は自分が静粛されてしまうと焦った彼は、とある宇宙人と協力してゾフィーを倒す為に出撃する。

一方でゾフィーはゼロやジードと共にパトロールをしていた。

「ふむこの辺は異常がないな?」

「……なあ、隊長?」

「なんだい?」

「いつからベリアルがいたんだ?」

「ウルトラクリニックで私が倒れた時があっただろう?その時からずっと中にいたんだ……だから時々闇の力を使って戦っていたんだよ、極力抑えながら、ね」

「そうだったんですね」

三人は話しながら、パトロールを続けようとした時、光線が放たれる。三人は回避して、光線の方向を見やると、攻撃してきた四体の小型ロボットが合体して、とある宇宙ロボットの形をとった。

「キングジョー!?!」

「ペダン星人のロボットがどうして?!」

さらに別方向から光線が放たれたので、そちらも見やると、ニセウルトラ姉妹まで現れた。ゾフィーはすぐさま構えて、指示を出す。

「ジードはキングジョーを、ゼロと私で偽者達を倒す!!」

「おうよ!!」

「はい!!」

ジードにキングジョーを任せて、ゼロと共にウーマンからエースの偽の姉妹を倒す為に向かっていく。

「へアー!」

ニセウルトラウーマンは八つ裂き光輪を放ってきたが、ゾフィーはゾフィースラッシュを使い相殺をする。すると、ニセジャックが流星

キックを放ってきた。

だがそれをクロスガードで防ぐ。一方でゼロはニセセブンやニセエースと交戦を始めた。

「デュワー！」

ニセセブンはエメリウム光線を放ったが、ゼロは躲す。後ろからニセエースが掴みかかろうとしたので、ゼロは胴体に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「ウルトラウーマンジード！ソリッドバーニング！」

ソリッドバーニングになったジードはキングジョーを殴った。パワーが上がったおかげで、キングジョーを押すことに成功したようだ。キングジョーは後ろの方へと退がり、光線を放ってきた。

ジードは躲すと、ジードスラッガーを放ち、キングジョーのボディに当てていく。さらに接近をしてジードクローを二回押す。

「コーンスクリュージャミング!!」

炎を纏った回転突撃で、キングジョーのボディを削っていく。そのまま貫通すると、キングジョーは直立し、後ろに倒れて爆発した。

「ゼロ！」

「おう！ストロングコロナゼロ!!」

ゼロもストロングコロナゼロ形態へと変わり、ニセエースを殴っていく。ゾフィーもニセウーマンにチョップを叩きつけて、そのまま投げるとM87光線でニセウーマンを撃破する。

「ガルネイドバスター!!」

放たれたガルネイドバスターがニセエースに当たり爆散をする。ニセジャックはウルトラランスを、ニセセブンはアイスラッガーを構えると、ゼロは光りだす。

「ルナミラクルゼロ……！」

「ふん！」

ゾフィーもウルトラブレスレットを変形させたウルトラランスを構えてニセジャックが放つウルトラランスをはじかせていく。

「確かにジャックと同じようだが……所詮は偽者！ジャックのような切れ味はない!!はああああああああ!!」

そのままウルトラランスをはじかせるとゾフィーはゼロの方を見る。

「ゼロ!!」

「おう!!」

そのまま二人は突撃して、偽のジャックとセブンの頭をぶつける。二体はコンピューターにエラーが発生して動くことができなくなつた。

ゼロは元の姿に戻り、ゾフィーと共に構える。

「ワイドゼロショット!」

「ワイドショット!」

ダブルワイドショットを放ちニセセブんとニセジャックを撃破する。合流したジードは彼女はロイヤルメガマスターの姿になり構える。

「バルカンスパークル!」

放たれた無数の光の矢が飛んで行った方向から宇宙人が現れる。

「おのれえええええええ!!」

「てめえはザラブ!!」

「そうか、ペダン星人やサロメ星人と共に攻撃をしてきたのはお前だな?」

「そのとおりだ!!だが失敗に終わった以上!俺はいずれ殺される!!ならばうおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ザラブ星人が突撃をしてくるのを見てジードが前に立ち何かの力プセルをセットをする。

『ブラザーズアタック!』

すると6兄妹たちの幻影が現れてそれぞれの必殺技を構えて放つた。

「どああああああああああ!!」

ザラブ星人は攻撃を受けて、後ろの方へと吹き飛ばされる。そして、自分の体内に内蔵していた爆弾が起動して爆散した。

「いつのまにそんなカプセルを?」

「ヒカリさんがブラザーズシールドのデータをベースに今度は攻撃を

するためのカプセルを作ってくれたんです!!」

(まあトレギアもいるのだから改良をしてもおかしくないか……：確かゴドラ星人が言っていたメンバーで残っているのはババルウ星人とチブル星人だけだな？だがあのババルウ星人がどれぐらいの實力を持っているのか私にはわからない。いずれにしても奴が私を狙っている以上……：何かの対策を考えとかないといけないな。それともあの技を使うか？かつて私に教えてくれたレッドウォーリアーの技を……：)

一方でババルウ星人はザラブ星人が倒されたのを聞いて立ち上がる。

「ぼ、ボス?」

「エクセルよ。これをゾファイに渡せ、いいな?」

「はは!!!」

ゾフィー対ババルウ星人

宇宙空間——ゾフィーは一人で飛んでいた。それは今から30分前に宇宙警備隊へ届いたメツセージから始まる。

隊長室で集まったウルトラ兄妹たち、そして、トレギアは爆発物なのか確認をしていた。

「これには爆発反応は確認できませんでした。」

「爆弾じゃないのなら一体……?」

全員が見守る中、トレギアがゆっくりと蓋を開けると、中からスイッチの付いた何かの機械が出てきた。意を決して、スイッチを押すと、ババルウ星人のホログラムが現れる。

「「ババルウ星人!?!」」

『これを見ているってことはどうやら宇宙警備隊に届いたようだね? 宇宙警備隊長ゾフィー、この私と一対一で正々堂々と戦おうじゃないか、場所は惑星アスカリアだ。ぜひ一人で来てほしい。では、待っているよ……』

メツセージが終わった。

「明らかにこれは罠よ?」

「そうだな。奴が一人で戦うなどありえんからな」

「…………いや、奴に乗せられたことにして、一人で向かおうと思う」

「ゾフィー兄さん!?!それは無謀です!!もしこれが罠だったらどうするんですか!?!」

「心配するな、もしものためにカプセル怪獣たちは連れて行くし、いぎとなればベリアルさんの力も頼りにするさ」

ゾフィーは光の国を後にして、ババルウ星人が指定した惑星アスカリアに到着する。

彼は警戒をしながらアスカリアを見渡していると、光弾が飛んできたので、ゾフィーバリアーを張り、ガードをする。

「待っていたよゾフィー……………!」

「ババルウ星人!」

「貴様をこの手で倒すのをどれだけ待っていたか。今こそ兄の仇をとらせてもらう!!」

ババルウステイックを構えたババルウ星人はゾフィーに襲い掛かってきた。彼は冷静にババルウステイックの攻撃を躲して、後ろの方へと退がり、構える。

「ウルトラショット!」

「ふん!!」

ウルトラショットをババルウステイックでガードした後、左手から光弾を連続で放つが、ゾフィーはそれをウルトラスパインで凌いだ。そして、そのまま飛びあがり蹴りこむ。

「ウルトラスパインキック!!」

放ったスパインキックがババルウステイックごとババルウ星人を吹き飛ばす。そして、ババルウ星人は起き上がり変身した。

ウルトラウーマンギンガの姿になった後、ギンガサンダーボルトを放ってきた。

「ぐううううううううう!!」

さらに接近をして、今度はウルトラウーマンビクトリーの姿に変わる。右手をEXレッドキングナックルに変えて、ゾフィーを殴りつけてきた。

ゾフィーはその攻撃を両手でガードする。

(やはり私達のデータは収集済みか……!!)

さらに光りだして、ウルトラウーマンエックスの姿に変わり、アタッカーXを放った。ゾフィーは躲すと構える。

「スペシウム光線!」

スペシウム光線がババルウ星人に当たると、相手はウルトラウーマンオーブに変身をして、オーブカリバーを振りまわした。ゾフィーは受け止めると、オーブカリバーを奪い、反撃する。今度はババルウ星人が動揺する番だった。

「な!?!」

「確かに貴様の擬態は完璧だ!だが暗黒宇宙に身を置きすぎたな……光の力はこう使うのだ!!ウルトラスパーク!!」

「ぐあ!!」

ゾフィーが全身を光らせると、元のババルウ星人に戻る。オーブカリバーはそのままでだったのでエレメントを選択をしてマークを光らせる。

「オーブウインドカリバー!!」

オーブカリバーを回転させて刀身から強力な竜巻が発生させると、ババルウ星人を吹き飛ばす。

「おのれ!!」

ゾフィーはオーブカリバーを地面に刺すと構える。

「受けるがいい!!ババルウ星人よ!!これが私のM87光線だ!!」

放たれたM87光線がババルウ星人に向かって放たれる。

「ならば!!」

彼も姿を変えてゾフィーの姿になりM87光線を放つ。お互いのM87光線が激突をしてババルウ星人の変身をしたM87光線が押ししていた。

「はっはっはっはっは!!」

「……………ババルウ星人よ。お前は何か勘違いをしているな?」

「何?」

「私のM87光線はたやすく真似ができるほど甘くはない。この技を使うために私は鍛え続けてきた!かつて私に教えてくれたウォリアンのためにも!貴様のような偽者に負けるわけにはいかないのだ!!うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

気合が込められたM87光線がニセゾフィーが放つM87光線を押し返した。

「ば、馬鹿な!!ぐあああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ババルウ星人はM87光線を受けて爆発する。ゾフィー本人はM87光線の構えを解いた。そして、一応ゾフィーアイで透視をしたが、伏兵が隠れている気配もなかった。ホツとして座ると、ベリアルが彼の肩に乗る。

『良くやったわねゾフィー、流石私の義息子だ。』

「ありがとうございます、ベリアルさん。ですがやはり彼自身も兄と同じく闇で生きていたのかと考えますと……」

『だが奴はお前の命を狙った。それだけでも許されないことだ。』

「……」

ゾフィーはそうなのだろうかと思いついて待っているとゼロが駆け寄った。

「大丈夫か、隊長？」

「……」

「隊長？」

「光と闇、共に生きることなどできないものなのだろうか……時々戦いながら考えることがある。」

「……」

ゼロはゾフィーの言葉に何も答えることができなかった。かつて自身もベリアルにとらわれてゼロダークネスになりウルティメイトフォースゼロのメンバーを殺してしまったことがある。

「すまないねゼロ、独り言だから気にしないでくれ。」

「あ、ああ……」

「さて帰るとしよう。ほかのみんなも心配をしているからね」

ゾフィーとゼロは共に飛びたち、光の国へと帰還するのであった。

ゾフィーの治療

ババルウ星人との戦いを終えて光の国へと帰還をしたゾフィーはウルトラクリニックへと来ていた。

彼は負った傷を治すためにやってきたのだ。

「話は聞いていますよ、ゾフィー。ババルウ星人の弟を倒す為に、かなり無茶をしたのですね……」

「はいマリーさん、それで治療の方をお願いをしたくて……」
「わかっていますよ。これから治療を行いますので寝てくださいね」
「はい」

言われた通りに、治療カプセルの中に横たわると、彼の目から光が消えた。

カプセル内のゾフィーに向かって、マリーはマザーシャワーを放ち、ゾフィーの体とエネルギーを回復させる。それから数分後、急な勢いで扉が開かれる。タロウが駆けつけたようだ。

「母さん!!ゾフィー兄さんは!?!」

「落ち着きなさい、タロウ。今は安静に眠っています」

「良かった……ゾフィー兄さんが無事で……」

「こら、タロウ!母さん、すみません」

「いいですよ、エース……ほかのみんなも来ているのでしょ?出て来ても良いですよ」

マリーに言われて、エースの後ろからウーマン達が現れた。ジャックはマリーに尋ねる?。

「母さん、ゾフィーお兄ちゃんは?」

「今はぐっすりと眠っています。あの戦い以前からの疲れもあったのでしょうね。今は、ケンとベルにゾフィーの仕事をお願いをしています」

「本当、こいつだけは……」

「ああ我々にも頼らずに……」

ウーマンとセブンはため息を吐く中、レオは、眠っているゾフィーを見つめるエイティに声をかける。

「……ゾフィー兄さんはずっと戦っていたんだな」

「そうですね……でも、それはそれで悲しいです」

彼女達の会話に、全員が首を縦に振る。するとゾフィーの目が光を取り戻し、起き上がった。

「……どうしたの、みんな、揃って？」

「どうしたのって、あんたが入院したからでしょうが……全く一人でババルウ星人と戦うなんて……それに、なんでオーブカリバーを持っているのよ？」

ウーマンの指摘にほぼ全員がオーブカリバーの存在に気づく、件の剣はタロウが手持ち無沙汰に持ち振りまわしていたが。

「ババルウ星人がオーブに変身した時に奪ったのが残ってたね。そのまま持ち帰ったんだよ」

「「持ち帰ったって……」」

全員が苦笑いする中、ゾフィーは立ちあがり、オーブカリバーを背負う。そして、隊長室に戻ったゾフィーは、ケンとベルからの引き継ぎをうけた後、椅子の近くにオーブカリバーを置いて、仕事を開始する。

「……」

その直後、扉が開いて、トレギアが入ってきた。

「隊長……ご無事で何よりです」

「君にも心配をかけてしまったね。ババルウ星人はこの通り倒してきた……」

「……そのようですね。でも、聞きましたよ、隊長も何かお悩みの方ですね……」

「……まあね。以前のババルウ星人と同じように彼の弟も闇の世界から救えなかったと思うとね。私のようにベリアルさんの力を使う闇の戦士……みたいな存在だったよ。まさに『光があるところに闇がある。また、闇があるからこそ光もあるのだ』……まっ、これはケンさんの受け売りだけだね」

「私が光の国を出ていた時の話ですね」

「ああ、まさに真理だと思っているよ。エンペラ星人は光に還ったけ

ど、奴の怨念は未だに宇宙各地で生き続けている……」

「そういえば気になったことがあるのですが……」

「なんだい？」

「ニュージエネレーションとはどのようなものですか？」

「ニュージエネレーションたちとかい？ そうだね……少しだけ昔話をしようかな？ つとその前に……」

ふと彼が立ちあがり、扉の方へと向かい、足を出すと、扉が開いてウーマン達が倒れる。

「「「うわ!!」」」

「皆、気になってるなら入ってくればいいのに（笑）」

「仕方がないじゃない」

「そうそう入りづらかったんですよ」

「あはははは……」

ウルトラウーマンギンガとの出会い

ゾフィー side

あれは忘れもしない……ダークルギエルによって我々がスパークドールズにされてしまった後、なぜか意識だけは残っていた私は宇宙をさまよっていたんだ。

「それは私もだったよ、ゾフィー兄さん」

ああ、そうだったね……やがて地球に落下したタロウと私は、他のスパークドールズを探そうとしたが、人形のため動くことができずに困っていた。テレポーターションかウルトラ念力を使うぐらいはできなかったんだよね。

その時に現れたのが彼女だったんだ。

「ウルトラウーマンギンガ……礼堂 ヒカリでしたね」

ああ、そうだ。彼女がギンガスパークに選ばれてウルトラウーマンギンガが顕現した。

「失礼するぜ……って、みんな、何してんだ？」

「ギンガにビクトリー？二人とも光の国へいったい？」

「ああ報告のために来たのだが……ギンガの話か？」

ああそのとおりだ。君達との出会いの話をしていたところだよ。

「あー、あの時か……サンダーダランビア(SD)が襲い掛かってきたから、ゾフィーとタロウにウルトライブしようとしたんだ。だけど、できなくてブラックキング(SD)にライブしたんだよな。いやー、まさかウルトラウーマンになるなんて思ってもいなかったけどさ」

そのとおりだよ。そのうち、バルキー星人(SD)やティガダーク(SD)も現れたんだよね。

「そうそう、その後にイカルス星人(SD)やナツクル星人グレイも……」

「あのナツクル星人が!？」

ああしかもおかまだったよ……初めて見たよ、おかまのナツクル星人なんて……だがそれで終わらなかつたんだよね。ダークルギエルの復活……ギンガとジャンナインも敗れてしまい、

「私達は何もできないのか」……と悔しがったよ。だがケンさんやマリーさん、そして多くの人たちの言葉で私達は最後の希望だと気づいたんだ。

あきらめなかった人たちの思いがギンガライトスパークの力で私とタロウは超巨大化をしたんだよね。

「ああ、あの時は驚いたぜ。」

ゾファイ側終了

ギンガside

アタシ達はダークルギエルの攻撃で瀕死になってしまった。そこにルギエルに負けないぐらいの大きさになったゾファイとタロウが現れたんだ

「ゾファイ!? タロウ!？」

「馬鹿な……お前たちは人形（スパークドール）になっていたはず!!」

「彼らの諦めない心が、私たちを再び元の姿に戻してくれた。行くぞ、タロウ!!」

「はいゾファイ兄さん!! たああああああ!!」

「シユワ!!」

二人は立ち向かっていき、ルギエルと互角以上の戦いを繰り広げていた。

「シユワ!」

「おのれ!!」

「であああああああああ!!」

「は!!」

アタシも立ちあがりたいたい………だけどエネルギーが無え。

「ゾファイ兄さん! 今のうちに!!」

「また人形になるがいい!!」

「ストリウム光線!!」

ゾファイが私に近づいてカラータイマーから光を照射して、アタシにエネルギーを与えてくれた。

「ギンガ……君は未来から来たんだね。そしてヒカリちゃんを

選んだ……」

「ぞ、ゾフィー兄さん！ごめん耐えきれない！」

「ギンガ……後を君に託すぞ!!」

二人はダークルギエルの攻撃を受けて再び人形に戻ってしまっただけど、アタシは、アタシとギンガは立ちあがる事ができた。

「何!？」

「あんたなんか……あんたなんかアタシらの未来を止めさせてたまるかああああああああああああ!!」

超巨大化したアタシは、ギンガスパークランスを構えて奴と激突し、月まで翔んだ!

「とめてやる!全ての命を!全ての時間を!」

「止まるのはあんたのその歪んだ野望だよ!!」

お互いの武器が吹き飛んでも、アタシは奴と殴り合う。そして、一気に決めるために構えた。

「これで終わらせる!!ギンガエスペシャリー!」

「ふん!!」

ダークルギエルが同じ技を放ってきた!だけどアタシはゾフィーとタロウからもらった光エネルギーを全開にして奴を倒した。

そしてギンガはほかのスパークドールズと共に宇宙へと帰っていく、タロウとゾフィーも……。

「そして、今度は私の時になるわけか」

「そそー!ショウコが変身したビクトリー!!アタシもギンガスパークに願ったらギンガがまた来てくれて、融合して今に至るわけ!!そしてタロウとゾフィーがくれたストリウムブレスの力でアタシはギンガストリウムになって復活したルギエルを倒したんだ!!」

ギンガside終了

「そうだったね。しかしルギエルの持っているダークスパークの力は恐ろしかった」

「私とセブンも闇に染まった姿で顕現したんだっけ?」

「ああその話を聞いて私も驚いているよ」

「ホント苦戦したよ……ボロボロにされたもんね」

「姉さん達があんな姿になるなんて私もびっくりしたよ」

「……もし私がダーク化したらゾフィーダーク？……ってこと？」

「ゾフィー兄さんのダーク化……あまり想像ができませんね」

レオの意見に、全員が首を縦に振ったのでゾフィーは（・ω・）と落ち込むのであった。

ウルトラウーマンビクトリーとの出会い

ゾフィースide

次はビクトリーとの出会いを話そうかな？彼女との出会いは、あのエタルガーとの戦いの時だね。

「私やマックス達が捕らわれてしまったときですネ？」

ああ、そのとおりだ。エタルガーがみんなを捕らえたと聞いて、私はゼロと共に調査を始めたんだ……。

「くそ！一体何者なんだ!?!」

「落ち着くんだ、ゼロ。しかし、メビウスやマックスとの連絡も途絶えるなんて……。」

「あれは!」

私達が前を向くと、そこには時空城が在った。私はゼロと共に時空を超えて追いかけたんだ。コスモスペースの惑星ジュランでコスモスが捕らわれた時には、間にあわなかった……。

「そうだったのか……突然『ゼロと共に次元を超える』というウルトラサインを見た時は驚いてしまったぞ」

すまないね、セブン……そして、ギンガ達の宇宙で、遂に私達はエタルガーを見つけた。丁度その時にビクトリーとギンガが倒れたのを見て、私とゼロは奴の前に降りたつたんだ。

ゾフィースide終了

地上でヒカリとシヨウコがやられそうとなったとき、上空からウルティメイトゼロがウルトラゼロキックを放った。エタルガーは両手でガードをする。

さらに光線が放たれて、エタルガーは後退する。

「追いついたぞ！エタルガー!」

「宇宙警備隊長ゾフィーにウルトラウーマンゼロ、まさかここまで追ってくるとはね!」

「さっさとコスモスたちを返しやがれ!」

「返すとも思いますか?」

「ならば実力で返すのみ!!シユワ!」

ゾフィーとウルティメイトゼロは接近してエタルガーと交戦する。エタルガーが放つ攻撃をゾフィーが受け止めるとウルティメイトゼロがウルティメイドソードを振るい攻撃をする。

「であ!!」

エタルガーが放つ光弾をゾフィーはウルトラショットで相殺する。

「今だ、ゼロ!!」

「くらいやがれ!ファイナルウルティメイトゼロ!!」

ゼロが放ったファイナルウルティメイトゼロが命中した時、ゾフィーは思った、「やったか!」と。しかし、纏っていた仮面と羽衣が燃えただけでダメージはそこまで応えていない様子だった。

「何!?!」

「嘘だろ!!」

「流石だな……俺も正直に言つてやられると思つたよ。であ!!」
「ぐ!!」

時空城のほうへと撤退したのを見てから、ゾフィーは人間態となり二人に挨拶をする。

「この姿では、初めまして、だね? 私はゾフィーだよ……久しぶりだね、ヒカリちゃん」

「ああ、ゾフィー、助かったぜ……あいつは一体……」
「奴は時空魔人エタルガー……ティガを始めウルトラウーマン達を破った敵対存在でもある。私とゼロは奴を追つてこの時空へとやってきたんだ」

そこからゼロがウルトラフュージョンブレスを授けたのはいいが、それを使うには二人の息を合わせる必要があるため、特訓が行われた。二人の手に手錠をかけるまではいい……そこからは、ゾフィーは見ていて頭を抱えた。

なにせゼロは巨体のまま二人に巨石を落としまくつたのだから……セブンからレオへ、レオからゼロへと受け継がれた鬼特訓に対して、彼はヒカリ達が「死なないうよう」に見守ることにした。

(いずれにしても彼女たちの協力を得ないとほかのウルトラ戦士たちを助けることができない。しかし……まさか自分がエタルガー

と戦うために時空を超えろとはな……前世ではありえないことだよ)

彼がそう考えているうちに、二人の息があつていき、作戦が開始された。ゾフィーは囷となり、ほかのメンバーがティガ達を助ける作戦だ。

「お前にはこいつがお似合いだぞ!!」

彼の前にエタルダミーとして現れたのは……

「……………そういうことか。あなたが相手ですか……………ベリアルさん!!」

ウルトラウーマンベリアルだった。ベリアル(エタルダミー)はベリアルリッパをゾフィーに放つが、彼はクロスガードで防御した後、飛びあがつてウルトラキックを放つ。渾身の蹴りをベリアル(エタルダミー)に両手で防がれ、彼は着地するとほかのウルトラウーマン達が飛んできた。

「ゾフィー兄さん!」

「ゾフィー隊長!」

「メビウス! マックス! 良かった、無事みたいだな! そして、君は……ウルトラウーマンギンガビクトリーか……………」

「あれってベリアル!？」

「私の恐怖……………そのものだよ」

ゾフィーは苦笑しながら、全員に先へ行くように指示を出す。ベリアル(エタルダミー)も飛びあがり四階層の方へと向かった。

さらにエタルガーはファイブキングを召還したので、ゾフィーが構えようとした時、ティガ&ダイナ&ガイアが前に立つ。

「ここはあたしたちに任せなつて!!」

「あなたたちは上の方へと急いでください!!」

「ティガ、ダイナ、ガイア……………すまない!!」

三人にファイブキングを任せて飛びあがる。

「さーて、いっちょやりますか!」

「合体怪獣とは興味深い……………」

「行きましょう!」

「おう！」

「はい！」

三人はファイブキングを相手にするために突撃をする。一方で時空城をのぼるゾフィー達、彼らは一階層へと到着すると現れたのはダークザギだった。

「光は絆．．．．誰かへ受け継がれて再び輝く．．．．ここは私が引きうける、あなたたちは先へ」

「すまないネクサス！シユワ！！」

次の階層でギガバーサークが現れた時、マックスが立ち向かう。

「地球の未来は、人類が自らの手でつかみ取る！先へ！」

「ああ！！シユワ！！」

ゾフィー達が飛びあがり次の階層へと行こうとしたとき、メビウスとゾフィーが攻撃を受けて墜落する。

「うわー！」

「ぐ！！」

現れたのはエンペラ星人だった。ゼロ達は助けに行こうとしたがゾフィーが止める。

「ここは私たちに任せるんだ！！」

「そして勝ちなさい！！」

「おう！！」

「はい！！」

三人が飛んで行くのを見た後、ゾフィーはエンペラ星人（エタルダミー）を見やる。

「エンペラ星人、ダミーとはいえこの世界でも合間見えることになるとはな．．．．」

「そうですね。あの時はリユウさん達がいきましたけど．．．．今はいません．．．．だけど！燃え上がる不死鳥は何度でも立ちあがる！それがウルトラウーマンなのです！！」

「いくぞ、メビウス！」

「はい、兄さん！！」

ゾフィーとメビウスはエンペラ星人に突撃する。ベリアル（エタル

ダミー）はゼロが、エタルガーはコスモス、ギンガビクトリーが激突する。

一方、地上では、ファイブキング（エタルダミー）の攻撃を躲したティガはスカイタイプへと変わり、スピードで相手を翻弄して構える。

「ランパルド光弾！」

ランパルド光弾が頭部のゴルザ、そして、メルバ部分に当たると、ダイナはストロングタイプに変わり、右手のレイキュバスの鍔を力で引きちぎり撃破する。慌てたファイブキング（エタルダミー）は超コックの部分で攻撃をしようとしたが光弾が飛んできて命中した。

「リキデイター……」

「よっしや!!こっから変わるぜ!!」

「ええ!!」

「おう!!」

ティガはスカイタイプからパワータイプへと変わり、ダイナはストロングタイプからミラクルタイプに、ガイアはスプリーム・ヴァージョンになりファイブキング（エタルダミー）に攻撃を仕掛ける。

「行くよー!デラシウム光流!」

「レボリウムウエーブ!」

「フォトンストリーム!!」

三人が放った光線がファイブキング（エタルダミー）を撃破する。その頃、ダークザギ（エタルダミー）と戦うネクサスはアンフランスからジュネッスに変わりオーバーレイシュトロームを放ちダメージを与える。ダークザギ（エタルダミー）はザギ・ギヤラクシーで攻撃をしてきたが、ネクサスは更にジュネッスブルーへと変わりソード・レイ・シュトロームで暗黒球体を打ち抜き、そして、ノアの姿になる。「これで決める!ライトニングノア!」

放たれた光線が命中してダークザギ（エタルダミー）を撃破する。ギガバーサーク（エタルダミー）と戦うマックスは破壊光弾をマクシウムソードで斬り裂いた。

「こい!マックスギヤラクシー!」

マックスギヤラクシーが右手に装着された後、彼女は構える。

「ギヤラクシーソード!!」

振り下ろされたギヤラクシーソードで斬り裂かれたギガバーサーク(エタルダミー)は爆発する。一方でエンペラ星人(エタルダミー)はダークディザスターを放つ中、二人は回避をすると、メビウスはメビウムブレードを、ゾフィーはウルトラランスを構えてエンペラ星人(エタルダミー)に攻撃をする。

エンペラ星人(エタルダミー)は攻撃をはじかせると、二人にレゾリウム光線を放つ。回避したメビウスはバーニングブレイブに変わり、ゾフィーは構える。

「いくぞ!? 87光線!!」

ゾフィーの必殺技? 87光線がエンペラ星人(エタルダミー)に放たれる。エンペラ星人は両手でガードをして? 87光線を防ぐ。

「最期に言うておく! 決めるのは私じゃないからね!」

「はあああああああ! バーニングメビウムダイナマイト!!」

メビウスが放ったバーニングメビウムダイナマイトがエンペラ星人(エタルダミー)を焼き尽くした。一方でゼロはベリアル(エタルダミー)と戦っていた。

「ストロングコロナゼロ!!」

ストロングコロナゼロへと変わり、ベリアル(エタルダミー)をつかんで投げ飛ばす。

「ウルトラハリケーン!! デア!! ルナミラクルゼロ……」

今度はルナミラクルゼロへと変わり頭部に手を添える。

「ミラクルゼロスラッガー……」

ミラクルゼロスラッガーがベリアル(エタルダミー)を斬り刻んでいき、そのままかかと落としをすると、光りだしてシャイニングウルトラウーマンゼロへと変わる。

「これで決める!! シャイニングワイドゼロショット!!」

一方でゾフィーは上の方を見ていた。

「ゾフィー兄さん、どうしたのですか?」

「いや何か音が……ってうお?」

上から光線が放たれて、どんどんと時空城が堕ちていくのを見て、ゾフィーは「ゼロ達がやったのだな」と思い脱出をする。

そしてエタルガーもギンガビクトリーのウルトラフュージョンシユートで倒されてアレーナも元に戻りゾフィーは彼女を手に乗せている。

「久しぶりだね、アレーナ」

「ゾフィーおじさま……申し訳ありません……その……」
「君のせいじゃない、悪いのは君を利用したエタルガーだ。さて君を元の星に戻さないといけないね。宇宙警備隊も協力をして君の星の復興を手伝うと約束しよう」

「ありがとうございますー！」

こうしてゾフィー達は元の世界へと帰還をするのであった。

「そういえばアレーナもゾフィーの知り合いだったのか？」

「ああ、アナタシアと同じく隊員時代にね……さてそういえば惑星アースラに呼ばれていたのを忘れていたよ。明日はアースラの方へと行かなきゃ」

「……え!?」

全員がゾフィーが惑星アースラの方へと行くと聞いて驚いてしま
う。

ゾフィーとアナタシアとアレーナ

ギンガとビクトリーとの出会いをウルトラ姉妹に話したゾフィーは、次の日に、惑星アースラの方へと向かうために宇宙空間を飛んでいた。

赤い球体にはならず宇宙空間を飛び、惑星アースラへ到着した。ゾフィーは着地をすると人間態へと姿を変えて歩いていく。

「あら？」

「メイド長さん、私です。」

「これはゾフィー様、人間態で来られるなんて珍しいですね？」

「ええ、あの普通の姿ではミクロ化をしているとはいえエネルギーの消耗が激しいのです」

「なるほどなるほど（これは好都合ですね（笑））ではでは姫様がお待ちをしている部屋まで案内しますね？」

メイド長の後に続いてゾフィーは歩きながら庭を見ていた。その時、かつてアナタシアと出会ったときのことをふと思い出す。

（ケンさんと一緒にこの星に来た時に、庭にいたアナタシアと話をしたのが始まりだったな。それから彼女は父君の後を継いでこのアースラの女王として君臨している……本当に立派になったものだよ）

思い返していると、メイド長が止まった。アナタシアはこの部屋にいるようだ。メイド長は扉を叩いて、中に入ったので、ゾフィーも続いて中に入る。そこにはお茶を飲んでいるアナタシアとアレーナの姿があった。

「アレーナ？」

「ぞ、ゾフィー叔父さま!?!」

「あら、アレーナ、ゾフィー叔父さまのことを知っているの？」

「それはこっちの台詞だよ!?!まさかあなたがゾフィー叔父さまと知り合いだなんて思わなかったわ!」

アナタシアはアレーナとそうやりとりを交わしながら、ゾフィーに椅子に座るように勧めてきた。

「それにしてもゾフィー叔父さまが人間態で現れるとは思ってもおりませんでした」

「ええ、惑星アースラは地球とほとんど同じ環境ですからね、ミクロ化してもエネルギーは消耗しますから。それと、アレーナは、久しぶりだね?」

「はい、ゾフィー叔父さま……あの時は本当にご迷惑をおかけしました。」

「いや、あれは君を利用をしようとしたエタルガーが悪いさ」

「エタルガー……私も名前だけは聞いておりましたが……」

「惑星ザントはどうだい、アレーナ?」

「はい、宇宙警備隊の方々が協力をしてくださったおかげで復興することができました」

「それは良かった。報告や噂では聞いていたけど、君から実際話が聞けて何よりだ……それで二人は同盟でも結んでいるのかい?」

「ええ、アナタシアから言ってくれて私も賛成をしまして今に至ります。今日は遊びに来たのですが……まさかゾフィー叔父さまが来るなんて思ってもおりませんでした」

「ああ、今日は彼女に呼ばれていてね?それでアナタシア、私を呼んだ理由は?」

「ふふっ……簡単ですよ、ゾフィー叔父さま」

アナタシアは立ちあがるとゾフィーに近づいてキスをした。それを見てアレーナは顔を真っ赤にする。

「ちよ!?何やっているのよ!!」

「何ってキスだけど?」

「キスってあんた!!」

アレーナは怒りながら言うが、アナタシアは気にせずゾフィーとキスをしていた。

「あら言っていないなかったっけ?私、ゾフィー叔父さまとは肉体関係でもあるんですよ(笑)」

「な!?!」

なぜここで言うんだ?……そう思いながらゾフィーは頭を痛めて

と聞いている。何が起ころうとしているのだ?」

「いずれにしても調査をする必要があるわね」

「そのとおりだ。ゾファイーは惑星アースラに向かっていたな」

「ええ、一応ウルトラサインは送った方がいいかしら?」

「ああ頼む、調査をするウルトラウーマンを派遣しよう」

こうして惑星ベルリズを調査をするためにベル、ゼロ、ジード、セブン、レオ、ザージ、フレア、ゴライアン、そして惑星アースラからゾファイーが向かうことになった。

惑星ベルリズの調査

惑星ベルリズ……文明監視員のデータによると、かつては文明が栄えていたが世界規模の戦争で滅亡したらしい。

だが、その星で謎のマイナスエネルギーが発生しているという情報をキャッチした宇宙警備隊……隊長のゾフィーが先に到着して辺りを警戒しながら歩いていた。

「惑星ベルリズ……なぜここでマイナスエネルギーが？」

『もう一人の私曰く、「謎のダークエネルギーが発生している」みたいね』

「未知のエネルギー……ですか」

彼は惑星ベルリズを見て回った。繁華街だったであろう廃墟に残骸、そして、自然があつたであろう場所などもすでに枯れていた。更に、何かの装置を発見した。何者がこの惑星で企みをしようとしているのか……。

「これが……エネルギーの原因？」

『でも、なぜ装置が？』

「それは貴様を捕まえるための罠だ！宇宙警備隊のゾフィー!!」

「!!」

声が出た方へ振り返ると、謎の黒いウルトラマンが立っていた。前世の記憶でも見たことがない謎の戦士だ！

「お前は……何者だ!!」

「俺は暗黒の戦士ダークファルシオン！」

「ダークファルシオン!？」

「そうだ！貴様を闇の戦士にするためにここで待っていたのさ！」

「私を!？」

「だがまずは……行け！レギオノイド！」

ダークファルシオンの指示でレギオノイドの軍勢が現れた。ゾフィーはファイティングポーズで構えると、レギオノイドαはドリルアームで突撃してきた。

「へア！」

ゾフィーの蹴りがレギオノイドαの胴体に命中して後方へと倒れる。新たに現れたレギオノイドβは両手のガンポッドを構えて発砲するがゾフィーは躲してウルトラショットを放ち撃破する。

α二機がレギオビームを放ってきた。ゾフィーはクロスガードで防ぐと飛びあがり、ゾフィースラッシュを放ち二機を撃破して振り返り構える。

「M87光線！」

M87光線を横に薙ぎ払うようにして放ちレギオノイド達を撃破する。

「流石は宇宙警備隊長ゾフィー、闇の戦士にしたらさらに最強の戦士になるな」

ダークファルシオンは戦っているゾフィーを見ながら笑っていると、突如攻撃が放たれたので回避をする。

「おっと、ほかの奴らも来たか！」

「てめえはいつたい!？」

「俺の名前はダークファルシオン！くらえ！ファルシオンスラッシュャー！」

両手に持っている手裏剣を投げてきたので、ゼロはゼロスラッガーを放ち相殺する。そんな中、ほかのメンバーも到着する。

「ツチ、さらに増援か！」

「皆！」

「ゾフィー兄さん！大丈夫ですか!？」

「なるほどね、奴から闇のエネルギーを感じるわ」

「まさかここまで集まるとはな。まあもう一度名乗っておくか、俺の名前はダークファルシオン！俺の目的はゾフィーを闇の戦士にすることだ!!」

「……はあ？」

「あたしさらに喧嘩をうっているみたいだね？」

「……………」

全員が戦闘態勢をとる中、ファルシオンはレギオノイドの全滅から戦況不利と判断し、背中の翼を開いて空を飛ぶ。

「今日のところは諦めることにするよ！だが、ゾフィーを闇の戦士にする目的は変わらないさ!!」

そういつてファルシオンは飛んで行く。エースとタロウはメタリウム光線とストリウム光線を打とうとしたが、ファルシオンの姿が消えたので構えを解いた。

「……………私を闇の戦士にする……………か」

「ゾフィーを闇の戦士にだあ!?!ふざけたことを言いやがって!!」

「落ち着け、ゴライアン。いずれにしても新たな敵がお前を狙ってきたってことか」

フレアの言葉を聞いて、ゾフィーは両手を組む。しかし、考えていてもしようがない為、惑星ベルリズを後にする。

「……………」

ベルは何かを思いながら光の国へと帰るのであった。

ダークファアルシオン

宇宙警備隊長室——椅子に座るゾフィーを筆頭にウルトラ兄妹たちが集結をしている。現在は、ゾフィーの口からダークファアルシオンの目的などが話されているところである。

「やはり、惑星ベルリズの異変は奴らの布石だったのか……」

「奴はそう言っていた。みんなも聞いた通り、私を闇の戦士に引き入れることが目的だった、ともね」

「ゾフィーお兄ちゃんを闇の戦士に……」

「一体何が目的でゾフィー兄さんを闇の戦士にしようとしているのかわかりません」

「いずれにしてもゾフィー、今度からは一人でパトロールをしないようにね？」

「だが「わかった？」わ、わかりました」

ウーマンに言われては仕方がない。ほどなくして会議が終わり、姉妹達は自分たちの部屋の方へと戻っていった。

それを見計らって、ベリアルは彼の肩に現れる。

「ウーマンの言ってたこと、しっかり守りなよ、ゾフィー……」
「……ベリアルさん、ダークファアルシオンは何のために私を闇の戦士にしようとしているのでしょうか？」

「はつきりとは、わからないね。お前を闇の戦士にして何がしたいのか……」
「光の国を壊滅させるため、か？」

「それでしたら別のウーマンでも良かったのでは？」

「確かにその通りだ。ダークファアルシオン……。一体何が目的なんだ？」

二人はダークファアルシオンの本当の目的が何なのかわからないため、ため息をつくのであった。

場所は変わって、ウルトラコロセウム——筆頭教官を務めるタロウは、生徒たちを教えている最中、ダークファアルシオンの言葉が脳裏をよぎってしまう。

『俺の目的はゾフィーを闇の戦士にすることだ!!』

「……………」

「あの教官？」

「ああごめんね、これはこうで」

「ありがとうございます！」

生徒がお辞儀をして、再びシミュレーションで光線を当てていくのを見守っていたが、ついついたため息をついてしまう。それを見かねたひとりのウーマン戦士が声をかける。

「筆頭教官がため息ついてどうするのよ？」

「……………エース姉さん」

現れたのはウルトラ兄妹の五番目、ウルトラウーマンエースだった。彼女はタロウの隣に座り話を聞くことにした。

「どうしたの、悩み事？」

「……………あの時、ダークファルシオンが言ってたこと、覚えてる」

「……………やっぱ、気にしてたの？」

「私はゾフィー兄さんが闇の戦士になって戦うことになったら……………どうしたらいいのかな？ 私はゾフィー兄さんを撃つなんてできないよ。」

「タロウ……………」

エースも同じ気持ちだった。もしゾフィーが自分たちの前に敵として現れた時に自分たちは戦えるのか？ いや彼女達はそれができない。

それはほかのウーマンたちも同じだったようだ。

「……………ゾフィーが闇の戦士になったら、討てるかか……………」

「私はゾフィーお兄ちゃんと戦うなんてできません！」

「……………私もだ。ウーマン、お前は？」

「……………正直に言えば、私もあいつと戦うなんて、できないわ。でも、もし、あいつが敵として現れたら……………私は……………私はツツ！」

「そんなこと、絶対にさせません！」

「ジャック……………！」

「ダークファルシオンさえ倒せば問題ないんです！」

「だが問題は、奴が他の闇の戦士と同じく神出鬼没だつてことだ」

「そうね、惑星ベルリズの匣に使用をしていた装置、それに未知数の戦闘力などを考えても、うかつに手を出すわけにはいかないわね」

ため息をつきながらもウーマン達は決意を固める。彼を一人にするわけにはいかない。

絶対に彼を闇の戦士にさせないように……！！

銀河をジャンプ！宇宙を走り！次元を割いて！

ゾフィースィド

ダークファルシオンのことも考えて、私はツーマンセルでパトロールをするように言われ、エースと共にパトロールをしている。

「……………」

「エース、少し気を楽ししろ。肩に力が入っているよ？」

「ゾフィー兄さん、あなたは狙われているのですよ！どうしてそう簡単に言うのですか!!私、ゾフィー兄さんが死んだら……………嫌なんです！」

「……………すまん」

エースが涙目になってしまったので、私は謝るしかなかった。そして、パトロールを続けていると突然攻撃が放たれたので、私達は構えると、宇宙船が現れたので声をかける。

「いきなりの攻撃、お前達は何者だ!!」

『くそ！奴らから逃げてきたのに今度は宇宙警備隊か！仕方がない！恐獣を出せ!!』

何!?恐獣だ?!まさか奴らはガロガバラン星人……………まさかこの世界は『流星人間ゾーン』までつながっているのか?!まさか東宝作品とは……………って、前から奴らの恐獣が現れる。

「兄さん！」

「やるぞ、エース！」

「はい!!」

ゾフィースィド終了

パトロールをしていた彼らの前に現れたのは、『流星人間ゾーン』に現れたガロガバラン星人、そして配下の恐獣だった。

「シュー！」

現れた恐獣たちに二人は立ち向かう。

「ウルトラギロチン！」

エースが放ったウルトラギロチンが恐獣たちを次々に斬り裂いて撃破していく。ゾフィーもウルトラランスを投げて恐獣たちを貫通

させて倒していくが、次々に現れる恐獣に二人も流石に苦戦する。
「いったいどれだけ…あう！」

エースを吹き飛ばした恐獣たちは一斉攻撃を放ってきた。ゾフィーは彼女の前に立ちウルトラバリアーを張るが破壊されてダメージを受けてしまう。

「ぐ!!」

「ゾフィー兄さん!!」

二人は恐獣たちは襲い掛かろうとした!!その時!

「流星プロトンビーム!!」

一条の光線が恐獣に命中した。二人が見ると、蹴りを放ち現れたのは、ゾーンファイターだった。

「き、君は……」

「大丈夫ですか?自分はゾーンファイターといいます!」

ゾフィーとエースは、加勢に現れたゾーンファイターと共に、ガロガ軍団に反撃を加える。

「とーう!」

ゾーンは恐獣へ蹴りを入れた後に、エースの方へと投げると、エースはエースブレードで斬り裂いた。

ゾフィーはZ光線を放ちダメージを与えると、ゾーンとエースのダブルキックを放ち恐獣たちを一つにまとめると構える。

「M87光線!」

「メタリウム光線!」

「流星ミサイルマイト!」

三人が放った必殺技が恐獣たちに命中して爆発する。

『おのれ!ゾーンめ!我々の邪魔をしおつて!』

「お前達の思う通りにさせないぞ!」

『覚えているおおおおおおお!!』

円盤はそのまま飛んで行き、改めてゾフィーはゾーンファイターと握手をする。

「ゾーンファイター、君が来てくれなかったら私達はやられていたよ。」

「いえ、元は取り逃がしてしまった自分達の責任です！」

「だけどあいつらはあなたたちが……」

「そうです。ですが奴らはこう言っていました。我々の後ろに大きな闇がついている、と……だから気を付けてください。僕たちはこれから奴らを追いかけます！」

ゾーンファイターは後ろを振り返り飛んで行く。

「ゾーンファイターか……」

「彼に助けられましたね、ゾフィー兄さん。」

「うむ……うぐっ!？」

「ゾフィー兄さん!？」

「……いや、大丈夫さ」

「ごめんなさい……私のせいで。」

「気にするな。それよりもゾーンファイターが言っていたことが気になる。」

「大いなる闇……でしたね？」

「ああそうだ。ガロガバラン星人達の行動を始め、この前のデーモン達の動きなども気になる。」

ゾフィーは両手を組みながら、考える。そして、光の国へ帰ろうとしたときにウルトラサインが上がったのを見えた。

「ウルトラサインです。」

「惑星マカロニアにてSOSが発信。近くにいるウルトラ戦士は急行せよ、か……」

「惑星マカロニアといえば……」

「ああ、だがあそこで何が?行くでしょう。」

ゾフィーとエースは惑星マカロニアに向けて飛んで行く。

惑星マカロニアでの戦い

ガロガバラン星人の襲撃を受けたゾフィーとエースは、その場に駆けつけたゾーンファイターと共に、ガロガ軍団が操る恐獣達を撃破する。

ゾーンファイターと別れた後、ウルトラサインにより、ゾフィーとエースは惑星マカロニアに向かって急行していた。

「兄さん、惑星マカロニアといえば……」

「確か綺麗な自然が多く、アースラに似てる星だと聞いているが……一体何が？」

二人は嫌な予感を抱きながら、惑星マカロニアに到着する。着地した二人が辺りを警戒をしていると攻撃が来たので回避をする。

「あれは!？」

「アブリューティアン!?なぜここに!」

「宇宙警備隊がなぜこのマカロニアに!？」

「貴様達が何をしているのかわからないが、これ以上の行為を許すわけにはいかない!」

「やれ!!」

アブリューティアンの戦士達がゾフィーとエースに襲い掛かってきた。ゾフィーはウルトラキックを放ちアブリューティアンを蹴り飛ばす。

「パンチレーザー!」

エースはパンチレーザーを放ちアブリューティアンにダメージを与える。

「撃て!!」

アブリューティアンの戦士達が反撃に転じようとしたその時に突如光線が放たれる。敵味方を問わず、その場にいた者達が天を見ると、上空からウーマン、セブン、ジャック、タロウが光線を放って着地する。

「無事ですか!!」

「ああ、助かった!」

六人は構えるがアブソリューティアンの戦士たちは目的が達したのか撤退をする。

「こら待てええええええ!!」

「タロウ、深追いはするな!」

ゾフィーの言葉を聞いてタロウは追いかけてやめようとしたが止める。

「ウーマン達が来てくれて助かったよ」

「どういたしまして、念のためにマカロニアに向かって正解だったわね。」

「だが奴らは一体何をしていたのだろうか?」

「わからない……それに気になっていることがある」

「どうしたのですか?」

「ああ、デーモン軍団やガロガ軍団の活動が活発になってきたことも気になっている。奴らの裏にはアブソリューティアン達が関わっているのか?」

「いずれにしても考えることが増えたな。」

「ああそのとおりだ、セブン。何事もなければいいが……」

「何か嫌な予感が?」

「ああかなりのな……何事もなければいいが……」

ゾフィーは両手を組み、懸念する。念のために、惑星マカロニアを調べてみたが、何も異常を感じなかったため、ゾフィー達はマカロニアを後にして光の国へと帰還をする。

Zoofy's side

光の国へと帰った私は、宇宙警備隊長室の椅子で秘書のトレギアからもらった書類をチェックをしていた。しかし、また闇の勢力の動きが活発になってきたな……。

「……………」

「どうしました?」

「いや、どうも地球で何かが起ころうとしている気がするね」

「地球ですか?」

「ああ、そういえばジャンヌ君は戻っているのかい?」

「いいえ、確かまだ地球の方へというはずですが……………」

「!!」

突然立ち上がったゾフィーは「地球の方へ急行する」こと、そして「アムールを向かわせる」ことを言いつけ、隊長室を飛び出す。

トレギアは急いでアムール、そして念押しに他の戦士達にもゾフィーと共に地球へ向かう旨を伝える。

ジャンヌ対ゾフィー

ゾフィーは赤い球体になり地球へとやって来た。

「……………」

辺りを見回していると、森の方からジャンヌの力を感じた。そちらへ向かうと、彼女が一人佇んでいた。

「ジャンヌ君……」

「……………」

だが彼女は突然振り返り、光線（ジャンヌ・シュート）を放ってきた。ゾフィーが横に躲すと、ジャンヌがそのまま襲い掛かってきた。

「ジャンヌ君！何をする!?!」

「……………」

彼女は無言でジャンヌキックを放ってきたので、ゾフィーは躲す様子からして、手荒なことはできない。そうこうしているうちに、彼女は両サイドのジャンヌ・スラッシュをゾフィーに向かって投げつけてきた。

「ウルトラランス!」

ブレスレットをウルトラランスに変えて、彼女の宇宙ブーメランをはじかせる。すると、ジャンヌはそのまま飛びかかってきた。

そこに、光輪が彼女の体に巻き付いていく。ゾフィーが上方を見やると、ウーマンがウルトラキャッチリングを発動させていたとわかる。

「ゾフィー隊長!」

「アムール、それにウーマン……………二人が来てくれたのだな?」

「全く、いきなりトレギアの報告を受けて何事かと思ったけど……………ジャンヌ、いったいどういうつもりかしら?」

ウーマンはギロツとジャンヌを睨むが、彼女はどこ吹く風でキャッチリングを壊そうと動いている。しかし見習い戦士である彼女がウーマンのキャッチリングを壊すことはできない。

そこに同じくトレギアの連絡を聞いたセブン、ジャック、エイテイの三人が到着する。

光の戦士達が守り抜いたこの地球をな！」

「何!? うぐ!!」

突然ゾフィーが膝をついた。ウーマン達はダークファルシオンを睨む。

「ゾフィーに何をしたんだ!!」

「察しはついてるだろう? 奴が小娘から俺の闇エネルギーを吸収することはわかっていた! だからこそ、そこから強大な闇エネルギーが奴の体の中を支配していく!! やがゾフィーは最強の闇の戦士に生まれ変わるのだ!!」

「くっ!!」

全員がゾフィーを見ていた。彼の目が赤く明滅しており、彼自身が必死になって闇と戦っているのがわかる。中にいるベリアルもダークファルシオンの闇と交戦し、これ以上彼の体を支配されないようにしている。

「ならば貴様を倒すだけだ!!」

「アムールちゃんはジャンヌちゃんとゾフィーお兄ちゃんをお願い!!」

「行くぞ!!」

四人のウーマンはダークファルシオンに攻撃をする。

「くらえ!!」

「させません!!」

ダークファルシオンは光弾を放ったがジャックがウルトラスパークで相殺をする。

そこにセブンがエメリウム光線を放つと、ダークファルシオンは腕でガードをする。

「は!!」

ウーマンがチョップを叩きつけると、ダークファルシオンは彼女の手刀を受け止め、そのまま投げ飛ばす。投げ飛ばされたウーマンはエイティイが受け止めた。

「大丈夫ですか?」

「ありがとう、エイティイ!」

「ワイドショット!!」

セブンがワイドショットを放つも、ダークファルシオンは両手でガードする。

「流石ウルトラ兄妹だな。だが闇の戦士になった奴と戦えるかな？」

「貴様ああああアアあああッ!!」

「セブン!!」

ウーマンがセブンを止める。

「離せ、ウーマン! ヤツヲ!」

「今はゾフィーが先決よ!! ジャック!! エイティ!! アムール!!」

「はい!!」

「了解です!!」

三人はスペシウム光線とサクシウム光線、アムールショットを放つ。ダークファルシオンが防御するその間に、戦士達は離脱した。しかし、ダークファルシオンは笑い続ける。

「ふふふふ、すでに奴の体は闇で覆われている。さあ貴様の手で仲間を殺して絶望するがいい!! はははははははははははッ!!」

ゾフィーの容態

ウルトラクリニックに、現在ウルトラ兄妹とウルトラの父、ウルトラの母、ベル、トレギアといった面々が集まっていた。

クリニックのベットにゾフィーが横たわる中、ウルトラの母はマザー光線を当てている。

「母さん、ゾフィー兄さんは？」

タロウはウルトラの母に聞くが彼女は顔を俯かせている。

「マリー……」

「今、ゾフィーは光と闇の狭間の戦いが行われています。彼のカラータイマーが先ほどから点滅しているでしょう？もし、あれが消えたら……」

「ど、どうなるのですか？」

「……闇の戦士に、なるでしょう」

「!!」

「私達は何もできないのか!!」

セブンは壁を殴る。いや、全員が今の自分たちの無力さに怒りを覚えている。一方でゾフィーは……

「くそ……こいつだけは……こいつだけは絶対に私が護る!!」

ベリアルが、これ以上闇が広がらないように努めていた。だがそこに光弾が飛んできて、ベリアルが吹き飛ばされる。

「が!!」

「へえー、ここがね……」

「なんだお前たちは!？」

そこに現れたのは、それぞれ銀色の髪、赤い髪、青い長髪が特徴的な三人の女達だった。ベリアルは殺さんばかりに睨みつける。

「あたしの名前はカルミラ」

「俺はダーゴン」

「私はヒュドラムといいます」

かつてウルトラマントリガーと戦い、敗れ去った闇の三戦士だ
!

一方でクリニックではゾフィーの体が光りだした。光が収まると、ゾフィーの体の色に銀と紫、黒が現れたので全員驚いている。

「……………」

全員が叫んでいるのを見て、彼自身も自分の体に何が起こったのか鏡を見た。

(えーーーー!?)

「ぞ、ゾフィーお兄ちゃんが!!」

「いったい何が……………」

「テイガ達みたいになっちゃった!?!」

「ええええええええええええ!!」

こうしてゾフィーは新たな姿 “マルチタイプ” を手に入れたのであった。

新たな力

闇との攻防でマルチタイプ姿を得たゾフィーは、その力を試すために惑星ガンズへと来ていた。そのそばにはかつて闇に囚われた苦い経験のあるベルとトレギアの二人が着いていた。

「ベルさん、トレギア……私一人では動けないとは言え、二人が一緒に来なくてもよかったですのでは？」

「何言ってるのやら、あんた、狙われてる自覚あるのかしら？」

トレギアも首を縦に振ったことで、苦笑いをしたゾフィーは、両手をティガやダイナ達のように交差して降ろす。すると、体の色が銀色……カルミラタイプへと変わる。

手に現れたカルミラバトン振りまわしたり、それをカルミラソードへと変えて斬ったり、左手に鞭状の光線“カルミラウィップ”を発動させた。そして、また腕を交差して、赤い普段のゾフィーのような姿……パワー形態のダーゴンタイプへと変わる。エネルギーを込めて放つファイアビートクラッシュをデラシウム光流のようにぶっ放す！まさしく力こそパワー!!そして、構え直すと再びクロスする。

「は!!」

今度は色が紫……ヒュドラムタイプへと変わり、素早く移動しながら、右手に握ったヒュドラムダガーを振り回す。

「ほーう、タイプチェンジなんだな？」

「ええ……先ほどのウィップやソードを使ったタイプは遠距離や近距離など対応ができるタイプですね」

トレギアは持っているウルトラブレットを使い、ゾフィーのタイプチェンジデータを収集する。ベルもゾフィーのパワーアップを実感していると、突如別方向から光弾が飛んできたので、全員が回避する。

「……今の技は？」

「一体誰かしら？」

三人は上の方を見ると、現れたのはかつてウルトラウーマントリガーと戦ったカラクリ武者メカムサシンだった。

「なんだ!？」

「新型のロボット怪獣…でしょうか？」

メカムサシンは持っている傘「ジャンメガツサー」から火球を飛ばしてきた。躲したトレギアとベルは接近して、メカムサシンに攻撃を仕掛ける。

だがメカムサシンは二人の攻撃を躲すとそのままジャンメガツサーで叩きつける。

「こうなったら、みんな、頼んだぞ!!」

ゾフィーはカプセルを投げてバードン、ゼットン、タイラント、バキシマル、ダークロプスゼロを召還する。

「行きますよおおおおおおおおお!!」

「行く…」

「よっしやー!」

「いくぜ!!」

「はあああああああ!!」

『とあああああああ!!』

メカムサシンは持っているムサシンソードを振りまわして五体を吹き飛ばす。ゾフィーは接近してゾフィーキックを放つがメカムサシンは回避する。

『メガロンファイアー!!』

「何?!どあ!!」

メカムサシンが放ったメガロンファイアーを受けたゾフィーは、敵の動きが悪くなっているのを見て、誰かがメカムサシンの中に閉じ込められていると判断した。ゾフィーは立ちあがり、腕を交差し、ダゴンタイプに変身した。そして、右手にエネルギーを込めて走り出す。

メカムサシンはヒトダマ大車輪で凌ごうとしたが、ダークロプスゼロやトレギアが抑えることに成功した。

「今です、マスター!」

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

そのままメカムサシンの顔面を殴りつける。同時にトレギア達が離れると、メカムサシンが吹っ飛んでいく。相当ダメージを受けたようだ。

全員が見ていると、メカムサシンの顔に罅が入り、そのまま何かが抜けだしていく。まるで炎が生きているかのように動き、その炎が人の姿へと変わっていく。ゾフィーは驚いた。

メカムサシンから出てきたのは、地球を襲う黒星怪獣と戦い、勝利をした炎の戦士メガロマンだったからだ。

「ありがとうございます！」

「君は……メガロマンかい？」

「はい、突然現れたあのカラクリ人形に体を乗っ取られていたんです。助かりました！」

「ゾフィー!!」

「!!」

ベルの声を聞いて前の方を見ると、メカムサシンは体を再構成し始めた。

メカムサシンは頭を振りまわして、炎の弾を撃ってきたが、ゼットン、バードン、タイラントが火球と火炎放射で相殺する。そこにトレギア、ベル、メガロマンが飛びあがり、トリプルキックを放ち、バキシマルが頭部の角を発射させてメカムサシンにダメージを与える。そして、ヒュドラムタイプへと変わったゾフィーがヒュドラムダガーで素早く斬りつけた。

「今です!!」

「デスシウム光線!!」

「トレラシウム光線!!」

「メガロン・ファイヤー!!」

三人が放った技がメカムサシンに命中し、爆散した。ゾフィーは元のマルチタイプへと戻り、メガロマンと握手をする。

「メガロマン、この宇宙で今、邪悪なものが動きだそうとしている。協力してくれないかい？」

「わかりました。僕も宇宙の平和を守るために共に戦います!!」

「感謝する！」

彼らは握手をしてから、お互いに飛びあがり、ゾフィー達は光の国へと帰還する。

頭の中に流れる映像

ゾフィー side

新たな力を試した後、炎の超人メガロマンと出会えた。彼も協力をしてくれるというので頼もしい。だが仕事をしている時、突然頭の中に流れてくるのは一体何だろうか？何かの強大な光の中に眠る裸の女性……なんだいったい、彼女は一体。

「……………」

「あの、隊長……？」

「あ……………」

トレギアの言葉で意識を戻したが、書類を書いていた。つい頭を押さえてしまう。

「あの隊長、お疲れでしたら……」

「すまない、大丈夫だ。さあ始めるとしよう！」

仕事を何とか終わらせたが、途中でもあの裸の女性が現れる……隊長室から大隊長室の方へと行くと、ケンさんとベルさんがいた。

「……ゾフィー？」

「どうしたんだい？」

「はい、実は……………」

私が謎のビジョンについて話をする、二人は真剣な顔で話し合いを始めた。一体何があったのだろうか？

「ゾフィー、おそらくだが、それはSOSではないだろうか？」

「SOS、ですか？」

「そうよ。おそらくけどその子は誰かに助けを求めているんじゃないかしら？しかも強大な光を放出するほどにね。」

「……………」

あれがSOSなら、いったいどの時空で？それが本当なら急いで向かわなければならぬ。

『あんたが見たって子だけだよ』

「なんだい、カルミラ？」

『マナカ・ケイコで間違いないでしょうね。』

「マナカ・ケイコ?」

『……お前からしたらトリガーと言った方がいいだろうか』

トリガー! 私がゴルバーという怪獣に苦戦している時に助けてくれたあのウルトラウーマンのことか……彼女のいる宇宙となると、こことは別の次元になるな。

次の日、私は宇宙パトロールをしていた。誰かが付いていないと、本来は許されないのだが、「他のみんなは多忙だから」、「カプセル怪獣がついているから」と無理矢理押し倒したのだ。パトロールの途中、前方を飛んでいるウルトラウーマンを見つけた。

「ゼットかい?」

「ゾフィー隊長!」

彼女は右手にベリアルさんの「生首」もとい幻界魔剣ベリアロクを持つているので、頭が痛い気分になるけど、そのおかげで彼女は戦い抜けたからなあ……。

「ゼット、こんなところで何を?」

「じ、実は……」

Z説明中

「セレブロが脱走した!」

ストレージで捕獲して調べていたが、脱走されたので、こうして探しているのか……まさかあの寄生生物セレブロが……いずれにしても奴をほっておくことはできないな。

「わかった。私も手伝うよ」

「ありがとうございます!!隊長と一緒に心強いです!!」

「おい話しているところ悪いが、この世界に居ないじゃないか?」

「まさかトリガーの世界に!」

「トリガーだつて!」

「隊長、トリガーを知っているのですか!」

「ああピンチの時に助けてもらってね。とりあえずセレブロが彼女のいる宇宙に逃げたんだね?」

「恐らくっすけど……」

なら行くしかないな。ウルトラサインを飛ばした私は、ゼットと共

にトリガーの世界へと向かうことにした。

私は元の姿へと変わり、構える。

ゾファイ side 終了

シグマ・ユナは男の人に逃げるように言った。だがその男は右手のブレスレットを光らせて叫ぶ。

「ゾファイいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

男性は光に包まれてイーヴィルトリガーたちの前に光となり姿を現した。そう彼女達の世界に現れたのは宇宙警備隊長ゾファイその人だ。

「宇宙警備隊長ゾファイ……まさか貴様もこの地球へと来ていたのだな?」

「セレブロ、ゼットの、いや、ハルコ君の中に寄生をしていたのか。今すぐに彼女を解放してもらおうか!」

「まずは私の相手をしてもらいましょうか!!はああああああああああああああああああ!!」

「ふん!!」

突如イーヴィルトリガーが襲い掛かってきた。ゾファイに蹴りを入れてきたが、彼は冷静に彼女が放つ攻撃をはじめさせていく。だが後ろからゼットがゼットスラッガーを放って、ゾファイにダメージを与えると、イーヴィルトリガーは彼をつかんで投げ飛ばす。

「トリガーダーク!」

「おら!!」

ゼットにトリガーダークが蹴りを入れる。イーヴィルトリガーに對してゾファイは蹴りを入れて吹き飛ばすと、彼は腕をクロスしてヒュドラムタイプへと転身した。右手にヒュドラムダガーを握り、イーヴィルトリガーを攻める。

「な!?!ヒュドラム!?!」

「お久しぶりですね、イグニス。ですが今はこいつらを倒すだけですよ!きええええええええええええええええ!!」

トリガーダークを見た後に彼はそのまま走りだし、ヒュドラムダガーで攻めるが、イーヴィルトリガーは蹴りで応戦する。ゼットはトリガーダークにゼットスラッガーで攻撃して吹き飛ばす。

「ウルトラウーマントリガーマルチタイプ！」

新たな光が発生して、ウルトラウーマントリガーが現れた。するとゾフィーは立ちあがり再び腕を交差し、ゾフィーの姿に戻った後、彼女に近づく。

「久しぶりだね、トリガー」

「あなたはあの時の……. だけどあなたからどうして…….」
「話は後で、まずはゼットを助けるのが先決!!」

ゾフィーは再び両手をクロスをして、今度はダーゴンタイプに変わり、ゼットに対して接近して攻撃をする。

「おのれ宇宙警備隊長ゾフィー、お前が来なければ…….」
「セレブロー……この地球でお前の思う通りになると思うな!!そしてゼットが君に負けるなどありえないぞ!!」

ゾフィーの連撃をゼットはどうかはじかせる。乗っ取られている彼女に致命傷を与えるわけにもいかない。ゾフィーがチラツとトリガーたちを見ると、イーヴィルトリガーとの交戦で苦戦しているようだ、彼女たちを助けようとしたが、後ろからセレブローが乗っ取るゼットがゼットランスアローを構えてゾフィーに攻撃した。

「どあ!!」

「けけけけけけけけけけけけけけ!!」
（一体どうすればいい!!そうか!!）「ゼット!ハルコ君!君達の闘志はそんなものなのか!!ゼロが君に期待をしているという思いに君達が応えないでどうするんだ!!」

「無駄だ、こいつらの意識は……ぐお!!」

突然ゼットの動きが硬くなる。彼女達の意識が戻ろうとしているのだ。ゾフィーはそのまま続ける。

「勝つんだ、ハルコ君!ゼット!セレブローなんかには君達は負けない!!ウルトラ戦士として立ちあがるんだ!!」

「うおおおおおおおおおおお!ウルトラ燃えるぜえええええええええええええええええええええええええええええ!!」

するとゼットからセレブローが排出され、彼女の目が元の色に戻る。ゾフィーは立ちあがり、ゼットのところへと向かう。

「ゾフィー隊長！ご迷惑をおかけしました!!そして、ありがとうございます!!
います!!」

「なあに、気にすることはないさ」

「うわ!!」

トリガーとトリガーダークが吹き飛ばされてきたので、二人は彼女たちのところへと向かい、イーヴィルトリガーに構える。

「おのれ……」

するとセレブロが「死と破壊の王」：殲滅機甲獣デストルドスに変貌する。

「セレブロにあんな能力があつたのか!!」

全員が構える。ゾフィーは今度はカルミラタイプへと変わったのを見て、トリガーたちは驚いている。

「カルミラ!?!」

「久しぶりだね、マナカ・ケイコ!まあゾフィーのダンナも言った通り、話は後、行くよ!あんな偽者、さつきと倒しちまうよお!!」

ゾフィーを筆頭にしたウルトラ軍団は、イーヴィルトリガーをトリガーとゾフィーが、デストルドスの方はトリガーダークとゼットが交戦する。

「はああああああああ!!」

トリガーが放つ攻撃をイーヴィルトリガーは簡単にはじかせるが、ゾフィーはカルミラウィップを放ちイーヴィルトリガーの手に絡ませる。

だがイーヴィルトリガーはウィップを引っ張り、手繰り寄せて蹴りを入れた。

「この!!」

ゾフィーは両手をクロスをして元の姿に戻り、デストルドスに苦戦をする二人のほうを見る。

(まずいな、彼女の力が予想していた以上に強いこと、さらにデストルドスのこともある。いったいどうしたら……!)

彼が考え事をしていると、地下から強大なエネルギーがトリガーの体に当たり、彼女の姿が変わる。

「グリッタートリガーエタニテイ！」

彼女の姿が変わり、イーヴィルトリガー及びデストルドスは驚いている。そこに姿を消していたベリアロクもゼットの元に戻り、デルタライズクローとなり構える。

「デスシウムスラッシュュー！」

「は!!」

二人が放った攻撃がデストルドスの攻撃を相殺する。そこにゾフィーは構える。

「受ける、セレブロー！M87光線！」

M87光線がデストルドスに命中し、デストルドスは大爆発した。残されたイーヴィルトリガーは、自身の闇エネルギーを全開にしてさらに体を巨大化させた。

「おのれええええええええええええええええええ!!」

踏みつぶそうとしたが、グリッタートリガーエタニテイ達全員が回避して、空に飛び立つ！

「グリッターゼペリオン光線!!」

「ダークゼペリオン光線!!」

「ゼスティウム光線!!」

「今こそ光と闇の力を一つに!!」

ゾフィーは、両手にエネルギーを込めて、トリガーたちのように両手を前にクロスさせて広げ、構える。

「ゼットシウム光線!!」

四人から放たれた光線がイーヴィルトリガーに命中して爆散する。全員が変身を解除し、彼女が倒れている場所へと行くと、すでに闇が晴れていた。ザビルは、満足したような顔をして光となり、仲間がいる場所へと旅立っていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの・・・・・・・・」

「これで借りは返すことができたよ、マナカ・ケイコちゃん。いやウルトラウーマントリガー・・・・・・・・」

「隊長！申し訳ないっす!!」

「いやハルコ君、君のせいじゃないさ。いずれにしても君達が無事で何よりだよ」

そういつて、ゾフィーは彼女の頭を撫でている中、ケイコは自身の胸を押しえていた。

セレブロを再逮捕できた二人の戦士は元の世界へと帰るために、ベリアロクの力を使い、トリガーたちと別れて飛び立った。

修羅場

ゾフィースィド

「それではゾフィー隊長、私はセレブロをストレイジに渡してきますね」

「ああ頼んだよ、ゼット」

ゼットは、セレブロをチームストレイジに引き渡すために、彼女が守る地球の方へと飛んで行く。私も光の国の方へと帰路を急ぐ。

トリガーの世界で発生した光と闇の闘いは終わった。そして、ゼットの力で次元を超えて元の時空へと帰ってくる事ができたのはいいが……流石にウルトラサインを出したとはいえ数日はまづかったな……。だがそれで一つの宇宙が救えたわけだし。

光の国に、私はゆっくりと降りたつ。今日も異常無し。そして、宇宙警備隊本部に行こうとしたが……。うわー、なぜか両手を組んで仁王立ちしてるウーマン達の姿が見えたのですけど……。なんで？お兄ちゃん、何かしたかな？

「やあゾフィー、待っていたわよ？」

「あー、うん……。皆も出迎えご苦労……。でいいのかな？」

「まあそんなところだろう……」

「さて、ゾフィーお兄ちゃん……」

「なんでしようジャックさん」

「どうしてゾフィーお兄ちゃんから知らないウルトラウーマンの匂いがするのかな？かな？」

匂い？知らないウルトラウーマンとなるとトリガーぐらいしかいなかったが彼女って抱きしめたっけ？あ……。お別れの時に抱き付いてきたわ。うん、その時だね？

「ゾフィー兄さん？覚悟はできていますか？」

「そうだねゾフィー兄さん、私達がどれだけ寂しい思いをしたのか……。一人で動くなって約束も破ったし」

「待てお前達、なんでそんなにじりじりと近づいてくるんだ？何をする気だ!？」

溜まっていた仕事

姉妹達の鬼ごっこを切り抜けたゾフィーは、隊長室内の溜まっていた書類を見てトレギアの方を振り返る。

彼女は首を縦に振る。彼は仕事を始めることにした。

（まあトリガーの宇宙の危機だったとは言え、放つたらかしすぎたか……しかし、よく考えたら私って原作以上に活動してないか？だって、この間のタイガの時も……うんやり過ぎたね（苦笑）

原作以上に活躍しようと、その分事務仕事を投げ出しては意味がない。諦めて、仕事を始めようとしたとき、扉が開く。

「隊長、戻っていたのですね？」

「ああ、すまないね、パスワード。それでどうしたんだい？」

「Yes. 惑星アラバスタから救援要請が入っております」

「わかった。トレギア……ゴライアンを筆頭にフレア、ザージに50人ほどの隊員を連れて向かうように指示を頼む。そろそろ彼女たちも思う存分、暴れたいだろうしね」

「了解いたしました」

「では、私はパトロールへ」

「ああ、気を付けてくれ……」

パスワードは隊長室を後にし、ゾフィーは書類確認に入る。判を押す前にはトレギアにチェックを頼むことも忘れない。

中にいるベリアル、カルミラ、ヒュドラム、ダーゴンの四人は、トランプをしている。ババ抜きのようなのだ。

「さあさあ、ダーゴンさあん？」

「……………これだ」

「な!？」

「我の上がりだな」

「ちえ!ダーゴン、こういうのは強いんだからね。さて、次はベリアルの姉さんですよ?」

「……………トランプをどこから出したか今更聞くのは野暮かしら? あら、外した。ほら」

「では次は私ですね。はい……さてちよつとお待ちを」

ヒュドラムは二枚となったカードを隠した後、混ぜてから出した。

「さあ、カルミラ……」

「……」

カルミラはそつと抜いた。だがそれは、間違いなくJOKER（ババ）！

「ひゃっははははははー！とりましたね!？」

「……」

カルミラはギロツと睨んでいるが、ベリアルはその間にカードを取り、揃い残った一枚をヒュドラムが取る。それでも揃わなかったので、カルミラが取り、ペアとなり残り二枚となる。

カルミラとヒュドラムの睨み合いが続く中、退屈になったダーゴンとベリアルは円谷タワーを始める。

さて話を外に戻そう……ゾフィーは少し休憩をしていた。書類なども半分以上終わらせたのでトレギアは自分の仕事をしながらゾフィーを見つめていた。

「……どうしたんだい？」

「いえ、溜まっていた仕事が半分以上終わっていたので驚いているだけです」

「そりやあウン万年も宇宙警備隊で勤めていたらね。でも最初の頃は、慣れないことだらけ、色々と覚えることだらけ……やっと慣れてきたと思ったら、昇格して、同じことの繰り返し。必死でいっぱいだったさ……隊長になると、違う星へ向かい、親善パーティーを開いたり、女王様のような王族の方々のお相手をしたり、「ザル警備」と罵られたら謝罪したり……まあ今のアースラのアナシアやザントのアレーラ達のような未来ある若者に会えるは嬉しいさ……」

そろそろ休憩も終わりだ……書類の仕事を進めていく。一方、惑星アラバスタでは、ゴライアンが暴れている怪獣の身体を力で抑え、フレアとザージは頭を押させていた。

「おらあああああああああ!!」

『ぎゃおおおおお!!』

「なあ、ザージ……」

「……なんだ？」

「あたしたち、いらなくねーか？」

「だな。ほかの隊員達には避難誘導を頼んで、正解だったな。」

「はあ……」

「おらあああああ!!ゴライアンリアット!!」

『ぎゃおおおおお!!』

暴れていた二体の怪獣は、ゴライアンの圧倒的な力の前に、泡を吹いて気絶する。そんなことを知らない光の国の隊長室はと言うと……。

「ん……」

仕事を終えたゾフィーは、両手を伸ばして、リラックスしていた。そして、隊長室から光の国を眺める……今のところは、平和だ、アブソリュートイアン達がいつ攻めてくるかわからないが。

「……いずれにしてもどのよう動くかな……アブソリュートイアンは必ず光の国に攻めてくる。ゼロはシャイニングウルティメイトゼロの力を完全に出せるように頑張っている。私自身も、もっと強くならないとな!」

『いやいや、お前さんはだいぶ強いぞ。正直に言えば、私自身もここまですで強くなるとは思っていませんでした』

「……いえ、私が強くなったのは、ベリアルさんやほかのみんながいたからこそです。私一人では守れないものばかりですよ。それに、私だって救えなかった命もたくさんありました。我が盟友……ブルーもそうです……」

死者を新たな世界へ送る「黄泉おくり」の族長ブルー……古代地球でのゾフィーの盟友だった彼は、人としての寿命が尽きて、ピグモンに転生した。その後、人を守る為、自ら囹となり、ジェロニモン軍団が一角再生レッドキングの猛攻を受けて死亡した。その時の彼の勇敢な行動は、みんなを生かし、ゾフィーに「世界を守ること」の意味を更に理解させた。

「死は存在しない。生きる世界が変わるだけだ、か……」
彼は今でもサコミズ・シンゴやセザル、ブルー達のことを忘れては
いない。今日も宇宙の平和を守るために、彼は戦い続けるのであつ
た。

トリガー

「ふむ……」

「どうしたんだ、ゾファイー？」

宇宙警備隊隊長室でウルトラサインを見たゾファイーにセブンが声をかけてきた。彼は、振り返り、答える。

「ああ、実はゼットからウルトラサインが来たんだ。トリガーを連れて光の国へ来るらしい」

「ほう……ウルトラウーマントリガーか……すまない、少し用事を思い出した」

“トリガー”の名を聞いたセブンは、他のウーマン達と情報共有をする為、隊長室を後にした。

彼も、準備の為に立ちあがり、ブラザーズマントを羽織って歩きだした。一方で、セブンは執務部屋へと戻っていた。

「ああ、セブン、どうしたの？」

「ウーマンか……ジャックは？」

「今日はウルトラコロセウムの方で指導の方に入っているわよ……どうしたの？」

「実は……」

セブンの説明で、ウーマンも察したようだ。

「トリガー、ね……」

「ああ、ゼットが連れてくるらしい。それで、見るか？」

「ええ、セブン。早速だけどウルトラ姉妹を集めて頂戴」

「わかった」

ウーマンの指示により、ウルトラ姉妹を集めて相談することが決まった。それから5日後、光の国に二人のウーマンが舞い降りる。

「ここが……光の国……」

「そうでしょそうでしょ！美しいでしょ!？」

白い髪をロングにした女性……ウルトラウーマントリガーが光の国へとやってきた。ゼットが持つベリアロクの恩恵だ。

(そして、僕の目的も……ふふふふふふ)

彼女の目から一瞬だけ光が消え、黒い瞳になっていたが、ゼットが声をかけてきたので光を取り戻し、宇宙警備隊の中を歩いている。

「ほえー、宇宙警備隊本部は浮いているんだ……」

「まあね♪おっ!!あれは!!」

トリガーたちが前を向くと、ブラザーズマントを羽織ったウルトラ六兄妹が立っていた。

「あれが……!!」

「そう！伝説のウルトラ兄妹であります!!まず紹介をするのはウルトラ兄妹ナンバー6で筆頭教官を務めるタロウ姉さん！」

「あはははは、ようこそ！」

「そして！異次元人ヤプールの軍勢から宇宙を守り抜いた銀河連邦の大エース！私に名前を付けてくださったエース姉さん！」

「歓迎するわ」

「次に！ブレスレットを使わせたならナンバー1！帰ってきたウルトラウーマンことジャック姉さん!!」

「なんだか照れちゃうな……」

「次に！地球を誰よりも愛して守り続けた真紅のファイター！セブンス姉さん！」

「噂は聞いてるよ、よろしく」

「そしてえ！地球で初めて防衛戦線を張ったこの人こそ！伝説のスーパーヒロイン！ウルトラウーマン姉さん!!」

「初めまして。ようこそ、光の国へ」

「最後は宇宙警備隊長にしてウルトラ兄妹ナンバー1！ゾフィー隊長その人であります!!」

「久しぶりだね、トリガー」

「は、はい！」

「……」

姉妹達はトリガーが何かをするのではないかと気が気でない。しかし、ゾフィーの指示もあり、五人は渋々と自分たちの仕事場（もちば）へと戻っていく。そして、ゼットも野暮用とのことで分かれることとなった。

そして、二人つきりで隊長室の方へと移動する。隊長室に到着すると、あろうことかトリガーがゾフィーをソファアの上に押し倒した！
ゾフィースide

突然体が浮遊した感じがしたと思ったら、なぜかソファアの上に倒されていた。そう目の前にいるトリガーに………つてか彼女の目からハイライトさんが隠れてるんだけどなんで？

「やくつと、二人きりになれたよ………！」

「えつと……トリガー、さん？」

「僕ね、ずっと考えていたんですよ。あの時、ゾフィーさんがゼツトさんやハルコさんと一緒に来てくれて………その後にハルコさんの頭を撫でていましたよね？」

はい、撫でましたね。それでなんでこんなことに？いや、しかし、彼女って案外大きいよね？F？Gぐらいあるよね絶対に………いやいや、その前に、なんか闇のオーラを感じるな？皆さん、ご存知ですか!?

『まあ、元々トリガーは私たちと同じですからね』

『いやー、嫉妬つてのは怖いねえー』

『カルミラ、お前が言うか？』

中にいるカルミラさん達のお陰で大体わかった。でも、この状況やばいよね？ん？

【ウルトラウーマントリガースカイタイプ！】「え？」

【ウルトラウーマントリガーパワータイプ！】

「え？」

光り出したと思ったら、トリガーが三人に!?!そんな能力あったの!?

「あの時からずつと心がズキズキ痛いですよ！」

「それで原因が何だろうと思って考えていたんです！」

「それがあなただつてことに気づきました………！」

三人のトリガーは笑いながらこちらに迫ってくる………!?!どうしたらいいのでしょうか?!パワータイプとスカイタイプのトリガーが両側から押さえ込んでるので、無闇に力を込めるわけにはいかない!?!でかい胸が当たっている!!

「「さーてやりま」「「させるかああああああ!!」「」「え
?」」

「あーっっっっっ!!扉があああああああああああ!!」

破壊された扉の向こうから現れたのは、ウーマンを始めとしたウル
トラ姉妹であった。レオとアストラ、エイティ、メビウス、ヒカリま
でいるオールスター……それは良いとして、扉が……
隊長室の扉が……破壊されてしまった。超硬質合金S型を参
考にしたのに!?

「キャッチリング!」

「ストップリング!」

ウーマンとエースが放ったリングがトリガーたちを捕まえた。無
事に助けられたのはいいが……私は立ちあがる。

「ぞ、ゾフィー?」

「正座……」

「けっ、けど!」

「正座、今すぐに!!」

私は、全員を正座させた後、説教を始めた。勿論、トリガーもだ!
ちなみに扉の修繕費はウーマン達の給料で賄うことにしました、
ちゃんちゃん。

アムールの苦戦、ピンチの時に駆けつける。

光の国の宇宙警備隊隊長室（仮）というのも前回の話の時にウルトラウーマントリガーに襲われかけたところをウーマンを始めとした姉妹達が扉を破壊をしてトリガーを抑えたのはいいが、扉は木っ端微塵に破壊されてしまえばらく修理のため隊長室（仮）で仕事をしているとウルトラサインが上がったのに気づいた。

「惑星アルカリヤにて怪獣と交戦！救援求む！アムール………何か嫌な予感がするな。」

チラツとゾフィーは誰もいないなど確認をしてから部屋を後にしてアムールを救出をするために惑星アルカリヤへと急行をする。

「隊長………あれ？隊長？」

トレギアは資料をもつてやってきたがゾフィーの姿が見えないの上の方を見るとウルトラサインが発生をしているのを見て惑星アルカリヤに近いウルトラ戦士に救援を向かうように指示を出す。

惑星アルカリヤにてアムールは二体の怪獣と交戦をしていた。二体の怪獣の名前はプラスマ、マイナズマと呼ばれる兄弟怪獣だがその力はウルトラウーマンエイティを完全敗北寸前まで追い込んだ怪獣である。

「く!!アムールショット!!」

アムールが放ったアムールショットを受けるがビクともせずには合体をしてプラスママイナズマへとなりシンセライズレーザを放ちアムールは苦戦をする。

「がは………つ、強い……流石エイティ先輩を敗北寸前まで追い込んだ怪獣だわ。」

プラスママイナズマはアムールにとどめを刺そうとした時上空から光線が放たれてプラスママイナズマに当たり吹き飛ぶ。アムールは一体誰が助けに来たのかと思ひ上の方を見るとその戦士は着地をしてアムールをみた。

「ぞ、ゾフィー隊長………」

「大丈夫かアムール、なるほどプラスマ、マイナズマの合体怪獣

か……良く奮闘をしたね。」

「も、申し訳ありません。」

「謝ることはないよ。(さて私一人でこの怪獣たちとどこまで戦えるか……前世でエイテイが敗北寸前まで追い込んだ怪獣だ。私が勝てるかわからないな。)」

ゾフィーは構えるとプラズママイナスズマは分離をしてプラズマとマイナズマへと変わり襲い掛かってきた。

「シュワ!!」

ゾフィーは走りだしてプラズマに蹴りを入れる。後ろからマイナズマが殴りかかるがその手をつかんで投げ飛ばす。

プラズマはビームを放つがゾフィーは交わして流星キックを放ち着地をする。アムールも参戦をしようとしたが思う通りに体を動かすことができない。

すると突然として自分の体に巻き付く鎖に驚く。

「動くな宇宙警備隊長ゾフィー!!」

「……」

彼は振り返るとアムールは宇宙人に捕まっている。しかも宇宙人はどこかで見たことがあるな——と思いながら思いだした。

「メドウーサ星人か!」

「いかにも!動くなよ?動けばこいつの命はない!!」

メドウーサ星人は両手の鞭をアムールに向けておりゾフィーは抵抗をすることができない。

「やれ!プラズマ、マイナズマ!!」

二体の怪獣は人質を取られて身動きが取れないゾフィーに対して接近をしようとしていた。

するとメドウーサ星人に光線が当たりアムールは鎖が緩んで移動をする。ゾフィーはゾフィースラッシュを放ち二体にダメージを与えてアムールの方へと行くと一人のウルトラウーマンが着地をした。

「見つけましたよゾフィー兄さん。」

「エイテイ、来てくれたんだね?」

現れたのはウルトラウーマンエイテイだ。彼女はプラズマ、マイナ

ズマを見て構え直す。

「プラスマ、マイナズマ……ユリアンが来てくれなかったら私はやられていた強敵怪……まさか再び戦うことになるなんてね。」

「だがメドウーサ星人もいる。アムールは戦闘ができないほどのダメージだ……せめて奴の相手をしてくれる人物がいてくれたら。」

「なら彼女が相手をしてくれますよ?」

「彼女?」

ゾフィーはエイティが言った言葉に首をかしげているとウルトラウーマンタロウが着地をした。

「お待たせ!!メドウーサ星人!お前の相手は私だ!!」

「おのれウルトラウーマンタロウ!同族の敵とらせてもらおう!!きええええええええええええええええ!!」

タロウにメドウーサ星人を任せてゾフィーはエイティと共にプラスマ、マイナズマと戦うことにした。

「パワーならパワーで対抗だ!!」

両手をクロスしてダーゴンタイプへと変わりプラスマは殴りかかるがゾフィーは受け止めるとそのままプラスマの手をつかんで投げ飛ばした。

エイティも同じくマイナズマと交戦をしていたがプラスマをゾフィーが引きうけているので彼女はウルトラショットを放ちダメージを与える。

プラスマとマイナズマはこのままでは勝てないと判断をして合体をした。

「兄さん!」

「エイティ!ダブルパワーだ!!」

「はい!!」

二人は飛びあがり合体技「ダブルパワー」を放ち合体をしたプラスママイナズマを撃破して着地をする。

一方でメドウーサ星人と交戦をするタロウは飛びあがりスワロー

キックを放ちメドウーサ星人を吹き飛ばす。

「おのれ！」

「これで終わりよー！ストリウム光線!!」

光エネルギーをチャージをして必殺技ストリウム光線がメドウーサ星人に当たり爆発をする。

ゾフィーは両手を組みメドウーサ星人がなぜプラズマとマイナズマを従えていたのか、そして何が目的でアムールを狙ったのか考えていた。

「ゾフィー兄さん、もしかして…….ダークファルシオンだな。」

「それにしてもゾフィー兄さん？また勝手に一人で出ていきましたね？」

「…….」

「まあ今回はピンチだからいいのですけど忘れなないてください。狙われているのはあなただっつてことを。」

エイティは素晴らしい飛んで行く。タロウもアムールを支えて飛んで行きゾフィーは一人で考えながら光の国へと向かうのであった。

武器製造

ゾフィースィド

メドウーサ星人とプラズマ、マイナズマに襲われていたアムールを助けた私達、彼女をメディカルセンターへと運んだあと私はヒカリがいる宇宙科学局へとやってきた。

中に入るとヒカリとトレギアが待っていた。

「待っていたぞゾフィー。」

「来たのはいいが……私を呼んだ理由を教えてくださいませんか？」

「はい、実はヒカリ先生と共に新しい武器を作っていたんです。そのテストをゾフィー隊長にお願いをしようと思ひまして……」

なるほど新型の武器か、彼女達が組んだことで宇宙警備隊員の中にも武器をもつて戦う戦士達が増えてきた。原作では絶対にないことだねうん……とりあえず二人が製造をしたという武器を試すため私はヒカリから渡された武器を持ってみた。

「ヒカリ、一応確認をするけどこれはどういう武器なんだい？ただの棒みたいだけど……」

「光エネルギーを武器に注入をしてみる。」

私は言われた通りに光エネルギーを注入すると両方から刀身が生成されたのを見てスター〇〇ーズのレーザーソード!? っと思つてしまったよ。

「それは光エネルギーで生成されるツインブレードだ。もちろん片っぽだけ出すことも可能だ。」

なるほどね。ウルトラランスとは違い折れてもまた光エネルギーを注入するだけで刀身を生成をすることができるタイプってことね。

振り回してみてもこれは確かにウルトラランスよりは使いやすいかもしれないね。それで次はトレギアが持ってきたシールドでいいのかな？

「はい、そのウルトラシールドにはヒカリ長官が作ったレーザーソードを収納をするだけでなく、フィールドを生成をすることで使っている自分以外の人たちを守ることができるものです。ですが……」

私は言われた通りに光エネルギーを使っているとエネルギーの消耗が速い気がするなど……もしかしてレーザーソードとシルドを同時に使う出力がまだ未完成かな？

「はいその通りです。」

「だから言っただろ？まだ完成はしていない。ゾフィー、忙しいと思うが……お前の協力が必要だ。暇なときでいいからここに顔を出してほしい。一応こちらもメビウスたちにも試すようにする。」

「わかったよ。」

ヒカリたちの部屋を後にして私は宇宙警備隊隊長室(仮)へと戻りメドゥーサ星人に戦力を提供をした相手はダークファルシオンで間違いないなと思いつつ仕事をすることにした。

ゾフィーside終了

ここはウーマン達が仕事をする部屋、ウーマン、セブン、ジャックの三人は自分の仕事を終えて休憩をしていた。

「ふいー仕事の量が多いわね。」

「だな。」

「だけどゾフィーお兄ちゃんって私たちの倍以上だよな？」

「あの馬鹿は休ませるってことを知らないのかしら？」

「あはははは……」

ジャックは苦笑いをしながらいるとエースが入ってきた。

「ふう……」

「あらエースどうしたの？」

「いえ、タロウからゾフィー兄さんがメドゥーサ星人に襲われたという話を聞きました……」

「もしかしてアムールのウルトラサインにあの馬鹿が一人で飛びだしてトレギアが慌てて各ウルトラ戦士にサインを送っていたのはそういうことね。」

セブンは納得をしてウーマン達も同じように首を縦に振る。

新しくなった隊長室

ゾフィー side

いやーやつと新しい隊長室が完成をしたので仮から移動をした私、新しくドアの方は横開きするようになり、中の方も以前よりも広くなったこともありここで作戦会議を行うことも可能となった。

連絡をする通信システムもつけられて隊長室から直接ほかの場所に連絡をとることも可能となり以前よりも便利になったな。

『まあウルトラ姉妹の給料から使われているから奮発をしたんでしよう。』

ですよねー、とりあえず新しくなった隊長室の椅子に座って辺りを見るが……うん一人じゃとてもじゃないけど広すぎるよ、大隊長室ぐらいあるもん。

隣の方を見るとおそらく秘書用の机だからトレギアが使用するものだなど思いながら待機をしていると扉が開いてトレギアが現れる。

「おはようございます。今日から新しい隊長室での仕事になりますね？」

「ああ改良をするのに随分待たされたからね。さてトレギア……書類少くない？」

「そりやあどこかの誰かさんが二日分の書類を終わらせてしまいましたからね。あなたという人は……」

「なんかすみません。」

「別に私は怒っておりませんよ。なら……」

そういつてトレギアは机に書類を置いた後扉の鍵を閉めた。あれ？このパターンは何か嫌な予感がするのですが？トレギアさんなどでそんな目を光らせながらこちらに来るのでしょうか？

「最近、隊長とやっておりますので……今は誰も来ないのはわかっておりますので……」

「そうなのね？」

「はい、ではさっそゾフィーにいさーん新しい隊長室を見に来たよー！」

聞いたことがある声だなと思っていたけどタロウだな？あ、トレギアさんどちらに？

「あ、扉が開いてトレギア「タロウ………ちよつと向こうで話をしましょう？」え？なんでそんな怖い顔をしながら来るの？まって！どこからそんな力があああああああ………」

トレギアに連れられてタロウはどこかへと連れていかれた。まあ今回に関してはタロウが悪いからねー……流石に親友に乱れた姿を見せられないと思っただろう。

「失礼します。」

「おやレオどうしたんだい？」

「はい、書類のチェックをお願いをしようと思ひまして。」

「それじゃあもうよ。惑星「ベガ」で起こった反乱の報告だね？」

「はい。反乱軍を指揮をしていた星人は捕まえることができました。」

「この頃デビルプリンターの影響でこういうことが多くなってきたいるね。我々も奮闘をしているが………減らないものだね。」

「はい、私達も何とか奮闘をしています………デビルプリンターの力は厄介です。」

「とりあえず書類は確認ができたよ。レオご苦労さま。」

「そういえば秘書殿は？」

「まあ色々とおつてね。今は少し外しているよ。」

「そうですか、また無茶をして倒れないでくださいね？」

「わかっているよ。」

そういつてレオはお辞儀をしてから部屋を退出をする。私は椅子から見える位置にババルウ星人弟が変身をしたオーブから奪ったオーブカリバーを見ていた。なぜかそのまま実体化をしており私が所有をしている。

いずれにしてもアブソーティアン達が動かない以上、我々も責めることなどできない状態だ。

ユリアン王女を救うための部隊の準備は進んでおり私自身もその部隊に入ろうとしたが………

「……隊長がいたらダメだろ!!」

と言われたので仕方がないので彼女達に任せることにした。なん
で？思いつきりM87光線を放ちタイナーと思っただめだろうか
？

『あんたね、流石に敵の星に対してM87光線って……』

「いやー最近威力を抑えながらが多いので……たまには思いつ
きり撃つてみたいと思ってます……」

『……悪魔？』

『いいえ悪魔じゃないです！光の戦士です！今は光と闇の戦士でも
聞こえるかゾフィー』

その声はファルシオン!?私は立ちあがり見るがテレパシーでどう
やら私だけに聞こえるようにしているようだな。

『惑星「コーナリス」で貴様を待つ！貴様を今度こそ本当の闇の戦士に
するためにな!!』

そういつて通信が切れて惑星コーナリスの場所をチェックをした
後私は飛びだしてダークファルシオンとの決着をつけるために向か
う。

ゾファイー対ダークファルシオン

惑星「コーナリス」へと飛んでいる宇宙警備隊長ゾファイー、中にいるベリアルは彼の肩に現れる。

「ゾファイー、おそろくだけどこれは罠よ？あいつがあんたに対して一対一で戦うなんて思わない方がいいわよ？」

「ええそれは承知をしていますよベリアルさん。だから闇の力を解放させて戦います。」

「それは賢明ね。」

ベリアルは中に戻りゾファイーは惑星「コーナリス」に到着をして着地をする。彼は辺りを見ながら歩いていると光弾が飛んできてゾファイーはウルトラスピンではじかせた。

彼はスピンをやめるとダークファルシオンが黒い翼を広げながら現れる。

「よく来たなゾファイー！」

「ダークファルシオン！お前の野望をここで終わらせてやる！」

「そうはいかんぞ！現れる！インペライザー軍団！」

ダークファルシオンの言葉にインペライザーが現れた。ゾファイーは走りだしてダーゴンタイプへと変わるとインペライザーに対してドロップキックをお見舞いさせる。

倒れたインペライザーの足を持ちそのままぶん投げてほかのインペライザー軍団に命中をさせて右手にエネルギーが込められる。

「くらえ………ファイヤービートクラッシャー!!」

地面にエネルギー込めてファイヤービートクラッシャーが倒れたインペライザー軍団に命中をして爆発させるとそのままクロスをして今度はヒュドラムタイプへと変わり右手にダガーヒュドラムが装備された。

インペライザーは肩部から光弾を放とうとしたがすでにゾファイーが後ろの方に立っており足部にダメージを与えていた。

「そのような短足では私の動きを見切ることなど不可能ですよ！」

そのまま素早くインペライザー軍団達を翻弄させて切りつけていく。そしてダガーにエネルギーギアが込められて行き構える。

「ヒュドラスト!!」

放たれたヒュドラストが命中をしてインペライザー軍団が爆発をする。ダークファルシオンは驚いているとウィップが足に絡まり地面に落とされる。

「おやおや油断をしているところ落とされるんだよ!」

カルミラタイプへと変わっておりダークファルシオンは右手に闇の剣を纏いゾフィーに切りかかる。カルミラバトンを出して放たれる剣をはじめさせていく。

「であ!!」

伸びたカルミラバトンがダークファルシオンの胴体に命中をしてダメージを与えるとそのまま両手にエネルギーギアが込められてL字に構える。

「ワイドショット!!」

セブンの必殺技ワイドショットを放ちダークファルシオンを吹き飛ばす。ゾフィーはマルチタイプに戻るとそのまま接近をしてウルトラブレスレットが変形させたウルトラランスを構えて突きだした。

ダークファルシオンの翼を広げて飛びあがり両手に闇のエネルギーギアが溜められて光弾を連続して放ってきた。

「!!」

光弾がゾフィーの近くで爆発をしてダークファルシオンは連続で放った光弾を止めた。煙が黙々と発生をしてダークファルシオンは見ていると後ろの方でエネルギーギアを感じたので振り返るとゾフィーが構えている。

「な!?!」

「M87光線（Bタイプ）!!」

M87光線が放たれてダークファルシオンは地面へと叩きつけられた。その近くにゾフィーは着地をしてウルトラランスをつきだしていた。

「さあお前の負けだダークファルシオン!!」

「それはどうかな?」

「何?・・・!!」

ゾファイーは何かに気づいて横にかわすと光弾が飛んできた。彼はウルトラランスを構え直すと人物が現れる。

「苦戦をしているな?ファルシオンよ。」

「余計なお世話だ!」

「余計なお世話をしていなかったら貴様は負けていたはずだが?」

新たな敵も現れたのでゾファイーはどうしたらいいのかと考えている。今のこの状況でダークファルシオンの方はダメージを与えているから問題ないがもう一体の方は無傷の状態だ。

ファルシオンも加われれば自分がやられる可能性が高い、頭の中で考えているともう一体の方が素早く接近をして蹴りを入れてきた。

ゾファイーはクロスガードをして衝撃を備えたがあまりの強い打撃に吹き飛ばされてしまう。

(ぐーなんと力だ!)

バランスを取り次の態勢に構えようとしたが相手はさらに接近をしてゾファイーを殴り飛ばす。

「がは!!」

吹き飛ばされてウルトラランスを落としてしまいゾファイーは崖に激突をして倒れる。

「ぐう・・・」

「ふんこんなものか?」

「さーて今のうちにこいつを闇の戦士にしてやるぜ!!」

「まだそんなことを言っていたのか貴様は・・・」

「そうだ!こいつを闇の戦士にして光の戦士達を絶望に追い込んでくれるわ!!」

ダークファルシオンはゾファイーに近づいて闇の戦士にしようとした時光線が命中をしてもう一体の方は両手を前でクロスをしてガードをする。

「ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう!!」

「どあ!!」

着地をしたのはレオ、アストラ姉妹とセブン、ゼロ親子である。光線の方はワイドショットとワイドゼロショットの二つで四人は前の方を見て構えている。

「ゾフィーお兄ちゃん!!」

「ゾフィー兄さん!!」

ジャックとエースも駆けつけてその隣にウーマン、タロウも着地をする。

「ダークファルシオンにもう一体闇の戦士か……………」

「まさかウルトラ姉妹まで駆けつけるとはな……………覚えておくがいい!私の名前はダークレクギルス!貴様達光の戦士を抹殺するもの!」

そういつて倒れているダークファルシオンを連れて離脱をする。

「……………ダークファルシオンに続いてダークレクギルスと名乗る闇の戦士か……………さてゾフィー?あんた勝手なことをばかりするわね?」

「面目ありません。」

「まあまあウーマン姉さん、ゾフィーお兄ちゃんがすぐに見つかつてよかつたですよ。」

「だがどうしてここに私がいるのがわかつたんだい?」

「簡単よ、あんたがいつどこに出てもわかるようにヒカリが仕掛けてくれたのよ。それにあんたの部屋の盗聴できるようにしているからよ。」

(ええええええええええ!そんなことをしていたのかい!?まあ……………私が勝手に抜けだすことがあるからそういう処置はわかるけどさ。)

まさか新しい隊長室にそんなことをされているとは思ってもしなかったゾフィーであつた。

.....

ゾフィーはウルトラクリニックで治療を受けている頃、ウーマンは自分が仕事をする部屋で両手を組んで考えていた。

「.....」

「どうしたんだウーマン？」

「少しだけね。ゾフィーは何かを隠してるじゃないかって思ってしまったのよ。」

「そうですか？」

「まあ私の考え過ぎかしらね。」

ウーマンはそう言い仕事に取りかかる。一方で傷を回復したゾフィーはダークファルシオン以外の敵ダークレクギルスと名乗った闇の戦士のことを考えていた。

アブソリューティアン達とは別の勢力がいるのだなと思いつながら仕事をしているとトレギアが入ってきた。

「隊長回復をされたのですね？」

「ああ迷惑をかけてしまって申し訳ないね？」

「いえいえいつも迷惑をかけられている感じですけどね？」

グサツと心に突き刺さるが事実なのでゾフィーは何も言うことができなかつた。トレギアから書類をもらい今日の仕事に取りかかるうとする。

いつも通りの仕事をしながら彼は書類に判を押したのをトレギアに渡して彼女も確認をした。

「そういうえば隊長.....」

「どうしたんだい？」

「ええニュージェネーション達もそうですが.....アブソリューティアン達が惑星ジュランを襲撃をしたと聞きました。」

「なんだって!? コスモスは大丈夫だったかい？」

「はい、なんとかアブソリューティアン達を追い払うことができたというのもし聞きました。ですが.....」

「ああ奴らが動きだしているのは事実だね。コスモスが狙われた理

由……サーガ、レジェンド……ってところかな？」
「恐らくそうだと思います。いずれにしても……」

「そうだね。警戒はしないとね……だがどうも嫌な予感がする。」
ゾフィーは嫌な感じをしながらアブソリューティアン達が今だに動かないことに不思議に思っていた。オーブカリバーを背中に背負いながら彼はじーつと書類を見てる。

一方でゼロは自ら鍛え直すためジョーニアスと共に惑星K76にやってきていた。

「まさかここに来るとはね。」

「だが今回は私一人だけじゃないあそこを見る。」

「あれは！」

マントを羽織っているウルトラウーマンセブんとウルトラウーマンレオが現れて彼女達もゼロの特訓に付き合うことにした。

「さあ始めるわよ！アブソリューティアン達がいつ動いてもいいようにね。」

「三対一だからといって手加減はしないわよゼロ！」

「わかっているぜ！」

「ふん！」

するとセブンは何かを念力をする。ゼロに何か装着されて行く。

「テクターギア……へへへそうかい。」

「では始めよう。」

「デユワ！」

「イエア！」

動きだした戦い

ウルトラウーマンベルとジード、エックスの三人はデビルスプリンターを追っていた。彼女達は辺りを警戒をしながら飛んでベルは目を見開いていた。

「こ、これは……………」

「母さんこれって?」

「別の私を作り出した要塞「マテブランデス」……………だけどゼロのウルティメイトソードで破壊されたはずなのになぜ?」

「ですが調査をする必要があるかもしれません。」

「そうね。二人とも警戒をしながら行くわよ。」

「はい!!」

三人は残骸となっているマテブランデスの調査をしていると突然として警報が鳴り出したのでベルはまさかと思いつくと現れたのはダーククロプス、レギオロイドの大群だった。

「な!?!」

「これは!!」

「まさか残されていたダーククロプスとレギオロイドが起動をするとはね……………仕方がない、ジード、エックス……………行くわよ!」

「はいお母さん!」

「わかりました!」

「「シユワ!!」」

水の惑星リクエターにてウルトラウーマンフーマはペスターを交戦をしていた。

『ぎゃおおおおおおおお!!』

口から高熱火炎を放つがフーマは交わして連続した蹴りをペスターにお見舞いさせる。

「へーそんなトロソウな動きであたしを捕らえられると思うなよ!くらえ! 極星光波手裏剣!!」

放たれた極星光波手裏剣がペスターを真つ二つに切り裂いて撃破

した。

「へ！一丁上がり！ってうわ！」

後ろから攻撃を受けてフーマは振り返ると謎の人物が鞭を持ち構えている。

「てめえは！」

「悪いけどお前を倒させてもらうわ！」

鞭を使いフーマに攻撃をする謎の敵、だがそこに光線が放たれて敵は離れるとオーブ、ロツソ、ブルが到着をする。

「先輩たち！」

「大丈夫か？きてお前は何者だ？」

オーブはオーブカリバーを構えると相手は鞭を構えて攻撃をしてきた。

「イサ！」

「わかっているわ！」

「ブル グランド！」

「ロツソ ウインド！」

「アースブリンガー！」

「く!!」

「ハリケーンバレット！」

姉妹のコンボ攻撃を受けてダメージを受ける。そこにオーブがサンダーブレスターへと変わり膝蹴りをお見舞いさせる。

「こんなところでやられる私ではない!!」

「逃がすか！ゼットシウ・・・」

ゼットシウム光線を放とうとしたが相手は鞭でデビルスプリンターを回収をして離脱をする。

「しまった！」

「奴の狙いはエビルスプリンターか！」

四人は追いかけるために飛び経つ。

光りの国

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宇宙警備隊隊長室にいるゾフィー、彼はベルからの連絡を聞いてお

り腕を組んでいた。そこにブラザーズマントを羽織ってウーマン、ジャック、エース、タロウが入ってきた。

「ゾフィー。」

「今、宇宙各地で謎の原因不明なことが起きている。先ほどベル副隊長から連絡が入りマテブランデスの残骸を調べているところダークロプス、レギオロイドが襲い掛かってきたそうだ。」

「ならすぐに!」

「大丈夫だ、ゼット、タイタスの二人に応援に行かせている。アストラの方も調査をしているみたいだな?」

「ええ、アブソリユートタルタロスが発生をさせている場所を特定するために動いていると・・・」

「セブン姉さんとレオはジョーニアスと共にゼロを鍛え直していると聞いています。ゾフィー兄さん私達はもうしたらいいのでしょうか?」

ゾフィーは両手を組みアブソリユートティアン達が動き始めているのかとほかのウルトラ戦士達に指示を出しながら自分たちも動くように準備をする。

『それにしてもデビルスプリンターを使いあいつらは何をする気なんだろうか?』

「わかりません、いずれにしても嫌な予感がします。」

ウーマン達が隊長室を後にするとヒカリ、アンドロウーマンメロスが入ってきた。

「ゾフィー。」

「ヒカリにメロス・・・ユリアン王女救助隊のメンバーは決まったのだな? 私も入りたかったのだが・・・」

「いやあなたが入ったらだめですよ!」

「そのとおりだ!」

「・・・」

二人に言われたのでゾフィーはショボンと落ち込んでしまいメンバーリストを見ていた。

「ヒカリ、ビクトリー、メロス、アストラ、ゼノン、セブン21か・・・」

「ビクトリーはアストラの推薦と聞いています。ほかのメンバーは私が選ばせてもらいました。」

「私は？」

「いや「私は？」あの」

「よしなさいゾフィー、あなたが救出部隊に入ったら誰がほかの戦士達に指示を出すのよ。」

「……わかったよ、君達がユリアン王女を救出ができるようにサポートをするさ。」

「ユリアン王女は任せてくれ。」

「ヒカリ。」

「なんだ？」

「生きて戻ってこいいいな？メロスも！」

「わかっています。」

「もちろんだ。」

二人が隊長室を去った後彼は立ちあがり右手に装着されているコスモテクターブレスレットを見ながらボソリと呟く。

「セザル……君の娘は立派なアンドロ戦士としてギャラクシィレスキューフォースというところに着任をしているが宇宙の平和のために戦い続けている。私も君に救われたこの命……平和のために戦う。」

光の国を見ながら彼は宇宙の平和を守るために……

それぞれの戦いの報告

「申し訳ありませんゾフィー隊長!!」

「わかった。ゼット……落ち着きなさい。」

涙を流しながらゼットはゾフィーに謝っていた。彼は苦笑いをしながらもニュージエネレーション及びベルの報告を聞いていた。

「怪獣墓場にてグリーンジョ君のダークネス及びレイバトスを使いベルさんが使っているギガバトルナイザーとは違うのを生成をした。だがレイバトスはデビルスプリンターの影響で体が崩壊、さらにギナスペクターを使いグア・スペクターで襲ったというわけだな？」

「はい、なんとかレイガになって倒したのはいいですが……」
「そこに並行世界のトレギアさんと母さん? といえればいいのでしょうかが襲い掛かってきまして……」

「ベリアロクを奪っていったってことか……」

ゾフィーはベリアロク、ギガバトルナイザーを奪ったタルタロスの目的がわからない。するとウルトラサインが上がったのを見てやはり動きだしたかとすぐに別のところにウルトラサインをだした。

「ゾフィー、一体何が?」

「ああアブソリユートイアンが動きだすだろうと思ってねウルトラフォースにある惑星を守るように指示をしておいたんだ。」

「なら我々も!」

「いや君達はウルトラクリニックへと行き傷をいやすんだ。」

「ですが!」

「いいから! ベルさんですよ?」

「わかったわよほらあんたたち傷を治しに行くわよ!」

ベルの後についていくニュージエネレーション達、ビクトリーはこの後のもあるので傷を治してほしいなと思いつつ考える。

『惑星バベルにネクサスが現れるから守ってくれか……』

「ええそのためにウルトラフォースやリブットに向かうように指示を出している。ベリアルさん。」

『何かしら?』

「実は、アブソリユートイアンたちと和解はできないかと考えている私がいるんです。確かに彼らがやってきたことを許すわけじゃないんです。ですが戦いだけがすべてじゃないと思います。」

『だが奴らがそれに応じなかったときはどうする気だ?』

「もちろん戦います。光の国を守るために……ベリアルさん達も力を貸してください。」

『わかっているわよ。そのために私はいる。義息子であるお前を失わないためにね。』

ベリアルはそう言いゾフィーは惑星バベルの方へ行つたウルトラフォース達のことを心配をしながら自分が出れない立場になつたなと思ひながらいるとウーマン達が入ってきた。

「どうしたのかしら?ゾフィー?」

「……ウーマン、アムールを念のために地球の方へと派遣をしてほしい。」

「地球へ?ジャンヌがいるのに?」

「ああ念のためだ。」

「わかったわ。」

「ジャック、エース、ゴライアン達にパトロールをしておくように指示を頼む。一応レスキュー隊の力を感したら来るようにと……それとフレアとヒカリ、メロスを呼んでくれ。」

「わかりました。」

「了解です。」

「あのゾフィー兄さん私は?」

「あなたは私と一緒に書類を纏めなさい。」

「ええええええええええええ!!」

トレギアに引つ張られてタロウは引きずられて行くのをほかのメンバーは苦笑いをしながら仕事に取りかかる。

「ゾフィー呼ばれてきたがどうしたんだ?」

「ヒカリ、メロス、フレアもユリアン王女救助隊に入れてほしいんだ。」

「そうか、フレアの力か。」

「なるほどな、あたしの能力を使ってアストラと同じくザ・キングダ

ムってところを探してほしいってわけだな？」

「すまないね。」

「気にするなってあたしもユリアン王女を早く救いたいからね。」

こうしてフレアの参戦が決まり三人は部屋を後にする。

「……………」

無言でゾフィーは考えるために椅子に座りこんだ。ユリアン王女の救助をするためには様々な戦士達の力が必要だなど思い彼はかつて助けてもらったゾーンやメガロマン、トリプルファイターなどに協力要請を頼むことにした。

ゾフィーとリブット

ウルトラクリニックの一室、ゾフィーはリブットが運ばれたと聞いて惑星バベルで何が起こったのかはレオ達から聞いておりアストラはユリアン王女レスキュー部隊に合流をするために向かっていく。

「……………」

リブットはマザーシャワーを受けて傷が回復をしているのを見てゾフィーは両手を組み見ているとセブンとゼロが来た。

「ゾフィー、リブットの様子は？」

「今、マリーさんがマザーシャワーで彼女の体を回復をさせているところだ。それよりもゼロ聞いたよ。新しい力に目覚めたってね」

「へへまあな！」

「こら調子に乗るな。今回の修行でシャイニングウルティメイトゼロの力を長時間使えるようにするための修行だっことを忘れるな。」

「わかっているさ。それよりもネクサスはなんでリブットとテイターンをメタフィールドに閉じ込めたんだ？」

「……………ネクサスにも考えがあるのだろう。いずれにしてもユリアン王女レスキュー部隊が彼女を救出してくれるのを待つだけだよ。セブン、ゼロ……………君達にも出撃命令を出すまでは待機をしてくれ。」

「わかっている。行くぞゼロ」

「おうよ！それと隊長」

「なんだい？」

「この戦いが終わったらやろうぜ！」

「っておい！それは私が言おうとしたことだ!!」

「へへーん速いもん勝ちだー！じゃあな！」

「こら!!ゼロ!!」

ゼロが走っていくのでセブンも追いかけていく。彼はやれやれと思いつながらリブットの目が開いたので部屋の中に入る。

「こ、ここは……………」

「光の国にあるウルトラクリニックの一室だよ？」

「ぞ、ゾファイ隊長!? そうか私は……」

「ウルトラチーム達に運ばれてきてマリーさん事ウルトラの母がマザーシャワーで君の体を回復をさせたんだ。さてリブット……」
「はい。」

「君はアブソリューティアンと共存ができると思うかい?」

「ぞ、ゾファイ隊長?」

「……リブット、私はね彼らとは分かり合えるじゃないかと思ってるんだよ。私のように光と闇を持つ私を皆は受け入れてくれたようにね。」

「……」

「だが現実には難しいことばかりだ。おそらく彼らはそんなことを思ってもいないと思う。それでも光の国を狙うなら私は戦わないといけない。それが……宇宙警備隊長としての使命でもあるからね。」

「ゾファイ隊長……」

「リブット、君の信念で説得をするといい……共に戦ったティターンが悩んでいるようにね?」

「はい!」

リブットの元気な言葉を聞いて彼女ならやってくれろと信じてウルトラクリニックを後にする。

『全くあんたは甘ちゃんだよ?』

「カルミラか、そうかもしれないね……」

『ですが、そんなあなただから私達を追い出さないと体の中で住ませてもらっている。』

『全くだ。』

ダーゴンとヒュドラムも彼の肩に乗りながら現れているので彼は苦笑いをしながら先へ進んで隊長室へと戻り椅子に座る。

光の国を見ながら彼は彼らの光エネルギーをいつでも感じれるように目を閉じて集中をしていた。

ウルトラ戦士対アブソーティアン

ゾフィースィド

ヒカリ達がユリアン王女を救出しに敵の本拠地に侵入をしたと言う報告を受けて私は彼女達の光エネルギーがいつでも感じられるように集中をしていた。

無事に彼女達が出てくるまで仕事をしていると光エネルギーを感じた。場所は惑星ブリザード……か。

私は惑星ブリザードへと向かうように指示を出して先に向かう。ヒカリ達待っている！すぐに向かう!!

ゾフィースィド終了

惑星ブリザードではアンドロウマンメロスを始めビクトリー、ヒカリ、21、ゼノン、アストラ、フレア、ジャスティスさらに新しくレグロス仲間に加えてユリアンが救出される。

その後ろをタルタロス達が現れた。

「貴様達をここで倒してくれよう！」

「覚悟はいいな！レグロス！」

「ディアボロ!!」

すると上空から光線が放たれてヒカリは今の光線はと見るとひとりのウルトラ戦士が着地をする。

宇宙警備隊長ゾフィーだ。

「ゾフィー！来たのか！」

「皆、よくやってくれた！タルタロス！お前たちの野望は我々ウルトラ戦士が打ち砕く!!」

「ふん一人で何ができるといふんだ？」

「それはどうかな？」

ゾフィーの周りにウーマン、セブン、ジャック、エース、タロウ、トレギア、レオ、リブット、ゼロ、ベル、メビウスが着地をする。

「全く一人で勝手に行くなんて言ったのに何やっているのかしら？」

「すまないね、だが君たちなら来てくれると信じていたよ？」

ゾフィーは素晴らしいヒカリ達はユリアンを連れて光の国へと帰還

をする中アストラとレグロスは残り共に戦うというのでゾフィーは承諾をして構える。

「皆、踏ん張りどころだ！行くぞ!!」

「」「」「おう!!」「」「」「」

「行くぞ!!」

タルタロスの号令でテイターン、ディアボロ、並行世界のトレギア、ベリアルが動きだして後ろにいたアブソリユートイアンの戦士達も走りだす。

「であースラッシュ光線!」

ウーマンはスラッシュ光線を放ちアブソリユートイアン達に攻撃をした後キャッチリングを放ち拘束をする。

ジャックは飛びあがり連続キックをアブソリユートイアン達に放った後着地をしてウルトラブレスレットを構える。

「ウルトラスパーク!!」

放たれたウルトラスパークが次々にアブソリユートイアンたちを倒した後ウルトラランスに変えて攻撃をする。

「スター光線!」

エースが放つスター光線が命中をした後アブソリユートイアン達は光弾を放ったがエースは素早くかわして構える。

「ウルトラギロチン!」

放たれたウルトラギロチンをアブソリユートイアン達は受けて爆発をする。

「ジャック!エース決めるわよ!」

「はい!」

「わかりました!」

「スペシウム光線!」

「シネラマショット!」

「メタリウム光線!」

三人が放った合体光線がアブソリユートイアン達に命中をして次に向かう。タロウはトレギアと共に並行世界のトレギアと交戦をしていた。

パワーアップをしているため並行世界のトレギアの蹴りを受けてトレギアは吹き飛ばされるがタロウがキャッチをする。

「大丈夫？」

「ええ！」

「なぜだ！光も闇もない！それなのになぜ貴様はそちらの方へと立っている！」

「あなたにはわからない！私も最初はあなたと同じ考えだった……だけどそんな私をこの馬鹿は説得をしてきたわ何度も何度もね！」

「バカって……ひどいな……」

「だけどねこんな馬鹿でも！私のことを親友って呼んでくれる優しいバカなのよ!!だからこそ私は光の使者！ウルトラウーマントレギアとしてタロウと共に戦う!!」

「トレギア!!」

「行くわよタロウ！」

「ああ！」

「シユワ!!」

「くーは!!」

並行世界のトレギアが放った攻撃を二人は交わしてまずトレギアが接近をして連続した蹴りを放つ。

ガードをするとそこにタロウがスワローキックを上空から放ちトレギアは横にかわして並行世界のトレギアに命中をする。

「ぐううううう!!」

「トレリアルデイガ！」

「どあ!!」

放たれた光線を受けて並行世界のトレギアは吹き飛ぶ。一方でディアボロと交戦をするレオ、アストラ、レグロスの三人。

「ふっはっはっは！いいことを教えてやろう！なぜ俺がコスモ幻獣拳を使えるのかを！マスターアルーデを殺したのはこの俺ってことさ！」

「貴様があああああああああ!!」

「剛力破牛拳！」

「きゃああああああああ!!」

「レグロス!!」

二人はレグロスのところへと行き構え直す。一方でパワーアップをした並行世界のベリアルと交戦をするベルとゾフィー、ベリアロクを振り攻撃をするがギガバトルナイザーを使いベルがガードをしてゾフィーは飛びあがりウルトラキックを並行世界のベリアルに放ち吹き飛ばす。

「貴様らー!」

「ベルさん!」

「わかっているわよ!」

ゾフィーは接近をして闇の力を解放させて並行世界のベリアルに攻撃をする。

「なぜ貴様は闇を纏いながら光の戦士として戦える!」

「私は光と闇……それぞれの力を持っている……それは自ら迎えたもの!もう一人の義母さんと共に戦うだけ!そして力だけを求めたお前に私は負けるわけにはいかないんだ!!」

「うるせんだよ!」

ベリアロクでゾフィーに攻撃をするがウルトラブレードを出してベリアロクを受け止めて蹴りを入れた後後ろの方へと下がる。

一方でリブットはティターンと交戦をして説得をしているがティターンはアブソリューティアンの戦士として戦うことを告げてお互いに武器を使い戦う。

一方でアブソリュートタルタロスと交戦をするセブンとゼロ親子、アブソリュートタルタロスは光弾を放つ中ゼロはストロングコロナゼロへと変わりタルタロスに接近をして攻撃をする。

「ふん!そんな姿で私と戦うつもりか?」

「これは私が共に戦ったあいつらの分の力だ!ガルネイドバスター!!」

殴りながらガルネイドバスターを放ちタルタロスは後ろの方へと下がるがセブンがそこにアイスラッガーを投げつける。

「ふん!」

「く！」

ゼロは光ながらルナミラクルゼロへと姿を変えて素早く移動をしてタルタロスにダメージを与えるとボディに触れる。

「レポリュームスマッシュ！」

放たれた衝撃波を受けて吹き飛ばされた後彼女は一度ワイルドバーストに変身をしてからシャイニングウルティメイトウルトラウーマンゼロに変身をして構える。

「USワイドゼロショット！」

「ワイドショット！」

親子光線が放たれてタルタロスはバリアーでふさぐ。そのまま接近をしてウルティメイトソードを振るいセブんと共に攻撃をする。

だが次々にタルタロスが開けたであろうナラクをゾフィーは見ていた。そこにジード、ゼットが駆けつけた。

「ゾフィーさん！」

「ここはあたしたちが引きうけるっす!!」

「ゾフィー！後は任せなさい！」

「わかりました！お願いします！」

ベリアルに蹴りを入れた後メビウスのところへと行きゾフィーは提案をする。タロウも並行世界のトレギアと戦っていたがタイガ、タイタス、フォーマが駆けつけてトレギアが自分が彼女達と戦うというのを聞いてメビウスに合流をする。

「ゾフィー兄さん！」

「メビウス、今こそ私たちの力を一つに！」

「ええ！」

「わかった！」

「私たちのエネルギーを！」

「メビウスに！」

「ゾフィー兄さんたちお願いします！」

ゾフィー達は光りだしてメビウスに合体をして彼女は光りだしてメビウスインフィニティーへと変身。

メビウスブレスの刀身を伸ばしてメビュームブレードを構えて迫

りくるアブソリューティアンの兵士を横一線で吹き飛ばして一掃をするそのまま飛びあがりナラクへ向かっていく。

「いくぞおおおおおおお！コスモミラクルアタック!!」

アブソリューティアン兵士たちが攻撃をするが彼女は攻撃を受けながらもそのまま突撃をしてナラクを破壊をして着地をする。

ディアボロはレオ、アストラ、レグロスの合体攻撃で撃破をしてメビウスが合体を解除をしてゾフィーはタルタロスが自分たちごと惑星ブリザードを壊そうとしているのを見て？87光線を構えようとしたがウルトラウーマンキングが現れてタルタロスが放たれた光線を相殺をした。

そしてそれに気づいたゾフィーは飛びあがり全体をバリアーを張り時空の穴が発生をした。やがて穴がタルタロスを吸い込んでいきゾフィーは吸い込まれようとされていたが……

「全くお前というやつは！このあたしがこんな穴に吸い込まれるかよ!!」

ゴライアンがゾフィーをつかんで着地をする。

「!!」ゾフィー（兄さん）（お兄ちゃん!!）「!!」

全員が駆け寄りタロウが一番に飛びついた。

「ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふ!!」

「馬鹿馬鹿馬鹿！ゾフィー兄さんの馬鹿ああああああああああああああああああ!!」

「全くだこの大馬鹿もん!!」

全員が涙を流していた。もしゴライアンが来てくれなかったら彼は間違いなく穴に吸い込まれていた。

「そうだよ！ゾフィーお兄ちゃん本当の大馬鹿ああああああああああああああ!!」

「うわああああああああああああああああん！」

「す、すまない。お前達が助かればそれでいいと思ってね。」

「ふざけるんじゃないわよ！全員で帰って勝利を得たって言うのよ！

あんた一人だけいなくて何が勝利なのよ!!」

「すまん。」

こうしてアブソリューティアン達との激突、そしてユリアン王女は救出されたのであった。

ゾフィーの眠り

「つ……疲れた……もう体を動かすことができない。」

アブソリューティアン達との激突以外にもユリアン王女救出なども終わったのかゾフィーは自分の家のベットに倒れていた。

今までの疲れがあつたのかもしれないが彼は体を動かすことできない状態になっていた。

「いやー……色々とおつたが……なんとかユリアン王女を救うことができたのが幸いだ。本当メロスやヒカリ、フレア達が奮闘をしてくれたおかげでもある。」

『全くだね。あんたも本当は並行世界の私と最後まで戦いたかつたって顔をしているわよ?』

「……嘘になるかもしれませんが本当ですね。ゼットとジードに譲りましたが私も並行世界とはいえあなたと戦える喜びがあつたかもしれません。まあ性格とか全然違いましたけどね。」

『まあ並行世界だしな。』

ベリアルは疲れている彼の肩に乗りながらそういうと扉が開いたので誰か勝手に入ったのかと思いちらつと見るとヒカリが立っていた。

「全くお前は……」

「やあヒカリ……お疲れ様。」

「お疲れ様じゃないわ! 全く誰にも連絡をせず一人で帰って疲れているのはお互い様だろうが。」

ヒカリはエプロンをつけているのを見てゾフィーは立ちあがろうとしたがすぐに膝をついてしまう。

彼女はため息をつきながら彼の肩を借りながら部屋を移動をするところにはエースやウルトラ兄妹たちがいたので彼は驚いている。

「み、皆も来ていたのか?」

「ああ、悪いが勝手に入らせてもらったぞ?」

「全く疲れているのはあんたが一番でしょうが、誰よりもユリアン王女を助けるために色々やったのを知っているのよ? トリプルファ

イターたちやメガロマンにも援軍を頼んでいたんでしょ？警備隊員たちがデビルスプリンターで暴走をした怪獣に襲われたときにメガロマンが助けてくれたとか聞いたわ。」

裏でゾフィーが彼らに協力要請をお願いをしていた。さらにギヤラクシーレスキューフオーズやアンドロ警備隊にもゾフィーはお願いをしておりウルトラ姉妹達はため息をついていた。

「え、なんで？」

「あのねゾフィーお兄ちゃん、私達がため息をついているのはゾフィーお兄ちゃんが私たち以上に動いているってことなの。」

「確かに私達はゾフィー兄さんからしたらまだまだかもしれませんが、兄さんが動き過ぎて父さんたちが頭を抱えているのを何度も見ますからね。」

「……………」

ゾフィーは何も言えなかった。裏でそんなことになっているとは思ってもいなかったがなぜ彼女たちがそれを知っているって考えたが新しくなった隊長室に盗聴などができるようになっていたのですっかり忘れていたのだ。

「まあまあ姉さんたちも落ち着いてください。」

「そうだよ。せっかく勝利をしたんだからね。トレギア持ってきたでしょ？」

「全く、一応持ってきたわよ。」

トレギアが出したのはお酒だったのでゾフィーは嫌な予感がしていた。全員が人間態の姿になったのを見て自分もなり乾杯をするこたになった。

「ではユリアン王女救出及びアブソリューティアンたちとの一旦の勝利に乾杯！」

「！！「乾杯！！」！！」

ビールを飲んでおりウーマン達はぶはーといい飲んでいる中ゾフィーはメビウスに注がれながら飲んでいた。

「ありがとうメビウス……………」

「いえいえゾフィー兄さんも頑張っていますから私なんてそういうの

でしかお礼ができませんから。」

「そんなことはないよ君がナラクを壊したおかげで戦局を返すことができたのだからね。」

ゾフィーはそう言いながら飲んでみると自身の手には豊満な胸が当たっているの誰だろうと見ていた。

「あん？ゾフィーにいさーん。」

「タロウ何をしているのかな？かな？」

「と、トレギア、ハイライトを消した目で見ないですよ。」

タロウが抱き付いてるのを見てトレギアがハイライトを消したまま近づいてきたのですぐに離れた。

ゾフィーは何度もそのやり取りを見ていたのでふふと笑っていると突然として後ろから抱き付かれたので彼は頭を撫でる。

「ウーマンお疲れ様。」

「よくわかったわね。」

「昔、君が小さい時に甘えたいというサインだっこともわかるよ。こんな大勢の前でやるなんて思わなかっただけだよ（笑）」

彼は笑いながらウーマンの頭を撫でているとメビウスがどかされてセブンとジャックが抱き付いてきた。

「ずるいぞウーマンだけ。」

「ゾフィーお兄ちゃん私も私も」

ジャックが頭を出してきたので彼女の頭を撫でていた。セブンも同じようにしようとしたがアイスラッガーがあったので一度取り彼女の頭を撫でる。

ほかの姉妹達も自分たちもという視線だったので立ちあがろうとしたがウーマン達がしつかりとつかんでいたので動けない状態である。

（あ、あれ？このパターン）

「ねえゾフィー兄さん、私達頑張ったご褒美がほしいんだよね？」

「その通り。私もザ・キングダムの本拠地を見つけたのですよ？だからご褒美がほしいなと」

「……待ってくれ嫌な予感しかしないのだが？」

「わかって聞いているのかしらゾフィーお兄ちゃん??」

「ウーマンさんお願いです離してもらえたら嬉しいのですが?」

「却下?」

「二」「二」さあやりましょう!!」「二」「二」

「ですよねえええええええええええええええええええ!!」

こうしてゾフィーの家の光が消えることはなかった。

3日の休み

「え？3日も休み……ですか？」

ここは大隊長室、今ゾフィーを始めとしたウルトラ戦士達が集められており3日の休みを与えているところだ。

「そうだ、アブソリューティアンたちとの戦いでお前達は本当に頑張った。そのおかげでユリアン王女が救出されたのも事実、そこで3日の休みをお前達に与えることにした。」

「ちよ、ちよと待つてください！宇宙警備隊隊長の私まで休んだら誰が指揮をとるのですか？」

「おいおいゾフィー、ここにいるじゃないか、前に宇宙警備隊長をしていたのが目の前にいるのだが？」

そう言われてしまったらゾフィーは何も言えなくなり、3日の休みを堪能をすることになったが彼はどうしようかと思いきやキング星へと向かうことにした。

宇宙空間を飛びながらベリアルは彼の肩に現れた。

「キング星に行って何をやる気なんだい？」

「なんとなくですよ。」

「なんとなくね……」

やがてキング星に着地をしてゾフィーは歩きウルトラウーマンキングが待っていたかのように座っていた。

「やあ来たわねゾフィーよ。」

「キング、アブソリューティアンとの最後の戦いの時はありがとうございました。」

「気にすることはないわ。それとゾフィー……」

「なんででしょうか？」

「あなたが頼んでいたものができたのだけど持っていくかしら？」

「完成をしたのですね。わかりました。」

キングからゾフィーはブレスレットのようなものを受け取り左腕前部分に装着をして右腕にはコスモテクターブレスレットが装備されているなどゾフィー自身もブレスレット系が多いなど思いながら

苦笑いをしながらキング星を後にする。

ちなみにゾフィーがキングから授けられたのは彼が前世で見た超闘士ウルトラマンが装備をしていたウルトラクラウンをもらったのだ。本当だったらアブソリューティアンたちとの戦いで使おうとしたが製造などに時間がかかってしまったため間に合わなかったのだ。

惑星「ゾイロイド」に着地をしたゾフィーは早速ウルトラクラウンを装着をする。

「デユワー！」

目元部分に装着をしてクラウンがゾフィーの耳元に移動をしてウルトラホーンのように装着された姿となり彼は力を込めると中にいるベリアル達は驚いている。

「な、なんだい!?!」

「ゾフィーの力が我らが思っている以上の力になっている!?!」

「これはこれは……………」

「光と闇……………それらを一つにしたこの子が……………まさか!?!」

「……………」

ベリアルは中でゾフィーの力がさらに上昇をしていくのを見て伝説の超戦士と呼ばれていることが聞いたことがあったのを思いだしだが……………まさか自分の義息子がその戦士なのかと思いながらエネルギーなどが上昇をしていくのを感じていた。

ゾフィーは後ろの方を振り返ると現れたのは宇宙人を見て驚いている。

「お前は……………えっと誰だっけ？」

「まさか宇宙警備隊長……………ゾフィーがいるとはな……………私の名前はサタンゴーネ、クローズ星名門サタン族の出身……………であつたものだ。」

「貴様はジャンボークAと戦ったクローズ星人か？」

「そうだ。ジャンボークAと戦い死んだはずだったが目を覚ましたらこの星で目を覚ました。すでにデモンゴーネも倒されてしまった今はこうしてここでのんびり過ごしていたというわけだ。」

「なるほど……ん!!」

二人は前を向くとジャンボーグAのようなものが現れた。

「あれは……ジャンボーグA?」

「違う、あれはジャンキラーだ。しかも改良をされているもので間違いない。」

ジャンキラー改は胸部のガトリング砲を放ち二人に攻撃をしてきた。ゾフィーはウルトラクラウンを付けたままだったので走りだしてジャンキラー改は胴体から分銅鎌を出して振りまわして攻撃をしてきた。

だがゾフィーはその分銅鎌を左手でキャッチをして引つ張りジャンキラー改が引つ張られてボディブローを放ちダメージを与える。

「はああああああああ!!」

そのまま接近をして連続したパンチをジャンキラー改に放つていきダメージを与えていきそのまま上空へとあげて投げた。

「はああああ……」

両手にエネルギーをためていき構える。

「バーニングプラズマ!!」

グレートから学んだバーニングプラズマが放たれてジャンキラー改に命中をして爆発する。

「……まさかジャンキラーが……だがデモンゴーストは倒されたはずなのになぜ?」

「グロース星人が再び動き出したのだろうか?」

「わからない。立花 ナオキがグロース星を壊したわけではないはずだからな。」

ゾフィーはウルトラクラウンを外して左腕部に装着させてから惑星ゾイロイドを後にする。

襲撃されたゾフィー

宇宙空間を飛んでいる我らの宇宙警備隊長のゾフィー、ジャンキラー改に襲われるがウルトラクラウンの力で力を解放させたバーニングプラズマで撃破する。

だが一体誰がジャンキラー改を使って彼に襲わせたのか、不思議に思いつながらも彼は次の休暇の場所をどこで過ごすかと探索をしていると光線が飛んできたので回避をする。

「……………」

彼は辺りを警戒をしながら集中をして相手の気配を探すことにした。場所がわかったのか後ろを振り返り構える。

「そこだー！」

スペシウム光線を放ち気配を感じた場所へと放つと命中をして姿が現れる。ロボットののような姿をしておりゾフィーは前世でこんなロボットいたかな？と思いつながら構えていると相手は腕を飛ばしてきた。

回避をすると相手はブースターを起動させてゾフィーに突進をしたが横へと交わすとウルトラギロチンを放つが回転をして粉碎をする。

これは厄介だなとゾフィーは構え直すとロボットは目からビームを放ってきたのでウルトラバリアーを張りガードをする。

「なんというやつだ。ウルトラギロチンは粉碎をするわ。その装甲は私の光線を受け付けられない合金でできている。」

『なんだいあれ!!』

『なら我の出番だ!』

腕をクロスしてダーゴンタイプへと変わりロボットが突進をしてきたので体で受け止めると大回転をして投げ飛ばす。

だがすぐにロボットは態勢を立て直してきたのでゾフィーは驚いている。

「なんと！我の大回転投げを受けても効いていないのか!？」

『ではスピードでかく乱させてみましょう。』

再び腕をクロスしてヒュドラムタイプへと変わるとヒュドラムダガーで相手に攻撃をするが……パキンという音が聞こえてみるとヒュドラムダガーが折れていた。

「な、私のダガーが……ぐえー！」

ダガーが折れたのに気づいて相手の攻撃を受けて吹き飛ばされてしまいゾフィーはすぐに元の姿に戻る。

今までこんなロボットは見たことがないので彼はM87光線を構えようとしたがロボットは突然として開いた穴の中へと消えていき彼は構えを解いた。

『いったいあれは何だい？』

「……」

ゾフィースide

いったい先ほど襲ってきたあのロボットは何だ？ウルトラの世界であんなロケットパンチや目からビームを放つ敵なんていないはずだ。それにヒュドラムダガー折れるほどの堅さの敵はキングジョーなら彼のダガーが折れることはない。

なら突然として現れて消えたあの敵は一体何だろうか？宇宙人がいるかと思っていたが……宇宙戦なども見当たらないし電波のようなものは感じられなかった。

いずれにしても敵がいなくなってしまった以上、ここで止まるわけにはいかないな。再び休暇ができる場所を求めて私は宇宙空間を飛んで行く。

『それにしても不思議な敵だったね。』

『私のダガーが……ダガーが……』

『駄目だこりゃ。』

『仕方があるまい、こやつは武器であったダガーが折れてしまったのだからな。』

中でヒュドラムがダガーが折れてしまったことに落ち込んでいるようだ。とりあえずどこか落ち着けそうな惑星はこの辺にあったのだろうか？おや？あれはリゾート惑星「アトランタ」ではないか。

ふむでは休暇をする場所をあそこにするでしょう。私は惑星アト

ランタに向かって飛んで行くのであった。

水着大パニック!!

惑星アトランタに到着をしたゾフィーは人間態へとなりのんびりここで過ごすことにした。

だがその様子を見ている人物達がいた。それはウルトラ姉妹達である。彼女達も休暇を楽しむ為に惑星アトランタに来ていた。

「おいウーマン、あれって」

「ええ間違いないゾフィーだわ。」

「おー「待ちなさいタロウ!」うご!」

エースがタロウの口を抑えてジャックはウーマンに話しかける。

「どうするのですかウーマン姉さん。」

「そうね……ふふふわかっているでしょ?」

「もちろんだ。」

ほかの姉妹達とアイコンタクトをとり彼女たちは水着に着替えるために移動をするのであった。

そんなことは知らないゾフィーは人間態の姿で水着へと着替えて腕を伸ばしていた。アブソリューティアンたちとの戦いなどの疲れなども惑星アトランタの綺麗な海で泳ぐことで解消をすることにした。

ちなみにここアトランタでは戦闘は禁止されているので宇宙人たちもここでは武装などは外されたりして過ごすように言われているため喧嘩は起こるが武装などが無いので殴り合いなどがある時はゾフィーも止めるために行動はする。

「さーて「そこのお兄さん、私達と一緒に泳がないかしら?」ん?」

声が出たので振り返ると姉妹達がいたので驚いてしまう。しかも彼女達は水着に着替えているので顔を赤くしてしまう。

「おや?どうしたんだ?」

ニヤニヤとセブンは笑っているのを見てゾフィーはからかわれているなど思いながらも突然として手に誰かが抱き付いてきたのを見るとジャックとエースが自分の手に抱き付いているので驚いてしまう。

「ジャックにエース!」

「えへへへへどうですかゾフィーお兄ちゃん?」

「私達の水着……」

「ああ綺麗だぞ二人とも」

「むーろーゾフィー兄さん泳ごうよ!」

「ぬお!」

タロウが引つ張り彼らは飛びこんでいきほかの姉妹達も楽しむこととした。そのままゾフィーはクロールをしているとレオとジャック、エースがゾフィーと同じようにクロールを泳いでおりエイティはのんびりとヒカリはぷかーと浮かんでいた。

すると競争をしていたメンバーの水波がヒカリを襲い彼女に思いつきり水をかけられて彼女は右手にナイトブレスを発生させたのを見てメビウスは止めている。

「ヒカリ!ここでは戦闘禁止だから!ダメえええええええええええええ!!」

「離せメビウス!あいつらには少しお仕置が必要だ!!」

ちなみに来ているのはウーマン達で、ほかのメンバーはいないのだ。泳ぎつかれたゾフィーは浮かんでいるとその上に乗れこもうとタロウが飛びこんできたが彼は回避をする。

「おべえええええええええええええええええ!!」

「何やっているのよあんた……」

トレギアは呆れておりゾフィーも一体何をしているんだ?と首をかしげて浮かぶことにした。

(それにしても惑星アトランタでプールがあるとは思ってもいなかったよ。流れるプールなどがあってこうしてのんびりをする事ができるからね。)

敵に襲われてからこの星へときたが……まさかウーマン達もいるとは思ってもいなかったので驚いてしまうが、こうして一緒に遊ぶなどウーマンとセブンは小さい時に遊んだりしていたがほかの姉妹達とはそんなことはなかったのを見てると何かが浮かんできたので水着などで驚いてしまう。

「……なぜ水着が？」

「ぞ、ゾフィー兄さん。」

すると頭だけ出しているレオの姿があったのでちらつと右手に持っている水着を見せると彼女は顔を真っ赤にして首を縦に振るの
で渡して彼女は水の中で水着を装着をしているのかなと思ひ彼は浮
かんでいた。

そして泳ぎ着かれたのかゾフィーはプールから出て休んでいると
ウーマン達も上がってきた。

「あらゾフィー、あがったの？」

「それは私の台詞だよ。それにしても君達もここに来ているなんて
ね。」

「はい、この惑星のことは前から行ってみたいと思ひましてね。それ
で姉さんたちと相談をしてここへと来たんです。まさかゾフィーお
兄ちゃんがいるなんて思ってもいなかったよ。」

「私は敵の襲撃などあったからね。なんとか撃破をしてこの惑星へき
たんだよ。」

「!!」

「あ……」

彼はすぐに口を抑えたがヒカリとメビウスが抑えたが彼女達は水
着などで思いつきり当たってしまった。

「さてゾフィー、今度はどのような敵に襲われたのか詳しく話しても
らいましょうか？」

「……はい。」

ゾフィー説明中

「謎のロボット？腕が飛んで目からビームを放つロボット怪獣なんて
いたかしら？」

「いや聞いたことがない。」

「はい、ロボットで分離をするロボット怪獣ならわかりますけ
ど……腕を飛ばしたり目からビームを出すロボットは聞いた
ことがないです。」

「ええ……しかもゾフィー兄さんが放ったスペシウム光線が効かない

なんて凄い装甲ですね。」

「しかもウルトラギロチンを回転をして粉碎って……それでどうしたのそのロボット怪獣。」

「それが突然として穴が空いて消えたか……不思議なロボットだな。」

「ああ……」

ゾフィーはウーマン達と話をしながら自分に襲い掛かってきた謎のロボットが前世でどこかで見たことがあるような気がした。だがありえない話でもあるが……いずれにしてもそれは自分の中でしまい込むことにした。

惑星アトランタを襲う怪獣

惑星アトランタで過ごしているウルトラ兄妹達、今彼らがしているのはバーベキューだ。前にウーマンからタロウの五人はバーベキューをしておりゾフィーはその時は宇宙からのパトロールを終えてから参加をしたから後からなので最初から参加したのは初めてである。

「うーん美味しい！」

「それ地球の時も言っていなかった？」

「まあまあいいじゃないかエース、それに今回は私も最初から参加をしているからね。」

「テンペラー星人の時はお兄ちゃんだけ遅れたんだよね？」

「ああ、テンペラー星人が地球にいるお前達を狙っていることがわかったからね。色々と・・・ん？」

彼は突然として上の方を見たので全員が見ると上空から怪獣が現れて咆哮をした。

『ぎゃおおおおおおおおおおおおお!!』

現れたのはウルトラマンダイナと戦った破壊獣モンスアーガーだ。モンスアーガーは惑星アトランタに着地をして歩いていている。

「な!?!あいつまさかここを破壊をしようとしているの!?!」

「だがなぜここに怪獣が・・・」

「仕方がない、皆はこの人たちを避難をさせてやってほしい。」

「兄さんは!?!」

「奴をここから離れさせる!」

「・・・わかったわ。私達も避難を終わらせたらすぐに向かうから!!」

ウーマン達がほかの人たちを避難させるために向かうと彼は右手を掲げるとプラズマ鉱石が光だしていく。

「ゾフィーいいいいいいいいいいいいいい!!」

彼を包んでいきゾフィーが現れてそのままモンスアーガーに体当たりをしてつかんでこことは違う場所にテレポーションをする。

ほかの場所に移動をしたゾフィーは離れるとモンスアーガーは口から光弾を放って攻撃をしてきたが横にかわして接近をして蹴りを入れるが腕でガードされる。

「流石ダイナを苦戦させただけはあるな。だが！お前の弱点は！」

ゾフィーは飛びあがり弱点である青いコアめがけて流星キックを放つ。だが……

「ぐああああああああああああ!!」

突然として彼は右足を抑えて倒れてしまう。前世の記憶で弱点は上部のコアだったはずと見ると守るかのようにシャッターされており電撃を纏っていたのだ。

「まさかの強化型なのか!?ぐ……足が……」

先ほどのシャッターに電撃が纏われていたのか立とうとしたが痺れて膝をついてしまう。モンスアーガーは近づいてゾフィーに殴りかかろうとした時に彼の前に誰かが立ちガードをしている。

「な、なんていう力なんですか!!」

メビウスである。彼女の姿はバーニングブレイブの姿でモンスアーガーの剛腕を受け止めていた。

「メビウス！」

「私だけじゃありませんよ！」

光線が放たれてモンスアーガーが吹き飛ばされるとほかの姉妹達も合流をする。

「大丈夫かゾフィー！」

「苦戦をしているわね。」

「あのコアが弱点ですね！よーし！」

「待てジャック！あそこには電撃が張っている！私もあそこに攻撃をしたが……」

「ガードされたのですね。立てますか？」

「すまない、痺れて立つことができない。」

「仕方がないわ。行くわよ!!」

ウーマンの指示でセブン、ジャック、エース、タロウ、レオが走りモンスアーガーに攻撃をする。彼を守るのはヒカリ、トレギア、エイ

テイ、メビウス、アストラで彼は辺りを見ながらモンスアーガーと戦う姉妹達を見ている。

「へアー！」

ウーマンが放った八つ裂き光輪をモンスアーガーは腕で粉碎をするとセブンとジャックがエメリウム光線とウルトラシヨットを放ちボディに命中させるがモンスアーガーは歩いてきてエースがバーチカルギロチンを放つ。

『ぎゃお!!』

「バーチカルギロチンが！」

「とうー！」

タロウは接近をしてアトミックパンチを放つがモンスアーガーは彼女が放った拳を受け止める。

「ぐううううううう!!」

そのまま力でタロウを投げ飛ばして後ろから迫っていたレオに投げる。

「タロウ姉さんってがはー！」

「ご、ごめん」

姉妹達が苦戦をしているゾフィーは立ちあがろうとしたが……まだ痺れておりメビウスたちが支えている。

「……………」

トレギアはスキャン装置を使いモンスアーガーを調べていた。

「あの頭部が弱点なのは間違いないのですが……あのシャツター部分さえ壊せばなんとかかなりそうですね。」

「だが問題は……………」

「そうか！コスモテクター！アンドロメロス！」

ゾフィーはアンドロメロスになり飛びあがった。

「ゾフィー!?!」

すると彼はオーブカリバーを構えてモンスアーガーのシャツターされている部分にエネルギーを込めたオーブカリバーを突き刺した。シャツターに罅が入りオーブカリバーを抜いて指示を出す。

「今だ！」

「スペシウム光線！」

「ワイドショット！」

「シネラマショット！」

「メタリウム光線！」

「ストリウム光線！」

「シューティングビーム！」

「サクシウム光線！」

「メビュウムショット！」

「ナイトショット！」

「トレラシウム光線！」

ウルトラ姉妹とトレギアが放った光線がモンスアーガーに命中をして爆散する。ゾフィーはコスモテクターを解除をして両手を組んでモンスアーガーを送りこんだ人物は何者なのだろうかと思いがら考えていた。

「やったわね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もしかして誰がモンスアーガーを送りこんできたのか考えていたのか？」

「ああそのとおりだ。惑星アトランタは侵略行為などは禁止されているのにも関わらずモンスアーガーを送りこんできた。不思議だな。」

「しかもあのモンスアーガーはデビルスプリンター反応が出ておりました。あの頭部を守るシャッター能力もデビルスプリンターの影響かもしれませんね。」

「いずれにしても警戒はしておいた方がいいな。やれやれ休日なのにいつもの変わらないか・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

ゾフィーはため息をついて姉妹達と共に惑星アトランタへと戻り休暇を堪能するのであった。

でいた。

(いったいどういうことだ!?なぜデレデレで発情した目になって
いる。てかやめて!なんか最近成長をした胸が当たっているのですか
!?)

彼はどうしたらいいのかと悩みながら考えていると体が反転をし
てエースの顔が目の前に現れてキスをしてきた。

「うぐー!」

「はあ...はあ...」

さらに発情をしたのか北斗 景子の姿へと変身をしてゾフィー自
身はこのままじゃまずいとテレポーテーションを発動して逃げる。

なんとかエースから逃れたゾフィーは原因が誰なのだろうかと思
い調べようとしたが光線が放たれてきたがウルトラバリアーを張り
ガードをするとタロウ、ジャックが着地をして先ほどのエースたちと
同じようにハイライトが消えた目で笑っていたのを見て彼女達も感
染をしたのかと思いだしたらいいのかと悩んでいた。

「うふふふゾフィーお兄ちゃん?」

「逃がさないよ?!」

二人はじりじりと近づいてきたので彼は仕方がないとカプセルを
投げる。

「タイラント!ゼットン!二人を食い止めてくれ!」

「おうよ!」

「わかった。」

ゾフィーはタイラントとゼットンに食い止めるように言い原因で
あろう人物のところへと向かい扉を開ける。

「ヒカリ!!」

「.....」

研究室の扉を開けると中にはポニーテールにして研究をしている
であろうヒカリが座っておりゾフィーは近づいていこうとした時、扉
がガチャンとロックされる音が聞こえたので振り返ると先ほど空い
ていた扉が閉まっており驚いていると彼女が立ちあがりそのまま近
づいてゾフィーは地面に倒れてしまう。

「あ、あれ?」

彼は起き上がろうとしたが……力などが入ってこないの
どう言うことかを見るとヒカリの目からハイライトが消えた状態に
なっているのでまさかと思いい声をかける。

「ヒカリさーん?まさか今回もあなたの仕業なのですか?」

「ああそうとも、以前使用をしたヤンデレ薬をパワーアップをさせた
のだが……お前のことだ。ウーマン達に襲われたから私のと
ころへと来たのだろ?それを予想をしていたのさ。以前はメビウス
によつて破壊された扉も改良を加えたのにしている。つ・ま・り?
だーれにも邪魔をされずにやれるというわけだ。というわけ
で……ゾフィー兄さん、私とやろうね?」

(まじかよ、前もヒカリだったが今回も改良をしたヤンデレ薬だ?!
しかもこれ光エネルギーが消耗をするものだ。……あ、うん

＼(^o^) /オワタ)

こうして人間態になりヒカりに絞られるゾフィーであった。ちな
みにこの後ほかの姉妹達も参戦をして彼から搾り取るのであった。

次の日はゾフィーは緊急の休暇をとることとなり正気に戻った
ウーマン達は反省をして彼の仕事も引きうけるのであった。

ゾフィー搾り取られた後

ゾフィーの家

「ご、ご主人様……」

「……」

バードンがベットの上で倒れている人物ゾフィーに声をかけるが反応がない、それもそのはず……今のゾフィーはほとんど搾り取られてしまい話すこともできない状態である。

光エネルギーもだいたい消耗をしており現在は自宅のベットの上で寝かせている状態である。

「ご主人様がこんな状態になるなんて……」

「正直に言えば驚いているぜ。」

「いつのまにか……突破された。」

タイラントとゼットンがジャックとタロウを止めていたがいつの間にか突破されて家の方へと帰ったらゾフィーが搾り取られていたのであった。バキシマルとダークロプスゼロも同じように首をかしているのであった。

いずれにしても今のゾフィーはほとんど戦うことなどできないのでウーマン達在必死に彼の変わりに仕事をこなしている状態である。隊長の役目はベルが変わりに務めておりヒカリとトレギアはゾフィーが回復ができる光エネルギー装置を開発をしているところである。

「まさかヤンデレ薬であそこまで搾り取ることになるとはな……」

「ヒカリ長官……やり過ぎですよ。」

「それはお前もだろうがトレギア！トレギアアイを装着をしてあの姿でゾフィーを誘惑をしておいて何を言う!!」

「そ、それは言わないでください。自分でもなんであんなことをしたのか恥ずかしいですよ。」

二人は顔を赤くしながらゾフィーとやったことを思いだしてお腹をさすっていた。それはほかのウーマン達も同じでタロウは教えながら生徒たちがいないときにお腹を抑えていた。

(あれだけ出されたら子供とかできないかなーなんてね(笑))

ニヤニヤしながらいるがそれはウーマン達も同じでお腹を抑えていた。

「……………」

「ウーマン姉さんさつきからお腹をさすってばかりですけど?」

「いや薬のせいとはいえゾフィーにあれだけ出されたらねと思ってね。」

「確かに、久しぶりにあんなだけ出されたらな。」

ウーマン達は笑いながらお腹をさすり仕事にとりかかる。一方でエースは調子がいいのか光線を放ってきた円盤軍に対して構えている。

「これは敵対行為と見ていいかしら?なら遠慮なく!サーキュラーギロチン!バーチカルギロチン!マルチギロチン!ウルトラギロチン!」

エースの連続したギロチン技が円盤軍に命中をしてエースはお腹をさすりながらパンチレーザーを放ち撃破していく。

光の国へと戻りゾフィーの家では彼の両目が光つたのを見てバードンが喜んだ。

「ご主人様が目を覚ましたああああああああ!!」

「!!!!」

カプセル怪獣たちはゾフィーの方へと行き彼は起き上がる。

「うう……………ひどい目にあった。バードン、それに皆もありがとうね。」

「いや悪いご主人。」

「私達突破された。」

「そのようだね。ジャックとタロウだからな相手は。」

彼は鏡を見てやつれたような顔をしているので苦笑いをして起き上がろうとしたが体力が消耗をしているので倒れてしまう。

「あ、あれ?体が動かない?」

「当たり前だよご主人。」

「今、ご飯作るからって私達ご飯作れない。」

「二」……「三」

「……よし、ウルトラスマホー！これでえつとあつたあつた。」
ゾフィーはウルトラスマホを使いどこかに電話をしているので
バードンたちは誰に電話をしているのだろうと思いつながら待ってい
ると40分ほどで到着をした。

「ま、毎度……え。エースデリバリーです。」

エースがデリバリーの格好でやってきたのでそう言うことかと思
いながら中に入り土下座をする。

「申し訳ございませんでした!!」

「あーエース、別に気にしていないから大丈夫だよ？薬のせいだし
ね。」

「だけど私、ゾフィー兄さんにあれだけ出されて……子どもが
できたらいいなと思ってしまいました。」

(私、彼女達にどれだけ出したんだろう?)

エースがお腹を抑えているのを見てゾフィーはどんだけ出したん
だと思いつながらエースのご飯を食べることにした。

それから二日後にゾフィーは完全に復活をしてウーマン達から土
下座を受けるのであつた。

地球へ

ゾファイー side

仕事に復帰をした私は太陽系をパトロールをしていた。冥王星から飛び海王星、天王星、土星、木星を飛びながら火星を通過して太陽系第三惑星地球……ウーマンをはじめとしたウルトラ戦士達が守ってきている地球……私が出会ったサコミズがいた地球……ジャンヌ君たちが守ってきた地球でもあるな。

本当にこの地球は太陽系の中でも美しい星だ。色んな宇宙人が侵略をしようとしてきたがウーマン始めの戦士達によって粉碎された。私はこの地球をいつまでも見守っているつもりだ。ん？一隻の宇宙船が地球の方へと向かっている？よし追跡をしよう。

宇宙船を追いかけるために私は地球へと向かっていく。

「そこの宇宙船止まるんだー！」

私は警告をするが相手の宇宙船はそのままスルーをして地球の方へとスピードを上げたので仕方がないのでゼット光線を放ち宇宙船に命中させてどこかの島へと落下をしていくので追いかける。

一体何が目的なのか……

ゾファイー side 終了

Z光線を放ち宇宙船は落下をしてどこかの島へ着地をした。ゾファイーも同じように島に着地をしてゆっくりと歩いて宇宙船へと近づいていくと円盤が開いて怪獣が現れる。

「あれは……エリ巻恐竜ジラース!?!なぜ円盤から？」

円盤から現れたジラースは口から熱線を放ってきたのでゾファイーは交わすとこれ以上暴れるのはよくないとジラースを止めるために攻撃をする。

ゾファイーのゾファイーチョップがジラースの頭部に放たれる。

ジラースは剛腕でゾファイーを殴ろうとしたが彼はつかんで投げ飛ばす。お互いに構えていると円盤からビームがゾファイーに放たれる。

ゾファイーは気づいてウルトラクロスシールドでガードをしたが後ろからジラースが突進をして吹き飛ばされてしまう。

「ぐ！」

ジラーズは口から熱線を放とうとしたが胴体に蹴りを入れて彼は後ろの方へと後退をすると立ちあがりジラーズのエリ巻を引きちぎり闘牛士のように構えていた。

ジラーズは突進をしてきたが彼は闘牛士のように交わしていきジラーズは転んでしまう。

そのままエリ巻を捨てるとやむを得まいとスペシウム光線を放ちジラーズは倒れる。

「威力は落としている。少し倒れておいてくれ……」

そういつてジラーズの頭を撫でてから立ちあがり円盤の方へと向かっていく。円盤はビームを放つが彼は素手でガードをするとミクロ化して中に入りこむ。

「いったい誰がジラーズを？いずれにしても無理やり連れてきた感じがしたな。」

円盤の中を歩いていくと目的の場所に到着をしたので扉を蹴ると宇宙人がいた。

「宇宙警備隊長ゾフィー!？」

「お前は科学宇宙人「マイスター星人」!？ジラーズはお前が!」

「そのとおりだ!技術応用で開発をしたもの……この地球で実験をするつもりだったが……まさか貴様がいるとはな!」

「ジラーズを無理やり連れてきて許さんぞ!!」

「くらえ!」

マイスター星人は機械をいじりゾフィーに攻撃をするが彼はガードをしてマイスター星人に対してウェツジ光線を放ちマイスター星人に命中をする。

「どあああああああ!お、おのれ……こうなれば巨大化薬で!!」

彼は自身に巨大化薬を飲み円盤の中で巨大化をしようとしたので彼は一度外に出てから巨大化をする。

「おのれ!ゾフィーめ!!」

「マイスター星人!これまでの違法な怪獣の制作及び改造など様々な

行為を見逃すわけにはいかないぞ!!」

「これでもくらえー!」

マイスター星人は右手に銃を持ちゾフィーに放ってきた。彼は説得は不可能と判断をして戦闘態勢をする。

走りだして飛びあがりゾフィーキックが命中をする。

「どあー!」

そのまま銃に対してウルトラブレスレットを構えてウルトラスパークが放たれて銃を切断させる。そしてそのままマイスター星人をつかんで上空に投げると必殺技を構える。

「M87光線!」

放たれたM87光線がマイスター星人に命中をして爆散をする。彼は撃破するとジラスに近づいて急いで光の国へと運ばないといけないなどカプセル怪獣たちが収納されているカプセルに入れて光の国へと戻るために地球を後にする。

治療へ

ウルトラクリニック、ゾフィーは治療室を見ていた。治療を受けているのは彼が地球でマイスター星人が無理やり連れてきたであろうジラースである。

彼は気絶させた後光の国へと連れて帰りジラースの治療をウルトラの母にお願いをして彼女は承諾をして治療をしているところである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブラザーズマントを羽織った姿でゾフィーはマザー光線を受けているジラースを見てみるとゼロが入ってきた。

「あれ？隊長どうしたんだ？」

「ああゼロか・・・・・・・・」

「ん？」

ゼロもゾフィーが見ているのが気になったのか覗くとウルトラの母がジラースにマザー光線を放っているところなので聞くことにした。

「どうしてジラースが？」

「マイスター星人が無理やり連れてきた怪獣なんだ。とりあえず気絶させてから光の国へと連れてきたんだよ。昔のバードンのような感じだな。」

バードンも昔雛の時に無理やり連れていかれて改造をされそうになったときにゾフィーが助けて今はカプセル怪獣として活躍をしている。

そして治療が終わったのかウルトラの母がカプセルを持ちゾフィーに渡す。

「治療の方は終わりました。後は・・・・・・・・あなたがジラースをどうするかを決めてくださいね？」

「わかりました。ありがとうございます。」

ゾフィーはウルトラクリニックを後にして隊長室の方へと戻りブラザーズマントを飾って椅子に座りジラースが入っているカプセル

をじーつと見ていると扉が開いてセブンが書類を持ちやってきた。

「ゾフィー、これに確認を……何しているんだ？」

「ああセブン、マイスター星人が無理やり連れてきたジラースをどうしようか考えていたんだよね。私としてはジラースが住みやすい星に返そうかと思っっているんだよ。」

「確かにな、無理やり連れてこられたジラースも可哀想だ。」

お互いに話をしながら書類を受け取り彼は確認をして受け取る。

「……」

「アブソリユートイアン達が珍しく大人しいな。」

「まあね……ユリアン王女は奪還されて光の国に攻める方法がないからね。いずれにしても油断はできないから……警戒はしているけどね。」

セブンが隊長室を出て彼もジラースを住んでいたのに近い星に送るために光の国を後にして飛び経つ。

「……」

ジラースが収納されているカプセルをじーつと見ながら彼は宇宙空間を飛びジラースが住める惑星を探して数時間飛んでいると惑星「アクエリアス」を見つける。

自然などが多いこの惑星ならジラースも住めるであろうと向かい着地をすると彼はジラースをカプセルから出す。

『ぎゃお……』

「ジラースよ、この惑星ならお前を誰にも縛られないはず……達者で暮らすといい。」

ゾフィーは振り返り飛び経とうとした時攻撃が放たれたのでジラースが咆哮をして上の方を見るとメシエ星人が攻撃をしたのかと構え直す。

「メシエ星人！」

「宇宙警備隊長ゾフィー！お前の命をもらうぞ!!」

メシエ星人はゾフィーに向かって突撃をしてきた。彼もジラースがいるので動くことができないので相対をするために構えて殴りかかるメシエ星人をつかんで投げ飛ばす。

するとメシエ星人はジラースに気づいて人質を取ろうとしたのを見てゾフィーはウルトラブレスレットを構える。

「ウルトラリング!!」

ブレスレットが変形をしてメシエ星人の体を巻き付かせて動きを止めるとジラースは尻尾でメシエ星人を吹き飛ばして宇宙の方へと飛んで行くがブレスレットが彼の左手に戻る。

だがなぜメシエ星人が現れたのだろうかと思いつつ考えているとジラースが彼に近づいてすりすりとしてきた。さらに光りだして擬人化（怪獣娘）の姿になったのでお驚いている。

「お願い! 私と一緒に戦わせて!!」

「だがそれは君自身も危ないことになるかもしれないんだぞ? それでもかい?」

「はい!!」

ジラースの目を見てゾフィーはどうしてカプセル怪獣になる子達はと思いつつも連れていくことにして手をかざすと彼女はカプセルの中に入り彼の手に収まる。

「これからもよろしく頼むぞジラース!」

光の国

ゾフィースィド

カプセル怪獣となったジラースを連れて光の国へと戻った。カプセルは6個となり、バードン、タイラント、ゼットン、ダークロプスゼロ、バキシマル、ジラースとゾフィーとしては本当はカプセル怪獣は持つていないのだが……まあいいかと開き直った私であった。

光の国へと帰還後は隊長室へ行くとトレギアが座っており彼女は私が入ってきたので立ちあがり声をかけてきた。

「お帰りなさいませ隊長。」

「私が不在の間、何かあったかい？」

「いえ、今のところ緊急の連絡などはありません。マイナスエネルギーの報告もありませんでした。」

「そうか、今のところは異常はないってことだね。安心をしたよ。」

椅子に座り仕事を始める。いつも通りの書類のチェックなので判を押していく中扉が開いて誰かが入ってきたのでトレギアの方を見る。

「入ってこられたのはヒカリ長官です。」

ヒカリ？隊長室に何か用があったのだろうか？私は書類を横にそらすと彼女が立っており普段しているポニーテールは降ろされていた。

「どうしたんだいヒカリ？」

「ああ、ゾフィーすまないが惑星アーブへと向かう。」

「惑星アーブへ？……そうかその時期なのだな？」

「ああすまないが……」

「わかっているよ。といたいが、私とトレギアも一緒ならいいかな？」

「え!？」

トレギアの方は驚いているが、ヒカリ自身も驚いている。

「だが!」行きます!」トレギア……」

「私だつてわかっています。だからお願いします……私も一緒に行かせてください！」

「……わかった。」

さて承諾をしたので書類などは置いて隊長室を閉じるためにオーブカリバーを背負い三人で惑星アープの方へと向かう。

ゾフィースide終了

三人で宇宙空間を飛びながらトレギアは、かつて惑星アープにてハインターナイトツルギになって攻撃を受けたのを思い出した。

（もしもあの時、私がヒカリ長官の立場でアープの最後を見たらどうなっていたのかな？ヒカリ長官にとって惑星アープは落ち着く星と言っていた。それはかつてタロウ達が守ってきた地球のような感じなのだろうか？）

そして飛んで惑星アープへ到着をする。かつては美しい星と言われた惑星アープ……だがそれを全てボガールによって食い尽くされてしまい、彼女は復讐の鎧を纏いトレギアを切りつけてそのまま追いかけてしまう。

三人は歩きながら辺りを見ていた。

「……忘れもしない。このナイトブレスを受け取るために離れたすきについて奴は……惑星アープの民たちを食い尽くした。」

「長官……」

「そして、ボガールに復讐をする心に捕らわれてあなたを切りつけてしまった。」

「……」

「すまなかつたトレギア、お前がそのような原因を作ってしまったのは私だ。私が……」

「長官、あなたのせいではありません。ずっと飛びながら私がもしあなたと同じ立場だったら同じ行動をしていたかもしれませぬ。」

「トレギア……」

二人の様子をゾフィーは見ていた。彼女達がおそらく後悔をしていると思っていたので惑星アープへと同行をした。

だが突然としてゾフィーは立ちあがり振り返る。

『ぎやおおおおおおおおおお!!』

「な!?!」

「あれってボガール!?!」

「……」

ボガールが突然として現れたのでゾフィーは構える。

「ヒカリ、トレギア……行くぞ!!」

「ああ……」

「はい!!」

三人はボガールに構えるとボガールは彼らに気づいて走りだした。

「ジュワー!」

「デアー!」

「ヘア!!」

ボガールは両手から電撃はなってきた。ゾフィーがクロスガードをしてヒカリとトレギアが飛びあがりダブルキックをボガールに命中させて吹き飛ばす。

だがさらにボガールが増えたので二人は驚いている。

「何!?!」

「どこから!?!」

「二人ともそれぞれで対応をするぞ!!」

「ああ!」

「はい!!」

ヒカリは手を握りしめながらボガールを見ていた。

「ボガール、お前はかつてこの惑星を死の惑星へと変えた。また私の前に現れた。だが!今の私は復讐だけで戦うウーマンじゃない!私はウルトラウーマンヒカリ!光の戦士だ!!」

ナイトビームブレードを展開してボガールに切りかかる。一方でトレギアはボガールを投げ飛ばした。

「この!トレラテムノー!」

両手から10本のカッター光線を放つがボガールは大きくして彼女が放ったカッター光線をくらい尽くす。

「やはり、何でも食べるってのは本当みたいね。だからこそ!私はお

前達をここで食い止めないといけないわ!!お前達によつて食い尽くされた生物たちのためにも!!」

ゾフィーはカルミラタイプへと変身をしてカルミラウィップでボガールに攻撃をする。

「ほらほらどうしたんだい!そんなんで私を食べれるとでも思っているのかい?」

『ぎやおおおおおおおおお!!』

ボガールはゾフィーを食べようと一気に開いたがダーゴンタイプへと変身をして食べようとした口を両手で受け止めていた。

「そんな口で我を食べようとしているのか!甘いわああああああああああああ!!」

ダーゴンタイプへと変わったゾフィーの剛腕がボガールの口を破壊をした。ボガールは驚いているがゾフィーは右手にエネルギーをためるとたファイヤービートクラツシャーを放ちボガールを撃破した。

一方でトレギアは蹴りを入れると構え直す。

「久々にこれを使うかな?トレリアルティガイザー!」

全身のエネルギーを両手に集めて放ちボガールを撃破する。ヒカリはナイトビームブレードで翻弄させるとそのまま振り返つて構える。

「はああああああああああ!!」

ナイトシユートがボガールに命中をして爆散させた。ゾフィーは両手を組みなぜボガールが現れたのだろうか?と考えていた。

誰かがボガールを蘇らせたのか?アブソリユートイアンがやったのならどこかにいるはずなのだが……いないので、彼らではないなと二人に声をかける。

「大丈夫か二人とも?」

「ああ、トレギアは?」

「はい大丈夫です。でもどうしてボガールが?」

「わからん。怨念ではないと思うが……」

「はい、実体を持っていました。」

「不思議なものだ。(ならこの感じは何だろうか？何事もなければいいが……)」

不穏な空気が流れるが三人は惑星アープを後にして光の国へと戻るのであった。

襲撃を受けるジャック

惑星アープでボガールと交戦をして撃破したゾフィー達は光の国へと帰還をして、隊長室で考え事をしてっているとウーマンとセブンが入ってきた。

「やあ二人ともどうしたんだい？」

「惑星アープで奇妙なマイナスエネルギーが発生をしたのを確認をしたが……」

「そうか、ボガールが蘇ったのはそのマイナスエネルギーが原因だったのか？」

「どういうこと？」

ゾフィーは二人に惑星アープでボガールに襲われたことを話しをして二人も同じようになぜボガールが蘇ったのか考えている頃、宇宙空間でジャックはパトロールをしていた。

「惑星「トロピカス」付近に異常はないわ。」

彼女は次のパトロール宙域に向かおうとした時に光線が飛んできたので回避をすると現れた怪獣を見て驚いてしまう。

「あ、あれは!?二面凶悪怪獣アシユラン!」

アシユランとはかつてウルトラウーマンジャックが変身不能になったウルトラウーマンセブンのために怪獣ボールを渡すため地球へと向かっている最中に襲ってきた怪獣で、彼女に特殊なマスクを形成をしてしゃべれなくさせてしまうなどの力を持っており、さらに体の両面に顔を持つていることで二面凶悪怪獣と呼ばれている。

最後はレオとジャックのクロスアタックにより倒された。

「ウルトラウーマンジャック!久しぶりだな!」

「まさかお前は、私達が一度倒した!」

「そのとおりだ!今は貴様は一人だ!くらえ!!」

目から光弾を放つがジャックは交わして流星キックを放つ。

「甘いわ!」

「く!」

彼女は振り返りスペシウム光線を放つがアシユランは交わして彼

女に剛腕を叩きつけようとしたが、あの時よりも彼女は成長をしておりその手をつかんで投げ飛ばす。

「ぐお!？」

「あの時と同じだと思ったら怪我をするわよ!! であああああああああああ!!」

ジャックは接近をしてアシユランの顔にウルトラパンチを叩きこみアシユランは後ろを振り返り口から火炎放射を放ったが、ジャックは交わして下からアシユランの足をつかんで投げ飛ばす。

「ば、馬鹿な!」

「これで終わりよ!ウルトラランス!!」

左手のウルトラブレスレットが変形をしてウルトラランスへと変わり彼女は光エネルギーを注入して投げるとアシユランに命中をする。

「ぐああああああああああああああああ!!」

アシユランは爆発をして彼女の手にはウルトラランスが帰ってきてキヤッチをしてブレスレットへと戻す。

「どうしてアシユランが………何か嫌な予感がする。」

ジャックがアシユランを倒した頃、ウルトラウーマンダイナは宇宙の旅を続けていた。

「ふいー!色んな次元を飛んでいると様々なウルトラウーマンと会うことがあるからな。ん?」

ダイナは何かを感じて惑星「オリエルス」に降りたつとウルトラウーマンオーブが襲われているのを見てダイナスラッシュを放ちオーブの体を巻き付いていた鞭を切り裂いた。

「大丈夫かオーブ?」

「ダイナさん、どうして?」

「なーにいつも通り宇宙の旅をしていたからお前さんがピンチだったからな助けに来たってわけさ!立てるな?」

「はい!」

オーブは立ちあがりオーブカリバーを構える。ダイナはオーブと交戦をしていた怪獣を見ていた。右手はアストロモンス、左手はバラ

バの鎌、胴体はベムスター、頭部はバキシム、足部はゴモラ、尻尾はエレキングとまるでキマイラのような怪獣の姿をしていた。

「なんだこの合体怪獣は!？」

「わかりません。突然として現れまして、私は襲われたんです。」

キマイラのような怪獣は口から光線を放ち二人は交わしてダイナはフラッシュサイクラーを放つが相手は左手の鎌で粉碎をする。オーブはその間に接近をしてオーブカリバーを叩きつける。

「であああああああああああああ!!」

『ぎやおおおおおおおおおお!!』

右手の鞭でオーブカリバーを巻き付かせるとそのまま投げ飛ばしてオーブカリバーを離してしまう。

「うわー!」

そのままタックルを受けてオーブは吹き飛ばされてしまう。ダイアはそれを見てミラクルタイプへと変身をしてウルトラマジックを発動させて分身をして翻弄させる。

その間に本体がオーブのところへと駆け寄ると自身の光をオーブに授けるとオーブリングからウルトラウーマンダイナのカードが生成された。

「これは……ティガさんのカードが……これを使えと
いうのですね? ティガさん!」

【ウルトラウーマンティガ!】

『ジャー!』

「ダイナさん!」

【ウルトラウーマンダイナ!】

『デア!』

「二人のウーマンの力お借りします!」

【フュージョンアップ! ウルトラウーマンオーブ! ゼペリオンソル
ジエント!】

オーブの姿が変わりゼペリオンソルジエントへと変身をして分身態がやられたのを見てダイナはフラッシュタイプへと戻る。

「さーて行くわよオーブ!」

「はい!!」

2人は走りだしてキマイラは左手の鎌を振り下ろしたがダイナは交わしてオーブが胴体に蹴りを入れた。

そのままダイナは頭部にチョップをして二人はつかんで投げ飛ばした。

「でああああああああああああああ!!」

投げ飛ばされたキマイラは立ちあがるがすでに二人が構えている。

「ソルジエント光線!」

「ゼペリジエント光線!!」

2人は放った光線がキマイラに命中をして爆散をする。

「ダイナさんありがとうございました!」

「気にするなつて!それにしてもキマイラみたいな怪獣が現れたな。つてことはこの星、何かあるな?オーブ。宇宙警備隊に連絡を頼む!」

「わかりました。」

惑星オリエルスへ

宇宙警備隊にオーブからのウルトラサインで惑星オリエルスに何かがあるという情報を得て、ゾファイーは、メビウス、セブン、タロウを連れて惑星オリエルスへと急行をする。

「惑星オリエルス、大自然が豊かな地球に似た星だったな、その惑星で改造怪獣が現れてオーブとダイナが撃破をしたか……」

「ああ、何者かがあの惑星で改造実験をしているとなると……ほっておくと大変なことになるな。」

「ええそうですね。急ぎましよう兄さんたち！」

「そうだね！ さっさとぶっ潰すよ!!」

四人は飛んで行き惑星オリエルスへと到着をする。彼らは降りたちオーブ、ダイナが彼らを迎える。

「待っていたぜゾファイー！」

「ゾファイーさん、皆さんありがとうございます。」

「オーブ、ダイナ、それで君達が調べた結果を教えてください。」

「はい、惑星オリエルス……確かに豊かな大自然の星です。」

「この先に奴らの基地と思われる場所を見つけた！ 行こうぜ!!」

ダイナを筆頭にオーブ、ゾファイー、タロウ、セブン、メビウスの順番で歩いていき6人は歩いていくと基地らしい場所を見つけた。

「確かに基地だな。」

「ゾファイー、あれを見ろ。」

セブンに言われてゾファイーは見ると立っているロボットはインペライザーだったので驚いている。

「インペライザー、まさかエンペラ星人関連の基地なのだろうか？」

するとインペライザーは彼らに気づいたのか肩部のガンポートを放ってきた。六人は回避をしてゾファイーはM87光線を放ちインペライザーを撃破すると彼らは中へと突入をしようとしたが、レギオロイドα、βが現れた。

「ここは私達が引きうけます！」

「ゾファイー兄さんたちは中へ!!」

「オーブ、メビウスすまない!!」

オーブとメビウスがレギオロイド達の相手をするために残り、ゾフィー達は基地の中へ突入をする。

「さて、オーブ……行くわよ!!」

「はいメビウスさん!!」

メビウスはメビウムブレードを展開をしてオーブもオーブカリアーを構えて二人はレギオロイド達に突撃をする。

中へと突入をしたゾフィー達、彼らの前からキングジョースカレットトカスタムが現れて右手の電磁スピアから電撃を放った。

セブンがアイスラッガーを飛ばして相殺をすると彼女の手にアイスラッガーが戻る。

「ここは私が引きうける。タロウ、ダイナ、ゾフィーを任せたぞ?」

「了解だ!」

「セブン……無事にいてくれよ?」

「わかっている。お前達は先に行き、本体を叩き潰して来い!!」

セブンに後を任せてゾフィー達は先へと向かう。キングジョースカレットトカスタムは先に行かせないと攻撃をしようとしたが光線が命中してみるとセブンがエメリウム光線を放って構えている。

「お前の相手は、私だ!!」

先へと進むゾフィー、ダイナ、タロウの三人……彼らは走りながら先へと進んでいくと基地の中心部に到着をした。

「ここが中心部?」

「だけど、何にもないぜ?」

ダイナとタロウは辺りを見てみるとゾフィーは左手に装着をしているウルトラブレスレットを投げてどこかに命中をさせた。

するとステルス機能がついていたのかその物体が実体化をする。

「おのれ宇宙警備隊長ゾフィー!よくぞ私を見破ったな!!」

「そういうことか、この基地……貴様はマイスター星人だな?」

「え!?!」

「くつくつくその通り!ここは我々マイスター星人が改造場所でもある!」

「じゃああのキングジョーや、レギオロイド達は!？」

「そう、回収をしたキングジョーなどを改良をしたものだ! さあいでよ! EXタイラント!!」

マイスター星人がスイツチを押すと地面が開いて、現れたのはタイラントにゴモラの足などがはやしたEXタイラントである。

『ぐおおおおおおおおお!!』

「で、でかいタイラント!？」

(まさかEXタイラントと戦うことになるとは、マイスター星人……なんていうものを作ったんだ!)

EXタイラントは咆哮をして左手の鉄球を飛ばしてきて三人は回避をする。

「うそ! 鉄球!？」

「この野郎!」

ダイナはフラッシュサイクラを放つが、EXタイラントは右手の鎌で粉碎をするとタロウは飛びあがりスワローキックを放つが頭部でタロウを吹き飛ばす。

「ぶうぶうぶうぶうぶうぶう!!」

「タロウ!」

ゾフィーはスペシウム光線を放つがタイラントはお腹のベムスターの腹で吸収をするとそのまま発射してきたのでゾフィーは回避をする。

(まさか、ファイブキングのように光線を跳ね返すことができるのか!?)

EXタイラントは口から高熱火炎を放った。あまりの威力にゾフィー達は驚いているが、EXタイラントは突撃をしてきた。

「とう!」

ゾフィーは飛びあがりEXタイラントはマイスター星人が搭乗をしている宇宙船に激突をしてしまう。

「あ、マイスター星人が乗った宇宙船が爆発をした。」

『ぎゃおおおおおおお!!』

「三人とも! 構えるんだ!」

「わかっているよ！ストリウム光線!!」

「ソルジエント光線！」

「M87光線！」

三人が放った合体光線がEXタイラントに命中をして吹き飛ばされた。一方でキンググジョースカーレットカスタムと戦うセブン、相手の槍をアイスラッガーで受け止めてはじかせるとそのまま後ろの方へと立ちアイスラッガーを自身の前に浮かせて構える。

「ウルトラノック戦法!!」

勢いよく飛んだアイスラッガーがキンググジョースカーレットカスタムに命中をしてアイスラッガーがセブンの頭部に装着されてキングジョースカーレットカスタムは爆発をする。

外でもメビウスはバーニングブレイブ、オーブはエメリウムスラッガーへと変身をして構える。

「メビウムバースト！」

「エメリウムスラッガースペシウム！」

同時に放った光線がレギオロイド軍団に命中をして爆散する。ゾフィー達は脱出をしてセブン、オーブ、メビウスとも合流をして基地は爆散した。

ゾフィーはマイスター星人の基地を破壊をしたことで、改造をされた怪獣たちの無念が晴れたことを祈りながら光の国へと帰還をする。

隊長室にて

ゾフィースィド

光の国からぼーくらのためにーっていきなり歌を歌ってすまない、ゾフィーだ。惑星オリエルスでの戦いを終えた私達は光の国へと帰還をした。

惑星オリエルスは基地があつた場所が爆発をした以外は被害はなかつたが、一部の自然などが破壊されてしまったからね。

ウーマン達が現場の修復作業を行っている。いずれにしてもマイスター星人によつて奪われた命を考えてしまうと……ね。

基地の中を走りながら私は改造をされたであろう怪獣たちや宇宙人の姿を見ながら駆け抜けた。

腕を武器にされたものや、別の怪獣と怪獣が合体をしたような姿に改造をされた怪獣の姿も見たな。

例えばゴモラに羽をはやして左手がハンマーのようになったものだったり、レッドキングの両腕を巨大化させたり……ってそれはEXレッドキング？と思つていたが、炎を纏わせていないので違つたなと思ひながら仕事をしていた。

「……………」
書類などをチェックをしていると扉が開いてウーマンが入つてきた。

「やあウーマン、惑星オリエルスはどうだい？」

「ええ、修復作業の方はだいぶ片付けたわ。基地の残骸などを調べるためにヒカリなどが調査をしているけど……その中には爆発で死んでいた怪獣たちの死骸などもあつたわ。」

「そうか、奴らによつて改造をされた怪獣や宇宙人……色々といいたからね。」

いずれにしてもマイスター星人達の本拠地としている惑星はわかつていないのが現状である。調査は続けているが……奴らはバロッサ星人のように神出鬼没な宇宙人なのできりがない。

バロッサ星人もゼットは四回も戦っているだよね？てか多すぎる

な……キングジョーとか盗まれるし、色んな武器などももっているからね。

「はぁ……」

「あら？私の胸でも「もまないよ！なんで仕事中にやろうとするの!？」ウエルカムなのだけど？」

はぁ、全員とヤツテから遠慮という言葉が消えたので…….
ため息が止まらないよ。いったいどうしたらいいのさ……

ゾフィースide終了

ウーマンと話をした後、彼は仕事を一度終えて休憩をとることにした。トレギアはヒカリと共に惑星オリエルスに調査へ行っているの
で今は書類を一人で片付けているところである。

まあ今回はトレギアがいなくてもできる範囲なので、彼は立ちあがり紅茶を飲んで休憩をする。

「……」

光の国の建物が見える場所なので彼は新しい隊長室の太陽系マップを見て、誰がどこに飛んでいるのかわかるのである。

「今、レオが惑星「アダムス」付近をジャック、エースが太陽系をパトロールをしている感じだね。ニュージェネレーション達もデビルスプリンターの調査で色んな宇宙を飛んでくれているからね。」

ゾフィーはモニターを見た後に誰かが隊長室へと来るので誰か来る予定だったのだろうか？と予定表を見ていた。

「そういえば、アキュラが来る予定だったね。守備隊のことで色々話し合いをするって。」

それから数分後アキュラが入ってきた。

「守備隊長アキュラ、参りました。」

「いらつしやいアキュラ、まあそのソファアでも座りたまえ。」

「はい失礼します。」

ソファアに座った後アキュラはお弁当箱を出したので彼は受け取り後で食べることにした。

「さてアキュラ、守備隊の方はどうだい？新しいメンバーも増えたことだしね。」

「はい、新しく入った守備隊メンバーのやる気などはゾフィー隊長がご存知のはずですよね？」

「うむ、なかなか努力をしているメンバー達だなと思ったよ。君も鍛えがいがあるって思っている顔だよ？」

「そうですねかふふふ、隊長の方はどうですか？新しい宇宙警備隊隊員が入ったのですよね？」

「まあね、タロウ達が指導をしているメンバーだからね。必死に努力をして宇宙警備隊隊員になったね。アムールの時は私が担当をしたからね。」

「そういえばそうでしたね。」

ゾフィーはアムールのパンチを受けた場所を抑えていた。彼女は最後は気絶をしたが……彼女の思いなどが伝わった拳は受けたので合格にしたのだ。

そんな彼女も今じゃ宇宙警備隊隊員で訓練学校の教官を務めるほどにまで成長をした。その中にジャンヌがいたのを思い出したが、今は月島 あかりちゃんと過ごしているのだろうかと思いつつながら確認をしてアキュラは部屋を後にした。

「では早速アキュラのごは『ぞふー』にいさああああああああああああん!!」ほえ？」

扉を見るとタロウが立っていたので彼はアキュラのご飯を食べようとしていたので変な声を出してしまう。

「なんだいタロウ、いきなりきてびっくりをしたじゃないか。」

「あ、ごめんなさい。」

タロウも流石に突然来てしまったので謝り、ソファーに座る。

「あれ？ゾフィー兄さん、弁当なんて作っていたの？」

「いや、これはアキュラが作ってくれたものだよ。いつも食べているけど美味しいんだよね。」

（な!?アキュラ、そんなことをしていたなんて!!急いで姉さんたちに伝えないと!!）」

タロウは突然として部屋を退出をしたので彼はいったい何しに来たのだ?と思いつつながらアキュラが作ってくれたお弁当を食べること

にした。

ウルトラ緊急会議

「これよりウルトラ緊急会議を行うわ。」

宇宙警備隊のとある一室、議長を務めるウルトラウーマンを筆頭にセブン、ジャック、エース、タロウ、レオ、アストラ、エイティ、ヒカリ、トレギア、メビウス、カラレス、フレア、ゴライアン、ドリユール、サージなどが集まっていた。

なお全員で集まるわけにはいかなかったのでネオスや21などはここにはいない。

「さてタロウ、あなたが目撃をしたことを教えて頂戴？」

「はい、あれはゾフィー兄さんがいる隊長室へ行ったときでした。なんとゾフィー兄さんがアキュラが作ってくれた弁当箱を食べようとしていたんです！それも毎日アキュラが持ってきているみたいですよ!!」

「「「「な!?!」「」」」」

タロウの言葉に全員が驚いており、カラレスも何か思いだしたかのように話をする。

「そういえば、最近アキュラが嬉しそうにお弁当箱をもって行くのを見たけど、それってゾフィーに作った弁当ってことか!!」

「まさかアキュラが……」

「ゾフィーお兄ちゃんが、アキュラに……ど、どうしましょう!!」

「私は料理が得意なのでお弁当を作れますね。うふふふ姉さんたちには悪いですが……」

エースは自信満々なのでほかの姉妹達は嫉妬をしている中、ゾフィーは？

「そうか、惑星「ベームiras」の異常はなかったってことだね？」

「はい。」

ネオスからの報告を聞いて彼は惑星ベームirasで異常発生をしているという情報を得てネオス達に調査を向かってもらった結果を聞いていた。

「わかった。ほうこくをありがとうねネオス。」

「いえいえ、隊長のお役に立てるなら本望です。では!!」

ネオスが退出をしてゾフィーは椅子に座り惑星ベームラスで異常発生を調べていたが、ネオス達が急行をしたが異常がなかったため、何者かがすでに撤退をしているのか？それとも別の作戦を展開をしているのかと色々と考えていた。

(うーむ、惑星ベームラスの異常発生はこのところ発生をしている回数が多い、だが派遣をしてみると異常がないか………。いったいどういうことだろうか？私が調べるのはいいが、その間宇宙警備隊の指揮系統が減茶苦茶になってしまう。大隊長に頼んでおくべきだろうか？いずれにしても調査をしたほうがいいか。)

彼はウルトラの父に話をするために隊長室を出ようとしたが、トレギアがいないことに気づいた。

「そういえばトレギアの姿を見なかったな。彼女と相談をしたかったが………まあいいか。」

彼は今日の仕事が終わったので、家へと帰ることになった。次の日からウーマンを始め手作りのお弁当をもらうことになるとは彼は思ってもいなかった。

かつての強敵

ゾフィースィド

ネオス達に調べてもらっていた惑星ベームィラスから、再び異様なエネルギー反応が発生をした。

私は調査をするため、ウーマン、セブン、ジャック、エース、タロウと共に惑星ベームィラスへと急行をする。

「それにしても私達で調査をするなんて、何か嫌な予感でもしたのかしら?」

「ああそのとおりだよウーマン。どうも嫌な予感がするんだよ。」

惑星ベームィラスから感じる強大なマイナスエネルギーが気になっ
ていてね。いずれにしても何事もなければいいのだが、やがて惑星
ベームィラスが見えてきた。

惑星降り立つが、先ほど感じた巨大なマイナスエネルギー反応が消
失をしているので、誰かの罠なのだろうか?と思いつながら散策をして
いた。

「今のところ、この星から感じるマイナスエネルギーは感じませんね
?」

「ああ、だがどうも「ぐおおおおおおおおお!」何!」

「なんだ、この巨大なマイナスエネルギーは!」

突然として発生をした巨大なマイナスエネルギー、私は振り返ると
その怪獣が立っていた。

かつてジユダが宇宙中の怪獣や宇宙人たちの怨念を合体させた怪
獣「グランドキング」が私たちの前に立っていた。

「グランドキング!」

「こいつが、巨大なマイナスエネルギーの正体なのか!」

「いずれにしても油断ができない怪獣だ。行くぞ!!」

「!」「おう!!」「!」

ゾフィースィド終了

「行くわよ!」

「はー!」

ウーマンとジャックは先行をしてウルトラダブルキックを放つが、グランドキングはそんな二人を叩き落とした。

「アイスラッガー!」

「バーチカルギロチン!」

セブンとエースがアイスラッガーとバーチカルギロチンを放つが、グランドキングはその攻撃を自身のボディで受け止めてはじかせたり粉碎をする。

「でああああああああああ!!」

得意のスワローキックをグランドキングの頭部に命中させるが、相手は気にせずに目からグランビームを放ち攻撃をしてきた。

ゾフィーはグランビームをウルトラVガードではじかせるとウーマンとジャックは起き上がりダブルスペシウム光線を放つが、グランドキングのボディに命中させる。

だがすぐに行動を起こして尻尾で二人を吹き飛ばした。

「が!!」

「あう!!」

「ウーマン!ジャック!」

『ぐおおおおおおおおお!!』

グランドキングは咆哮をして口からビームを放ち空を飛んでいるエースとセブンに放つが二人は交わしてタロウはストリウム光線を放つ。

「でああああああああああ!!」

『ぐおおおおおおおおお!!』

その隙についてゾフィーがダーゴンタイプへと変わりアツパーを放つが、堅い装甲にダーゴンの力を使っているのに効いていない。

「なんだと!」

「うわ!!」

ストリウム光線を相殺されて、左手のアームでゾフィーを殴り飛ばした。

「がは!!」

「ゾフィー!」

「流石グランドキング、強さまで再現されているのか？」

「そうみたいだな。」

「どうでしょうか？」

「よし！皆のエネルギーをタロウに！」

「そうか！よし！」

タロウは立ちあがりほかの兄妹たちはもタロウの周りに立ちエネルギーをタロウのウルトラホーンやカラータイマーにエネルギーを注入をしていき、タロウはスーパーウルトラウーマンタロウへとパワーアップをする。

「シューー！」

タロウは接近をしてパワーアップをした拳をグランドキングに当てる。グランドキングはグランレーザーを放つがタロウはそれを素手ではじかせて腕を十字に構える。

「スペシウム光線ー！」

ウーマンの技スペシウム光線がグランドキングのボディに命中をさせる。グランドキングはそのまま剛腕で攻撃をするがそれを受け止めると投げ飛ばしてビームランプに手を添える。

「エメリウム光線ー！」

エメリウム光線が胴体、頭部に命中させて目からビームを使わせなようにした。そのままL字に構える。

「シネラマショットー！」

ジャックの技シネラマショットが命中をしてグランドキングにダメージを与える。グランドキングはそれでも立ちあがり歩きだしたが、タロウは兄妹たちのエネルギーを集結させて構える。

「スペースQ!!」

スペースQがグランドキングの胴体に命中をすると、タロウは飛びあがり得意のスワローキックで頭部に大ダメージを与えて構える。

「M87光線!!」

ゾフィーの技M87光線を放ちグランドキングにダメージを与えてから構える。

「行くよー！これが宇宙最大の必殺光線コスモミラクル光線だああああ

ああああああああああああああああああああ!!」

超タロウの必殺技コスモミラクル光線がグランドキングに命中をして大爆発をしてタロウからゾフィー達が現れるが、彼らのカラータイマーは点滅をしておりかなりのエネルギーを消耗してしまった証拠である。

「やはり、エネルギーがかなり消耗をしてしまうな。」

「だけどなぜグランドキングが?」

「それは我々が用意をしたからさ。」

「!!!」

全員が振り返るとダークファルシオン達が立っており、彼は笑っていた。

「グランドキングを使い、お前達が合体をするのはわかっていたさ! だからこそ今の消耗をしている貴様に闇のエネルギーを注入をすればどうなるか……げげげげげはははははは!!」

超ウルトラウーマンタロウになったことでグランドキングを倒すことに成功をしたが、それはダークファルシオン達の罠だった! ゾフィー達はダークファルシオンの前にどう立ち向かうのか! その時一つの光が彼らの前に降りたつ。

「何!」

「この光は……」

現れた人物は、ウルトラウーマンネクサスだ。彼女はちらつとゾフィー達の見た後にダークファルシオンたちを見ていた。

「伝説の戦士ウルトラウーマンノアか。」

「悪いが、貴様達に彼らを倒されるわけにはいかない!」

「邪魔をするな!! こいつを闇「させる」でも?」が!!」

一瞬でダークファルシオンに近づいて顔面を思いつきり殴り、吹き飛ばした。ダークレクギルスは一瞬で現れたネクサスに驚いているが、ネクサスはダークファルシオンに対してダッシュをして連続したパンチを放ちダメージを与えていく。アンファンスの姿で……「この! 調子にのりやが「遅い!」ごふらああああああああ!!」

そのままかかと落としでダークファルシオンは地面にめり込んでしまい、ダークレクギルスはビームを放ちネクススを吹き飛ばすとダークファルシオンを回収をする。

「ここは離脱をするぞ?」

「くそがあああああああああああ!!」

そのまま離脱をしていきネクススはゾフィー達のところへと行き光を放ち、ゾフィー達のエネルギーを回復させる。

「助かったよネクスス。」

「気にしないけどお礼がほしい。」

するとネクススはジュネツスの姿になるとメタフィールドを発生させた。それはウーマン達も巻きこんだ。

「は?」

突然としてメタフィールドを発生させた。だが場所がいつもと違い………ホテルのような部屋になっているのに驚いている。

「ははーんそういうことね。」

「ふふふふそういうことなら、喜んで!」

全員が人間態になったのを見てゾフィーはまさかーと叫ぶのであった。

レオ対アストラの模擬戦。

ゾフィーが惑星ベームィラスにウーマンたちと共に調査をしている頃。K76星では、二人のウルトラウーマンが模擬戦を行っていた。

「いやああああああああ!!」

「えいやああああああ!!」

ウルトラウーマンレオとその妹のアストラの二人が模擬戦を行っていた。アストラが放つ蹴りをレオははじかせていき、蹴りを入れるがアストラは後ろの方へと下がりエネルギー光球を放った。

放たれたエネルギー光球を交わして、レオはレオキックを放つ。

「ぐうううううううう!!」

アストラはクロスガードをしてレオキックをふさいで、そのまま走りだしてチョップを叩きこむが、レオに手をつかまれてそのまま膝蹴りを受けて膝について首元に手を置かれる。

「……………参りました。」

アストラの言葉を聞いて、レオは手を離してアストラを立たせる。

「それにしてもレオ姉さんから模擬戦をしたいって言ってきたときは驚きましたよ。」

「そう?久しぶりにあなたと手合わせをしたくてね。……………」

「もしかして、ゾフィー兄さんのことですか?」

「……………わかる?」

「わかりますよ。あなたの妹ですからね。それに私も同じようにゾフィー兄さんのことが心配ですからね。」

双子は惑星ベームィラスの方角を見ながら何事もないことを祈り、休憩をした後に模擬戦を行う。

一方で惑星ベームィラスでは、メタフィールドが解除されてつやつやになった姉妹達、そしてげっそりとなったゾフィーの姿があった。

「お前達、どれだけ私から絞ればいいんだい?」

「えへへへ、つい嬉しくて。」

ジャックは顔を赤らめながら素晴らしい、ネクサスも満足をした顔をしていた。

「さて、ゾフィー……君も知っている通り、奴らは君を狙っている。」
「……ネクサス、君は奴らのことを知っているのかい？」

「遙か昔、ノアとして奴らと戦ったことがある。だが奴らは別空間へと飛ばしたのだが……いつの間にか、この世界へと帰ってきていた。」

「そして奴らは、ゾフィー兄さんを狙ったと……」

「気を付けろ。奴らの力は半端じゃない。」

そういつてネクサスは飛びあがり、ゾフィー達も光の国へと帰還をするために惑星ベームラスを後にする。

宇宙空間を飛びながらゾフィーはダークファルシオンたちがなぜ、自分を狙い闇の戦士にしようとするのか、考えながら飛んでいると隕石に激突をしてしまう。

「おぐ!!」

「ゾフィー兄さん!?!」

「何やっているのよ!!」

「……あれ?この辺って隕石群があったところだったっけ?」

「いえ、確か隕石群はないところのはずよ?」

すると隕石群が襲い掛かってきたので、全員が回避をするとそれは一体の怪獣へと合体をする。

「ぐふふふふ!ウルトラ兄妹!」

「お前は、岩力破壊参謀ジオルゴン!」

「その通り!エンペラ星人さまの敵!!くらえ!!」

ジオルゴンは目から破壊光線を放つが兄妹達は交わして合体光線をジオルゴンに向けて放った。

「ぐふふふふ。くらえ!!」

すると彼の体が分裂をして体当たりをしてきた。ゾフィー達は交わして隕石群を攻撃をしているが、ジオルゴンは笑いながら攻撃をしていく。

ゾフィーは奴の弱点を思いだした!

「ウルトラクラウン!!」

彼はウルトラクラウンを装備をして超闘志ゾフィーへと変わりジ

オルゴンは彼に隕石をぶつけるが、彼はそれを拳で全て叩き壊した。「ぐふ?」

「はああああああああああああああああああああ!!」

ジオルゴンはこのままでは不利と合体をしてゾファイは、彼の弱点である心臓部分を左腕を手刀で貫いてエネルギーを叩きこむ!

「ぐふるうああああああああああああああああああ!!ぎええええええええええええええええええええええええ!!」

「ふん!!」

彼はそのまま引き抜いて後ろを振り返り、ジオルゴンは爆発をする。

「なんていう力……」

「ゾファイ兄さん……」

彼はウルトラクラウンを外して右腕部に装着をして、彼女たちのところへと行く。

「大丈夫かい?」

「はい、私達は大丈夫ですが……」

「でもどうしてジオルゴンが?」

「わからない、誰かが蘇らせたのか……いずれにしても謎が多いな。」

ゾファイはそう言い、彼らは光の国へと帰還をするのであった。

報告

光の国宇宙警備隊本部大隊長室。

「ジオルゴンが……」

「はい。惑星ベームラスにてグランドキングと交戦後にダークファルシオン達の襲撃を受けた後に宇宙で……」

「確か、エンペラ星人の幹部の一人だったわね。」

ブラザーズマントを羽織ったゾフィーが大隊長であるウルトラの父、大副隊長のウルトラウーマンベルに報告をしているところである。

「しかし、ジオルゴンの襲撃にグランドキング……何が起ころうとしているのは、間違いないな。」

「ですが、グランドキングと戦った時にジユダの力を感じることはありませんでした。おそらくダークファルシオン達の闇のエネルギーで作られた可能性があります。」

「いずれにしても用心をした方がいいわね？主にゾフィーが。」

「私ですか……」

「奴らの狙いは、あなたを闇の戦士にすることって言うていたわね。もう一人の私や闇の戦士達がいるけど、彼女達を排除して本当の意味で闇の戦士に生まれさせようとしていると思うわ。」

三人で話をした後、ゾフィーは大隊長室を後にしてから隊長室へと戻ったが、トレギアの姿がなかったため、ブラザーズマントを外して仮眠室の方へと移動をして少し休むことにした。

ゾフィーが仮眠室で眠っていることを知らないのに、メビウスは隊長室へとやってきた。

「あれ？ゾフィー兄さんはどこへ？」

「おや、メビウスどうしました？」

「あ、トレギアさん。ゾフィー兄さんはどうしました？」

「ゾフィー隊長？……そういえば見ていないわね。」

「あれ？トレギアさん、どこへ行っていったんですか？」

「……馬鹿な親友のところへ、今日出さないといけない書類の

手伝いをさせられていたのよ。」

トレギアの目からハイライトが消えていたので、メビウスはタロウ姉さんと思いなながら苦笑いをして、二人はゾフィーを探すために隊長室を後にした。

彼は隊長室にある仮眠室で休んでいるのに……そんなことを知らないメビウスとトレギアがやってきたのは、ウーマン、セブン、ジャックが仕事をする部屋。

「あら、メビウスとトレギア、変わったメンバーね。」

「そうですね。」

「あの隊長を見ましたか？」

「ゾフィーを？ いや見ていないがどうしたんだ？」

「隊長室におられなかったので、こちらに来ていると思ったのですが……」

「ゾフィーがね……」

ウーマン達も見つけたら連絡をするといい、メビウスとトレギアが次にやってきたのはレオ姉妹が仕事をする部屋、そこにはジャックがレオと話をしていた。

「あれ？ メビウスとトレギアだ。」

「どうしたんだい？」

「実はかくかくしかじか」

「ゾフィーお兄ちゃんを？」

「いいえ、今日は見ていませんね。」

「そうでしたか。」

二人は部屋を後にして、次の場所へと行きゾフィーを探索を続ける。一方で探されているゾフィーは？ 隊長室にある仮眠室でぐっすりと眠っていた。

そんなことを知らないメビウスとトレギアは、色んなウルトラ戦士達にゾフィーの見たかと聞いており誰も見ていないというので、二人は最初の隊長室の方へと戻った。

「いったいゾフィー兄さんはどこへ行ったのでしょうか？」

「うーん……ん？」

トレギアは、隊長室の仮眠室の方を見た。扉を開けようとしたが鍵がかかっているのを見てゾフィーはここにいると判断をする。

「メビウス、ゾフィー隊長は仮眠室で眠っているわ。」

「え!?!もしかして、ずっと仮眠室にいるってことですか!?!」

「おそらく、隊長も疲れているってことですよ。」

「そうですね。」

二人は納得をして、メビウスは必要な書類を机の上に置いておいて、トレギアも自分の仕事をするために秘書の机の方へと移動をして座って仕事にとりかかる。

じーつと見るヒカリ

「……………今、何時だ?」

ゾフィーは仮眠室で休んでいて、時間を気にせずに寝てしまい仮眠室には鍵をしまってしまっている。中に入れないようにしていたため、誰も起こされないうままずっと寝ていた。

「仕方がない、仮眠室のシャワーを浴びるとしよう。」

彼は仮眠室にある光エネルギーのシャワーを浴びることにした。起動させて光のシャワーがゾフィーの体に当たっていき、光エネルギーが充電されて彼は仮眠室を出るヒカリがじーつと見ていた。

「ん?ヒカリ?」

「何していたんだお前は?」

「仮眠室で休憩をしていたつもりが、眠ってしまったようだ。うー……ん」

「全く、それは貴様自身が完全に疲れている証拠ではないか。」

「そうとも言う。」

ヒカリにツツコミを入れようとしたが、完全に疲れていたのか今日はこの部屋で泊まることにした。

「帰らないのか?」

「今日は、ここで泊まることにするよ。」

「……………そうか、ちよつとだけ待っている。」

「?」

ヒカリは隊長室を後にしていき、ゾフィー自身はお酒とかあったかな?とチェックをしてあったのでヒカリが現れる。

「私も今日はここで泊まらせてもらおうぞ?」

「……………まじか。」

泊まる準備をしてきたのを見て、ゾフィーはお酒を用意して隊長室の扉の鍵をかけた。

「ではとりあえず、乾杯」

「乾杯。」

二人はお酒をコップに注いで、夜の光の国を隊長室から見ていた。

「ここから、見る景色が綺麗だな。」

「ああ、この場所はとてもいい場所だよ。たまに隊長室で泊まる時にこの景色を見ながらお酒を飲んでいるんだよね。」

「おいおい隊長がお酒を飲んでるって。」

「一応仕事は終わっているさ。仮眠室で寝る前に・・・あ、メビウスから受け取る予定の書類のことを忘れていた。」

彼は慌てて机の方を見ると、トレギアが変わりにチェックをしてくれているみたいだったのでホッとしたが、ヒカリはそんな様子を見てふふと笑う。

「なんだい?」

「いや、お前もたまーにだが、忘れることがあるんだなと思ったよ(笑)」

「そこまで、笑うことないだろ?」

「すまんすまん(笑)」

ヒカリはふふふと笑いながらいるので、ゾフィー自身も頬を膨らませながら書類を置いた後、お酒を飲んでいる。

ヒカリ自身もお酒を飲みながら話が進んでいく。

「それにしても、やっと落ち着いた感じか?」

「うーん、アブソリュールティアン達があまり動かないのも気になるけど、ダークファルシオン達が一番が気になっているところだ。」

「ネクサスが言っていた、大いなる闇か・・・」

「ああ、その通りだよ。奴らってか、ダークファルシオンの目的が、私を完全な闇の戦士にすることだと言っていたな。」

「そうか・・・」

二人はお酒を飲みながら、ヒカリはモニターをじーつと見ていた。

「モニターなんて見てどうしたんだ?」

「いや、この隊長室のモニターは宇宙警備隊の各場所を見ることができてるのか?」

「うーんそうだね。」

ゾフィーは立ちあがり、モニターを起動させると一つの部屋が映し出される。

「おやこの部屋は？」

「レオとアストラが使用をする部屋だね。レオが残っていたみたいだね。」

ゾフィーはレオの部屋のスピーカーを起動させる。

『ウルトラウーマンレオ、隊長室へと来なさい。』

レオは呼びだされたので、書類などを纏めてから隊長室の方へと行くために部屋の鍵を閉めて、ゾフィーは隊長室のカギを開けておりレオは入ってきた。

「ウルトラウーマンレオまいりつて酒くさ!?!」

「やあれオ。」

「ゾフィー兄さんにヒカリさん？まさかここでお酒を飲んでいたのですか？」

「まあね、今日は仮眠室で泊まることにしたからね。それで頑張っているレオを呼んだってわけ。」

「はあ・・・てかどうして、私が残っているのがわかったのですか？」

「これだよ。」

ゾフィーは隊長室にあるモニターに部屋が映し出されているのであるほどと納得をするとゾフィーは鍵をしめたのを見て、これはつき合わされるのだなと思いつきながらとお酒を飲むことにした。

それから数時間が経ち、仮眠室で寝ることにしたのだが・・・

「はあ・・・はあ・・・？」

「ゾフィーゾフィーゾフィーゾフィーゾフィーゾフィー？」

「なんでこうなったの？」

二人は目をハートにしておりレオとヒカリは豊かな胸を押しつけて、発情をしたような目をして彼に抱き付いていた。

お酒に発情をするのってあったかな？と思いつながら、ゾフィーは二人のウーマン達に襲われたのであった。

大いなる事件!?

ゾフィースィド

ま、まさかレオとヒカリに襲われるとは思ってもいなかった。しかも仮眠室で朝までやってしまったので急いで光のシャワーを浴びないといけないって……えっとレオ? ヒカリ? なんでもまだ目をハートにした状態でのかな?

「ゾフィー兄さん?」

「私達、まだまだたらないのだが?」

「はあああああああああああああ!」

何を言っているんだ!? あれだけ出したのに、まだ足りないってどんだけええええええええええええええええ!! じゃなかった。そろそろ仕事の時間なので私はボデイスパークを放ち二人の目がくらんでいるうちにシャワー浴びて隊長室に出るが……トレギアさん?

「おはようございますゾフィー隊長?」

なんで、君まで目をハートにしているのですか!? ちらつとヒカリの方を見ると笑って何かを出したのでゾフィーアイで見ると媚薬って書かれたの……ま・さ・か!? 宇宙警備隊本部に流れたの!? だからトレギアの目が発情をした状態なのね!?

「さて隊長、今日の仕事なのですが? ここでやりましょ?」

「やりましょじゃないよ! なんでさあああああああああああ!」

「レオやヒカリ長官とはやったのに、私とはシテクレナイノデスカ?」
途中から光を失った目にならないでほしいな。しかもじりじりとこちらの方へと近づいてこようとしているし、どうしたらいいのでしょうか? ベリアルさん助けてください。

『ゾフィーよ。こういうときは諦めた方がいいのさ。』

ベリアルさああああああああああん! あ、しかもトレギアは鍵を閉めているし……あ、／(^ o ^)／オワタ

ゾフィースィド終了

それから三人に襲われたゾフィー、なんとか耐えて三人は満足をし

たのか、ヒカリとレオはシャワーを浴びてから部屋の方へと移動をして、トレギアは仮眠室の方で眠っておりゾフィーは少し昔のことを思い出した。

(Uキラーザウルスの時、ウーマン、セブン、ジャック、エースの四人は月の方へと行っていたな。)

回想

光弾が放たれて四人の戦士は回避をしていた。ウルトラウーマン、セブン、ジャック、エースの四人は月である敵と交戦をしていた。

それはヤプールの全ての怨念が作りだしたUキラーザウルスと呼ばれる究極超獣だ。

「であああああああああ!!」

「はああああああああ!!」

ウーマンとセブンが接近をしたが、Uキラーザウルスは二人を投げ飛ばすとジャックとエースはスペシウム光線、メタリウム光線を構えようとしたが伸びてきた腕に捕まれてしまう。

「なんて強さなの。」

「もし、こいつが地球に飛来すれば大変なことになる!」

「絶対に………阻止をして見せます!この命にかえても!」

「そうだ!私達は負けるわけにはいかない!!」

ジャックとエースはボディスパークを使い脱出をする。ウーマンとセブンも飛びあがり四人は着地をしてグランドスパークをUキラーザウルスに放つが交わされていく。

Uキラーザウルスは地球の方へと向かっていき、ウーマン達も追いかける。

Uキラーザウルスが放つ攻撃を四人は交わして光線を構えようとした時にウーマンが止める。

「待ちなさい!」

三人もそれに気づいて光線を放つのをやめる。

「今、ここで交戦を外したら。」

「私達の光線が地球に直撃をしてしまう。」

「愚か者め!!」

Uキラーザウルスは攻撃ができないウーマン達に触手を使い攻撃をしてきた。ウーマンとセブンが吹き飛ばされてしまい、ジャックとエースは交わして攻撃をしようとしたがつかまれてしまう。

「ひねりつぶしてくれる!!」

だがつかんでいた触手が切断された。それはウーマンとセブンの八つ裂き光輪とアイスラッガーだ。

ウーマンのスペシウム光線がUキラーザウルスの右手を、セブンのワイドショットが左手を切断させる。

そしてジャックとエースのダブル光線がUキラーザウルスに命中をして神戸沖に落下させた。

(そして彼女達は、ヤプールの強大な怨念を封印をするために自らのエネルギーの大半と引き換えのファイナルクロスシールドを使い封印をした。そして私は、ウーマン達の穴をふさぐためにタロウ、レオを地球から呼び手伝ってもらったっけ?そして、パワーアップのためにウルトラブレスレットを装着をしたのもその時期だったかな?)

ゾフィーは左腕に装着されているウルトラブレスレットを見た後に休憩をしようとした時に扉が開いて誰かが来たので応対をしようとした時に、体が動かないのでなんで?と思い見ているとセブン、ウーマン、ジャックの三人が立っていた。

だが、彼女たちの目はハートの状態なので嫌な予感がしていた。

(これはセブンのウルトラ念力!?ま・さ・か!?)

「ねえゾフィーお兄ちゃん、私、ずっとあそこがうずいているの!ゾフィーお兄ちゃんのがほしいの!」

「私もほしいのよねー」

「そうだな。私もウーマンたちと同じだ。」

「うえ!?!」

こうして三人にも襲われてしまうゾフィーさん、ヒカリのせいでウーマン達にも絞られたのであった。

襲い掛かる円盤群

宇宙空間、ビームなどが飛んで行く中を飛行物体が回避をしていた。そう我らの宇宙警備隊長ゾフィーである。

宇宙パトロールをしていたゾフィーに突然として円盤群が現れて襲い掛かってきたのだ。

「くー」

彼は円盤群からの攻撃を回避をしながらウルトラスラッシュを放ち円盤群を切断させていく。

だが数が多いのか、円盤群が減っている感じがしない。

「はーストリウム光線ー」

ストリウム光線を放ち円盤群を破壊をしていくが、さらに円盤群が投入されていくのでどこかに大型戦艦でも配置されているのか？と思いつながら円盤群を破壊をしていくが、さらに投入されて行くのを見えきりが無い。

「こうなったらM87光線!!」

必殺技のM87光線が円盤群を薙ぎ払うように放たれて次々に円盤を撃墜させていく。かつてサコミズを救ったように放たれたM87光線が円盤群を破壊していく。

「.....」

やがて円盤群の姿がいなくなったが、どうも嫌な予感がした。すると砲撃が放たれてゾフィーは急いでウルトラバリアーを張ってガードをするが威力が思っていた以上の強力なのかバリアーが破壊されそうになったので急いでヒュドラムタイプへと変身をして素早く移動をする。

「危なかったですね。ですが.....いったいどういうやつげふらあああああああああ!!」

突然として吹き飛ばされて隕石に激突をしてしまう。ゾフィーは一体何事かと前を見ると彼を吹き飛ばしたであろう怪獣が目の前に現れた。

上半身がシラリー、下半身はコダラーが合体をしたような怪獣だっ

た。

「……まさかこの怪獣がいるなんてな。シーダ……」
『ぐおおおおおおおおお!!』

シーダは咆哮をして両手からレーザー砲を放ってきた。彼は交わしてシーダが接近をしたが横に回避をした。

(シーダは、一気に倒さないとすぐに再生をしてしまう。ならどうしたらいい? M87光線以上の光線を出すにはウルトラ姉妹達の力を借りないといけない。だが今の現状私一人しかない。どうすれば!)

シーダの攻撃を交わしながら、ゾフィーは右手にエネルギーをチャージをしていた。だが連続したシーダの攻撃にゾフィー自身も体力などが消耗をしていた。

右手にM87光線のエネルギーをチャージをしているので余計にエネルギーの消耗が激しいのだ。

だがシーダを倒すにはかなりのエネルギーを使わないといけないので、彼自身も右手にエネルギーをチャージをしていつでも放てる用意をしていた。

【ピコーンピコーンピコーンピコーン】

カラータイマーが点滅を開始をして、ゾフィーはシーダの攻撃を交わしていると突然としてシーダが動けなくなっているのだった。何かと見ているとウルトラ姉妹達がウルトラ念力を使いシーダの動きを止めていた。

「皆!」

「はやく……しなさい!」

「こいつの力が思っていた以上にやばい!」

「いつまでもてるのかわからない!」

「わかった!行くぞ!くらえ!グレートスペシャルゴルデンデリ
シヤスハイパワーマグナムM87光線!!」

「名前が長い!」

全員がツツコミを入れるが、ゾフィーが放ったグレートスペシャル
ゴルデンデリシヤスハイパワーマグナムM87光線がシーダに命

連れ去られるゾフィー

「「「最初はグー！じゃんけんポン！あいこでショー！あいこでショー！」」」」

宇宙警備隊本部にある隊長室、現在ウーマンからヒカリまでのウルトラ姉妹達がじゃんけんをしている理由、それは子どもの状態にしたゾフィーの世話を誰がするのかを決めるためのじゃんけんをしていた。

その本人は暇そうにじーっとしていると、突然として体が浮かんでいるのを感じて一体誰だろうとチラツと見た。

ウルトラウーマンギンガが素早く彼を捕獲して隊長室を出たのだ。

「さーて決まったわよゾフィー………つてあれ？」

ウーマンが振り返るとご本人がいなくなっていたので、全員が探しに行くことにした。一方でギンガは止まるとニュージエネレーシヨンの全員がいた。

「よっしや！成功をしたわ！」

「これがゾフィー隊長の小さい時なんですね？」

「まさか、ギンガにさらわれるとは思ってもしなかったよ。まさか？」

「おう！今回はあたしたちが隊長を世話をするぜ！！つてなわけでエックス、お願い！！」

「わかったわ。ウルティメイトアーマー！」

エックスはウルティメイトアーマーを装備をしてニュージエネレーション達の世界へと連れていく。

ゾフィーは大丈夫なのだろうか？と思いつつながら、連れていかれるのであった。念のために机の上にトレギア宛てに指示が書いたの置いておいた。

エックスの力で時空を越えてギンガ達は着地をする。その近くにゾフィーも同じように着地をした。

「まさか地球へ来るとは思ってもいなかったが………そうか、この次元はギンガの地球だね。懐かしいな。」

「それじゃあ順番は決めた順番でな？」

「わかった。」

「それじゃあ、次元移動は私に連絡をお願いしますね?」

「それではゾフィーさん、また会いましょう。」

ニュージエネレーション達は解散をして、ギンガは礼堂　ヒカリの姿になったので、ゾフィーも人間態になったが……

「……やはり小さいままか。」

「みたいだな。」

ヒカリは苦笑いをしながら、ゾフィーを連れて家へとやってきた。彼はヒカリの家に来るのははじめてだ。

「そういうば、今は一人暮らしを?」

「ええ、隊員になってからは一人暮らしをしているんですよ。」

ヒカリの部屋を見ながら、ダークルギエルが放ったバルキー星人たちとの戦いをスパークドールズの姿で見守るしかできなかったのも、懐かしそうにしているとヒカリはにこっと笑いながら近づいてきた。

彼はじーつと時計の方を見ると19時を回っていたので、彼はヒカリの方を見て言う。

「まさか?」

「そういうことですよ?さあ一緒に入りましょうか?」

「ですよねー」

ヒカリに連れられて一緒のお風呂に入った後、お布団に入り抱きしめられる。彼は宇宙警備隊は大丈夫だろうか?と思いつつ眠りについた。

一方で宇宙警備隊長室

「……」

モニターを確認をしているのはウーマンだ、彼女は隊長室のモニターを見ているのはゾフィーが消えた原因を探っていた。

自分たちがじゃんけんをしている隙について何か素早く動いてゾフィーを連れ去ったのを見た。

「一体誰か?」

彼女はもう一度先ほどの画面に戻してスローにしてみるとギンガがゾフィーを抱えていく姿が映っていた。

「……そういうことか、ニュージエネレーション達が原因か……
となると彼女達の時空にいるってことね。まあ今回はあなたたちに
譲るわ。だけどそれが終わったら……ふふふふふふふふ
ふ」

ウーマンは光のない目で笑いながらモニターを見るのであった。

現れたチブロイド

前回、ニュージエネレーション達に連れ去られたゾフィー、子どもの姿となったため今はギンガ事礼堂　ヒカリが一人で住んでいる家でお世話になっていた。

そんな二人は現在街を散歩をしており、仲良く手をつないでいた。「それにしてもゾフィーが子どもの姿になるって三度目なのか？」

「ああ、ヒカリに薬を飲まされて……まさか三度も子どもの姿になるとはな……」

彼はため息をつきながら歩いていると、突然として音がしたので何事かと見ているとインペライザーが突然として現れたので驚いている。

「な、怪獣!？」

「ヒカリちゃん!」

「あれってチブロイド!? どうしてこいつらが!!」

「話は後だ! 今はあのインペライザー達をどうにかしないと!!」

チブロイド達は二人に襲い掛かるが、そこに一人の人物が蹴りを入れてチブロイドが倒れる。

ウルトラウーマンビクトリーに変身をする人物ショウコである。

「ヒカリ!」

「ショウコ!? 来てくれたの!」

「ああってゾフィーは?」

「な!?!」

辺りを見るが、ゾフィーの姿が見えないが今はインペライザーを止めないといけないと二人はギンガスパークとビクトリーランサーを構える。

「行くわよ! ショウコ!」

「ああ!」

「ウルトラライブ! ウルトラウーマンギンガ!」

「ウルトラライブ! ウルトラウーマンビクトリー!」

「ショーウラ!」

「シエア！」

一方でゾファイはチブロイドから小さい体を使い逃げながら一つのカプセルを投げる。それがチブロイドの頭に当たりカプセルは地面に落ちるがそれが光り中からダークロプスゼロが現れる。

「マスター、こいつらお倒せばよろしいですね？」

「すまないが頼む。」

「任務了解。参る!!」

ダークロプスゼロはチブロイドに対してダークロプスショットを放ち攻撃をして撃破する。

そして頭部のダークロプススラッガーを投げつけてチブロイド達は次々に切り裂かれて撃破されて行く。

一方でインペライザーと交戦をするギンガとビクトリー。

「ビクトリウムスラッシュ！」

蹴りと同時にビクトリウムスラッシュが放たれてインペライザーに当たるが、そこにギンガがギンガセイバーを使い左手を切断させた。

「どうだ！」

「まだだ！」

「え？」

すると落ちた左手が再びくつついて、ギンガにパンチを繰り出して吹き飛ばした。

「ギンガ！」

ビクトリーに肩部のガンポートから光弾を放ち吹き飛ばした。一方で地上ではダークロプスゼロがチブロイド達を倒したのを見てゾファイは変身をするが子ども姿のままM87光線を放ちインペライザーに命中した。

「やはり体が小さい分、威力なども落ちているか……」

その隙にギンガとビクトリーは起き上がり、インペライザーに構える。

「ギンガクロスシュート！」

「ビクトリウムシュート！」

ダブル光線がインペライザーに命中を爆散をする。変身を解除をした三人……ゾファイは誰がチブロイド及びインペライザーを使って自分たちに襲わせたのか……悩みながらもシヨウコがじーっと見ていた。

「ヒカリ、次は私の番だが？」

「そうだったわね。ゾファイ、シヨウコが地下に案内をしてくれるってさ。」

「そうか頼むよ。」

「じゃあゾファイを預かる。」

「ええお願いね？」

そういつてヒカリと別れてシヨウコと共にビクトリアン達がいる世界へと案内される。

ビクトリアン

ゾフィースィデ

シヨウコに連れられて、彼女が住んでいる地底の世界へとやってきた。かつてビクトリアコアを狙いヤプールが侵入をして、エネルギーを奪い……ジュダスペクターを復活をさせてしまった。

それだけじゃない、ジュダ以外にもモルド、ギナの兄妹たちもビクトリアコアのエネルギーで復活をしてエックスたちと交戦をしたと聞いている。

「どうしたゾフィー？」

「いや、ビクトリアコアを狙ってヤプールがここに侵入をしたことがあったなど思ってるね、私はその特別の仕事でヤプール達の暗躍をエース、レオ姉妹、ヒカりに頼んだっというわけ。」

「なるほど……だがそのおかげで、私はビクトリーナイトになりジュダを倒すことができた。」

エースから詳しいことは聞いていた。かつて私達が苦戦をしたグランドキングをパワーアップさせたスーパーグランドキングと戦い、ビクトリーナイトの力で弱くなったところを倒したと聞いていた。

やはりグランドキングは相変わらず強いな……私達兄妹たちの合体光線を受けても一瞬だけ動きが止まったただだからな。

「いずれにしても、今日は私だ。ほかのメンバー達のように甘えさせてもらおう。」

「あ、はい。」

これは逃げられないのね……とほほほほ

ゾフィースィデ終了

そしてゾフィーは小さい姿だが女王と面会をすることとなった。

「始めまして、体が小さいですが宇宙警備隊長を務めております。ゾフィーと申します。」

「これは、宇宙警備隊といえは宇宙の平和を守るため……そして私達の世界を救ってくださった方々ですね。どうぞゆっくりと地下世界を堪能をしてください。」

「ありがとうございます。」

挨拶を終えたゾフィーはシヨウコが住んでいる部屋に案内されて、彼女も地上の方に慣れてきたかもしれないなと思いつながらじーっと見ているとシヨウコはお風呂の方へと連れて行こうとした。

「待って!?!なんでお風呂おとおおとおおとおお!」

「何を言っている。ヒカリと入っただろ?書いていないだけで一緒に入ってやったのだろ?なら次は……ワタシだ。」

「だからといって目から光が消えた状態で連れて行かないでええええええええええええええええええええええ!!」

ゾフィーはシヨウコに連れられていっしょにお風呂に入り、その後にベットでたっぷりとシヨウコと一緒にやられたのだけ書いておこう。

次の日、ゾフィーは目を覚ますと裸のシヨウコがやすやすと寝ており、彼自身は出してしまったので色々と疲れてしまった。

またか!!

ゾファイーside

シヨウコ君に襲われて、なんでみんなして子供になった時に容赦なく襲いかかってくるのだよ!!

全く、子供になったからって襲い掛かるなんておかしいんだよ! 次の日、シヨウコ君と共に地上の方へと戻るとハイライトを消した二人組がたっていたので、私は一体誰だろうとみて直ぐにわかった。

「ウフフフフフミツケタ、ゾファイーオニイチャン♥」

「ヨウヤクミツケルコトガデキマシタヨ。」

目から、ハイライトを消した二人組の正体は、ジャックとエースの二人だった。

ってことは、私がいなくなったのをみんなが知って探しに来たってことでもいいのかな?

「サテ、ビクトリー達、ゾファイーオニイチャンヲカエシテモラオウカナ?」

「悪いが、すぐに返す訳には行かない! エックス!!」

エックス? シヨウコ君が叫ぶと上空からウルトラウーマンエックスが現れて、シヨウコ君が私を投げて、って投げるなあああああああああああああああああ!!

「受け取った!! ジュワ!!」

「ウルティメイトアーマーアクティブ!!」

「シュワ!!」

そのまま次元を超えて、私はどうやらエックスの力によって彼女がいる世界へと来てしまったようだ。

てかほかの姉妹たちが探しているのを考えていると、ゼロがウルティメイトを装着をして探しているとなるな。大丈夫かな?

ゾファイーside終了

一方で光の国では、ジャックからゾファイーを逃がしてしまったという連絡を受けたウーマン。

『申し訳ありませんお姉ちゃん! ゾファイーお兄ちゃんを逃がしてしま

いました!』

「いいわ、おそらくエックスの世界へと行ったわね。別の姉妹たちに向かうように仕向けるわね。」

そういつて通信を切り、ウーマンはふふと笑いながら目からハイライトを消えた状態で次の姉妹にXの世界へ行くように指示を出す。

一方でXは着地をするとゾフィーをゆつくりと下ろした。かれはやれやれといいながらエックスも光出して大空　ダイヤへと変わり手を繋いだ。

「まさかウルトラ姉妹たちが動き出すなんて予想をしていた以上に速いわ。」

「………なんで、こうなるんだよ。」

彼はため息をついて、ダイヤと共に歩きながらエックスの世界のことは彼はあまり関わっていないのを思い出した。

ナツクル星人バンデロを追いかけるために、ゼロと共にこの世界へ来たことを思い出した。

(そういえば、ゼロとともに関わったことをすっかり忘れていたよ。闇の商人バンデロを追うためにゼロと共に次元を超えたんだっとな。)

「どうしました?」

「いや、なんでもないよ。おそらくジャックとエースが来たってことは、ほかの姉妹たちも動いていると思うね。」

「だからこそ!急いで色々と準備をしてきたんです!さあ楽しみますよ!!」

ダイヤに手を引っ張られて彼は必死に動きについて行くのに大変であったことを書いておく。

修羅場

ゾフィースィド

まさか、ジャックとエースが来るとは思ってもいなかったよ。しかもビクトリーもわかっていたのか、エックスに頼んで彼女の世界へと連れてこられてしまったよ。

なにせ、ウルティメイトアーマーを纏い彼女の世界へと連れてこられる際に投げ飛ばされておもちやのように抱えられたよ。

そして、彼女の世界へとやってきた。

ウルトラマンウーマンエックスの世界にもスパークドールズがあるのだが、どうやらギンガの世界とは違うのだが、スパークドールズという名は一緒なんだねと思ったよ。

そこからサイバー怪獣と呼ばれるものが完成をして、エックスの新たな力として戦力アップをしたね。

「サイバーアーマーか……」

「どうしました?」

「いや、サイバーアーマーという怪獣の力を使えるのは君とビクトリーぐらいだなと思ってね。」

「あー確かに……ん?」

ダイヤちゃんが前の方を見ていたので、何かと見ていると黒いオーラを纏った美人の二人がいるのだが……。あれ?どこかで見たことがあるような……。あ!?レオとタロウ!?なんで二人もこの世界に来ているの!?

「ミツケター!ゾフィーニイサン!!」

「ヤーツトヤーツトデスヨ?ウフフフフフフ」

うわー、二人からハイライトが消えた目になっているし、しかもレオに関しては以前の私が小さくなった時のような感じになっているし……。いかががしたものか……。おや?何かが現れたな。

『ぎゃおおおおおおお!!』

うわー、怪獣キングゲスラ……。てか三人とも戦う準備をしているし!

「タロ——ウ!!」

「レオおおおお!!」

「エックスうううう!!」

三人がウルトラウーマンになって、キングゲスラに攻撃を開始をしている。つてあれ?

「ゾフィーさん、今のうちに移動をします。」

「オーブ?」

私を抱えていたのはオーブだった、彼女は私が小さい姿になっているので危ないので移動をするといいい連れていかれる。

あれ?このパターン大丈夫かな?

ゾフイーside終了

キングゲスラと交戦をしているタロウ、レオ、エックスの三人……キングゲスラは攻撃をしてきたが、エックスとタロウは交わしてレオは飛びあがりレオキックを放ち吹き飛ばす。

「エックス!」

「はい!ザナディウム光線!!」

エックスが放ったザナディウム光線がキングゲスラに命中をして、スパークドールズへと変換をして三人は人間態になる。

「あれ!?ゾフィー兄さんはどこに!?!」

「!?!」

三人は辺りを見て探している?

「ウルトラウーマンオーブ!スペシウムゼペリオン!」

「あ!!」

オーブが飛びあがっていくのを見て、そのまま光となり、オーブは自分の世界へと連れて行く。

「……ちくしょおおおおおおおおお
お!!」

オーブに連れられて

エックス、タロウ、レオがキングゲスラと交戦をしている中、自分を助けてくれたのはウルトラウーマンオーブだった。

三人のウーマンが倒した後、変身をしてゾフィーを連れていってしまふ。

そして変身が解除をしたオーブに連れられて、彼女はこうしてこうなつたんだ？と首をかしげる。

「ところで、なんで私が子どもの姿になつているのを知つたんだい？」

「ジード経由ですね。写真なども見せてもらい羨ましいと思つて……ね？」

「ね？じゃないよ。それで自分たちの次元へと連れていかれても困るよ。」

ゾフィーはため息をつきながら、オーブと共に歩いてきた。彼女はいつもの旅をしている格好をして戦い続けてきたのだな？と思いつながら、手をつないでいた。

子どもになっているので、迷子にならないと思うけどなとゾフィーは心の中で思いながら、ちらつと空を見ていた。

（そういえば、この世界でマガオロチ達を封印をしたな、私の場合は彼女の力で封印をしないと行けなかったからね。なにせマガオロチ……強いもん。私奮闘をしたけどあんなだけ強かったのびつくりだよ。よく封印ができたものだよ私のカード……）

ちらつとオーブのカードデッキが収納されているのを見るとオーブはちらつとゾフィーを見た。

「どうしましたゾフィーさん？」

「あ、いや……君はフュージョンカードで様々な姿に変身ができるだなんてね。」

「確かに先輩方のカードを使いスペシウムゼペリオンなどに変身ができますから、状況において変わることが可能ですね。」

ゾフィーはレイバトス戦でもゼロと共に様々な姿に変身してたのを思い出した。自分たちが駆けつけた時にはゼロが苦戦をして自

分はバードンと戦い撃破したことなどを思いだす。

「いずれにしても、レイバトスもタルタロスに利用されたんだったな？」

「はい、ギガバトルナイザーを復活させましたが……デビルスプリンターの力を使った影響で体が崩壊をしました。」

（だが結局ギガバトルナイザーは奴らの手に、いずれにしても今は奴らがうごきつてうお!?）

考え事をしてしていると突然として視界がふさがれたので、何かと見るとオーブの胸に包まれていたので、彼は驚いていると彼女が話しかける。

「ゾフィーさん、あまり一人で抱えないでください。私も同じですから……闇のエネルギーを纏っているのはあなただけじゃないってことですよ？ 私もベリアルさんの力を使っていますから。」

『そういえば、こいつは私のカードを持っていたわね。しかも私とゾフィーのフュージョンアップだったわね?』

「ウルトラウーマンオーブ！サンダーブレスター！」

そして彼女と共に連れられたのがホテルだったが、なぜか彼女が興奮状態になり襲われたとだけ書いておこう。

「私はいったいいつになったら大人に戻れるんだああああああああああああああああああ!!」

元に戻る

オーブと共にホテルにてヤツテしまったゾフィー、二人でホテルを後にしてオーブはいつもの飲もうとしたが、ナツクル星人が現れた。「見つけたぞ！まさか宇宙警備隊長がここにいるとは思ってもしいなかったがまあいい……うおおおおおおおおおお！！」

ナツクル星人は大きくなり、ゾフィーは驚いている。

「な!？」

「ゾフィーさんここは私が！ウーマンさん！」

「ウルトラウーマン！」

『ヘア!』

「ティガさん！」

「ウルトラウーマンティガ！」

『であ!』

「光の力、お借りします!!」

「フュージョンアップ！ウルトラウーマンオーブ！スペシウムゼペリオン！」

ウルトラウーマンオーブスペシウムゼペリオンへと変身をして、ナツクル星人に蹴りを入れる。

「私はウルトラウーマンオーブ！光を借りて悪を撃つ！シユワ！」

「おのれ！きええええええええええええ!!」

ナツクル星人は走りだしてオーブに殴りかかる。彼女は冷静に放たれた攻撃をはじめさせて胴体に拳を叩きつける。

連続したオーブの攻撃にナツクル星人は翻弄されている。

「おのれ！」

「これで終わりにする！すぺり「今だブラックキング！」え？」

すると地面からブラックキングが現れて、ウルトラウーマンオーブの後ろからつかんでオーブは腕を動かせなくなってしまう。

「な!？」

「くつくつく、さつきはよくもやってくれたな!!おら!!」

「が!!」

動けないオーブのお腹を殴り、オーブはピンチになっている。ゾフィーはその様子を見ているしかできない自分に怒りを感じていた。彼は目を光らせると力を込める。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

するとゾフィーの体が光りだして、元の姿へと戻ってブラックキングにウルトラキックを放ちオーブは動けるようになったのを見た後、ゾフィーが元の姿になっているのに驚いていた。

「ゾフィーさん!」

「大丈夫かオーブ? ナツクル星人! お前の思う通りになると思うな! ブラックキングは君に任せる。ナツクル星人は私がやろう!」

「はい!!」

ゾフィーはオーブを回復させるとナツクル星人に向かって走っていく。ナツクル星人はアイビームを放つが、彼は交わして飛びあがりウルトラキックをナツクル星人に命中させる。

【ウルトラウーマンオーブ! バーンマイト!】

「おりゃああああああああああ!!」

バーンマイトに変身をして、ブラックキングの胴体に炎を纏わせたチョップを叩きつけてダメージを与えていく、一方でナツクル星人に放つ攻撃をクロスガードでガードをした後ゼット光線を放ちダメージを与えた。

「ば、馬鹿な! これが宇宙警備隊長の力!」

「ナツクル星人! 受けてみるがいい! これが私の……M87光線だ!!」

ゾフィーが放ったM87光線が命中をしてナツクル星人が爆発をする。オーブも飛びあがりスワローキックでブラックキングの角を叩き折る。

「これで終わらせる! ストビウムダイナマイト!!」

オーブの全身が炎が纏われて突撃をしてブラックキングに命中をして爆発をする。ゾフィーはやっと元に戻れたのはいいが……

「さてどうやって「迎えに来たぜ！隊長？」ん？」

彼は振り返るとウルティメイトイージスを装着をしたウルトラウーマンゼロが立っていた。彼女の力を使えば元の時空へ戻ることができる。

彼は一旦オーブの方へと見ると彼女は気にせずにと言ったのでゼロと共にウルティメイトイージスの力を使い元の時空へと帰還をした。

「それにしても隊長、色々大変だったみたいだな？」

「まあね、……ロットとブルの二人と話とか色々していないけど大丈夫かな？」

「いいじゃねーか？それに帰ったら多分お袋たちがな？」

「……」

時空を越えて光の国へと帰還をしたゾフィー、そして彼は歩いていき宇宙警備隊本部へと戻り、宇宙警備隊隊長室へと開けるとウーマンが座っていた。

「はーいゾフィー兄様？私がここにいる理由はわかっているわね？」

「まあな、色々ありがとうと言っておくよ。」

彼は仕事が変わろうとしたが、彼女が手をつかんで仮眠室の方へと移動をしてベットに倒された。

「えっともしかしなくても？」

「ふふふふふそういうこと・と・よ？さあ愛し合いましたよ？」

こうしてウーマンに捕まり一晩愛し合ったのであった。

ため息をつく

「はあ……」

宇宙警備隊隊長室の仮眠室、ゾフィーは起き上がりため息をついた。その隣ではハヤタ・レイの姿でうふふと笑いながら裸のウーマンが笑っている。

「久しぶりにゾフィーと交わったわね？しかも一人でねふふふ。」

彼女は笑いながらお腹をさすっているので、どれだけ彼女に出したのだろうか？と思いつながら立ちあがり、仮眠室に備えられているシャワーで体を洗うことにした。

ゾフィーとして転生をしてから、様々な戦いを得て成長をしてきた。まさかウーマン達と抱き合う関係になるとは思ってもいなかっただのを覗けば……。彼はシャワーを浴びた後にウルトラ戦士の姿へと変身、久しぶりに宇宙警備隊隊長の椅子に座る。

扉が開いて、トレギアが入ってきて驚いている。

「ゾフィー隊長!?元の姿に戻ったのですか!？」

「ああ、気合で変身したら戻った。」

「普通、気合で子どもの姿から戻るのですか？」

「さあ?。」

彼は首をかしげて、仕事にとりかかる。ほかのメンバーからの報告を聞きながら指示を出していき各部署は動きだしていた。

「惑星「キラメイ」からSOS、近くにいるウルトラウーマンは？」

「はい、マックスです。」

「よし、マックスに救援を向かうようにウルトラサインを頼む、ほかの近くにいるウルトラウーマン達も惑星キラメイを助けるよう指示を出してくれ。」

「わかりました。」

トレギアはすぐにウルトラサインを出して、宇宙空間をパトロールをしているウルトラ戦士に指示を出す。

(惑星キラメイ、確か宝石のような綺麗な星だったのを覚えている。だがあの星からSOSサインが出るなんてね。いずれにしてもマッ

クスが向かっているなら問題と思うが、念のために近くにいるウルトラウーマン達にも向かってもらうように指示を出したからね。」

彼は心配ないと思うが、一方で惑星キラメイに着地をしたウルトラウーマンマックスは辺りを見ていると暴れている怪獣の姿を発見をした。

「あれが暴れている怪獣、取り押さえないと!!」

マックスはダッシュをして怪獣に対してキックを放つ。蹴りを受けた怪獣は起き上がり口から熱線を放ちダメージを与えた後しつぽの連続した攻撃をマックスに放つ。

「ぐー!」

マックスは反転をするとマクシウムソードを放ち尻尾を切断させて接近をしようとしたが、切断されたはずのしつぽが再生をしてマックスに放ち吹き飛ばした。

「がは!!」

怪獣はマックスに向かって歩いて止めを刺そうとした時、光線が放たれて怪獣を吹き飛ばす。

一体誰がと見ていると着地をしたのはウルトラウーマンセブンだった。

「無事かマックス?」

「はいセブン。」

セブンは振り返り頭部のアイスラッガーを投げると頭部、胴体、尻尾を切断させた後にワイドショットを放ち爆発させた。

マックスはセブンの隣に立つと話をした。

「セブン、あの怪獣は?」

「わからない。いずれにしても見たこともない怪獣だな。とりあえず報告をするために光の国へと戻るとしよう。」

「了解です。」

二人の戦士は新しい怪獣のことも含めて報告をするために光の国へと帰還をする。

新種の怪獣

ゾフィースィド

惑星キラメイで現れた怪獣、マックスが交戦をしたがセブンが助太刀をしてワイドショットで倒したという。

マックスが交戦をしていた時はマクシウムソードで切断された部分が再生をされたというが、見せてもらったのだがやはり前世でも見たことがない新種の怪獣だ。

そこで私は、ヒカリ、トレギアを呼び新種の怪獣について話し合いをする。

「新種の怪獣か……」

「ああ、色んな世界とつながったのはいいが……今まで現れた怪獣のデータ認証でも出てこないみたいだ。」

「私も知らないですね。マクシウムソードで切断された場所から再生をする怪獣です。しかし、どうして惑星キラメイに？」

「もしかしたら、惑星キラメイの宝石が奴の好物かもしれない。惑星キラメイの宝石は宇宙一の宝石だからね。もしかしたら、奴は惑星キラメイの宝石を狙い現れたかもしれないな。」

「ならこいつは再生怪獣「ホウセキガリ」ってでもつけておくか？」

「いやなにその泥棒みたいな名前……まあデータ参照がないからね。仕方がない……トレギア、ホウセキガリのデータを宇宙警備隊に登録をしておいてくれ。」

「わかりました。」

トレギアは隊長室にあるパソコンを使いデータを作成をしていく、その間にヒカリと私は色々と宇宙警備隊の装備などの話し合いをしてから解散となり、私は久しぶりに家へ帰ることにした。

「あーゾフィー兄さん！」

「やあタロウ、教官としての仕事は終わったのかい？」

「はい！まあ、書類を纏めるだけですからね。そんなに難しくはなかったですよ。」

「トレギアに怒られるからね（笑）」

「うう……」

やっぱりトレギアのそういうところがタロウにとっては苦手かもしれないね（笑）タロウと共に帰りながら、私はタロウと別れて家の方角を歩いている。

昔、父が生きていた頃……小さい私の手を握りながら父と共に歩いてきた道、もう父や母はいない……宇宙の平和を守るために戦い続けるさ、家へ到着をしたのはいいが……どうして電気がついているのだ？

「妙だな……私の家なのに、誰かがいる感じがする。警戒はしておいた方がいいな……」

自分の家なのに、誰かが住んでいるのでいったい誰だろうと思いつながら、家へと入る。

ゾフィースide終了

自分の家の扉を開けて、彼は警戒をしながら中に入りウルトラブレスレットをウルトラランスへと変えて警戒をしながらリビングの扉を開ける。

「誰だ！私の家にいるの……は……え？」

ゾフィーは中に入りウルトラランスを構えていたが、目を見開いていた。

「すまないなゾフィー。」

「勝手に邪魔をしているわ。……本当に大きくなったわねゾフィー……」

「ま、まさか……父さんに母さんなのですか？」

「ああそうだ。お前の父であっているぞ？」

「……はい、私はあなたの母でありますよ？」

ゾフィーは混乱をしていた。自分の家にいたのが死んだはずの両親だからだ。彼はウルトラランスを持ったままいたので、父は立ちあがり抱きしめる。

「!!」

「あの小さかったお前が……今じゃ宇宙警備隊の隊長を務めるほどに成長をしたのだな？」

「あなたはいいいじゃないですか、私は産んで死んだのですから……この子と過ごして来れなかったのですから、立派に……立派に成長をしたのですねゾフィー……うううう」

ゾフィーの母は泣いており、父も涙を流している中ゾフィー自身も目から涙が出ていた。

「あ、あれ……どうして涙が……父さん、母さん……私は、私は……寂しかったです。」

「すまなかつたゾフィー、お前を一人にさせてしまったな。」

「これからはずっと一緒だからね？」

「はい！それでどうして二人が？ウォーリアの時もそうでしたか……」

「……それはウルトラウーマンキングのおかげでもあるんだ。」

「そうね、あなたが立派になったのは知っていた。でも幼少期からこの人が死んでからは涙を見せなくなったと聞いたの、そうしたら復活をさせてもらえたのよ。」

「まあ肉体の生成に時間がかかってしまい、復活したのは二日前なんだ。」

「それでゾフィーの家で待っていたけど、あなた……なかなか帰ってこないから心配したのよ？」

「すみません、色々と事件で光の国を離れていましたので……」

「お前も忙しいからな、ケンが隊長を務めていた時に比べてたら光の国のセキリテイとか変わっているから驚いてしまったよ。」

「それで父さんは宇宙警備隊に復帰を？」

「……いや、俺は宇宙警備隊には復帰をせずに光の国の道場でもやろうかなと思ってね。ケン達にも話をしようと思っている。明日、悪いと一緒にケン達に会わせてくれないか？」

「わかりました。明日は隊長としての仕事報告ついにしめしよう。」

こうしてゾフィーの父と母と彼にとってはかなり年の数が経ったが再会をする。

父と共に

次の日の朝、ゾフィーは目を覚ました。彼はカプセル怪獣たちのカプセルが空いているのを見て彼女達が外に出ているのか？

昨日は、夢のような感じがした。死んだはずの父と母が自分の家にいたので驚いて眠りについてしまう。

だが朝から、いい匂いがしているのでいったい何だろうか？と思いつつリビングの方へといったら、母が作っていたのでこれは夢ではないのだなどバードンを始め母の手伝いをしているので普通に一緒に過ごしている。

「おはようゾフィー。」

「……夢ではなかったのですね。お母さんが今ここにいるのは夢ではないですね。」

ゾフィーは用意されたご飯を食べるため、椅子に座り父も起きてきた。

「ふあー久しぶりに起きた感じがするよ。おー久しぶりの母さんのご飯だな。さてゾフィー悪いがケンがいる部屋に案内をしてくれないか？」

「ええわかりました。」

「お母様、これはどこに？」

「ロプスちゃん、それはあっちにお願いね？」

「承知しました。」

「しかし、怪獣とロボットがお前のカプセル怪獣になるなんてな、あれからかなり経っているのだな。」

「ええ彼女達は私にとって大事な仲間ですから。」

母親は家で待つことにしたので、バードンたちに母の相手をお願いをして二人は宇宙警備隊本部に向かって歩いていく。

「いやー懐かしいなー光の国、まさかこうして再びこうやって歩くことが出来るなんてな。お前が隊長なら隊長は誰が？」

「ケンさんです。」

「ケンが隊長………想像ができないな。」

父は苦笑いをしながら歩いていき宇宙警備隊本部に到着をして、入り口に立っている戦士達が敬礼をして二人は中に入り大隊長室の方へと歩いていく。

「慕われているな息子よ。お前を見て皆敬礼をしているじゃないか。」
「これでも宇宙警備隊隊長を務めていますからね。さあ父さん、ここが大隊長室になります。」

「……」
「父さん？」

「す、すまん……あいつにどのような顔をして合えばいいのか
と思つてな。緊張がしてきたわ。」

「大隊長、おられますか？」

『ゾフィーか？ 一体何かあったのか？』

「大隊長に会いたいという人を連れて来まして、入室許可がほしいのですが。」

『私に？……わかった中に入ってくれ。』

「はい。許可が出ましたので入りますよ。」

「お、おう」

大隊長室に入り、中にいたケンとベルはゾフィーの隣に立っている人物を見て目を見開いている。

「セイヤ!?!」

ゾフィーの父の名前は「セイヤ」と呼ばれている戦士で、母は「メイナ」と呼ばれている。

「やあ二人とも久しぶりだね？」

「セイヤ、なぜお前が……いやそうじゃない。お前は死んだはずじゃ。」

「ああ死んでいたよ。ベリアルのことも知っているさ。」
「……」

「すまねえなベリアル、お前にも色々と苦労をしたみたいだな？」

「謝るのは私だ。悪の自分に負けたとはいえ……あなたから預かったゾフィーを最後まで見ることでできなかったから。」

お互いにかつての親友同士が再会をしたのを見た後、ゾフィーは自

分の仕事をするため隊長室へ戻ることにした。

「では父さん、私は隊長としての仕事がありますのでこれで失礼します。」

「悪いなゾフィー。」

大隊長室を後にしたゾフィーは隊長室へと入る。そこではトレギアが書類を纏めていたので彼は挨拶をする。

「やあトレギア。」

「これは隊長、そういえば隊員達がゾフィー隊長が男の人を連れて一緒に歩いているという噂が流れておりますが?」

「あああれは私の父だよ。」

「隊長の!?お義父様!?!」

「ん?何かアクセントが違う気がするが……」ゾフィーお兄ちゃん!!」なんでウルトラ姉妹が集結をしているの?」

扉の方を見るとウーマン達が集まっており、苦笑いをしながら対応をする。

「隊員達がゾフィー兄さんと同じ顔をした人物と共に歩いていると言っていたのですが?」

「あれはどういうことだ?」

「説明をお願いします!!」

「私と一緒に歩いていた人物は私の父だ。」

「『ゾフィー(兄さん)(お兄ちゃん)のお義父さん!?!』」

「だから、なんかアクセントが違う気がするのだけど!?!」

「ほーうモテモテじゃないか息子よ(笑)」

笑いながら話しかけている人物が来たのでウーマン達は後ろを見るとゾフィーと同じ顔をした人物セイヤが立っていた。

「父さん……」

「なるほどな、この子達がお前が作った『ウルトラ兄妹』たちってことか。」

「は、始めまして!私は!!」

「知っているよウーマンちゃん、セブンちゃんにジャックちゃん、それにエースちゃんとタロウちゃんだろ?」

「!!」

「それでそこ子がレオちゃんにアストラちゃん、エイティちゃんにメビウスちゃん、ヒカリちゃんに秘書をしているトレギアちゃんだろ？」

「どうして私たちのことを？」

「俺は2日前まで死んでいたからな、母さんと一緒に息子の成長を見ていたんだが……いやー息子がモテモテでうれしい限りだよ。」

「父さん……」

「お義父さん……」

「さて俺は後にするよ。お前を慕ってくれている子達のためにも、お前は死んではいけないわかってるな息子よ？」

「はい。」

「ならいいさ、君達も息子が色々と迷惑をかけるかもしれないが支えてやってくれ。これは死んでいて何もできなかった親の願いでもあるんだ。」

「わかっています！」

「ああ、ゾフィーは必ず守ります！」

「それを聞いてよかったよ。それじゃあな？」

そういつてセイヤは宇宙警備隊を後にする。彼はメイナに色々と報告ができるなど笑いながら家の方へと歩いていく。

ロボット集団の襲撃！

宇宙のパトロールをしている我らのゾフィー、今回共にパトロールについているのはウルトラ兄妹四番目ウルトラウーマンジャック、五番目ウルトラウーマンエースである。

彼らは惑星「オーラシア」付近をパトロールをした後に次の場所へと向かおうとした時光弾が放たれて交わした。

「今の攻撃は!?」

「見てください!」

「あれは……レギオロイド、キングジョー、インペライザー?」

「あつちはガメロットにロボネズ!」

「ロボット怪獣たちの襲来ですか!」

レギオロイド達はゾフィー達に攻撃を開始した。彼らは迎撃をするためゾフィーはウルトラクラウンを装着をして超闘士ゾフィーへと変身をする。

「ふん!!」

彼は接近をしてロボネズの胴体を貫通させて撃破した。ジャックはウルトラショットをレギオロイドに当ててから後ろから襲い掛かろうとするレギオロイドにウルトラスパークカッターを放ち撃破する。

エースはメタリウム光線を放ちインペライザーを撃破する。後ろからキングジョーがビームを放つが、ゾフィーが間に入りウルトラクロスガードでガードをしてからエースがパンチレーザースペシャルを放ち撃破した。

「すみませんゾフィー兄さん。」

「気にするな。」

「まだ来ます!!」

次々にガメロットなどが現れたのを見て、ゾフィーは二人に下がるように指示を出す。

「二人は後ろの方へ下がってほしい。」

「ですが!」

「ゾフィーお兄ちゃん何を？」

「はあああああああああ………」

「!!」

ゾフィーのエネルギーが上がっているのを感じて二人は驚いていると彼は右手に光エネルギーを集めていきロボット怪獣軍団に対して構える。

「このウルトラクラウンがなかったら、この技はできなかつた………受けるがいい!! スペシウム………超光破!!」

超闘士ウルトラマンの必殺技スペシウム超光破が放たれてロボット軍団はその一撃を受けて爆発をした。

ゾフィー自身もスペシウム超光破が本当に撃てるとは思ってもいなかったので驚いており、ロボット軍団は一撃で全滅をした。

「(〃。〇)ポカーン」

ジャックとエースは開いた口が閉じれなくなり、ゾフィー自身もウルトラクラウンを装着をしているとはいえ、M87光線以上の技が完成をしてしまったことに驚いてしまう。

(うーん流石惑星を2個、3個破壊できる技だからね。しかし………惑星がないから仕えたが………この技はこういう星じゃないところでは使えないな。)

威力はすごいが、惑星を破壊をしてしまうほどの技なので、スペシウム超光波はあまり使わない方がいいなど判断をしてから、エースはキングジョーの残骸を調べている。

「しかし、どうしてロボット怪獣たちがいきなり襲い掛かってきたのでしょうか？」

「それに、操っていた宇宙人もいる様子もなかったですね。」

「………もしかしたら、さっきのスペシウム超光破で共に吹き飛ばんでしまったかもしれないな。」

「あー確かに『そんなわけあるかあああああああ!』あ、出てきた!」

「お前はチブル星人!」

「よーくも私のロボット軍団を破壊してくれましたね!色々!

仮眠室へ

ロボット軍団をスペシウム超光破を放ち撃破して、首謀者のチブル星人をアイスラッカーを放ったセブンがチブルローダーを動けなくさせて捕獲をした。

光の国へと帰還をした後、ゾフィーは隊長室の方へと移動をした。扉が開いて中に入るがトレギアの姿がいなかったため、今日は休みだなと思いだした。

彼は超闘志ゾフィーとなった影響なのか、疲れが出てしまいそのまま仮眠室の方へと移動をしてベッドの方へと寝転がり眠りについた。

「ZZZZZZZZZZ」

隊長室の方へと歩いていくウルトラウーマンがいた。それはヒカリである。

「全く、ゾフィーの奴今日は実験に付き合ってくれと言ったはずなのだが？全く何をしているんだ？おいゾフィーってあれ？」

ヒカリは隊長室の方へと入るが、トレギアの姿もなければゾフィーの姿もなかったため彼女はいったいどこに行ったのだろうか？と辺りを見て仮眠室の方へいるじゃないか？と思いい中に入ると目的の人物はベッドの上で倒れて寝ているのを見て、うーんと考えた後に一緒のベッドに乗ることにした。

「うん、これは私は悪くないからな？実験をするって言ったのに来なかったゾフィーが悪いからなうんそうだそうだ。」

そういつて彼女はゾフィーが寝ているベッドに乗り彼を抱きしめるように眠ることにした。

彼女の豊満な胸がゾフィーを包んでおり彼女自身は気にせず眠ることにした。彼女も研究などで疲れていたのか……眠ってしまった。

それから、数時間が経ちゾフィーは目を覚まそうとしたが、何か大きなものが自分を包んでいることに疑問を感じていた。

（おかしい、なんだこの私を包んでいるこのやわらかいものは……いったい何だろうか？私は確かロボット怪獣たちと交戦をした後に

隊長室へと戻った後仮眠室のベッドに倒れこんで眠りについた。それで目を開けたら、今現在やわらかい何かに包まれていることが判明をした？ いったい何だろうか？)

彼は色々と考えていると甘酸っぱい声が聞こえてきて、彼はこの声は？ と思い考えているとヒカリの豊満な胸に包まれていることに気づいた。

(しまった、今日はヒカリの実験に付き合ってくれと頼まれていたのを忘れていた。ロボット怪獣たちとの戦いで疲れてしまい、ぐっすりと眠ってしまったのか。そして彼女は私を呼びに来て仮眠室のベッドにつかれて眠ってしまったというわけか……全く、お互いさまじゃないか……)

「ん……ゾファイ？」

「……やあヒカリ。」

「ふふ……どうだ？ 私の胸は……」

「最高です。」

「ふふそうだろう？ お前の童貞を最初にもらったのは私なのだかなら……ふふふふ」

彼女は笑いながらぎゅっと抱きしめて、彼自身は彼女の豊満な胸がさらに強められて行き彼自身はこのままでは窒息をしようというためタップをする。

「ん……悪い悪い……」

彼女は離れて、ゾファイは息ができることに感謝をしていたが……よく考えたらウルトラマンの姿なので別に息がでなくても問題ないなと思ってしまう。

「それにしても一体何があった？ お前が私の実験のことを忘れてぐっすりと眠っていたのだからな？」

「実は……」

ゾファイ説明中

「チブル星人にロボット怪獣か……それでお前は超闘志と呼ばれる姿に変身をして戦い疲れが出て仮眠室で寝てしまったと……(だが、なぜチブル星人がインペライザーなどを……一体誰が

「奴に？」

ヒカリは何者かがチブル星人にロボット怪獣を送りゾフィーを倒させようとしているのを確信を得ていた。

なぜこの男が狙われないといけないのか？と思いながらも彼女は人間の姿へと変わったのを見てゾフィーはもしかして？と思い聞くことにした。

「あのヒカリさん？」

「実験内容を変更させてもらう。そうだな……愛する人とS○Xをすることにしよう。さあ愛し合おうか？」

「なんでやあああああああああああああ!!」

仮眠室で休んでいたのになぜか愛することになったゾフィーであつた。

ため息をつく

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

ここは宇宙警備隊本部隊長室にある仮眠室のベット、ウルトラウーマンヒカリとS〇〇をしたが、最近彼女達の遠慮しないこともあり彼は頭の中でヤツたであろう人物を考えていた。

(エース、ヒカリ、ウーマン・・・・レオなども多いかな？はあ・・・・色々と長い年月を過ごしてきたけど、女性になつたとはいえこんなにして大丈夫だろうか？と思いながらも流れるように抱いてしまう私も私かな・・・・)

ゾフィーは隣で裸となり寝ているヒカリの頭を撫でながら、彼はシャワーを浴びるため仮眠室のシャワー室へと入り、体を洗う。

シャワーを浴びながら彼は体についたいろんなものを落としていく。まあヒカリとヤツたので色々だね？

仮眠室のシャワー室から出て、彼は椅子に座りコーヒーを飲む。

「ふむ、やはり色々とやった後のコーヒーは美味いかな？」

「なら私ももらおうか？」

「・・・・・・・・・・せめて格好をどうにかしてからしてほしいのだけど？」

ヒカリは人間態の姿で裸のままいたので彼は苦笑いをしながら言うが彼女は気にしないで彼に抱き付いた。

「ん？何か当たっているのだが？」

「あのね・・・・・・・・そんな裸のままいたら反応をしてしまうよ。」

「ふふそうか。」

「・・・・・・・・・・ん？」

仮眠室の扉のモニターにトレギアがいたので彼は立ちあがり応答をする。

「トレギア？何かあったのかい？」

『はい、それで仮眠室の扉が閉まっていたので、もしかして隊長がおられるかと思い。』

「わかった。その報告を聞こう。ちよつとだけ待つてほしい。」

通信を切り、ヒカリの方を見て彼女はため息をつきながらウルトラ

ウーマンヒカリの姿へと変身をする。

そしてテレポーションを使いヒカリは自分の部屋の方へと移動をした。彼は仮眠室から出てトレギアの報告を聞くために椅子へ座る。

「さてトレギア、一体何があつた？」

「はい、惑星アースラから救援要請が出ております。」

「何!? 惑星アースラから?」

「はい、それで今現在ウルトラ姉妹のレオ、アストラ、エイテイが向かっています。」

「わかった。トレギア、ウーマン、セブン、ジャックを惑星アースラへと向かわせてくれ。私も行く。」

「た、隊長!」

ゾフィーはオーブカリバーを背負い惑星アースラへと向かっている。一方で惑星アースラでは民たちの避難をさせておりアナタシアは軍の兵士たちの指示をしていた。

「皆さん! 落ち着いて避難をしてください!」

「アナタシア様!! 敵の部隊がやってきました! すでに光の国に救援要請はしておりますが……」

「わかっています。その間は私達が抑えますよ!」

「は!!」

そして現れたのはギヤラクトロン軍団だった。ギヤラクトロンの軍団はアナタシア達がいる街の方へと進行をしてこようとしていた。

アナタシアは本当は怖い、だが民たちのことを考えることにして彼女は今は集中をすることにした。

するとギヤラクトロンの一体が爆発をしたのでいったい何かと見ていると、ウルトラウーマンレオが着地をしていた。

彼女はレオキックを放ちギヤラクトロンを一体撃破したのだ。

「まさかギヤラクトロンがいるとは思ってもいなかっただわ。」

ギヤラクトロン軍団はレオに対して攻撃をしようとした時、上空から光線が放たれて二体が撃破される。

エイテイ、アストラの二人もレオの近くに着地をする。

「ギャラクトロン軍団が惑星アースラを侵攻をしてきたのでしょうか？」

「わからないわ。アストラ、エイティ、油断をしないでね？」

「わかっていますよレオ姉さん！」

「はい！」

三人は走りだして、ギャラクトロン軍団へと向かっていく。

「おーあれはウルトラ兄妹だ！」

「光の国からの救援が来られました！さあ私達も援護をします!!」

「「はは!!」「」」

一方でギャラクトロン軍団と交戦をするレオ、アストラ、エイティの三人、レオは接近をしてギャラクトロンのボディに拳を叩きつける。

後ろから一体が襲い掛かろうとしたが、ハンドスライサーで頭部を切断させて撃破する。

アストラは頭部からエレクトロビームを放ちダメージを与えた後、エネルギー光球を作り投げて撃破する。

エイティはムーンサルトキックを放ちギャラクトロン一体を倒すとウルトラレイランスを投げつけて撃破した。

だが次々にギャラクトロン軍団が召喚されて行くので、レオ達は構え直すと上空から光弾が放たれて吹き飛ばされてしまう。

「「きゃあああああああああ!!」「」」

現れたのはダークファルシオンだった。

「ダークファルシオン!?!」

「まさかこのギャラクトロン軍団は……」

「そうこの惑星アースラを狙わせたのはこの僕さ……ゾフィーをおびき寄せようとしたが、君達が現れるなんてね……まあいいさ、ギャラクトロン軍団がっつてあれ?」

ダークファルシオンが振り返るとギャラクトロン軍団が破壊されているのでいったい何かと見ているとウルトラクラウンを装着したゾフィーが現れる。

「な、何?!」

「……………ダークファルシオン、私をおびき寄せるためにアナタシ
アが収める惑星アースラに攻撃をするなど……………この私が絶対に
許さない!!」

「くーダーク「遅い」な!?」はああああああああ!!」

ダークバレットを放とうとしたがゾフィーが目の前に現れてお腹
に思いっきりゾフィーは叩きつけて上空へと吹き飛ばす。

彼は上空へと飛びあがりダークファルシオンよりも上におり彼の
顔面にかかと落としをくらわせた。

「がは!!」

地面に激突をして、ダークファルシオンはボロボロの状態になる。
ゾフィーはゆっくりと降りたちダークファルシオンへと歩いていく。

彼は恐怖を感じて闇のエネルギーを両手に貯める。

「うああああああああああああ!ダークファルシヨット!!」

し字に構えて闇の光線がゾフィーに向かって放たれる。だが彼は
それを片手ではじかせて上空へとあげた。

「な!?そ、そんな!!」

「これで終わらせる。M87アタック!!」

アタック光線のポーズを取りM87光線のエネルギーをつきだす
ように放つ。ダークファルシオンは翼でガードをしようとしたが翼
を貫通してボディに命中をして吹き飛ばされる。

「ぐああああああああああああ!!」

「……………」

レオ達もゾフィーの近くへといき、彼はダークファルシオンを見て
いる。すると相手は立ちあがり闇のエネルギーを全開にしていた。

「もういい……………てめえを殺してやる!!」

するとゾフィーは一気に接近をして彼の胴体にエネルギーを叩き
つけて上空へとあげると両手をダークファルシオンに構える。

「これで終わらせる!!はああああああああああ!!」

放たれた高エネルギーの光線がダークファルシオンに命中をする。

「ぐああああああああああああ!この僕があああああああああ
ああああああああああああ!!」

ダークファルシオンは爆発をして、その様子をダークレクギルスは見ていた。

「功を焦って……やられてしまったか。だからやめておけと言ったのに……まあいい、当面は奴に関わらない方がいいだろう。宇宙警備隊長ゾフィー……またいつか会おうぞ。」

ダークレクギルスは闇のホールへと入り姿を消した。ゾフィーはウルトラクラウンを外してウーマン達が到着をする。

「ゾフィーお兄ちゃん。」

「ダークファルシオンは私が倒した。」

「やっぱり今回のアースラを襲撃したのは……」

「ダークファルシオンがギャラクトロン軍団を使い襲わせていた。アナタシア、よくぞ無事だったね。」

「ゾフィーおじさま、それに宇宙警備隊の皆さん……本当にありがとうございます。」

「いや、ダークファルシオンに関しては姿を見せなかったので嫌な予感はしていたが……まさか、惑星アースラを襲うなんてな。」
彼はそう言い両手を組み壊された街を見てゾフィーウエーブを放ち街が修復してから彼らは惑星アースラを後にして宇宙へと飛び経つ。

「……シユワ!!」

ダークファルシオンを倒したゾフィー、宇宙空間で姉妹達と話をしている。

「それにしても、惑星アースラでゾフィーを倒そうなんて何を考えているのかしらね?」

「わからないですね、逆にゾフィーお兄ちゃんを怒らせるなんて何を考えているのかな?」

「さあな、これでお前を闇の巨人へと変えようとするバカはいなくなっただけだからな。」

セブンが言うが、ゾフィーはどうもそんな感じがしないので無言で飛んでいた。

「ゾフィーお兄さんどうしました?」

「……いや何でもないよ。さあ光の国へと急ぐとしよう。」

ゾフィー少し思い出の場所で

ゾフィースイデ

光の国へと帰還をした私達、だが私はすぐに宇宙警備隊本部へと戻らずに少し飛びあがりある場所へ飛んでいた。

その場所はタロウが幼少期に訓練をしていた場所、この場所で私もタロウぐらいの時に修行をしていたところでもある。

そこで座りながら、私は今までのことをも思いだす。ゾフィーとして転生をして長く生きてきた。

色んな者たちとの出会いと別れ、死んでいった人達との再会など私は原作ではありえないことを体験をしていると思っている。

ベリアルさんにトレギア、さらに言えばフレア達、そして父と母との再会など原作を通りこしているなど思いながらも今を楽しんでいる。

最初はウルトラマン達が女性の姿になっていることに驚いていたが、今は普通に過ごしている。

原作以上に動いて戦い、ピンチの時は駆けつけたりと色々忙しいウルトラ人生を送ってきたなと思いつつ座っている。

「……この場所で私は特訓をしていたのを思いだしますよベリアルさん。」

『そうだな、あたしが主導権を取った時にあんたをここへと連れていき鍛えていたっけな？懐かしいな。』

そう黒いベリアルさんが出ている時に、私はこの場所へ連れてこられて修行をしたことが今の私でもある。

彼女の戦闘スタイルを取りながらも自分で我流のスタイルで原作以上にM87光線以外のウルトラ姉妹達の技を使うなどしてきた。

「……………」

ケンさんから宇宙警備隊長を引き継いで、かなりの年数を過ごしてきた。ウーマンを迎えに行き共に帰還、セブンが太陽系で浮いているところをパトロールをしていたので救出をして光の国へ、傷を治したセブンに私が作ったウルトラブレスレットをジャックに渡すよう

に言ったり、エースを助けるため光の国からウルトラコンバーターを付けていったり、タロウがバードンにやられそうになったのを助けたり、テンペラー星人の時には姉妹と一緒にバーベキューを食べたり、ババルウ星人に罠で姉妹達が戦おうとしたのを止めたり、M A C ステーションがやられた時に間に合わずセブンが浮いているのを助けたりつと色々と原作以上なことをしている気がする。

「はあ……………」

「なーに一人でため息をついているのよあんたは？」

「ん？」

声がしたので振り返るとウーマン達が立っていたので驚いてしまふ。どうしてここがばれたのだろうか？

「うわー懐かしなー！ここで私特訓をしてたわ。」

「ここは私が昔、特訓をしていた場所でもあるんだ。ケンさんに頼んでタロウに教えるようにお願いをしていたのさ。」

「本当ーうわー！ーい！ゾフィー兄さん大好きー！ー」

タロウが抱き付いてきたので、彼女の成長をしたHカップの胸が当たってしまったっている。ま、まずい……………流石にここでヤルのはまずい!!

「ゾフィーお兄ちゃん？どうしたの？」

「ジャックさん!？」

なんであなたも抱き付いてくるのです!?! Fカップに成長をしたと言う胸が当たっているのですけど!?

うーん最近、私と抱えているのかメンバー達の胸が大きくなっているという。

ウーマン EカップからGカップ

セブン EカップからFカップ

ジャック EカップからFカップ

エース DカップからEカップ

タロウ FカップからGカップ

レオ EカップからGカップ

エイティ DカップからEカップ

メビウス DカップからEカップ

ヒカリ FカップからGカップ

とまあ今は姉妹だけ書いているが、ほかのメンバーも大きくなったと言ってきたので私は何もしていないけど!? まあ主にウーマン、レオ、エース、ヒカリを抱えている回数が多い気がするよお兄さんは……だから胸が大きくなっているですねと思ってしまおうよ。
「はあ……」

「いきなりため息をつかないでくださいよ。」

「色々あるんだよ私もね。」

そう思いながら、私は光の国の街が見える場所を見ていた。

「「これは……」」

「私のお気に入りの場所だ、ここから光の国の街が見てるからね。よく特訓が終わった後はここから見ていたよ。」

「確かに綺麗だ。」

「すごいです!」

全員が称賛をしてくれたので私達は光の国の街を見ながら、帰るところにした。

エックスとの出会い

ゾフィーサイド

そういえばウルトラウーマンエックスとの出会いのことをふと思いでしてしまふ。確かナツクル星人バンデロを追いかけるためゼロと共に次元を超えたんだよね。

奴は別の次元へと行き商品になりそうなものを回収をするためにエックスの世界へとやってきた。

「つち、ここまでやってきたか!」

「シユワ!」

カラータイマーを点滅させたエックスを見た後、ゼロはブラックキングを私はナツクル星人と対峙する。

「ナツクル星人バンデロ!お前の行為を見逃すわけにはいかない!」

「ちい!宇宙警備隊長まで追いかけてきたか!くらえ!!」

奴は銃を持ち発砲してきたが、私は交わしてスペシウム光線を放ち奴にダメージを与えて吹き飛ばす。

「ウルトラゼロキック!!」

ブラックキングの角を折るほどの威力になっているのを見て成長をしたなと思ひ感動をしているとナツクル星人の蹴りを受けて油断をしてしまふ。

そして奴が逃げようとしてゼロがツインシユートを放とうとした。

「待ってください!あれには人が!!」

「な!?!」

人だ?!奴はそのままブラックキング事抱えて逃げてしまい、私達は奴を追いかけるためゼロはウルティメイトイージスを装着、私も同行をする。

その後ゼロが再びエックスの世界へと戻っていつてしまったので私は一人でどうするか悩んでしまふ。

「うーむ困ったな。」

この時はカプセル怪獣が入ったのをすっかり忘れていつてしまったのでバードンたちを呼びだすことができない状態だ。

考えているとナツクル星人が巨大化をしたのを見て彼女が襲われているの知り私は巨大化をして奴にパンチを浴びせる。

「どあー！」

「……………」

そのまま構えていると奴は改良をしたブラックキングドリルカスタムを繰り出してきて、ドリルからビームが放たれてウルトラバリアーでふさぐ。

「ぐー！」

そこに次元を超えてゼロが現れてエメリウムスラッシュを放ちながら現れる。

「悪い隊長ー！」

「気にしていない。だが気を付けるんだ！あのブラックキングは改良をされている！」

「さらにいでよ！ブラックキング2世！」

「何!?!」

もう一体が現れて、ゼロにドリルカスタムの相手を任せて私はブラックキング2世を相手にする。

まさかもう一体を隠していたのか、ウルトラブレスレットを構えてウルトラランスを構えて突撃をする。

「であー！た!!へア!!」

『ぐおおおおおおおおー！』

流石ブラックキング、ウルトラランスの攻撃をふさぐか……………すると次元が開いたのを見て一体何かと見ているとウルティメイトイージスを装着をしたエックスが現れる!?!

「それあたしの……………」

「あーエックスも来た!!」

「ディア!!」

エックスが放たれたウルティメイトソードの斬撃が三体の怪獣を吹き飛ばした。

「よくここまで来れたわね？」

「あいにく、二万年も待つていられないのよね？」

「君がエックスか。」

「あなたは？」

「私は宇宙警備隊隊長ゾフィー、今は話しをしてる場合ではないね。ゼロー君はナツクル星人を頼む！エックスはあちらを頼みたい。」

「わかったぜ！」

「了解した！」

「おのれ！ブラックキングどもかかれ!!」

『ぐおおおおおおおおお!!』

「さあこちらも行くと!!」

「おう!!」

ゾフィーside終了

「へアー！」

ブラックキング2世に突撃をしてつかみかかるゾフィー、相手は力でねじ伏せようとしたがゾフィーは投げ飛ばしてブラックキング2世は倒されたがすぐに立ちあがり口からヘルマグマを放った。

ゾフィーは後ろに後退をして光線を構える。

「ワイドショット！」

ウルトラウーマンセブンの技ワイドショットがブラックキング2世のボディに命中をしたが相手は耐えたのを見て別の技に切り返る。

「へアー！ゾフィースラッシュ！」

ゼット光線の構えから十字型のゾフィースラッシュが放たれたがブラックキング2世はそれを剛腕でガードをして粉碎させるがゾフィーは飛びあがりウルトラスピッキクを放ちブラックキング2世の頭部に命中させると振り返りながら構える。

「M87光線!!」

『ぐおおおおおおお!!』

M87光線を受けてブラックキング2世は爆発をする。一方でゼロはナツクル星人バンデロと交戦をしていた。

「ストロングコロナゼロー！おらおらー！おらああああああああ!!」

「どああああああああ!!」

「ウルトラハリケーン!!」

そのまま上空へと投げ飛ばしてバンデロはダメージを受けて銃を放つ。

「ガルネイドバスター!!」

放たれたガルネイドバスターが球を壊して姿が変わる。

「ルナミラクルゼロ・・・」

ルナミラクルゼロへと変わりお互いに構える。

「ミラクルゼロスラッガー」

球と同時にミラクルゼロスラッガーを放ちゼロは膝をついてしまう。だがバンデロ自身も穴だらけになりその隙について構える。

「ゼロツインシュート!!」

「ぐああああああああああ!!」

ゼロツインシュートが命中をしてナツクル星人バンデロは爆発をする。エックスはゴモラアーマー、エレキングアーマーの連続した攻撃放ちブラックキングドリルカスタムはダメージを受けてエックスはその隙について構える。

「ザナディウム光線!!」

放たれたザナディウム光線がブラックキングドリルカスタムに命中をしてスパークドールズへと変わり、ゾフィーとゼロはエックスと挨拶を交わす。

「ウルトラウーマンエックスか。」

「また、君とはどこかで会えると思う。また共に戦おうエックス!」

「はい!!」

こうしてゾフィーとゼロは再び時空を超えてもとの場所へと帰還をする。

そして現代

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゾフィーは宇宙警備隊長室で椅子に座りながら考え事をしていた。惑星アースラにてダークファルシオンを倒すことができたが、彼自身は原作とは違うことになっている気がするなど思いながら椅子を回転させてくるくるさせている。

『何やっているのアンタ……』

「いやーベリアルさん、暇なものでして……」

『そりゃあ、あれだけの仕事の量を終わらせるなんて思わないわよ普通。』

「……ベリアルさん、どうも嫌な感じがします。」

『確かにね、ダークファルシオンはあなたが倒した。だけどこれで戦いが終わったわけじゃないといいたいのでしょ?』

「はい、何か嫌な感じがして気持ちが悪いです。気を付けないと行けませんね。」

彼は仕事を終わらせて家の方へと帰るとセイヤとメイナの二人が迎える。

「お帰りなさいゾファイー。」

「はいただいま帰りました。」

「おうお疲れだな。聞いたぜ? 惑星アースラを救出しに行ったのも。

お前、色んな知り合いが多いな (笑)」

「笑いごとですか父さん?」

「いえいえ、それにしてもあなたが誰を選ぶのか楽しみですよ?」

「ぶふー!」

突然の母の言葉に彼は飲んでいたので拭いてしまうのであった。

惑星アースラ再び

ゾフィースィド

現在私、いや私達ウルトラ兄妹は惑星アースラへと向かって飛んでいた。なにせアナタシアから招待されたので現在向かっている。

「まさかアナタシア女王様からお呼びがかかるなんて思いませんでしたね。」

「そうですね。惑星アースラを救出をしてくれたお礼をしたいとウルトラ兄妹を連れてきてくださって書いてあったんですね？」

「ああそうだ。」

しかし私だけじゃなく、ウルトラ姉妹達も呼ぶなんてな……惑星アースラへと始めて行ったときはケンさんと一緒にいつたときだったな。

あの時、私はまだ宇宙警備隊隊員として活動をして、ケンさんの後をついて色んな星へといったな。

惑星アースラの前の時にいった時に小さかったアナタシアと出会ったんだよな。

それが私達の付き合いの始まりでもあった。だが私も宇宙警備隊隊長として忙しくなってしまうアースラに行くことができなくなつた。

そして女王が光の国へとやってきた時に成長をしたアナタシアを見て驚いてしまう。あの子を鍛えたといったが、地球の遊びの鬼ごっこやかくれんぼなどを教えたぐらいなのだが？

「ゾフィー兄さん、そろそろ着くよ？」

「そうだな。惑星アースラ……地球と似ている星でもある。」
ゾフィースィド終了

ゾフィー達は惑星アースラに着地をするとメイド長が迎えてくれる。

「お待ちしておりましたゾフィー様。」

「やあメイド長、お元気でそうで何よりです。」

「いえいえ、惑星アースラを救ってくださった皆さまのため、女王様達

が色々と準備をしますからね。さて私はあなた方を案内をするように言われましたのでご案内いたします。」

メイド長さんの案内を受けてウルトラ兄妹たちは城の中へと入る。彼は辺りを見ながら進んでおりウーマンが声をかける。

「何やっているのあんたは。」

「すまない、昔よりも形などが変わっているからね……私がまだ隊員だった頃に来たことを考えるとね?」

素晴らしいながらゾフィーは歩いており王の間に到着をして扉が開いた。

「お待ちしておりました宇宙警備隊の皆さま、この間は惑星アースラを助けてくださりありがとうございます。」

「いえ、宇宙の平和を守るのが我らの使命でありますアナタシア女王様。」

アナタシアは本当だったらゾフィーには敬語を使わないでほしいなど思いながらも大臣などもいるので女王としての仕事をこなすことにした。

それから夜となり、ゾフィー達はパーティーに招かれて食べているところである。人間態へとなりゾフィー自身もご飯を食べているとアナタシアがやってきた。

「ゾフィーおじさま、いかがですか?」

「……ああそうだねってアナタシア女王様……今はゾフィーとお呼びください。」

「むー」

彼女は頬を膨らませるが、ゾフィー自身も困ってしまう。

「だめですよアナタシア様?ゾフィー様を困らせては……」

「で、でも……」

アナタシアとメイド長が話をしている中、ゾフィーは移動をしてご飯を食べたりお酒を飲んだりしていた。

「ふう……」

そして夜空を浴びているとレオがやってきた。

「いかがしました?」

「ああレオは元は王族だから慣れているだっけ？」

「といつても昔ですよ？だからこういうパーティーはコメットさんのところへと行ったときとか以来ですよ。」

「そうか……」

ゾフィーは惑星アースラの夜空を見上げながら用意された部屋の方へと移動をして眠ることにした。

ほかの姉妹達も用意された部屋へと移動をして入ったのを確認をして一人の女の子はこっそりとゾフィーが眠る部屋の方へと移動をして入り口を開けて移動をしていると突然として体が浮かんだので辺りを見ているとゾフィーが苦笑いをしながらいた。

「はあ……」

「えつと……」

「何をしているのかな？」

ゾフィーは寝ようとしたが、誰かの気配を感じて待ち伏せをしているとアナタシアが入ってきたので苦笑いをしている。

「あははは……ばれました？」

「ばれるよ。」

はあとため息をつきながらゆっくりと布団の方へと降りして彼女は彼に抱き付いた。

「……」

彼はどうしてこうなったのだろうか？と思いながら、彼は横になり彼女も一緒に横になり眠ることにした。

おそらく自分が言っても部屋の方へは帰らないだろうなと思いがら目を閉じた。

当たっているのだが？当たっているのですよ♡

ゾフィーサイド

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えへへへへ♡」

女王アナタシア、私がまだ隊員の時に出会った少女は成長をして立派な女性になっていていると思っていたが、私に依存をしているのは間違いないだろう。

なんでだろうか？しかもアナタシアとは肉体関係を持っている・・・そういえばレーナとも肉体関係を持っている。

うーん宇宙警備隊長としては最低なことをしている気がするけどいいのかな？

「はあ・・・・・・・・」

「あらゾフィーおじさま、ため息をしなくてもよろしいのでは？」

彼女は自分の自慢の胸を私にぎゅぎゅつと抱き着いている。

「当たっているのだが？」

「当たっているのですよ♡？」

うん、これウーマンたちに見られたら大変なことになる。とりあえず朝なので起き上がりアナタシアに部屋に戻るようにいい彼女はーいと言いながら部屋を後にした。さて私は人間態から元の姿に戻り巨大化をしていないがつい右手を上突き上げたポーズをとってしまう。

「よし問題ないな？」

部屋から出た後、私たちは挨拶をしてから惑星アースラを後にした。宇宙空間飛びながら光の国へと帰ろうとしたとき、バロツサ星人を見つける。

「バロ!？」

「バロツサ星人!？」

「なんでこんなところに？」

「バロバロバロおおおおおおおおお!!」

「逃走をした!？」

「追いかけるぞ!!」

全員でバロツサ星人を追いかけるために向かつて飛びバロツサ星人はこちらにキングジョーランチャーを放ってきた。全員が回避をしながら攻撃をしようとしたとき次元ホールが突然と開いた。

「バロ!?!」

「なに!?!」

「ゾファイー!!」

ウーマンが手を伸ばしてきたが、私は間に合わず次元ホールに吸い込まれてしまう。次元ホールの中でも奴は逃走をしようとしたので私は追いかけることにした。

「バロツサ星人逃がさんぞ!!」

「バロバロバロ!!」

次元ホールを突破をして青い星が見えた。どうやら別の次元の地球へとやってきてしまったようだ。

ゾファイーside終了

バロツサ星人を追いかけてゾファイーは地球へとやってきた。街に着地をしたバロツサ星人はもってきた剣を抜いてビルを切り裂いた。

そこにZ光線を放ちながらゾファイーは着地をする。

「シュワ!!」

ゾファイーは構えてバロツサ星人は持っている梃を振り回してゾファイーに切りかかる。彼はかわすがビルが壊れたのを見てここではあまり派手な光線を使用することができないかと判断をしてどうしたらいいのだろうか?と考える。

「バロバロバロバロ……」

人々が逃げている中二人の男性が走っている。

「おい弦太郎!見ろよ!」

「ああ五郎!まさか別の宇宙人が来るなんてよ、んであっちの銀色の宇宙人はどう見る?」

「味方じゃないか?とりあえず行ってくるぜ!!」

「おうよ!」

五郎と呼ばれた男性はポーズをとる。

「アイアンショック!!」

ターニングハットと呼ばれる帽子からアンテナが伸び、霧島 五郎の体を包み込んでいき彼のからだが変わって赤い巨人が表れた。

ゾフィーとバロッサ星人は現れたのを見た。

「バロ!?!」

(あれはアイアンキング!?!ということはこの地球はアイアンキングが守っている世界ってことか?)

「バロバロバロ!!」

アイアンキングが現れたのを見てバロッサ星人は驚いてしまう。アイアンキングはバロッサ星人が敵だと判断をしてゾフィーも構えて二人は同時に走り出してバロッサ星人に攻撃をする。

「バロバロバロ!!」

バロッサ星人は目からビームを放つがゾフィーがウルトラクロスガードをしてガードをされるとアイアンキングは飛び上がり必殺のアイアンキックをお見舞いさせてバロッサ星人は転がる。

「バロ!?!」

「シュワ!!」

ウルトラショットを放ちバロッサ星人の胴体に命中させるとアイアンキングはバロッサ星人をつかんで投げ飛ばした。

「ば.....バロバロ.....」

グロッキー状態のバロッサ星人に対してゾフィーは腕を十字に構えてスペシウム光線をアイアンキングはビーム光線を放ちバロッサ星人に命中をして爆発した。

二人の戦士はお互いに見た後握手をして飛び上がる。

弦太郎はその様子を見ながら変身を解除をした五郎を迎える。

「おうほらよ。」

「イヤー助かるぜ。」

水が入っている水筒をごくごくと飲んでおり弦太郎は五郎にあの銀の巨人のことを聞いた。

「それで五郎、あの銀色の巨人はどうだった?」

「どうって? あいつは味方だったの、握手をしたときにテレパシーで

「どうやら別の宇宙からやってきたってさ。」

「へえー」

「おいおい興味なさげじゃないか。」

「宇宙からの侵略者ってのはいろいろいるんだなと思っただけだ。」

「まあまあ、だが正義の味方ってのもいるのは悪くないじゃないか？」

「それはお前の頭だけにしろよ（笑）」

「んだとー！ー！ー！ー！ー！！こら待て！！」

「やーいやーい！」

その様子を一人の男性はふふと笑いながら見ている。

「静 弦太郎と霧島 五郎……やはりこの地球はアイアンキングが守っている次元ということだな？」

『だが問題は どうするんだ？ お前は時空を超えることは不可能だろ？』

「仕方ありません。ゼロかエックス、ゼットに見つけてもらうしかありません。その間はこの地球でのんびりとしますよ。」

ゾフィーは素晴らしいアイアンキングの地球で救援を待ちながら過ごすことにした。

不知火ロボット現る。

ゾファイーside

バロッサ星人と交戦をした際に発生をした次元ホールに吸い込まれた私は、別次元の地球にやってきた。

この次元で守っていたヒーローがアイアンキングだった。私はとりあえずこの星で救援を待ちながら過ごすことにした。

『てかのおんびりをしているわねゾファイー?』

仕方ありませんよベリアルさん、私には次元を超える力はありませんから、こうして待つていないとダメですからね?

『まあそうだけど……なんだあれ?』

「……え!?!」

突然として上からロボットが降りてきて大きな左手から強力な風を放ってきた。確かこいつは不知火ロボット……だが、原作的に倒されているはず……それがなぜ!?!いや迷っている暇じゃないな。

「ゾファイー!!!!!!」

私は人々を守るため元の姿になり立ちふさがる。

ゾファイーside終了

元の姿へと戻ったゾファイー、バキュミラーは構えたのを見てゾファイーは走りだす。

「シユワ!!」

バキュミラーは大きな左手で殴ってきたが彼はそれを受け止めると投げ飛ばしてバキュミラーを街から遠ざける。

そのまま飛びあがりゾファイーキックを放ちバキュミラーにダメージを与えているともう一体が現れたのでゾファイーは驚いてしまう。

(もう一体だ?!?)

現れたもう一体ジャイロゲスは左肩のブーメランをゾファイーに放ってきた。彼は交わそうとしたがバキュミラーが彼を背後を取り動けなくさせる。

「シユワ!?!」

ジャイロゲスが放ったブーメランの一個はアイアンキングがキャッチをして捨てる。もう一個は？

「それ!!お返しだ!!」

弦太郎が鞭で投げ返してジャイロゲスは交わすとゾフィーは光だしてダーゴンタイプへと変身をしてバキュミラーを振りほどいて構え直す。

アイアンキングと共闘をすることになり、ゾフィーは振り返りジャイロゲスの方へと構える。

アイアンキングはバキュミラーに突撃をして連続した蹴りを放つ。ジャイロゲスは左手のロケットパンチを放ってきた。

「そんな攻撃が我に効くと思うか!お返しだ!!」

ジャイロゲスが放った左手をキャッチをして跳ね返す。ジャイロゲスは自らの左手を受けて後ろの方へと倒れる。

アイアンキングが苦戦をしているのを見て弦太郎は鞭で攻撃をしてバキュミラーに攻撃をしている。

ゾフィーは両手をクロスをしてカルミラタイプへと変わると右手にカルミラウィップを発生させてバキュミラーに対して攻撃をする。

「ほらしっかりしな!」

アイアンキングのケツの方に蹴りを入れて彼は抑えており必殺のアイアンビームを放ちバキュミラーを撃破した。

ゾフィーも元の姿へと変わりジャイロゲスに対してウルトラブレスレットを構えてウルトラスパークカッターでジャイロゲスの両手、頭部を切断させて撃破した。

地上では弦太郎は考えていた。

「なんで不知火ロボットが今更現れたんだ?あいつらは……」

「そう、お前達によって倒されたといいたいのだろう? 静 弦太郎。」

「てめえは!!」

現れたのは、かつてアイアンキング、静 弦太郎によって倒された不知火一族の人物だった。

「てめえらは倒したはずだ!!」

「そうだ、だが我らはこうして蘇った!我ら先祖2千年もの恨みを晴

らすべく再び復讐をするために!! 静 弦太郎! アイアンキング! また会おう!」

「待ちやがれ!!」

弦太郎は追いかけてしようとしたが戦闘員達が邪魔をしてきて彼は鞭から剣に変えて戦闘員達を追い払う。

ゾフィーはその様子を見ながら飛びあがった。

変身を解除をして不知火一族を蘇ったことに驚いていた。

(一体誰が不知火一族を蘇らせたのだろうか? こういうのができる敵といえは…… 別次元から呼び出すことができるアブソリュートイアン、そして死者を復活させることができるレイバトス…… いずれにしてもこの地球から離れるわけにはいかなかったな。)

ゾフィーが別の次元で戦っている頃、ベルが臨時隊長を務めながらゾフィーの行方を探している。

「いったいどこへ行ったのかしら…… 別次元へと行ったのは間違いないわね。いずれにしてもウーマン達も必死に探しているけど…… 本当にどこにいったのかしらね? …… ん?」

ベルは立ちあがり何かを感じたのか、じつと窓の方を見ていた。

「この力の感じは…… もう一人の私…… そうか、ゾフィーは別の次元にいったのね?」

彼女はすぐにウルトラサインを飛ばしてウルトラ姉妹達を集結させることにした。ゾフィーの居場所がわかったこともあり、数分後すぐにウーマン達が集結をする。

「ベルさん、ゾフィーの居場所がわかったの!?!」

「ええその通りよ、皆も知っての通りあいつにはもう一人の私がいるのは知っているわね? 一瞬だけどその力を感じることができたのよ。どうやらゾフィーは別次元の地球にいることもわかったわ。」

「別次元の地球…… でも行くためにはゼロかエックス、ゼットがないと……」

エースの言葉に全員が無言でいた。現在ゼロ達は次元を超えてゾフィーを探している頃なのだ。そのため今は光の国にいない。

果たして!!

再び現る不知火ロボット

ゾファイーside

この世界に滞在をして数週間が経った、その間も不知火ロボットが現れてはアイアンキングと静 弦太郎が倒していた。

私はその様子を伺いながらもこの世界は彼らが守るべきだと判断をしてピンチの時に駆けつけるスタイルをとることにした。

いずれにしても、ウーマン達も私を必死に探していると思うが、なにせ別次元に行くことができるのはゼロ、ゼットぐらいなものだからな。

「いずれにしても、不知火一族を復活させたやつを探さないと行けませんね。」

『だな、奴らが復活をさせたとなるとアブソリューティアンか?』

「わかりません。それを調べるためにも行動をしなければなりませんね。」

ベリアルさんと話をしながら不知火一族の本拠地を探しながら行動をしていた、ってなんだ!? あれは! ゴールドファイヤーって奴か!? 攻撃をしてきたので回避をする。

「仕方がありません!」

私は腕のブレスレットを掲げて元の姿へと戻り構える。

ゾファイーside終了

「ぬぬぬぬ! あれは銀色の巨人!! ゴールドファイヤーよ! 奴を倒せ!!」

不知火一族の首領不知火 火太郎に操られるゴールドファイヤー、ゾファイーはファイティングポーズをとる。

『へア!!』

ゾファイーは走りだしてゴールドタイタンも同じように走ってきてお互いに組み付き、力比べをしていた。

『ダア!!』

勝ったのはゾファイーで彼は投げ飛ばしたが、ゴールドファイヤーはすぐに右手のハンドミサイルをゾファイーに向かって放ってきた。

彼はウルトラバリアーを張りゴールドファイヤーが放ったミサイルをガードをする。するとゴールドファイヤーの右手が変わってロケットパンチを放ってきた。

『へア!!』

ゾフィーは飛びあがり交わすとウルトラキックを放ちゴールドファイヤーに命中させる。

『おのれ! ゴールドファイヤーを!』

彼はゴールドファイヤーのロケットが放たれた部分にスラッシュ光線を放ち命中させてハンドミサイルを使用不可能にさせた。

『ゴールドファイヤー! ここは撤退だ!!』

火太郎の命令でゴールドファイヤーは飛んで撤退をしていく。火太郎もその様子を見てから撤退をしていき、ゾフィーは光だして元の姿へと戻った。

『奴がここに現れたということは、奴らの基地は近くにあるってことでしょうか?』

『わからない、だが油断をするなゾフィー。』

『はい。』

ゾフィーは基地があるであろう場所へと向かっている頃、弦太郎と五郎の二人も不知火一族がかつて基地していた場所へと向かっていた。

『なあ弦太郎、奴らはここにいるのだろうか?』

『さあな。』

『まーた適当にってぬお!!』

『なんだ!』

地震が起きて二人は何かと見ているとゴールドファイヤーが姿を現した。

『ありやりや、あれは確か不知火一族のロボットじゃないか!』

ゴールドファイヤーは二人に気づくと口から火炎放射を放ってきた。二人は交わしていくとゾフィーは現れた。

『へア!!』

『よし弦太郎! 行ってくるぜ!』

「おう五郎！」

「アイアンショット!!」

五郎の体が霧に包まれてアイアンキングの姿へと変身をする。ゾフィーもアイアンキングと共闘をするため構えている。

ゴールドファイヤーは右手からミサイルを放ってきた。二人は交わしてゾフィーは飛びあがりウルトラキックをゴールドファイヤーに命中させてアイアンキングは接近をして投げ飛ばした。

一方で弦太郎は襲い掛かる不知火一族たちを切っていく、首領である火太郎のところへとやってきた。

「静 弦太郎、また貴様と戦うことができるとはな……不知火一族の恨みを今こそ晴らしてくれるわ!!」

「へ！また倒してやるぜ!!」

「行くぞ!!」

「来い!!」

ゴールドファイヤーは口から火炎放射を放ち二人に攻撃をしてきた。ゾフィーがウルトラバリアーを張りガードをする。

アイアンキングが飛びあがりアイアンキックがゴールドファイアーの胴体に蹴り入れて吹き飛ばす。

「であ!!」

「ぬお！」

弦太郎が放った斬撃が火太郎の刀を吹き飛ばして、弦太郎は構えていると部下たちが襲い掛かってきた。

「ゴールドファイアー!!」

ゾフィー達と交戦をしていたゴールドファイアーは呼びだしを受けて飛び去っていく、アイアンキングとゾフィーはお互いに見た後追いかけるため向かっていく。

火太郎はやってきたゴールドファイアーの背中に乗り去っていくが、弦太郎はアイアンキングが来たので飛び乗る。

二人に気づいた火太郎はゴールドファイアーに攻撃をするように指示を出す。ゴールドファイアーの右手が飛んで行くが、ゾフィーはウルトラショットを放ち腕を破壊して、アイアンキングとゾフィーの

アイアンビームとM87光線が命中をしてゴールドファイアーは火太郎と共に墜落をして爆発をする。

アイアンキングはそのまま弦太郎を降ろしたのを見てからゾフィーは宇宙空間の方へと向かって飛んで行く。

この星での自分の役目が終わったので宇宙へと到着をすると次元が開いてウルティメイトゼロが現れた。

「ふうーようやく見つけたぜ！隊長！」

「ゼロか、色々大変だったみたいだね？」

「他人事みたいに言わないでほしいのですけど？」

じとーとした目で見られてゾフィーは反省をする。なにせ吸い込まれたのは自分なので何とも言えない状況である。

そしてゼロと共に元の時空空間へと戻ってきた。

「久しぶりの光の国、ベルさん達に迷惑をかけてしまったね。」

「まあそのベルさんが隊長の居場所を教えてくれたからな、もう一人のベリアル……つまりあんたの中にいるベリアルの力をわずかに感じ取れたってらしいぜ。あたしはウルトラサインを見て飛んだというわけ。」

「なるほど……」

ゾフィーは納得をして久しぶりの宇宙警備隊本部へ着地をしてると何かが当たり吹き飛ばされる。

「うええええええええん！ゾフィーおにいちゃん！！」

「じゃ、ジャック!？」

抱き付いてきたのはタロウかと思っただがジャックだったので驚いてしまっている。

「ゾフィー兄さん!!」

「っほ!!」

さらにエースも同じように抱き付いてきたので彼は動くことができなかつた。

「全く、突然としてジャックが走ったと思ったら。ようやく帰ってきたのね。全く……」

ウーマンがため息をつきながら現れたが、彼の顔を見て涙を流す。

「すまなかつたねウーマン、皆もだ。」

「ゾフィーお兄ちゃんが吸い込まれるのを私達は見ていただけしかできなかつた！」

「それは私も一緒よ。そばにいたのに……何もできなかつたわ！」

「うえええええええん！」

エースは泣きながら抱き付いているのでほかの姉妹達はいないのか？と思いつながらゾフィーが言おうとした。

「タロウは教官の仕事、セブンもレオとアストラと共にパトロールをしているわ。」

「そうか、ってかさつきから倒れたままなのだけど？」

「ジャック、エース、そろそろゾフィーを起こしてあげなさい。」

「あ……」

二人も気づいて彼は立ちあがるが、体がふらふらとなっているのでウーマンが支える。

「おっと。」

「ZZZZZZZZ」

眠ってしまったのでウーマンは彼を家へと連れて帰ることにしたがエースとジャックが止めて喧嘩になってしまいが、ゼロがこっそりルナミラクルゼロに変身をして彼を素早く奪取をして家へと駆けこむのであった。

目を覚ましたら裸の二人がいた。

「……………え？」

光の国へ帰ってきたゾフィー、彼は疲れて眠ってしまったが目を覚ますとなぜかセブン、ゼロの二人が裸で一緒に寝ていて自身も裸になっているのを見て変身が解除されて人間態の姿になっていたので驚きながらいるとセブンが起き上がる。

「ゾフィー……………目を覚ましたのか？」

「あ、ああ……………てかどうして私は人間態になって君達が裸で寝ているんだ？」

「簡単だ。ゼロがルナミラクルの姿へと変わりうちの家に連れて帰ってきたというわけだ。今に至る。」

「そして寝ている私を襲い、裸になっているってわけね。」

ゾフィーは納得をして、セブンと話をしているとゼロが起き上がる。彼女のDカップの胸が揺れていた。

「ふああああ……………おはようお袋に隊長。」

「おはようゼロ。」

「……………さてウーマン達が怒っていないといいが……………とりあえずシャワーだ。」

ゾフィーはセブンの家のお風呂場を借りてシャワーを浴びることにして、彼はアイアンキングとの共闘などを思いだしながら、体などを洗いスツキリさせる。

そしてシャワーを浴びた後に宇宙警備隊本部の方へと向かい、隊長室の方へと入るとトレギアが立ちあがりお辞儀をする。

「やあトレギア、君にも色々と苦勞をさせてしまったみたいだね？」

「いえ、隊長もよくぞ……………無事で……………」

「別世界とはいえ、地球へと降りたちその世界を守る戦士と共に戦ったこともいい思い出だよ。」

「いろんな地球がありますね？」

「マルチバースは様々な世界を結んでいるからね。様々なヒーローが地球などを守り続けている。ということだ。」

彼はそういった後に隊長室の椅子に座るとウルトラウーマンヒカリがタイミングよく入ってきた。

「ゾフィー、無事だったのだな？」

「ヒカリ、色々とあつてね。それでどうしたんだい？」

「忘れていると思うが、私とトレギアが現在制作をしているウルトラビームブレードとウルトラシールドのテストに付き合ってくれ。」

「ああ別に構わないよ？それで場所は？」

「宇宙科学局だ。」

「わかった。トレギアもいいかい？」

「はい、今行きます。」

三人で移動をして、到着後ヒカリが出した改良をされたウルトラビームブレードを振るっている。

「ふむ、前よりは振りやすく感じがするね。そしてトレギアが作ったウルトラシールド……」

左手に装備をしてウルトラビームブレードを振りながらガードをする感じて動かしながら構え直す。

「ふむ、改良を加えられて以前よりもエネルギーが伝わる感じがするね。」

「ええあれから色々と改良を加えて来ましたから。」

「たまにガーディアン部隊にテストをしてもらったりしていたからな。」

「なるほどね。」

彼は装備を外してから、椅子に座りお茶を飲む。いずれにしても今のところアブソリュールティアン達が動いているという情報もないので、ゾフィーは警戒はしておかないといけないなと思いつつながら、ヒカリ達の報告を聞くのであった。

ゾフィーの仕事

ここはゾフィーが住んでいる家、朝早く、プラズマタワーが朝の間になる前にゾフィーは起き上がり、家を出ていつものランニングをするため走りこんでいた。

「ふう……ふう……ふう……ふう……ふう……」

最近家は帰ることが少ないのってかほかの姉妹達の家には拉致されていることが多く、いつも隣に裸になっているウーマン達がいるので彼はいつさらわれてしまっているのかわからないぐらいに家に帰ったのはいつぐらいなのだろうか?と思いつながらランニングをして公園の椅子に座って休憩をしていた。

「いつも通りのランニングをしているけど、この間はセブンとゼロ親子に挟まれていたな。男としては嬉しいけど……. やってから彼女達、私を堂々とさらおうとしているからな…….」

『お前、本当に過労で死ぬなよ?』

ベリアルは幻影の姿で苦笑いしながら死なれるのは困るので、彼もわかっていきますよといい立ちあがり家の方へと帰ると復活をした母メイナがご飯の準備をしていた。

「お帰りなさいゾフィー。」

「はいただいま戻りました。光のシャワーを浴びて来ます。」

ゾフィーは光のシャワーを浴びてから、椅子に座り父であるセイヤが欠伸をしながら現れて座ってご飯を食べる。

なお二人もゾフィーみたいに人間態へと変身をして一緒にご飯を食べてから、ゾフィーは宇宙警備隊本部の方へと向かいながら歩いていると彼の手に抱き付いてきた人がいた。

「おはようございますゾフィーお兄ちゃん!」

「やあジャック。」

「む……最近、ゾフィーお兄ちゃんという時間が少ない気がするのだけど!?!」

「仕方がないさ、色々と私も忙しいからね。ほら自分の仕事場についたからね?」

「はい……」

ジャックはショボンと落ち込みながら中の方へと入っていき、ゾフィーも今度時間を作らないとな？と思いつながら隊長室へと移動をして扉が開いて秘書のトレギアが座っていた。

「おはようございます隊長。」

「おはようトレギア、さて今日も頑張るとしよう。」

ゾフィーは隊長室の椅子に座り自分の机の上にある書類を確認をしながら判を押していく。

「ふーむ……」

「いかがしました？」

「ああ、アブソリューティアン達が大人しくなったとはいえ、地球人たちが最近宇宙の開拓を行っているのは知っているね？」

「はい、私もそれは知っていますけどどうしました？」

「ああ、最近になってその宇宙船が爆発をする事件が発生をしているみたいなんだ。」

「ですが、救援サインも上げれないほどなのでしょうか？」

「それは私も気になっていた。よし、トレギア……悪いが、ウーマンとジャック、レオ、メビウスを呼んでくれ。」

「わかりました。」

ゾフィーの指令を受けて放送が流れてウーマン、ジャック、レオ、メビウスは警備隊長室へと入り敬礼をする。

「ウーマン、ジャック、レオ、メビウス、指令を受けて隊長室へ参りました。」

「良く来てくれた。最近、地球人が宇宙開拓をしている船が爆発しているのを知っているね？」

「はい、しかも犯人は不明でサインも出されていないのですよね？」

「ゾフィー兄さん、私達を呼んだのは？」

「ああ、今度宇宙ステーションから開拓の船が出撃をする。我々は船を守るため敵の正体を調べるといふことだ。」

「わかりました。」

「トレギア、留守を頼む。」

「了解です。隊長ご無事で。」

ゾフィーはウーマン達を連れて光の国を後にしてステーションから出たという船を守るため出撃をする。

「「「シュワ!!」」」

果たして船を狙っているという敵の正体は!?

宇宙船を狙う敵の正体

宇宙空間を飛ぶゾフィー、ウーマン、ジャック、レオ、メビウスの五人……彼らは宇宙ステーションから向かってくる船がこの地域を通るため、彼らを護衛をするため先に到着をしていた。

「ここが、彼らが通る地域なのね？」

「ああそうだ。」

「でも、いくら宇宙とはいえ、この地域で爆発が起こるなんて……」
「ええ、まるで宇宙人が現れて積んであるのを落とさない限り爆発なんて……」

「いずれにしても間もなくこの地域を貨物輸送船が通るはず、我々はそれを護衛をする。」

「了解！」

五人は貨物輸送船が現れるのを待っていると一隻がこちらに向かっていてのを確認をしてゾフィーは宇宙船のブリッジのところへと行き、ほかの姉妹達も周りを飛び警戒をしている。

ゾフィーは飛びながら一体何が宇宙船を狙っているのか?と思いつつながら前の方を飛んでいると宇宙船が三隻こちらに近づいてるのを確認ができた。

「あの宇宙船は……」

「ゾフィー!!」

「!!」

ウーマンの声が聞こえると彼らの周りに宇宙人が現れた。緑色の宇宙人は手から火炎放射を放ってきた。

ゾフィーは躲すと乙光線を放ち撃破する。

「えい！」

「であー！」

「は!!」

「シエア!!」

四人も応対をしてそれぞれで宇宙人と交戦をしていた。ゾフィーは現れた宇宙人を見て驚いている。

(バンデル星人!?!なぜこいつらが宇宙船を?)

彼はウルトラキックを放ちバンデル星人の一体を蹴り飛ばす。そして貨物輸送船はその間に突破をしていったのを確認をしてゾフィーは両手を組み考えていた。

「……………」

「こいつらは一体?」

「見たことはありません。」

「バンデル星人。」

「バンデル星人?」

「ああ、私がまだ宇宙警備隊員の時に出てきた宇宙人だ。だがこいつらはすでに全滅をしたと思っていたが……………なぜ今頃現れたのだ?」

「まさか、今まで貨物輸送船を襲っていたのは……………」

「おそらく奴らで間違いないかもしれないな。至急本部に連絡!この辺一带を調べるよう指示をもって私が隊長だった。」

ゾフィーはウルトラサインでこの辺一带を調べるよう指示を出して隊員達を派遣させる。

彼自身もウーマンたちと共に調べるためパトロールをすることにした。

ゾフィースide

まさか、バンデル星人が現れるとはな……………本当の意味で隊長になってまた見ることになるとは思ってもいなかった。

だが奴らは全滅をしたと報告を聞いていた。だから奴らは残っていないはずなのになぜ?」

『もしかしたら、誰かが奴らを蘇らせたってのは?』

あり得るかもしれないね、私は近くの惑星に降りたち地表を歩いていた。何も無い星なので不気味な感じがするな……………現在大きさを人間大になりエネルギー消費を抑えながら調べている。

「……………」

私は何かを感じてすぐにヒュドラムタイプに変身をして右手のヒュドラムダガーで後ろを切りつけると一体のバンデル星人が倒れ

た。

「おやおや、後ろから不意打ちをしようとしたのですね？」

『『クワクワクワクワクワクワ！』』

うわーたくさんバンデル星人がいるな、うじゃうじゃと……
さて私はマルチタイプへ戻り構え直す。

ゾファイー side 終了

たくさん現れたバンデル星人に対してゾファイーは構えている。バンデル星人たちはゾファイーに対して鞭を放つが、ウルトラブレスレットを變形させたウルトラランスで鞭を切り裂くと飛びあがり、上空からバーニングプラズマを放ち一体のバンデル星人を倒す。

着地をした後にウルトラランスを變形させてウルトラスパークカッターを放ちバンデル星人たちを次々に倒していく。

後ろの方でバンデル星人が攻撃をしようとしたが、上空から光球が放たれてバンデル星人一体に命中をして爆発をした。

「大丈夫ですかゾファイー兄さん！」

「レオか、助かる！」

レオも参戦をしてバンデル星人たちを攻撃をして、撃破していた。ゾファイーは振り返りM87光線を放ち撃破した。

「ゾファイー！」

そこにウーマン達も駆けつけて倒れているバンデル星人たちを見つける。

「どうやら、奴らはこの星を拠点にしているのだろうか？それとも、私達をこの星で我々をおびき寄せさせるためなのか？」

倒れているバンデル星人一体にウルトラランスを出してツンツンとするゾファイー、ウーマンはよしなさいと止めたので彼はブレスレットに戻す。

「いずれにしても、バンデル星人が現れたとなると警戒をする必要がある。各自、念入りにパトロールをするように。」

「それとしてゾファイーお兄ちゃんは一人で行動はしないでね？」

「……………善処はします。」

ジャックに言われてほかのウーマン達は笑っていた。

調べ物

バンデル星人の復活、それにより宇宙警備隊はパトロールの強化をするようゾフィーからの指示を受けて念入りにパトロールをしている頃、ゾフィーはウルトラマンヒカリの研究室へとやってきていた。

「……………」

「突然として私の研究室に現れたと思ったたら、ずーっとモニターとにらみ合いをしている宇宙警備隊の隊長さん、何を調べているのかしら？」

「いや、バンデル星人のことを調べているところだよ。かつて彼らはキャプテン・ウルトラと呼ばれた地球人によりバンデル星人は全滅をしたと書かれているんだよ。だが奴らは復活をした。」

「……………確かに全滅をしたはずの奴らの復活、一体誰がやったのだろうか？」

「タルタロス達は並行世界の人物たちを連れてくるからね。だから奴らは違うと判断をしている。しかも彼らの様子を見るとおそらくキャプテン・ウルトラが全滅させた個体、いや彼らは言っていたな。かつてダム爆破の際に生き延びたやつらがいたと……………」

「それが大きくなり、戦力増大のためどこかの星でやり過ぎしていたと？」

「おそらくね、だからこそウーマン達にはパトロールを強化をするように指示を出している。さて……………」

彼は立ちあがり、パトロールの時間なのでヒカリはふと思う。

（あれ？待てよ、今のアイツについていける奴はいたか？確か今日はメビウスは教官として指導をしているから無理と言っていたな。）「しまった!!今のアイツは一人で出るつもりだ!!」

ヒカリの予想通り、ゾフィーは一人でパトロールに出ていた。たまにはこういういうのもありだなと判断をして、彼はいつも通り太陽系をパトロールをしていた。

「冥王星付近異常なし。次は海王星だな。」

『つてかあんたも悪い子だね？あたしがいるからつて誰もつけないのは……』

「わかっていません。ですが、私だけに集中をするのはわかりませんが、それで仕事を疎かにしてはいけませんからね。」

彼はそのまま海王星を通過をして天王星を通過、そして最後の水星を通り太陽系のパトロールを終わらせて地球付近へと戻り青い星地球を見ていた。

「……………」

かつてウーマンが初めて地球へ降りたつてから、57年が経っている。彼女が去つてからセブン、ジャック、エースなど彼の妹たちが地球へと派遣をして様々な宇宙人や怪獣たちと戦い続けてきた星だと彼は見ていた。

「美しい星だ。この星でウーマン達は戦つてきた。そして別次元の地球にも様々なウルトラウーマン達が侵略者たちの魔の手から守り続けてきた星です。」

『まあそんな星を私は破壊をしようとしたけどね。』

「あーありましたね。」

ベリアルと話をしている中、彼は何かを感じて横にそれると光線が放たれたので見るとウーマン達が立っているが、すぐに構える。

「全く、サロメ星人が作り出したものか……」

彼は呆れながら構えており、偽のウルトラ姉妹達は構えて突撃をしてきた。だが彼はウルトラクラウンを装着をして超闘士ゾフィーへと変身をして構える。

「へアー！」

ニセウーマンのチョップを手で受け止めると、攻撃をしようとしたニセウーマンエースがバーチカルギロチンを放つてきたので交わして、ニセウーマンセブン、ニセウーマンジャックがワイドショット、スペシウム光線を放つてきたが素手ではじかせるとそのまま接近をして二体を粉碎する。

ニセウーマンとニセウーマンエースはスペシウム光線、メタリウム光線を放とうとしたがすでに彼が接近をして胴体を貫通させて爆発

させた。

超闘士ゾフィーは解除をしようとしたが、彼はそのまま超闘士の姿でいると隕石がこちらへとやってきたので交わした。

「……………」

彼は隕石が次々に合体をしていくので様子を見ている。

『ツイフォォー……!!』

「……………」

『え？スルーなの？』

「あー悪い、えつとえつとまあいいや。」

『いやあのちよつと!?!』

「M87超光波!!」

『ぐああああああああああああああ!!』

隕石が合体をしたものはM87超光波を受けて消滅をした。彼自身もあのキャラクターだれだったかなーと思いつつながら地球を再び見ていた。彼は久しぶりに地球へ降りたつことにした。

宇宙船と思いきやまさかの戦闘に巻き込まれた。

太陽系をパトロールをした後地球へと降りたつたゾファイーは人間態へと変わり、街の中を歩いていた。

この地球はアムールが守っていた地球なので、今は誰か派遣をしていたかな?と思いつながら首をかしげながらいるといきなり宇宙人が現れたのを見て驚いてしまう。

「うわ!宇宙人だ!」

『フアフアフアフア!』

「あれって確か、ファミル星人だったな。って今は誰か守っていたっけ?」

ゾファイーは混乱をしていると光が発生をして実体化をする。

『シユワ!』

「あれは確か………思いだした!ウルトラウーマンフェスナーだ!そうか彼女が今地球を守っているのだな?って………あれは!」

ファミル星人は怪獣を呼びだしてウルトラウーマンフェスナーの後ろから現れたのは剛腕怪獣「アームドン」と呼ばれる怪獣である。

『シユワ!』

アームドンの強烈なアームパンチを受けてフェスナーは吹き飛ばされてファミル星人は彼女をつかんで押さえつけているのを見てゾファイーはブレスレットを掲げる。

「ゾファイー!!!!!!」

光だしてファミル星人は吹き飛ばされて、フェスナーはフェスなショットを放ちアームドンにダメージを与えると実体化をしたのが宇宙警備隊長のゾファイーなので驚いている。

「ぞ、ゾファイー隊長!」

「な!?!なぜゾファイーが地球に!!」

「やあフェスナー、久しぶりだね。たまたま地球に立ち寄ったら君がピンチだったから助けに入ったんだよ。」

「おのれくらえ!!」

ファミル星人は両手から光線を放ってきたが、ゾフィーはウルトラバリアーを張りガードをしてアームドンに対してフェスナーは接近をしてフェスナーチョップを叩きこむ。

「えい！であー！」

ゾフィーはファミル星人にウルトラスピッキクを放ち命中させると反転をしてフェスナーのところへと着地をして構える。

「行くぞフェスナー！」

「はい！」

お互いに必殺技の光線を構えて放つ。

「M87光線。」

「フェラリウム光線！」

エイテイのサクシウム光線のポーズをとった後に十字に構えた光線がアームドン、M87光線がファミル星人に命中をして爆発をする。

お互いに見た後に一緒に飛びあがり人間態に変身をする。

「ぞ、ゾフィー隊長……………その……………」

「それが君の人間態ってことかね？」

「は、はい水鳥 日菜って名乗っています。防衛軍のSAVという組織で働いています。」

「そうか、頑張っているみたいで何よりだ。さて……………」

「隊長どちらへ？」

「君がいるなら大丈夫だろうと思ってね。頑張ってくれウルトラウーマンフェスナー……………いや、水鳥 日菜君。」

「はい!!」

彼はブレスレットを光らせてゾフィーの姿に戻るとそのまま飛びあがり宇宙空間へと戻った。

地球を見た後彼は進路を光の国へと向けて飛び経つ。

怪獣墓場へ

地球を後にして光の国へと戻ろうとしているゾフィー、彼は怪獣墓場を通過をしようとしたが突然として強大な闇のエネルギーを感じて止まった。

「闇のエネルギー？．．．．．なぜ怪獣墓場から？」

気になったゾフィーは怪獣墓場の方へと移動をして、着地をした。彼は警戒をしながら歩いていると地面からグドン、サドラ、テレスドン、ベムラーが現れた。

「何?！」

四体の怪獣はゾフィーに向かって攻撃をしてきた。彼はオーブカリバーを装備をしてグドン、サドラのボディを切りつける。

そのままエレメントを操作をして地のマークを出してトリガーを引く。

「ゾフィーグランドカリバー!!」

地面に突き刺してテレスドン、ベムラーを撃破するとグドン、サドラに対してオーブカリバーを構えて突撃をして切り裂いた。

ゾフィーはなぜテレスドン達が復活をして自分に襲い掛かってきたのかと考えていると攻撃が来たのでオーブカリバーでガードをする。

「誰だ!!」

攻撃をした方を見ると黒いウルトラマンが立っているのを見て驚いている。黒いウルトラマンはゾフィーに向かって手を十字にして光線を放ってきた。

彼は交わしてオーブカリバーを構えて突撃をして切りかかるが、相手の黒いウルトラマンはそれを両手でふさいでゾフィーの胴体に蹴りを入れる。

「ぐ!!」

反転をした後、スラッシュ光線を放つが相手の黒いウルトラマンは突撃をしてそのままゾフィーの首を絞め殺そうとしていた。

「ぐああああ．．．．．」

「……………」

彼はやられると両手をクロスしてボデイスパークを放ち相手は右手を痺れさせると蹴りを入れて反転をして着地をした。

『大丈夫かいゾフィー?』

「ええ、ですがあいつはいつたい何者なのでしょう。(俺の前世でも、あんな黒いウルトラマンは見たことがない、しかも俺が知らないとなると……………え?まじで何者!?)」

ゾフィーは前世の記憶を思いだしながらも、あの黒いウルトラマンは一体何者なのか?と思いながら構え直す。

相手のウルトラマンは突撃をして彼に攻撃をしようとした時、上空から光線が放たれて黒いウルトラマンは回避をしてゾフィーは上の方を見るとエースとタロウがメタリウム光線とストリウム光線を放ち現れた、

「デア!!」

「はああああああ!!」

地上ではヒカリとメビウスがナイトビームブレードとメビウムブレードを構えて攻撃をしていた。

だが二人の攻撃を交わして前の方で構えていた。

「ゾフィー兄さん大丈夫ですか!!」

「お前達……………」

「父さんが宇宙墓場に異常が発生をしていると連絡を聞き、私達四人がうやってきました。そして兄さんが襲われているのを助けたというわけです。」

「てかあいつは一体何者だ?」

「……………私もわからない、強大な闇の力を感じてきたらやつがいた。」

黒いウルトラマンはそのまま二人を吹き飛ばすと撤退をしていき、ゾフィーはM87光線を放つが交わされてしまう。

彼は膝をついてしまい、エースとタロウが彼を支える。

「ゾフィー兄さん!」

「大丈夫!?!」

「・・・ああすまない、少し疲れてしまったようだ。」

「大丈夫です。私とタロウで光の国まで運びますのでゆっくりと休んでください。」

「ああそうさせてもらおうよ。」

ゾフィーは二人に支えられながら、光の国へと運ばれて行く。

目を覚ました。

「は!!」

ゾフィーは目を開けるとウルトラクリニツクのベツトの上で起き上がったので、怪獣墓場での戦いの後タロウ達に運んでもらったことを思いだした。

そして、回復が完了をして目を覚ましたのだなと考えているとウルトラの母が入ってきた。

「ゾフィー、目を覚ましたのですね?」

「はい、ウルトラの母……どうやらタロウ達に運んでもらったようですね?」

「そうです。怪獣墓場から強大なマイナスエネルギーが発生をしているという情報を得て、タロウ達を派遣をしたのです。そこに謎の黒い戦士があなたを襲ったと聞いています。」

「そうですね、いずれにしてもあの黒い戦士は危険な存在だと私は思っています。あの強大な闇のエネルギーは、まるでエンペラ星人以上の闇の存在と思っています。」

「……アブソリュートイアン達が大人しくなったと思ったら、突如として復活したバンデル星人など……色々と調査をすることが多いですね。」

ウルトラの母の言葉を聞いて、ゾフィーは両手を組み考え事をしている。ウルトラの母は別の患者のこともあるので部屋を後にすると、ジャックが入ってきた。

「ゾフィーお兄ちゃん、エースたちから聞いたけど大丈夫?」

「ああ心配をかけたね。……怪獣墓場から発生をしたマイナスエネルギーを調べていたら後ろから襲われてね。黒い戦士……か。」

「いずれにしても警戒態勢はした方がいいんじゃないかな?その黒い奴が現れたら、隊員達では不利かと。」

「そうだね、ジャック、トレギアに連絡をしてパトロールをする時は二人一組で行うように指示を頼む。」

「了解ですけど、ゾフィーお兄ちゃんは誰かといてね？」

「あ、はい。」

ジャックに言われたので、何も言えなくなってしまうゾフィーだった。一応体の方は大丈夫なのでウルトラクリニックを後にして宇宙警備隊本部へと入る。

隊員達は敬礼をして、彼は手をあげてから隊長室へと入る。

「隊長！」

「やあトレギア、心配かけたみたいだね？もう大丈夫だよ。」

「……………闇の戦士にやられたと聞いておりましたが大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫だ。さあーて仕事を始めようか？」

一方ゾフィーの指示でウーマン、エースの二人は二人一組でパトロールをしていた。

「Cエリア異常ありませんね？」

「その通りね、次の場所へと……………これは……………」

ウーマン達を囲むかのように現れたのはバンデル星人だ。彼らは両手から鞭を放つも二人のウーマンは交わしてバンデル星人に攻撃をしようとしたが、彼らの両手から煙が放たれて意識がなくなってしまう。

「う……………」

「こ、これ……………」

それはほかの場所でも同じように起きていた。セブンとレオ、タロウとメビウス、ジャックとエイティと連絡がつかないという報告を受ける。

「……………」

ゾフィーはウルトラ姉妹達を狙った敵の策略だろうか？と考えながらフレア達の連絡を待っているとメッセージが入った物が届けられたのを見て彼はヒカリ、トレギアと共に起動させる。

『聞こえるか宇宙警備隊長ゾフィー、ウルトラ姉妹は我々バンデル星人が預かった！返してほしければ、惑星「アルタロス」まで一人で来るといい。』

モニターには裸で十字架に捕らわれているウルトラ姉妹達の姿を見て、ゾフィーは立ちあがる。

「待てゾフィー、これは罠の可能性が高い。」

「そうです！何かあるのかわからないのですよ!!」

「…………たどえ毘だとしても、ウーマン達を取り返すために動かないわけにはいかない！」

「ならこれを持っていけ。」

ヒカリのカラータイマーからウルトラビームソードとウルトラシールドを託された。

「完成したのか？」

「ああ、お前の協力のおかげだな。」

ゾフィーはウルトラシールドを光らせるとカラータイマーの中に収納をしてダッシュをする。

バンデル星人の罠！姉妹達を救出せよ！

惑星アンタルス、ウルトラ姉妹達は十字架に捕らわれていた。バンデル星人の親玉が現れて彼女たちを見ながら笑っていた。

「ふっはっはっは、ウルトラ姉妹達よ。まもなくここにゾフィーがやってくる！」

「無駄よ、ゾフィーはあんたたちよりも強いのよ？」

「そうだ！」

「ゾフィーお兄ちゃんはあるあなたたちに負けないのだから!!」

「そんなことを言ってられるもの今のうちだ！お前達のエネルギーを吸収して我々バンデル星人の最終兵器は完成したのだからな！」

「私たちのエネルギーで、最終兵器だ!!」

「今のうちにゾフィーの最後を見ることだな。」

バンデル星人の親玉は姿を消して、姉妹達はバンデル星人の親玉が言っていた最終兵器とはいったい何だろうかと思いつながら……一方惑星アンタルスに到着をしたゾフィーは着地をする。

彼は辺りを警戒をしながら進んでいくとバンデル星人達が襲い掛かってきた。

「バンデル星人！であ!!」

一体のバンデル星人にゾフィーキックを噛まして二体は手から鞭を放つがゾフィーは上空へ飛びあがり回避をしてスペシウム光線を放ち二体を撃破した。

彼は進んでいくと十字架に捕らわれている姉妹達を見つける。

「皆！」

「ゾフィー兄さん来てはいけません!!」

「ふっはっはっは！待っていたぞゾフィー！」

「バンデル星人！約束通り、私一人で惑星アンタルスに来た！姉妹達を解放をするんだ！」

「ふっはっはっは！貴様はまんまとはまったのだ！姉妹達は貴様をおびき寄せるための罠なのだ！」

「なんだと！」

「さあいでよゾファイーキラールよ!!」

バンデル星人の親玉の声と共に地面からエースキラール事ゾファイーキラールが現れたので、ゾファイーは驚いてしまう。

「エースキラールだと!？」

「驚いたかゾファイーよ、我々バンデル星人の技術力を使えば異次元人ヤプールが作りだした異次元超人を再現をすることができるのだ!そしてこいつにはウルトラ姉妹達のエネルギーを吸収をしてパワーアップをしたゾファイーキラールなのだよ!さあやれゾファイーキラールよ!!」

バンデル星人の命令でゾファイーキラールは目を点灯させて襲い掛かってきた。ゾファイーは応対をするためゾファイーキラールにチョップを叩きつける。

だがゾファイーキラールはゾファイーチョップを受けたが、そのまま彼の手をつかんで投げ飛ばした。

投げ飛ばされたゾファイーは着地をして振り返ってワイドショットを放った。だがゾファイーキラールはそれを真正面で受け止めたので驚いている。

「な!？」

「さあゾファイーキラールよお前の力を見せるのだ!!エメリウム光線!」

ゾファイーキラールからエメリウム光線が放たれて、ゾファイーは横にかわすとスペシウム光線を構える。

相手もスペシウム光線を構えて発射をして相殺をしたのを見てゾファイーは飛びあがりゾファイーキックを放つがゾファイーキラールは彼の足をつかむとそのまま振りまわして地面に叩きつけた。

「が!!」

ゾファイーキラールは投げ飛ばしたゾファイーに接近をして左手にメビウムブレードを展開をして切りかかってきた。

「ヒカリ、早速使わせてもらうぞ!!ウルトラシールド!!」

ゾファイーのカラータイマーからウルトラシールドが現れてゾファイーキラールのメビウムブレードを受け止める。

そのままはじかせるとウルトラブレードを抜いてゾファイーキラール

に対して構える。

「おのれ新兵器か！ゾファイーキララー！やれ!!」

メビウムブレードを解除をするとゾファイーキララーはサクシウム光線を放ってきた。ウルトラシールドでガードをするとゾファイーは飛びあがりウルトラブレードを振るう。キララーは横へと交わすとウルトラギロチンを放ってきた。

「エースの技を！」

ウルトラシールドを収納をするとゾファイーはウルトラスピンドルトラギロチンを粉碎をした。だがその隙についてゾファイーキララーはストリウム光線を放ってきた。

ゾファイーキララーの攻撃にゾファイーは苦戦をしていた。

（やはりエースキララーの技術を使っていることもあるのか、私を倒す為に作られたもの……闇の力を解放しても倒せるのだろうか？いや、姉妹達を救うために私は戦う!）「ウルトラクラウン!!」

ゾファイーはウルトラクラウンを頭部に装着をして超闘士ゾファイーに変身する。

ゾファイーキララーはシューティングビームをゾファイーに放つが、彼は片手ではじかせた。そのまま接近をしてゾファイーキララーに対して攻撃をする。

ゾファイーキララーも機械の力を使いゾファイーが放つ攻撃をはじかせていく。だがゾファイー自身も惑星アンタルスの環境なのか、ゾファイーキララーに苦戦をしまい蹴りを受けて吹き飛ばされてしまう。

「く……………」

彼自身膝をついてしまい、ゾファイーキララーの方はそのままウルトラブレスレットを使おうとしたのを見て、姉妹達は自分たちに残されたエネルギーをゾファイーのウルトラクラウンに照射した。

ウルトラクラウンに姉妹達のエネルギーを受けたのを感じたゾファイーは立ちあがりこの技で決めると構える。

「受けるがいい！ゾファイーキララー！銀河最強のコスモミラクル光線だ!!」

ゾファイーはコスモミラクル光線をゾファイーキララーに対してはなっ

「宇宙拳法の実力見せてあげます!!」

「今度は油断しません!!」

「覚悟を!!」

「おのれ、バンデル星人達よやるのだ!!」

バンデル星人達はウルトラ姉妹達に襲い掛かる。ウーマンは襲い掛かってきたバンデル星人の頭部にチョップを叩きつけるとそのまま足をつかんでジャイアントスイングをしてほかのバンデル星人達の方へと投げつける。

セブンは頭部のアイスラッガーを抜いてバンデル星人達を切りつけていく。ジャックはウルトラブレスレットを構えてウルトラスパークカッターを放ち次々に切断させて笑う。

「ふふ。」

エースはバーチカルギロチンを放ちバンデル星人を切り裂いて、エースブレードを構えて倒していく。

タロウはタロウスパウトを使い次々にバンデル星人たちを空中へと舞い上がらせていく。

レオは連続したレオキックを放ちバンデル星人たちを蹴り入れていく。

エイティはバックルビームを放ち、メビウスとヒカりはメビュームブレードとナイトビームブレードを構えて切り裂いた。

「バーニングプラズマ!」

「メガスペシウム光線!」

「ネオマグシウム光線!」

「レジアショット!!」

四人のウルトラウーマン達が放った必殺光線がバンデル星人達を吹き飛ばす頃、ジョーニアスはプラニウム光線を連続で放ち倒した。

ゾフィーはバンデル星人の親玉と交戦をしていた。

「バンデル星人!お前達の野望もここまでだな?」

「ええい黙れ!我々バンデル星人が宇宙を支配をするためには貴様達は邪魔なのだ!ここで死ぬがいい!」

両手から光弾をゾフィーに放つが、彼は反転をして光弾を交わす。

姉妹達がほかのバンデル星人を倒して上空に飛びあがり構えているのを見てゾフィーも構える。

戦士達の必殺の光線がバンデル星人の親玉に命中をする。

「ぐあああああああああ！バンデル星人、またしても滅びるとい
うのか……む、無念だあああああああああ！」

バンデル星人の親玉は爆発をして、ゾフィーはヒカリにお礼を言
う。

「助かったよヒカリ、わずかに遅れてきてくれたんだね？」

「ああ、あいつらが何かをしていると思っ
ていてな、それでトレギアや
ジョーニアスたちと共に惑星アンタルスに
来たというわけだ。それ
よりも私よりもお前に謝りたいメンバ
ーがいるんだぞ？」

ヒカリに言われて後ろを振り返ると姉妹
達が顔を伏せているので、
彼はゆっくりと近づいていく。

「皆無事で何よりだ。」

「ごめんなさいゾフィー……」

「私達が油断をして奴らに捕まったばかりに。」

「気にするな……それにこうして我々は勝
つたのだ。さあ帰ろ
う！我々の故郷へ！！」

ゾフィー達は惑星アンタルスを後にして光の国へと帰還をした。

地球の危機

地球、ウルトラウーマンフェスナーはどこかの岩場に着地をしてフェスナーアローを放ちカプセルを破壊した。

そこにいたのは、かつてゾフィー、ウーマン、セブン、ジャック、エースの五人をブロンズ像へと変えた人物ヒツポルト星人がいた。

「デアー！」

ヒツポルト星人につかみチョップを叩きつけるフェスナー、そしてウルトラキックでヒツポルト星人を吹き飛ばすが、相手は立ちあがりミサイルを発射させてきた。

フェスナーは交わしてフェスナーアローを連続で放ちダメージを与えた。

「待て!!」

ヒツポルト星人は姿を消して彼女は辺りを見ていると突然としてカプセルが現れて挟まれてしまう。

「こ、これは!!」

「ふっはっはっはまんまと罠にかかったなフェスナー! 貴様はここでブロンズ像になるのだ!!」

「ううう……く、苦しい……」

彼女のカラータイマーが点滅をして、フェスナーはこのままではとウルトラサインを出したがエネルギーが切れてしまった。

ヒツポルト星人はまあいいだろうと姿を消して、緑色の煙がフェスナーの体を包んでいき、彼女の体はブロンズ像になった。

一方光の国でもゾフィーはフェスナーのウルトラサインを見た。

「ヒツポルト星人が地球へ、SOS!!」

一方で地球には四人のウルトラウーマン達が降りた。

「とう！」

「せい！」

「てあ！」

「ふ！」

アムール、そして彼女の友達のメルーナ、マリーナ、そしてアサー

ナの四人である。彼女達はSOSのサインを受けて地球へとやってきた。

そしてフェスナーがブロンズ像になっているのを見て目を見開いた。

「フェスナー!？」

「いったい誰があなたを!!」

「くそ!この仇は必ずとってやる!!」

「ふふふふはっはっはっはっはっは!!」

「!!」

四人は笑い声が聞こえて警戒をしているとヒツポリト星人が現れた。

「よく来たな!!」

「お前はヒツポリト星人!!」

「これでもくらえ!!」

上からヒツポリトカプセルが降ってきてアムールとアサーナは交わしたが、メルーナとマリーナはカプセルに閉じ込められてしまう。

「ちよ!？」

「なにこれ!」

「アサーナはカプセルをお願い!私はヒツポリト星人をだああああああああああ!!」

アムールは突撃をしてヒツポリト星人と交戦をする。一方アサーナはなんとかカプセルを壊そうとしていた。

「これ、堅すぎる。よし!ウルトラ……あ……あ……」

彼女はウルトラブレスレットを使おうとしたが、カプセルが挟まれて閉じ込められてしまう。

「アサーナ!」

「好きありだ!!」

「が!!」

ヒツポリト星人の猛攻を受けてアムールは投げ飛ばされて、目からビームを受けてついに倒れてしまう。

「お前もだ!!」

「しまったー！うあああああああああ!!」

四人のウルトラウーマン達はカプセルに閉じ込められてブロンズ像に変えられてしまった。

一方ゾフィーは？宇宙空間を飛んでいた。ほかの皆には言わないでフェスナーたちを助けるために地球へと急行をしていた。

そして彼は地球に到着をするとヒツポリト星人を発見をしてウルトラキックを放ち蹴り飛ばした。

「どあ!!」

そのままゆっくりと着地をした。

「貴様はゾフィー！お前を待っていた!!」

「まさか、私を殺すためにフェスナーたちを!!」

ゾフィーは構えて、ヒツポリト星人はミサイルを発射させて攻撃をしてきた。ゾフィーはミサイルを交わしてウルトララッシュを連続でヒツポリト星人に投げつける。

テレポーテーションを使い交わすと後ろから攻撃をしてきた。だがゾフィーはヒュドラムタイプに変身すると素早く動いてヒュドラムダガーを使いヒツポリト星人を切りつける。

「おやおや？私に当てられないみたいですね?」

「おのれ！これでもくらえ!!」

ビームを放つが、素早くかわされていつの間にかダーゴンタイプへと変身をしてバックドロップを噛ましてダメージを与えた。

「ぐは!!」

「ふん！我の力の前に不可能などない!!」

右手にエネルギーを込めたパンチを放ちヒツポリト星人を吹き飛ばす。彼は止めを刺そうとした時、ビームを後ろから受けてダメージを受ける。

「馬鹿め、俺様もいるのだよ。」

「スーパーヒツポリト星人だど?!」

すると二人は目からビームを放ちゾフィーにダメージを与える。ゾフィーはウルトラダイフェンダーを発生させて二人のビームを防いで、彼は何かを投げつけると上空で雨雲が発生して、フェスナーた

ゾフィー別次元へ

光の国大隊長室

「ゾフィーが……」

大隊長室にウルトラの父、ウルトラの母、ウルトラウーマンベル、ウーマン、セブン、ジャックをはじめとしたウルトラ姉妹達が集まっていた。

現在アムールが代表で報告をしていた。

「申し訳ありません!! 私達のせいでゾフィー隊長が……」
「くー!」

「メビウスどこへ行くの!!」

「決まっていますゾフィー兄さんを探しに行くのです!!」

「どこにいるのかわからないのに、どこを探せばいいのよ!!」

「落ち着くんだ皆!」

「!!」

「今、我々が喧嘩をしている場合ではない。ゾフィーの行方も含めて……この宇宙を守らなければならないのだ。」

「はい……」

ウーマン達は仕事へ戻るため大隊長室を後にする。

「……ゾフィー、いったいどこへ行ったのかしら?」

一方、ゾフィーは?どこかの場所で目を覚ました。いつのまにか人の姿になっているのでエネルギーがなくなり人間の姿へなってしまうのだな?と思いつながら立ちあがる。

「ぐ……」

『ゾフィー、目を覚ましたのね?』

「ベリアルさん、ここはいったいどこなのでしょう?」

『わからないわ、気づいたらここにいた感じね?』

「いずれにしても、エネルギー不足で元の姿に戻ることができませんね。」

ゾフィーの右手に装着されているブレスレットが光っていないので太陽エネルギーが足りていないので元の姿に戻れないため仕方が

ないので歩くことにした。

辺りを警戒をしていると地面が揺れたのでいったい何かと見ていると怪獣が現れたので驚いている。

「怪獣だ?!?しかもあれは……」

『ネロンガがどうしてここに?あつちからも!!』

見るとネロンガ以外にもテレスドンが現れたのを見てゾフィーはエネルギーがないので変身をするができない。

彼はカプセル怪獣を使うことにした。

「ジラース、バキシマル行け!!」

カプセルを投げて中からジラースとバキシマルが現れた。

「頑張ります!!」

「よっしや行くぜ!!」

二体はネロンガ、テレスドンと戦うためゾフィーは隠れて様子を見ながう。ネロンガと戦うジラースは尻尾を振るいネロンガの頭部を殴打させる。

テレスドンは口から火炎放射を放つが、バキシマルにそのような火炎攻撃は効かない、彼女はお返しと頭部の一角紅蓮ミサイルを発射させてテレスドンにダメージを与える。

「ええい!があああああああああ!!」

口から熱線を放ちネロンガにダメージを与える。ゾフィーはその様子を伺いながら、この惑星は地球なのか?と思いつながらジラースとバキシマルが怪獣を倒したので二人を戻して探索を続ける。

一方光の国では、ウーマンとセブン、ジャックは仕事をしているが……

「……やっぱり探しに行きます!」

ジャックは立ちあがりゾフィーを探しに行こうとするがセブンがとめた。

「待てジャック!」

「姉さんたちはお兄ちゃんが心配じゃないんですか!!」

「そんなわけないじゃない!」

ウーマンが荒げた声を出したのを見て二人も冷静になる。だがい

つまでこの状態が続くのか……果たしてゾフィーはどこにいったのか？

ゾフィーはいったい何の星にいったのか？

「「え?！」」

「場所は、あっちからだ!あたしにはわかるぜ!!行くぜ!!」

フレアが先に飛んで行くので、エースたちも彼女の後について向かっていく。一方ゾフィーは、どこかの洞窟で休んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼はいったいこの星に怪獣がどれだけいるのだろうか?と思いつながら、洞窟の先が進めるようになっていたので進むことにした。

階段などがあつたので、この洞窟は開発された場所なのだろうか?と思いつながら進んでいると怪獣の鳴き声が聞こえてきて、一体何かと見ているとどこかのスタジアムのような場所でゴモラとレッドキングが激突を繰り返していた。

そしてゴモラの突進攻撃がレッドキングを吹き飛ばして倒すと光線が当たられて、EXゴモラに変身をした。

「これはいったい・・・・・・・・改造工場なのか?」

EXゴモラはまるで暴走をしたかのように周りを破壊をしているのを見て、ゾフィーは瓦礫が飛んできたのですぐに元の姿に変身をして横にかわす。

彼はこの工場を破壊しないと大変なことになると判断をしてM87光線を放つ。

そして爆発が次々に起きていき、EXゴモラをカプセルの中に収納をして脱出をする。

「シュワ!!」

彼は脱出をして爆発をしていく場所を見ているとそこから触手などが発生をして彼は交わすと、その巨体が姿を現した。

「クイーンモネラ!?だが、姿が不安定・・・・・・・・そうか、無理やり復活をした影響で不完全な姿で甦ったのか!」

『『おのれええええええええええ!!』』』

クイーンモネラはゾフィーを捕らえようと触手を放ってきたが、突然として触手が切断されたので見るとフレア、ドリユウ、レオ、アストラ、エースの五人が現れた。

「ゾフィー! やつと見つけたぜ!!」

「あれはいつたい……………」

「クイーンモネラ、モネラ星人が宇宙船モネラシードと融合をした超巨大怪獣……………だが、あの姿はおそらく不完全な姿で甦ったのだらう！悪いが一気にけりをつけるぞ!!」

全員が光線の構えをとり、ゾフィーもM87光線を放ちクイーンモネラは爆発を起こす。

『『ぎゃあああああああああああ!!』』

「脱出だ!!」

ゾフィー達は脱出をして宇宙空間へ出ると惑星は爆発をして、ゾフィー達は見ていた。

「ゾフィー兄さん、ご無事で何よりです。」

「ああ、皆には心配をかけてしまったね。エネルギーがなくなってしまい、しばらく回復をするためあの惑星にいたんだ。ウルトラサインも上げるほどエネルギーがなかったんだ。」

「まさか、あの星はモネラ星人が?」

「それはないはず、奴らはティガとダイナによって全滅をしたはずだからね。だがあのクイーンモネラを見ていると……………ね。」

彼はちらつとカプセルを見ていた。EXゴモラをつい回収をってしまったが……………とりあえず光の国へと帰還をする。

帰還

ゾファイー side

いやー、今回ばかりは私も死ぬかと思ったよ。ヒツポリト星人のせいで別の星に次元転移されて、エネルギーが切れてしまい人間態の姿で活動をしなければならなかった。

ウルトラサインを上げるだけのエネルギーが回復をしたから、こうして助かっている。

「ゾファイー兄さんどうしたのですか？」

「ん……なんでもないよエース、いや助かったなって思ってね。」
「私たちからしたら、ゾファイー兄さんが無事だつてことにホツとしています。本当にグス……良かったです。」

エースが涙目になっていたので、かなり心配をかけさせてしまったな？ 私たちは飛びながら光の国へと向かって飛んで行く。

やがて懐かしいというか、光の国が見えてきた。私は一旦止まって改めて光の国事ウルトラの星を見る。

緑色に光っているクリスタルタウン、エースたちが心配をしてこちらを見ているが大丈夫だよ？ といい光の国の宇宙警備隊本部がある

私はゆつくりと降りたつとブラザーマントを羽織っているウーマン達が立っていた。

「ゾファイー兄さん（お兄ちゃん）!!」

「ガブラ!!」

何かの弾丸のように私は後ろの方へと倒れてしまう。ジャックとタロウが弾丸のように私に抱き付いてきたからである。

「ゾファイーお兄ちゃん……」

「うえええええええええええん！」

「ジャック、タロウ心配かけさせてしまったな。」

「全くよ！ あんたはいつも……いつも……無事で……良かった。」

「ウーマン、皆も私はこの通り生きている。とりあえずジャック、タロウ、悪いがはなれてく「やだ!!」ですよねー」

仕方がないので左にジャック、右にタロウが抱き付いているので彼女達の胸が当たっているが、とりあえずまずは大隊長室の方へと向かうとしよう。

大隊長室まえに到着をしたのでジャック達に離れるように言い中に入る。

「ゾフィー無事だったのだな。」

「大隊長、副大隊長、心配かけさせてしまい申し訳ありません。この通り生きていました。エネルギーがなくなってしまう、ウルトラサインをあげることができなかったのです。」

そして私は飛ばされた惑星で起こったこと、怪獣改造が行われていることなども報告をした。

「そのような星が……」

「そして一体のEXゴモラをカプセルの中に収納をしました。では」

「ゾフィー、ウルトラクリニックへと向かいなさい。」

「え？」

「あんたの体、疲れ切っているし、思いつきりエネルギーが不足をしていると思うわよ。」

「わかりました。ウルトラクリニックへ行きます。」

大隊長室を後にして、ウルトラクリニックの方へ到着をしてマリ―さんと再会をしてから私は目を閉じた。

ゾフィー side 終了

「……全く、無茶をしていますね。かつてセブンが地球から帰る時と同じ症状になっているじゃない。エネルギー不足になるのは当たり前……はあ……」

ウルトラの母はため息をつきながら、傷つきながらも宇宙警備隊長を務めているゾフィーを見ながら治療を開始する。

カプセルの中のゾフィーの傷ついた体はウルトラの母が放つ光線で回復をしていく。それから数分後、ゾフィーは目を開けて辺りを見る。

「ウルトラの母……」

「全く、かつてセブンがなった症状にあなたがなっていましたよ？」

「本当ですか、無意識ですね……」

「今はベルやあの人、それにウーマン達もいるのよ？一人で抱えることとはないでしょう？」

「まあそうですが……」

「あなたは甘えるって事をしないですからね。あの人がいっても愚痴を言っていたのを覚えてますよ？」

「うぐ。」

これ以上は愚痴を聞かされるなど思い、彼は失礼しましたとウルトラクリニックを後にして宇宙警備隊本部へと戻り、隊長室へと行く。扉を開けて隊長室に入ると、トレギアが涙を流す。

「隊長……」

「トレギア、心配かけさせてしまったね？」

「全くです。ご無事で何よりです。」

彼は久しぶりに隊長室の椅子に座り、仕事にとりかかろうとしたが……書類などがなかったので首をかしげる。

「あれ？確か、行く前に残しておいた書類などは？」

「それでしたら、大隊長達が預かりまして終わらせました。」

「まじですか……」

彼は仕方がないと報告書を確認をすることにした。

ゴモたん降臨！

ゾフィースide

えっと久しぶりのゾフィーだよ？………んで今私は困っていることがある。それは………

「貴様………」

EXゴモラをとりだしたら、いきなり光りだしたと思ったら貴様……と言ってきたのだけど？え？なんで？私なにかしたのかな？

「えっと君は？」

「ゴモラだよ！共に未来を歩んでいこ??」

「なんでやねん!!」

私は頭を抑えながら、EXゴモラ改めてゴモたんが降臨してしまったのでほかのカプセル怪獣たちを出した。

「おやーご主人様、色々と増えてきましたねー」

「ああ、結局今何体だ？」

「私……バードンさん、タイラントさん、ジラースさん、ゴモラさん、バキシマルさん、ダークロプスゼロさんの計7体………」

「すごく増えましたねご主人様。」

「まあね。」

色々が増えてきたので、カプセル怪獣たちも仲良くなり過ぎているので苦笑いをしている。

ゾフィーはカプセル怪獣など持っていない、だがこの世界の私は持っている。子の宇宙を守るために………彼女たちと共に戦う。

「ところで貴様……ラームメンはないのか？」

「なぜにラームメン？」

なぜラームメンがここで出てくるんだ？このゴモラは変わっているな………とりあえずカプセルに戻して、隊長室へと戻る。

隊長室へ戻るとトレギアが座っていた。

「ううーん。」

ぶるん、トレギアのFカップの胸が揺れたのを見た。いやーなかなか

かでかいのを持っているなーって違う違う……はあ……

「おやゾファイー隊長お帰りなさいませ。」

「ああただいま、色々と疲れたよ。」

「お疲れ様です。」

トレギアが入れてくれたお茶を飲みながら、書類を確認をしている。

「惑星「ケイオス」か……」

「はい、新たな惑星みたいですね。」

「よし早速調査に向かうとしよう。」

「ですが、誰が？」

「……」

私はモニターを見て誰に調査をお願いをしようかな？と思いつエツクをする。うーんよりによつて今日は誰もいないか……仕方がない、私が行くとなー……すると扉が開いてヒカリがやってきた。

「どうしたゾファイー？」

「いた!!ヒカリ、トレギア!惑星「ケイオス」に調査へ向かう。共に来てもらえないか?」

「……よしいだろう。」

「私もかまいません。」

よしこれで一人で行かないので怒られないだろう。二人と共に私は惑星「ケイオス」に向かつて飛んで行く。

ゾファイーside終了

惑星「ケイオス」に向かつて飛んでいるゾファイー達、彼らは惑星ケイオスの近くに到着をして辺りを警戒をしながら、降りたつた。

「ふむ……」

「これは綺麗な星ですね。」

「ああ、いずれにしても油断をしないように……」

「了解(した)」

三人で惑星ケイオスを進んでいき、調査を進んでいく。

「うーん、今のところ怪獣はいないみたいだね。」

「ああ、これほど平和な星は見たことがない。」

「どうしましょうか?」

「ん……」

ゾフィーは何かに気づいて、近づいていくと小さい子どものような子が泣いていた。

「お嬢さんどうしたんだい?」

「……誰?」

「私は宇宙警備隊長を務めているゾフィーだよ。」

「宇宙警備隊……お願い!私の村を助けて!!」

「助ける?」

「隊長……」

「詳しく聞かせてもらえないだろうか?」

彼女の名前は「ピエル」という少女、彼女達が住む村に突然として謎の宇宙人たちが攻めてきて占領をしているという。

彼女はなんとか大人の人達によって脱出をしたのはいいが、転んでしまい怪我をしてしまいここで泣いているとゾフィー達が駆けつけたということだ。

ゾフィーは足を見ると怪我をしているのを見つけてゾフィーヒーリングを放ち彼女の傷を回復させる。

「さて、正直に言えば君の村を助けたい。だがウルトラサインをあげると奴らにばれてしまう。」

「ならどうする?三人でやるか?」

「とりあえず様子を見たい。ピエル、案内をしてくれないかい?」

「はい!こっちです!!」

ピエルの案内で村の方へと向かうゾフィー達、果たして彼らはピエルの村の人々を助けることができるのか!!

ピエルの村を救え

ゾフィー、トレギア、ヒカリの三人は惑星ケイオスの調査をしていると傷だらけの子を助けた。

彼女はピエルと呼ばれる少女で、自分たちの村を突然として侵略者達が現れて村を占拠、彼女は大人たちの力を借りて脱出をしてゾフィーに助けを求めた。

彼はそれを承諾をして、彼女と共に村の近くへやってきた。

「あ、あれが私の村です。」

「入り口に立っているのは……あれは宇宙人だな？」

「確か照合……わかりました。ペダン星人です。」

「ペダン星人がなぜこの星を？いずれにしてもペダン星人となるとキングジョーが出てくる可能性があるってことか。とりあえず入り口の奴らを捕獲をするかな？」

ゾフィーはヒュドラムタイプに変身をして、入り口の二人に一瞬で近づいて気絶させた。

ほかの三人も彼が辺りを確認をして大丈夫と言ったので彼らは中へと入りこんだ。

（やはりペダン星人ばかりだな、奴らのことだからこの星を前線基地にする気じゃないかと思っていたが……よし）「ヒカリ、トレギア……悪いが、君達には囹をお願いしたい、その間に私はボスを叩く。」

「今はそれしかないか……」

「わかりました。」

「ピエルは、安全な場所で待機をしてほしい。」

「は、はい。」

2人は巨大化をしてペダン星人たちは驚いている。

「な!?なぜウルトラ戦士が!!キングジョーを「そうはさせると思っているのか?」な!?がは!!」

キングジョーを起動させようとしたが、ゾフィーが目の前に現れてペダン星人の胴体にひじ打ちをして気絶させた。

ほかのペダン星人もゾファイーがいることに驚いて、村人たちを殺そうとしたが………

「どああああああああ!!」

「た、助けてくれええええええええええええええええ!!」

見るとバードンやタイラント、EXゴモラなどが現れて村人を囲んでいたペダン星人たちを撃退をしていた。

「お、おのれなぜ宇宙警備隊がここに!」

「ペダン星人、お前達の前線基地の野望はここで絶えさせてもらおう!!」

「おのれ、キングジョーカスタム2を出せ!!」

「ですがあれはまだ!」

「ええい、ここで奴らを倒さなければ意味がないわ!」

「は!!」

ゾファイーはほかのペダン星人を倒していると、ヒカリとトレギアは巨大化をしているので後ろを振り返ると合体をしたキングジョーカスタム2が現れた。

「キングジョー?」

「ですがあれはカスタムタイプかと。」

するとキングジョーカスタム2は両手のランチャー砲が放たれて二人に命中をした。

「ぐ!!」

「うわ!!」

「ヒカリ!トレギア!バードン、地上は任せた!」

「はいお任せを!!」

ゾファイーは巨大化をして、キングジョーカスタム2の胴体にウルトラキックをお見舞いさせて着地をする。

「ゾファイー!」

「隊長。」

「こいつは厄介だな。キングジョーカスタム型か………」

相手は頭部と両手からビームを放ち、三人は交わすとゾファイーは接近してダーゴンタイプにチェンジをして胴体にウルトラパンチを叩きこんだ。

だがキングジョーカーカスタム2はゾフィーの拳を胴体で受け止めて右手のランチャー砲でゾフィーを殴り吹き飛ばす。

ヒカリはナイトシユート、トレギアはトレラシウム光線を同時に放ちキングジョーカーカスタム2の背部に命中をするが、キングジョーカーカスタム2は気にせずゾフィーに向かっていく。

「ウルトラスパークカッター!!」

左手のウルトラブレスレットを構えてウルトラスパークカッターを放つ。キングジョーカーの胴体に命中をするがはじかれて左手に戻った。

だが彼はそのまま連続してウルトラスパークカッターを放つ、しかも同じところを何度もぶつけていく。

同じ部分を何度もぶつけていき、キングジョーカーカスタム2の動きが悪くなってきたのを見て、ゾフィーは再びブレスレットを空中にスパークカッターのまま待機させるとウルトラウーマンセブンがアイストラッカーを光線で飛ばすウルトラノック戦法（ゾフィーバージョン）を使用をしてキングジョーカーカスタム2の胴体を貫通をした。

そしてキングジョーカーカスタム2はそのまま後ろの方へと倒れて爆発をする。

だが彼の左手に戻ったウルトラブレスレットはボロボロの状態になつてしまう。

「後で修理をしてやるからな。」

ペダン星人たちは惑星ケイロスを前線基地計画を潰されたので撤退をしていく。ヒカリ達は追いかけてしようとしたが……止める。

「いいの？」

「……いいのさ、この星を守れただけでも結果オーライさ。」

ゾフィー達はチラツと下の方を見て、村長と思われる人物が杖を突きながら現れる。

「ありがとうございます、宇宙警備隊の方々のおかげで、我らは再びこの村で住むことができます。本当にありがとうございます。」

「いいや、ピエルの勇気ある行動がこの村を解放をさせることができました。これからはこの惑星ケイラスが狙われる可能性があります。」

宇宙警備隊にもこの星のパトロール範囲を広げる約束をします。」

「ありがとうございます。」

「さあ帰ろう。」

「二「シュワ!!」二」

惑星ケイオスのペダン星人前線基地計画はゾフィー達によって阻止される。彼らはこの星は無事と判断をして光の国へと戻るのであった。

強大な闇

ペダン星人の野望を打ち砕いたゾフィー達。彼らは光の国へと飛んでいた。その間もゾフィーはボロボロになってしまったウルトラブレスレットをじーつと見ている。

キングジョーカスタム2の装甲を破るため何度も同じ場所に投げ続けた結果、ウルトラブレスレット自体も破損をしてしまうほど堅かったのだ。

「仕方があるまい、ほかの武装などを考えるとあれしかなかったのだろ?」

「ああ超闘士はあまりにも強力だが、ペダン星人達に出すわけにはいかなかったからね。帰ったら修理及び強化作業だ。ん?」

ゾフィーが止まったのでヒカリとトレギアも共に止まった。彼は突然として別の方角へ飛んで行くので二人も急いで追いかける。

彼が到着をした場所でティガ、ダイナ、ガイアの三人が交戦をしていた。

『ギャおおおおおおおおお!!』

「「うわ!!」」

三人は吹き飛ばされて、ダイナは舌打ちをする。

「くそ!この怪獣!」

「突然として現れて、私達に襲い掛かってきたわね」

すると上空から光線が放たれて三人が見るとゾフィーがM87光線を放ちながら降り立つ。

「ゾフィー!」

「三人とも大丈夫か?」

彼は解除をすると怪獣は起き上がって、その姿を見て驚いてしま
う。

「Uキラーザウルス.....」

「なんだよそれ?」

「Uキラーザウルス、かつてヤプールが作りだした究極の超獣とよばれるものです。ですが、最後はウルトラウーマンメビウスインフィニ

「ティーによって倒されたはずですよね？」

「ああ、だが奴からヤプールの怨念を感じることがない、くるぞ!!」

Uキラーザウルスの上部が光りだして光弾が放たれた。全員が回避をしてゾファイはウルトラランスをしようとしたが、ウルトラブレスレットが破損をしていたのを今思いだした。

(しまった、ウルトラブレスレットは破損をしていたんだ。)

彼は心の中で舌打ちをして、光弾を躲しながらウルトラショットを放ち胴体に命中させる。

ヒカリとトレギアも到着をしてUキラーザウルスが暴れているのを見て驚いている。

「なぜUキラーザウルスが、ってそんなことを考えている暇じゃないな行くぞトレギア！」

「はい!!」

Uキラーザウルスが触手を伸ばして全員をつかもうと攻撃をしてくる。全員が躲していく中ゾファイは一気にけりをつけるため超闘士ゾファイに変身をして右手に光エネルギーを込めたパンチをUキラーザウルスの胴体に命中させて吹き飛ばす。

『ぐおおおおおおお………』

「今だ！」

「はい！ゼペリオン光線！」

「ソルジェント光線！」

「クアンタムストリーム！」

「ナイトシユート！」

「トレラシウム光線！」

五人の光線がUキラーザウルスに命中をして、大ダメージを与える。とゾファイはアタック光線の構えをとる。

「………見様見真似だな、スペシウムアタック!!」

必殺技スペシウムアタックが命中してUキラーザウルスの体は崩壊をしていく。だがなぜUキラーザウルスがこのデブリ地帯で現れたのか？ティガたちと話をする。

「私達はデビルスプリンターの情報を求めて、この空域を飛んでいま

した」

「いきなりあの野郎が襲ってきたんだよな？」

「それで交戦状態になったと……宇宙警備隊で警戒態勢を上げた方がいいかもしれないな。何が起こってもおかしくない状態だからね」

「だな」

「引き続きティガたちはデビルスプリンターを追ってくれ」

「わかりました」

ティガたちがデビルスプリンターを探しに行つたのを見届けて、ゾフィー達も光の国へと戻る。

ウルトラブレスレット改良へ

「Uキラーザウルスを倒したゾファイー達、ティガたちと別れて彼らは光の国へと戻り大隊長であるウルトラの父とベルに報告をしていた。」「以上が、惑星ケイオスで起こった詳細になります。」「

「ペダン星人が前線基地を作ろうとしていたのか……あいつら、最近バロツサ星人にキングジョーを盗まれたりしているのにな。」「

「いずれにしても、我々の範囲外では対処するのは不可能かと思われず。」「

「うむ、いずれにしてもゾファイー達よくやったな。」「

「ありがとうございます、では失礼します!!」

大隊長室を後にして、隊長室へと戻ったゾファイーは小さい机の方へと移動をして左手に装着をしているウルトラブレスレットを外した。

彼は工具箱をとりだすと、始めることにした。

「さあ実験を始めようか。」「

一方、ウルトラウーマンレオはパトロールをしていた。

「この空域も異常がないわね。そろそろジャック姉さんと合流をしないと」「死ねウルトラウーマンレオ!」おっと危ないわね。」「

レオは躲すと現れた宇宙人たちを見て驚いている。

「ツルク星人にケットル星人、カネドラスにケンドロス……かつて私が地球で苦戦をした怪獣や宇宙人たちがどうしてここに?」

「決まっているお前を倒す為だ!死ねええええええええ!!」

「やるしかない!」

ケットル星人は持っているアトミックランスをレオに向けて放った。その後ろからカネドラスがドラスカッターを飛ばす。

彼女はドラスカッターを躲して、ケンドロスは頭部のブーメランを放つ。

ケンドロスのブーメランを両手ではじかせてツルク星人は彼女に両手の刃をレオに襲い掛かろうとした時、ツルク星人が両手と首を切断されて爆発した。

三体は一体何がと見るとウルトラウーマンジャックが現れる。

「レオ、大丈夫？」

「ジャック姉さん助かります。」

「おのれウルトラウーマンジャックまで！」

カネドラスはドラスカッターを飛ばしてきたが、そこにがきんとぶつかり一体何かと見ているとウルトラウーマンセブンはアイ斯拉ツガーを構えていた。

「セブン！」

「まさかこいつらがな。さてジャック、レオ、行くぞ!!」

「はい！」

「ええ!!」

カネドラスとセブンは激突を繰り返す。セブンはハンディショットを放つがカネドラスは躲して必殺のドラスカッターを飛ばしてきた。

セブンはアイ斯拉ツガーを飛ばして相殺をする。エメリウム光線を放ち胴体に命中をしてダメージを与えた。

「これで終わりだ！」

だがカネドラスはドラスカッターを飛ばしたが、セブンはキャッチをするとそのまま返してドラスの両目に命中をさせて、ワイドショットを放ち撃破した。

ケンドロスと戦うのはウルトラウーマンジャック、ケンドロスは頭部のブーメランをジャックに放つ。

彼女はブーメランを躲すが、さらに飛ばしてきたのでウルトラブレスレットをブレスレットムチに変形させてケンドロスが放つブーメランを次々にキャッチをしてそのまま返してダメージを与える。

「であああああああ!!」

流星キックを放ち上部に命中させた後スペシウム光線を放ち撃破した。アトミックランズに対してレオは宇宙拳法ではじかせていく。

「であ!おのれ!!」

「は!イア!!」

「ぐあ!!」

レオのパンチが胴体に命中をしてケトル星人はアトミックラン

スを構えるが、そこにセブン、ジャックが駆けつける。

「さてどうする?」

「お、覚えておけ!!」

そのままケットル星人は立ち去り、レオは両手を組んだ。

「なぜ奴らが?」

「わからないわね。」

「これはゾフィーに報告をした方がいいかもしれないな。」

三人は光の国の方へと帰還をするため飛びたつ。

作業をしているゾフィー

セブンスide

何か久しぶりな気がするが、まあいいか……私たちが襲撃をしてきた宇宙人たちのことを報告をするため、隊長室に向かっていた。

あいつが、また無茶をしていると考えるとあまりいい気分じゃない。

「セブン姉さん？」

「セブンいかがしました？」

「あ、すまない」

さて隊長室に到着をしたが、あいつが中にいるのかわからないが……扉を触れると開いたので中に入るとゴーグルを装着をして何かをしているあいつの姿を見て私たちは驚いている。

「ん？誰が入ってきたのか？」

「ぞ、ゾフィーお兄ちゃん？」

「ゾフィー兄さんですよね？」

「なんだ、セブン、ジャック、レオじゃないか」

「お、お前、何をしているんだ？つてかその格好は……」

今のこいつの格好は、まるで作業をするかのような格好をしているので驚いているとあいつが作業をしている場所に案内されて何かを改良をしているのを見て何だろうか？と思いを考えているとジャックが閃いたのか声を出す。

「もしかして、これウルトラブレスレットですか？」

「ああ正解だ。正確には元……になるけどね？」

「元？」

元ということは、やはりウルトラブレスレットか、だがなぜお前がそのような格好で作業をするのだ？てか何があった!?

「ああペダン星人達が出してきた、キングジョーのカスタムタイプを倒す為にウルトラブレスレットに罅が入ってしまったね。それでついでに老朽化もしていたから強化型にするための作業をしていたわ

「けだ」

「そういえば、ジャックのウルトラブレスレットを作ったのもこの男だったな、あいつは一旦作業を止めて私達の話聞いて両手を組み考え事をしている。」

「ふむ、かつてレオが倒した敵ね……」

「いずれにしても、パトロールの強化はした方がよろしいかと思われ
ます。一般隊員達が襲われる可能性が高いです」

「レオの言う通りだね、わかった。大隊長にそのことを報告をして
おくれよ。さて……」

「また作業か？」

「ああ、流石にウルトラブレスレットがないと落ちつかないんだよ。」

「三人とも今日の任務は終わったみたいだからねお疲れ様」

「ゾフィーお兄ちゃんは帰らないの？」

「ああ今日はここで泊まって、ブレスレットの作業をするよ」

「全く、この男は……まあ私も帰ってもやることがないので
することは決まった。ほかの二人も同じ考えのようなので一旦隊長
室を後にして泊まる準備をすることにしよう。どうせご飯を食べな
いのを考えると……」

セブンスide終了

「三人が退室をした後、ゾフィーはウルトラブレスレットの作業をす
るため工具箱からドライバーなどを取り出して制作をしていく。」

「パーツなども新調して、新たな武器を追加したりなど……
様々な強度を堅くしたりする作業を続けていた。」

「形などもゼロが装着をしているウルティメイトブレスのような形
に変えた方がいいかな?と思いつながら考えていた。」

「うーうーん、ウルトラブレスレットの形などが色々あり過ぎて
悩んでしまうなーうーうーってもうこんな時間か、ご飯どうしようかな
?」

「やっぱりそうだと思って作っておいてよかった」

「ん?」

「声がしたので振り返るとセブン、ジャック、レオの三人が隊長室に

入ってきた。しかも泊まる道具を持ってきているので彼は驚いている。

「あれ？三人とも帰ったんじゃないのかい？」

「どこかの馬鹿が、絶対ににご飯を忘れるだろうな？と思ってな。帰って泊まる道具を持ってきたわけ」

「私も同じ考えかな？まさか三人とも同じだとはね（笑）」

「ですが、隊長……まさか時間を忘れてブレスレットの作業をしていたのですか？（汗）」

「……まさにその通りなんだよね。うーん一旦休憩にするかな？」

彼は立ちあがりセブン達が用意してくれた料理を食べることにした。新しい隊長室ではご飯を食べる場所なども完備されており、調理することも可能となっている。そのため冷蔵庫もあるので食材などはそこで保管されている。

四人は移動をして夜ご飯を食べる。

「美味しいな……」

「まあな」

「えへへへへへ」

「それにしても、新しい隊長室は広いですね？改めてみますと……」
「まあね、前よりも広くてモニターを通して宇宙警備隊長室から他の部屋を見ることが可能となっているよ」

「だから、私を呼び出したのですね？」

「ああ、さて……」

彼は立ちあがるとワインとグラスを出したので、驚いている。

「お前、仕事が終わるところで飲んでいたのか？」

「ああ前にヒカリと一緒に飲んでいたね。まあ皆もどうぞ？」

「ありがとうございます」

「いただきます」

四人でワインを飲み、ゾフィーはじーっと左手を見ているのでセブンが声をかける。

「やはりブレスレットがないと落ち着かないのか？」

「まあね」

「確か、セブン達がUキラーザウルスを封印した後、私やタロウ姉さんが光の国へ帰還をした時には付けていましたね」

「そうだったんだ」

「ああ、あの時はまだカラレス達も復活していない状況だから、私も戦力をあげるためにウルトラブレスレットを制作をして付けて戦っていたんだ。まあ色々大変だったけどね？ヤプールの暗躍などの影響で各宇宙人たちが暴れているから止めるのも一苦労でアンドロ警備隊やU-40にも協力を要請をしたぐらいだからね」

「「そんな規模だったの!?!」」

三人はあの時の戦いの後のことを聞いて驚いている。当時のことはゾフィーも色々と奮闘したが、流石に一人でまわすのは無理だと判断したウルトラの父がタロウやレオを呼び戻したのである。

「各地で宇宙警備隊員たちが動いてなんとか防いだけど色々大変だったよ」

「なんかすまない」

「ごめんなさい」

「別に大丈夫だよ。あの時は仕方がないさ、あの大量のマイナスエネルギーを封じ込めるにはファイナルクロスシールドを使わないといけないからね」

ゾフィーはワインを飲みながら話をするが、明日はお休みだったなーと思っていた。

「そういえば、明日はお休みでしたね」

「ああ、流石に宇宙警備隊だって毎日動いているが、たまには一日な？まあ休みとはいえ狙われる可能性があるからこそ、光の国で過ごす者もいる」

ゾフィーはワインを飲み、他のメンバーもワインを飲んでいくと彼は欠伸をしながらいるのでジャックが聞いた。

「ゾフィーお兄ちゃん、寝ていないの?」

「ああ、仕事をした後からずっとウルトラブレスレットの改良作業を
していてね。だけど、デザインなどを考えて強化型にしようとして時

間がかかっているのさ」

彼はまだできていない、ウルトラブレスレットの改良型を出して基本的な姿になっていないので時間がかかるなどゾフィーは再び机の方へと置いて戻ってきた。

「この頃宇宙人たちの活動が活発してきたな」

「アブソリューティアン達が大人しくなったと思ったら、今度は各地の宇宙人たちの謎の行動……ゾフィーお兄ちゃんは どう見ている？」

「……わからない、誰かが裏で操っているのか、それとも……」
「いずれにしても、警戒はしておいた方がいいですね。特にゾフィーお兄さんは」

「うんうん。」

「(・・ω・・)」

三人に言われて落ち込んでしまうゾフィー、いずれにしても明日は何としてでもウルトラブレスレットを改造をしないかねと思いつながらゾフィーは寝ようとしたが……

「え？」

「せっかく寝るのなら」

「そうですねよゾフィーお兄ちゃん」

「そうですね」

「なんでやあああああああああああ!!」

こうしてゾフィーは仮眠室に連れられてヤルのであった。

のんびりのんびり

ゾフィースィド

昨日はセブン達と共にワインを飲んだ後、なんでかヤツテしまい……現在には休憩室にあるお風呂に入っているが、つてかなんでかとても広いんだよね？

まるで温泉に来ているかのように、光の国の建物などが見えるようになってる。

「ウルトラブレスレットの改良、思っていた以上に進まないな……」

「それは一人でやっているからじゃないか？」

「そうか、つてえ？」

声が出たので見るとセブン、ジャック、レオも裸となりお風呂に一緒に入っているののでいつのまに起きたのだろうか？と思いつながら、光の国の外を見ていた。

「起きていたのか、君達を起こさないようにお風呂に入ったのだが……」

「お前の姿が見えなくてな、起きたらお風呂の方で音がしたので入ったというわけだ」

「ゾフィーお兄ちゃんはお外の方を見ていたから、私達が入ってきたのに気づかなかったの」

なるほどな、お風呂でのんびりしていたからな……それにしても彼女達を抱いている身として言うのはあれだが……綺麗だね？ゾフィーとして転生をしてまさかウーマン達を抱くことになるなんて思ってもいなかったよ。

「はあ……」

「ゾフィー兄さん、ため息をついていますと幸せが逃げますよ？」

「と言いますけどね……」

私は色々あるからだよなーと思いつながら、お風呂から上がると誰かが隊長室の扉をノックをしているので、人間態の姿からゾフィーの姿へと戻りモニターの方を見ると、ほかのウルトラ姉妹達がやってきたのを見て、一体何があったのだろうか？と対応をするため扉を開け

る。

「やあ、つてかウルトラ兄妹が集結したじゃないか」

「集結した？」

「どういうことですか？」

「やあウーマン達」

仮眠室からセブン達が現れたのを見て、ウーマン達がじーっと見ている。

「どうしてセブン達が仮眠室から出てくるのかしら？」

「ああ、私がウルトラブレスレットの改良をしている時に報告をしに来た時にね？そこからワインを飲んだりして過ごしたってわけさ」

私が説明したのだが、ほかの姉妹達からうーっと睨まれても困るのだが？つてかどうして隊長室に集まるのやら……やれやれ、のんびり過ぎす予定が……

ゾフィースide終了

ウルトラ兄妹全員が集結をして、ゾフィーは昨日の続きでウルトラブレスレットの改良型を制作するため、作業を開始をする。

「ん？ゾフィー、もしかしてウルトラブレスレットか？」

「ああ、結局まだ基本的なところまで作れていないけどね。」

「ふーん、ならこれならどうだ？こうしてあーして」

「あーなら私だったらこうなつてこうして……」

なぜか、全員がブレスレットの開発に協力をしてゾフィーのブレスレットは完成に近づいていく、そして数時間後！

「完成したあああああああああ!!」

ゾフィーの新しいブレスレットが完成した。その形はゼロが装着をしているウルティメイトブレスのような形になり彼は完成させたブレスレットを左手に装着した。

「……ありがとう皆、皆のおかげで私のブレスレットは新たな姿に変わったよ。本当に感謝をしている」

「気にすることないわよ」

「そうだな」

「はい！」

新型のウルトラブレスレットの力を見せる時！

ゾフィーサイド

宇宙空間をパトロールをしている私、今日は定期パトロールだけどほかの姉妹達はいないよ？だって今回はこの新型のウルトラブレスレットの力を試すためのパトロールを兼ねた鍛錬だからね。

だから、こうして堂々とパトロールをしながら相手を探している。

『だからと言って、こうしてパトロールをするのはいいけど……帰ったらあいつらに何をされるのかわかったもんじゃないわよ？』

ベリアルさん、それは言わないお約束でっけいきなり攻撃が放たれたので躲すと現れたのはベムスターだ。

ベムスターは私にベムスタービームを放ってきたので私は早速武器をはじかせるため新型のウルトラブレスレットをかざすと武器に変化する。

「ウルトラビームソード！」

ウルトラソードがビームソードへと変わりベムスタービームをはじかせた後に光らせてウルトラランスをツインランスモードへと変えた状態だ。

「でああああああああ!!」

ベムスターに接近をしてツインランスモードを振り攻撃をする。相手は私の攻撃を躲している。

素早いな……流石ベムスターとだけ言っておく。おっと危ない危ない、腹部が開いたのを見て後ろの方へと下がった。

形状を元のウルトラランスへと変えた後ウルトラスパークカタスター状態にしてなげる。

「でいニ！」

投げたスパークカタスターがベムスターを切り刻んで撃破した。前よりも威力が上がっているので切り刻む時間などが速くなっているね。

私が思っていた武器に変わるように改良を加えたので先ほどのビームソードやツインランスモードなどにも変えられるようになった。

新型のブレスレットを見ながら、私はパトロールを続ける。今のところ宇宙に乱れなどが無いが……いきなり次元の扉が開いて、別世界へ飛んだりするなどありえることだからね。

この間の、アイアンキングの世界へ行ったりすることもあったから驚いている感じだよ。

少し宇宙で止まり、辺りを見ていた。この辺の地域は普段から私がパトロールをしている空域だ。

ウーマンがベムラーを追いかけて地球へ行ったときも、光の国へ帰ってケンさんから聞かされて驚いてしまったり、色々と懐かしい気分になるよ。

「全く、どこを飛んでいると思ったら、やっぱり自分の空域を飛んでいたわ」

「ん？」

声が出たので振り返るとウーマンが呆れていたのを見て、もしかしてばれてしまったみたいだな？と思いつつ、声をかける。

「よくここだってわかったね？」

「当たり前じゃない、あんたがこういう時ってだいたい自分の空域をパトロールをするって、それで近くをパトロールをしていたのが私ってわけよ。まあ今回はウルトラブレスレットの力を試すためだもんね」

「うぐ」

「……………それにしても、あんた……………私達がいなくて、どっだけ奮闘をしていたのよ」

「ん……………覚えていないな」

そうあの時は実際に何をしてたのか覚えていないぐらいに大変だったとだけ言っておく、ウーマン達の空域をパトロールをするのもあったから色々大変だったってだけ言っておくよ。

私達は話をしていると突然として光弾が飛んできたので二人で回避をする。

「ギよギよギよギよ……………ターゲットウルトラ戦士」

「あれはバルタン星人？」

「だけど、メカメカしいからメカバルタンカスタムって言った方がいいかしら？」

メカバルタンカスタムが襲い掛かろうとしていたので私達は構える。

ゾファイ side 終了

メカバルタンカスタムは右手のバルカン砲を回転させて攻撃をしてきた。二人は躲すとウーマンは八つ裂き光輪を放つが、相手は左手のメカハサミで弾いてゾファイはスペシウム光線を放つ。

「ちい！反射板を持っているのか。」

スペシウム光線が胸部の反射板に反射されて戻ってきたので回避をする。メカバルタンカスタムはウーマンに対して攻撃をするが、ゾファイはカルミラタイプへと変身をしてビームウィップを放ちメカバルタンカスタムの左手の絡ませる。

「この大人しくなってる!!」

メカバルタンカスタムは力を込めて吹き飛ばそうとしたが、ウーマンがその隙について八つ裂き光輪を手に発生させて右手の砲塔を切断させる。

それに気づいたゾファイはマルチタイプへと戻ると闇の力を解放させて、構える。

「必殺！M87光線！」

光と闇の力を混ぜたM87光線が放たれてメカバルタンカスタムは胸部の反射板で反射させようとしたが、反射をする反射板事貫通をしてメカバルタンカスタムは爆発をする。

ゾファイはすぐに闇のエネルギーを解除をした。

「本当、改めてあんたが闇と光を同時に使うことができるってわかるわ」

「まあね。しかし、なぜあのメカバルタンカスタムは我々を？」

「もしかして、アブソリュートイアンかしら？」

「わからん、バルタン星人達が関わっていないとなると奴らしか思いつかないな。」

ゾファイはそう言い、ウーマンと共に光の国へと戻る。

研究室の方へ

新型のウルトラブレスレットの力を試した後、ウーマンと共に光の国へと帰還をしたゾフィーはヒカリのいる研究室へとやってきていた。

彼女はポニーテールをしているが、彼が来たので振り返る。

「どうしたんだ？お前が用もないのに、私の研究室へ来るなんてな。」
「……少しだけね、最近の敵のことについて話をしようと思っ
ている。」

「最近のか、アブソリューティアン達は今のところ動いている様子はないし、お前に襲い掛かってきたあの闇の巨人たちも現れていない。後は別次元などもギャラクシーレスキューフォーアースやアンドロ警備隊なども動いているからな。」

「いずれにしても、今は平和なのはいいが……どうも嫌な感じがするんだ。」

「お前の勘ってやつか？」

「おそらくね、念のため宇宙警備隊も警戒態勢をしておいた方がいいかもしれないな。」

二人で話をしていると研究室の扉が開いてメビウスが入ってきた。

「あれ？誰かいるの？」

「メビウスか、どうしたんだ？」

「やあメビウス。」

「ゾフィー兄さん!?!どうしてここに!?!」

「んー色々だね。メビウスは用事かい？」

「そうでした！ヒカリ！今日こそは一緒に来てもらおうからね!!」

「お前な……私は子どもが苦手だと言っただろ？だからお前が一人で
行ってくれ。」

「メビウス、どういうことだい？」

「実は……」

メビウスは光の国にある幼稚園に招待されていることがある、ヒカリも実は招待されているが彼女自身が子どもが苦手することもあり

断っているのだ。

だが、今回はヒカリも登場させると約束をしてしまったので連れて行くこうとする中、ゾフィーは少し考え事をしてから立ちあがる。

「よし、なら私が一緒に行つてあげよう。」

「え!?!」

「なに、子供と触れ合いなら隊長として行かないとね。」

「え!?!で、でも」

メビウスはゾフィーが参加をするつてのを聞いて驚いている。宇宙警備隊長である彼が現れるとおそらく驚いてしまう可能性が高い、するとヒカリは悩んだ末に立ちあがる。

「仕方がない、今回は参加をしてやる。ただしこの一回だけだからな!!」

「うんありがとう!ゾフィー兄さんもありがとうございます。」

こうして三人で光の国の幼稚園へとやってきた。

「メビウスさん、ありがとうございます……まさかヒカリさんだけではなく、宇宙警備隊長さんまでお連れしていただいて……隊長さん、本当にありがとうございます。」

「いえいえ、お構いなく……子どもたちとの触れ合いも宇宙警備隊長として勤めでもありますからね。元気な子どもたちと会えるだけ嬉しいですよ」

幼稚園の先生と挨拶をした後、彼らは移動をして先生の声が聞こえてきたのでメビウスを先頭にゾフィー、ヒカリと中へと入っていく。

「うおおおおおおお!」

「すげえええええええ!ほんもののゾフィーたいちようだ!!」

「はい皆!今日はメビウスお姉さんだけじゃなく、なんと宇宙警備隊長のゾフィーお兄さんとヒカリお姉さんも一緒に来てもらいました!!」

「二!きやあああああああああ!!」

ゾフィー達との触れ合いなどで、彼は膝をついて子どもたちの頭を撫でたり突進を受けたが受け止めたりするなど、子どもたちの人気はバク上がりである。

ヒカリも、子どもが苦手と言っていたが……そのクールな美貌などもあり静かに人気が上がっているのであった。

ゾフィースide

っ、疲れた……子どもたち相手だと色々と疲れてしまうな、元気なのはいいが……こつちも年だな、腰が痛いよ。

「あらあら、ゾフィー子どもたち人気みたいね（笑）」

「お母さん、笑っていないで湿布をお願いいたします。」

「はいはい、全く宇宙警備隊長が腰を痛めるなんてね（笑）」

母さんは笑いながら、腰に湿布を張ってくれてなんとか踏ん張る。流石子どもたちってことだけ言っておくよ。いてててててててててててて

ゾフィーの現在の情報

宇宙警備隊隊長ゾフィーファイル

身長45メートル

体重4万5千トン

年齢2万5千歳

飛行速度マツハ10

走行速度650キロ

水中速度300ノット

職業 宇宙警備隊隊長

現在の姿

マルチタイプ カミーラ、ダーゴン、ヒュドラム、ベリアルが彼の中に入っていることで発生をした彼の新たな姿、ティガマルチタイプ、トリガーマルチタイプのようなバランスのとれた形態。

必殺技を放つ姿もこの形態でやることが多い。

闇解放時 ベリアルのを解放させた際の姿、赤と黒の戦士の色へと変わり闇のエネルギーと光エネルギーを同時解放させている。

カミーラタイプ カミーラが主導権のタイプ、赤い部分が銀色へと変わり彼女が使用するカミーラリボンやウィップを使用することが可能となる。

ダーゴンタイプ ティガやダイナのような体の色が赤くなる姿、パワーや防御力が上がる形態。その怪力はレッドキングを軽々投げ飛ばすほどである。

ヒュドラムタイプ ティガ及びトリガーのような紫色へと変身、右手にヒュドラムダガーと呼ばれる武装が装着される。素早さが得意な形態・・・右手のヒュドラムダガーの連続した斬撃を相手にお見舞いさせる。

アンドロメロス かつてアンドロ戦士セザルから託されたコスモテクターを纏いアンドロメロスとして活動をしていた時の姿、現在は娘のブノウから託されてアンドロブレスとして装備、状況においてアンドロメロスに変身をする。

超闘士ゾフィー、ウルトラウーマンキングが開発したウルトラクラウンを装着をすることで解放された姿。頭部にウルトラホーンのようなものが装着されたことで強大なエネルギーを発生しても長時間戦うことが可能となった。その力は強大で彼が最大のピンチになった時にこれを纏うことで逆転することが多い。

必殺技

M87光線 彼の得意な光線でその威力はほかのウルトラウーマン達の光線よりも強力な光線。腕を伸ばして放つAタイプ、L字に構えて放つBタイプが存在をする。

Aタイプはチャージをして放つが威力は抜群、Bタイプは素早く放てるが威力がAタイプよりは弱いながらも宇宙人や怪獣を倒すほどの威力を持っている。

超闘士ゾフィーはM87光線エネルギーを右手から放つM87超光線と呼ばれる技を放つが、その威力は惑星を貫通させるほどの威力を持っており彼自身もこれは宇宙でしか使えないな？と判断をするほどの威力を持っている。

スペシウム光線 ウルトラ戦士基本的な技、ゾフィー自身も使用することが多い光線だ。威力などはM87光線よりは弱いが……ゾフィーは多様することが多い。

ワイドショット ウルトラウーマンセブンの技だ。M87光線Bと同じ構えなので使われている時がある。

ウルトラショット ウルトラウーマンジャックが使用している技でけん制技として使用している。

シネラマショット 同じくジャックの技、こちらもワイドショットと同じく使用していることがある。

メタリウム光線 ウルトラウーマンエースの技だが、ゾフィー自身も使用することができる。

ストリウム光線 ウルトラウーマンタロウの技、こちらも同じくゾフィーも使用することがある。

乙光線 ゾフィーが使用している光線。相手を痺れさせるだけではなく倒すことができる光線だ。

それと同じ構えでゾファイーカッターと呼ばれる十字手裏剣を飛ばす光線を放つ。

ウルトラフロスト 両手から氷のガスを放ち相手を凍らせる技、ゾファイー自身が使用してフリーザーボールと呼ばれるボールを生成をしたこともある。

ウルトラギロチン ウルトラウーマンエースが使用をする技だが、彼が彼女に教えたという情報のため、おそらくウルトラウーマンエースが使用するギロチン技全て使用可能と思われる。

レインボー光線 ゾファイーがレッドファイターと呼ばれる戦士から学んだ技、彼自身が素早く飛び七人に分身をしてM87光線を放つ、そのため威力は高いものと計算をする。

キャッチリング ウーマンが使用する技と同じだ、これで相手を拘束をする技

トルネードビーム 両手から強力な竜巻を発生させて吹き飛ばす技

パーフェクトフリーザー 相手を凍らせる技の一つ、ゾファイーが氷技を使用することが多いらしい

バーニングプラズマ ウルトラウーマングレードの技が最近になって使えることが判明した。

ウルトラライトソード 光エネルギーを右手に集中させて光の刃を生成をして切り裂く技、ウルトラウーマンネオスが使用する技と同じらしい。

次にゾファイーは武器を使うことも判明した。

ウルトラブレスレット改 今現在装着されている新型のブレスレットのようだ、ツインランス、ウルトラビームソードなど以前よりもパワーアップをしていると判明、さらにウルトラブレードとウルトラシールドと呼ばれる武装も装備されている。

「以上が、我々がゾファイーを調べた結果になります」
「ふむ……」

ゾファイーの戦闘データを見て相手の宇宙人は宇宙警備隊長であるゾファイーをどう倒せばいいのだろうか？と悩んでいる。

「奴の力は、我々が想像している以上でことになるのか？」

「その通りです。しかしウルトラウーマン達を襲えばいかがかと？」

「ほかの戦士達をつてことか……面白いやってみろ」

「はは！では早速……」

彼はボタンを押すと倉庫の扉が開いて、現れたのはかつてウルトラウーマンダイナを苦しめたデスフェイスが数体立っており、ニヤリと宇宙人は笑う。

「我々サロメ星人の科学力はモネラ星人達のロボットさえも復元することができた！さあ行け！デスフェイスよ！！」

襲撃のデスフェンサー部隊！

「V地区異常なしっつと」

「こつちも異常がないよエース姉さん」

ウルトラウーマンエースとウルトラウーマンタロウは定期パトロールをしてお互いに報告をしていたところだ。

彼女達は光の国へと帰ろうとした時弾が飛んできたので回避をする。

「一体何!？」

「姉さんあれって!!」

「デスフェンサー!?!しかも何体いるのよ!!」

デスフェンサーの部隊は左手のガトリング砲を回転させて二人に攻撃をしてきた。回避をした二人はデスフェンサーに対して攻撃を開始をする。

「バーチカルギロチン!」

エースが放つバーチカルギロチンをバリアーでガードをする一体のデスフェンサー、タロウは接近をしてアトミックパンチを放とうとしたがその前にもう一体のデスフェンサーが右手のアームを伸ばしてタロウの首を握りしめてきた。

「があ……」

「タロウ!」

だがもう二体のデスフェンサー達もエースに対してクローアームを伸ばして握りしめ殺そうとする。

2人はこのままではと……どうしたらいいのか考えていると光線が放たれてデスフェンサーに命中をして二人は解放された。

「エース!タロウ!大丈夫か!!」

「どうしてデスフェンサーが?」

ゾフィー、ウーマン、セブン、ジャックが駆けつけてエースとタロウは合流をする。

「いずれにしても、何者かがデスフェンサーを製造したのは間違い

ない、行くぞ!!」

「「おう!!」」

六人はそれぞれで散開をして、ゾフィーとウーマン、セブンとジャック、エースとタロウと別れて行動をする。

ゾフィーとウーマンはデスフェンサーに攻撃をしようとしたが、デスフェンサーは左手のガトリング砲を回転させて攻撃をしてきた。

二人は回避をしてウーマンは八つ裂き光輪を連続で発射させた。

「せい!!」

デスフェンサーは八つ裂き光輪をそのボディで粉碎をするとそのまま右手のアームを伸ばしてきた。

ゾフィーはダーゴンタイプに変身をして伸びてきた右手のアームをつかんで叩きおった。

左手のガトリング砲で攻撃をしようとしたが、そこにウーマンがスペシウム光線を放ちガトリング砲を破壊した。

セブンとジャックはアイスラッガー、ウルトラランスを構えて突撃をする。

デスフェンサーは二人が振り下ろした武器を両手でガードをする。

「堅い……」

「ええ、厄介ですね」

二人は離れるとデスフェンサーは左手のガトリング砲で攻撃をしてきた。ジャックがウルトラダイフェンダーでガードをして、その隙をついてセブンがエメリウム光線を放ちガトリング砲を破壊した。

タロウとエースはさっきのお返しをするため、ダブル光線を使うことにした。

「メタリウム光線!!」

「ストリウム光線!!」

二人が放った光線をデスフェンサーはミラーで反射をして二人は躲す。タロウは接近をして連続したパンチを放つが、デスフェンサーのボディの堅さに苦戦をする。

「堅すぎる!!」

全員が集まり、ゾフィーは超闘士に変身をする。ウーマンはゾ

ファイーに装着されたウルトラクラウンがタロウのウルトラホーンみたいなのを思いだす。

「ゾファイー！ 私達のエネルギーをウルトラクラウンに集められるかしら？」

「なるほどやってみよう！」

ウーマン達のエネルギーがゾファイーのウルトラクラウンに集められて彼は構える。

「コスモミラクル光線!!」

ゾファイーから放たれたコスモミラクル光線がデスフェンサー部隊に命中をして爆散させていく。

コスモミラクル光線を解除をして、ゾファイーはウルトラクラウンを解除をしてマルチタイプに戻る。

「それにしても、タロウとエースが狙ってきたか、いや違うな……」

「どういうことですかゾファイー兄さん？」

「私か……」

「!!」

「まさか？ 二人を襲うことで、あなたが来るように仕向けたってこと？」

「おそらくな、だがデスフェンサーを作ったとなるとうーん念のために帰ろう」

6人で光の国へと帰還をする。ゾファイーはちらつとデスフェンサーの残骸を持って帰ってヒカリとトレギアに調査をしてもらおうと回収をするのであった。

調査

デスフェンサー部隊の襲撃を受けたタロウとエースを助けたゾフィー達、現在ゾフィーはデスフェンサーの残骸を回収をして、ヒカリとトレギアに調査をするように指示を出して、二人はデスフェンサーの残骸をチェックをしている。

「……………」

ゾフィーは両手を組み、一体何者がデスフェンサーを製造をしてエースとタロウに襲撃をさせたのだろうか？と思いつつ彼女達の結果報告を待つことにした。

やがてヒカリとトレギアは残骸の調査を終えてゾフィーに報告をしている。

「サロメ星人製だって？」

「はい、調査をした結果……………デスフェンサーを作ったのはサロメ星人で間違いありません」

「おそらく奴らはモネラ星人のデータをいつのまにか回収していたのだろう。そしてデスフェンサーを製造をしたので間違いはない。」

「だが、ネオマキシマ砲だけは展開されていなかったな」

戦いながらデスフェンサー部隊はネオマキシマ砲を展開をしていなかったのを思いだした。おそらくサロメ星人達でも再現をすることができなかったのだろうと判断をして二人にご苦労様といい、彼はチラツとオーブカリバーを見ながら立ちあがり光の国を見ていた。

「……………」

『どうしたんだい？』

「いえ、少し考え事をしていただけですよベリアルさん」

『そうかい？』

ベリアルはじっと彼女を見ていたけどすぐに姿を消したのでゾフィーはじっと光りの国の見ながら隊長室の椅子に座る。

一方宇宙空間、ギンガとビクトリーは攻撃を躲していた。

「くー！」

「こいつらー！」

2人はギンガサンダーボルト、ビクトリウムスラッシュを放ち攻撃をして撃破したが煙からロボット怪獣が現れて二人の首をつかんで握りしめる。

「があ………」

「こ……この！ビクトリウムバーン!!」

ビクトリウムバーンが命中をして二人は解放されて蹴りを入れて距離を保つ。

「おいおいなんだよこいつ!」

「わからん、だが……いつもと違うとだけいっておく」

「だな、わけもわからない奴に負けるわけにはいかないんだよ!」

【今こそ一つになる時!ギンガに力を!ギンガストリウム!】

ウルトラウーマンギンガストリウムに変身をしてギンガスパークランス、ビクトリーはシエパードンセイバーを構える。

「だああああああああああああああああ!!」

2人は突撃をしてロボット怪獣に攻撃をしようとした時光線が放たれて二人は吹き飛ばされる。

「い、今の光線は!」

「ほーうあれだけ打ったのに立ちあがる元気はあるようだな?」

「何!?!」

2人は上の方を見ると自身の黒い自分たちが立っているので驚いている。

「な!?!あたしたち!?!」

「そう、私はお前……名乗るならギンガダークネス!」

「そしてお前は私ってことか?」

「ビクトリーダークネスだ。さて悪いが……お前たちをここで倒させてもらう!!」

【サイバーエレキングアーマーアクティブ】

「く!」

「ふっふっふっふ」

現れたエックスダークネスに対してエックスはエレキングアーマーを纏い放った。そう各地にニュージェネレーションのダークネ

スが現れたという連絡が発しされた。

タイガ達トワイスクワッドも自身のダークネスと交戦をしている。

「こいつー!」

「ふふふふふふふふふ!!」

「ふん!!」

「ふん!!」

「この野郎!!」

「あっはっはっはっは!!」

光の国

「ダークネスが?」

「はい、先ほどギンガ達からダークネスが現れたという連絡を受けて彼女達は何とか退かせたみたいです」

「ダークネス……それを作りだすことができるのは奴、ウルトラダークキラーのみだ。だが奴はニュージェネレーション達に倒されたはず……ならダークネスの正体はいったい?」

「いずれにしても調査をする必要があります」

「ああそのとおりだ。警戒態勢をあげるように指示を頼む」

トレギアに指示を出して、ゾフィー自身も嫌な感じがしながら仕事をこなすことにした。

ウルトラダークキラードの戦い

ゾフィースide

ウルトラダークキラードの戦い、あの時はまだベリアルさんやカルミラ達の中になくて、ウルトラブレスレットだけしかないときのこと、メビウスが地球を去ってからの話になるね。

ある惑星に突然としてマイナスエネルギーが発生をした。調査をするために私はウーマン、セブン、ジャック、エース、タロウを連れて急行をした。

「それにしても突然のマイナスエネルギー反応なんてね」

「ああ、しかも強大だからね……………」

そして私達は目的の惑星に到着をして、辺りを警戒しながら進んでいくと光線が放たれたので回避をすると前の方から現れたのは、ウルトラダークキラードと私達そっくりのダークキラードブラザーズだった。

「お前は一体!!」

「我はウルトラダークキラード……………」

「ウルトラダークキラード?」

「お前の目的は一体!!」

「光の戦士の抹殺、やれ!!」

「タロウ!ダークキラードはお前が戦うんだ!周りの敵は私達で食い止める!!」

ウーマンはダークキラードウーマンと交戦をしている。

「くー!」

お互いの蹴りが命中をして、八つ裂き光輪を放つが相手もダーク八つ裂き光輪を放ち相殺をする。

セブンはダークキラードセブンとアイスラッガーを投げて相打ちになる。

(こいつは私と同じ能力を持っている、ならこれもだな。)

エメリウム光線を放つと相手も同じくエメリウム光線を放ち相殺をした。

「くーウルトラランス!」

ジャックはウルトラブレスレットをウルトラランスに変えて構えて突撃をする。相手もウルトラランスをとりだしてジャックが放つ攻撃をはじかせていく。

エースはダークキラージェースと組み合っていた

「ぐううううううう!!」

「……………」

お互いの力が互角のため動くことも投げることできない状態である。一方ゾフィーはダークキラージョフィーが放つM87光線を躲していた。

彼は反転をしてZ光線を放ちダークキラージョフィーを落としていた。

彼も着地をしてダークキラージョフィーの方を見ているとタロウが吹き飛ばされてきたので受け止める。

「大丈夫か?」

「ありがとうゾフィー兄さん、あいつ強い!」

そしてほかの姉妹達も苦戦をしてこちらの方へと吹き飛ばされてきたのでゾフィーが一人ずつつかんで降ろした。

「ウルトラ戦士ども……………これで決める!!」

「まずい……………」

「ゾフィー!あの技よ!!」

「あの技か……………だが、今の私のエネルギーだけでは」

「私たちのエネルギーを使いましょう!」

「だが……………いやそうは言ってられないな」

ゾフィー達は何かを決意をしてダークキラージョフィーたちは止めを刺そうとした時、ウーマン達始めゾフィーにエネルギーが注入されて行く。

そしてゾフィーはM87光線の構えをする。

「ビックM87光線!!」

ウルトラ姉妹達のエネルギーが注入されたことで放ったビックM87光線が放たれてウルトラダークキラージョフィーやダークキラージョフィー兄妹事粉砕をしたのだ。

そして現在に戻り、ダークネスが現れたのを聞いたゾフィー……………

再びダークキラーが復活をしたのだろうか？と思いながら仕事をしていた。

（いずれにしても、ダークキラーが現れたとなると誰が奴を復活させたのだろうか？ ニュージエネレーションによって倒された奴を一体誰が？）

彼はダークキラーを誰が復活させたのだろうか？と思いながら仕事をするのであった。

襲撃をしてきたダークネス達！

宇宙空間をパトロールをしている二人の戦士達、我らのゾフィーとウルトラウーマンエイティの二人である。

ダークネスの出現を聞いて、ゾフィーはエイティと共にパトロール範囲を広げていたのだ。

「ポイントG地区異常ありませんね？」

「……………ああそうだね」

「ゾフィー兄さんどうしたのですか？」

「ダークネスの出現、ということとは……………ウルトラダークキラーが復活をしたと言うことになるのだろうかと思つてね。奴はニュージエネレーション達によつて倒された。だから今回現れるダークネスはいつたいつてどうやら敵が来たみたいだよ？」

「え？うわー！」

二人の前を光線が通過をして前の方を見るとオーブダークネス、ジードダークネス、エックスダークネスの三人が立っていた。

2人は構え直して、エイティにエックスダークネスを任せて自分はオーブダークネスとジードダークネスと交戦をするため向かう。

「でああああああああああ！」

オーブカリバーを抜いて切りかかるが、オーブダークネスもダークオーブカリバーで受け止めるとジードダークネスがダークロアを放ってきたので後ろの方へと下がるとオーブダークネスがダークオーブ光輪を放ってきた。

彼はウルトラスピンを放ち粉碎をする。

一方エックスダークネスと交戦をするエイティ、彼女はエックススラッシュを躲すと蹴りを入れた。

だがすぐにエックスダークネスは立て直してダークザナイウム光線を放ってきた。

「サクシウム光線ー！」

お互いの光線を相殺してエイティは衝撃に備える。ゾフィーの方も二人のダークネスの攻撃に苦戦をしていた。

「く！」

ジードダークネスとオーブダークネスはダークレッティングバースト、ダークオリジウム光線を放ってきたので彼はウルトラクラウンを装備をして超闘士ゾフィーに変身をして二人が放った光線をはじめさせた。

「!!」

超闘士ゾフィーへと変わり、ジードダークネスはダークレッティングリッパを放つが、彼は片手ではじかせてオーブダークネスが接近をしてオーブカリバーを振るうが、彼は反対の手で受け止めるとそのまま投げ飛ばして二人に命中させた。

エイティもゾフィーが何をするのかわかったのか、バックルビームを放ちエックスダークネスを吹き飛ばして三体を纏めた。

ゾフィーは星がないことを確認をして、エネルギーを集中させて構える。

「M87超光波!!」

スペシウム超光波を放つようにして三体のダークネスに命中させて消滅をさせた。ウルトラクラウンを解除をしてエイティが近づいてきた。

「ゾフィー兄さん」

「間違いないね、あれはかつてダークキラがジード、エックス、オーブの光エネルギーを奪って生成をしたダークネス達だ。ってことはウルトラダークキラが復活をした可能性は高い。いずれにしても警戒態勢を上げた方がいいかもしれないね」

ゾフィー達は光の国へと帰還をするため飛び経った。

報告

エイティと共にダークネスと交戦をして撃破したゾファイは光の国へと帰還後に大隊長室へと行き、ウルトラの父とウルトラウーマンベルに報告をしていた。

「では、ダークネスが現れてお前達に襲い掛かってきたってことだな？」

「はい、おそろくなのですが……ウルトラダークキラが復活をしている可能性が高いかもしれません。」

「可能性が高いかもしれないな、いずれにしても警戒態勢をしいておいた方がいいかもしれないな。」

「はい、宇宙警備隊全域に発信をしておきます。では」

ゾファイは大隊長室を後にして、隊長室へと戻るとトレギアが書類をチェックをしているので彼は挨拶をして椅子に座った。

「隊長、惑星「イーマルク」からSOSが発進されています。現在タロウ、メビウスの両二名が急行をしています。」

「惑星「イーマルク」、確か文明的には古代のような文化だったな？あそこからSOSサインが発進されたか」

ゾファイはちらつと惑星イーマルクの場所をモニターに表示させて、近くのウーマンはいないかを見ていた。

「タロウ達以外にはいないみたいだね、その近くは……どうやらギンガとビクトリーがいるみたいだね。では早速」

ゾファイはウルトラサインを出して、ギンガとビクトリーにも向かうように指示を出しているのを見てトレギアは啞然としていた。

「えっとトレギアどうしたんだい？」

「あ、いえ……隊長でしたら自分が行くって言うと思っていたので……そうだね、でもそれで君達を悲しませるのはもつとごめんだからね？君達の涙を見て私の命は一人じゃないんだなって思っただけだよ。それにタロウ達なら大丈夫だよ。きっと勝ってくれるさ、さあ私たちは仕事にとりかかろう」

一方惑星「イーマルク」ではタロウとメビウスがキングザウルス三

世及びキングジョーと交戦をしていた。

「まさかキングジョーとキングザウルス三世がいるなんてね？メビウスいける？」

「もちろんです！シエア！」

「たああああああああ!!」

二人は接近をしてタロウはキングジョーとメビウスがキングザウルス三世と交戦をする。

「ぐぬぬぬ!!」

パワー対決をするタロウとキングジョー、彼女は流石セブン姉さんを苦しめただけあるなど思いながら力をさらに加えていく。

キングジョーも負けじと力を込めている。一方メビウスはキングザウルス三世の熱線をメビウスディフェンサークルでガードをしてメビウムスラッシュを放つがバリアーでふさがれてしまう。

「なんていうバリアーなんでしょう。」

苦笑いをしながら構え直す。タロウは一旦キングジョーの胴体に蹴りを入れてから後ろの方へとバク天をして着地をする。

メビウスはジャックの技の一つ流星キックを使うため走りだして飛びあがる。

「でああああああああああああ!!」

見事に流星キックがキングザウルス三世の角を破壊して、キングジョーに対して連続したパンチをタロウは放ち、そのまま投げ飛ばしてキングザウルス三世ごと命中させると二人は光線を構える。

「ストリウム光線！」

「メビウムシュート！」

二人が放った光線が二体の怪獣に命中をして爆散をした。そこにギンガとビクトリーが駆けつけた。

「ありや？あたしたちの出番なし？」

「流石つと言った方がいいだろ？」

「あ！ギンガにビクトリー！」

「どうしたの？」

「ゾフィーからウルトラサインが上がって、ここへ駆けつけたんだけ

ど」

「私達、いらなかったみたいだわ」

「でもゾフィー兄さんが送ったのはもしものためじゃないかな？」

「おそらくそうだね。さあ帰るとしよう」

四人のウーマン達が飛びあがり、タロウはウルトラサインで討伐をしたという連絡を発信させる。

光の国の隊長室でもウルトラサインが来たので、ゾフィー自身も流石タロウとメビウスだな？とウルトラサインを確認をしてトレギアが起き上がりふぁーと欠伸をする。

「よく寝ていたねトレギア（笑）」

「なにせ久しぶりにあなたの手を握りましたので」

ふふと笑いながらトレギアはシャワーを浴びるため移動をする。彼はチラツと仮眠室も大きく改装されたな？と思いつつながら冷蔵庫を開けて烏龍茶があったので飲むことにした。

を崩してしまおう。

「うわ！なんだ？」

ゾフィーは振り返ると現れたのはドラコ、だが容姿はパワードラゴの姿なのでゾフィーは驚いている。

(パワードラコ!?なぜここにいるんだ!?)

パワードラコは鎌を飛ばしてきた。ゾフィーは躲したがバロッサ星人はその間に逃走をしてしまう。

「く！逃がすわけ……」ぎやおおおおおおお！「逃がしてくれないか」

パワードラコが叫びながらいるので、ゾフィーはウルトラギロチンを放つがパワードラコははじかせながら突進してきたので彼はダーゴンタイプへと変わって突っ込んできたパワードラコをつかんで投げ飛ばした。

「ふん!!」

「ぎやおおおおおおお！」

パワードラコは口から火炎弾を放ってきたが、ダーゴンタイプのゾフィーは躲してマルチタイプへと変わり連続した光弾を放ちパワードラコにダメージを与えて、彼は飛びあがり超闘士に変わって、パワードラコは鎌を投げたがゾフィーはそれをキャッチをしてそのまま接近をして胴体に突き刺した

「ぎやおおおおおおお！」

ゾフィーは右手に光エネルギーを込めてそのまま胴体を貫通させてパワードラコは爆散をした。

一体誰がパワードラコを使ってきたのだろうか?と思いつながらバロッサ星人を逃がしてしまったな?と思いつながら、ゾフィーは追いかけてようとしたがどこへ行ったのかわからないのでどうしたらいいのだろうか?と考える。

「いずれにしてもバロッサ星人がまた悪さをする可能性が大だな、地球へ向かうか」

彼は地球へと向かうのであった。